



經典部
第七卷

BL Tripitaka. Japanese. 1929
1411 Showa shinshu kokuyaku
T8J3 Daizokyo
1929
v.7

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和
新纂

國
譯大藏經



BL
1411
T8J3
1929
V. 7

昭和
新纂 國譯大藏經 經典部 第七卷

大乘入楞伽經 目次

卷 第 一

羅婆那王勸請品第一.....一

集一切法品第二之一.....一四

卷 第 二

集一切法品第二之二.....三

卷 第 三

集一切法品第二之三.....五

卷 第 四

無常品第三之一.....八

卷 第 五

無常品第三之二..... 二〇〇

現證品第四..... 二〇六

如來常無常品第五..... 二一九

剎那品第六..... 二四一

卷 第 六

變化品第七..... 二五三

斷食肉品第八..... 一五五

陀羅尼品第九..... 一六四

偈頌品第十之一..... 一六五

卷 第 七

偈頌品第十之二..... 一七五

首楞嚴經 目次

卷 第 一..... 二四五

卷 第 二..... 二六三

卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷
第	第	第	第	第	第	第	第
三	四	五	六	七	八	九	十
.....
二八三	三〇五	三三六	三四四	三六五	三八三	四〇二	四二五

大方廣圓覺修多羅了義經 目次

大方廣圓覺修多羅了義經.....四二

大乘入楞伽經

經典部	第七卷
-----	-----

大乘入楞伽經

卷第一

大周于闐國三藏法師實叉難陀勅を奉じて譯す

羅婆那王勸請品第一

【于闐】 コーテン (Khoten) 國の名。【實叉難陀】 (六五二・七一〇) 梵音シクシヤーナダ (Sikshanda) 學喜と譯す。于闐國の人。本經始め梵華嚴經、文殊授記等を譯す。五十九歳を以て寂す。【羅婆那王勸請品】 本經所生の因縁を明す。

【楞伽】 ランカー (Lanka) にして、印度錫蘭島 (Ceylon) のこと。【摩訶薩】 梵音、Mahāsattva) 大有精と譯す。菩薩行により、一切衆生を度する人。【五法】 名、相、妄想、正智、如如の五。前二者は、事物の假名、色相を云ひ、妄想は分別の念、如如とは

是の如く我聞けり。一時、佛、大海濱の摩羅耶山の頂、楞伽城中に住したまふ。大比丘衆及び大菩薩衆と俱なり。其諸の菩薩摩訶薩は、悉く已に五法、三性、諸識、無我に通達し、善く境界は、自心の所現なることを知り、無量の自在三昧に遊戲し、神通の諸力もて、衆生の心に隨ひ、種種の形を現じ、方便して調伏したまふ。一切の諸佛は、手から其頂に灌ぎ、皆種種なる諸佛の國土より、此會に來りたまふ。大慧菩薩摩訶薩を其上首と爲す。

爾時、世尊、海の龍王宮に於て、說法すること七日を過ぎて、大海より出でたまふに、無量億の梵釋、護世の諸天龍等有り、佛を迎へ奉る。爾時に如來、目を擧げて摩羅耶山、楞伽大城を觀見したまひ、即便微笑して是言を作したまはく、「昔、諸の如來、應、正等覺は、皆此城に於て、自ら得る所の聖智の證法を説きたまへり。諸の外道の邪見もて應度し、及び二乘の修行する境界に非ず。我今亦當に羅婆那王の爲に此法を開示すべし。」

不變不易の眞如。

【三性】 遍計所執性、依他起性、圓成實性の三性。一は吾吾の分別性、二は因緣所生の性、三は不易の眞實性。

【語義】 眼耳鼻舌身意、并に末那阿頼耶等の識。

【無我】 萬有の假幻を認識して、人我法我を絶した境地。

【三昧】 精神を統一集注する事。梵語サマードヒ (samadhi) の音譯。

【大悲】 菩薩の名。梵音マハーマテイ (Mahamati)。

【梵釋】 梵天帝釋のこと。

【應】 應供、即ち梵語阿羅漢の譯。

【正等覺】 覺者の諸教學のこと。六師外道、九十五種の外道あり。

【二乘】 聲聞乘、緣覺乘のこと。

緣覺乘のこと。

爾時、羅婆那夜叉王は佛の神力を以て、佛の言音を開き遙に如來の龍宮より出でて、梵釋、護世の天、龍に、圍繞せられ、海の波浪を見て、其衆會の藏識の大海に境界の風動き、轉識の浪起るを觀すと知り、歡喜の心を發し、其城中に於て、高聲に唱へて言はく、「我、當に佛に詣で、請じて此城に入り、長夜の中に於ける我及び諸天世人をして、大饒益を得しめん。」是語を作し已りて、即ち眷屬と共に花の宮殿に乗りて世尊の所に往き、到り已て殿を下り、右に遶ること三匝し、衆の伎樂を作して如來を供養す、所持せる樂器は、皆是れ大青因陀羅の寶、瑠璃等の寶を鑲めたる無價の上衣を纏ひ、其聲美妙なる音節と相和す。中に於て偈を説きて佛を讚じて曰はく、

心自性の法藏は、無我にして見垢を離る

證智の知しめす所を、願くば佛、宣説を爲したまへ

善法集りて身を爲し、智を證して常に安樂に

變化自在なる者、願くば楞伽城に入りたまへ

過去の佛菩薩は、皆會て此城に住したまふ

此諸の夜叉衆は、一心に、願くば法を聽かん

爾時、羅婆那楞伽王、都陀迦音を以て、佛を歌讚し已りて、復歌聲を以て、頌を説きて

言はく、
世尊は七日、摩竭海中に在し、

【羅婆那】 古代錫蘭島の王。

【藏識】 第八阿賴耶識 (Alaya) のこと。

【轉識】 前述の諸識未那識までの七識にして、これ等は何れも、第八阿賴耶識の種子より起り、第八識に働

【大青因陀羅】 梵語 (Indrīya) 天の青珠。

【見垢】 邪見。

【都陀迦】 梵詩に見る喜悅の音律 (Tataka)。

【輪迦、娑刺那】 何れも羅婆那王の臣。

【離言自證】 思慮言説を超絶せるもの。
【去來の世】 過去世未來世。

然して後龍宮を出で、安詳として此岸に昇りたまふ

我は諸の姪女、及び夜叉の眷屬

輪迦、娑刺那、衆中の聰慧なる者と與に

悉く其神力を以て、如來の所に往詣し

各華の宮殿を下りて、世の尊ぶ所を禮敬す

復、佛の威神を以て、佛に對ひ己の名を稱ふ

我は是れ羅刹王、十首羅婆那なり

今、佛の所に來詣す。願くば佛、我れ及び

楞伽城の中の、有ゆる諸の衆生を攝受したまへ

過去の無量の佛は、威、寶山の頂に昇り

楞伽城の中に住して、自ら證する所の法を説きたまへり

世尊も亦應に爾るべし。彼の寶嚴山に住して

菩薩衆に圍繞せられ、清淨の法を演説したまへ

我等、今日に於て、及楞伽に住する衆と

一心に、共に離言自證の法を聞かんと欲す

我れ念ふに、去來の世、有ゆる無量の佛は
菩薩に共に圍繞せられて、楞伽經を演説したまへり

【往尊】 過去の世尊。

【摩訶衍】 大眾のこと。梵語マハーヤーナ (Mahayana)。
【羅刹】 惡鬼の類。梵語 Rakshas。

【去來今】 過去、未來、現在の三世。
【自證の法】 自ら體驗して悟る事。即ち大悟の法。

此入楞伽典は、昔、佛が稱讚したまひし所なり
願くば佛、往尊と同じく、亦、衆の爲に開演したまへ
請ふ佛、無量の夜叉衆を哀愍するが爲に
彼寶嚴城に入りて、此妙法門を説きたまへ
此妙なる楞伽城は、種種の寶をもて嚴飾せられ
牆壁は土石に非ず、羅網は悪く珍寶なり
此諸の夜叉衆は、昔曾て佛を供養し
修行して諸の過を離れ、證知して常に明了なり
夜叉の男女等、大乘を渴仰して
自ら摩訶衍を信じ、亦、他をして住せしめんと樂ふ
唯願くば無上尊、諸の羅刹衆と
鬘耳等の眷屬との爲に、楞伽城に往詣したまへ
我れ去來今に於て、勤めて諸佛を供養す
願くば自證の法を聞き、大乘の道を究竟せん
願くば佛、我れ及び諸の夜叉衆を哀愍して
諸の佛子等と共に此楞伽城に入り
我が宮殿、姪女、及び諸の瓔珞

【無憂】梵語アン
一方の意譯。

【觀行】觀心修行
なり。自己の心の
本性を明かに觀照
し、修行すること
【法樂】佛法を樂
しむこと。

愛すべき無憂園を、願くば佛、哀んで納受したまへ
我れ佛菩薩に於て、捨せざる物有ること無し
乃至身の給侍も、唯願くば哀んで納受したまへ

爾時、世尊、此語を聞き已りて、即ち之に告げたまはく、『夜叉王、過去世中の諸の大導師は、咸な汝を哀愍し汝の勸誨を受けて、寶山の中に詣り自證の法を説きたまへり。未來の諸佛も亦復是の如し。此は是れ甚深の觀行を修行し法樂を現する者の住する處なり。我及び諸の菩薩、汝を哀愍するが故に汝の所謂を受く。』

是語を作し已りて默然として住したまふ。時に羅婆那王、即ち乘る所の妙花の宮殿を以て佛に奉施し、佛其上に坐したまふ。王及び諸の菩薩、前後に導從す。無量の婬女、歌詠し讚歎し、佛を供養して彼城に往諷す。彼城に到り已りて、羅婆那王及び諸の眷屬、復種種の上妙の供養を作す。乃ち夜叉衆中の童男童女、寶の羅網を以て佛に供養し、羅婆那王は寶の瓔珞を施して佛菩薩に奉り以て其頭に掛けたてまつる。爾時に世尊及び諸の菩薩、供養を受け已りて、各自證の境界の甚深の法を略説したまふ。時に羅婆那王并に其眷屬、復更に大慧菩薩を供養し勸請して言さく、

我今大士を請じて世尊に一切の如來の自證智の境界を問ひ奉る
我れ夜叉衆と及び此諸の菩薩
一心に聞んことを願ふ、是故に咸な勸請す

【外道二乘】六師

外道、九十五種の外道、聲聞乘、緣覺乘にして、小乘佛教に屬す。

【神通力】神秘的なる力。

【阿輪迦】梵音アシヨーカー(Aśoka)無憂のこと。

【乾闥婆城】龍神が空中に幻像によつて作る城にして蜃氣樓の如きものなり。梵音、ガンドハルワ(Gandhavya)

汝は是れ修行者、言論中の最勝なり

是故に、尊敬を生じ、汝に勧めて法を問はんことを請ふ

自證清淨の法は、究竟じて佛地に入り

外道二乗の一切諸の過失を離る

爾時、世尊、神通力を以て、彼山中に於て復更に無量の寶山を化作し、悉く諸天の百千萬億の妙寶を以て嚴飾し、一一の山上に皆佛身を現じ、一一の佛前に皆羅婆那王及び其衆會有り、十方の有ゆる一切の國土、皆、中に現す。一一の國中に悉く如來あり、一一の佛前に皆羅婆那王并に其眷屬有り。楞伽大城阿輪迦園、是の如きの莊嚴等異ること有ること無く、一一に皆大慧菩薩有りて請問を興せば、佛爲に自證智の境を開示するに、百千の妙音を以てしたまふ。此經を説き已りて、佛及び菩薩は皆空中に隱れて現じたまはず。羅婆那王は唯自ら身の本宮の中に住するを見て、是思惟を作さく、

一向の者は是れ誰ぞ、誰か其説を聽ける。見る所は何物ぞ。是れ誰か能く見たる。佛及び國城衆寶山林、是の如き等の物は今何所にか在る。夢の作す所と爲んや、幻の成す所と爲んや、復猶し乾闥婆城の如しと爲んや、驕の所見と爲んや、焰の所惑と爲んや、夢中に石女の子を生む如しと爲んや、煙焰、旋火輪の如しと爲んや、復更に思惟すらく、一切諸法の性は皆是の如し、唯是れ自心分別の境界、凡夫は迷惑して、解了すること能はず。能見有ること無く亦所見無し。能説有ること無く、亦所説無し。見佛聞法皆是れ分別のみ。向に

【雜染】 種種のけがれのこと。

【諸地】 菩薩の位のこと。十地位あり。

【心意識】 心は梵語質多(Citta)集起の義、意は末那(Mana)思量の義識は昆若南(Manasikara)了別のことなり。

【三種の見】 (一) 俱生見惑、即ち生來具有する見惑、(二) 推理見惑即ち種種の事變に遇ひ、推理によつて起る見惑、(三) 發得見惑、學問知識によつて生ずる伶俐なる見惑なり。【如來藏】 如來は佛の異名、藏は含攝出生、隱覆等の意總じて眞如のこと。

見る所の如くんば佛を見ること能はず。分別を起さざるは是れ則ち能見なり。時に楞伽王は尋いで即ち開悟し、諸の雜染を離れて唯自身を證し、無分別に住す。往昔種る所の善根力の故に、一切法に於て如實に見ることを得、他の悟に隨はず。能く自智を以て善巧に觀察し、永く一切の臆度邪解を離れ、大修行に住して修行師となり、種種の身を現じて能く方便に達し、巧に諸地に増上する進相を知り、常に樂んで心意識を遠離し、三相續見を斷じて外道の執着を離れ、内自ら覺悟し如來藏に入りて佛地に趣き、虛空の中及び宮殿の内に、威く聲を出して言ふを聞く。

「善い哉、大王、汝が學ぶ所の如く、諸の修行者は應に是の如く學ぶべし。應に是の如く見るべし。一切の如來は應に是の如く見るべし。一切の諸法若し見を異にする者は則ち是れ斷見なり。汝は應に永く心意識を離るべし、應に勤めて一切諸法を觀察すべし。應に內行を修して外見に著する莫れ。二乗及び外道の、修する所の句義見る所の境界、及び應に得べき所の諸の三昧の法に墮する莫れ。汝は應に戲論談笑を樂しむべからず。汝は應に圍陀の諸見を起すべからず、亦王位の自在なるに著すべからず。亦應に六定等の中に住すべからず。若し能く是の如くならば、即ち是れ如實の修行者の行にして、能く他論を推き能く惡見を破り、能く一切の我見の執着を捨て、能く妙慧を以て所依の識を轉じ、能く菩薩の大乗の道を修し、能く如來自證の地に入らん。汝應に是の如く勤めて修學を加へ、所得の法をして轉じて更に清淨ならしめ、善く三昧、三摩鉢底を修して、二乘外道の境界

【傳地】第九地の菩薩が最後に煩惱所知の二障を滅して成道する位。

【闍訶】ウエーダ有名なる印度最古の經典なり。ウエーダには四種、リグヴェーダ (Rigveda) サーマウエーダ (Samaaveda) ヲウエーダ (Yajurveda) アタルヅウエーダ (Atharvaveda) あり。

【三摩鉢底】梵名サマーハツチ (Samahatti) 等々と譯す。定を修め、平静退轉せざる心的狀態をいふ。

【凡修者】凡夫修行者の意。

【實】梵語ドラヴヤ (Dhavya) 印度六派哲學勝論派の六句義の第一にして、萬法の實體本體をいふ。

六句義……(一)實 (Dhavya)……(二)德 (Guna)……屬性的

を以て勝樂と爲せる凡修者の分別する所の如くなること莫るべし。外道は我見を執して我相有り、及び實求那に取著を生ず。二乘は無明の行を緣すること有るを見て、性空の中に於て亂想分別す。楞伽王、此法は殊勝にして是れ大乘の道なり、能く自證の聖智を成就せしめ、諸有の中に於て上妙の生を受けしむ。楞伽王、此大乘の行は無明の翳を破り、識の破浪を滅して、外道の諸の邪行の中に墮せず。楞伽王、外道の行者は我に執著して諸の異論を作し、執著を離れ、識性を見るの二義を演說すること能はず。善い哉楞伽王、汝先づ佛を見るには此義を思惟せよ、是の如く思惟せば乃ち是れ佛を見ん。

爾時、羅婆那王は復た是念を作さく、願くば我更に、如來を見奉つることを得ん。如來世尊は觀に於て自在なり、外道の法を離れて、能く自證聖智の境界を説き、諸の應に化すべき所、應に作すべき事を超え、如來定に住して三昧の樂に入りたまふ。是故に説きて大觀の師と名け、亦復名けて大哀愍者と爲す。能く煩惱分別の薪を焼き盡したまふ、諸の佛子衆の共に圍繞する所。普く一切衆生の心中に入り、一切の處に遍し一切智を具し、永へに一切分別の事相を離れたまふ。我今願くば重ねて、如來の大神通力を見ることを得ん。見ることを得るを以ての故に、未だ得ざる者は得、已に得れば退かず、諸の分別を離れて三昧の樂に住し、如來の智地を増長し満足す。

爾時、世尊、楞伽王の則ち當に無生法忍を證悟すべきを知り、哀愍の爲の故に便ち其身を現じ所化の事をして還復本の如くならしめたまふ。時に十頭の王は曾て觀し所を見たり。

のこと。(三)業
(Karma)……作
用。(四)同(Sama
nya)……共通性
(五)異(Viśeṣa)
(六)和合(Sama
vaya)

【求那】萬法の實
體を認識せしむる
性質現象のこと。
前掲勝論派六句義
の第二徳。
【性空】萬法は因
縁和合によりて生
じたるものにして
て、その實性が空
無なるを云ふ。
【無性法忍】不生
不滅の眞如法性を
忍知して決定安住
する位を云ふ。
【三十二相】三十
二の相好のこと。
【四天】四天王の
こと。東西南北四
天にあつて佛法を
守護する王なり。

無量の山城は悉く寶もて莊嚴せられ、一一の城中に皆如來應正等覺有り、三十二相を以て其身を嚴り、自ら其身の諸佛の前に遍ねきを見る。悉く大慧あり、夜叉に圍繞せられて、自證智の所行の法を説き、亦十方諸佛の國土を見る、是の如き等の事は悉く別有ること無し。

爾時に世尊、普く衆會を觀るに慧眼を以てし、肉眼の觀に非ざるを觀て、師子王之奮迅廻眄するが如く、欣然大笑したまふ。其眉間勝脇腰頸、及び肩臂德字の中に於ける一一の毛孔、皆無量の妙色の光明を放ち、虹の暈を放つが如く日の光を箭るが如く、亦劫火の猛焰熾然なるが如し。時に梵釋、四天等、虛空の中、遙に如來の須彌の如く、楞伽山頂に坐したまふを見て、欣然として大笑す。

爾時、諸の菩薩及び諸の天衆、咸是念を作さく、如來世尊は法に於いて自在なり。何の因縁の故に、欣然として大笑し、身より光明を放ち默然として動かさず、自證の境に住して、三昧の樂に入り、師子王之周廻顧視するが如く、羅婆那の如實の法を念ずるを觀たまふや」と。

爾時、大慧菩薩摩訶薩、先づ羅婆那王の請を受け、復菩薩衆會の心を知り、及び未來の一切衆生の皆悉く言語文字に樂著し、言に隨ひ義を取つて迷惑を生じ、二乘外道の行を執するを觀て、或は是念を作さく、世尊已に諸識の境界を離れたまふ。何の因縁の故に欣然大笑したまふや。彼の疑を斷ぜんが爲に、佛に問ふ。佛即ち之に告げて言はく、

【傳地】第九地の菩薩が最後に煩惱所知の二障を滅して成道する位。

【圓陀】ウエーダ有名なる印度最古の經典なり。ウエーダは四種、リグウエーダ(Ṛgveda)サーマウエーダ(Sāmaveda)ヤजूルウエーダ(Yajurveda)アタルウエーダ(Atharvaveda)あり。

【三摩鉢底】梵名サマーハツチ(三摩鉢底)等至と譯す。定を修め、平靜退轉せざる心的状態をいふ。

【凡修者】凡夫修行者の意。

【實】梵語ドラヴヤ(Dravya)印度六派哲學勝論派の六句義の第一にして、萬法の實體本體をいふ。

六句義……(一)實(Dravya)……(二)徳(Dharma)……(三)屬性

を以て勝樂と爲せる凡修者の分別する所の如くなること莫るべし。外道は我見に執して我相有り、及び實求那に取著を生ず。二乗は無明の行を緣すること有るを見て、性空の中に於て亂想分別す。楞伽王、此法は殊勝にして是れ大乘の道なり、能く自證の聖智を成就せしむ、諸有の中に於て上妙の生を受けしむ。楞伽王、此大乘の行は無明の翳を破り、識の破浪を滅して、外道の諸の邪行の中に墮せず。楞伽王、外道の行者は我に執著して諸の異論を作し、執著を離れ、識性を見るの二義を演説すること能はず。善い哉楞伽王、汝先づ佛を見るには此義を思惟せよ、是の如く思惟せば乃ち是れ佛を見ん。

爾時、羅婆那王は復た是念を作さく「願くば我更に、如來を見奉つることを得ん。如來世尊は觀に於て自在なり、外道の法を離れて、能く自證聖智の境界を説き、諸の應に化すべき所、應に作すべき事を超え、如來定に住して三昧の樂に入りたまふ。是故に説きて大觀の師と名け、亦復名けて大哀愍者と爲す。能く煩惱分別の薪を燒き盡したまふ、諸の佛子衆の共に圍繞する所。普く一切衆生の心中に入り、一切の處に遍し一切智を具し、永へに一切分別の事相を離れたまふ。我今願くば重ねて、如來の大神通力を見ることを得ん。見ることを得るを以ての故に、未だ得ざる者は得、已に得れば退かず、諸の分別を離れて三昧の樂に住し、如來の智地を増長し満足す。

爾時、世尊、楞伽王の則ち當に無生法忍を證悟すべきを知り、哀愍の爲の故に便ち其身を現じ所化の事をして還復本の如くならしめたまふ。時に十頭の王は曾て觀し所を見たり。

のこと。(三)業
 (Karma)……作
 用、(四)同(Sama
 nya)……共通性
 (五)異(Vidya)
 (六)和合(Yama
 vya)

【求那】萬法の實
 體を認識せしむる
 性質現象のこと
 前掲勝論派六句義
 の第二徳
 【性空】萬法は因
 縁和合によりて生
 じたものにして
 て、その實性が空
 無なるを云ふ
 【無性法忍】不生
 不滅の眞如法性を
 忍知して決定安住
 する位を云ふ
 【三十二相】三十
 二の相好のこと
 【四天】四天王の
 こと。東西南北四
 天にあつて佛法を
 守護する王なり

無量の山城は悉く寶もて莊嚴せられ、一一の城中に皆如來應正等覺有り、三十二相を以て其身を嚴り、自ら其身の諸佛の前に遍ねきを見る。悉く大慧あり、夜叉に圍繞せられて、自證智の所行の法を説き、亦十方諸佛の國土を見る、是の如き等の事は悉く別有ること無し。

爾時に世尊、普く衆會を觀るに慧眼を以てし、肉眼の觀に非ざるを觀て、師子王之奮迅廻眄するが如く、欣然大笑したまふ。其眉間脰脇腰頸、及び肩臂德字の中に於ける一一の毛孔、皆無量の妙色の光明を放ち、虹の暉を放つが如く日の光を舒るが如く、亦劫火の猛焰熾然なるが如し。時に梵釋、四天等、虛空の中、遙に如來の須彌の如く、楞伽山頂に坐したまふを見て、欣然として大笑す。

爾時、諸の菩薩及び諸の天衆、咸是念を作さく、「如來世尊は法に於いて自在なり。何の因縁の故に、欣然として大笑し、身より光明を放ち默然として動かす、自證の境に住して、三昧の樂に入り、師子王の周廻顧視するが如く、羅婆那の如實の法を念するを觀たまふや」と。

爾時、大慧菩薩摩訶薩、先づ羅婆那王の請を受け、復菩薩衆會の心を知り、及び未來の一切衆生の皆悉く言語文字に樂著し、言に隨ひ義を取つて迷惑を生じ、二乘外道の行を執取するを觀て、或は是念を作さく、「世尊已に諸識の境界を離れたまふ。何の因縁の故に欣然大笑したまふや」彼の疑を斷ぜんが爲に、佛に問ふ。佛即ち之に告げて言はく、

「善い哉大慧、善い哉大慧、汝世間を觀て、諸の衆生の三世の中に於て、惡見に纏はるるを憐み、開悟せしめん」と欲して我に問ふ。諸の智慧有る人は、自他を利せんが爲に、能く此問を作す。大慧、此楞伽王は、會て過去の一切の如來應正等覺の二種の義を問へり。今亦問はんと欲す、未來も亦爾なり。此二種の義差別の相は、一切の二乘及び諸の外道皆潤る能はず」

【奢摩他】梵音シヤマトハ(Ananta)止、正息、寂靜、正受、能調、能滅などと譯す。心の外境に動かされず一切の妄想を離れて寂靜なるを云ふ。

【不動、善慧、法雲】何れも不動地、善慧地、法雲地を云ひ、不動地は、三界の生死を離れて有無の二見に動かぬ位、善慧地は、中道無生の智慧を得る位、法雲地は、中道觀に入りて悲智普く法界を覆ふ地位なり。

爾時、如來、楞伽王の此義を問はんと欲するを知り、之に告げて曰はく「楞伽王、汝我に問はんと欲せば宜しく應に速に問ふべし。我當に汝が爲に分別解釋して、汝が願ふ所を滿たし汝をして歡喜せしむべし。能く智慧を以て思惟し觀察し、諸の分別を離れて善く諸地を知り、修習し對治して眞實の義を證し、三昧の樂に入りて諸の如來の攝受する所と爲り、奢摩他の樂に住して二乘の三昧の過失を遠離し、不動善慧法雲菩薩の地に住して、能く如實に諸法の無我なることを知らば、當に大寶蓮花の宮中に於て、三昧の水を以て、其頂に灌ぐべし。復無量の蓮花を現じて、圍繞し、無數の菩薩中に止住し、諸の衆會と共に速に瞻視せん。是の如く境界は不可思議なり。楞伽王、汝一の方便行を起して修行地に住し、復無量の諸の方便行を起さば、汝定んで當に上に説く所の如き不思議の事を得べし。如來の位に處し形に隨ひ物に應じて、汝當に得べき所は、一切の二乘及び諸の外道梵釋天等の未だ會て見ざる所なり。」

爾時、楞伽王は、佛の許を蒙り已りて、即ち清淨の光明なること大蓮華の如き寶山の

【乾闥婆】 龍神なり。

【多羅樹】樹名。形は大にして堅く、花は赤し。高きものは七八十尺に及び、梵音ターラ重と譯す。

頂上ちやうじやうに於て、座ざより起ち、諸しよの婦女衆にょにょしゆに圍遶ゐわうせられ、無量むりやうの種種しゆしゆの色花しきけ、種種しゆしゆの色香しきかう、末香まつかう塗香たうかう、幢幡どうばん憲蓋けんがい、冠珮くわんぱい瓔珞いんらく、及び餘あまの世間しよけんの未だ曾かつて見聞けんもんせざる、種種しゆしゆの勝妙しやうめうなる莊嚴しやうげんの具ぐを化け作さし、又復またまた欲界よくがいの有ゆる種種しゆしゆ無量むりやうの諸音しよおんの樂器がくきを化け作さす。諸しよの天龍てんりゆう乾闥婆けんたつぱ等とうの一切いっさい世間しよけんの有いうする所ところに過すぐ。又復またまた十方じつぱうの佛土ぶつどにて昔曾むかしかつて見たる所ところの諸しよの音樂おんがくの器きを化け作さす。又復またまた大寶羅網たいほうらまうを化け作さし、遍あまく一切いっさいの佛菩薩ぶつぼさつの上うへを覆おほふ。復種種またしゆしゆの上妙じやうめうの衣服いぶくを現げんじ、幢幡どうばんを建立こんりふし以て供養くやうを爲なす。是事このことを作なし已りて即ち虚空こくうに昇のぼり、高さ七多羅樹しちたらしゆの、虚空こくうの中なかに於て、復種種またしゆしゆ諸しよの供養くやうの雲うんを雨あめふらし、諸しよの音樂おんがくを作なし、空くうより下くだり、即ち第二にだいに日の電光でんくわう明みやうの、大蓮華だいれんげの如ごとき寶山ほうせんの頂上ちやうじやうに坐まし、歡喜くわんぎ恭敬くわんげいして是言このごんを作なさく、「我今われいま如ごと來らいの二義にぎを問とはんと欲ほつす。是かくの如ごとき二義にぎは、我已われすでに曾かつて過去くわこの如來にやらい應正等覺おうしやうとうがくに問とひ、彼の佛ぶつ世尊せそん、已すでに我が爲ために説とき給たまへり。我今われいま亦また此義このぎを問とはんと欲ほつす。唯願ただねがくば如來にやらい、我が爲ために宣説せんとつしたまへ。世尊せそん、變化へんげの如來にやらいは此二義このにぎを説とく、根本こんぽんの佛ぶつに非あらず。根本こんぽんの佛ぶつは三昧さんまいの樂境がくきやうを説ときて虛妄こゝろ分別ぶんべつの所行しよかうを説ときたまはず。善よい哉や、世尊せそんは法ほふに於て自在じざいなり。唯願ただねがくば哀愍あいきんして此二義このにぎを説ときたまへ。一切いっさいの佛子ぶつしは心こころに共聞みたまかんことを樂たのむ。」

爾時このとき、世尊せそんは彼の王わうに告つげて言いはく、「汝なんぢの問とに應おうじて我當われまづに汝なんぢが爲ために説とくべし。』時ときに夜叉王やしやわう、更さらに種種しゆしゆの寶冠ほうくわん瓔珞いんらくを著おけ、諸しよの莊嚴しやうげんの具ぐを以て、其身そのみを嚴かりて、是言このごんを作なさく、「如來にやらいは常つねに「法ほふ尚なほ捨すつべし、何なにに況いはんや非法ひほふをや」と説ときたまふ。云何いかんが此二種このにの法ほふを捨すつるを得えん。何なにをか是法ぜほふとし、何なにをか非法ひほふとする。法若ほふもし應まさに捨すつべくんば、云何いかんが

【有體無體】二體なり。即ち心外法は元來無體なれども、凡夫の機に従つて假に我法と説く（無體）心内の法は有體にして凡夫の執着する我法の如きものにはあらざれども假りに我法と説明す（有體）

【法性】諸法の體性即ち眞如をいふ

【外法、内法】外法とは眞理に外れた法相、内法とは理によつて顯はさるる法相

【無明】凡て事理に暗き精神作用をいふ

【纏界處】色受想行識の五蘊、眼耳鼻舌身意色聲香味觸法の十二處、又は十八界に吾等の身心が閉くを云ふ

二有る。二有らば即ち分別相中に墮す。有體、無體是實非實、是の如きの一切は、皆是れ分別にして、阿頼耶識の無差別の相を、了知すること能はず。毛輪住の如く淨智の境に非ず。法性、是の如くんば、云何が捨つべけん。爾時、佛楞伽王に告げて言はく、「楞伽王、汝輩に觀等は無常敗壞の法なるを見ざるや。凡夫は中に於て妄りに分別を生ず。汝今何が故に是の如く法と非法との差別の相を知らざる。此は是れ凡夫の分別する所にして聖智の見到非ず。凡夫は種種の相中に墮在す、諸の聖者には非ず。楞伽王、宮殿園林を繞く種種の焰を見るが如く、火性は是れ一なれども、出ず所の光焰は藉力に由るが故に。長短大小各差別有り。汝今云何が是の如く、法と非法との差別の相を知らざる。楞伽王、一種子の芽莖、枝葉及び花果の無量の差別を生ずるが如し。外法是の如く、内法も亦然り。謂く、無明を緣と爲して纏界處一切の諸法を生じ、三界の中に於て諸の趣生を受け、苦樂好醜諸難行止各差別有り。又諸の識相は是れ一なりと雖も、境界に隨て上中下、染淨、善惡、種種の差別有るが如し。楞伽王、但如上の法の差別有るのみならず、諸の修行者の觀行を修する時、自智の所行も亦復差別の相有るを見る。況や、法と非法と、種種の差別分別無からんや。楞伽王、法と非法との差別の相は、當に知るべし、悉く是れ相分別の故なり。楞伽王、何をか是れ法なる。謂ゆる二乗及び諸の外道は虚妄に分別して實等有り、諸法の因となると説く。是の如き等の法は應に捨つべく應に離るべし、應に中に於て分別して相を取るべからず、自心の法性を見れば則ち執著無し、瓶等の諸物凡愚の取る所は、

【毘鉢舍那】 觀察
正見、了見、能見
等の義で、梵音キ
バシヤナー (Vijñāna)
【性用】 性は體、
相は狀相のこと。

本體有ること無し。諸の觀行の人の毘鉢舍那を以て如實に觀察するを諸法を捨てと名く。楞伽王、何をか是れ非法なる。謂ゆる諸法は無性無相にして永く分別を離る。如實に見るものは、若は有若は無、是の如きの境界は彼皆起さず、是を非法を捨てと名く。後非法有り、謂ゆる兔の角、石女の兒等、皆性相無く分別すべからず。但世俗に隨つて名字有りと言くのみ。瓶等の如く取著すべきに非ず。彼は是れ識の所取に非ざるを以てなり。是の如き分別をも亦應に捨離すべし。是を法を捨て及び非法を捨てと名く。楞伽王、汝先に問ふ所は我已に説き竟んぬ。楞伽王、汝言へらく、「我れ過去の諸の如來の所に於て、已に是義を問ひ、彼の諸の如來は已に我が爲に説く」と。楞伽王、汝言へらく、「過去は但是分別のみ、未來も亦然り。」我も亦彼に同じ。楞伽王、彼の諸佛の法は皆分別を離る。已に一切の分別戲論を出づ、色相の如くに非ず唯智もて能く證す。衆生をして安樂を得しめんが爲の故に法を演説し、無相の智を以て説きて如來と名く。是故に如來智を以て體と爲し、智は身の爲の故に分別すべからず。所を以て分別すべからず。我、人、衆生の相を以て分別すべからず。何が故に分別する能はざる。意識は、境界に因りて起り、色の形相を取るを以てなり。是故に能分別を離れ、亦所分別を離る。楞伽王、譬へば壁上の彩畫の衆生は、覺知有ること無きが如し。世間の衆生も悉く亦是の如く業無く報無し。諸法も亦た然なり、聞無く説無し。楞伽王、世間の衆生は猶し變化の如し、凡夫外道は了達すること能はず。楞伽王、能く是の如く見るを名けて正見と爲す。若し他見する者は分別の見と名く。分別に

由るが故に二に取著す。楞伽王、譬へば人有りて、水鏡の中に於て自ら其像を見、燈月の中に於て自ら其影を見、山谷の中に於て自ら其響を聞き、便ち分別を生じて、取著を起すが如し。此も亦是の如く、法と非法とは、唯是れ分別のみ。分別に由るが故に、捨離すること能はず、但更に一切の虚妄を増長して寂滅を得ず。寂滅とは謂ゆる一縁なり。一縁とは是れ最勝三昧なり。此より能く自證聖智を生じ、如來藏を以て境界と爲す。」

集一切法品第二之一

【集一切法品一】
此章より本論に入る。此章には三界唯心、萬法唯識の眞義を明す。

爾時、大慧菩薩摩訶薩は摩帝菩薩と俱に一切諸佛の國土に遊び、佛の神力を承けて座より起ち、偏に右の肩を袒き、右の膝を地に著け、佛に向ひ掌を合せ、躬を曲げ恭敬して頌を説きて言はく、

世間は生滅を離れ、譬へば虚空の花の如し

智、有無を得ずとし、而して大悲心を興したまふ

一切の法は幻の如く、心識を遠離し

智、有無を得ずとし、而して大悲心を興したまふ

世間は恒に夢の如く、斷常を遠離し、

智、有無を得ずとし、而して大悲心を興したまふ

【斷常】有無二見をいふ。斷見とは無見をいひ一切衆

生は死して未來の
世界なく虚空に歸
すと見るもの。常
見とは有見一切
衆生の流轉相續を
主張するもの。

【二無我】法無我
人無我の二つ。法
無我とは諸法が常
に因縁によりて生
じ實體なしとする
もの。人無我とは
五蘊の和合により
てなれる身には常
一主宰の我なる實
在なしと云ふこ
と。

【煩惱障】生死流
轉の障礙。
【智障】所知障、
眞如の理を獲ひ、
正智を生ぜず爲に
菩提を障る礙。
【法身】眞如法性
の理佛のこと。
【根境】根とは舌
吾の主觀、境とは
認識の對象のこと
【牟尼】釋迦牟尼
佛のこと。
【百八の義】一百
八の偈問
【世間解】佛十號

人法無我、煩惱及び爾煩
常に清淨にして無相なることを知り、而して大悲心を興したまふ
佛は涅槃に住せず、涅槃は佛に住せず
覺、不覺、若は有と若は非有とを遠離したまふ
法身は幻夢の如し、云何が稱讚したてまつるべき
性無く生無きを知らば、乃ち佛を稱讚すと名く
佛には根境の相無し、見ざるを佛を見ると名く
云何が牟尼に於て、而も能く讚毀有らん
若し牟尼を見て、寂靜なれば生を遠離す
是人は今後世にも、著を離れて所見無けん
爾時、大慧菩薩摩訶薩、偈もて佛を讚じ已りて、自ら姓名を説くらく、
我が名を大慧と爲す。大乘に通達するなり
今百八の義を以て、仰いで尊中の上に諮ふ
時に世間解は是語を聞き已り、普く衆會を觀じて是言を説くらく、『汝等諸の佛子今皆
爾時、大慧菩薩摩訶薩、佛の許を蒙り已りて、佛足を頂禮し頌を以て問うて曰く、
云何が計度を起し、云何が計度を淨めん

【一】の如來がよく
【三】世間(器)衆生、
【智】正覺の事を了
【解】し給ふによつて
【此】義あり。

【計】度はからひ
【推】量のこと。

【無】影 梵語、ニ
【ラ】パーサ(Ani-
【サ】)不見と譯
【す】平和靜寂の意。

【次】第 修行段階
【の】諸地に入り、住
【し】出る次第のこ
【と】。梵語カラマ

(Krama)の譯。

【刹】土 梵音クシ
【エ】ートラ(Kratu-
【ラ】)國、即ち國土
【の】こと。

【三】乘 聲聞、緣
【覺】菩薩の三乘。

【俱】異 因果に關
【し】外道の立論する
【一】、異、俱、不俱
【の】四句を略せるも
【の】。

【諸】有 所有と同
【じ】、二十五有の迷
【の】境界のこと。

【無】色定 無色界
【の】四天即ち空無邊
【處】。諸無邊處、無所

云何が迷惑を起し、云何が迷惑を淨めん

云何が佛子と名け、及び無影次第なる

云何が刹土に於て、相及び諸の外道を化す

解脫して何の所にか至る、誰か縛し誰か能く解く

云何が禪の境界なる、何が故に三乗有る

彼は何の縁を以てか生ずる、何をか作、何をか能作

誰か二の俱異を説く、云何が諸有起り

云何が無色定、及び滅盡定なる

云何をか想滅と爲し、云何が定より覺むる

云何が所作生なる、進去及び持身ある

云何が諸物を見、云何が諸地に入る

云何が佛子有る、誰か能く三有を做す

何れの處にか身云何、生じて復た何の處にか住する

云何が神通自在、及び三昧を得る

三昧の心は何の相ぞ、願くば佛我が爲に説きたまへ

云何が藏識と名け、云何が意識と名く

云何が諸見を起し、云何が諸見を退けん

有處、非想非非想處なり。

【滅盡定】一切の心想すべて滅して寂靜となる定にして聖者が過勞を厭ひて閑寂の樂を模せんとして修する定なり。

【想滅】滅盡定より進んで聖者が快苦の感覺を絶したる時顯はるる心の狀なり。

【所作生】定の中に現はるる變化のこと。

【進去】定中に見らるる神通遊戯なり。

【持身】定中の長時間の住時を云ふ。

【三有】三界、即ち欲界、色界、無色界のこと。

【藏識】前出。性非性は三乗の性のこと。非性は外道の性のこと。

【無業生】凡夫の迷へる見解を脱したる常住の心を云ふ。

云何が性非性なる、云何が唯是れ心なる
何に因つてか相を建立し、云何が無我を成ずる

云何が衆生無く、云何が俗説に隨ふ
云何が常見、及び斷見を起さざることを得る

云何が佛と外道と、其相、相違せざる
何が故に當來の世に種種の諸の異部ありや

云何が性空と爲し、云何が刹那滅する
胎藏は云何にして起り、云何が世は不動なる

云何が諸の世間は、幻の如く、亦夢
乾城及び陽焰乃至水中の月の如くなる

云何が菩提分と云ふ、覺分は何より起る
云何が國土亂れ、何故に諸有を見る

云何が世法を知り、云何が文字を離る
云何が空花の如く、不生亦不滅なる

眞如に幾種か有る、諸度の心に幾ばくか有る
云何が虚空の如くなる、云何んが分別を離るる

云何が地に次第ある、云何が無影を得る

【俗意】 眞俗二諦の俗に當る。

【當來】 未來のこと。

【異部】 佛滅後に起れる種種の宗派。

【性空】 前出。

【和那滅】 萬物が和那和那に生滅して相續すること。

【胎藏】 大日如來の理法身を云ふ。

【善度分】 菩提は覺(Bodhi-viṅga)なり。菩提に順ずること。

【覺分】 菩提分に同じし。

【諸聖】 度はバラミター (Parāmi)。

【地】 菩薩の十地のこと。

【所知】 所知障のこと。知障に同じ。

【摩尼】 梵音マニ (Mani) 無垢、離垢と譯す。

【明處】 五明のこと。即ち聲明(音樂)因明(論理)醫方明(醫學)工巧明(工

明)工巧明(工

何をか二無我となす、云何が所知を淨むる

聖智に幾種か有る、衆生を滅しむるも亦然なり

摩尼等の諸寶、斯ら並に云何が出づる

誰か語言と衆生と及び諸物とを起す

明處と技術とは誰の顯示する所ぞ

伽他に幾種か有る、長行も亦然なり

道理は幾ばくか不同なる。解釋に幾ばくの差別がある

飲食は是れ誰か作る、愛欲は云何が起る

云何が轉輪王及び諸の小王となる

云何が王は守護する。天衆に幾種の別がある

地日月星宿、斯等並に是れ何ん

解脱に幾種か有る。修行師に復幾ばくかある

何をか阿闍梨と云ふ、弟子に幾ばくの差別がある

如來に幾種か有る、本生の事も亦た然なり

衆魔及び異學、是の如きもの各幾ばくか有る

自性に幾種の異りかある、心に幾種の別か有る

云何が唯假設なる。願くば佛爲に開演したまへ

【藝】内明(佛法)。
 【技術】五明中の
 工巧明のこと。
 【伽陀】梵音が
 トハー(Hymn)頌
 にして韻文なり。
 【長行】散文にて
 説かれし經文をい
 ふ。偈頌の對。
 【轉輪王】梵名ヂ
 ラージャ(Chakrav
 artika)須彌
 四天を統治する王
 【天衆】多くの天
 人のこと。
 【阿闍梨】阿舍利
 梵音アーチヤール
 ヤ(Acarya)弟子の
 行爲を矯正する德
 僧のこと。
 【本生】佛陀前生
 のこと。
 【念智】作意のこ
 と。
 【藤樹】草木を譬
 として、世の無情
 のものを示す。
 【象馬獸】世の有
 情のもの感覺知覺
 あるものに譬ふ。
 【六時】歳分の六
 時一年を六時に分

云何が風雲と爲す、念智は何に因つてか有る
 藤樹等の行列は此れ並に誰か能く此れを作る
 云何が象馬獸何に因つてか捕取する
 云何が卑陋の人、願くば佛、我が爲に説きたまへ
 云何が六時に攝せらる。云何が一闍提
 女男及び不男、此れ並に云何が生ずる
 云何が修行進む、云何が修行退く
 瑜伽師に幾ばか有る、人をして其中に住せしむる
 衆生は諸趣に生ず、何の形何の色相なる
 富饒大白在、此れ復何に因つてか得る
 何をか釋迦種と云ひ、何をか甘蔗種と云ふ
 仙人の長き苦行は、是れ誰の教授ぞ
 何に因つてか佛世尊、一切の刹中に異名
 諸の色類を現じて、佛子衆に闡達せられたまふ
 何に因つてか肉を食せざる、何に因つてか肉を斷ぜしむる
 食肉の諸の衆生、何の因を以てか故らに食する
 何が故に諸の國土、猶し日月の形

つ。

【一闍提】略して闍提と云ふ。解脱の因を缺き成佛する能はざるものをいふ。

【不男】五種不男と云ふ、男根を具へざるもの。

【瑜伽師】ヨーガ（योग）瑜伽の觀行を修する人。瑜伽は印度六派哲學の一。

【語趣】衆生の趣き住む所即ち六趣あり。

【甘蔗種】印度釋迦種族の後裔。

【刹】刹土、國土。前出。

【因陀羅網】インドラの殿上なる結珠の網。

【變化佛】應身佛なり。

【眞如智慧佛】法身佛なり。

【色究竟】色界第十八天の第十八。【染】煩惱なり。【正法】正しき教法。

須彌及び蓮華、卍字、師子像の如くなる

何が故に諸の國土、因陀羅網の如く

覆住も側住も一切の寶の成ずる所なる

何が故に諸の國土、無垢なること日月の光の如く

或は花果の形の如く、箴履と細腰鼓との如くなる

何をか變化佛と云ひ、何をか報佛

眞如智慧佛と爲す、願くば我が爲に説きたまへ

云何が欲界に於て等正覺を成ぜざる

何が故に色究竟に染を離れて菩提を得る

如來滅度の後、誰か當に正法を持すべき

世尊の住したまふ久しきや、正法は幾ばくの時か住せん

悉檀に幾種か有る、諸見に復幾ばくか有る

何が故に毘尼及び諸の比丘を立つる

一切の諸の佛子、獨覺及び聲聞

云何が所依を轉じ、云何が無相を得る

云何が世通を得、云何が出世を得

復何の因縁を以てか心七地の中に住する

【悉檀】梵音シツドハーンタ(Siddhanta)吉法、成就と譯す。宗要の意。
 【毘尼】梵音ピナヤ(Vinaya)戒律なり。
 【獨覺】辟支佛、無師にして獨り悟り得るもの。
 【世通】世俗の五神通。
 【出世】出世間の六神通。
 【僧伽】サンガ(Sangha)和合衆、僧侶のこと。
 【破僧】破戒僧をいふ。
 【迦葉】梵音カリーシヤバ(Kasyapa)欲光と譯す。
 【拘留孫】クラクヂニチユハンダ(Krakuchanda)拘那含牟尼、カナカムニ(Kanakamuni)訶梨勒ハリタキー(Haritari)藥樹の名。
 【菴摩羅】アームラ(Amra)樹名。

僧伽に幾種か有る、云何が破僧となす
 云何が衆生の爲に、廣く醫方論を説く
 何が故に大牟尼は是の如きの言を唱説したまふ
 迦葉、拘留孫、拘那含は是れ我なりと
 何故に斷常、及び我、無我を説きたまふ
 何ぞ恒に實を説きたまはざる、一切は唯是れ心
 云何が男女林、訶梨、菴摩羅
 鷄羅婆輪圍及以金剛山ある
 是の如きの中間に處くに無量寶の莊嚴せるをもてし
 仙人乾闥婆一切皆充滿す
 此れ皆何の因縁なる。願くば世尊、我が爲に説きたまへ
 爾時、世尊共請ふ所の大乗の微妙なる諸佛の心、最上の法門を開きて、即ち之に告げて
 言はく、「善い哉大慧、諦に聽け 諦に聽け、汝が問ふ所、當に次第に説くべし。」
 即ち頌を説きて曰はく、
 若は生、若は不生、涅槃及び空相
 流轉は自性無し。波羅蜜、佛子
 聲聞、辟支佛、外道、無色行も

【鶉羅漫】 カイラ
ーリ (Kailasa) 山
の名。

【輪圍】 梵語にチ
ヤツク、ラウィダ
(Chakravāḍa) と云
ひ輪山と譯す。

【波羅蜜】 梵音バ
ーラミター (Paṇ
ḍita) 變と譯す。

【菩薩の修する行】
菩薩の修する行。

【辟支佛】 梵音ブ
ラトエーカブツド
ハ (Pratyekabudd
ha) 獨覺と譯す。

【無色行】 外道の
修して以て涅槃な
りとするもの。

【阿修羅】 梵音ア
スラ (Asura) 非天
非類と譯す。

【如意足】 智と定
との二力が平均し
て求むる所を得る
の義。

【大種】 地水火風
の四大種のこと。

【教得】 對象に教
へ眞如を得しむる
こと。

【微塵】 微細なる

【微塵】 微細なる

須彌、巨海、山、洲渚と刹土地
 星宿と日月と、天衆、阿修羅
 解脫、自在通力、禪の諸三昧
 滅及び如意足、菩提分及び道
 禪定と無量の諸纏と、及び往來と
 乃至滅盡定と、心の生ずる所にして、言説を起す
 心意識、無我、五法及び自性
 分別、所分別、能所二種の見
 諸生、種性處も、金摩尼、眞珠
 一闍提、大種、荒亂及び一佛
 智、所智、教得、衆生の有無有
 所作及び能作、衆林と迷惑と
 是の如き眞實の理は、唯心にして境界無し
 諸地に次第無く、無相にして所依を轉ず
 醫方、工巧論、伎術、諸明處
 須彌の諸山、地、巨海、日月の量
 上中下の衆生、身は各幾微塵なる

塵天眼に非ずんば
見るを得ざる塵。
【幾塵】 幾微塵の
こと。

【弓】 ダーヌ (Dh
anu)

【肘】 ハスタ (Ha
sta)

【俱盧舍】 梵音ク
ローシヤ (Khosha)

里程の名。
【由旬】 ヨーヂヤ
ナ (Yojana) 里數

の名。

【遊】 塵のこと

【頻婆羅】 ビムバ
ラ (Kimbhara) 兆以
上の數。

【一境】 認識の對
象一境を得るとは
對象に心を集注す
ること。

【化】 化身佛。

一一の刹、幾塵ぞ。一一の弓は幾肘なる
幾弓か俱盧舍。半山旬、由旬
と、兔毫と隙遊と、蟻、羊毛、穠麥
半升と一升、是れ各幾種麥なる
一斛及び十斛、十萬暨び千億

乃至頻婆羅、是等各幾數かある
幾塵か芥子を成し、幾芥か草子を成し
復た幾草子を以てか一豆となす

幾豆をか一銖と成し、幾銖をか一兩と成す
幾兩をか一斤と成し、幾斤をか須彌と成す

此等は應に請ふべき所なり。何に因つてか餘事を問ふ
聲聞、辟支佛、諸佛及び佛子

是の如き等の身量は、各幾微塵か有る
火風は各幾塵か有る。一一の根に幾ばくか有る

眉及び諸の毛孔は、復各幾塵より成る
是の如き等の諸事、云何が我に問はざる

云何が財富を得、云何が轉輪王となり

云何が王は守護する、云何んが解脫を得る

何をか長行句と云ひ、煙欲及ぶ飲食

何をか男女林、金剛等の諸山

幻、夢、渴愛の譬と云ふ。諸雲は何より起り

時節は云何が有る。何に因つてか種類の味

女男及び不男、佛菩薩の嚴飾ある

何をか諸妙山、仙園婆の莊嚴と云ふ

解脫して何の所にか至る。誰か縛し誰か解脫する

何をか禪の境界、變化及び外道と云ふ

云何が無因にして作り、云何が有因にして作る

云何が諸見を轉じ、云何が計度を起す

云何が計度を淨くす。所作は云何が起る

云何が轉去し、云何が諸想を斷じ

如何が三昧を起す。三有を破するものは誰ぞ

何れの處にか身云何。云何が我有ること無く

云何が俗説に隨ふ。汝が問の相は云何

及び問ふ所の非我、云何が胎藏

及び餘の支分と爲る。何をか斷常の見と云ふ
云何が心は一境となる。何をか言説、智
戒、種性佛子と云ふ。何をか理釋に稱ふと云ふ
云何が師、弟子、衆生、種性の別
飲食及び虚空、總明魔の施設
云何が樹の行布、是れ汝の所問なり
何に因つてか一切の刹に、種種なる相の不同ある
或は箠、腰鼓及び衆花の如きもの有り
或は光明を離れたる、仙人の長き苦行有り
或は好族姓有り、衆生をして尊重せしめ
或は體の卑陋なる有りて、人の輕賤する所と爲る
云何が欲界の中に修行して成佛せず
而も色究竟に於て、乃ち等正覺に昇る
云何が世間の人にして、能く神通を獲る
何に因つてか比丘と稱し、何が故に僧伽と名くる
何をか化及び報、眞如智慧佛と云ふ
云何が其心をして、七地の中に住することを得しむる

此及及び餘の義に於て、汝今咸く我に問ふ

先佛の所説の如く、一百八種の句

一一の相は相應して、諸見の過を遠離し

亦た世俗の言語の、成る所の法を離る

我當に汝が爲に説くべし、佛子應に聽受すべし

爾時、大慧菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、「世尊、何をか是れ一百八句なる。」佛言は

く、「大慧、謂ゆる生句は非生句なり。常句は非常句なり。相句は非相句なり。住異句は非

住異句なり。刹那句は非刹那句なり。自性句は非自性句なり。空句は非空句なり。斷句は

非斷句なり。心句は非心句なり。中句は非中句なり。縁句は非縁句なり。因句は非因句な

り。煩惱句は非煩惱句なり。愛句は非愛句なり。方便句は非方便句なり。善巧句は非善巧

句なり。清淨句は非清淨句なり。相應句は非相應句なり。譬喩句は非譬喩句なり。弟子句

は非弟子句なり。師句は非師句なり。種性句は非種性句なり。三輪句は非三輪句なり。無

影像句は非無影像句なり。願句は非願句なり。三輪句は非三輪句なり。標相句は非標相句

なり。有句は非有句なり。無句は非無句なり。俱句は非俱句なり。自證聖智句は非自證聖

智句なり。現法樂句は非現法樂句なり。刹句は非刹句なり。摩句は非摩句なり。水句は非

水句なり。弓句は非弓句なり。大種句は非大種句なり。算數句は非算數句なり。神通句は

非神通句なり。虛空句は非虛空句なり。雲句は非雲句なり。巧明句は非巧明句なり。伎術

句は非技術句なり。風句は非風句なり。地句は非地句なり。心句は非心句なり。假立句は
 非假立句なり。體性句は非體性句なり。蘊句は非蘊句なり。衆生句は非衆生句なり。覺句
 は非覺句なり。涅槃句は非涅槃句なり。所知句は非所知句なり。外道句は非外道句なり。
 荒亂句は非荒亂句なり。幻句は非幻句なり。夢句は非夢句なり。陽焰句は非陽焰句なり。
 影像句は非影像句なり。火輪句は非火輪句なり。乾闥婆句は非乾闥婆句なり。天句は非天
 句なり。飲食句は非飲食句なり。姪欲句は非姪欲句なり。見句は非見句なり。波羅蜜句は
 非波羅蜜句なり。戒句は非戒句なり。日月星宿句は非日月星宿句なり。諺句は非諺句
 なり。果句は非果句なり。滅句は非滅句なり。滅起句は非滅起句なり。醫方句は非醫方句
 なり。相句は非相句なり。支分句は非支分句なり。禪句は非禪句なり。迷句は非迷句なり。
 現句は非現句なり。護句は非護句なり。種族句は非種族句なり。仙句は非仙句なり。王句
 は非王句なり。攝受句は非攝受句なり。寶句は非寶句なり。記句は非記句なり。一闍提句
 は非一闍提句なり。女男不男句は非女男不男句なり。味句は非味句なり。作句は非作句な
 り。身句は非身句なり。計度句は非計度句なり。動句は非動句なり。根句は非根句なり。
 有爲句は非有爲句なり。因果句は非因果句なり。色究竟句は非色究竟句なり。時節句は非
 時節句なり。樹藤句は非樹藤句なり。種種句は非種種句なり。演說句は非演說句なり。決
 定句は非決定句なり。毘尼句は非毘尼句なり。比丘句は非比丘句なり。住持句は非住持句
 なり。文字句は非文字句なり。大慧、此百八句は皆是れ過去の諸佛の説きたまふ所なり。』

【轉相】 能見相と

も云ふ。

【現識】 第八識なり。

【分別事識】 第六

識を云ふ。境に向つて種種分別するが故に。

爾時、大慧菩薩摩訶薩は、復佛に白して言さく、「世尊、諸識は幾種の生住滅かある。佛言はく、「大慧、諸識に二種の生住滅有り、臆度者の能く知る所に非ず。謂ゆる相續生及び相生、相續住及び相住、相續滅及び相滅なり。諸識に三相有り、謂く轉相、業相、眞相。大慧、識は廣説すれば八有り、略すれば則ち唯二となる。謂はく現識及び分別事識なり。大慧、明鏡の中に諸の色像を現するが如く、現識も亦爾なり。大慧、現識と分別事」と、此二識は異相無く、互に因と爲る。大慧、現識は不思議熏變を以て因と爲し、分別事識は、境界を分別すると及び無始の戲論の習氣とを以て因と爲す。大慧、阿頼耶識を虚妄に分別する種種の習氣滅すれば、即ち一切の根識滅す、是を相滅と名く。大慧、相續滅とは、謂はく、所依の因滅し及び所緣滅すれば即ち相續滅なり。所依の因とは無始の戲論、虚妄の習氣を謂ひ、所緣とは自心の見る所によりて分別する境界を謂ふ。大慧、譬ば泥團と微塵との、異に非ず不異に非ざるが如く、亦金と莊嚴具とも亦復是の如し。大慧、若し泥團と微塵と異らば、應に彼の成ぜざるべく、而かも實に彼は成ず、是故に異にあらず。若し異にあらずば、泥團、微塵は應に分別無かるべし。大慧、轉識と藏識若し異ならば、藏識は彼因にあらず。若し異にあらずば、轉識滅すれば藏識も亦應に滅すべし、然も彼の眞相は滅せざるなり。大慧、識の眞相は滅せず、但業相のみ滅す。若し眞相滅せば、藏識は應に滅すべし。若し藏識滅せば、即ち外道の斷滅の論と異ならず。大慧、彼の諸の外道は是の如きの説を作す。境界を取る相續識滅すれば、即ち無始の相續識滅すると。大慧、彼

【勝性】 婆羅門教の重要な維持保存の神キシユヌ(Vishnu)。

【丈夫】 數論哲學に見る神我アルシヤ (Purusha)。

【自在】 大自在天梵名マハスブラ (Mahesvara)。

【時】 時間。

【自共相】 自相、共相のこと。自相は物自身に限る相にて共相は自他に通ずる相なり。

【蘊界處】 前出。

【諦】 眞にして虚にあらざること。
【現法】 事實の

の諸の外道は、相續識を作者より生ずと説く。眼識は色と光明との和合によりて生ずと説かず。唯作者を生因と爲すと説くが故に作者は何者なりや、彼は勝性、丈夫、自在、時及び微塵を計して能作者と爲す。

復次に大慧、七種の自性有り、謂ゆる集自性、性自性、相自性、大種自性、因自性、緣自性、成自性なり。復次に大慧、七種の第一義有り。謂ゆる心所行、智所行、二見所行、超二見所行、超子地所行、如來所行、如來自證聖智所行なり。大慧、此は是れ過去未來現在の一切の如來、應、正等覺の法の自性の第一義心なり。此心を以て如來は世間出世間の最上の法を成就し聖慧眼を以て自共相に入り、種種に安立したまふ。其安立したまふ所は外道の惡見と共にからず。大慧、云何をか外道の惡見と爲す。謂はく、境界は分別より現するを知らず、自性第一義に於て、有を見、無を見て言説す。

大慧、我今當に説くべし。若し境は幻の如く自心の所現なることを了せば、則ち妄想の三有の苦及び無知の愛業の緣を滅す。大慧、諸の沙門婆羅門有り、非有及び有を妄計して、因果の外に於て諸物を顯現し、時に依りて住すとす。或は蘊界處を計して緣に依りて生住し、有り已れば即ち滅すとす。大慧、彼は若は相續、若は作用、若は生、若は滅、若は諸有、若は涅槃、若は道、若は業、若は果、若は諦に於て計をなす、是れ破壞斷滅の論なり。何を以ての故に。現法を得ざるが故に、根本を見ざるが故に。大慧、譬は瓶破すれば瓶の事を作さざるが如く、又焦したる種子の牙を生ずること能はざるが如し。此れも亦是の如く、

【本無、有、識】何れも數論哲學の稱するものにして本無は冥初、有は諸法、識は神我なり。【宗】論理の命題のこと。

若し蘊界處の法、已に現じ、應に滅すべくば應に知べし、此れ則ち相續の生無し。因無きを以ての故に、但是れ自心の虛妄に見る所なり。復次に大慧、若し本無、有、識、三緣合して生ぜば、龜は應に毛を生ずべく、沙は應に油を出すべく、汝が宗は則ち壞れん。決定の義に違ふが故に。所作の事業は悉く空にして無益なり。大慧、三谷を緣と爲ば是れ因果の性、説いて有と爲すべくんば、過現未來無より有を生ぜん。此は覺想地に依住する者の、有ゆる理教及び自らの惡見の熏習する餘氣にて、是の如きの説を爲すなり。大慧、愚癡の凡夫は惡見の囁する所の邪見に迷醉す。無智妄りに一切智の説と稱す。大慧、復沙門婆羅門有り、一切の法を觀じて皆自性無しとす。空中の雲の如く、旋火輪の如く、乾闥婆城の如く、幻の如く、煙の如く、水中の月の如く、夢の所見の如く、自心を離れず。無始より來、虛妄の見に由るが故に、取つて以て外と爲す。是觀を作し已りて、分別の緣を斷じ、亦妄心所取の名義を離れ、身及び物并に所住處一切、皆是れ藏識の境界にして、能、所取及び生住滅無きを是の如く思惟して恆に住して捨てず。大慧、此菩薩摩訶薩は、久からずして當に生死涅槃の二種の平等と、大悲方便無功用の行を得べし。衆生は、如くの如く、如く緣に従つて起ると觀じ、一切の境界は心を離れて得ること無きを知り、無相道を行じ漸く諸地に昇りて三昧の境に住し、三界は皆唯自心なりと了達して、如幻定を得て衆の影像を絶し、智慧を成就して無生法を證し、金剛喻三昧に入り、當に佛身を得て恆に如如に住し、諸の變化を起し力通自在なるべし。大慧、方便を以て嚴飾と爲して衆の佛國に遊

び、諸の外道及び心意識を離れ、轉じて次第により、如來身を得ん。大悲、菩薩摩訶薩佛身を得んと欲せば、應當に蘊界處の心、因縁の所作、生、住、滅法の戲論分別を遠離すべし。但心量に住して、三有は無始時來の妄習の所起なるを觀察し、佛地は無相無性にして、自證の聖法なることを思惟し、心の自在、無功用の行を得て、如意實の宜に隨つて身を現するが如く、唯心を達して漸く諸地に入らしむ。是故に大悲、菩薩摩訶薩、自らの悉檀に於て、應に善く修學すべし。』

大乘入楞伽經 卷第二

大周子闍國三藏法師實叉難陀勅を奉じて譯す

【集一切法品二】
此章より八識を説き識智の相を明す。

集一切法品第二之二

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、唯願くば我が爲に心意意識、五法、自性の相、衆妙の法門を説きたまへ。此れは是れ一切の諸佛菩薩、自心の境に入り所行の相を離れて眞實の義に稱へる諸佛の教心なり。唯願くば如來、此山中の諸の菩薩衆の爲に、過去の諸佛に隨順して、藏識の海浪、法身の境界を演説したまへ。」

【眼識】 五識、六識八識の一。

【色】 物質現象即ち心の對象。

【因】 藏識に當る。【所作の相】 七轉識に相當す。

爾時、世尊は大慧菩薩摩訶薩に告げて言はく、「四種の因縁有りて眼識轉ず。何等をか四と爲す。謂ゆる自心の現するを覺らずして執取するが故に。無始時來の色虚妄習氣に取著するが故に。識の本性は是の如きが故に。種種の色相を樂見するが故に。大慧、此四縁を以て、阿頼耶識は、瀑流の水の如く、轉識の浪を生ず。眼識の如く餘も亦是の如し。一切の諸根、微塵、毛孔、眼等に於て、轉識は或は頓生なり。譬ば明鏡に衆の色像を現するが如し。或は漸生なり、譬へば猛風の大海の水を吹くが如し。心海も亦爾なり、境界の風吹きて、諸の識浪を起し、相續して絶えず。大慧、因と所作の相とは、一に非ず異に非ず、

【五識身】五境を
知覺する。五種
の心
識即ち、眼耳鼻舌
身の五識。

業と生相とは相繋はりて深く縛し、色等の自性を了知すること能はず、五識身轉ず。大慧、
五識と俱に或は差別の境相を了別するに因りて意識の生ずること有り。然れども、彼の諸
識は是念を作さず、我等同時に展轉して因となりて、自心所現の境界に於て、分別し執著
し、時を俱にして起れども、差別の相無く各自境を了ると。大慧、諸の修行者は三昧に
入りて、習力微に起るも覺知せざるが故に、但是念を作さく。我諸識を滅して三昧に入
ると。實は識を滅して三昧に入るにあらず、彼は習氣の種を滅せざるを以ての故に、但諸境を
取らざるを名けて識滅と爲す。大慧、是の如く藏識の行相は微細なり。唯諸佛及び住地の菩
薩を除き、其餘の一切の二乘、外道の定慧の力にては皆知ること能はず。唯如實の行を修
行する者有り、智慧力を以て諸地の相を了し、善く句義に達す。無邊の佛の廣く集むる所
の善根は、妄りに分別せず。自心の所見のみ能く之を知る。大慧、諸の修行の人は山林に
宴處し、上中下の修、能く自分の分別する流注を見、諸の三昧自在力通を得、諸佛灌頂
菩薩に圍繞せられ、心意意識の所行の境界を知り、愛業無明の生死の大海を超ゆ。是故に
汝等當に諸佛菩薩の如實に修行する大善知識に親近すべし。』

爾時、世尊重ねて偈を説きて言はく、

譬へば巨海の浪、斯猛風に由つて起り

洪波の溟壑を鼓して、斷絶する時無きが如く

藏識の海は常住なれども、境界の風に動かされて

種種の諸識の浪は、騰躍して轉生す

青赤等の諸色と、鹽貝乳石密と

果花と日月の光とは、異に非ず不異に非ず

意等の七種の識も、應に知るべし亦是の如く

海の波浪と共なるが如く、心と俱に和合して生ず

譬へば海水の動いて、種種の波浪と轉するが如く

藏識も亦是の如く、種種の諸識生ず

心意及び意識は、諸相と爲る。故に説く

八識は別相無く、能相所相無しと

譬へば海と波浪とは、是れ則ち差別無きが如し

諸識と心も是の如し、異も亦不可得

心は能く業を積集し、意は能く廣く積集す

了別の故に識と名け、現境に對して五と説く

爾時、大慧菩薩摩訶薩、頌を以て問うて曰はく

青赤の諸の色像は、衆生の識の顯現なり

浪の種種の法の如き云何。願くば俚、説きたまへ

爾時、世尊頌を以て答へて曰はく、

【心等】以下心意
識の說明

【現】現在なり。

【浪中】 識浪の中
にの意。

青赤の諸の色像は、浪中に得べからず

心、衆相を起すと言ふは、諸の凡夫を開悟せしめんが爲なり

而も彼本起ること無ければ、自心の所取離る

能取及び所取は、彼波浪と同じ

身も資財も安住も、衆生の識の現する所なり

是故に此に起ると見ゆるも、浪と差別なし

爾時、大慧復頌を説いて曰はく、

大海の波浪の性の鼓躍するは分別すべし

藏識是の如くにして起らば、何故に覺知せざるか

爾時、世尊、頌を以て答へて曰はく、

阿頼耶は海の如く、轉識は波浪に同じ

凡夫の無智なる爲に、譬喩して廣く開演するのみ

爾時、大慧、復頌を説いて言はく、

譬へば日光の出でて、上下等しく普照すが如く

世間の燈も亦然り、應に愚の爲に實を説き給ふべし

已に能く法を開示す。何ぞ眞實を顯はしたまはざる

爾時、世尊、頌を以て答へて曰はく、

若し眞實を説かんに、彼の心に眞實無し
 譬へば海の波浪も、鏡中の像も及び夢も
 俱時に顯現するが如く、心境界も亦然かなり
 境界具せざるが故に、次第に轉生す
 識は以て能く了知し、意は復意に然りと謂ひ
 五識は現境を了し、定まれる次第有ること無し
 譬へば工畫師、及び畫師の弟子の
 彩を布いて衆像を圖するが如く、我が説も亦是の如し
 彩色中に文無く、筆にも非ず亦素にも非ず
 衆生を悦ばしめんが爲の故に、綺煥して衆像を成す
 言説は則ち變異す、眞實は文字を離る
 我が住する所の實の法は、諸の修行の爲に説く
 眞實自證の處は、能所の分別を離る
 此佛子の爲に説く。愚夫には別に開演す
 種種は皆幻の如く、所見不可得なり
 是の如く種種に説き、事に隨つて變異す
 所説、所應に非ざれば、彼に於て非説と爲るなり

【事】

對機説明の
こと。

【非説】
に譬ふ。

大言壯語

譬へば衆の病人に應じて、良醫の隨ひて藥を授くるが如く
如來は衆生の爲に、心に隨ひ量に應じて説きたまふ

世間の依怙者、證智所行の處は

外道の境界に非ず、聲聞も亦復然かなり

『復次に大慧、菩薩摩訶薩若し能取所取の分別の境界は、皆是れ自心の現する所なることを了知せんと欲せば、當に憍闍昏滯、睡眠を離れ、初中後夜に勤めて修習を加へ、曾て聞
く外道の邪論及び二乘の法を遠離し、自心分別の相に通達すべし。復次に大慧、菩薩摩訶
薩は智慧の心所の住相に住し已らば、上、聖智の三相に於て當に勤めて修學すべし。何を
か三と爲す。謂ゆる無影像相、一切諸佛の願持の相、自證聖智所趣の相なり。諸の修行者
は此相を獲已りて即ち跛驢の智慧の心相を捨て、菩薩の第八地に入り、此三相に於て修行
して捨てず。大慧、無影像相は一切の二乘外道の相を慣習するに由るが故に生起すること
を得、一切諸佛の願持の相は諸佛自らの本願力の加持する所に由るが故に生起することを得、
自證聖智の所趣の相は一切の法相を取らず、如幻の諸三昧を成就して、身、佛地智に趣
くに由るが故に生起することを得。大慧、是を上、聖智の三種の相と名く。若し此相を得ば、
即ち自證聖智の所行の處に到らん。汝及び諸の菩薩摩訶薩は應に勤めて修學すべし。』
爾時、大慧菩薩摩訶薩、諸の菩薩の心に念ふ所を知り、一切の佛の威神の力を承けて、
佛に白して言さく、『唯願くば爲に百八句の差別の所依、聖智の事、自性の法門を説きたま

【自共相】 自相、共相の略。

【兜率陀】 兜率天梵音ツシタ(一)二(二)妙足、止足、知足と譯す。

【一類の外道】 斷見を主張する外道の四大。

【求那、塵】 塵は微塵。何れも外道の主張するもの。

【器世間】 二種世間三種世間の一。山河大地等有情を容れる世界のこと。

【彼の見】 外道の常斷二見のこと。

【彼の見】 外道の常斷二見のこと。

へ。一切の如來、應、正等覺は、諸の菩薩摩訶薩の自共相に墮する者の爲に、此妄計の性、差別の義門を説きたまふ。此義を知り已りて則ち能く二無我を淨治し、境を觀じて諸地を照明し、一切の二乘外道の三昧の樂を超越し、諸の如來の不可思議所行の境界を見、畢竟じて五法自性を捨離し、一切の佛の法身の智慧を以て自ら莊嚴して如幻の境に入り、一切の利、兜率陀宮色究竟天に住して、如來の身を成ぜん。佛の言はく、「大慧、一類の外道有り。一切の法の因に隨つて盡るを見て、分別の解を生じ、兎に角無きを想うて、無の見を起し、兎角の無きが如く、一切の諸法も悉く亦是の如しとす。復外道有り。大種、求那、摩等の諸物の形量分位を見、各差別し已つて、兎に角なきを執し、此に於て牛に角有るの想を生ず。大慧、彼は二見に墮して唯心を了せず、但自心に於て分別を増長するのみなり。大慧、身及び資生器世間等も、一切皆唯分別の現する所なり。大慧、應に知るべし兎角は有無を離る、諸法も悉く然り、分別を生ずること勿れ。云何が兎角は有無を離る。互に因を待つが故なり。牛角を分析して乃ち微塵に至り其體相を求むるも終に得べからず。聖智の所行は彼の見を遠離す。是故に此に於て應に分別すべからず。」

爾時、大慧菩薩摩訶薩復佛に白して言さく、「世尊、彼豈一妄見を以て相を起さず、比度觀待して妄りに無と計せんや。」佛言はく、「分別を以て相待を起すを以ての故に無と言ふに非ず、何を以ての故に。彼分別を以て、生因と爲すが故に。角を以て分別して其所依と爲す。所依を因と爲せば異不異を離る。相待に由て兎角無きを顯はすに非ず。大慧、若

し此分別と兎角と異ならば則ち角の因に非ず、若し不異ならば彼に因て起る。大慧、牛角を分析して乃ち極微に至り、求むるも得べからず。有角に異なるを無角と言はば、是の如き分別は決定して非理なり。二俱に非有ならば誰をか誰に待たん。若し相待成せず、有を待つが故に兎角無しと言はば、應に分別すべからず。因正しからざるが故に。有無の論者は、有に執し無に執すれども、二俱に成ぜざるなり。

大慧、復外道有り。色形状、虚空の分齊を見て、執着を生じ、色は虚空に異なると言ひ分別を起す。大慧、虚空は是れ色なり色種に隨入す。大慧、色は是れ虚空なり、能持所持の建立する性なるが故に。色空の分齊は、應に是の如しと知るべし。大慧、大種の生ずる時は、自相各別なり、虚空の中に住せざれども、彼に虚空無きに非ず。大慧、兎角も亦爾なり、牛角と觀待して彼に角無しと言ふ。大慧、牛角を分析して乃ち微塵に至り、又彼の塵を析すれども其相現せず、彼何の待つ所有りて無しと言ふや。若し餘物を待つも彼も亦是の如けん。大慧、汝應に兎角、牛角、虚空及び色の有ゆる分別を遠離すべし。汝及び諸の菩薩摩訶薩は應に常に自心所見の分別の相を觀察し、一切の國土に於て、諸の佛子の爲に、自心を觀察する修行の法を説くべし。』

爾時、世尊即ち頌を説きて言はく、

心の所見は有無し、唯心に依るが故に起る
身、姿、所住、影は、衆生の藏識の現なり

心意及び識、自性の五種の法

一、無我の清淨は、諸の導師の演説するところなり

長短と觀待は、展轉して互に相生す

有に因るが故に無を成し、無に因るが故に有を成す

微摩分析の事、色の分別を起さず

唯心の安立する所なり、惡見の者は信ぜず

外道の行ずる處に非ず、聲聞も亦復然なり

救世の説きたまふ所は、自證の境界なり

爾時、大慧菩薩摩訶薩、心の現流を淨めんが爲に佛に請うて言はく、一世尊、云何が諸の

【現流】 自覺によ
りて淨められる煩
惱のこと。

【菴羅果】 菴摩羅
果のこと。 菴摩羅
は前出。

衆生の自心の現流を淨めん。漸次に淨を爲さんや頓に淨を爲さんや。二佛言はく、三大慧、

漸淨にして頓に非ず。菴羅果の漸熟して頓に非ざるが如し。諸佛如來の諸の衆生の自心の現

流を淨めたまふことも、亦復是の如く漸淨にして頓に非ず。陶師の器を造るは漸成にして

頓に非ざるが如し。諸佛如來の諸の衆生の自心の現流を淨めたまふことも、亦復是の如く

漸淨にして頓に非ず。譬へば大地の諸の草木を生ずるは、漸生にして頓に非ざるが如し。

諸佛如來の諸の衆生の自心の現流を淨めたまふことも亦復是の如く漸にして頓に非ず。大

慧、譬へば人の音樂書畫、種種の伎術を學ぶは、漸成にして頓に非ざるが如く、諸佛如來

の衆生の自心の現流を淨めたまふことも、亦復是の如く漸にして頓に非ず。譬へば明鏡

の頓とんに衆像しゆざうを現げんじて分別ぶんべつ無なきが如ごとく、諸佛しよぶつ如來じゆらいの諸もろくの衆生しゆじやうの自心じしんの現流げんりゆうを淨きよめたまふこ
 とも亦復またく是こゝの如ごとし。頓とんに一切無相いっさいむさうの境界きやうがいを現げんじて分別ぶんべつ無なし。日月輪にちがわつりんの一時いちじに一切いっさいの色像しきざうを
 遍照へんざうするが如ごとく、諸佛しよぶつ如來じゆらいの諸もろくの衆生しゆじやうの自心じしんの過習くわしゆを淨きよめたまふことも、亦復またく是こゝの如ごとし。
 頓とんに不可思議ふかしぎなる諸佛しよぶつ如來じゆらいの智慧ちゑの境界きやうがいを示現しげんしたまふ。譬たとへば藏識ざうしきの頓とんに身み及びお資生しじやう、
 國土こくど、一切いっさいの境界きやうがいを現げんするが如ごとく、報佛ほうぶつも亦爾またしり。色究竟しきくきやうてん天てんに於おいて、頓とんに能よく一切衆生いっさいしゆじやうを
 成熟じやうじやくして諸もろくの行ぎやうを修しゆせしむ。譬たとへば法佛ほふぶつの頓とんに報佛ほうぶつ及びお化佛けふつを現げんじて光明照曜くわうみやうせうやうなる
 が如ごとく、自證じじやうの聖境せいじやうも亦復またく是こゝの如ごとし。頓とんに法相ほふさうを現げんじて照曜せうやうを爲なし、一切有無いっさいやうむの惡見あくけんを
 離はなれしむ。復次またつぎに大慧だいゑ、法性所流ほふじやうしりゆうの佛ほとけは、一切法いっさいほふの自相共相じさうきやうさう、自心じしんの現げんする習氣じゆけの因相いんさう、妄
 計性けしやうの所執しよじの因相いんさう、更に相繫屬あひけする種種しゆしゆの幻事げんじは皆自性無みなじしやうなし。而も諸もろくの衆生しゆじやうは種種しゆしゆに執着しゆぢやく
 し取とつて以もつて實じつと爲なせども、悉ことごとく不可得ふかてなりと説ときたまふ。復次またつぎに大慧だいゑ、妄計自性まうけじしやうは緣起自
 性しやうじやくに執着しゆぢやくして起おこる。大慧だいゑ、譬たとへば幻師げんしの幻術げんじゆつの力ちからを以もつて、草木瓦石さうもくわしやくに依より、衆生しゆじやうの若干せうくわんの色
 像ざうを幻作げんさくし、其見者そのみるものをして種種しゆしゆに分別ぶんべつせしむれども、皆眞實無みなじんじつなきが如ごとし。大慧だいゑ、此こゝも亦是またかくの
 如ごとく、境界きやうがいを取着しゆぢやくする習氣じゆけの力ちからに由よるが故ゆゑに、緣起げんじの性しやう中に於おいて、妄計まうけの性種種しやうしゆしゆの相現さうげんする
 こと有り。是これを妄計性まうけしやうの生なまと名なく。大慧だいゑ、是これを法性所流ほふじやうしりゆうの佛ほとけの説法せつぽうの相さうと名なく。大慧だいゑ、法
 性佛しやうぶつは自證智じじやうちの所行しよぎやうを建立こんりふし、心しんの自性じしやうの相さうを離はなる。大慧だいゑ、化佛けふつは施せ、戒かい、忍にん、進じん、禪定ぜんぢやう、智慧ちゑ、
 蘊界處うんがいじよの法ほふ及びお諸もろくの解脫げだつ、諸識しよしきの行相ぎやうさうを説とき、建立こんりふし差別しやべつして外道げだうの見けんを越こえ無色行むしきぎやうを越こえ
 たまふ。復次またつぎに大慧だいゑ、法性佛ほふじやうぶつは攀緣けん縁する所に非あらず、一切いっさいの所緣しよえん一切いっさいの所作しよさく、根量等こんりやうとうの相さうは

【道果】佛道の果
即ち悟りのこと。

是悉く遠離し、凡夫二乘及び外道の執着する我相の取る所の境界に非ず。是故に大慧、
 自證聖智の勝境界の相に於て、當に勤めて修學すべし、自心所理の分別の見相に於て當に
 速かに捨離すべし。復次に大慧、聲聞乘には二種の差別の相有り、謂ゆる自證聖智殊勝の
 相と分別執着自性の相なり。云何が自證聖智殊勝の相なる。謂はく明に苦、空、無常、無我の
 諸諦の境界を見る、離欲寂滅なるが故に。蘊界處の若は自著は其の外の不壞の相に於て、如
 實に了知するが故に、心は一境に住す。一境に住し已つて禪、解脫、三昧、道果を獲て出離を
 得、自證聖智の境界の樂に住すれども、未だ習氣及び不思議の變易の死を離れず。是を聲
 聞乘の自證聖智の境界の相と名く。菩薩摩訶薩も亦此聖智の境界を得と雖も、衆生を憐愍
 するを以ての故に、本願所持なるが故に、寂滅門及び三昧の樂を證せず。諸の菩薩摩訶薩
 は此自證聖智の樂中に於て應に修學すべからず。大慧、云何が分別執着自性の相なる。謂
 ゆる堅濕煖動、清黃赤白是の如き等の法は、作者の生ずるに非ず。然も教理に依りて自共
 相を見、分別し執着す。是を聲聞乘の分別執着の相と名く。菩薩摩訶薩は此法中に於て
 應に、人無我の見を捨離して法無我的相に入り漸く諸地に住すべきことを知るべし。』
 爾時、大慧菩薩摩訶薩佛に白して言さく、『世尊、如來の説きたまふ所の常不思議なる自
 證聖智の第一義の境は、將た諸の外道の説く所の常不思議の作者と、同じきこと無き
 や。佛言はく、『大慧、諸の外道の作者は、常不思議を得るに非ず。所以は何ん。諸の外
 道の常不思議は自相に因つて成ぜず。既に自相に因つて成ぜずんば、何を以てか常不思議

を顯示せん。大悲、外道の説く所の常不思議の、若し自相に因つて成ぜば、彼は則ち常有らん。但作者を以て因相と爲すが故に、常不思議は成ぜざるなり。大悲、我が第一義なる常不思議は、第一義の因相成じて、有無を遠離す、自證聖智の所行の相なるが故に相有り。第一義智を其因となすが故に因有り。有無を離るるが故に作者に非ず。虚空の如く涅槃寂滅の法なるが故に常不思議なり。是故に我は「常不思議は、外道の有らゆる評論と同じからず。」と説く。大悲、此常不思議は、是れ諸の如來自證の聖智、行する所の眞理なり、是故に菩薩は當に勤めて修學すべし。復次に大悲、外道の常不思議は、無常の異相の因なるを以ての故に常なり。自相の因力に非ざるが故に常なり。大悲、外道の常不思議は、所作の法の有り已りて還無きの無常を見るを以て、已ち比して是れ常なりと知る。我も亦所作の法の有り已りて還無きの無常を見て已ち此に因て説いて常となさず。大悲、外道は是の如きの因相を以て常不思議を成ず。此因相は有に非ず、兎角に同じきが故に、常不思議は唯是れ分別にして、但言説有るのみ。何が故に彼因は兎角に同じきか。自因の相無きが故に。大悲、我が常不思議は、自證を以て因相と爲す。外法の有り已りて還無きの無常を以て因となさず。外道は之に反し、曾て常不思議の自因の相を知ること能はずして、恒に自證聖智の所行相の外に有り。此れ應に説くべからず。

復次に大悲、諸の聲聞は、生死妄想の苦を畏れて涅槃を求む。生死涅槃の差別の相は、一切皆是れ妄分別有り、所有無きを知らざるが故に、未來の諸の根境の滅するを妄計して

【三乘】 乘は運載の意にて三種の人各その適する教法に乗じて迷界を脱するが故に三乘と云ふ。即ち聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘の三乘。

【去來現在】 過去未來、現在のこと。【兔馬等の角の如く】 一切諸法を兔馬の角の如く無有の如く考へる事。【二の分別】 有又は無と妄斷する事。

【梵行】 五行の第一にして梵とは清淨の義。清淨なる行のこと。菩薩が空有の染着を離れ清淨慈悲の心を以て衆生に苦を抜き樂を興ふる事。【後有】 未來に受くる果報のこと。

以て涅槃と爲す。自智の境界を證し所依の藏識を轉じて大涅槃と爲すを知らざるなり。彼愚癡の人には三乘有り」と説き、唯心にして境界有ること無しと説かざるなり。大悲、彼の人は去來現在の諸佛の説きたまふ所の自心の境界を知らず、心外の境を取りて、常に生死に於て輪轉して絶えず。復次に大悲、去來現在の諸の如來は、一切の法は不生なりと説きたまふ。何を以ての故に。自心の所見は非有の性なるが故に、有無の生を離るるが故に。兔馬等の角の如く凡愚の妄取なり。唯自證聖智の所行の處は、諸の愚夫の二の分別の境に非ず。大悲、身、及び資生、器世間等の一切は、皆是れ藏識の影像にして、所取能取二種の相の現なり。彼の諸の愚夫は生住滅の二見の中に墮するが故に、中に於て有無の分別を起す。大悲、汝此義に於て當に勤めて修學すべし。

復次に大悲、五種の種性有り。何等をか五と爲す。謂はく、聲聞乘の種性、緣覺乘の種性、如來乘の種性、不定種性、無種性なり。大悲、云何が是れ聲聞乘の種性なることを知る。謂はく、若し蘊界處の自相共相の若は知、若は證を説くを聞き、擧身の毛堅ちて、心に修習せんことを樂ひ、緣起の相に於て觀察するを樂はず。應に知るべし、此は是れ聲聞乘の種性なることを。彼は白らの乘に於て證する所を見已りて、五六地に於て煩惱の結を斷すれども煩惱の習を斷ぜず、不思議の死に住す。正に師子吼して言はく、「我が生已に盡き、梵行已に立ち所作已に辨じて、後行を受けず、人無我を修習し、乃至得涅槃の覺を生ず」と。大悲、復衆生有り、涅槃を證せんことを求めて、能く我、人、衆生、養者、取者を覺知

【預流】梵語、須陀洹(Srotapanna)、預流、入流、逆流と譯す。聲聞四果(小乘證果の四階)預流果、斯陀含果(一來果)阿那含果(不還果)阿羅漢果(無學果)の一。委しく云へば三界の見惑を斷じ初めて聖者の流に入りし位にして修道に入りたる位のこと。

する、此は是れ涅槃なりと言ふ。復説あり、一切の法は作者に因て有りと見る、此は是れ涅槃なりと言ふ。大慧、彼は解脫すること無し。未だ法無我を見ること能はざるを以ての故に。此は是れ聲聞乘及び外道の種性にして、未出の中に於て出離の想を生ずるもの、當に勤めて修習して此惡見を捨つべし。大慧、云何が縁覺乘の種性なることを知る。謂はく、若し縁覺乘の法を説くを聞かば、擧身毛堅ち悲泣流涙し、憤悶の縁を離れて染着する所無し。時ありては種々の身を現じて、或は聚或は散、神通變化を説くを聞き、其心に信受して違逆する所無し。當に知るべし、此は是れ縁覺乘の種性なり。應に其爲に縁覺乘の法を説くべし。大慧、如來乘の種性は所證の法に三種有り。謂ゆる自性無自性の法、内身自證聖智の法、外諸佛刹廣大の法なり。大慧、若し此の一一の法及び自心の現する所の身、財、建立阿頼耶識不思議の境を説くを聞いて、驚かず怖かず畏れざるもの有らば、當に知るべし、此は是れ如來乘の性なり。大慧、不定種性とは、謂はく、彼の三種の法を説くを聞く時、隨つて信解を生じ、順つて修學するなり。大慧、初地を治する人の爲に種性を説き、其をして無影像地に入らしめんと欲して此建立を作す。大慧、彼の三昧の樂に住する聲聞も若し能く自ら所依の識を證知して法無我を見、煩惱の習を淨めば、畢竟じて當に如來の身を得べし。」

爾時、世尊即ち頌を説いて言はく、

預流、一來果、不還、阿羅漢
是等の諸聖人は、其心悉く迷惑す

【一來果】梵語、斯陀含(子含)修業の果として入天を一往來する意。
【不還】欲界の惑に引かれて再び欲界に生ぜざるもの。

【阿羅漢】聲聞の究竟位。無學位に住し世間の供養を受くる聖者の位。

【一乘】一切衆生をして成佛せしむる法のこと。
【三摩提】三摩地と同じ。

我が立る所の三乘、一乘及び非乘は愚夫少智の爲にす。寂を樂ふ諸聖の説の第一義の法門は、二取を遠離し

無境界に住す、何ぞ三乘を建立せん諸禪及び無量も、無色も三摩提も

乃至受想を滅するも、唯心にして不可得なり

復次に大慧、此中一闍提は、何が故に解脫の中に於て欲樂を生ぜざる。大慧、一切の善根を捨つるを以ての故に。無始の衆生の爲に願を起すが故に。何をか一切の善根を捨つと云ふ。謂く、菩薩藏を誘つて、此は契經に隨順する調伏解脫の説に非ずと言ふ。是語を作

す時、善根悉く斷じて涅槃に入らず。何をか無始の衆生の爲に願を起すと云ふ。謂はく、諸の菩薩は本願の方便を以て、一切の衆生の悉く涅槃に入り。若し一衆生の未だ涅槃

せざる者有らば、我終に入らじと願ふ。此も亦一闍提の趣に住するもの、此は是れ涅槃性の相無し。大慧菩薩言さく、世尊、此中何者か、畢竟じて涅槃に入らざる。佛言は

く、大慧、彼の菩薩の一闍提は、一切の法本來涅槃なりと知る。畢竟して入らざれども、善根を捨つるに非ず。何を以ての故に。善根を捨つる一闍提は、佛の威力を以ての故に、

時有りて善根生ず。所以は何ん。佛は一切の衆生に於て捨つる時無きが故に。是故に菩薩の一闍提は涅槃に入らず。

【一乘】一切衆生をして成佛せしむる法のこと。
【三摩提】三摩地と同じ。

【一闍提】前出。
契經(Sutra)の譯。
契は契當の義にし
て上は眞理に契ひ
下は衆生の心に契
ふが故に契と云
ひ、經は義理を貫
き衆生を攝め持つ
が故に經と云ふ。
佛の經典のこと。

復次に大慧、菩薩摩訶薩は當に善く三自性の相を知るべし。何をか三と爲す。謂ゆる妄計自性、緣起自性、圓成自性なり。大慧、妄計自性は相に従つて生ず。云何が相に従つて生ずる。謂はく、彼は緣起事相の種類の顯現に依つて計著を生ずるが故に。大慧、彼の計著の事相には一種の妄計の性有りて生ず。是れ諸の如來の演説したまふ所にして、名相計著の相、事相計著の相と名く。大慧、事計著の相とは、内外の法に計著するを謂ひ、相計著の相とは、即ち彼の内外の法中に自共の相に計著するを謂ふ。是を二種の妄計自性の相と名く。大慧、所依と所緣に従つて起るものはれ緣起の性なり。何をか圓成自性なる。謂はく、名相事相の一切の分別を離るる自證聖智の所行の眞如なり。大慧、此は是れ圓成自性如來藏心なり。爾時、世尊即ち眾を説いて言はく、

名相分別は、二自性の相

正智眞如は、是れ圓成の性なり

大慧、是を五法自性の相を觀察する法門と名く。自證聖智の所行の境界を汝及び諸の菩薩摩訶薩は、當に勤めて修學すべし。復次に大慧、菩薩摩訶薩は、當に善く二無我の相を觀察すべし。何をか二と爲す。謂ゆる人無我の相、法無我の相なり。大慧、何か是人無我の相なる。謂く、蘊界處は我我所を離る。無知愛業の生起する所に眼等の識生じて色等を取つて計著を生ず。又白心の所見なる身器世間は、皆是れ藏心の顯現する所、刹那も相續變壞して停まらざるは、河流の如く種子の如く、燈焰の如く迅風の如く浮雲の如し。

【善慧、法雲】何れも善慧地、法雲の地のこと。菩薩の位。

【阿耨多羅三藐三菩提】アヌッタラサムヤクサンボデー (Anuttarasamyak-sambodhi) 無上正偏知、無上の覺智を云ふ。

躁動して安からざるは猿猴の如く、不淨處を樂ふは飛蠅の如く、厭足を知らざるは猛火の如し。無始の虚偽なる習氣を因となして諸有の趣中に流轉して息まざるは汲水輪の如し。種々の色身の煩惱進止は、譬へば死屍の咒力の故に行くが如く、亦木人の機に因つて、運動するが如し。若し能く此に於いて其相を善知せば、是を人無我の智と名く。大慧、云何をか法無我の智と爲す。謂く、蘊界處は是れ妄計の性なりと知るなり。蘊界處は我我所を離れ、唯共に積聚せる愛業の纏縛、互に縁起を爲す。能作者無きが如く蘊等も亦爾なり、自共の相を離る。虚妄に分別して種種の相、現するは、愚夫の分別にして、諸の聖者に非ず。是の如く一切の諸法を觀察して、心意意識五法自性を離る。是を菩薩摩訶薩の法無我の智と名く。此智を得已りて境界無きことを知り、諸地の相を了じて即ち初地に入り、心に歡喜を生じて次第に漸進し、乃ち善慧及び法雲に至り、諸の有ゆる所作悉く已に辦ず。是地に住し已れば、大寶蓮花王の衆寶もて莊嚴せる有り。其花の上に寶宮殿有りて、狀蓮花の如し。菩薩往きて、女性の法門の成就する所を修し其上に坐すれば、同行の佛子前後を圍繞し、一切の佛刹の有ゆる如來は、皆其手を翳べて、轉輪王子の灌頂の法の如く、其頂に灌ぎ、佛子地を超えて自證の法を獲、如來の自在なる法身を成就す。大慧、是を法無我の相を見ると名く。汝及び諸の菩薩摩訶薩は應に勤めて修學すべし。

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、世尊、願くば建立と誹謗の相を説き、我及び諸の菩薩摩訶薩をして、此惡見を離れ、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得しめ、菩提

を得りて建立の常と誹謗の斷見とを破り、正法に於て毀謗を生ぜざらしめたまへ。佛其請を受けて即ち頌を説きて言はく、

身、資財所住は、皆唯心の影像のみ

凡愚は了る能はずして、建立と誹謗とを起す

所起も但是れ心、心を離れては不可得なり

爾時、世尊重ねて此義を説かんと欲して、大慧に告げて言はく、「無有の有の建立に四種有り。何をか四と爲す。謂ゆる無有の相建立の相、無有の見建立の見、無有の因建立の因、無有の性建立の性、是を四となす。大慧、誹謗とは、謂はく、諸の惡見に於て建立する所の法は求むれども得べからず、善く觀察せずして遂に誹謗を生ず。此は是れ建立と誹謗との相なり、大慧、何をか無有の相建立の相と云ふ。謂はく、蘊界處に於て自相と共相とは本より所有無し、而も計著を生じ、此は是の如く、此は不異なりと。而して此分別は無始より種種の惡習の生ずる所なり。是を無有相建立の相と名く。何をか無有見建立の見と云ふ。謂はく、蘊界處に於て、我、人、衆生等の見を建立す。是を無有見建立の見と名く。何をか無有因建立の因と云ふ。謂はく、初識は前に因無ければ生ぜず、其初識は本無なり、後に眼色明念等因を爲して幻の如く生じ、生じ已つて有、有にして還た滅す、是を無有因建立の因と名く。何をか無有性建立の性と云ふ。謂はく、虚空、涅槃、非數滅の無作の性に於て執著し建立す。大慧、此は性非性を離る。一切の諸法は有無を離ること猶し毛輪毘馬等の

【無有】 非有と同

【初識】 外道二乘は六識三毒を以て諸法の因なりとす故に妄念の眞に違するを初識とす。
【非數滅】 非擇滅アブラチサムキヤ
【一ニロダー】 (Ara) Banhhyāirocha
本來法がその生ずべき緣缺けて再び生ずるを得ざるに至りしもの。

【摩尼】梵音マニ
(Mani) 無垢、離垢、如意珠と譯す。

【辟支佛】前出。

【那由他】梵音ナユタ(Nayuta) 百阿由多を一那由他とす。萬億、千億、數千萬と云ふ。

角の如し。是を無有性建立の性と名く。大慧、建立も評謗も皆是れ凡愚の唯心を了ぜざる、分別より生じ、諸の聖者に非ず。是故に汝等當に勤めて觀察して、此見を遠離すべし。大慧、菩薩摩訶薩は、善く心意意識五法自性二無我の相を知り已りて、衆生の爲の故に種種身を作すこと、緣起に依りて妄計の性を起すが如く、亦摩尼の心に隨つて色を現するが如く、普く佛會に入りて、佛の、諸法は幻の如く夢の如く影の如く鏡中の像の如く水中の月の如く、生滅及び斷常を遠離し、聲聞辟支佛の道に住せずと説きたまふを聽聞し、聞き已りて無量百千億那由他の三昧を成就し、此三昧を得已りて、遍く一切諸佛の國土に遊び、諸佛を供養して諸の天上に生れ、三寶を顯揚して佛身を示現し、諸の聲聞、菩薩の大衆の爲に、外の境界は唯是れ心なることを説き、悉く有無等の執を遠離せしむ。」

爾時、世尊即ち頌を説いて言はく、
佛子は能く觀見す。世間は唯是れ心なるを種種の身を示現し、所作に障礙無く神通力自在にして、一切皆成就す

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に請うて言はく、「願くば我が爲に、一切の法の空と無生と無二と無自性の相とを説きたまへ。我及び諸の菩薩は此相を悟るが故に、有無の分別を離れ、疾に阿耨多羅三藐三菩提を得ん。佛言く、「諦かに聽け當に汝が爲に説くべし。大慧、空は即ち是れ妄計性の句義なり。大慧、妄計の自性に執着する爲の故に、空、無生、

【密意】方便の意
顯了眞實の教に對
して密意方便の教
と云ふが如し。

無二、無自性と説く。大慧、略空性を説くに七種有り。謂く、相空、自性空、無行空、行空、一切法不可説空、第一義聖智大空彼彼空なり。何をか相空と云ふ。謂はく、一切の法は自相共相空なり。展轉積聚して互に相待つが故に。分析推求すれども所有無きが故に。自他及び共共不生なるが故に。自共の相無生亦無住なり。是故に一切の法を、自相空と名く。何をか自性空と云ふ。謂はく、一切法の自性は不生なり、是を自性空と名く。何をか無行空と云ふ。謂ゆる諸蘊は本來涅槃にして諸行有ること無し、是を無行空と名く。何をか行空と云ふ。謂ゆる諸蘊は業及び因の和合に由りて起り、我我所を離る、是を行空と名く。何をか一切法不可説空と云ふ。謂はく一切法の妄計の自性は言説すべき無し、是を不可説空と名く。何をか第一義聖智大空と云ふ。謂はく自證聖智を得る時、一切諸見の過習を悉く離る、是を第一義聖智大空と名く。何をか彼彼空と云ふ。謂はく、此に於て彼無し、是を彼彼空と名く。譬へば鹿子の母堂に象馬牛羊等無きが如し。我彼の堂の空なるを説けども、比丘衆無きに非ず。大慧、堂に堂の自性無しと謂ふに非ず、比丘に丘比の自性無しと謂ふにも得べからず。是故に説いて彼彼空と名く。是を七種の空と名く。大慧、此彼彼空は空の中に最も麁なり、汝應に遠離すべし。

復次に大慧、無生とは自體不生にして而も不生に非ず、三昧に住するを除く、是を無生と名く。大慧、無自性とは無生を以ての故に密意にして説く。大慧、一切の法は自性無し、

【光影の如く】以下一切法を説明するに譬喩を以てす。

【二】有無、生滅を云ふ。

【修多羅】梵音スートラ(Sūtra)の經、法本と譯す。凡て聖教の稱。

稱那も住せざるを以ての故に。後變異を見るが故に、是を無自性と名く。何をか無二相と云ふ。大慧、光影の如く、長短の如く、黑白の如く、皆相待立し、獨なれば則ち成ぜず。大慧、生死の外に涅槃有るに非ず。涅槃の外に生死有るに非ず、生死と涅槃とは相違の相無し。生死と涅槃との如く、一法の法も亦是の如し。是を無二の相と名く。大慧、空と無生と無二と無自性との相を汝當に勤めて學すべし。』

爾時、世尊重ねて頌を説いて言はく、

我常に空法を説いて、斷常を遠離す

生死は幻夢の如し、而も業も亦壞せず

虚空及び涅槃、滅の二も亦是の如し

愚夫は妄に分別し、諸理は有無を離る

爾時、世尊、復大慧菩薩摩訶薩に告げて言はく、『大慧、此空と無生と無自性と無二相とは、悉く一切諸佛の説きたまふ所の修多羅の中に入る。佛の説きたまふ所の經には、皆是

義有り。大慧、諸の修多羅は、一切衆生の心に隨順して説きたまふ。而も眞實は言の中に

非ず。譬ば陽焰の諸獸を誑惑して水想を生ぜしむれども、而も實には水無きが如く、衆經

の所説も亦復是の如し。諸の愚夫の自ら分別する所に隨て歡喜を生ぜしむれども、皆聖

智の證する處の眞實の法を顯示せず。大慧、應に義に隨順して言説に著すること莫るべ

し。爾時、大慧菩薩摩訶薩、仰に白して言さく、『世尊、修多羅の中に、如來藏は本性清

し。爾時、大慧菩薩摩訶薩、仰に白して言さく、『世尊、修多羅の中に、如來藏は本性清

【三解脱】俱心解脱
 慧解脱と云ふ。心解脱
 慧解脱とは心が貪愛
 を離るるを云ひ、無
 明を離れたるを云
 ひ、俱解脱とは慧
 解脱を實現せる者
 が滅空の障礙により
 て無知を解脱する
 を云ふ。

淨なり、常恒にして斷ぜず變易有ること無く、三十二相を具し、一切衆生の身中に在りて、
 蘊界處の垢衣の纏ふ所、貪患癡等の妄分別垢の染汚する所と爲ること、無價の寶の垢衣の
 中に在が如しと説けり。外道は、我は是れ常作者にして、求那を離れ、自在にして滅無し
 と説けり。世尊の説きたまふ所の如來藏の義は、豈に外道の我と同じからずや。佛言は
 く、「大慧、我が如來藏を説くは、外道の説く所の我と同じからず。大慧、如來應正等覺の、
 性空、實際、涅槃、不生、無相、無願等の諸句の義を以て如來藏を説けるは、愚夫をして無
 しの怖を離れしめ、無分別無影像の處如來藏の門なりと説かんが爲なり。未來現在の諸の
 菩薩摩訶薩は此に於て我に執著すべからず。大慧、譬へば陶師の泥聚中に於て、人功、水、
 杖、輪、繩の方便を以て、種種の器を作るが如し。如來も亦爾なり、一切の分別の相を、
 遠離する無我の法中に於て、種種の智慧と方便の善巧とを以て、或は如來藏と説き、或は
 説きて無我と爲し、種種の名字各差別有り。大慧、我が如來藏を説くは、我に著する諸
 の外道衆を攝して、妄見を離れ、三解脱に入り、速に阿耨多羅三藐三菩提を證することを
 得しめんが爲なり。是故に諸佛の如來藏を説きたまふは外道の説く所の我に同じからず。
 若し外道の見を離れんと欲せば、應に無我、如來藏の義を知るべし。」

爾時、世尊即ち頌を説きて曰はく、
 士夫、相續の蘊、衆緣及び微塵
 勝自在、作者は、此れ但心の分別なり

【無生法忍】不生不滅の眞如法性を忍知して決定安住する位のこと。

爾時、大慧菩薩、普く未來の一切衆生を觀じて、復佛に請うて言さく、「願くば、我が爲に具さに、修行法を説きたまへ。諸の菩薩摩訶薩の如く、大修行を成ぜん。」佛言はく、「『大慧、菩薩摩訶薩は四種の法を具して大修行を成ず。何をか四と爲す。謂はく、自心の所現を觀察するが故に、生住滅の見を遠離するが故に、善く外法の無性なるを知るが故に、専ら自證の聖智を求むるが故に若し、諸の菩薩にして此四法を成せば則ち名けて大修行者と爲すことを得ん。大慧、何をか自心の所現を觀察すと云ふ。謂はく、三界は唯是れ自心と觀じ我我所を離れ、動作無く來去無し。無始の執著の過習の熏ずる所なり。三界の種種の色行名言、繫縛、身資所住は分別隨入の顯現する所なり。菩薩摩訶薩は是の如く自心の所現を觀察す。大慧、云何が生住滅の見を離るることを得る。謂ゆる一切の法は幻夢の如くにして生ずと觀ず。自他及び俱皆不生なるが故に、自心量の現する所に隨ふが故に。外物の有る無きを見るが故に。諸識の起らざるを見るが故に。衆縁の積る無きが故に。分別の因縁の、三界を起すが故に。是の如く觀する時、若は内、若は外の一切の諸法は、皆不可得にして、體實無しと知り、生見を遠離し、如女の性を證して即時に無生法忍を逮得し、第八地に住して、心意、意識、五法、自性二無我の境を了り、依止する所を轉じて意生身を獲ん。』大慧言さく、『世尊、何の因縁を以てか意生身と名くる。』佛言はく、『大慧、意生身とは、譬へば意の去るに速疾無礙なるが如きを意生身と名く。大慧、譬へば心意の無量百千山旬の外に於て、先に見る所の種種の諸物を憶ひ、念念相續して疾に彼に詣るに、是

れ其身及び山河石壁も能く礙を爲す所に非ざるが如く、意生身も亦復是の如し。如幻三昧と力通自在と諸相莊嚴とをもて衆生を成就せんとの本願を憶ふが故に、猶し意の去つて一切の諸聖衆の中に生ずるが如し。是を菩薩摩訶薩、生住滅の見を遠離することを得と名く。大慧、云何が外法の無性を觀察せん。謂はく、一切の法は陽焰の如く夢境の如く毛輪の如しと觀察す。無始の戲論、種種の執著、虚妄の悪習を其因と爲すが故に。是の如く一切の法を觀察する時、即ち是れ専ら自證の聖智を求む。大慧、是を菩薩の四種の法を具して大修行を成ずと名く。汝應に是の如く勤めて修學を加ふべし。

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に請うて言さく、願くば一切法の因縁の相を説き、我及び諸の菩薩摩訶薩をして其義を了達し有無の見を離れ、諸法の漸生頓生を安執せざらしめたまへ。佛言はく、大慧、一切の法の、因縁より生ずるに二種有り。謂はく、内及び外なり。外とは泥團水杖輪繩人功等の縁の和合を以て瓶を成ずるを謂ふ。泥瓶の如く、糞は疊、草は席、種は芽、酪は酥、悉く亦是の如し。外縁の前後轉生と名く。内とは、無名業等々の蘊界處を生ずるの法を謂ふ、是を内縁起と爲す、此れ但愚夫の分別する所なり。大慧、因に六種有り。謂はく、當行因、相屬因、相因、能作因、顯了因、觀行因なり。大慧、當行因とは、内外の法を因と作して果を生ずるを謂ひ、相屬因とは、内外の法を縁と作して蘊種子等の果を生ずるを謂ふ。相因とは無間の相と作りて相續の果を生ずるを謂ひ、能作因とは、増上と作りて果を生ずること、轉輪王の如きを謂ふ。顯了因とは、分別

【所緣緣】四緣の
一。所緣とは客觀
のこと。この客觀
が心識の生ずる緣
となることを云
ふ。

【無間緣】前の心
心所が後の心所
の生ずるために原
因となるを云ふ。

【増上緣】色心萬
法に通じ一法の結
果に對して總て皆
増上の用あるを云
ふ。

生じて能く境相を顯はすこと、燈の物を照すが如きを謂ひ、觀待因とは、滅する時相續を
斷じて妄想の生ずる無きを謂ふ。大慧、此は是れ愚夫の自ら分別する所にして、漸次の生
にも非ず、亦頓生にも非ず。何を以ての故に。大慧、若し頓生ならば、則ち作と所作と差
別有ること無く、其因相を求むるに不可得なるが故に。若し漸生ならば、其體相を求むる
も亦不可得なり。未だ子を生まざるものを、云何が父と名けん。諸の計度の人は言はく、
「因緣、所緣緣、無間緣、増上緣等を以て、所生と能生とは互に相繫屬す」と。次緣生は
理成ずることを得ず、皆是れ妄情執著の相なるが故に。大慧、漸次と頓とは皆悉く不
生なり。但心有りて身資等を現するが故に。外の自共相、皆無性なるが故に。惟識の自ら
分別する見を除く。大慧、是故に應に因緣所作和合の相中は漸頓生の見を離るべし。」

爾時、世尊、重ねて頌を説きて言はく、

一切の法は生も無く、亦復滅有ることも無し

彼の諸緣の中に於て、生滅の相を分別す

諸緣の會して是の如くにして、滅し復生するを遮するに非ず

但凡愚妄情の、所善を止むるのみ

緣中の法の有無は、是れ悉く生有ること無し

習氣は心を迷轉して、是より三有現す

本來生有ること無く、亦復滅有ることも無し

一切の有爲を觀するに、譬へば虚空の花の如し
能取と所取と、一切迷惑の見を離るれば
能生も所生も無く、亦復因縁も無く
但世俗に隨ふが故に、生滅有りと説くのみ

大乘入楞伽經 卷第三

大周于闐國三藏法師實叉難陀勅を奉じて譯す

集一切法品第二之三

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、願くば我が爲に、言說分別の相の心の法門を説きたまへ。我及び諸の菩薩摩訶薩、善く此を知るが故に、能説所説の二義に通達し、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切の衆生をして二義の中に於て清淨を得しめん。」佛言はく、「大慧、四種の言說分別の相有り。謂ゆる相言說、夢言說、計著過惡言說、無始妄想言說なり。大慧、相言說は、謂ゆる自ら分別する色相に執著して生ず。夢言說は謂はく、先に經る所の境界を夢み、覺め已つて憶念するに不實の境より生ず。計著過惡言說は謂はく、怨離の先に作す所の業を憶念して生ず、無始妄想言說は無始の戲論妄執の習氣を以て生ず。是を四と爲す。」大慧復言さく、「世尊、願くば更に、爲に言說分別所行の相を説きたまへ。何れの處に何の因により、云何にしてか起る。佛言はく、「大慧、頭胸喉鼻唇齶齒舌の和合に依りて起る。」大慧復言さく、「世尊、言語、分別は、異と爲さんや、不異と爲さんや。」佛言はく、「大慧、異に非ず不異に非ず。何を以ての故に。分

【言語分別】第一義を顯はすを得ざるを云ふ。

【空空の義】第一義空のこと。第一義とは十八空の第一。第一義とは涅槃のこと。涅槃は凡有の情を離れたるが故に亦空と名く。
【無性】無自性のこと。
【諸有】三界六道に存在する一切の現象のこと。

別を因と爲して言語を起すが故に。若し異ならば、分別は應に因を爲すべからず。若し不異ならば、言語は應に義を顯はすべからず。是故に異に非ず、亦不異に非ず。『大悲復言さく』世尊、言語を是れ第一義と爲さんや、所説を是れ第一義と爲さんや。『佛、大悲に告げたまはく』言語にも非ず、是亦た所説にも非ず。何を以ての故に。第一義は是れ聖樂の處、言に因つて入れども即ち是れ言に非ず。第一義は是れ聖智の内に自ら證する境、言語分別の智の境に非ず。言語分別は顯示すること能はず。大悲、言語は起滅動搖展轉の因縁より生ず。若し展轉の縁より生ぜば、第一義に於て顯示すること能はず。第一義は自他の相無し、言語には相有り、顯示すること能はず。第一義は但唯自心なり、種種の外想は悉く皆有ること無し。言語分別は顯示すること能はず。是故に大悲、應に言語分別を遠離すべし。』

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

諸法、自性無く亦復言説も無し

空空の義を見ず、愚夫の故に流轉す

一切の法は無性にして、語言分別を離る

諸有は夢化の如し、生死涅槃に非ず

王及び長者の、諸子をして喜ばしめんが爲に

先づ相似の物を示して、後に眞實のものを賜ふが如く

我も今亦復然り、先づ相似の法を説いて

後に乃ち其が爲に、自證實際の法を演ぶ

【無功用】意者の謂を加へず自然に任すこと。

【如意寶】如意寶珠のこと。梵名眞多摩尼 (Chintamani) 意のままに種種の珍寶を出すが故に如意寶珠又は如意珠と云ふ。

【三毒】三煩惱のこと。貪、瞋、痴赤の稱。

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、願くば我が爲に、一異、俱不俱、有無、非有無、常無常等を離れ、一切の外道の行ずる能はざる所、自證聖智の所行の境界、妄計の自相共相を遠離し、眞實第一義の境に入り、漸く諸地を淨めて如來の位に入り、無功用の本願力を以ての故に、如意寶の如く、普く一切無邊の境界を現じ、一切の諸法は皆是自心所見の差別なることを説き、我及び餘の諸の菩薩等をして、是の如き等の法に於て、妄計自性の自共相の見を離れ、速かに阿耨多羅三藐三菩提を證せしめ、普く衆生をして一切の功德を具足し圓滿せしめたまへ。佛言はく、「大慧、善い哉善い哉、汝は世間を哀愍して我に此義を請ふ。利益する所多く、安樂ならしむる所多し。大慧、凡夫は無智にして心量を知らず、妄習を因と爲して外物に執著し、一異、俱不俱、有無、非有無、常無常等、一切の自性を分別す。大慧、譬へば群獸の渴に逼られ、熱時の焰に於て水想を生じ、迷惑馳趣して水に非ざるを知らざるが如し。愚癡の凡夫も亦復是の如く、無始の戲論分別の熏ずる所、三毒もて心を燒きて色の境界を樂み、生住滅を見て内外の法を取り、一異等の執著の中に墮す。大慧、乾闥婆城は城に非ず、城に非ざるにも非ざるに、無智の人は無始の時より來、城種に執著し、妄習の熏の故に前も城想を作すが如し。外道も亦爾なり、無始來の妄習の熏を以ての故に、自心の所現を了達すること能はずして、一異等の種種の言説に著す。大慧、譬へば人有り、夢に男女象馬車步城邑園林種種の嚴飾を見、覺め已り

て彼實事に非ざることを、憶念するが如し。大慧、汝が意云何。是の如きの人には是れ點慧
 なりや不や。答へて言さく、『不』大慧、外道も亦爾なり。惡見に噬れて唯心を了ぜず、
 一異有無等の見に執著す。大慧、譬へば畫像の高無く下無きに、愚夫は妄見して高下の想
 を作すが如く、未來の外道も亦復たの如し。惡見熏習し妄心增長して一異等に執し、自ら
 壞り他を壞り、有無を離れたる無生の論に於て、亦説いて無と爲し、此に因果を誇り善根
 の本を抜く。應に知るべし、此人有無を分別して自他の見を起し、當に地獄に墮すべきな
 り。勝法を求めんと欲せば、宜しく速かに遠離すべし。大慧、譬へば鬚口の毛輪有るを見
 て互に相謂つて此事は希有なりと言ふが如し。而も此毛輪は有に非ず。無に非ず。見不見
 の故に。外道も亦爾なり、惡見分別して、一異、俱不俱等に執著し、正法を誹謗して自ら
 陥り他を陥らしむ。大慧、譬へば火輪は實に是れ輪に非ざるが如し。愚夫は取著すれども
 諸の智者は然らず。外道も亦爾なり、惡見樂欲して一異、俱不俱等に執著し一切の法生
 ず。大慧、譬へば水泡の玻璃珠に似たるが如し。愚夫は實なりと執し、奔馳して取る。然
 るに彼の水泡は珠に非ず珠に非ざるにも非ず。取不取なるが故に。外道も亦爾なり、惡見
 分別の習氣に熏ぜられて、非有を説いて生と爲し緣有を壞す。
 復次に大慧、三種の量を立て已りて、聖智の内證に於て二の自性の法を離れ、有性の分
 別を起す。大慧、諸の修行者は、心意識を轉じて能所取を離れ、如來地に住して自ら聖法
 を證し、有及び無に於て想を起さず。大慧、諸の修行者は、若し境界に於て有無の執を起

【三種の量】現量、比量、聖教量の三。現量とは五感官、第六意識の推量を用せず誤りなく對象を認識すること。比量とは推理歸納すること。第三聖教量とは自己の信奉する經典教義を權威とすること。

【有性】無性の對。

【毘舍闍】梵音、(Pisaca) 鬼の名稱。

さば、則ち我人衆生壽者に著す。大慧、一切諸法の自相共相は、是れ化佛の説にして、法佛の説に非ず。大慧、化佛の説法は、但愚夫の起す所の見に順ひ、爲に自證聖智の三昧の樂境を顯示せず。大慧、譬へば水中に樹影有りて現するが如し。彼影に非ず、影に非ざるにも非ず、樹形に非ず、樹形に非ざるにも非ず。外道も亦爾なり、諸見に重ぜられて自心を了ぜず、一異等に於て分別を生ず。大慧、譬へば明鏡の分別行ること無く、衆縁に隨順して、諸の色像を現するが如し。彼像に非ず、像に非ざるにも非ず、而も像、非像と見、愚夫は分別して像像を作す。外道も亦爾なり、自心所現の種種の形像に於て、一異俱不俱の相を執す。大慧、譬へば谷響は風水人等の音聲の和合に依りて起るが如し。彼有に非ず、無に非ず。聲、非聲と聞くを以ての故に。外道も亦爾なり、自心の分別重習の力の故に、一異、俱不俱の見を起す。大慧、譬へば大地の草木無き處に日光の照照すれば、焰は水波の動くが如し。波有に非ず無に非ず、倒想非想を以ての故に。愚癡の凡夫も亦復是の如し、無始の戲論惡習に熏ぜられて、聖智自證の法性の門中に於て、生、住、滅、一異、有無、俱不俱の性を見る。大慧、譬へば木人及び屍を起すに、毘舍闍の機關力を以ての故に動搖運轉云爲して絶えず、無智の人は取りて以て實と爲すが如し。愚癡の凡夫も亦復是の如し、外道に隨逐して、諸の惡見を起し、一異等の虛妄の言説に著す。是故に大慧、當に聖智所證の法中に於て、生、住、滅、一異、有無、俱不俱等の一切の分別を離るべし。』

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

【三有】欲界、色界、無色界のこと

【三の相續】一、衆生相續、二、業相續の三種。【所知】所知障のこと。即ち一切萬有の體が空假なるを知らざる障のこと。

諸識蘊に五有り、猶ほ水の樹影の如く

所見は幻夢の如し、應に妄りに分別すべからず

三有は陽焰、幻夢及び毛輪の如し

若し能く是の如く觀せば、究竟して解脫を得ん

譬へば熱時の焰の、動轉して心を迷亂せしめ

渴獸の取りて水と爲せども、而も實には水事無きが如し

是の如く識の種子も、動轉して境界を見る

騎者の所見の如く、愚夫は執著を生ず

無始の生死の中に、執著して纏覆せらる

退捨するも出離せしむること、梶に因つて梶を出し

幻呪、機の所作、浮雲、夢、電光の如く

世を觀すること恒に是の如し、永く三の相續を斷ず

此中に所有無きこと、空中の陽焰の如し

是の如く諸法を知るをば、則ち無所知と爲す

諸蘊は毛輪の如く、中に於て妄に分別して

唯假りに名を施設するのみ、相を求むるに不可得なり
畫ける垂髮、幻、夢、乾闥婆城

火輪の熱時の焰の如く、實には無なるを有と見るなり

是の如く常無常と、一異と俱不俱とは

無始の繫縛の故に愚夫妄に分別するなり

明鏡も水も淨眼も、摩尼妙寶珠も

中に色像を現すれども、而も實には所有無し

心識も亦是の如く、普く衆色の相を現すれども

夢、空中の焰の如く、亦石女の兒の如し

復次に大慧、諸佛の説法は四句を離る、謂ゆる一異、俱不俱、及び有無等の建立誹謗を

離るるなり。大慧、諸佛の説法は、諦、緣起を以て、滅道、解脱するを其首と爲す。勝性

と自在と宿作と自然と時と微塵等と與に相應するものに非ず。大慧、諸佛の説法は、惑と

智と二種の障を淨めんが爲の故に、次第に一百八句の無相の法中に住せしめて、善く諸乘

諸地の相を分別すること、猶し商主の善く衆人を導くが如し。

復次に大慧、四種の禪有り。何等をか四と爲す。謂はく、愚夫所行の禪、觀察義の禪、攀

緣眞如の禪、諸の如來の禪なり。大慧、何をか愚夫所行の禪と云ふ。謂はく聲聞、緣覺、諸

の修行者は、人無我を知り、自他の身は骨鎖相連なり皆是無常苦不淨の相なりと見る。是

の如く觀察し堅著して捨てず、漸次に増勝して無想滅定に至る。是を愚夫所行の禪と名く。何をか觀察義禪と云ふ。謂はく自共相、人無我を知り已りて、亦外道の自他俱作を離れ、法

【諦】 眞諦のこと。

【滅道】 滅諦と道諦のこと滅は悟の果て道は悟の因である。

【勝性】 自在、微塵性と自在、微塵學が萬有の根本とす。

【商主】 印度隊商の案内役を兼ねたる商人のこと。

【無想定】色界第四禪天中の無想定に生るべき因となる定のこと。心所を凡て滅するが故に無想定と云ふ。

【波頭摩】鉢曇摩鉢持摩とも云ふ。梵音パドマ(Padmā)紅蓮華と譯す蓮華の一種。【虚空】聲聞乘の人の求むるもの。【火等】緣覺乘の人の求むるもの。

無我の諸地相の義に於て隨順觀察す、是を觀察義禪と名く。何をか攀緣眞如禪と云ふ。謂はく、若し無我に二有りと分別すれば是虚妄の念なり、若し如實に知れば彼念起らず、是を攀緣眞如禪と名く。何をか諸の如來禪と云ふ。謂はく佛地に入りて自證聖智の三種の樂に住し、諸の衆生の爲に不思議の事を作す、是を諸の如來禪と名く。』

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

愚夫所行の禪と、觀察義相の禪と

攀緣眞如の禪と、如來清淨の禪とあり

修行者定に在りて、日月の形

波頭摩の深險、虚空、火及び畫

是の如きの種種の相を、觀見し外道の法に墮ち

亦聲聞辟支佛の、境界に墮つ

此一切を捨離して、無所緣に住せば

是れ則ち能く如如、眞實の相に隨入し

十方の諸の國土の、有ゆる無量の佛は

悉く光明の手を引いて、是人の頂を摩でん

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、『世尊、諸佛如來所説の涅槃は、何等の法

を説きてか名けて涅槃と爲す。』佛、大慧に告げたまはく、『一切の識の自性の習氣と、及び

藏識と意と意識との見習を轉じ已るを、我及び諸佛は、説いて涅槃と名く。即ち是れ諸法の性空の境界なり。復次に大慧、涅槃は自證聖智の所行の境界にして、斷常及び有無を遠離す。何をか常に非すと云ふ、謂はく、自共相の諸の分別を離るるが故に。何をか斷に非すと云ふ。謂はく、去來現在の一切の聖者の自證智の所行なるが故に。復次に大慧、大般涅槃は不壞不死なり。若し死なれば應に更に生を受くべく、若し壞なれば應に是れ有爲なるべし。是故に涅槃は不壞不死にして、諸の修行者の歸趣する所なり。復次に大慧、捨無く得無きが故に、斷に非す常に非ざるが故に、一に非す、異に非ざるが故に、説いて涅槃と名く。

【加持】加は加被、持は攝持の義。佛の大慈が衆生に加持はり、衆生の信心が佛心に感じて互に道交すること。

復次に大慧、聲聞緣覺は、自共相を知りて、憤闘を捨離し、顛倒を生ぜず、分別を起さず、彼は其中に於て、涅槃の想を生ず。復次に大慧、二種の自性の相有り、何をか二と爲す。謂はく、言説の自性に執著するの相と、諸法の自性に執著するの相となり。言説の自性に執著するの相は、無始の戲論の言説に執著する習氣の故に起る。諸法の自性に執著するの相は、自心の所現なりと覺らざるが故に起る。復次に大慧、諸佛に二種の加持有り、諸の菩薩を持して佛足を頂禮し、衆義を請問せしむ。云何が二と爲す。謂はく、三昧に入らしむると、及び身を其前に現じて手を其頂に灌ぐとなり。大慧、初地の菩薩摩訶薩は、諸佛の持力を蒙るが故に、菩薩大乘の光明定に入る。入り已りて十方の諸佛、普く其前に現じて、身語加持したまふ。金剛藏、及び餘の是の如きの功德の相を成就せる菩薩

【瞻蔔の花】瞻波
(センバ)梵音チャ
ンバカ(Campê)
黄華と譯す。一種
の花。樹形高大に
して海岸にあり。

【現通説法】通力
を現はし法を説く
こと。

摩訶薩の如き者是れなり。大慧、此菩薩摩訶薩は佛の持力を蒙りて三昧に入り已り、百千劫に於て諸の善根を集め、漸く初地に入りて善く能く治所治の相に通達し、法雲地に至りて、大蓮花の微妙の宮殿に處し、寶座に坐して同類の菩薩に圍繞せられ、首に寶冠を戴き、身は黄金の如く、瞻蔔の花の色は、盛んなる満月の如く大光明を放つ。十方の諸佛、蓮花の手を舒べて、其座上に於て其頂に灌ぎたまふことは、轉輪王の太子の灌頂を受け已りて自在を得るが如く、此諸の菩薩も亦是の如し。是を名けて二と爲す。諸の菩薩摩訶薩は二種の持する所と爲るが故に、即ち能く觀ら一切の諸佛を見たてまつるなり。異なれば則ち能はず。

復次に大慧、諸の菩薩摩訶薩は、三昧に入りて、現通説法す。是の如きは、一切皆諸佛の、一種の持力に由る。大慧、若し諸の菩薩にして、佛の加持を離れて、能く説法せば、則ち諸の凡夫も、亦應に能く説くべし。大慧、山林草樹城廓宮殿、及び諸の樂器すら、如來の至りたまふ處は、佛の持力を以て、尙ほ法音を演ぶ、況んや有心の者をや。聳首痛癢も、苦を離れて解脱せん。大慧、如來の持力は、是の如き等の、廣大なる作用有り。

大慧菩薩復佛に白して言さく、何が故に如來は其持力を以て、諸の菩薩をして三昧及び殊勝の地中に入り、手づから其頂に灌がしめたまふや。佛言はく、大慧、其魔業と諸の煩惱を遠離せしめんと欲するが爲の故に。聲聞地に墮せざらしめんが爲の故に。速に

如來地に入らしめんが爲の故に。所得の法をして倍増長せしめんが故に。是故に諸佛は加持力を以て諸の菩薩を持したまふ。大慧、若し是の如くならずんば、彼菩薩は便ち外道及び聲聞の魔境の中に墮して、則ち無上菩提を得ること能はざらん。是故に如來は加持力を以て諸の菩薩を攝したまふ。

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

世尊の清淨の願は、大加持力有り

初地十地の中、三昧及び灌頂

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、佛は縁起を説きたまふ。是れ作に由りて起り、白體より起るに非ず。外道も亦勝性、自在、時、我、微塵は諸法を生ずと説く。今佛世尊は、但異名を以て、縁起を作すと説きたまへども、義は別有るに非ず。世尊、外道も亦作者を以ての故に、無より有を生ずと説き、世尊も亦因縁を以ての故に、一切の諸法は本無にして而も生じ、生じ已りて滅に歸すと説きたまふ。佛の所説の如くんば、無明は行乃至老死を縁ず。此れ無因と説き有因と説くに非ず。世尊の説は、此れ有るが故に彼有りと云ふ。若し一時の建立にして、次第相待に非ずんば其義成ぜず。是故に外道の説は勝りて如來は非なり。何を以ての故に。外道は因を説き縁より生ぜず、而も所生有り。世尊の説きたまふ所は、果は因を待ち、因は復因を待つ、是の如く展轉して成ぜば、窮り無きの過なり。又此有るが故に彼有らば、則ち因有ること無し。」佛言はく、「大慧、

我は諸法は唯心の所現にして能取無く所取無きことを了す。此有るが故に彼有りと言けども、是れ無因及び因縁の過失に非ざるなり。大慧、若し諸法は唯心の所現なることを了せんば、能取及び所取有りと計し、外境は若は有、若は無なりと執著せん。彼には是過有れども、我が所説には非ず。」

大慧菩薩復佛に白して言さく、「世尊、言説有り、故に必らず諸法有り、若し諸法無くんば、言は何に依てか起る。佛言はく、「大慧、諸法無しと雖も亦言説有り。豈に現に龜毛兎角石女の兒等を見ずと雖も、世人は中に於て皆言説を起すにあらすや。大慧、彼は有に非ず、非有に非ず、而も言説有るのみ。大慧、汝が所説の如く、言説有り、故に諸法有らば、此論は則ち壞る。大慧、一切の佛土は皆言説有るに非ず、言説は假の安立のみ。大慧、或は佛土有り、瞻視法を顯はし、或は異相を現はし、或は復眉を揚げ、或は日睛を動し、或は微笑、嘔呻、聲歎、憶念、動搖を示し、是の如きを以て法を顯はす。大慧、不歸世界妙香世界及び普賢如來の佛土の中の如きは、但瞻視して瞬せず、諸の菩薩をして無生法忍及び諸勝三昧を獲しむ。大慧、言説に由つて諸法有るに非ず、此世界の中には蠅蟻等の蟲は言説なしと雖も白の事を成ずるが故に。」

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、
虚空の兎角と、及び石女の兒の如きは
無にして言説有り、妄計の法は是の如し

【常聲】佛陀眞常の法のこと。
【妄法に依て】妄法によつて眞常の法を説く所以。

【佛乘】一乘に同じ。衆生を乗せて佛果に至らしむる教のこと。

因縁和合の中に、愚夫は妄に生と謂ふ如實に解する能はずして、三有に流轉す

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊の説きたまふ所の常聲は何の處に依りてか説きたまふ。佛言はく、「大慧、妄法に依りて説く。諸の妄法は、聖人も亦現れども、然も顛倒に非ざるを以てなり。大慧、譬へば陽焰、火輪、垂髮、乾闥婆城、夢幻、鏡像の如し。世の無智の者は、顛倒の解を生ずれども、有智は然らず。然も現ぜざるに非ず。大慧、妄法を現する時、無量の差別有れども、然も無常には非ず。何を以ての故に。有無を離るるが故に。云何が有無を離る。一切の愚夫は種種に解するが故に。恆河の水の如し、見不見有り。餓鬼は見ず。有りと云ふべからず。餘の者は見るが故に無しと言ふべからず。聖は妄法に於て顛倒の見を離る。大慧、妄法は是れ常なり。相異なるが故に。諸の妄法は差別の相有るに非ず、分別を以ての故に別異有り。是故に妄法は其體是れ常、大慧、云何が妄法は眞實なることを得る。謂はく、諸の聖者は妄法の中に於て顛倒を起さず、顛倒の覺に非ず。若し妄法に於て少分も想有らば則ち聖智に非ず。少想有るものは、當に知るべし、則ち是れ愚夫の戲論にして、聖の言説に非ず。

大慧、若し妄法は是れ倒非倒なりと分別せば、彼は則ち二種の種性を成就せん。謂はく、聖種性と凡夫種性となり。大慧、聖種性には復三種有り、謂はく、聲聞と緣覺と佛乘との別の故に。大慧、云何が愚夫は妄法を分別して、聲聞乘の種性を生ずる。謂ゆる自

相共相に討著す、大慧、何をか復愚夫有り、妄法を分別して、緣覺乘の種性を成すと謂ふ。
 謂はく、即ち自共相に執著する時、憍闇を離る。大慧、何をか智人の妄法を分別して、
 佛乘の種性を成就し得と謂ふ。謂ゆる一切は、唯是れ自心分別の所見にして、外法有る無
 きを了達す。大慧、諸の愚夫有り、妄法もて種種の事物を分別す。決定して是の如し、
 決定して異はず。是れ則ち生死乘の性を成就す。大慧、彼妄法の中の種種の事物は、即ち
 是れ物に非ず。亦物に非ざるにも非ず。大慧、即ち彼妄法は諸聖智者の心意意識と、諸惡
 習氣の自性の法の轉依なるが故に、即ち此妄を説いて眞如と名く。是故に眞如は心識を離
 る。我今明了に此句を顯示す。分別を離るとは悉く一切の諸の分別を離るるが故に。』
 大慧菩薩白して言さく、『世尊の説きたまふ所の妄法は、有と爲んや無と爲んや。』佛言
 はく、『女の如し、執著の相無きを以ての故に。若し執著の相は、體是れ有ならば應に轉ず
 べからざるべし。則ち諸の緣起は、應に外道の説なる作者の生の如くなるべし。』大慧又
 言さく、『若し諸の妄法は幻と同じくば、此れ則ち當に餘の妄と因となるべし。何言は
 く、『大慧、諸の幻事は妄惑の因と爲るに非ず。幻は諸の過惡を生ぜざるを以ての故に。
 諸の幻事は無分別なるを以ての故に。大慧、夫の幻事は他の明咒より生起することを得
 れども、自らの分別過習の力より起るに非ず。是故に幻事は過惡を生ぜざるなり。大慧、
 此妄惑の法は唯是れ愚夫の心の執著する所にして、諸の聖者に非ず。』
 爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

聖は妄法を見ず、中間も亦實に非ず
妄即眞を以ての故に、中間も亦眞實なり
若し妄法を離れて、而も相生有らば

此は還て即ち是れ妄、翳の如く清淨ならず

復次に大慧、諸法を見て幻に非ざれば相似有ること無し、故に一切の法は、幻の如しと説く、

大慧言さく、「世尊、種種の幻相に執著するに依りて、一切の法は猶し幻の如しと言ふと爲んや。此執著顛倒の相に依ると爲んや。若し種種の幻相に執著するに依て、一切の法猶し幻の如しと言はば、世尊、一切の法は悉く皆幻の如くなるに非ず。何を以ての故に。種種の色相を見るに、因無きに非ざるが故に。世尊、都て因有る無くして、種種の色相を顯現せしめば、幻の如くならん。是故に世尊、種種の幻相に執著するに依りて、一切の法は幻と相似なりと説くべからず。佛言はく、「大慧、種種の幻相に執著するに依らずんば、一切の法は幻の如しと言ふ。大慧、一切の法は不實にして、速に滅すること、電の如くなるが故に、幻の如しと説く。大慧、譬へば電光の見えじりて、即ち滅するが如し。世間の凡愚の、悉く皆一切の諸法を現見し、自らの分別に依りて自共相の現するも、亦復是の如し。無所有なるを観察する能はざるが故に、妄りに種種の色相に計著するなり。」

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

幻まぼろしに非あらずんば相似さうじなく、亦また諸法しよほふ有あるに非あらず
不實ふじつの速すみかなること 電いでんの如ごとく、幻まぼろしの如ごとしと應當まふに知しるべし

爾時そのとき、大慧菩薩摩訶薩だいゑぼさつまかさつ、復佛またたてに白まをして言まをさく、「世尊せそん、佛ぼつの先まへに説せきたまふが如ごとくんば、一切いっさいの諸法しよほふは皆みな悉ことごとく無生むじやうなり。又また幻まぼろしの如ごとしと言のたまふ。將はた前後ぜんごの所説しよせつ相違さうゐするに非あらずや。」
佛言ぼつげのたまはく、「大慧だいゑ、相違さうゐ有あること無し。何を以もつての故ゆゑに。我われ生なまずれば即すなはちは無生むじやうにして、唯ただ是こゝれ自心じしんの所見しよけんなるが故ゆゑに。若もし有ある、若もし無なる一切いっさいの外法げほふは、其無性むじやうにして本もとり不生ふじやうなることを見るが故ゆゑに。大慧だいゑ、外道げだうの群聚ぐんしゆは共ともに惡見あくけんを興おこして、有あり無なり一切いっさいの法ほふは生なまずと言いふ。自みづからの執著しやくちやく分別ぶんべつを縁えんと爲なすに非あらざるなり。大慧だいゑ、我われは諸法しよほふは、有あり無なるの生なまずるに非あらず、故ゆゑに無生むじやうと名なくと説せく。大慧だいゑ、諸法しよほふを説せくは、弟子だにをして諸業しよごふに因よりて生死しじふを攝受せつじゆすることを知しり、其無有むじやうの斷滅だんめつの見けんを遮しやせしめんが爲ための故ゆゑなり。大慧だいゑ、諸法しよほふの相さうは猶なほし幻まぼろしの如ごとしと説せくは、諸法しよほふの自性じじやうの相さうを離はなれしめんが故ゆゑなり。諸しよの凡惡ぼんあくの惡見あくけんの欲よくに墮おし、諸法しよほふは唯ただ心の所現しよけんなることを知らざるが爲ために、因緣生起いんえんじやうきの相さうに執著しやくちやくするを遠離えんりせしめんが爲ために、一切いっさいの法ほふは幻まぼろしの如ごとく夢ゆめの如ごとしと説せくなり。彼諸かの愚夫ぐふは惡見あくけんに執著しやくちやくして自他じかを欺誑まがし、明あかに一切いっさい諸法しよほふの如實じゆじつの住處ぢゆぢよを見ること能あたはず。大慧だいゑ、一切いっさいの法ほふの如實じゆじつの處ぢゆぢよを見る者は、能あたく唯心ゆゐんの所現しよけんに了達りやうたつすと謂いふべし。」
爾時そのとき、世尊せそん重ねて頌うたを説せきて言のたまはく、

【阿字より呵字】
梵語に四十八の字
あり。アよりハ
に至る。

無作の故に無生なり。有法は生死を攝す
幻の如し等と了達すれば、相に於て分別せざるなり

復次に大慧、我、當に名匂文身の相を説くべし。諸の菩薩摩訶薩は善く此相を觀じ、其
義に了達せば、疾に阿耨多羅三藐三菩提を得、復能く一切の衆生をして開悟せしめん。大
慧、名身とは、謂はく、事に依りて名を立つ、名は即ち是れ身なり。是を名身と名く。匂身
とは、謂はく、能く義を顯はし決定究竟す。是を匂身と名く。文身とは、謂はく、此に由
りて能く名句を成す。是を文身と名く。復次に大慧、匂身とは謂はく、句の事、究竟なる
なり。名身とは、謂はく、諸の字名各差別するなり。阿字より呵字に至るが如し。文身
とは、謂はく、長短高下なり。復次に匂身とは足跡の如し。衢巷中の人畜等の跡の如し。
名とは非色の四蘊を謂ふ。名を以て説くが故に。文とは名の自相を謂ふ。文に由りて顯は
すが故に。是を名匂文身と名く。此名匂文身の相を汝應に修學すべし。」

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

名身と匂身と、及び字身の差別は

凡愚の計著する所にして、象の深泥に溺るるが如し

「復次に大慧、未來世の中に、諸の邪智惡思の覺者有り、如實の法を離れ、以て一異、俱
不俱の相を見、諸の智者に問はんに、彼即ち答へて言はん、此れ正問に非ず」と。謂はく、
「色」と無常とは異と爲んや不異と爲んや、是の如く涅槃と諸行と、相と所相と、依と所依と、

【止記答】因明論の置答、黙して答へざること。因に一向記、分別記、反問記、捨置記の四あり。これを四記答と云ふ。

造と所造と、見と所見と、地と微塵と、智と智者とは異と爲んや不異と爲んや」と。是の如き等の計すべからざる事を次第に問はんに、世尊は此を説いて當に止記答を爲すべし、愚夫無智のものの能く知る所にあらず。佛は其驚怖する處を離れしめんと欲して、爲に記説したまはず。大慧、記説せざるは、外道をして永へに作者の見を出離することを得しめんと欲するが故なり。大慧、諸の外道は衆く作者有り」と計して、是の如きの説を作さく、「命は即ち是れ身、命は異なり身は異なり」と。是の如き等の説を無記論と名く。大慧、外道は癡惑して無記論を説く。我が教中の説に非ず。大慧、我が教中には能所取を離れ、分別を起さず。云何をか止すべけん。大慧、若し能取所取に執著して、唯是自心の所見なることを了ぜざる者あらば彼應に止すべし、大慧、諸佛如來は四種の記論を以て衆生の爲に説法したまふ。大慧、止記論は我別時に説かん。根未熟なるを以て且らく止説するが故に。復次に大慧、何が故に一切の法は不生なりや。能作所作を離れ、作者なきを以ての故に。何故に一切の法は自性なきや。證智を以て、自相共相は不可得なりと觀するが故に。何故に一切の法は來去なきや。自共相は來るに所從無く、去るに所至なきを以ての故に。何故に一切の法は不滅なりや。謂はく、一切の法は性相無きが故に、不可得なるが故に。何故に一切の法は無常なりや。謂はく、諸相は起り無常の性なるが故に。何故に一切の法は常なりや。謂はく、諸相の起るは即ち是れ不起にして、無所有なるが故に、無常の性は常なり。是故に我は一切の法は常なりと説く。』

【教論】 サームキ

ヤー (Sankhya)

印度六派哲學の一。二元的實在論を中心思想とす。

【勝論】 ヴィセー

シカ (Vaiśeṣika)

印度六派哲學の一。宇宙萬有を六範疇に分ちて説明す。

【須陀洹】 梵語、(Srotāṅgama) 頂

流、入流と譯す。

【聲聞四果の一】

【斯陀含、阿那含、阿羅漢】 何れも聲聞四果の一である。

【二障】 煩惱障、知障の二。

【結】 心身を纏縛する意味で煩惱の異名。

【俱生、分別】 二種の我執を指す。

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

一向及び反問と、分別と置答と

是の如き四種の説は、諸の外道を摧伏す

數論と勝論とは、有と非有との生を言ふ

是等の如きの諸説は、一切皆無記なり

智を以て觀察する時は、體性不可得なり

彼説くべき無きを以ての故に、無自性なりと説く

爾時、大慧菩薩摩訶薩復佛に白して言さく、「世尊、願くば我が爲に、諸の須陀洹と須陀

洹果行の差別の相を説きたまへ。我及び諸の菩薩摩訶薩は、此義を聞くが故に須陀洹、

斯陀含、阿那含、阿羅漢の方便の相に於て皆な善巧を得て、是の如く衆生の爲に演説し、

其二無我の法を證得せしめ、二障を淨除し、諸地の相に於て漸次に通達し、如來の不可思

議なる智慧の境界を獲て、衆色の摩尼の如く、普く衆生をして悉く饒益することを得し

めたまへ。佛言はく、「諦かに聽け、當に汝が爲に説くべし。」大慧言はく、「唯。」

佛言はく、「大慧、諸の須陀洹と、須陀洹果との差別に三有り。謂はく、下と中と上と

なり。大慧、下は諸有の中に於て七反生を極む。中は三生五生、上は即ち此生に於て涅槃

に入る。大慧、此三種の人は三種の結を斷ず。謂はく、身見と疑と戒禁取なり。上上は勝

進して阿羅漢果を得。大慧、身見に二種有り。謂はく、俱生及び分別なり。緣起に依りて

【大種】地水火風の四大種のこと。

妄計の性有るが如し。大慧、譬へば緣起の性に依止するが故に、種種妄計して生ずる執著の性の如し。彼法は但是妄分別の相にして、有に非ず無に非ず、亦有、亦無に非ず。凡夫は愚癡にして、横に執著すること、猶し渴飲の妄に水想を生ずるが如し。此分別の身見は智慧なきが故に、久遠に相應し、人無我を見て即時に捨離す。大慧、俱生の身見は、普く自他の身を觀察するを以て受等の四蘊は色相無きが故に、色は大種に由りて生を得るが故に。是諸の大種は互相に因となるが故に。色は集まらざるが故に。是の如く觀じ已りて明かに有無を見て即時に捨離す。身見を捨つるが故に食は則ち生ぜず。是を身見の相と名く。大慧、疑相とは、所證の法に於て善く相を見るが故に。及び先の二種の身見、分別し斷ずるが故に、諸法の中に於て、疑は生ずることを得ず。亦餘に於て、大師の想を生じて淨不淨と爲さざるなり。是を疑相と名く。大慧、何故に須陀洹は戒禁を取らざるか。謂はく、明かに生處の苦相を見るを以て是故に取らざるなり。夫れ其取とは、謂はく、凡愚は諸有の中に於て世樂に貪著し、苦行し持戒して彼に生ぜんことを願ふ。須陀洹の人は是相を取らず、唯證する所の、最勝無漏の無分別の法を求めて、戒品を修行す。是を戒禁取相と名く。大慧、須陀洹の人は三結を捨つるが故に貪瞋癡を離るるなり。

大慧白して言さく、一食に多種有り、何等の食をか捨つる。佛言はく、「大慧、女色に於て纏綿する食欲を捨つ。此現の樂にして來の苦を生ずと見るが故に。又三昧の殊勝の樂を得るが故に。是故に彼を捨つれども涅槃の食には非ず。大慧、何をか斯陀含果と云ふ。謂

【般涅槃】 涅槃に同じ。

はく、色相を了ぜずして色の分別を起し、一たび往來し已つて善く禪行を修し、苦の邊際を盡して般涅槃に入る。是を斯陀含と名く。大慧、何をか阿那含果と云ふ。謂はく、過未現在の色相に於て、有無の見を起せども、分別の過惡墮眠を起さず、永く諸結を捨てて更に還た來らず、是を阿那含果と名く。大慧、阿羅漢とは、謂はく、諸禪、三昧、解脫、力通、悉く已に成就し、煩惱、諸苦、分別、永へに盡くす。是を阿羅漢と名く。

大慧言さく、「世尊阿羅漢に三種有り。謂はく、一向に寂に趣くと、菩提の願を退くと、佛の變化する所となり。此何れを説きたまふや。佛言はく、「大慧、此は趣寂を説き、是れ其餘は非ず。大慧、餘の二種の人は、謂はく已に曾て巧方便の願を發し、及び諸佛の衆會を莊嚴せんが爲に彼に於て生を示せり。大慧、虛妄の處に於て種種の法を説く。謂ゆる證果、禪者及び禪は皆な性を離るるが故に。自心の所見は得果の相なるが故に。大慧、須陀洹の若きは是の如きの念を作さく、「我諸結を離るるに則ち二過有り。謂はく、我見及び諸結に墮して斷せざるなり」と。復次に大慧、若し諸禪と無量と無色界とを超過せんと欲せば、應に自心所見の諸相を離るべし。大慧、想受滅の三昧は自心所見の境を超越と云ふも然らず。心を離れざるが故に。」

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

諸禪と無量と、無色の四摩提と

及び想受滅とは、唯心にして不可得なり

預流と一來果と、不還と阿羅漢と

是の如き諸の聖人は、悉く心の妄有に依る

禪者も禪も所縁も、惑を斷じて眞諦を見るも

此皆是れ妄想なり。了知すれば即ち解脱せん

復次に大慧、二種の覺智有り。謂はく、觀察智及び取相分別執著建立の智なり。觀察智

とは謂はく、一切の法を觀じ四句を離れて不可得なり。四句とは謂はく、一異、俱不俱、

有非有、常無常等なり。我は諸法を以て此四句を離るとす、是故に説いて一切法離と云ふ。

大慧、是の如く法を觀じ汝應に修學すべし。何をか取相分別執著建立智と云ふ。謂はく、

堅濕煖動の諸大種性に於て、相を取つて執著し、虚妄に分別して宗因喻を以て妄に建立す。

是を取相分別執著建立智と名く。是を二種の覺智の相と名く。菩薩摩訶薩は、此智相を知

りて、即ち能く人法の無我に通達し、無相智を以て解行地に於て善巧に觀察し、初地に入

りて百の三昧を得、勝三昧の力を以て百佛百菩薩を見、前後際の各百劫の事を知り、光

明は百佛の世界を照曜し、善く上上の地相を了知し、勝れたる願力を以て變現自在とな

り、法雲地に至つて灌頂を受け、佛地に入りて十無盡の願もて衆生を成就し、種種に應

現して休息有ること無く、常に自覺の境界、三昧の勝樂に安住す。

復次に大慧、菩薩摩訶薩は、當に善く大種の造色を了知すべし。云何が了知せん。大慧、

菩薩摩訶薩は應に是の如く觀すべし。彼諸の大衆は眞實には不生なり、諸の三界は、但

【宗因喻】 因明學

に云ふ三段論法のこと。宗は斷定、

因は理由、喻は實例なり。

【解行地】 解によ

つて行を修し、未

だ眞如を證せざる

地前三賢の菩薩の

地位のこと。

【前後際】 前際、

後際、三世の

過去(前際) 未來

(後際) なり。

【内外】内とは吾人の身中をいふ。外は國土をいふ。

【餘趣】六趣の一。

【非色の諸蘊】五蘊より色を去れる。受想行識を云ふ。

是分別にして唯心の所現なるを以て外物有ること無し。是の如く觀する時、大種の所造も皆悉く性を離れ、四句を超過して我我所無く、如實の處に住して無生の相を成ぜん。大慧、彼諸の大種は、云何が色を造る。大慧、謂はく、虚妄に分別する津潤の大種は内外の水界を成じ、炎盛の大種は内外の火界を成じ、飄動の大種は内外の風界を成じ、色の分段の大種は内外の地界を成ず。虚空を離れ、邪論に執著するに由りて、五蘊聚集して大種の造色生ず。大慧、識は種種の言説の境界に執著するを以て、因と爲して起るが故に餘趣の中に於て相續して生を受く。大慧、地等の造色は大種の因有り、四大種を大種の因と爲すに非ず。何を以ての故に。謂はく、若し法有り、形相有る者ならば則ち是所作にして無形の者に非ざればなり。大慧、是大種の造色の相は、外道の分別にして、是我が説に非ざるなり。

復次に大慧、我、今當に五蘊の體相を説くべし。謂はく、色受想行識なり。大慧、色とは四大、及び所造の色を謂ふ。此は各相を異にす。受等は色に非ず。大慧、非色の諸蘊は、猶し虚空の如く、四數有ること無し。大慧、譬へば虚空の數相を超過し、然も分別して、此は是れ虚空なりと言ふが如し。非色の諸蘊も亦復是の如く、諸の數相を離る、有無等の四種の句を離るるが故に。數相は愚夫の所説にして、諸の聖者に非ず、諸の聖は但幻の所作の如しと説く。唯假りの施設にて、異不異を離れ、夢の如く像の如く、別に所有無し。聖智所行の境を了ぜざるが故に、諸蘊を分別して現前に有りと見るなり。是を諸

【利】 利土。即ち國土のこと。
【遠行地】 十地の第七位。即ち念に諸法を寂滅して遠く上地に趣く位のこと。

【分別爾炎の譏】 分別譏のこと。即ち第六意識なり。

【彼の】 彼の意識の意。

【心聚】 心作用の總體を云ふ。

蘊自性の相と名く。大慧、是の如く分別して汝應に捨離すべし。此を捨離し已りて寂靜の法を説き、一切の利の諸の外道の見を斷じ、法無我を淨めて遠行地に入り、無量の自在三昧を成就し、意生身を獲て如幻三昧力通自在皆悉く具足せば、猶し大地の普く群生を益するが如くならん。復次に大慧、涅槃に四種あり。何等をか四と爲す。謂はく、諸法自性無性涅槃、種種相性無性涅槃、覺自相性無性涅槃、斷諸蘊自共相流注涅槃なり。大慧、此四涅槃は、是れ外道の義にして、我が説く所に非ず。大慧、我が説く所は、分別爾炎の識の滅するを涅槃と名く。

大慧言さく、世尊、豈に八種の識を建立したまはずや。佛言はく、建立す。大慧言さく、若し建立せば、云何が但意識の滅にして、七識の滅に非ずと説きたまふ。

佛言はく、大慧、彼因及び所縁と爲すが故に七識は生ずることを得。大慧、意識は分別の境界に執著を起す時、諸の習氣を生じて藏識を長養す。是に由て意は我我所の執と俱に、思量隨轉して別の體相無く、藏識を因と爲し所縁と爲すが故に、自心所現の境界に執著して心聚生起し、展轉して因と爲る。大慧、譬へば海浪の如く、自心所現の境界の風吹いて、而も起滅あるが如し。是故に意識滅する時は七識も亦滅す。

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

我は自性と及び、作相とに於て

分別境識の滅するを以て、是の如きを涅槃と説かず

意識は心の因と爲り、心は意の境界と爲り

因及び所縁の故に、諸識の依止は生ず

大瀑流の盡くれば、波浪は則ち起らざるが如く

是の如く意識滅すれば、種種の識は生ぜず

復次に大慧、我今當に妄計自性の差別の相を説き、汝及び諸の菩薩摩訶薩をして、善

く此義を知り、諸の妄想を超えて、聖智の境を證り、外道の法を知りて、能取所取の分別

を遠離し、他に依つて起る種種の相中に於て、更に妄りに計する所の相を取著せざらしむ

べし。大慧、何をか妄計自性の差別の相と云ふ。謂ゆる言説分別、所説分別、相分別、財

分別、自性分別、因分別、見分別、理分別、生分別、不生分別、相屬分別、縛解分別なり。

大慧、此は是れ妄計自性の差別の相。何をか言説分別と云ふ。謂はく、種種の美妙の音詞に

執著する、是を言説分別と名く。何をか所説分別と云ふ。謂はく、所説あるの事に執し、是

れ聖智所證の境なりとし、此に依りて説を起す。是を所説分別と名く。何をか相分別と云

ふ。謂はく、即ち彼所説の事の中に於て渴獸の想ひの如く、堅濕煖動等一切の諸相を分別

し執著す、是を相分別と名く。何をか財分別と云ふ。謂はく、種種の金銀等の寶を取著して

言説を起す、是を財分別と名く。何をか自性分別と云ふ。謂はく、惡見を以て是の如く此

自性を分別す、決定して餘に非ず。是を自性分別と名く。何をか因分別と云ふ。謂はく、

因縁に於て有無を分別し、此因相を以て能く生ずるが故に、是を因分別と名く。何をか見

分別と云ふ。謂はく、諸の外道は惡見にして、有無、一異、俱不俱等と執著す、是を見分別と名く。何をか理分別と云ふ。謂はく、我我所の相に執著して言説を起す。是を理分別と名く。何をか生分別と云ふ。謂はく、諸法の若は有、若は無、緣より生ずと計す。是を生分別と名く。何をか不生分別と云ふ。謂はく、一切の法は本來不生にして、未だ諸緣あらずして先に體あり、因より起らずと計す。是を不生分別と名く。何をか相屬分別と云ふ。謂はく、此と彼とは遞相繫屬すること針と線との如しと。是を相屬分別と名く。何をか縛解分別と云ふ。謂はく、能縛に因つて所縛ありと執す。人は繩の方便力を以ての故に、縛し已りて復解くが如し。是を縛解分別と名く、大慧、此は是れ妄計性の差別の相なり。一切の凡愚は、中に於て若は有、若は無と執著す。大慧、緣起の中に於て、種種に妄計自性を執著することは、幻に依つて種種の物を見るが如し。凡愚は分別して幻に異なると見る。大慧、幻と種種とは、異に非ず不異に非ず。若し異なれば、幻は應に種種の因に非ざるべく、若し一なれば、幻と種種とは應に差別無かるべし。然も差別を見る、是故に異に非ず不異に非ず。大慧、汝及び諸の菩薩摩訶薩は、幻の有無に於て應に著を生ずべからず。」

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

心は境の爲に縛せらる。覺想の智隨つて轉ずれば
 無相と最勝處と、平等の智慧生ず
 妄計に在りては是れ有り、緣起に於ては則ち無し

妄計は迷惑して取り、緣起は分別を離る
 種種の支分生ずれば、幻の如く成就せず
 種種の相を現すれども、妄分別は則ち無し
 彼相は即ち是れ過にして、皆心の縛より生ず
 妄計する者は了せずして、緣起の法を分別す
 此諸の妄計の性は、皆即ち是れ緣起なり
 妄計に種種あり、緣起の中にて分別す
 世俗と第一義と、第三は無因生なり
 妄計は是れ世俗にして、斷ずれば則ち聖の境界なり
 修觀の行者は一に於て、種種を現すれども
 彼に於て種種無きが如く、妄計の相も是の如し
 口に種種の翳あり、妄想して衆色を見るも
 彼に色非色無きが如し、緣起を了せざるも然り
 金の塵垢を離るるが如く、水の泥濁を離るるが如く
 虚空の雲無きが如く、妄想の淨まるも是の如し
 妄計の性有り、而も緣起有ること無し
 建立及び誹謗は、斯れ分別によりて壞す

【眞如を越えず】
眞如の相に於て違
越せず。

【二性】縁起と圓
成との二性なり。

若し妄計の性無く、而も縁起する者有らば
無法にして法有り、有法は無より生ぜん
妄計に依りて、縁起有ることを得
相と名とは、常に相隨ひて妄計を生ず
縁起は妄に依るを以て、究竟して成就せず
是時清淨を現するを名けて第一義と爲す
妄計に十二有り、縁起に六種有り
自證眞如の境には、彼差別有ること無し
五法を眞實と爲す、三自性も亦爾り
修行者此を觀れば、眞如を越えず
縁起の相に依りて、種種の名を妄計す
彼諸の妄計の相は、皆縁起に因りて有り
智慧善く觀察せば、縁も無く妄計も無し
眞實中に物無くば、云何が分別を起さん
圓成若し是れ有ならば、此れ則ち有無を離る
既に已に有無を離る、云何が二性あらん
妄計に二性あり、二性は是れ安立す

【梵天王】大梵天
玉色界初禪天の主
又三界の主なり。

分別すれば種種を見、清淨なれば聖の所行なり
種種の相を妄計するは、緣起中の分別なり

若し此分別に異ならば、則ち外道の論に墮せん

諸の妄見を以ての故に、妄計を妄計す

此二計を離るるを、則ち眞實の法と爲す

大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、唯願くば爲に自證聖智の行相及び一乘の

行相を説きたまへ。我及び諸の菩薩摩訶薩は此善巧を得ば、佛法の中に於て、他に由ら

ずして悟らん。佛言はく、「諦に聽け。當に汝が爲に説くべし。大慧言さく、「唯。佛言

はく、「大慧、菩薩摩訶薩は、諸の聖教に依りて分別有ること無し。獨り閑靜に處し觀察

自覺、他に由らずして悟り分別の見を離れ上上に昇進して如來地に入る。是の如く修行す

るを自證聖智の行相と名く。云何が一乘の行相と名くる。謂はく、一乘の道を證知するを

得るが故に。云何が名けて一乘の道を知ると爲す。謂はく、能取所取の分別を離れて如實に

住す。大慧、此一乘の道は唯如來を除き外道、二乘、梵天王等の能く得る所に非ず。大慧、

佛に白して言さく、「世尊、何が故に三乘有りと説き、一乘を説きたまはざる。佛言はく、

『大慧、聲聞、緣覺は、自ら般涅槃の法無きが故に我一乘を説く。彼は但如來の所説に依

りて調伏遠離し、是の如く修行して解脱を得れども、自らの所得に非ざるを以てなり。又

彼未だ智障及び業の習氣を除滅すること能はず、未だ法無我を覺らず、未だ不思議變易の

【無漏界】有漏の對漏は缺漏の義。煩惱の異名。從つて煩惱を増上せしめたるものを無漏と云ふ。

【天乘】五乗の一天の果報を受く。【梵乘】菩薩乗のこと即ち清淨なる乗物の意。

死と名けず。是故に我説いて以て三乗と爲す。若し彼能く一切の過習を除き法無我を覺らば、是時乃ち三昧の所醉を離れ、無漏界に於て覺悟を得已りて、出世上上の無漏の界中に於て諸の功德を修し、普く満足して不思議自在の法身を獲しめん。』

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

天乘及び梵乘、聲聞緣覺乘

諸佛如來乘の、諸乘は我が説く所なり

乃至心起ること有らば、諸乘未だ究竟せず

彼の心轉を滅し已りて、乘及び乗者無く

乘の建立有ること無くんば、我説いて一乗と爲す

愚夫を攝せんが爲の故に、諸乘の差別を説く

解脱に三種有り、謂はく、諸の煩惱を離れ

及以法無我と、平等智解脱と

譬へば海中の木、常に波浪に隨ひて轉するが如く

聲聞心も亦然り、相風に漂激せられて

滅すと雖も煩惱を起し、猶習氣に縛せられ

三昧の酒に酔はさる。無漏界に住すれども

彼は究竟の趣に非ず、亦復退轉せず

三昧さんまいの身みを得うるを以もつて、乃すなはち劫ごうに至いたるも覺きめざるなり
譬たとへば昏こ爾にの人の、酒さけ消けえて然しかして後のち悟さとるが如ごとく
聲聞しやうもん亦是またの如ごとく、覺きめて後のち當たうに成佛ぶつすべし

大乘入楞伽經 卷第四

大周于闐國三藏法師實又難陀勒を奉じて譯す

【無常品】以下因
果によりて一乘眞
因の相を説明す。

無常品第三之一

爾時、佛大慧菩薩摩訶薩に告げて言はく、『今當に汝が爲に意成身の差別の相を説くべし。諦に聽け諦に聽け、善く之を思念せよ。』大慧言さく、『唯、佛言はく、『大慧、意成身に三種有り。何をか三と爲す。』謂はく、『入三昧樂意成身、覺法自性意成身、種類俱生無作行意成身なり。諸の修行者は、初地に入り已りて、漸次に證得せん。』大慧、何をか入三昧樂意成身と云ふ。謂はく、『三四五地に三昧に入り、種種の心を離れて寂然として動かさず、心海に轉識の波浪を起さず、境は心の現にして皆所有無きことを了る。』是を入三昧樂意成身と名く。何をか覺法自性意成身と云ふ。謂はく、『八地の中に法は幻の如く皆相あること無きを了り、心の所依を轉じ、如幻の定及び餘の三昧に住し、能く無量自在の神通を現じ、花の開敷するが如く、速疾なること意の如く、幻の如く夢の如く、影の如く像の如く、四大の造に非ざれども造と相似し、一切の色相具足し莊嚴し普く佛刹に入り諸法の性を了る。』是を覺法自性意成身と名く。何をか種類俱生無作行意成身と云ふ。謂はく、『諸佛自證の法相を

【佛刹】 佛國土。

了達す。是を種類俱生無作行意成身と名く。大慧、三種の身相を當に勤めて觀察すべし。爾時、世尊重ねて頷を説きて言はく、

我が大乘は乘に非ず、聲に非ず亦字に非ず諦に非ず解脫に非ず、亦無相の境にも非ず然かも摩訶衍に乗じて、三摩提自在に

種種の意成身は、自在にして花のごとくに莊嚴せり

爾時、大慧菩薩摩訶薩は、復佛に白して言さく、「世尊、世尊の説の如くば、五無間の業あり。何をか五と爲す。若し人作し已れば阿鼻獄に墮す。佛言はく、「諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。』大慧言さく、「唯。佛、大慧に告げたまはく、「五無間とは、謂ゆる、母を殺し父を殺し阿羅漢を殺し和合僧を破り、惡逆の心を懷いて佛身の血を出す。大慧、何をか衆生の母と爲す。謂はく生愛を引くは貪喜と俱なり。母の養育の如し。何をか父と爲す。謂ゆる無明は六處をして聚落の中に生ぜしむるが故に、二の根本を斷ずるを父母を殺すと名く。何をか阿羅漢を殺すと云ふ。謂はく、隨眠を怨と爲すこと鼠毒の發するが如し。究竟して彼を斷つ、是故に説いて阿羅漢を殺すと名く。何をか和合僧を破ると云ふ。謂はく、諸蘊の異相和合して積聚す。究竟して彼を斷ずるを名けて破僧と爲す。何をか惡心佛身の血を出すと云ふ。謂はく、八識身を妄りに思覺を生じ、自心の外に自相共相を見る。三解脫と無漏の惡心を以て、究竟して彼八識身の佛を斷ず。名けて惡心を以て佛身の血を出す

【和合僧】僧(ゴ)義。出家五人以上相和して背くことなきを僧と云ふ。和合に理和。六和による事和の二あり。
【六處】眼耳鼻舌身意の六。

【一、種の死】命盡死と外縁死の二。前者は天命つきて死すること。後者は自殺又は殺害による死。

【二、煩惱】根本煩惱、隨煩惱の二。前者は迷の結果を感得する根本の煩惱に從つて起る枝葉の煩惱。

爲す。大慧、是を内の五無間と爲す。若し作す者有らば無間に即ち實法を現證することを得ん。復次に大慧、今汝が爲に外の五無間を説き、汝及び餘の菩薩をして此義を聞き已りて、未來世に於て疑惑を生ぜざらしめん。何をか外の五無間と云ふ。謂はく、餘教の中に説く所の無間なり。若し作す者有らば、三解脱に於て現證すること能はず。唯如來と諸の大菩薩及び大聲聞、其無間業を造る者有るを見て勸發して其をして過を改めしめんと欲するが爲に、神通力を以て其事を同うし、尋いで即ち悔除せしめ、解脱を證する者を除く。此皆化現にして實に造るに非ず。若し實に無間の業を造る者あらば、終に現身にして解脱を得ること無けん。唯身と資と所住とは、自心の所現なることを覺了し、我我所の分別執見を離れ、或は來世に於て餘處に生を受け、善知識に遇ひて分別の過を離れ、方に解脱を證する者を除く。』

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

貪愛を名けて母と爲す、無明は則ち是れ父なり

識の境界を了する、此れ則ち名けて佛と爲す

隨眠は阿羅漢、蘊聚は和合僻

彼を斷じて餘聞無し、是を無聞の業と名く

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、『世尊、願くば我が爲に諸佛の體性を説きたまへ。佛言はく、『大慧、二無我を覺り、二種の障を除き、二種の死を離れ、二煩惱を斷ず、是れ佛の體性なり。大慧、聲聞緣覺も此法を得れば、亦名けて佛と爲す。我は是

義を以て但一乘と説く。

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

善く二無我を知り、二障と二惱と

及び不思議の死を除く、是故に如來と名く

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、如來は何の密意を以てか、大衆の

中に於て是の如く唱へたまふや、「我は是れ過去一切の諸佛」と。及び百千の本生の事を説

いて「我れ爾時、頂生王、大象、鸚鵡、月光妙眼是の如き等と作る」と。佛言はく、「大悲、

如來應正等覺は、四平等の秘密の意に依るが故に、大衆の中に於て是の如きの言を作さく、

「我昔時、拘留孫佛、拘那含牟尼佛、迦葉佛と作る」と。何をか四と爲す。謂ゆる、字平等、

語平等、身平等、法平等なり。何をか字平等と云ふ。謂はく、我は佛と名く、一切の如來

も亦名づけて佛と爲す。佛名に別無し、是を字等と謂ふ。何をか語平等と云ふ。謂はく、

我は六十四種の梵音の聲語を作す、一切の如來も亦此語を作したまふ。迦陵頻伽の梵音聲

の性は不増不減にして差別有ること無し。是を語等と名く。何をか身平等と云ふ。謂はく、

我と諸佛の法身の色相及び隨形好と等うして差別無し。種種の衆生を調伏せんが爲に、隨

類の身を現するものを除く。是を身等と謂ふ。何をか法平等と云ふ。謂はく、我と諸佛と

皆同じく三十七種の菩提分法を證得す。是を法等と謂ふ。是故に如來應正等覺は、大衆の

中に於て是の如きの説を作したまふ。』

【拘留孫佛】 梵音

クラクテユチュハ

ンダ (Kakucchin

Da) 所應斷已斷と

譯す。過去七佛の

第四。

【拘那含牟尼佛】

梵音カナカムニ

(Kanakammuni) 金

山人と譯す。過去

七佛の第五。

【迦葉佛】 梵音

カーシニヤバ (Ka-

syapa) 飲光と譯

す。過去七佛の第

六。

【迦陵頻伽】 梵音

カラキンカ (Kāla-

vinḱa) 妙聲、好聲

と譯す。鳥の名。

【梵音聲】清淨なる音聲、如來の音聲。
【隨形好】佛の相好に大相、小相の二あり。隨形好は、その小相にして八十あり。三十二の大相に隨ふ細なる相好なるが故に隨形相と云ふ。

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、
迦葉と拘留孫と、拘那含は是我なりとは
四平等に依るが故に、諸の佛子の爲に説く
爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、『世尊、世尊の説きたまふが如くんば、我某夜に於て最正覺を成じてより、乃至某夜に當て涅槃に入るまで、其中間に於て一字を説かず、亦已説せず、亦當説せず、不説は是れ佛説なりと。世尊、何の密意に依りて是の如きの説を爲したまふ。』佛言はく、『大慧、二の密法に依るが故に、是の如きの説を作す。何をか二法と云ふ。謂はく、自證の法及び本住の法なり。何をか自證の法と云ふ。謂はく、諸佛の證したまふ所は、我も亦同じく證して、不増不減なり。證智の所行は言説の相を離れ、分別の相を離れ、名字の相を離る。何をか本住の法と云ふ。謂はく、法は本性は、金等の鑛に在るが如し。若は佛の出世あるも、若は出世無きも、法は法位に住して、法界法性皆悉く常住なり。大慧、譬へば人あり、曠野の中を行き、古城に向ひ平坦たる舊道を見て即便ち隨ひて入り、止息し遊戯するが如し。大慧、汝が意に於て云何。是道及び城中の種種の物は彼の作る所と爲すや。』白して言さく、『不。』佛言はく、『大慧、我及び諸佛所證の眞如、常住の法性も亦復是の如し。是故に説いて、『始め成佛してより乃ち涅槃に至るまで、其中間に於て、一字を説かず、亦已説せず、亦當説せず』と。言ふ。』
爾時、世尊重ねて頌を説いて言はく、

某夜に正覺を成じ、某夜に般涅槃す

此二つの中間に於て、我都て説く所無し

自證と、不住の法との故に、是密語を作す

我及び諸の如來は、少しも差別有ること無し

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、『世尊、願くば一切の法の有無の相を説

き、我及び諸の菩薩摩訶薩をして、此相を離れ、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得しめ

まへ、佛言はく、諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。』大慧言さく、『唯。』佛言はく、『大

慧、世間の衆生は多く二見に墮す。謂はく、有見と無見なり。二見に墮するが故に出世の想

に非ず。何をか有見と云ふ。謂はく、實有の因縁有りて、諸法を生ず、實有に非ざるに非

ず。實有の諸法は因縁より生ず、無法の生に非ず。大慧、是の如く説く者は則ち無因を説く。

何をか無見と云ふ。謂はく、貪瞋癡を受くるを知り已りて妄計して無と言ふ。大慧、及び彼は

有相を分別して諸法の有を受けず。復諸の如來聲聞緣覺は貪瞋癡の性無きを知る有りて、

計して非有と爲す。此中誰か壞者と爲す。大慧白して言さく、貪瞋癡の性有りと謂ひて後

に無を取るを名けて壞者と爲す。佛言はく、『善い哉、汝我が問を解せり。此人は貪瞋癡

を無にして壞者と爲るに止らず、亦如來聲聞緣覺をも壞す。何を以ての故に。煩惱は内外不

可得なるが故に。體性は異に非ず不異に非ざるが故に。大慧、貪瞋癡の性は、若は内、若

は外、皆不可得なり、體性無きが故に、取るべき無きが故に。聲聞緣覺及び如來の本性は解

【増上慢】四慢、七慢の一。即ち法及び證を得ずして得たると思ひたかぶること。

脱にして、能縛及び縛因あること無きが故に。大悲、若し能縛及び縛因有らば則ち所縛あり、是の如き説を作すを名けて壞者と爲す。是を無有の相と爲す。我此義に依りて密意に説かん。寧ろ我見を起すこと須彌山の如くなるも、空見を起して増上慢を懷かじ。若し此見を起すものは名けて壞者と爲す。自共の見の樂欲の中に墮して、諸法は唯心の所現なることを了らず、了らざるを以ての故に、外法の無常にして刹那に展轉する差別と、蘊界處の相の相續流轉し、起り已りて還た滅する有りとい見虚妄に分別して文字の相を離るるも亦壞者と爲す。』

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

有無は是れ二邊、乃至心の所行なり

彼所行を淨除すれば、平等の心寂滅ならん

境界を取らざるは、滅にも非ず所有にも非ず

眞如の妙物有り、諸聖の所行の如し

本無にして生あり、生じ已りて復滅す

因縁の有及び無は、彼我が法に住するに非ず

外道にも非ず、佛にも非ず、我にも非ず、餘の衆にも非ず

能く縁を以て有を成す、云何が無なることを得ん

誰か縁を以て有を成じ、而も復無と言ふことを得ん

惡見は説いて生と爲し、妄想して有無を計す

若し所生無きことを知らば、亦復所滅無からん

世を觀するに悉く空寂にして、有無の二俱に離る

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に請ひて言はく、「世尊、唯願くば爲に宗趣の相を説き、我

及び諸の菩薩摩訶薩をして、善く此義に達し、一切の衆邪の妄解に隨はず、疾かに阿耨

多羅三藐三菩提を得しめたまへ。佛言はく、「諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。」大慧言

さく、「唯。佛言はく、「大慧、一切の二乘及び諸の菩薩に二種の宗の法相あり。何をか二

と爲す。謂はく、宗趣法相と言説法相なり。宗趣法相とは、謂はく、自ら證する所の殊勝の相

は文字語言の分別を離れ、無漏界に入り自地の行を成じ、一切の不正思の覺を超過し、魔

外の道を伏して智慧の光を生ず、是を宗趣法相と名く。言説法相とは、謂はく、九部の種種

の教法を説き、一異有無等の相を離れ、巧方便を以て、衆生の心に隨ひ此法に入らしむ。

是を言説法相と名く。汝及び諸の菩薩は當に勤めて修學すべし。」

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、
宗趣と言説とは、自證及び教法なり

若し善く知見するものは、他の妄解に隨はず

愚の分別する所の如きは、是れ眞實の相に非ず

彼豈に度を求めざらんや、法として得べき無し

諸の有爲を觀察するに、生滅等相續す

二見を増長して、顛倒して知る所無し

涅槃は心意を離る、唯此一法のみ實なり

世を觀するに悉く虚妄にして、幻、夢、芭蕉の如し

貪瞋癡有ること無く、亦復人有ること無し

愛より諸蘊を生ずること、夢の所見の如し

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、願くば我が爲に妄妄分別の相を説きたまへ。此虚妄分別は云何が生じ、是れ何にてか生じ、何に因りてか生ずる誰の生む所なる、何が故に名けて虚妄分別と爲す。佛言はく、「大慧、善い哉善い哉、汝世間の天人を哀愍するが爲に此義を問ふる利益する所多く安樂ならしむる所多し。論に聽け論に聽け、善く之を思念せよ、當に汝が爲に説くべし。」大慧言さく、「唯。佛言はく、「大慧、一切の衆生は、種種の境に於て、自心の所現を了達すること能はず、能所取を計して虚妄に執著し、諸の分別を起して有無の見到墮し、外道の妄見習氣を増長し、心心所の法、相應して起る時、外義に種種の得べきもの有り」と執し、我及び我所を計著す。是故に名けて虚妄分別と爲す。」大慧白して言さく、「若し是の如くんば、外の種種の義性は、有無の諸の見相を起すことを離る。世尊の第一義諦も亦復是の如く、諸根と量と宗と因と譬喩とを離る。世尊、何が故に種種の義に於ては分別を起すと言ひ、第一義の中には起すと言はざるや。將た世尊の言ふ所は理に乖くこと無きや。一處には起ると言ひ、一には言はざるが故に。」

【聞思修の慧】三
慧のこと。聞きて
得る智慧(聞慧)、
考へて得る智慧
(思慧)實踐して得
る智慧(修慧)の三
なり。

妄想と習氣の縛は、種種心より生ず

衆生は見て外と爲す、我は是を心量と説く

外の所見は有に非ず、心は種種に現じて

身資及び所住となる、我は是を心量と説く

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、如來は説きて言はく、「我所説の如く汝及び諸の菩薩は、語に依らずして、應に其義を取るべし」と。世尊、何が故に語に依らずして、應に義を取るべきや。何をか語と爲し何をか義と爲す。佛言はく、「諦に於て、當に汝が爲に説くべし。大慧言さく、「唯、佛言はく、「大慧、語は謂ゆる分別習氣を其因と爲す。喉舌唇齒の輔に依りて種種の音聲文字を出す。相對談説是を名けて語と爲す。何をか義と爲す。菩薩摩訶薩は獨り靜處に住し、聞思修の慧を以て、涅槃の道に向ひ、自習の境界を思惟し觀察し、諸の習氣を轉じて、諸地の種種の行相を行す、是を名けて義と爲す。復次に大慧、菩薩摩訶薩は、善く語義に於て語と義とは一に非ず、異に非ず、義と語とも亦復是の如しと知る。若し義と語と異れば、則ち語に因つて義を顯はすべからず。而も語に因つて義を見るは、燈の色を照すが如し。大慧、譬へば人行り、燈を持して物を照し、此物は是の如く、是の如き處に在りしと知るが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、言語の燈に因つて、言説を離るる自證の境界に入るなり。復次に大慧、若し不生不滅、自性、涅槃、三乘、一乘、五法諸心の自性等の中に於て、言の如く義を取る有らば、則ち建立及

び誹謗の見けんに墮だせん。彼かれに異ことなりて分別ぶんべつを起おこすを以もつての故ゆゑに。幻事げんじを見て、計けして以もつて實じつと爲なすが如ごとし。是こゝれ愚夫ぐふの見けんにして賢聖けんじやうに非あざるなり。』

爾時そのとき、世尊せそん重ねて頌しゆを説といて言たまはく、

若あし言ことに隨したがつて義ぎを取とらば、諸法しよほふを建立こんりふす

彼かれは建立こんりふを以もつての故ゆゑに、死しして地獄ぢじやくの中に墮だせん

蘊うん中に我が有ある無なく、蘊うん即すなはち是こゝれ我がなるにも非あらず

彼かれが分別ぶんべつの如ごとくなるにもあらず、亦また復く有ある無なきにも非あらず

愚ぐの分別ぶんべつする所ところの如ごとくくんば、一切いっさい皆みな性しやう有あり

若あし彼かれが所見しよけんの如ごとくくんば、皆みな應おに眞實しんじつを見みるべし

一切いっさいの染淨ぜんじやうの法ほふは、悉ことごとく皆みな體性たいしやう無なし

彼かれが所見しよけんの如ごとくにも非あらず、亦また所有しやう無なきにも非あらず

『復次またつぎに大慧だいゑ、我當われまさに汝なほが爲ために知識ちしきの相さうを説とくべし。汝なんぢ及びまた諸しよの菩薩摩訶薩ぼさつまかざつにして、若も

善よく知識ちしきの相さうを了知りやくちせば、則すなはち能よく疾はやかに阿耨多羅三藐三菩提あうたらかさんみやくさんぼだいを得えん。大慧だいゑ、智ちに三種さんしゆ

有あり。謂いはく、世間智せけんち、出世間智しゆつせけんち、出世間上上智しゆつせけんじやうじやうちなり。何なにをか世間智せけんちと云いふ。一切いっさいの外道げだう凡ぼん

愚ぐの、有ある無なの法ほふを計けするを謂いふ。何なにをか出世間智しゆつせけんちと云いふ。一切いっさいの二乘にじやうの自共相じぎやうに著ちやくするを

謂いふ。何なにをか出世間上上智しゆつせけんじやうじやうちと云いふ。謂いはく、諸佛菩薩一切しよぶつぼさついっさいの法ほふは皆みな有ある無なの相さう、不生不滅ふしやうふめつ、非ひ

有ある非ひ無ななりと觀くわんじ、法ほふ無な我がを證しやうして如來地にょらいぢに入る。大慧だいゑ、復また三種さんしゆの智ち有あり。謂いはく、自相共じさうぐ

相を知るの智、生滅を知るの智、不生不滅を知るの智なり。復次に大慧、生滅は是れ識、不生滅は是れ智なり。相無相及び有無種種の相の因に墮するは是れ識、相無相及び有無の因を離るるは是れ智なり。積集の相有るは是れ識、積集の相無きは是れ智なり。境界の相に著するは是れ識、境界の相に著せざるは是れ智なり。三和合相應して生ずるは是れ識、無礙相應自性の相は是れ智なり。有得の相は是れ識、無得の相は是れ智なり。自證聖智の所得の境界は、水中の月の如く、入らず出でざるが故に。

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

業を採集するを心と爲し、法を觀察するを智と爲す

慧は能く無相を證し、自在の威光を逮す

境界に縛せらるるを心と爲し、覺想生ずるを智と爲す

無相及び増勝の智慧は、中に於て起る

心意及ぶ識との、諸の分別の相を離れて

無分別の法を得るものは、佛子にして聲聞に非ず

寂滅殊勝の忍たる、如來清淨の智は

善勝の義より生じて、諸の所行を遠離す

我に三種の智有り、聖者は能く明照して

諸相を分別し、一切の法を閑示す

我が智は諸相を離れて、二乗を超過す

諸の聲聞等は諸法の有に執著するを以て

如來の智は、無垢にして、唯心を了達するが故に

「復次に大慧、諸の外道に九種の轉變の見有り。謂ゆる形轉變、相轉變、因轉變、相應轉

變、見轉變、生轉變、物轉變、緣明了轉變、所作明了轉變、是を九と爲す。一切の外道は

是見に囚るが故に、有無轉變の論を起す。此中、形轉變とは、謂はく形別意見なり、譬へ

ば金を以て莊嚴の具を作るに、環釧瓔珞種種同じからず、形狀殊有るも金體は易るこ

と無きが如く、一切法の變も亦復是の如し、諸の餘の外道は種種に計著すれども、皆是の

如きにも非ず亦別異にも非ず、但分別するが故に、一切轉變す。是の如く應に知るべし、

譬へば乳酪酒果等の熟するが如き、外道は此皆轉變有りと云ふ。而も實は若は有、若は無

有ること無し。自心の所見にして外物無きが故に。此の如きは皆是愚迷の凡夫の自ら分別

する習氣より起る、實は一法の若は生若は滅なるもの無し。幻夢に囚つて見る所の諸色の

如く、石女の兒に生死有りと説くが如し。

爾時、世尊は重ねて頌を説きて言はく、

形は處と時によりて轉變す。大種及び諸根は

中有に漸次に生ずとは、妄想にして明智に非ず

諸佛は緣起及び、世間を分別せず

【中有】 四有の一なり。四有とは生有、本有、死有、中有の四なり。中有とは死有と生有の中間に起る身心をいふ。

但諸緣世間は、乾闥婆城の如し

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、唯願くば如来は我が爲に、一切の法に於ける深密の義、及び解義の相を解説し、我及び諸の菩薩摩訶薩をして、善く此法を知り、言の如くに義を取り、深密の執著に墮せず、文字言語の虚妄の分別を離れしめ、普く一切諸佛の國土に入り、力通自在に總持の印する所、覺慧善く十無盡の願に住し、無功用を以て種種に變現し、光明照耀して、日月摩尼地水火風の如く、諸地に住して分別の見を離れ、一切の法は、幻の如く夢の如しと知り、如来位に入りて普く衆生を化し、諸法の虚妄不實なるを知らしめ、有無品を離れ生滅の執を斷じ言説に著せずして、所依を轉ぜしめたまへ。」佛言はく、「諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。大慧、一切の法に於て、言の如くに義を取り、執著深密なるもの其數無量なり。謂ゆる相執著、緣執著、有非有執著、生非生執著、滅非滅執著、乘非乘執著、爲無爲執著、地地自相執著、自分別現證執著、外道の宗の有無品執著、三乘一乘執著なり。大慧、此等の密執の無量の種あり。皆是れ凡愚の自ら分別密に執著す。而も此諸の分別は、蠱の繭を作るが如く、妄想の絲を以て自らを纏じ他を纏す。有無に執著するに欲樂は、堅くして密なり。大慧、此中實に密非密の相無し。菩薩摩訶薩は、一切の法を見るに、寂靜に住するを以ての故に。分別無きが故に。若し諸法は唯心の所見を了じ外物有る無く、皆同じく無相なるを、隨順に觀察せば、若は有若は無の分別密執に於て、悉く寂靜なるを見ん。是故に密非密の相有る無

【五趣】五道。即ち地獄、餓鬼、畜生、人、天の五種。【三和合】根、境、識の三事の和合を云ふ。

し。大慧、此中には縛も無く亦解有ることも無し。實を了らざる者の縛解を見るのみ。何を以ての故に。一切の諸法は、若し有なるも若し無なるも、其體性を求むるに不可得なるが故に。復次に大慧、愚癡の凡夫には三種の密縛あり。謂はく、貪恚癡及び愛と、來生の貪喜と俱なり。此密縛を以て諸の衆生をして五趣に續生せしむ。密縛若し斷ずれば、是則ち密非密の相有ること無し。復次に大慧、若し三和合の縁に執著すること有らんか、諸識の密縛は次第に起らん。執著有るが故に則ち密縛有り。若し三の解脫を見れば、三和合の識を離れ、一切の諸の密は皆悉く生ぜざらん。』

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

不實の妄分別、是を名けて密相と爲す

若し能く實の如くに知らば、諸の密網皆斷ぜん

凡愚は了ること能はずして、言に隨つて義を取る

譬へば蠶の繭に處るが如く、妄想して自ら纏縛するなり

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に向して言さく、世尊、世尊の説きたまふが如くんば、種種の心に由りて諸法を分別すれども、諸法は自性有るに非ず、此れ但妄計のみ。世尊、若し但妄計のみにして諸法無くば、染淨の諸法も將た悉く壞すること無けん。佛言はく、大慧、是の如く是の如し、汝が所説の如し。一切の凡愚は諸法を分別す、而も諸法は是の如く有なるに非ず、此れ但妄執のみにして性相有ること無し。然れども諸の聖者は、

聖慧の眼を以て如實に諸法の自性有ることを知見す。大慧白して言さく、諸の聖人の若きは、聖慧の眼を以て諸法の性ありと見ると、天眼肉眼に非ず、凡愚の分別する所と同じか
らず。云何が凡愚は分別を離るることを得ん。諸聖は法を覺了すること能はざるが故に。
世尊、彼は顛倒に非ず、不顛倒に非ず。何を以ての故に。聖人所見の法を見ざるが故に。
聖見は有無の相を遠離するが故に。聖も亦凡の分別する所の如く、是の如くなるを得ざる
が故に。自ら行する所の境界の相に非ざるが故に。彼も亦諸法に性相有り。妄執の性の如く
に顯現すと見るが故に。有因及至無因と説かざるが故に。諸法の性相の見に墮するが故に。
世尊、其餘の境界も既に此に同じからず。是の如くんば則ち無窮の失を成ず。孰か能く法
に於て性相を了知せん。世尊、諸法の性相は分別に依らず。云何が分別を以ての故に諸法
有りと云ふや。世尊、分別の相異なるば諸法の相異なる。因は相似せざるに、云何が諸法
は分別に由らん。復何を以ての故に、凡愚の分別は是の如く有に非ざるに、前も是言を作
すや。衆生をして分別を捨てしめんが爲の故に、分別所見の法相の如く、是の如きの法無
しと説くこと。世尊、何が故に諸の衆生をして有無の見に執著する所の法を離れしめ、而
も復聖智の境界に執著し、有見に墮せしめたまふや。何を以ての故に。寂靜空無の法を
説かずして、聖智の自性の事を説きたまふが故に。佛言はく、大慧、我は寂靜の空法
を説かざれども、有見に墮するに非ず。何を以ての故に。已に聖智の自性の事を説くが故
に。我は衆生の無始時より以來、有に計著するが爲に、寂靜の法に於て聖事を以て説き、

【三脱門】 三解脱門をいふ。

其をして聞き已りて恐怖を生ぜず、能く如實に寂靜の空法を知り、惑亂の相を離れて唯識の理に入り、其見る所、外法有ること無きを知り、三脱門を悟りて、如實の印を獲、法の自性を見て、聖の境界を了り、有無一切の諸著を遠離せしむ。

復次に大慧、菩薩摩訶薩は、一切の諸法を皆悉く不生なりと成立すべからず。何を以ての故に。一切の法は本有ること無く、及び彼宗は生相に因るが故に。復次に大慧、一切の法は不生なり、此言を自ら壞す。何を以ての故に。彼宗は待ありて生ずるが故に。又彼宗は即ち一切法の中に入る。不生の相も亦不生なるが故に。又彼宗は諸分にして成ずるが故に。又彼宗の「有無の法は皆不生なり」とは、此宗にては即ち一切法の中に入る。有無の相も亦不生なるが故に。是故に、「一切の法は不生なり」と。此宗は自ら壞す。應に是の如く立すべからず。諸分は過多きが故に、展轉の因は異相なるが故に、不生の如く、一切法の空無自性も亦是の如し。大慧、菩薩摩訶薩は、應に一切の法は幻の如く夢の如しと説くべし。見れども見えざるが故に、一切皆此惑亂の相なるが故に。愚夫の爲に恐怖を生ずるを除く、大慧、凡夫は愚癡にして、有無の見到墮す、彼に於て驚恐を生じ、大乘を遠離せしむること莫れ。」

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、
自性も無く説も無く、事も無く依處も無しとは
凡愚の妄分別にして、惡覺死屍の如し

【三有】三有は法體なき假名なるに衆愚はこれによつて妄分別を爲すを云ふ。

一切の法は不生なりとは、外道の成立する所なり

彼が所有の生は、縁の所成に非ざるが故に

一切の法は不生なりと、智者は分別せず

彼宗は生に因るが故に、此覺は便ち壞す

譬へば目に翳あるものの、妄想して毛輪を見るが如し

諸法も亦是の如く、凡愚の妄分別なり

三有は唯假名のみ、實の法體有ること無し

此假の施設に由りて、分別して妄に計度す

假名の諸の事相は、心識を動亂す

佛子は悉く超過し、遊行するに分別無し

水無きに水相を取るは、斯れ渴愛に由りて起る

凡愚の法を見るも爾り、諸聖は則ち然らず

聖人の見は清淨にして、三解脱を生じ

生滅を遠離して、常に無相の境を行く

無相の境を修行して、亦復有無無く

有無悉く平等なり、是故に樂果を生ず

云何が法の有無。云何が平等を成ずる

【内外】内身、外境をいふ。

若し心に法を了らざれば、内外斯に動亂し
了り已れば即ち平等にして、亂相爾時に滅す

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、佛の説きたまふ所の如きは、若し境界は但是れ假名にして、都て不可得なりと知らば則ち所取無し。所取無きが故に亦能取無し、能取所取二俱に無きが故に、分別を起さざるを名けて智と爲す。世尊、何が故に彼智は境を得ざる。一切諸法の自相共相一異の義を了ること能はざるが爲の故に得ずと言ふや。諸法の自相共相は種種不同にして、更に相隱蔽するを以て得ずと爲すや。山巖石壁簾幔帷帳の覆隔する所となるが爲に得ずと爲すや。極遠極近老小盲冥にして諸根の不具なるが爲に得ずと爲すや。若し諸法の自相共相一異の義を了らざるが故に得ずと言はば、此れ智と名けず、應に是れ無智なるべし。境界あり、而も知らざるを以ての故に。若し諸法の自相共相は、種種不同にして、更に相隱蔽するを以て得ずと言はば、此れ亦智に非ず。境を知るを以て智と名け、知らざるは名けざるが故に。若し山巖石壁簾幔帷帳の爲に覆隔せられ、極遠極近老小盲冥の爲に知らずんば、彼亦智に非ず。境界あり、智の具足せずして知らざるを以ての故に。佛言はく、「大慧、此は實に是れ智なり、汝の説の如くに非ず、我の説く所は隱覆の説に非ず。我「境界は唯是れ假名にして不可得なり」と言ふは、但是心の所見なることを了するを以て、外法の有無の智慧の中には畢竟じて得ること無し。得ること無きが故に、爾焰は起らず、三脫門に入りて智體も亦忘す。一切の覺想は凡夫の

無始より已來、戲論重習によりて、外法の若は有、若は無、種種の形相に計著するが如くに非ず、是の如くして知るを名けて、諸法は唯心の所現なることを知らずと爲す。我我所を分別する境智に著して、外法は是れ有是れ無なりと知らず、其心斷見の中に住するが故に。是の如きの分別を捨離せしめんが爲に、一切の法は唯心の建立と説く。

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

若し所縁有るに、智慧もて觀見せざれば

彼は無智にして、智に非ず、是を妄計著と名く

無邊と相互に瞶すと、障礙及び遠近の

智慧もて見ることを能はずんば、是を名けて邪智と爲す

老小の諸根實じて、實には境界有るも

智慧を生ずる能はずんば、是を名けて邪智と爲す

『復次に大慧、愚癡の凡夫は無始の虚偽邪惡の分別に惑せられ、如實及び言説の法を了らず、心外の相を計して方便の説に著し、清淨眞實にして四句を離れたる法を修習すること能はず。大慧白して言さく、是の如く是の如し、誠に尊敎の如し。願くば我が爲に如實の法及び言説の法を説き、我及び諸菩薩摩訶薩をして、此二法に於て、善巧を得しめたまへ。外道二乗の能く入る所に非ず。佛言はく、諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。大慧、三世の如來に二種の法あり。謂はく、言説の法及び如實の法なり。言説の法とは、衆

【二邊】中道を離れて一方に傾くを邊と云ふ。有無二邊。

【盧迦耶陀】ローカーヤタ(Lokaya) 順世外道のこと。印度哲學の一派にして聖教を否定し道徳を認めず、唯極端なる感官的快楽主義を主張するもの。

【釋提桓因】梵音ニヤクラ、デーブラ(Nakra-devanam Indra)能天主と譯す。帝釋と同じ。

生の心に隨つて、種種諸の方便の教を説くを謂ふ。如實の法とは、謂はく、修行者は心の所現に於て諸の分別を離れ、一異俱不俱の品に墮せず、一切の心意意識を超越し、自覺聖智の所行の境界に於て、諸の因縁に相應する見相を離る。一切の外道、聲聞緣覺の二邊に墮するものの知ること能はざる所なり。是を如實の法と名く。此二種の法を汝及び諸の菩薩摩訶薩は。當に善く修學すべし。」

爾時、世尊復頌を説きて言はく、

我は二種の法を説く、言教及び如實なり
教法は凡夫に示し、實は修行者の爲にす

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、如來は一時盧迦耶陀の咒術詞論の但能く世間の財利を攝取し、法利を得ざるものに、親近し承事し供養すべからずと説きたまふ。世尊、何が故に是の如く説きたまふや。」佛言はく、「大慧、盧迦耶陀の有らゆる詞論は、但文句を飾りて凡愚を誑惑し、世間の虚妄の言説に聽順し、義の如くならず理に稱はず、眞實の境界に證入すること能はず、一切の諸法を覺了すること能はず、恆に二邊に墮して自ら正道を失し亦他をして失せしめ、諸趣に輪廻して永く出離せず。何を以ての故に。諸法は唯心の所現なることを了らす、外境に執著して、分別を増すが故に。是故に我は「世論の文句因縁は莊嚴にして、但愚夫を誑はし、生老病死の憂悲等の患を解脱せしむること能はず」と説く。大慧、釋提桓因は廣く衆論を解して自ら諸論を逃れり。彼世

【橋戸迦】梵音、
カウシカ (Kauśika) 帝釋の姓なり。

【亦來去無し】佛の所説は外道の如く世説にも非ず、更に來去の相を説くものにも非ず、去來を説く意なり。

論者に一弟子あり、現じて龍身と作り、釋天宮に詣でて論宗を立し、要言すらく、「橋戸迦、我、汝と共に論せん。汝若し我に如かすんば當に汝が千幅の輪を破るべく我若し如かすんば一一の頭を斷じて以て所屈を謝せん」と。是語を説き已りて、即ち論法を以て帝釋を摧伏し、千幅の輪を壞とし還た人間に來れり。大慧、世間の言論は因喻もて莊嚴し、乃至能く龍形を現じ、妙なる文詞を以て諸天及び阿修羅を迷惑し其をして生滅等の見に執著せしむ、況んや人に於てをや。是故に大慧、應に親近し承事し供養すべからず。彼は能く苦の因を生ずるを以ての故に。大慧、世論は唯身覺の境界を説くのみ。大慧、彼世論に百千の字句あり、後の末世の中に惡見乖離し邪衆崩散して、分れて多部と成り各自因を執す。大慧、餘の外道は能く教法を立するに非ず、唯盧迦耶陀は百千の句を以て廣く無量の差別の因相を説く。如實の理に非ず、亦自らは是れ世法を惑はすことを知らざるなり。」

爾時、大慧白して記さく、「世尊、若し盧迦耶陀の所造の論は、種種の文字因喻もて莊嚴し、自宗に執著し、如實の法に非ず、外道と名けば、世尊も亦世間の事を説きたまふ。謂はく、種種の文句言詞を以て廣く説きたまふに、十方一切の國土の天人等衆く來り集會せり。是れ自智所證の法に非ず。世尊も亦外道の説と同じからずや。」佛言はく、「大慧、我は、世説に非ず、亦來去無し、我は諸法の來去を説く。大慧、來るものは集生じ、去るものは壞滅す。來去無し、此れ即ち名けて不生不滅と爲す。大慧、我の説く所は、外道の分別の中に墮すると同じからず。何を以ての故に。外法の有無に著する所無きが故に、

【唯自心を了りて】
ただ自心の所現なることを知りての意。

【瞿曇】梵音ゴータマ (Gotama or Gautama) 地最勝と譯す。釋尊の稱。【初の世論】外道最初の世論のこと。以下世論三十種を擧ぐ。

【非擇滅】非擇滅無爲なり。前出。

唯自心を了りて二取を見ず、相境を生ぜず、空、無相、無願の門に入りて、解脱するが故に。大慧、我れ憶ふに時有りて一處に住せしに、世論の婆羅門あり、我が所來至し、遽に我れ問ひて言はく、「瞿曇、一切は是れ所作なりや」と。我れ時に報へて言はく、「婆羅門、一切は所作なりとは是れ初の世論なり。」又我れ問ひて言はく、「一切は所作に非ざるや。」我れ時に報へて言はく、「一切は所作に非ずとは是れ第二の世論なり。」彼復問ひて言はく、「一切は常なりや、一切は無常なりや、一切は生なりや、一切は不生なりや。」我れ時に報へて言はく、「是れ第六の世論なり。」彼復問ひて言はく、「一切は一なりや、一切は異なりや、一切は俱なりや、一切は不俱なりや、一切は皆種種の因縁によりて生を受くるや。」我れ時に報へて言はく、「是れ第十一の世論なり。」彼復問ひて言はく、「一切は有記なりや、一切は無記なりや。我有りや、我無きや。此世有りや、此世無きや。他世有りや、他世無きや。解脱有りや、解脱無きや。是れ刹那なりや、非刹那なりや。虚空と涅槃と及び非擇滅とは、是れ所作なりや、非所作なりや、中有有りや、中有無きや。」我時に報へて言はく、「婆羅門、是の如きは皆汝の世論にして、我が説く所に非ず。婆羅門、我は無始の戲論と諸惡の習氣に因りて、三行を生ずと説く。唯是れ自心の所現なることを了せずして、外法を取らば實に得べき無し。外道の説の如くんば、我及び根と境との三、合して生ず。我は是の如くならず、我は因を説かず、無因を説かず、唯妄心に縁りて能所取を以て、縁起を説くのみ。汝及び餘の我に取著する者の能く測る所にあらず。」大慧、虚空も涅槃及び非擇

滅も、但三數のみ有りて本體性無し、何に況んや作と非作とを説かん。大慧、爾時、世論の婆羅門は、復我に問ひて言はく、「無明愛業を因縁と爲すが故に三有有りや。因無しと爲すや。我言はく、「此二も、亦是れ世論なり。」又我に問ひて言はく、「一切の諸法は皆自相及び共相に入るや。」我時に報へて言はく、「此れ亦世論なり。婆羅門、乃至少も心識の流動するありて外境を分別せば、皆是れ世論なり。」大慧、爾時、彼婆羅門は復我に問ひて言はく、「頗し是れ世論に非ざる者有りや不や。一切の外道の有らゆる詞論、種種の文句因縁の莊嚴は皆我が法中より出でざるもの莫し」と。我報へて言はく、「有り、汝が所許に非ず、世の不許に非ず、種種の文句を説かざるに非ず、義理相應すれば不相應に非ず。彼復問ひて言はく、「豈に世許にして世論に非ざる有りや。」我れ答へて言はく、「有り、但汝及び一切の外道の能く知る所に非ず。何を以ての故に。外法に於て、虚妄に分別して執著を生ずるを以ての故に。若し能く有無等の法は、一切皆是れ自心の所現なることを了達せば、分別を生ぜず、外境を取らず、自處に於て住せん。自處に住すとは、是れ不起の義なり。何に於てか不起なる。分別を起さざるなり。此は是れ我が法にして、汝が有に非ず。婆羅門、略して之を言へば、何處かの中に隨つて、心識往來し、死生求戀し、若は受、若は見、若は觸、若は住の種種の相を取り、和合相續して、愛と因とに於て、計著を生ずるは、皆汝が世論にして、是れ我が法に非ず。大慧、世論の婆羅門は是の如きの問を作せるに、我は是の如く答へたり。我が自宗の實法を問はずして、默然として去り、是念を作して言はく、

【諸の見】
邪見。

諸種の

「沙門嬰曇は尊重すべき無し、一切の法は、無生なり、無相なり、無因なり、無縁なり、唯是れ自心分別の所見のみ、若し能く此を了らば分別は生ぜずと説く」大慧、汝も今亦復我に此義を問へ、何が故に諸の世論に親近するものは、唯財利を得て法利を得ざるや」と。大慧白して言さく、「言ふ所の財法とは是れ何等の義なる。佛言はく、「善い哉、汝は即ち能く未來の衆生の爲に是義を思惟す。諦に聽け諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。大慧、謂ゆる財とは、觸るべく受くべく取るべく味ふべし。外境に著し、二邊に墮在し、食愛と生老病死の憂悲苦惱を増長せしむ。我及び諸佛は説いて財利と名く。世論に親近する者の獲得する所なり。何をか法利と云ふ。謂はく、法は是れ心なることを了りて、二無我を見、相を取らず、分別有ること無く、善く諸地を知りて心意識を離れ、一切の諸佛の共に灌頂する所と爲り、十無盡の願を具足し受行し、一切の法に於て悉く自在を得る、是を法利と名を。是く以て一切諸見の戲論分別に墮せず、常に二邊を斷ず。大慧、外道の世論は、諸の癡人を二邊に墮在せしむ。謂はく、常及び斷なり。無因論を受けては則ち常見を起し、因の壞滅を以ては則ち斷見を生ず。我れ生住滅を見ざる者を説いて法利を得と名く。是を財法の二差別の相と名く。汝及び諸の菩薩摩訶薩は應に勤めて觀察すべし。」

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、
衆生を調伏し、攝し、戒を以て諸の惡を降し
慧もて諸の見を滅ぼし、解脫を増長することを得

【自ら成立する】
以て宗とするものを成立すること能はず。

【外道は種種に分別する】外道は何れの法を説いて分別涅槃とするやの意。

外道の虚妄の説は、皆是れ世俗の論なり

作と所作とを横計して、自ら成立すること能はず

唯我が一宗のみは、能所に著せず

諸弟子の爲に説いて、世論を離れしむ

能取所取の法は、唯心にして所有無く

二種皆心の現、斷常不可得なり

乃至も心の流動する有らば、是れ即ち世論と爲す

分別を起さざるもの、是人にして自心を見ん

來とは事の生ずるを見、去とは事の現ぜざるなり

明かに來去を了知せば、分別は起らざるなり

有常及び無常、所作と無所作と

此世と他世等は、皆是れ世論の法なり

爾時、大慧菩薩摩訶薩復佛に白して言さく、三世尊、佛は涅槃を説きたまふ、何等の法を

説きてか以て涅槃と爲して、而して諸の外道は種種に分別するや、佛言はく、大慧、

諸の外道の分別する涅槃の如きは、涅槃の相に隨順せず。諦に聽け諦に聽け、當に汝が

爲に説くべし。大慧、或は外道有りて言はく、法の無常を見て境界を食らず、蘊界處を滅

して心心所の法をも現在前せず、過現未來の境界を念はず、燈の盡くるが如く、種の敗す

【方】外道方論師の所説にして、即ち天地萬物は方より生ずとなし、又天地萬物滅すれば方に還るとし、その歸する所を涅槃とす。

【風の止むが如き】風仙論師の説なり、常無常の見を起さず、或者は諸法を分別して常無常の見を起さざるを涅槃と云ふの意。

【士夫】梵音フルシヤ (Purusa) の異譯即ち數論派で萬有成立の二元の一とする神我のこと。

【求那】グナ (Guna) 徳と譯す。

るが如く、火の滅するが如くにして、諸取起らず分別生ぜずして涅槃の想を起す。大慧、壞を見るを以て名けて涅槃と爲すに非ず。或は謂はく、方に至るを涅槃を得と名くと。境界の想を離ること猶し風の止むが如し。或は謂はく、能覺所覺を見ざるを名けて涅槃と爲すと。或は謂はく、分別して常無常の見を起さざるを涅槃を得と名くと。或は説をなして言はく、諸相を分別して苦を發生す、しかも自心の所現なるを知ることも能はず、知らざるを以ての故に、相を怖畏して無相を求め、深く愛樂を生じ、執つて涅槃と爲すと言ふ。或は謂はく、内外の諸法は、自共相去來現在性有りて、壞せざるを覺知して涅槃の想を爲すと。或は我、人、衆生、壽命及び一切の法は壞滅有ること無しと計するを涅槃の想と爲す。復外道あり、智慧有ること無く、自性及以士夫のみあり、求那轉變して一切の物と作ることを計して以て涅槃と爲す。或は外道あり、福と非福の盡くるを計し、或は智慧に由らずして、諸の煩惱の盡くるを計し、或は自在は是れ實の作者なりと計して以て涅槃と爲す。或は謂はく、衆生は展轉して相生ず、此を以て因と爲す更に異因無しと。彼は無智なるが故に、覺了すること能はず、了せざるが故に執して涅槃と爲す。或は諦道を證する虚妄分別を計して涅槃と爲す。或は求那と求那とは共に和合して一性なり異性なり俱なり不俱なりと計し執して涅槃と爲す。或は諸物は自然より生ずと計するもの有り。孔雀の文彩、棘針鋸利、寶の生ずる處より種種の寶を出す、是の如き等の事は、是れ誰か能く作るものぞと、即ち自然を執して以て涅槃と爲す。或は謂はく、能く二十五諦を解すれば即ち涅槃を

【二十五論】印度
 藏論外道にて宇宙
 萬有を二十五種に
 分ちたるもの。自
 性（宇宙開發の根
 本）、大（智慧）、我
 慢、五大（地水火
 風空）、五唯（色聲
 香味觸）、五知根
 （眼耳鼻舌身根）、
 五作根（舌根、手
 根、足根、男女根、
 大小遺根）、心平等
 根（心識）、神我、宇
 宙精神、等なり。
 【四句】四句分別
 即ち單、單、俱、
 非の四範疇に依り
 て分別すること。
 例へば有（單）空
 （單）亦有非空（俱）
 非有非空非空（如
 きもの）を云ふ。

得と。或は説をなすもの有り。言はく、能く六分を受けて、衆生を守護す、斯を涅槃を得るとす。或は説をなすもの有り、言はく、時は世間を生ず。時は即ち涅槃なりと。或は有物を執して以て涅槃と爲し、或は無物を計して以て涅槃と爲す。或は有物無物を計著して涅槃と爲す者有り。或は諸物と涅槃とは別無しと計して涅槃の想と爲す。大悲、復彼外道の所説に異なるもの有り。一切智を以て大師子吼して説かん、能く唯心の所現なることを了達して、外境を取らず、四句を遠離して、如實の見到住し、二邊に墮せずして、能所取を離れ、諸量に入らず眞實に著せず。聖智の現はす所の證法に住し、二無我を悟りて二煩惱を離れ、二種の障を淨め轉じて諸地を修して佛地に入り、如幻等の諸の大三昧を得て永へに心意及以意識を越ゆるを涅槃を得と名く。大悲、彼諸の外道の虚妄なる計度は、理の如くならず智者の棄つる所なり。皆二邊に墮して涅槃の想を作す。此に於て若は住若は出有ること無し。彼諸の外道は皆自宗に依つて妄覺を生じ、理に違背して成就する所無く、唯心意をして勤散往來せしめ、一切涅槃を得る者有ること無し。汝及び諸の菩薩は宜しく應に遠離すべし。

爾時、世尊重ねて頷を説きて言はく、

外道の涅槃の見は、各分別を異にす

彼は唯是れ妄想のみにて、解脱の方便無し

諸の方便を遠離し、無縛の處に至らずして

妄りに解脱の想を生ず、而も實には解脱無し
外道の成立する所は、衆智各取を異にす
彼は悉く解脱無し、愚癡の妄分別のみ
一切の癡なる外道は、妄りに作と所作とを見て
悉く有無の論に著す、是故に解脱無し
凡愚は分別を樂ひ、眞實の慧を生ぜず
言説は三界の本にして、眞實は苦を滅するの因なり
譬へば鏡中の像の現すと雖も實に非ざるが如く
習氣の心鏡の中に、凡愚は二有りと見るなり
唯心の現なることを了せざるが故に、二の分別を起す
若し唯是れ心なることを知らば、分別は則ち生ず
心は即ち是れ種種なれど、相と所相とを遠離す
愚の分別する所の如きは、見ると雖も而も見る事無し
三有は唯分別にして、外境は悉く有ること無く
妄想種種に現すれども、凡愚は覺ること能はざるなり
經經に分別を説くは、但是れ名字を異にするのみ
若し言語を離るれば、其義亦不可得ならん

大乘入楞伽經 卷第五

大周于闐國三藏法師實叉難陀勅を奉じて譯す

無常品第三之二

【無常品之二】この章より斷惑證眞菩提の果を説明す【應】應供、梵語アルハト(Ārya)如來十號の一。【正等覺】梵語サムマサクサンブツダ(Sammāsambuddha) 如來十號の一。

【作法】被造物の意なり。

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、願くば我が爲に如來、應、正等覺の自覺の性を説き、我及び諸の菩薩摩訶薩をして、善巧を得て自ら悟り、他をも悟らしめたまへ。佛言はく、「大慧、汝が問ふ所の如く、當に汝が爲に説くべし。』大慧言さく、「唯、世尊、如來、應、正等覺は作、非作と爲んや、果と爲んや、因と爲んや、相、所相と爲んや、説、所説と爲んや、覺、所覺と爲んや、是の如き等、異、不異と爲んや。佛言はく、「大慧、如來、應、正等覺は、作に非ず非作に非ず、果に非ず因に非ず、相に非ず所相に非ず、説に非ず所説に非ず、覺に非ず所覺に非ず。何を以ての故に、俱に過有るが故に。大慧、若し如來は是れ作ならば則ち是れ無常なり。若し是れ無常ならば、一切の作法は、應に是れ如來なるべし。我及び諸佛は皆可すに忍びざるなり。若し作法に非ずんば則ち體性無く、所修の方便は、悉く空、無益ならん。兎の角石女の子に同じ。因の成を作すに非ざるが故に。若し因に非ず、果に非ずんば、則ち有に非ず、無に非ず。若し有に非ず、無に非ずんば

則ち四句を超過す。四句を言ふは但世間に隨つて言説有るなり。若し四句を超過せば、唯
言説有るのみ、則ち石女の兒の如し。大慧、石女の兒とは、唯言説有るのみにして四句に
墮せず。墮せざるを以ての故に度量すべからず。諸の有智の者は應に是の如く如來の有ら
ゆる一切の句義を知るべし。大慧、我が所説の諸法無我の如きは、諸法の中に我性あるこ
と無きを以ての故に無我と説く。是諸法の自性有る無きに非ず、如來の句義も應に知るべ
し、亦然り。大慧、譬へば牛に馬性無く、馬に牛性無きが如く、自性無きに非ず、一切の諸
法も亦復是の如く、自性有ること無し。而も有に非ずして即ち有なり。諸の凡愚の能く知
る所に非ず。何が故に知らざる、分別を以ての故に。一切の法の空なるも、一切の法の無生
なるも、一切の法の無自性なるも、悉く亦是の如し。大慧、如來と蘊とは、異に非ず、異
に非ず。若し不異なれば應に是れ無常なるべし。五蘊の諸法は是れ所作の故に。若し異な
らば、牛の二角の如く、異不異あらん。互に相似なるが故に異ならず、長短別なるが故に
異有り。牛の右角は左に異なり、左角は右に異なり、長短同じからず、色相各別なる
が如し。然も亦異ならず。蘊に於けるが如く、界處等に於ける一切の法も亦是の如し。大
慧、如來とは解脫に依つて説く。如來と解脫とは異にあらざる不異にあらざる。若し異ならば
如來は便ち色相と相應せん。色相と相應せば、即ち是れ無常ならん。若し不異ならば、修
行者の見は應に差別無かるべし、然も差別有るが故に不異に非ず。是の如く知と所知とは
異に非ず、不異に非ず。若し異に非ず、不異に非ずんば、則ち常に非ず無常に非ず、作に非ず

【攀緣】猿の木の枝に轉轉して休息なきが如く、心外境に轉ぜられて靜平を得ざるを云ふ

所作に非ず、爲に非ず無爲に非ず、覺に非ず所覺に非ず、相に非ず所相に非ず、蘊に非ず異蘊に非ず、説に非ず所説に非ず、一に非ず異に非ず、俱に非ず不俱に非ず。是義を以ての故に、一切の量を超ゆ。一切の量を超ゆるが故に、唯言説有るのみ。唯言説有るのみの故に、則ち生有ること無し。生有ること無きが故に則ち滅有ること無し。滅有ること無きが故に、則ち虚空の如し。大慧、虚空は作に非ず所作に非ず。作に非ず所作に非ざるが故に攀緣を遠離す。攀緣を遠離するが故に、一切の諸の戲論の法を出過す。一切の諸の戲論の法を出過するは、即ち是れ如來なり。如來は即ち是れ正等覺の體なり。正等覺者は永へに一切諸根の境界を離る。

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

諸根の量を出過し、果に非ず亦因に非ず

相及び所相等、是の如きは悉く皆離れたまふ

蘊縁と正覺との一異は、能く見るもの無し

既に見者有ること無ければ、云何が分別を起さん

作に非ず非作に非ず、因に非ず非因に非ず

蘊に非ず不蘊に非ず、亦餘物を離れず

一法の體有るに非ず、彼分別の見の如し

亦復是れ無に非ず、諸法の性も是の如し

【七地の菩薩】菩薩は十地中、第七遠行地に於ては、深く無相觀に住するが故に、菩提を求むべきなく、下、衆生を度すべきなく、全く無相無寂の理に沈みて修行する能はず。これを七地沈空の難と云ふ。

【三阿僧祇】阿僧祇は阿僧企耶とも云ふ。梵音アサンクフヤ (Asankhy) ク無數、無央數と譯す。印度の數名なり。

有を待つが故に無を成じ、無を待つが故に有を成す。無既に取るべからずんば、有も亦説くべからず。我が無我を了せずして、ただ語言に著すれば、彼二邊に溺れて、自らを壊し、世間を壊せん。若し能く此法を見れば、則ち一切の過を離れん。是を名けて正觀にして、大導師を毀たすと爲す。

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、佛經中に於るが如く、不生不滅を分別し攝取するは、此れ即ち是れ如來の異名を言へるものなりや。世尊、願くば我が爲に説きたまへ。不生不滅ならば此れ則ち無法なり。云何が是を如來の異名と説かん。世尊の説きたまふが如くんば、一切の諸法は不生不滅なり。當に知るべし、此れ則ち有無の見到す。世尊、若し法不生ならば則ち取るべからず、少法有ること無し、誰か是れ如來なる、唯願くば世尊、我が爲に宣説したまへ。」佛言はく、「諦に聽け、當に汝が爲に説くべし、大慧、我が説く如來は是れ無法に非ず。亦不生不滅を攝取するに非ず、亦縁を待たず、亦義無きに非ず。我は無生は即ち是れ如來の意生法身の別意の名なりと説く。一切の外道も聲聞も獨覺も七地の菩薩も其義を了せざるなり。大慧、譬へば帝釋地及び虚空乃至手足の如くし、一一の物に隨つて各多名あり、名多きを以て多體有るに非ず、亦體無きにも非ず、大慧、我も亦是の如く此娑婆世界に於て、三阿僧祇百千の名號あり。諸の凡愚の人は聞く

【牛王】 佛をいふ
【毘紐】 宇宙維持
の神なり、梵語キ
ラヌヌ(、五)、パ
ラモン(ノ)神。

【迦毘羅】 梵音カ
ヒラ、Kapila) 黄
頭黄髮と譯す。印
度の古仙人にして
數論外道の祖なり

【俱毘羅】 梵音ク
ベーラ (Kubera)
毘沙門天の一なり

【戔迦】 梵音スエ
カ(、五)、カ、鵝鴨の
義。王名、バラモ
ン苦行者等の意。

【因陀羅】 梵音イ
ンドラ (Indra) 帝
釋と譯す。

【此】 この世界。

【釋提羅】 梵音シ
ヤクラ(、五)、因
陀羅と同じく帝釋
の異名なり。

と雖も説くと雖も是れ如來の異名なることを知らず。其中或は如來なりと知る者、無師な
りと知る者、導師なりと知る者、勝導なりと知る者、普導なりと知る者、是れ佛なりと知
る者、牛王なりと知る者、梵王なりと知る者、毘紐なりと知る者、自在なりと知る者、是
れ勝なりと知る者、迦毘羅なりと知る者、眞實邊なりと知る者、無盡なりと知る者、瑞相
なりと知る者、風の如しと知る者、火の如しと知る者、俱毘羅の如しと知る者、月の如し
と知る者、日の如しと知る者、王の如しと知る者、仙の如しと知る者、戔迦なりと知る者、
因陀羅なりと知る者、明星なりと知る者、大力なりと知る者、水の如しと知る者、無滅
なりと知る者、無生なりと知る者、性空なりと知る者、眞如なりと知る者、是れ諦なりと
知る者、實性なりと知る者、實際なりと知る者、法界なりと知る者、涅槃なりと知る者、
常住なりと知る者、平等なりと知る者、無二なりと知る者、無相なりと知る者、寂滅なり
と知る者、具相なりと知る者、因縁なりと知る者、佛性なりと知る者、教導なりと知る者、
解脱なりと知る者、道路なりと知る者、一切智なりと知る者、最勝なりと知る者、意成身
なりと知る者あり。是の如き等の三阿僧祇百千の名號を満足して不増不減なり。此、及び
餘の諸の世界の中に於て、能く我を水中の月の不入不出なるが如しと知るもの有り。但
諸の凡愚は、心、二邊に没して了解すること能はず。然も亦尊重し承事し供養すれども
善く名字句義を解せず、言教に執著して眞實に昧く、謂はく、無生無滅は是れ體性無しと。
是れ佛の差別の名號は、因陀羅釋提羅等の如きを知らず、言教を信するを以て眞實に昧く

一切の法に於て言の如くに義を取る。

彼諸の凡愚は是の如きの言を作さく、義は言説の如く、義と説とは異なること無し、何を以ての故に。義は體無きが故に。是人は言音の自性を了せず、謂はく、言は即ち義にして、義と體とは別無し」と。大慧、彼人は愚癡にして、言説は是れ生、是れ滅なるも、義は生滅に非ざることを知らず。大慧、一切の言説は、文字に墮すれども、義は則ち墮せず。有を離れ無を離るるが故に。生無く體無きが故に。大慧、如來は文字に墮するの法を説きたまはず。文字は有無不可得なるが故に。唯文字に墮せざる者を除く。大慧、若し人有り、法を説いて文字に墮せば、是れ虚誑の説なり。何を以ての故に。諸法の自性は文字を離るるが故に。是故に大慧、我が經中に、我は諸佛及び諸菩薩と與に一字を説かず一字を答へずと説く。所以は何ん。一切の諸法は文字を離るるが故に、義に隨はずして分別して説くに非ざればなり。大慧、若し説かずんば教法は則ち斷ぜん。教法斷ずれば則ち聲聞緣覺菩薩諸佛無からん。若し總て無ければ、誰か説き誰の爲にかせん。是故に大慧、菩薩摩訶薩は、應に文字に著せず、宜に隨つて説法すべし。我及び諸佛は、皆衆生の煩惱と解と欲の種種不同なるに隨つて、爲に開演し、諸法は自心の所見にして、外に境界無きを知らしめ、二の分別を捨てて、心意識を轉ぜしむ。聖自證の處に成立せんが爲に非ず。大慧、菩薩摩訶薩は應に義に隨ふべく文字に依ること莫かるべし。文字に依る者は惡見に墮し、自宗に執著して言説を起し、善く一切の法相と文辭章句を了すること能はず。既に自ら損壞し亦

他に壞し、人をして心に悟解を得しむること能はず。若し能善く一切の法相を知り、文辭句義悉く皆通達せば、則ち能く自身をして無相の樂を受けしめ、亦能く他をして大乘に安住せしめん。若し能く他をして大乘に安住せしめば、則ち一切の諸佛聲聞緣覺及び諸菩薩の攝受する所を得ん。若し諸佛聲聞緣覺及び諸菩薩の攝受する所を得ば、則ち能く一切の衆生を攝受せん。若し能く一切の衆生を攝受せば、則ち佛種を斷ぜざらん。若し佛種を斷ぜざらんば、則ち勝妙の處を得ん。大悲、菩薩摩訶薩は勝妙の處に生じて、衆生をして大乘に安住せしめんと欲し、十自在力を以てし衆の色像を現じ、其宜しき所に隨つて、眞實の法を説きたまふ。眞實の法は、無異無別不來不去にして、一切の戲論皆悉く息滅す。是故に大悲、善男子善女人は應に言の如く義に執著すべからず。何を以ての故に。眞實の法は文字を離るるが故に。大悲、譬へば人あり、指を以て物を指さんに、小兒は指を觀て物を觀ざるが如く、愚癡の凡夫も亦復是の如し、言説の指に隨つて執着を生じ、乃至命終を盡すも、文字の指を捨てず、第一義を取ること能はず、大悲、譬へば嬰兒の如く應に熟食を食せしむべきに、人あり、成熱の方便を解せず、生を食せしめば、則ち狂亂を發す、不生不滅も亦復是の如し。方便を修せざれば則ち不善と爲る。是故に宜しく應に方便を修すべし。言説に隨つて指端を觀るが如くすること莫れ。大悲、實義は微妙寂靜にして是れ涅槃の因なり。言説は妄想と合して生死に流轉す。大悲、實義は多聞より得らる。多聞とは、謂はく、義を善くすること

【作者】 世界創造
主なり。

【九物】 外道が宇宙の本體とするもの、例へば、微塵の、方、虚空、梵天、時、方、虚空、四大、神我の如し。
【大種】 四大種、地水火風なり。

にして、言説を善くすることに非ず。義を善くするとは、一切の外道の惡見に隨はざることなり。身自ら隨はず亦他をして隨はしめず、是を則ち名けて義に於て多聞なりと曰ふ。義を求めんと欲するものは、當に親近すべく、此と相違し文字に著するものは宜しく速に捨離すべし。」

爾時、大慧菩薩摩訶薩、佛の威神を承けて、復佛に白して言さく、「世尊、如來の不生不滅を演説したまふは奇特なるに非ず、何を以ての故に。一切の外道も亦作者は不生不滅なり」と説き、世尊も亦虚空と涅槃と及び非數滅とは不生不滅なりと説きたまふ。外道亦作者の因縁によりて世間を生ずと説き、世尊も亦無明愛業より諸の世間を生ずと説きたまふ。俱に是れ因縁にして但名の別有るのみ。外物の因縁も亦復是の如し。是故に佛の説と外道の説とは差別有ること無し。外道は説いて言はく、「微塵、勝妙、自在生主等、是の如き九物は不生不滅なり」と。世尊も亦、「一切の諸法は不生不滅にして、若は有若は無皆不可得なり」と説きたまふ。世尊、大種は不壞なり、其自相は不生不滅、諸趣に周流して自性を捨てざるを以て、世尊の分別は稍變異ありと雖も、一切外道の已に説かざるは無し。是故に佛法は外道に同じ。若し不同ならば、願くば佛、爲に演べたまへ、何の所をか佛説を以て勝れりと爲す。若し別異無くんば、外道は即ち佛ならん。其亦不生不滅を説くを以ての故に、世尊は常に一世界中には多佛有ること無しと説きたまふ。向に説く所の如くんば、是れ則ち應に有るべし。」

【乾城】
乾闥婆城
なり。

【法眼】
一切諸法
を觀する眼なり。

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、
有生の執を除かんが爲に、無生の義を成立す
我は無因論を説く。愚の能く了る所に非ず
一切の法は無生なり。亦是れ無法に非ず
乾城、幻夢の如く、有りと雖も、而も因無し
空、無生、無性、云何、我が爲に説きたまへ
諸の和合の縁を離れ、智慧の見る能はざる
是を以ての故に我は空、無生、無性と説く
一一の縁和合して、現すと雖も而も有に非ず
分析するに和合無し、外道の見の如くに非ず
夢及び垂髮、野馬と乾闥婆城との如く
無因にして妄に現す、世事皆是の如し
有因論を析伏して、無生の旨を申述す
無生の義若し存せば、法眼位に滅せず
我無因論を説けば、外道咸な驚怖す
云何が何をか因とする所復何の故を以て生じ
何處に於てか和合す。而るを無因論を作したまふや

有爲の法を觀察するに、因に非ず無因に非ず
彼生滅論者の、所見は是より滅せん

無なるが故に不生なりや、衆縁を待つと爲んや
名有るも義無しと爲んや、願くば我が爲に宣説したまへ

法無くして不生なるに非ず、亦縁を待つに非ず
物有りて名くるに非ず、亦名けて義無きに非ず

一切の諸の外道、聲聞及び縁覺
七住の所行に非ず。此は是れ無生の相

諸の因縁を遠離し、能作者有ること無く
唯心の建立する所なり、我は是を無生と説く

諸法は因生に非ず、無に非ず亦有に非ず
能所の分別を離る、我は是を無生と説く

唯心に所見なく、亦二性を離る
是の如く所依を轉ずる、我は是を無性と説く

外物の有と非有とを、其心に取ること無くんば
一切の見、咸く斷ぜん、此は是れ無生の相なり

空無性等の句は、其義皆是の如し

【七住の所行】七
地の菩薩の所行の
意なり。

【一切の見】一切
の邪見なり。

【有無俱非】不生
の法を、有、無、
有無、非有無と見
るもの、即ちこれ
外道の妄見なり。
【鈎鎖】因縁の連
續の譬。

空を以ての故に空に非ず、無生の故に空と説く
因縁は共に集會す、是故に生滅有り
因縁分散すれば、生滅則ち有る無し
若し諸の因縁を離るれば、即ち更に法有る無し
一性及び異性は、凡愚の分別する所なり
有無不生の法も、俱に亦復然るに非ず
惟衆縁の會の中に於て、起滅有りと見るを除く
俗に隨つて假りに言説すれば、因縁は遅に鈎鎖となる
若し因縁の鎖を離るれば、生の義は不可得なり
我は惟鈎鎖を説く、生無きが故に不生なり
諸の外道の過を離る、凡愚の了る所に非ず
若し縁の鈎鎖を離れて、別に生法有らば
是れ即ち無因論にして、鈎鎖の義を破壊す
燈の能く物を照すが如く、鈎鎖の現するも若し然らば
此則ち鈎鎖を離れて、別に諸法有らん
無生なれば則ち無性なり、體相は虚空の如し
鈎鎖を離れて法を求むるは、愚夫の分別する所なり

【外と爲す】 外の
鈎鎖のことなり。

【論に差別】 本論
に差別なし。

復餘の無生有り、衆聖の得る所の法なり
 彼生にして無生なるもの、是れ則ち無生忍なり
 一切の諸の世間は、是鈎鎖に非ざるは無し
 若し能く是の如く解せば、此人は心に定を得ん
 無明と愛業とは、是れ則ち内の鈎鎖なり
 種子泥輪等を、名けて外と爲す
 若し他法有り、而して因縁より生ずと言はば
 鈎鎖の義を離る、此則ち教理に非ざるなり
 生法若し非有ならば、彼れ誰が爲に因縁とならん
 展轉して相生す、此は是れ因縁の義なり
 堅濕煖動等は、凡愚の分別する所なり
 但無有の法は縁にするが故に、自性無しと説く
 醫の衆病を療するが如く、其論に差別無し
 病同じからざるを以ての故に、方藥に種種殊有るのみ
 我は諸の衆生の爲に、煩惱の病を滅除す
 其根の勝劣を知りて、諸の法門を演説す
 煩惱の根異り、而して種種の法有るに非ず

【八支の道】 八支正道、八正道のこと。

【物無物】 物、萬物の體性、無物その反對。

唯一大乘有りて、八支の道清涼なり

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、一切の外道は妄に無常を説く、世尊も亦「諸行は無常にして是れ生滅の法なり」と言ふ。未だ知らず、此説、是れ邪なりや、是れ正なりや。言ふ所の無常に復幾種有りや。」佛言はく、「大慧、外道の説に七種の無常有り、是れ我が法に非ず。何等をか七と爲す。謂はく、説有り、「始め起りて即ち捨す、是を無常と名く。生じ已れば生ぜず、無常の性の故に」と。説あり、「形處の變壞是を無常と名く」と。説あり、「色即ち無常なり」と。説あり、「色の變異是を無常と名く。一切の諸法は相續して斷ぜず、能く變異して自然に滅に歸せしむ。猶し乳酪前後の變異の如く、見るべからずと雖も、然も法中に在りて一切の法を壞す」と。説あり、「物の無常」と。説あり、「物無物の無常」と。説あり、「不生無常にして、遍く一切諸法の中に住す」と。其中物無物無常とは、謂はく、能造所造は其相滅壞し、大種の自性は本來起ること無し。不生無常とは謂はく、常と無常と有無等の法と、是の如き一切は皆起ること有る無く、乃至分析して微塵に至るも亦見ゆる所無し。起らざるを以ての故に、説いて無生と名く。此は是れ不生無常の相なり。若し此を了らずんば、則ち外道の生の無常の義に墮せん。有物の無常の義とは、謂はく、非常非無常の處に於て自ら分別を生ず。其義云何。彼は無常自らは滅壞せず、能く諸法を壞すと立つ。若し無常が一切の法を壞する無くんば、法は終に滅せずして無有を成せん。杖植瓦石の能く物を壞して、而も自ら壞せざるが如く、此も亦是の如し。大慧、

【數論】外道數論派なり。

現見の無常と一切法とは、能作所作の差別有る無し。云はく、此は是れ無常、此は是れ所作差別無きが故に、能作所作は應に俱に是れ常なるべし。有因を見ずして能く諸法をして無を成ぜしむるが故に。大慧、諸法の壊滅には實に亦因有り、但凡愚の能く了する所に非ず。大慧、異因は異果を生ずべからず。若し能く生ぜば、一切の異法は應に相並びて生ずべく、彼法と此法と能生と所生とは應に別有ること無かるべし。現見は別有り、云何が異因より異果を生ぜん。大慧、若し無常の性は是れ有法ならば、應に同所作は自ら是れ無常なるべし。自ら無常の故に、所無常の法は皆應に是性なるべし。大慧、若し無常の性に於て諸法の中に住せば、應に同じく諸法は三世に墮すべし。過去の色と同時に已に滅し、未來は生ぜず、現在俱に壊せん。一切の外道は四大種の體性は不壞なりと計す。色は即ち是れ大種にして、大種の造色を差別す。異不異を離るるが故に、其自性も亦壊滅せず。大慧、三有の中、能造所造は皆是れ生住滅の相に非ざるは莫し。豈に更に別に無常の性有りて、能く物を生じ、而も滅せざらんや。始造即捨の無常とは、大種は互に大種を造るに非ず、各別なるが故に。自相の造に非ず、異なる無きを以ての故に。復共造に非ず、乖離するを以ての故に。當に知るべし、是は始造の無常に非ず。形狀の無常とは、此れ能造及び所造の境に非ず、但形狀の壊するのみ。其義云何。謂はく、色を分析して乃ち微塵に至るも、但形狀長短等の見を滅するのみにして、能造所造の色體を滅せず。此見は墮して數論の中にあり。色即ち是れ無常とは、謂はく、此は即ち是れ形狀の無常にして、

【盧迦耶】ローカ
一ヤテカ(Locaya
ism) 順世外道。

【外の有無】外法
の有無のこと。

【二邊の悪見】中
道を外れたる二種
の見なり。

大種の性に非ず。若し大種の性も亦無常ならば則ち世事無し。世事無ければ、當に知るべし、則ち盧迦耶のみに墮す。一切の法は自相の生にして、惟言説有るのみなることを見るを以ての故に。轉變の無常とは、謂はく、色體の變にして大種の變に非ず。譬へば金を以て莊嚴具を作るに、嚴具には變あれども、而も金には改無きが如く、此も亦是の如し。

大慧、是の如き等の種種の外道は虚妄に分別して無常の性を見、彼は是説を作さく、「火は諸の火の自相を焼くこと能はず。但各分散するのみ。若し能く焼かば、能造も所造も即ち皆斷滅せん。」大慧、我は諸法の非常無常を説く。何を以ての故に。外法を取らざるが故に。三界は唯心なるが故に。諸相を説かざるが故に。大種の性處、種種の差別は、不生不滅なるが故に。能造所造に非ざるが故に。能取所取の二種の體性は、一切皆分別より起るが故に。如實に二の取性を知るが故に。惟是れ自心の現なることを了達するが故に。外の有無の二種の見を離るるが故に。有無の見を離るれば、則ち能造所造を分別せざるが故に。大慧、世間と出世間と及び出世間の上上の諸法は、惟是れ自心にして、常に非ず無常に非ず。了達すること能はずんば、外道の二邊の悪見に墮せん。大慧、一切の外道は此三種の法を了解すること能はず、自らの分別に依つて、言説を起し、無常の性に著す。大慧、此三種の法は、有らゆる言語分別の境界、諸の凡愚の能く知る所に非ず。』

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、
始造即便ち捨と、形状の轉變と

【自性は住なり】
自性は常住なりの
意

【現證品】以下法
身眞樂の徳を説く

【滅盡三昧】滅盡
定のこと、不相應
法の一、一切の心
想滅盡して寂靜と
なる定なり。

色と物等の無常は、外道の妄分別のみ

諸の法は壞滅すること無く、諸大の自性は住なりと

外道は種種を見、是の如くして無常を説く

彼諸の外道の衆は、皆不生滅を説く

諸大の性は自ら常なりと、誰が是れ無常の法なる

能取及び所取も、一切は惟是れ心なり

二種は心より現す、我我所有ること無し

梵天等の諸法は、我れ惟是れ心と説く

若し心を離るれば、一切不可得なり

現證品 第四

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、願くば我が爲に、一切の聲聞緣覺の入滅の次第相續の相を説き、我及び諸の菩薩摩訶薩をして善く此を知り已りて滅盡三昧の樂に於て、心に所感無く、二乗及び諸の外道の錯亂の中に墮せざらしめたまへ。佛言、はく、「諦に聽け、汝が爲に説くべし。大慧、菩薩摩訶薩の六地に至れると、及び聲聞緣覺とは滅定に入り、七地の菩薩は念念に恆に入る。一切の法の自性の相を離るるが故に、諸

【是故に念念に】
二乗の説明なり。

【四無礙辯】 四無
礙智と云ひ、一、無
礙辯、二、無礙辯、三、
無礙辯、四、無礙
辯、無礙辯の四な
り。

の二乗には非ず。二乗は作有りて能所取に墮し、諸法無差別の相を得ず、善不善の自相共相を了りて滅定に入る。是故に念念に恆に入ること能はざるなり。大慧、八地の菩薩聲聞縁覺の心意意識の分別の想を滅す。始め初地より六地に至るまでに、三界は一切唯是れ心意意識の自ら分別して起すものなるを觀察し、我我所を離れて外法の種種の諸相を見ず。凡愚は知らず、無始より來、過惡の熏習に由りて、自心内に於て能取所取の相を變作し執著を生ず。大慧、八地の菩薩の所得の三昧は、諸の聲聞縁覺の涅槃に同じ。諸佛の力を以て加持せらるるが故に、三昧門に於て涅槃に入らざるなり。若し持せざれば便ち一切衆生を化度せず、如來の地を満足する能はず、亦則ち如來の種性を斷絶せん。是故に諸佛は如來不可思議の諸の大功德を説きて、其をして究竟して涅槃に入らざらしむ。聲聞縁覺は三昧の樂に著す。是故に中に於て涅槃の想を生ず。大慧、七地の菩薩は、善く心意意識、我所の執する生法の無我、若は生若は滅の自相共相を觀察し四無礙辯を善巧に決定し、三昧門に於て自在を得、漸く諸地に入りて菩提分法を具す。大慧、我は恐れて諸の菩薩の善く自相共相を了知せず、諸地の相續の次第を知らず、外道の諸の惡見中に墮するが故に、是の如く説く。大慧、彼は實に若は生、若は滅有ること無し。諸地の次第、三界の往來は一切皆是れ自心の所見のみ。而も諸の凡愚は、了知すること能はず、知らざるを以ての故に、我及び諸佛は爲に是の如く説く。

大慧、聲聞縁覺は菩薩の第八地中に至れば、三昧の樂の昏醉する所となり。未だ善く自

【二無我】人、我の二無我。

【十無盡の句】一衆生界無盡、二世無盡、三虛空界無盡、四法界無盡、五涅槃界無盡、六佛出現界無盡、七如來智界無盡、八心所緣無盡、九佛智所入境界無盡、十世間轉、法轉、智轉無盡の十なり。

心の所見なることを了る能はず、自共相の習は其心を譚覆し、二無我に著し、涅槃の覺を生ずれども寂滅の慧に非ず。大悲、諸の菩薩摩訶薩は、寂滅三昧の樂門を見、即便ち本願の大悲を憶念して、十無盡の句を具足修行す。是故に即ち涅槃に入らず。涅槃に入れば果を生ぜざるを以ての故に。能所取を離るるが故に。惟心に了達するが故に。一切の法に於て無分別なるが故に。心意及び意識は、外法の性相の執著の中に墮せざるが故に。然れども佛法の正因を起さざるには非ず、智慧の行に隨つて是の如く起すが故に。如來の自證の地を得るが故に。大悲、人の夢中に方便して河を度り、未だ度らざるに、便ち覺むるが如し。覺め已りて向の所見を思惟すらく、「是れ眞實と爲んや、是れ虛妄と爲んや」と。復自ら念言すらく、「實に非ず妄に非ず」と。是の如きは但是れ見聞覺知の會て更むる所の事の分別習氣にして、有無の念を離れたる意識の夢中の所現のみ。大悲、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。始め初地より七地に至り、乃至増進して第八に入りて無分別を得、一切の法は幻夢等の如しと見て能所取を離れ、心心所の廣大の力用を見、勤めて佛法を修して未證を證せしめ、心意意識の妄分別の想を離れて無生忍を獲。此は是れ菩薩の得る所の涅槃にして滅壞に非ざるなり。大悲、第一義の中には次第有ること無く、亦相續も無く、一切境界の分別を遠離す。此を則ち名けて寂滅の法と爲す。」

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

諸住及び佛地は、惟心にして影像無し

【去來今の諸佛】
過去、未來、現在
の諸佛。

これは是れ去來今、諸佛の所説なり

七地には是れ心有り、八地には影像無し

此二地の住と名く、餘は則ち我が所得なり

自證及び清淨、此は則ち是れ我が地なり

摩醯最勝の處は、色究竟莊嚴せり

譬へば大火聚の如く、光焰熾然を發す

三有に化現し、悅意にして清凉なり

或は現の變化有り、或は先時の化有り

彼に於て諸乘を説く、皆是れ如來の地なり

十地を則ち初と爲し、初を則ち八地と爲す

第九を則ち七と爲し、第七を復八と爲す

第二を第三と爲し、第四を第五と爲し

第三を第六と爲す、無相何の次か有らん

如來常無常品第五

爾時、大慈菩薩摩訶薩復佛に白して言さく、「世尊、如來應正等覺は、常と爲んや。無常

と爲んや。佛言はく、大慧、如來眞正等覺は、常に非ず無常に非ず、何を以ての故に。俱に過有るが故に。云何が過有る。大慧、若し如來は常ならば能作の過有り。一切の外道は、能作を常若しくば無常なりと説く。若し無常ならば、所作の過有り。諸蘊と同じく相所相と爲る。畢竟するに斷滅して無有と成ればなり。然も佛如來は實に斷滅に非ず。大慧、一切の所作は、瓶衣等の如く、皆是れ無常なり。是れ則ち如來に無常なるの過有り、修する所の福智は悉く空にして無益ならん。又諸の作法は、應に是れ如來なるべし、異因無きが故に。是故に如來は常に非ず無常に非ず。復次に大慧、如來は常に非ず。若し是れ常ならば、應に虚空の因を待たずして成するが如くなるべし。大慧、譬へば虚空の如く常に非ず無常に非ず。何を以ての故に。常無常若は一若は異、俱、不俱等の諸の過失を離るるが故に。復次に大慧、如來は常に非ず、若し是れ常ならば、則ち是れ不生にして、兔、馬、魚、蛇等の角と同じ。復次に大慧、別義を以ての故に、亦常と言ふことを得。何を以ての故に。謂はく、現智を以て常法を證するが故に。證智は是れ常なるが故に、如來も亦常なればなり。大慧、諸佛如來の所證の法性は、法住法位にして、如來世に出でたまふも、世に出でたまはざるも、世は常任にして不易なり。一切の二乘外道の所得の法中にも在り、是れ空無に非ず、然も凡愚の能く知る所に非ず。大慧、夫れ如來は清淨の慧を以て、内に法性を證して其名を得、心意意識蘊界處の法の妄習を以て名を得たるには非ず。一切の三界は皆虛妄分別より生ずれども、如來は妄分別より生ぜず。大慧、若し二の有常無常有るも、

【刹那品】以下法
身眞淨の徳を説く

如來には二無し。乃至一切法の無生の相を證するが故に。是故に常に非ず亦無常に非ず。大慧、少かも言説分別有りて生ぜば、則ち常無常の過有り。是故に應に二の分別の覺を除きて、少かも在らしむること勿かるべし。』

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

常無常を遠離して、而も常無常を現す

是の如く恆に佛を觀ば、惡見を生ぜざらん

若し常無常ならば、集むる所は皆無益とならん

分別の覺を除かんが爲に、常無常と説かざるなり

乃至立する所有らば、一切皆錯亂せん

若し唯自心なりと見ば、是れ則ち違諍無からん

刹那品第六

爾時、大慧菩薩摩訶薩、佛復に白して言さく、世尊、唯願くば我が爲に、蘊界處生滅の相を説きたまへ。若し我有る無くんば、誰か生じ誰か滅せん。而も諸の凡夫は生滅に依りて、苦を盡すことを求めず、涅槃を證せざるなり。佛言はく、大慧、諦に聽け諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。大慧、如來藏は是れ善不善の因なり、能く遍く一切の趣生を興造す。

【四禪】 四禪天なり。

【十聖の種性の道】 十聖とは十地聖の者の意なり。

譬へば伎兒の諸趣を變現して、我我所を離るるが如し。覺らざるを以ての故に、二縁和合して果を生ずること有り。外道は知らず、執して作者と爲す。無始の虛偽惡習の熏する所を名けて藏識と爲す。七識と無明の住地を生ず。譬へば大海の波浪有るが如し、其體相續して恆に住して斷えざるが如し。本性清淨にして無常の過を離れ我論を離る。其餘の七識意識等は念念に生滅して、妄想を因にして爲し相縁を縁と爲し和合して生ず。色等は自心の所現なることを了せず、名相に計著して苦樂の受を起し名相に纏縛せられ、既に貪より生じて復會を生ず。若し因及び所縁は、諸取の根滅すれば、相續を生ぜず。自ら慧をもて苦樂の受者を分別して、或は滅定を得、或は四禪を得、或は復善く諸體の解脫に入り、便ち妄に解脫を得たるの想を生ず。而も實には未だ如來藏中の藏識の名を捨てず轉ぜず、若し藏識無ければ七識は則ち滅す。何を以ての故に。彼及び所縁に因つて生ずることを得るが故に。然も一切の外道二乘の諸の修行者の知る所の境界に非ず。彼は唯人無我を了するを以て藕界處に於て、自相及び共相を取るが故に。若し如來藏の五法、自性、諸法の無我を見れば、地に隨つて次第に漸く轉滅し、外道の惡見の爲に動かされず、不動地に住して十種の三昧の樂門を得、三昧力の爲に諸佛に持せられ、不思議の佛法及び本願力を觀察して、實際及び三昧の樂に住せず、自證智を獲て二乘諸の外道と共ならず、十聖の種性の道及び意生の智身を得て諸行を離れん。是故に大慧、菩薩摩訶薩は勝法を得んと欲せば、應に如來藏の藏識の名を淨むべし。大慧、若し如來藏の藏識と名くる者無くんば、則ち生滅無

【菴摩勒果】梵音
アームラ、樹名。
前出。

【二種生ず】二種
は能取所取の二な
り。

【我が眞實を見ず】
我が眞實の法を見
ず。

からん。然も諸の凡夫及び聖人は悉く生滅有り。是故に一切の諸の修行者は、内境界を
見て現法樂に住すと雖も、而も勇猛精進を捨てず。大慧、此如来藏の藏識は、本性清淨
なれども、客塵に染められて不淨と爲る。一切の二乗及び諸の外道は臆度して見を起し
現證すること能はず。如来は此に於て分明に現見すること、掌中の菴摩勒果を觀るが如し。
大慧、我は勝鬘夫人及び餘の深妙淨智の菩薩の爲には、如来藏は藏識と名け、七識と俱に
起ると説き、諸の聲聞には法無我を見しむ。大慧、勝鬘夫人の爲には佛の境界を説く、是
れ外道二乗の境界に非ず。大慧、此如来藏の藏識は、是佛の境界なり。汝等と此淨智菩薩
義に隨順する者の所行の處、是は一切の文字に執著する外道二乗の所行の處に非ず。是故
に汝及び諸の菩薩摩訶薩は如来藏の藏識に於て、當に勤めて觀察すべし。但聞き已れば
便ち足るとの想を生ずること莫れ。

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

甚深の如来藏は、七識と俱なり

執著すれば二種生ず。了知すれば則ち遠離す

無始の習に熏ぜられて、像の心に現するが如く

若し能く如實に觀すれば、境相悉く有ること無し

愚の月を指せるを見、指を觀て月を觀ざるが如く

文字に計著するものは、我が眞實を見ず

【和伎者】伎に和す者、即ち助手、謡曲の「ワギ」なり

心は工伎兒の如く、意は和伎者の如く

五識は伴侶たり、妄想は伎を觀るの衆なり

爾時、大慧菩薩摩訶薩復佛に白して言さく、「世尊、願くば我が爲に五法と自性と諸識と無我との相を説きたまへ。我及び諸の菩薩摩訶薩は、善く此を知り已りて漸く諸地を修し諸佛の法を具して如來自證の位に至らん。」佛言はく、「諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。大慧、五法と自性と諸識と無我とは、謂ゆる、名、相、分別、正智、知如なり。若し修行者にして此法を觀察せば、如來自證の境界に入り、常斷有無等の見を遠離し、現法樂の深湛三昧を得ん。大慧、凡愚は五法と自性と諸識と無我とを了らず、心の所現に於て外物有りて見て分別を起す、諸の聖人は然らず。大慧白して言さく、「云何が了らずして分別を起す。」佛言はく、「大慧、凡愚は名は是れ假立なることを知らず、心の流に隨ひ動きて種種の相を見、我我所を計して色に染著し、聖智を覆障して貪瞋癡を起し、諸業を造作すると意の蘭を作るが如く、妄想もて自ら纏ひ、諸趣の生死の大海に墮すること、汲水輪の如く循環して絶えず。諸法は幻の如く焰の如く、水中の月の如く、自心の所見なるを知らず。妄分別を起して能所取及び生住滅を離る。謂はく、「自在、時節、微塵、勝性より生ず」と、名相の流に隨ふ。大慧、此中、相とは、謂はく、眼識の見る所、之を名けて色と爲し、耳鼻舌身意識の得るもの、之を名けて聲香味觸法と爲す。是の如き等を我は説いて相と爲す。分別とは業名を施設して諸相を顯示す。謂はく、象馬車歩の男女等の名を以て

【歡喜地】菩薩十
地の第一、始めて
中道觀を得て佛智
に入る位なり。
【法雲】法雲地。
菩薩十地の第十位

【三性】前出。

其相を顯はし、此事は是の如く決定して異はずと。是を分別と名く。正智とは、謂はく、其相は互に其客爲りと觀じ、識心は起らず、斷ならず、常ならず、外道二乘の地に墮せざる、是を正智と名く。大慧、菩薩摩訶薩は其正智を以て、名相を觀察し、有に非ず無に非ず損益二邊の惡見を遠離し、名相及び識は本來起らずと。我は此法を説いて名けて如如と爲す。大慧、菩薩摩訶薩は如如に住して、已に無照の現境を得、歡喜地に昇つて外道の惡趣を離れ、出世の法に入りて、法相淳熟し、一切の法は猶し幻等の如く、自ら聖智所行の法を證し、臆度の見を離れ、是の如く次第して、乃ち法雲に至る。法雲に至れば、已に三昧の諸力もて、自在の神通を開發し満足して、如來を成じ已りて衆生の爲の故に水中の月の如く、普く其身を現し、其欲樂に隨つて爲に法を説く。其身は清淨にして心意識を離れ、弘誓の甲を被て十無盡の願を具足し成滿するなり。是を菩薩摩訶薩の如如に入りて獲得する所と名く。」

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、三性は五法の中に入ると爲んや、各自相有り」と爲んや。佛言はく、「大慧、三性は八識も及び二無我も悉く五法に入る。其中名及び相は是れ妄計の性なり。彼分別に依りて、心心所の法は時を俱にして起るを以てなり。日と光との如きは是れ緣起の性にして、正智如如は壞すべからざるが故に、是れ圓成の性なり。大慧、自心の所現に於て執著を生ずる時は、八種の分別有りて起る。此差別の相は、皆是れ不實にして唯妄計の性なり。若し能く二種の我執を捨離せば、二無我の

【覺】 覺は能覺なり。

智即ち生長することを得。大慧、爾時、諸佛も、如來の自證聖智も、諸地の位次も、一切の佛法も、悉く皆此五法の中に攝入す。

復次に大慧、五法とは、謂ゆる相と名と分別と、如と正智となり。此中、相とは、謂はく、所見の色等形、各別なり、是を名けて相と爲す。彼諸相に依りて觀等の名を立つ、此は是の如く此れは別はず、是を名けて名と爲す。衆名を施設して諸知心所の法を顯示す、是を分別と名く。彼名彼相は、畢竟して行ること無く、但是れ妄心の長轉する分別のみ。是の如く觀察して、乃ち覺をも滅するに至る、是を如と名く。大慧、實實に決定して、根本の自性を究竟せば、是如の相を得べし。我及び諸佛は隨實に證入して其實相の如くに開示し演説す。若し能く此に於て隨順に悟解せば、斷を離れ常を離れ、分別を生ぜずして自證の處に入り、外道二乘の境界を出でん。是を正智と名く。大慧、此五種の法に三性も八識も、及び二無我も一切の佛法も、普く皆攝盡す。大慧、此法中に於て汝等に自智を以て善巧に通達し、亦他人を勧めて其をして通達せしむべし。此に通達し已らば、心則ち決定し他に隨つて轉せざらん。

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

五法には三自性、及び八種の識も

二種の無我の法をも、普く大乘を攝す

名と相と及び分別とは、二種の自性の攝にして

【優曇華】具に優曇鉢羅華と云ひ、瑞應華と譯す。此花開けば世に輪王出づと云ひ、又天下に佛出生の時此花咲くと云ふ。

正智と如とは、是れ則ち圓成の相なり

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、經中に説きたまふが如くんば、過去未來現在の諸佛は恆河の沙の如しと。此は當に云何がすべき。言の如くに受せんや、別に義有り」と爲んや。佛、大慧に告げたまはく、「言の如くに受する勿れ、大慧、三世の諸佛は恆河の如くに非ず。何を以ての故に。如來は最勝にして諸の世間を超え、與等の者無く喩の及ぶ所に非ざればなり。唯少分を以て其喩と爲すのみ。我は凡愚の諸の外道等の、心恆に常と無常とに執著して惡見を増長し生死に輪廻するを以て、其をして厭離せしめ、勝れたる希望を發せしめんが爲に佛は成じ易く逢値ひ易しと云ふ。若し遇ひ難きこと優曇華の如しと言はば、彼便も退怯して精進を勤めざらん。是故に我、恆河沙の如しと説く。我復時有りて化を受くるものを觀て、佛の値ひ難きこと優曇華の如しと説く。大慧、優曇華は曾て見たる者、現に見る者、當に見るべき者有ること無し。如來は則ち已に見たる者、當に見るべき者有り。大慧、是の如く譬喩は自法を説くに非ず。自法は内證、聖智の所行の境界にして、世間に等しき無く、諸の譬喩を過ぐ、一切の凡愚は能く信受すること能はず。大慧、眞實の如來は心意識の所見の相を超ゆ、中に於て譬喩を立つべからず。然も亦時ありてか建立して恆河沙等と言ふ、相違有ること無し。大慧、譬へば恆沙は龜魚象馬の踐踏する所なるも、分別を生ぜずして、恆に淨無垢なるが如し。如來の聖智は、彼恆河の如く力通自在を以て其沙と爲す。外道の龜魚競ひ來りて擾亂すれども、而も佛は一念の分別をも起さざるなり。

何を以ての故に。如來は本願三昧の樂を以て普く衆生を安んずること、恆河の沙の衆僧有ること無く分別無きが如くなるが故に。大悲、譬へば恆沙の如きは、是れ地の自性なり。劫盡て轉くる時一切の地を燒けども、而も彼地大は本性を捨てず、恆に火大と時を俱にして生ずるが故に、諸の凡愚人は、地燒かると謂ふも、實には燒けず、火の因る所なるが故に如來の法身も亦復是の如く、恆河の沙の如く、終に壞滅せず。大悲、譬へば恆沙の如く限量有ること無く、如來の光明も亦復是の如く、無量の衆生を成就せんと欲するが爲に、普く一切諸佛の大會を照したまふ。大悲、譬へば恆沙の如く、沙の自性に住して、更に改變して餘物と作らず。如來亦爾り、世間の中に於て不生不滅、諸の有生の因は悉く已に斷ずるが故に。大悲、譬へば恆沙の如く取れども滅すること知らず、投ずれども増することを見ず、諸佛亦爾り。方便の智を以て衆生を成熟せしむるとも、滅すこと無く増すること無し。何を以ての故に。如來の法身は身有ること無きが故に。大悲、身有るを以ての故に滅壞有り。法身は身無きが故に滅壞無し。大悲、譬へば恆沙の如く苦罪を治して、蘇油を求めんと欲すと雖も、終に得べからず、如來も亦爾り。衆生の衆苦の墮する所と爲ると雖も、乃至蠢動の未だ盡く涅槃を得ざれば、法界の中に於て捨離せしめんと欲して深心願樂することも亦得べからず。何を以ての故に。大悲の心を具足し成就するが故に。大悲、譬へば恆沙の如く水に隨つて流れ水無きに非ざるなり。如來亦爾り。有らゆる說法は涅槃の流に隨順せざるは莫し。是を以て説いて諸佛如來は恆河の沙の如しと言ふ。大悲、如來の

説法は趣に隨はず、趣は是れ壞の義なり。生死の實際は知ることを得べからず、既に知るべからずんば、云何が趣と説かん。大慧、趣の義は是れ斷なり、凡愚は知ること莫し。大慧菩薩、復佛に白して言さく、「若し生死の本際は知るべからずんば、云何が衆生は生死の中に在つて解脱することを得ん。」佛言はく、「大慧、無始の虚偽の過習の因を滅し、外境は自心の所現なることを了知して、分別を轉依するを名けて解脱と爲す、滅壞に非ざるなり。是故に無邊際と言ふことを得ず。大慧、無邊際とは、但是れ分別の異名のみ。大慧、分別の心を離るれば、別に衆生無し。智を以て内外の諸法を觀察するに、知と所知と悉く皆寂滅なり。大慧、一切の諸法は、唯是れ自心の分別の所見のみ。了知せざるが故に、分別の心起る、了ずれば心則ち滅す。」

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

諸の導師を觀察するに、譬へば恆河の沙の如く
壞にも非ず亦趣にも非ず、是人は能く佛を見ん
譬へば恆河の沙の、悉く一切の過を離れて
而も恆に流に隨順するが如し。佛體も亦是の如し
爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、願くば我が爲に、一切諸法の刹那の壞相を説きたまへ。何等の諸法を刹那有りと名けん。」佛言はく、「諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。大慧、一切の法とは、謂ゆる善法と不善法と、有爲法と無爲法と、世間

【五取蘊】 五蘊に同じ。

【證法を得る刹那有らば】 證法を得る者に刹那壞あらばの意。
【六波羅蜜】 六度とも云ふ。波羅蜜は梵音パーラミタ 一(Paramita) 度、到彼岸なり。布施、持戒、忍辱、精進、靜慮、智慧の六なり。

の法と出世間の法と、有漏の法と無漏の法と、有受の法と無受の法なり。大慧、要を擧げて之を言へば、五取蘊の法は、心意意識の習氣を以て因と爲して増長することを得。凡愚は此に於て分別を生じ、善不善と謂ふ。聖人は現に三昧の樂住を證す、是れ則ち名けて善無漏の法と爲す。復次に大慧、善不善とは謂ゆる八識なり。何事をか八と爲す。謂はく、如來藏を眞識と名け、意及び意識共に五識身なり。大慧、彼五識身は、意識と俱に善不善の相を展轉し差別し相續して斷絶せず、異體の生無く生じ已れば即ち滅す。境は自心の所現なることを了せず、次第に滅する時、別識生起す。意識は彼五識と共に種種差別の形相を取り、刹那も住せず。我此等を説いて刹那の法と名く。大慧、如來藏は眞識と名く。與にする所の聲等の諸の習氣は俱に是れ刹那の法にして、無漏の習氣は刹那の法に非ず。此は凡愚の刹那論者の能く知る所に非ず。彼は一切の諸法に、刹那と非刹那と有ることを知る能はざるが故に、彼無爲を計して、同じく諸法を壞し眞見に墮す。大慧、五識身は流轉に非ず、苦樂を受けず、涅槃の因に非ず。如來藏は苦樂を受け、因と俱に生滅有り、四種の習氣の速變する所なり。而も諸の凡愚は、分別して心に感じ、了知すること能はず、刹那の見を起す。大慧、金と金剛と佛の舍利との如く、是れ奇特の性にして終に損壞せず。若し證法を得る刹那有らば、聖は應に聖に非ざるべし。而も彼聖人は未だ曾て聖に非ずんば非ず。金金剛の如くに劫を経て住すと雖も、稱量減せず。云何が凡愚は我秘密の説を解せず、一切の法に於て刹那の想を作す。

【檀波羅蜜】 施波羅蜜のこと。六波羅蜜の一。梵音ダナバラミタ (Dana Paramita) 財施無畏施、法施を行ふこと。

【梵世】 梵音ブラマローカ (Brahmaloka) 梵天に同じ。

【尸羅波羅蜜】 尸羅は梵音シラ、戒と譯す。

【羼提波羅蜜】 羼提は梵音クシヤント (Kṣanti) 忍、忍辱と譯す。十波羅蜜の一なり。

【毘梨耶波羅蜜】 毘梨耶は梵音キルヤ (Irya) 精進と譯す。六度の第一。

【禪那波羅蜜】 禪那は梵音トフヤナ (Dhyana) 定、靜慮と譯す。六度の一なり。

【般若波羅蜜】 般若は梵音フラザニヤ (Prajna) 智惠と譯す。六度の一。

大慧菩薩、復佛に白して言さく、「世尊は常に、六波羅蜜を若し満足することを得ば、便ち正覺を成ぜん」と説きたまふ。何等をか六と爲し、云何が満足せん。佛言はく、「大慧、波羅蜜は差別すれば三有り。謂ゆる世間出世間、出世間上上なり。大慧、世間の波羅蜜とは謂はく諸の凡愚は我が所に著して二邊を執取し、諸有の身を求めて色等の境を食む。是の如くにして檀波羅蜜持戒忍辱精進禪定を修行し、神通を成就して梵世に生ず。大慧、出世間の波羅蜜とは、謂はく聲聞と緣覺とは涅槃に執著して自樂を希求す。是の如くにして諸の波羅蜜を修習するを謂ふ。大慧、出世間の上上の波羅蜜とは、謂はく、菩薩摩訶薩は自心の二法に於て、唯是れ分別の所現なるを了知し、妄想を起さず、執著を生ぜず、色相を取らず、一切の衆生を利樂せんと欲するが爲に、恆に檀波羅蜜を修行す。諸の境界に於て分別を起さず。是れ則ち尸羅波羅蜜の修行なり。即ち分別を起さざるの時に於て、能取所取の自性を忍知す、是れ則ち名けて羼提波羅蜜と爲す。初中後夜に勤修して懈ること匪ず、實解に隨順して分別を生ぜず、是れ則ち名けて毘梨耶波羅蜜と爲す。分別を生ぜずして、外道の涅槃の見を起さず、是れ則ち名けて禪那波羅蜜と爲す。智を以て心を觀察して分別無く二邊に墮せず、淨所依を轉じて壞滅せず、聖智内證の境界を獲る、是れ則ち名けて般若波羅蜜と爲す。」

爾時、世尊、重ねて頌を説きて言はく、
 愚は有爲を分別して、空、無常、剎那とし

【河、燈】河流燈
火の如くの意。

【光音宮】光音天
のこと。色界十八
天の第六。この天
は光明を以て語音
となす。

利那の義を分別して、河、燈、種子の如しとす

一切の法は不生なり、寂靜にして所作無し

諸事の性皆離る、是れ我が利那の義なり

生じて無間にして即ち滅す、凡愚の爲には

無間相續の法を説かず、諸趣は分別より起る

無明を其因と爲し、心は則ち彼より生ず

未だ能く色の來るを了せず、中間は何れの所にか住せん

無間に相續して滅し、而も別心有りて起る

色に住せざる時は、何の所縁よりか生ぜん

若し彼に縁て起らば、其因則ち虚妄なり

妄に因て體は成らず、云何が利那の滅

修行者の正受と、金剛と佛舍利と

及び光音宮とは、世間の不壞の事なり

如來圓滿の智、及び比丘の證得する

諸の法性は常住なり、云何が利那と見ん

乾城と玄等の色は、何が故に利那に非ざる

大種は實性無し、云何が能造と説かん

大乘入楞伽經

券第六

大周于闐國三藏法師實叉難陀勅を奉じて譯す

【變化品】以下衆疑を解き、法身の一切過を脱せるを説く。

【般涅槃】涅槃に同じ。

【金剛神】梵名、跋闍羅波賦(Vajrapani)金剛手と譯す。金剛力士、仁王とも云ふ。如來一切の秘密事述を知り、五百の夜叉神を使役し、千佛の法を護ると云ふ二神なり。

【旃遮】梵音チヤー(Chā)釋尊を中傷せる女。

【孫陀利】梵音スナダリ(Sundari)旃遮と同じく釋尊を中傷せる女なり。

【此界】此世界。

【無餘涅槃】無餘衣涅槃の略、四涅槃の一、煩惱を斷じて得たる涅槃。

變化品第七

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、如來は何が故に阿羅漢に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまふ。何が故に復般涅槃の法無き衆生の佛道を成ずることを得と説きたまふ。又何が故に初め佛たることを得てより般涅槃に至るまで、其中間に於て、一字をも説かずと説きたまふ。又言はく、如來常に定に在りて覺無く觀無しと。又言はく、佛事は皆是化作なりと。又言はく、諸の識は刹那に變壞すと。又言はく、金剛神、常に隨し衛護すと。又言はく、前際は知るべからず、而も般涅槃有りと説くと。又餘報有り、謂はく、旃遮婆羅門の女と孫陀利外道の女と及び空鉢にして還る等の事と、世尊は既に是の如き業障有り、云何が一切種智を成ずることを得ん。既に已に一切種智を成ぜば、云何が是の如き諸の過を離れざる。佛言はく、「諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。大慧、我は無餘涅槃界の爲の故に、密に勸めて、彼をして菩薩行を修せしむ。此界と他土に諸の菩薩有り、心に聲聞の涅槃を樂求す。是心を捨て、進んで大行を修せしめんが故に是説

【差別】 記とも云ふ。一分別して記すと云ふ意。

【前佛】 今佛の前ニ成道して空に入滅し給ひし佛なり

【金剛力士】 金剛力士のこと。前出。

を作す。又、化佛は化を聲聞に與へて差別を授く、法性の佛に非ず。大慧、聲聞に記を授くるは、是れ秘密の說なり。大慧、佛と二乘と差別無しとは、惑障を離するに據りて解脱一味なり。智障を謂ふに非ず。智障の惑は、法無我の性を見て、乃ち清淨なるが故に。煩惱障は、人無我を見て、意識を捨離す。是時初めて藏識の習を斷じ、法障を滅して解脱し、方に永く淨を得。大慧、我は本住の法に依りて、此密語を作す。前佛と異なり、後更に說有り、是れ是の如き諸の文字を具するに非ざるが故に。大慧、如來は正知にして妄念有ること無く、思慮を待つて然して後に說法するに非ず。如來は久しく已に四種の習を斷じ、二種の死を離れて二種の障を除きたまふ。大慧、意及び意識眼等のはは習氣を因と爲す、是れ初那の性なり。無漏の善を離れ、流轉の法に非ず。大慧、如來藏とは、生死流轉及び涅槃苦樂の因なり。凡愚は知らずして妄に空に著す。大慧、變化の如來には金剛力士常に隨し護護す、眞實の佛に非ず。眞實の如來は、諸の限量を離れたまふ。二乗外道の知る能はざる所なり。現法の樂に住し、智忍を成就し、金剛力士の所護を假らず。一切の化佛は業より生ぜず。即ち是れ佛に非ず、亦佛に非ざるにも非ず。譬へば陶師の衆事を和合して所作有るが如く、化佛も亦爾り、衆相具足して法を演說す。然も自證聖智の所行の境を説くこと能はず。復次に大慧、諸の凡愚の人は六識の滅するを見て斷見を起し、藏識を了せずして常見を起す。大慧、自心は其本際を分別するが故に不可得。此分別を離れば即ち解脱を得、四種の習を斷じて一切の過を離るべし。

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、

三乘及び非乘も、佛の涅槃も有ること無し

悉く如来の記を授け、衆の過惡を離ると説くは

究竟の智、及び無餘涅槃を成就せしめんが爲に

怯劣の人を誘進す。此は密意に依りて説く

諸佛所得の智、是の如きの道を演説したまへるは

唯此れ更めて餘に非ず。故に彼には涅槃無し

欲と色と有と諸の見と、是の如き四種の習は

意識より生ずる所、藏も意も亦中に行り

意識眼等の、無常を見るが故に斷と説く

意と藏とに迷うて常を起し、邪智を涅槃と謂ふ

【斷食肉品】以下戒を示し生佛平等の所以を説く。

斷食肉品第八

爾時、大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、「世尊、願くば我が爲に食肉と不食肉との功

徳と過失とを説きたまへ。我及び諸の菩薩摩訶薩は其義を知り已りて未來現在の報習に

熏ぜらるる所の衆生の爲に之を演説し、肉味を捨てて法味を求め、一切の衆生に於て大慈

【卷第六】 梵音ハ
一カイヤーニシテ
也。順世外道のこと
なり。

心を起し、更に相親愛して一子の如く想ひ、菩薩地に住して阿耨多羅三藐三菩提を得しめん。或は二乘の地に暫時止息し、覺悟して當に無上正覺を成ずべし。世尊、路過罪等の諸の外道輩の、有無の見を起して斷常に執著するも、尚ほ遺餘有り食肉を聽さず、何に沉んや如來應正等覺は、大悲含有して世の依怙する所となりたまふもの、自他俱に肉を食するを許したまはんや。善い哉、世尊は大慈悲を具して世間を哀愍し、等しく衆生を觀たまふこと猶し一子の如し。願くば爲に食肉の過惡と不食の功德とを解説し、我及び諸の菩薩等をして聞き入りて奉行し、廣く他の爲に誦かしたまへ。』

爾時、大摩訶薩重ねて頌を説きて言さく、

菩薩摩訶薩は、無上覺を志求す

酒肉及び葱を食すと爲んや、食せずと爲んや

愚夫は貪りて肉を嗜み、塵穢にして名稱無く

彼惡獸と同じ、云何が食すべけん

食せば何の過有り、食せざれば何の徳か有る

唯願くば最勝尊、我が爲に具さに開演したまへ

爾時、佛、大慧菩薩摩訶薩に告げて言はく、『大悲、諦に聽け、諦に聽け善く之を思

念せよ、吾當に汝が爲に分別し解説すべし。大悲、一切の諸肉は無量の縁有り。菩薩は中

に於て、當に悲愍を生ずべく、應に噉食すべからず。我今汝が爲に其少分を説くべし。大

【羅刹】梵音ラークシヤサ(Rakshasa)可畏と譯す。惡鬼の通名なり。

【旃陀羅】梵音チヤンダーラ(Jandala)屠者、殺者等と譯す。印度最下種族の名にして四姓の下に位す。獵、守獵、屠殺等を業とす。

慧、一切の衆生は、無始より來、生死の中に在りて輪廻して息まず、曾て父母兄弟男女眷屬乃至朋友親愛侍使と作り、生を易へて鳥獸等の身を受けざるは靡し。云何が中に於て之を取つて食せんや。大慧、菩薩摩訶薩は諸の衆生を觀て己が身に同うし、肉は皆行命の中より來ることを念ふ。云何が食せん。大慧、諸の羅刹等すら我が此説を聞いて尙ほ應に肉を斷つべし、況んや法を樂しむるをや。大慧、菩薩摩訶薩は、在在生處に、諸の衆生を觀て慈念をもて、皆是れ親屬乃至一子の如く想ふ。是故に應に一切の肉を食す。大慧、衢路市肆に諸の肉を賣る人は、或は犬馬人牛等の肉を將して利を求めんが爲の故に而も之を販鬻す。是の如き雜穢云何が食すべけんや。大慧、一切の諸肉は皆是れ精血汗穢より成る所なり。清淨を求むる人にして、云何が取りて食せんや。大慧、肉を食する人衆生之を見て皆悉く驚怖す。慈心を修むるもの、云何が肉を食せんや。大慧、譬へば獵師及び旃陀羅の如き、魚を捕へ鳥を縛する諸の惡人等と、狗は見て驚吠し、獸は見て奔走す。空を飛び水に住する一切衆生の、若し之を見る有らば、威な是念を作さん、此人は氣息猶し羅刹の如し、今來つて此に至る、必らず當に我を殺すべし」と。命を護らんが爲の故に皆悉く走避す。肉を食する人も亦復是の如し。是故に菩薩は慈行を修せんが爲に應に肉を食すべからず。大慧、夫れ肉を食する者は、身體臭穢し惡名流布す、賢聖善人は用て親狎せず。是故に菩薩は應に肉を食すべからず。大慧、夫れ血肉は衆仙の棄る所にして、群聖は食せず。是故に菩薩は應に肉を食すべからず。大慧、菩薩は衆生の信心を護らんが爲に

【無供の行】衆生の身口意の三業を調和して諸の惡行を調伏すること。

【阿蘭若】梵音アランヤ(Aryyat) 邊澤所、寂靜所、寫と譯す。聖者の修行に適する所の意なり。

佛法に於て我説を生ぜざらしめ、惡法を以ての故に處に肉を食すべからず。大慧、若し我が弟子にして肉を食せば、諸の世人をして悉く説法を捨て、是言を作さしめん、云何が沙門の淨行を修する人にして、又他の食する所の味を愛着し、嗜し惡説の如く肉を食し、滿腹して世間を遊行し、諸の衆生をして悉く驚怖を蒙かしめ、清淨の行を壞し沙門の道を失はんと。是故に當に知るべし、佛法の中に調伏の行無し。菩薩は慧學して衆生を護り、廣の如きの心を住せず、應に肉を食せざらしむべし。大慧、人の肉を続けば、其氣氣穢なるが如く、獸肉に燒くも、等うして差別無し。云何が中に於て食不食有らん。是故に一切清淨を修ふものは、應に肉を食すべからず。大慧、諸の男男女女の塚間樹下、阿蘭若の處に空處に修行するもの、或は慈心に住し、或は咒術を得し、或は勝處を求め或は大衆に趨くに、肉を食するが故に一切障礙せられて成就することを得ず。是故に菩薩は、自他を利せんと欲せば、應に肉を食すべからず。大慧、夫れ肉を食するものは、其形色を見て、期も已に滋味を食ぼるの心を生ず。菩薩は一切衆生を慈念すること猶し己が身の如くす、云何が之を見て食想を爲さん。是故に菩薩は應に肉を食すべからず。大慧、夫れ肉を食する者は、諸天遠離し、口氣常に臭にして、睡夢安からず、覺め了りて憂悚し、夜叉惡鬼其精氣を奪ひ、心に驚怖多く、食足ることを知らず、疾病を増長して瘡癬を生じ易く、恆に諸蟲の隨食する所となり、食に於て深く厭離を生ずること能はず。大慧、我は常に説いて言はく、凡そ食喫する所は子の肉の想ひを作せ」と。餘の食するすら

尚ほ然り、云何が弟子に肉を食することを聽さん。大慧、肉は美好に非ず、肉は清淨に非ず、諸の罪惡を生じ、諸の功徳を敗る。諸仙聖人の棄捨する所なり、云何が弟子に食することを許さんや。若し食することを許すと言はば、此人は我を誘ふものなり。

大慧、淨美の食とは應に知るべし、則ち是粒米粟米大小の麥豆蘇油石蜜是の如き等の類。此は是れ過去の諸佛の許したまふ所にて、我が稱説する所なり。我が種姓中の諸の善男女は、心に淨信を懷き、久しく善根を植ゑ、身命財に於て貪著を生ぜず、一切を慈愍するものと猶し己が身の如くにす。是の如き人の應に食すべき所にして、諸惡虎狼の性を習ふ者の心に愛重する所に非ず。大慧、過去王有り。師子生と名く。肉味に耽著して種種の肉を食し、是の如くにして已まず、遂に人を食するに至る。臣民堪ふる能はず、皆悉く離叛し、國位を亡失して大苦惱を受く。大慧、釋提桓因は、天王の位に處りしが、過去に肉を食せる餘習を以て、身を變じ魔と爲りて鴿を逐ふ。我れ時に尸毘と名くる王と作り、其鴿を慈念して、自ら身の肉を割き以て其命に代れり。大慧、帝釋の餘習すら尚ほ衆生を惱ます、況んや餘の無慙にして常に肉を食する者に於てをや。當に知るべし、肉を食する者は自ら憐み他を惱ます。是故に菩薩は應に肉を食すべからず、大慧、昔、一王有り。馬に乗り遊獵せしに、馬驚き奔逸して山險に入り、既に歸路無く、又人居を絶す。牡師子有り、與に同じく遊處し、遂に醜行を行じて、諸の子息を生めり。其最長子を名けて斑足と曰ふ。後王となることを得て七億の家を領せしが、肉を食するの餘習にて、肉に非ざれば食せず、

初め禽獸を食し彼乃ち人に至る。生む所の男女は悉く是れ羅刹なりしが、此身を轉じてりて、復師子豺狼虎豹鷹鷂等の中に生れ、人身なることを求めんと欲せしかど、終に不可得なりき。況んや生死を出づる涅槃の道をや。

【水陸飛行】水陸飛行の動物の意。

【毘尼】梵音キナヤ(Vinaya)調伏と譯す。律のことなり。

【頭陀】梵音ドフ一タ(Uhuta)淘汰修治等と譯す。煩悩を拂ひて佛道を求むる比丘の行なると十二の行あり。

大慧、夫れ肉を食するものは、是の如き等の無量の過失有り。斷じて食せずんば大功徳を獲ん。凡愚は是の如きの損益を知らず。是故に我れ今汝が爲に開演す。凡そ是れ肉は悉く應に食すべからずと。大慧、凡そ生を殺す者は、多く人の食の爲なり。人若し食せずんば亦殺事無けん。是故に肉を食すると殺すと罪同じ。畜なる哉。世間は肉味に貪著して、人身の肉すら尙ほ取りて之を食す、況んや鳥獸を食せざるもの有らんや。味を食るを以ての故に、廣く方便を設けて、罽羅罽罍を處處に安施し、水陸飛行皆殺害せらる。設ひ自ら食せざるも、價直を食らんが爲に此事を作す。大慧、世に復人有り、心に慈愍無く、専ら陰暴を行ふこと、猶し羅刹の如し。若し衆生の其身充盛なるを見て、便ち肉想を生じて言はく、「此は食すべし」と。大慧、世に肉の是自殺に非ず亦他殺に非ず。心に疑はず殺して食すべきもの有る無し。是義を以ての故に、我は聲聞に是の如き肉を食することを許す。大慧、未來の世に愚癡の人有り、我が法中に於て出家と爲り、妄りに毘尼を説いて止法を壞亂し、我を誹謗して言はく、「肉を食することを聽し、亦自らも曾て食せり」と。大慧、我若し聲聞に肉を食することを聽許せば、我は則ち是れ慈心に住する者、觀行を修するもの、頭陀を行ずるもの、大乘に趣くものに非ず。云何が諸の善男子及び善女人を勸めて、諸の

衆生に於て、一子の想ひを生ぜしめ、一切の肉を斷ぜん。大悲、我れ諸處に於て、説いて十種を遮し、三種を許すは、是れ漸く禁斷し、其をして修學せしめしが、今此經中に、自死他殺、凡そ是れ肉なるものは一切悉く斷ぜり。大悲、我曾て弟子に肉を食するを許さず、亦現に許さず、亦當に許さざるべし。大悲、凡そ是れ肉食は出家の人に於て悉く是れ不淨なり。

【段食】 四食、即ち段食、觸食、思食、識食の第一にして、肉食等の有形の食物なり。【法食】 如法の食物なり。

【含生】 含情含識含靈とも云ふ。心識を含有するもの衆生を指す含生前後の文は肉食の非を説く。

大悲、若し癡人あり、謗りて、如來は肉を食することを聽許し、亦自らも食せり」と言はば、當に知るべし、是人は惡業の纏はる所、必ず當に永く不繞益の處に墮せん。大悲、我が有らゆる諸の聖弟子は、凡夫の段食すら尚ほ食せず、況んや血肉不淨の食を食せんや。大悲、聲聞緣覺及び諸の菩薩すら尚ほ唯法食のみ、豈に況んや如來をや。大悲、如來の法身は雜食の身にあらず。大悲、我は已に一切の煩惱を斷除す。我は已に一切の習氣を洗滌す、我は已に善く諸心の智慧を擇び、大悲平等にして、善く衆生を觀るに猶し一子の如くす。云何が聲聞の弟子の、肉を食することを許さん。何に況んや自ら食せん。是説を作す者は、是處有ること無し。」

爾時、世尊重ねて頌を説きて言はく、
悉く曾て親屬爲り。衆穢の成長する所
諸の含生をして恐怖せしむ。是故に應に一切の肉と葱と
菲蒜と及び諸の酒とは食すべからず

【叫喚獄】 叫喚地獄なり。

思ひ加まらず淨物を、修行者に遺棄し

亦常に麻油、及び諸の空孔ある目を翳れよ

神を以てすれば、諸の伽藍中に於て大いに恐怖すればなり

飲食は放逸を生じ、放逸は邪智を生じ

覺より食を生ず、是故に常に食すべからず

解覺は食を生ずるが故に、心は食の爲に醉はさる

心醉は愛欲を長じ、生死を解脫せず

利の爲に衆生を殺すも、財を以て諸肉を取るも

二俱に是れ惡業なり、死して叫喚獄に墮せん

想はず救求せず、此三種を淨と名く

世に是の如き肉無し、食する者を我は訶責す

更に互に相食噉して、死しては惡業の中に墮し

臭穢にして癡狂なり、是故に常に肉を食すべからず

獵師の旃荼羅と、屠兒の羅刹婆と

此等の種中に生るるは、斯れ皆肉を食するの報なり

食し已りて慙愧無くんば、生生常に癡狂せん

諸師及び菩薩、聲聞の嫌忌したまふ所なり

【象脇…央掘摩】
何れも經名なり。

【聖の表相】 聖人
の表相なり。

象脇と大雲と、涅槃と、央掘摩と
及び此楞伽經には、我れ皆斷肉を制す
先に見聞の疑ひを説き、已に一切の肉を斷す
其惡習を以ての故に、愚者は妄に分別す
食の解脫を障ふるが如く肉等も亦復然り
若し之を食する者有らば、聖道に入ること能はず
未來世の衆生は、肉に於て愚癡なるが、説いて
此は淨なり罪無し、佛は我等に食することを聽したまへりと言ふ
淨食の尙ほ藥の如きは、猶し子の肉の想の如し
是故に修行者は、量を知りて乞を行ぜよ
肉を食せば解脫に背き、及び聖の表相に違ひ
衆生をして怖を生ぜしむ、是故に應に食すべからず
慈心に安住するものは、我常に厭離せよと説く
師子及び虎狼も、應に共に同じく遊止すべし
若し酒肉等に於て、一切皆食せずんば
必ず賢聖の中に生じて、財豐にして智慧を具せん

【偽頭品】以下偽文により總説す。

【修多羅】スートラ經のことなり。

【八九の識と種種】種種とは種種識なり。

恒姪他、鉢頭摩第轉、鉢頭迷、醜泥醜醜泥、隸主羅主隸、虎隸虎羅虎隸、庚隸庚隸、跋隸跋羅跋隸、瞋第隸第、昨逝末第、尼羅迦隸、莎婆訶。
『大慧、若し善男子善女人あり、受持讀誦して、他の爲に此陀羅尼を解説せば、一切の天、龍、夜叉、人、非人等、及び諸の惡鬼神の、便を得る所とならず。我諸の雜刹を禁止せんが爲の故に、此神咒を説く。若し此咒を持せば、即ち入楞伽經の一切の文句を受持し、悉く己に具足すとなさん。』

偽頭品第十之一

爾時、世尊重ねて此修多羅中の諸の廣義を宣べんと欲するが故に、頌を説きて言はく、
諸法は堅固ならず、皆分別より生ず
分別即ち空なるを以て、分別する所も有に非ず
虛妄分別によつて、是に則ち識の生ずる有り
八九の識と種種とは、海と衆の波浪との如し
習氣常に増長するは、槃根の堅固なるに依る
心は境界に隨つて流ること、鐵の磁石に於けるが如し
衆生の所依の性は、諸の計度を遠離し

【心王】 心識のこと。心所の王なるが故に心王と稱す

【補伽羅】 梵音ブツドガラ (Tib. འོ་ཀ་ལ་) 一人、衆生と譯す。

【蘊界】 五蘊と十八界。

【愚夫は妄に】 妄に分別する意なり

【能相所相】 自ら傷く法を能、働きかけられる法を所と云ふ。相とは法の特質なり。

及び智、所知を離る、依を轉ずれば解脫を得ん如幻三昧を得て、十地を超過し

心王を觀見する時は、想も識も皆遠離す

爾時に心は依を轉ず、是を即ち常住と爲す

蓮花宮の幻境の、轉る所に在り

既に彼宮に住し已れば、自在無功用にして

諸の衆生を利益すること、衆色の摩尼の如し

有爲も無爲も無く、智妄の分別を除く

愚夫迷うて執取するは、石女の子を夢みるが如し

應に知るべし、補伽羅、蘊界、諸縁等も

悉く空にして無自性なり、無生、有、非有なりと

我方便を以て説けど、而も實に相有ること無し

愚夫は妄に能相、及び所相を執取するなり

一切の知は知に非ず、一切は一切に非ず

愚夫の分別する所のごとく、佛は自他を覺すること無し

諸法は幻夢の如く、無生と無自性と

皆性空なるを以ての故に、有無は不可得なり

【諸の分別の取】
取は取著の意。

【心心の法】 心心
所の法なり。

我は惟一性を説く、妄の計度を離る
自性に二有ること無し、衆聖の行ずる所なり
四大不調の如し、變吐して螢光を見る
所見皆有に非ず、世間亦是の如し
猶し幻の所現の如く、草木瓦礫等は
彼幻にして所有無し、諸法亦是の如し
取に非ず所取に非ず、縛に非ず所縛に非ず
幻の如く陽焰の如く、夢の如く亦翳の如し
若し眞實を見んと欲せば、諸の分別の取を離れ
應に眞實觀を修すべし、見佛必ず疑無し
世間は夢に等しく、色資具亦爾り
若し能く是の如く見れば、身は世の爲に尊ばる
三界は心に出りて起り、迷惑して妄の所見
妄を離れて世間無し、知り已らば染依を轉ぜん
愚夫の所見、妄に生滅有りと謂ふも
智者は如實に觀て、不生にして亦不滅とす
常に行じて分別無く、心心の法を遠離し

【色究竟天】色界第十八天の第十八色界の究竟天なり

【此相】虚妄の相を云ふ。

色究竟天に住して、諸の遺失の處を離る

彼に於て正覺を成じ、力前自在

及び諸の勝三昧を具し、現化此に在らず

化身は無量億にして、隨く一處の處に遊び

愚夫をして聞くことを得しむ、智慧の法の響の如し

初中後を遠離し、亦有無を離る

多に非ずして多を理じ、不動にして普遍なり

衆生の身中に、覆ふ所の性質を説き

迷惑して幻有ならしむ、幻の迷惑と爲るに非ず

心の迷惑に由るが故に、一切は皆悉く有

此相の繫縛を以て、識論は世間を起す

是の如く、諸の世間は、唯假の施設のみ

諸見は溼沙の如く、人法の中に行はる

若し能く是の如く知らば、是れ則ち所依を轉じて

乃ち我が眞子となり、隨順の法を成就せん

愚夫の分別する所の、堅濕煖動の法は

假名にして實有ること無く、亦相所相無し

【依他起性】 三性
の一。前出。

【自相の分別する
ところ】 分別する
る諸法の自相な
り。

身形及び諸根は、皆八物を以て成る
凡愚は色を妄計して、迷惑して身を籠檻す
凡愚は妄に分別して、因縁の和合より生ずる
眞實の相を了せず。三有に流轉す
識中の諸の種子は、能く心の境界を現す
愚夫は分別を起して、二取を妄計す
無明愛及び業諸の心、彼に依りて生ず
是を以て我は了知して、依他起性と爲す
妄に有物を分別し、迷惑して心の行ずる所
此分別は都て無なり、迷つて妄計して有と爲す
心は諸縁の爲に縛せられ、衆生を生起す
諸縁若し遠離すれば、我は所見無しと説く
已に衆縁を離るれば、自相の分別するところ
身中に復起らず、我は所行無しと爲す
衆生の心に起す所の、能取及び所取
所見、皆無相なり、愚夫の妄分別のみ
阿頼耶を顯示する、殊勝の藏識の

【世の分別】 世人の分別なり。

【無生忍】 無生法忍の略。不生不滅の眞如法性を忍知して安住する位なり。前出。

【本無生】 本來無生の意。

能所取を離れたるを、我は説いて眞如と爲す
 蘊の中に入有る無く、我無く衆生も無し
 生は唯是識の生じたるのみ、滅も亦唯識の滅するのみ
 猶し書ける高下の如く、見ゆと雖も所有無し
 諸法も亦是の如し、見ゆと雖も有に非ず
 乾闥婆城の如く、亦熱時の炎の如く
 所見は恆に是の如し、智觀不可得なり
 因縁及び譬喩は、此を以て宗を立つ
 乾城、夢、火輪、陽焰、日月光
 火焰毛等の喩は、此を以て無生を顯はす
 世の分別は皆空なり、迷惑は幻夢の如し
 諸有、不生を見る、三界は依る所無しと
 内外亦是の如し、無生忍を成就して
 如幻三昧と、及び意生身とを得
 種種の諸神通と、諸力及び自在とを得
 諸法は本無生なり、空にして自性ある無し
 諸の因縁に迷惑して、而も生滅有りと謂ふ

【外の色】 外界の色法なり。

【辟支佛】 獨覺、無師獨悟する人なり。

愚夫は妄に分別して、心を以て心を現はし及び外の色を現はす、而も實には所有無し定力の觀見の如く、佛像と骨鎖と

及び分析せる大種とは、假に施設せる世間のみ身と資及び所住と、此三を所取と爲し

意と取と及び分別と、此三を能取と爲す迷惑妄計するものは、能所の分別を以て

但文字の境に、隨つて眞實を見ず行者は慧を以て、諸法は自性無しと觀ぜば

是時無相に住して、一切皆休息せん墨を以て 雜を塗るが如く、無智の者は妄に取れども

實には三乘有ること無し、愚夫は見る能はず若し 諸の聲聞、及び辟支佛を見て

皆大悲の菩薩の、變化の所現にして三界は唯是心と見ば、分別の二自性は

依を轉じて人法を離る、是を即ち眞如と爲す日月、燈、光焰、大種及び摩尼

【陀都】梵音ダー
ン(Dhatu)藥用と
して用ひられたる
鎖物なり。

【同印】同法印の
意妙法の印蓋なり

無分別にして用を作す、諸佛も亦是の如し
 諸法は毛輪の如く、生住滅を遠離し
 亦常無常を離る、染淨も亦是の如し
 陀都の藥を著るが如く、地を見れば金色を作せども
 而も實は彼地中に、本金相有る無し
 愚夫も亦是の如く、無始より迷亂せる心
 妄に諸有の實を取るも、幻の如く陽焰の如し
 塵に一種子は、非種と與に同印にして
 一種は一切の種なることを觀すべし。是を心の種種と名く
 淨の種子を一と爲し、依を轉ずるを非種と爲す
 平等にして法印を同くし、悉く皆無分別なり
 種種の諸の種子は、能く諸の趣生を感ず
 種種の衆の雜苦を、一切の種子と名く
 諸法の自性を觀すれば、迷惑は遣ることを待たず
 物の性は本、無生なり、了知すれば即ち解脱を得ん
 定者は世間を觀じて、衆色は心より起るとす
 無始より心は迷惑すれども、實は色も無く心も無し、

【無記】非善非惡の性に對して、その何れとも記別すべからざるもの。
 【二種の行】心相應行と心不相應行との二行。

幻まぼろしと乾城けんじやう、毛輪もうりん、及び陽焰やうえんとの如ごとく

非有ひゆうにして有ゆうと現げんす。諸法しよぽうも亦是またの如ごとし

一切いつていの法ぽうは不生ふじやうなり、唯迷惑たみわくの所見しよけんのみ

迷妄まいたうより生しやうずるを以もつて、愚ぐは妄計まうけいして二にに著ちやくす

種種しゆしゆの習氣じゆきに由よりて、諸しよの波浪はらうの心しんを生しやうず

若もし彼習かじゆを斷たずるとき、心しんの浪らうは復起ふたうらず

心しんは諸境しよきやうを緣えんじて起おこること、畫ゑの如ごとく壁かべに依よる

爾しからずんば虛空中こくうちゆうに、何ぞ畫ゑを起おこさざらん

若もし少分せうぶん、相さうを緣えんじて、心しんを生しやうずることを得えしめば

心しんは既に緣えんより起おこる、唯心たひしんの義ぎを成じやうぜざらん

心性しんじやうは本もと、清淨しやうじやうなること、猶なほし淨じやうらなる虛空こくうちゆうの若ごとし

心しんをして還かへつて心しんを取とらしむるは、習じゆに由より、異因いんに非あらず

自心じしんの現げんに執著しやくちやくし、心しんをして起おこさしむるを得える

所見しよけんは實じつに外げに非あらず、是故こゝゆゑに唯心たひしんと説とく

藏識ざうしを説といて心しんと名なけ、思量しりやうを以もつて意いと爲なし

能よく諸しよの境界きやうがいを了れうするを、是れ則すなはち名なけて識しと爲なす

【無相果】不相應
法の一なり。即ち
色界第四禪中の
無想天に至れば心
心所滅して身は死
灰の如くなる。

現在の識は通じて、善不善等を具す
證は乃ち定時無く、地及び諸刹を越え
亦心量を越えて、無相果に住す

所見の有と無と、及び種種の相とは
皆是諸の愚夫の、顛倒して執著する所なり
智若し分別を離るれば、物の有は則ち相違す
心に由るが故に色無し、是故に無分別なり
諸根猶し幻の如く、境界悉く夢の如し

能作及び所作、一切皆有に非ず

世諦は一切有にして、第一義は即ち無

諸法は無性の性、説いて第一義と爲す

無自性の中に於て、諸の言説に因るが故に

而も物の起る有り、是を名けて俗諦と爲す

若し言説有ること無くんば、所起の物亦無けん

世諦の中には言ありて、事無きもの有ること無し

顛倒虚妄の法にして、實に不可得なり

若し倒是れ有ならば、則ち無も無自性ならん

【心外と謂ひ】心
外の實在と思ひ。

【依他起】依他起
性のことなり。

有無の性なるを以ての故に。而も彼は顛倒の法にして
一切の諸の所有は、是れ皆不可得なり
悪習の心に熏じて、現する所の種種の相に
迷惑して心外と謂ひ、妄に諸色の像を取り
無分別を分別す、分別は是れ斷すべし
無分別にして能く實性を見れば、眞空を證せん
無明の心に熏じて、現する所の諸の衆生は
幻の象馬等、及び樹葉を金と爲すが如し
猶し翳目の者の迷惑して、毛輪を見るが如く
愚夫も亦是の如し、諸の境界を妄取す
分別と所分別、及び分別を起す者と
轉と所轉と轉の因と、此六の解脫に因る
妄計に由るが故に、地無く、諸諦無く
亦諸の利土、化佛及び二乘無し
心は一切の法を起せど、一切處及び身
心性も實に無相なり。無智のものは種々に分別して
迷惑の相を取る、是を依他起と名け

【餘に非ず】餘物を生ずるに非ず。

相中所有の名、是を則ち妄計と爲す
諸縁の法和合して、名相を分別す
此等は皆不生、是則ち圓成實なり
十方の諸の刹土、衆生の菩薩の中の
有らぬる法報徳も、化身及び變化も
皆無量高の、極樂界中より出づ
方廣經中に於て、唯に密意の説を知るべし
有らぬる佛子の説、及び諸の尊師の説は
悉く是れ化身の説なり、是れ實徹の佛に非ず
諸法は生有ること無し、彼亦非有に非ず
幻の如く亦夢の如く、化の如く乾城の如し
種種は心に由りて起り、種種は心に由りて脱す
心起るは更に餘に非ず、心滅するも亦是の如し
衆生の分別を以て、現する所の虚妄の相は
惟心にして實に境無し。分別を離るれば解脱せん
無始より積集する分別の、諸の戲論の
惡習の熏する所に由つて、此に虚妄の境を起すは

【妄に取所取を】
妄りに能取所取を
分別する。

【閉戸】 梵音ペ
シ(Per)肉圍肉
血と譯す。母胎に
於る血肉僅かに凝
結して堅からざる
を云ふ。
【稠胞】 梵語アル
ブダ(Andha)の
譯語。受胎二七日
の胎兒の状態。

妄に自性を計するが故に。諸法は皆無生にして
縁起に依止す。衆生は迷ひて分別すれど
分別相應せざれば、依他は即ち清淨なり
所住に分別を離れ、依を轉ずれば即ち眞如なり
妄に虚妄を計する勿れ、妄計は即ち實なし
迷惑して妄に取所取を、分別するも皆無なり
分別して外境を見るは、是れ自性の妄計なり
此虚妄の計に由りて、縁起の自性生ず
邪見も諸の外境も、境無くして但是れ心のみ
理の如くに正しく觀察すれば、能所取、皆滅す
愚の分別する所の如き外境は、實に有るに非ず
習氣は心を擾濁し、外境に似て轉ず
已に二分別を滅すれば、智は眞如に契はん
無影像を起すは、難思の聖の所行なり
父母の和合に依るは、酥の瓶に在るが如し
阿頼耶と意とは、俱に赤白をして增長せしむ
閉戸及び稠胞、穢業は種種に生ず

善風は四大を増し、出生は果の熟するが如し

五と五と及び五と、指竅に九種有り

爪甲齒毛具さに、満足すれば即便ち生る

初生は猶し蜚蟲の如し、亦人の睡より覺め

眼を開きて色を見るが如く、分別漸く増長す

分別決了し已れば、屏翳等相合して

始めて言語を發すること、辨し鸚鵡等の如し

衆生の意樂に隨つて、大乘を安立す

惡見の行處に非ず、外道は受る能はず

自内所證の乘は、計度の所行に非ず

願くば益きたまへ、佛の滅後、誰か能く此を受持せん

大慧、汝應に知るべし、善逝の涅槃の後

未來世に當に、我が法を持する者有るべし

南天竺國の中の、大名徳の比丘にして

厥眞を龍樹と爲す。能く有無の宗を宣し

世間の中に我が無上の、大乘の法を宣し

初め歡喜地を得て、安樂國に往生せん

【善逝】諸惑を斷じよく世間を出て果上に趣き退る事なきこと。

衆縁の起す所の義は、有無俱に不可なり
縁中に物を妄計し、有無を分別す

是の如きは外道の見にして、我が法を遠離す

一切法の名字を、生處に常に隨逐して

已習及び現習、共に展轉して分別す

若し名を説かずば、世間は皆迷惑せん

迷惑を除かんが爲の故に、是故に名言を立す

愚は諸法を分別して、名字及び諸縁の

生に迷惑す。是三種の分別は

不生不滅なるを以て、本性は虚空の如し

自性の所有無き、是を妄計の相と名く

幻、影、陽焰、鏡像、夢、火輪の如く

響、及び乾城の如し、是則ち依他起なり

眞如と空と不二と、實際及び法性は

皆分別有る無し、我は是を圓成と説く

言語と心の所行は、虚妄にして二邊に墮す

慧の分別は實體なり。是慧は無分別なり

智者の取する所に於て、愚に在りては則ち現せず
 是の如きの智の現する所の、一切の法は無相なり
 假金の瓔珞の金に非ざるを、愚の金と謂へる如く
 諸法も亦是の如く、外道妄に計度す
 諸法は無始終にして、眞實の相に在らず
 世間は皆作るもの無し、妄計して了らること能はず
 過去の有らゆる法も、未來及び現在の
 是の如き一切の法も、皆悉く是れ無生なり
 諸縁和合するが故に、是故に法行りと説く
 若し和合を離るれば、不生亦不滅なり
 而も一切の縁起の法は、一も異も不可得なり
 略説して以て生と爲し、廣説して則ち滅と爲す
 一は是れ不生空にして、一は復是れ生空なり
 不生空は勝れ、生空は則ち壞滅す
 眞如と空と實際と、涅槃及び法界
 種種の意生身とは、我が説く皆異名なり
 諸の經律論に於て、淨分別を起すべし

【經律論】三藏。
 藏とは一切の文義
 又は教理を藏むる
 義なり。

若し無我を了らずんば、教に依りて義に依らざるなり
 衆生の妄に分別して、見る所は兎の角の如し
 分別は即ち迷惑なること、渴獸の焰を逐ふが如し
 妄の執著に由りて、分別を起す
 若し妄執の因を離れば、分別は則ち起らず
 甚深の大方廣は、諸刹の自在を知ると
 我佛子の爲に説く。諸の聲聞の爲に非ず
 三有は空なり、無常なり、我我所を遠離すと
 我諸の聲聞の爲に説く、是の如きは總相の説なり
 一切の法に著せず、寂靜にして獨り行する所の
 辟支の果を思念せよと、我彼人の爲に説く
 身は是れ依他起、迷惑して自ら見ず
 外に自性有りと分別し、心をして妄起せしむ
 報得及び加持、諸種の種類注
 及び夢中の所得とは、是れ神通の四性なり
 夢中の所得と、及び佛の威力と
 諸種の種類等とは、皆報得通に非ず

青氣、心に重して、物に似て影を起す

凡愚は未だ悟心こと能はず、是故に説いて二乗と爲す

妄分別に随つて、外相幾ばくの時か有る

爾時妄を増して、自心の迷を見ず

何を以て有生と説いて、所見と説かざる

所見無くして見、誰が爲に其何が違く

心の體は、自ら本淨にして、意及び諸識を俱なり

得氣の常に重するが故に、諸の濁亂を作す

意識は身を捨し、意は乃ち諸趣を求め

識法は境界に似て、見已りて言り取る

所見は唯自心にして、外境は不可得なり

若し是の如きの觀を修せば、妄を捨てて眞相を念ぜん

唯の定者の境界、業及び佛の威力と

此三不思議は、雜思智の所行なり

過未の補御羅と、虚空及び涅槃を

我は世俗の言に随つて説く、眞諦は文字を離る

二乘及び外道は、同じく諸見に依止し

唯心に迷惑して、妄に外境を分別す

羅漢と辟支佛と、及び佛菩提の

種子は堅し、成就すれば、夢に佛其頂に灌ぎたまふ

心は幻にして寂靜に趣く、何の爲に有無と説き

何の處、及び誰の爲、何故なるか、願くば爲に説きたまへ

唯心に迷惑するが故に、幻有無と説く

生滅の相、相應すれば、相と所相と平等なり

分別を意識と名く、五識と俱に

影像、瀑流の如く、心の種子より起る

若し心及び意と、諸識起らずば

即ち意生身を得、亦佛地を得

諸縁及び蘊界、人法の自相

皆心の假の施設のみ、夢及び毛輪の如し

世を觀する幻夢の如しと、眞實に依止せよ

眞實は諸相を離れ、亦囚の相應を離る

聖者の内に證する所は、常に無念に住し
迷惑の囚、相應して、世間を執りて實と爲す

一切の戲論滅すれば、迷惑は則ち生ぜず

迷ひの分別有るに隨つて、真心常に現起す

諸法は空にして無性なり。是は常なり無常なりとは

生論者の所見にして、是れ實生論に非ず

一なり異なり俱なり不俱なり、自然及び自在

時、微塵は譬、音を緣として、世間を分別す

是は生死の種なり、種有るが故に生有り

畫の壁に依るが如し。了知すれば即ち滅す

譬へば幻人を見る如く、幻に生死有りとす

凡愚亦是の如く、癡なるが故に轉脱を起す

内外二種の法と、彼因縁とを

修業者は皆、無相に任すと觀察せよ

習氣は心を離れず、亦心と俱ならず

習の爲に潔はるところと雖も、心相は差別無し

心は白色の衣の如く、意識の習を垢となし

垢習の汚す所となり、心をして顯現せしめず

我は虚空の如く有に非ず、亦無に非すと説く

【三相續】 三種相續なり。

【欲、色、無色】 欲界、色界、無色界。

藏識も亦是の如く、有無皆遠離す
意識若し依を轉ぜば、心は則ち濁亂を離る
我は心を佛と爲す、一切の法を覺了して
永く三相續を斷じ、亦四句を離れ
有無皆捨離すと説く。諸有は恆に幻の如し
前七地の心起るが故に、二自性有り
餘地及び佛地は、悉く是れ圓成實なり
欲、色、無色界、及び涅槃に於て
彼一切身は皆、是れ心の境界なり
其所得有るに隨つて、是に即ち迷惑起る
若し自心を覺り已れば、迷惑は即ち生ぜず
我は二種の法を立つ、諸相及び證なり
四種の理趣を以て、方便の説成就す
種種の名相を見るに、是れ迷惑分別のみ
若し名相を離るれば、性、淨なる聖の所行ならん
能所の分別に隨へば、則ち妄計の相有り
若し彼分別を離るれば、自性は聖の所行ならん

【諸の有爲】 有爲
法の意。

心若し解脱する時は、則ち常恆に眞實となり
種性及び法性眞如は、分別を離れん
清淨の心有るを以て、雜染現すること有り
無淨なれば則ち無染にして、眞淨は聖の所行なり
世間は緣より生じて、分別を増長す
彼幻夢の如しと觀すれば、是時即ち解脫す
種種の惡習氣、心と和合するが故に
衆生は外境を見て、心の法性を見ず
心性は本清淨にして、諸の迷惑を生ぜず
迷は惡習に従つて起る、此故に心を見ず
唯迷惑即ち眞なり、眞實は餘處に非ず
諸行は行に非ず、餘處に見えざるを以ての故に
若し、諸の有爲を觀じて、相所相を遠離すとせば
衆相を離るるを以ての故に、世は唯自心と見ん
唯心に安住して、外境を分別せず
眞如の所縁に住して、心量を超過せん
若し心量を超過せば、亦無相を超えん

【集】 集諦なり。

無相に住するものは、大乘を見ざるを以てなり
寂に行じて無功用に、諸の大願を淨修せよ
及び我れ最勝智は、無相なるが故に見ず
應に心の所行を觀すべし、亦智の所行を觀じ
慧の所行を觀見せば、相に於て迷惑無し
心の所行は苦諦にして、智の所行は是れ集
餘の二及び佛地は、皆是れ慧の所行なり
得果と涅槃と、及び八聖道と
一切の法を覺了するは、是れ佛の清淨智なり
眼根及び色境と、空と明と作意とにより
故に藏識よりして、衆生の眼識生ず
取者も能所取も、名事ともに有ること無し
妄に無因を分別する、是を無智者と爲す
名も義も互に生ぜず、名義の別も亦爾なり
因無因の生を計するも、分別を離れず
妄に實諦に住すと謂ふは、見に隨つて施設せる説なり
一性五不成は、諦の義を捨離す

【此等の處】 此等の處。

【自心を見る】 諸法を自心の所現と見る。

有無を成證して、應に此事の處を這はべし
 無我を見るを以ての故に、實に諸有を求まず
 作者を計して常と爲し、兜率、摩訶訶興す
 實諦は言説を離れ、而も寂滅の法を見る
 藏識に依るが故に、意識有ることを得
 心意を依と爲すが故に、諸識の生有り
 虛妄所立の法と、及び心性眞如とを
 定者は是の如きものを觀じて、唯心の性に通達す
 意と相と事とを觀じて、常無常及び
 生不生を念はず、二義を分別せず
 阿頼耶より、諸識を生起し
 終に一義に於て、二種の心を生ぜず
 自心を見るに由るが故に、空に非ず言説に非ず
 若し自心を見ずんば、見網の爲に縛せられん
 諸縁は生有る無く、諸根は所有無く
 貪無く纏界無く、悉く諸の有爲無し
 本より 諸の業報無く、作も無く有爲も無く

【有も無く記法も無く】有記法も無く記法もなく。

【十二支】十二因縁なり。三界の因果の迷を十二とし衆生輪轉の相を示す。

執著は本來無なり、縛も無く亦脱も無し

有も無く記法も無く、法も非法も皆無なり

時に非ず涅槃に非ず、法性は不可得なり

佛に非ず眞諦に非ず、因に非ず亦果に非ず

倒に非ず涅槃に非ず、生に非ず亦滅に非ず

亦十二支も無く、邊無邊も有るに非ず

一切の見皆斷ず、我は是を唯心と説く

煩惱業と身と、及び業と得果とは

皆焰の如く夢の如く、乾闥婆城の如し

唯心に住するを以ての故に、諸相皆捨離し

唯心に住するを以ての故に、能く斷常を見る

涅槃には諸蘊無く、我も無く亦相も無く

唯心に入るを以て、依を轉じて解脱することを得

悪習を因と爲すが故に、外に大地

及び諸の衆生を現す、唯心なれば所見無し

身も資も土も影像も、衆生の習の所現のみ

心は是有無に非ず、習氣は顯はれざらしむ

垢は淨中に現すれども、淨は垢を現ぜず
 猶如虚空を翳するが如く、心の現さざるも亦爾り
 妄計の性は有と爲せども、緣起には則ち無し
 妄計の迷執を以てすれば、緣起には分別無し
 所造は皆色に非ず、色有れば所造に非ず
 夢、現、焰、乾城、車等は所造に非ず
 若し緣生の法に於て、實及び不實と謂はば
 此人は決定して、一異等の諸見に依る
 聲聞に三種有り。願生と變化と
 及び食臘等を離るとなり、法の所生に従ふ
 菩薩にも亦三種有り、未だ諸佛の相に非ざると
 衆生を思念すると、偶像を現ずるとなり
 衆生の心の現はす所は、皆習氣より生ず
 種種の諸の影像是、星雲日月の如し
 若し大種是有ならば、所造の生有るべし
 大種は無性なるが故に、能相も所相も無し
 大種は是れ能造にして、地等は是れ所造なり

大種は本より無性なり、故に所造の色無し
假實等の諸色、及び幻の起す所の色
夢色及び乾城の色、焰色を第五と爲す
一闍提に五種有り、種性の五も亦然り
五乘及び非乗の、涅槃に六種有り
諸蘊は二十四、諸色に八種有り
佛に二十四有り、佛子に二種有り
法門に百八有り、聲聞に三種有り
諸佛の刹は唯一なり、佛の一なるも亦復然り
解脱に三種有り、心の流注に四有り
無我に六種有り、所知に亦四有り
作者を遠離し、及び諸見の過を離る
内の自證は不動にして、是れ無上の大乘なり
生と不生に、八種九種有り
一念と漸次とに、證得する宗は唯一なり
無色界に八種有り、禪の差別に六有り
辟支と諸佛子の、出離に七種有り

【兜率】兜率天、梵音ツシクアヘニニ、(二)妙足と譯す。

【不思議易】不思議、

三世は、く有る無く、常無常亦無なり
 作業及び果報は、皆夢中の事如し
 諸佛の本より不生なり、聲聞の佛子
 心に憶に見る能はざるが爲に、幻等の法の如きが故に
 一切の初に於て、兜率より胎に入りたまふ
 初めて生れ及び出家して、生處より生ぜず
 流轉の業生の爲に、涅槃を説く
 諸諦及び諸利、權に隨つて覺悟せしめたまふ
 世間の洲も樹林も、無我も外道の行も
 師乘も阿頼耶も、果境の不思議も
 星宿日月の種類も、諸王も諸天種も
 乾闥婆も夜叉の種も、皆業愛に因つて生じ
 不思議易の死有りて、猶し習氣と俱なり
 若し死永へに盡る時は、煩惱の網已に斷ず
 財穀と金銀と、田宅と及び僮僕と
 象馬牛羊等を、皆悉く畜ふべからず
 穿孔有る床に臥せず、亦泥をもて地を塗ることを得ざれ

金銀銅鉢等を、皆悉く畜ふべからず

土石及び鐵、蠶及び玻璃器は

摩竭量【摩竭量】摩竭。摩伽羅。梵音マカラ(Makara)大身と譯す。を満す。鉢に隨ふが故に畜ふることを聽す

常に青等の色の、牛糞、泥、果葉にて

白欵婆羅等を染めて、袈裟の色を作らしめよ

四指量の刀子、刀は半月形の如く

以て衣を割截するが爲に、修行者に畜ふるを聽す

工巧明を學ぶこと勿れ、亦應に賣買すべからず

若しせば須らく、淨人を使ふべし。此法は我が所説なり

常に諸根を守護し、善く經律の義を解して

諸の俗人に狎はざれ、是を修行者と名く

樹下及び巖穴、野屋と塚間と

草窟及び露地とに、修行者は應に住すべし

塚間及び餘處にあるには、三衣常に身に隨へよ

若し衣服闕くる時、來つて施す者有らば應に受くべし

乞食に出でて遊行するには、前に一尋の地を視て

念を攝して行乞して、猶し蜂の花を採るが如くせよ

【摩竭量】摩竭。摩伽羅。梵音マカラ(Makara)大身と譯す。
【欵婆羅】梵音カシハラ(Kashira)毛を雜へたる織物なり。
【四指量】四寸の刀。

【淨人】衆僧に給仕する者を云ふ。

【三衣】僧の著る三種の衣服。即ち三種の袈裟也。

闍黎の所集の處、衆雜の比丘尼の俗と交りて
活命するものに、皆應に食を乞ふべからず

諸王及び王子、大臣と長者とに

修行者は食を乞ひ、皆應に親近すべからず

生家及び死家、親友所愛の家

僧尼の和雜せる處にて、修行者は食すべからず

寺中に煙を斷たずして、常に作られたる種種の食

及び故に爲に造られたるものを修行者は食すべからず

行者は世間の、能相と所相との

皆悉く生滅を離れ、亦有無を離るるを觀ぜよ

大乘入楞伽經 卷第七

大周于闐國三藏法師實叉難陀勅を奉じて譯す

【偽頌品】以下外道の惡見を打破し萬法唯識を顯す

【力通】神通力なり。

【微塵……作者】外道が萬有の根本と見るもの。

【誹謗、建立】破壞建設。

偽頌品第十之二

若し諸の修行者の、分別を起さずんば
久しからずして、三昧と力通及び自在を得ん
修行者は應に、微塵、時、勝性
作者に従つて、世間を緣生すと妄執すべからず
世は自ら分別に従つて、種種の習氣生ず
修行者は應に觀るべし、諸有は夢幻の如くなるを
恆常に見て誹謗し、及び建立を遠離し
身資及び所住に、三有を分別せざれ
飲食を思想せず、正念端身にして住し
數諸佛及び、菩薩を恭敬し禮せよ
善く經律中の、眞實理趣の法

五法二無我を解し、亦自心の内證の淨の法性と諸地、及び佛地を思惟せよ。行者は此を修習して、蓮華蓋頂に處れ諸趣の中に沈淪する、諸有を厭離し、境間の靜處に住きて、諸の觀行を修習せよ。有物は無因にして生ず、空に無常を離ると稱ひ、亦有無を離ると稱ひ、空計して中道と爲す。無因論を空計するあり、無因は是れ斷足なり。外物を了知ざるが故に、中道を壞滅す。諸見に墮せんことを恐れ、所執の法を捨てず。建立と諍論を以て、空に没いて中道と爲す。唯心なりと覺了するを以て、外法を捨離し、亦空分別を離る、此行は中道に契ふ。唯心にして境有る無く、境無ければ心生ぜず。我及び諸の如來は、此を説いて中道と爲す。若は生、若は不生、自性と無自性と。有無等とは皆空なり、應に二を分別すべからず。

【機】
機根。

分別を起す能はざるを、愚夫は解脫と謂ふ
心に覺智の生ずる無くんば、豈に能く二執を斷ぜんや
自心を覺するを以ての故に、能く二の所執を斷ず
了知するが故に能く斷ず、分別すること能はざるには非ず
心の所見を了知せば、分別は即ち起らず
分別起らざるが故に、眞如に心は轉依す
若し起る所の法を見て、諸の外道の過を離るれば
是れ智者の取る所の、涅槃にして滅壞に非ず
我及び諸佛は、此を覺るを即ち成佛と説く
若し更に異なる分別は、是れ則ち外道の論なり
不生にして而も生を現じ、不滅にして而も滅を現す
普く諸億の刹に於て、頓に現すること、水月の如し
一身にして多身と爲り、火を然やし及び雨を注ぎ
機に隨つて心中に現す、是故に唯心と説く
心も亦是れ唯心、非心亦心にして
種種の色相を起す、通達すれば皆唯心なり
諸佛と聲聞と、緣覺等の形相

及ぶ餘の種種の色は、皆是れ唯心と説く
無色界より、乃至地獄の中に

普く衆生の爲に現じたまふ、皆是れ唯心の作なり
如幻の諸の三昧、及び眞生身

十地と自在、皆轉依に由りて得

愚夫は相の爲に縛せられ、見聞覺知に隨ひ

自ら分別し顛倒して、戲論の動かす所なり

一切は空にして無生なり、我は實に涅槃せず

化佛は諸の刹に於て、三乘一乘を演べたまふ

佛に三十六あり、復各十種あり

衆生の心器に隨つて、而も諸の刹土に現じたまふ

法佛の世間に於けるは、猶し妄計の性の如し

種種有りと見ゆと雖も、而も實には所有無し

法佛は是れ眞佛にして、餘は皆是れ化佛なり

衆生の種子に隨つて、佛の現じたまふ所の身を見る

諸相に迷惑するを以て、分別を起し

分別は眞と異ならず、相は分別に即せず

【熏習】身口意に現はれたるものを阿頼耶識に留むるを云ふ。

【六十二】六十二の見惑なり。

【法執】法に對する執着なり。
【本識】阿頼耶識の異名。有爲無爲一切法の根本の故に本識と云ふ。
【有爲、無爲】有爲は爲(爲作造作)を有するの意、因縁によりて生じたる諸現象を云ふ。無爲とは本來常住にして何物にも造作せらるることなき法の意なり。

自性及び受用、化身と復現化と

佛徳の三十六は、皆自性の所成なり

外より熏習する種に由りて、分別を生じ

眞實を取らずして、妄に執する所を取る

迷惑は内心を依とし、及び外境を縁とす

但此二に由りて起り、更に第三縁無し

迷惑は内外に依つて、生起するを得るのみ

六十二、十八、故に我説いて心と爲す

但根境あるのみと知れば、則ち我執を離れ

心にして境界無しと悟れば、則ち法執を離る

本識に由り依るが故に、諸識の生あり

内處に由り依るが故に、外に似て影の現することあり

無智は恆に有爲、及び無爲を分別すれども

皆悉く不可得なること、夢星毛輪の如し

乾闥婆城の如く、幻の如く焰水の如く

非有にして有と見ゆ、緣起の法も亦然り

我は三種の心に依つて、假りに根境我を説けども

【三相】三細に同じ業相、轉相、現相の三なり。

【意生身】初地以上菩薩の身なり。

【八地】支佛地、即ち辟支佛地。緣覺の位なり。

而も彼心意識の、自性は所有無し

心意及び識と、無我に二種あり

五法と自性とは、是れ諸佛の境界なり

習氣の因は一なれども、而も三相を成ず

一彩色を以て壁に畫けども、種種に見ゆるが如し

五法も二無我も、自性も心意識も

佛の種性の中に於ては、皆悉く不可得なり

心意識を遠離し、亦五法を離れ

復自性を離る、是を佛の種性と爲す

若し身語意業、白淨の法を修せずんば

如來の淨の種性は、則ち現行を離れん

神通力と自在と、三昧と淨莊嚴と

種種の意生身は、是れ佛の淨種性なり

内自證の無垢なると、因相を遠離せると

八地及び佛地は、如來の性の成ずる所なり

遠行と善慧と、法雲及び佛地は

皆是れ佛の種性にして、餘は悉く二乗の攝なり

如來は心自在なり、諸の愚夫の心相

差別せるが爲の故に、七種の地を説きたまふ

第七地には、身語意の過失を起さず

第八地の所依は、夢に河を渡る等の如し

八地及び五地には、工巧明を解了し

諸の佛子は、能く諸有の中の王と作る

智者は若は生、若は不生空と及び

不空と自性、無自性とを分別せず

但唯是れ心量にして、而も實に不可得なり

諸の二乗の爲に此は實、此は虚妄なりと説く

諸の佛子の爲には非ず、故に應に分別すべからず

有も非有も悉く非なり、亦刹那の相も無く

假實の法も亦無し、唯心にして不可得なり

有法は是れ俗諦にして、無性は第一義なり

無性に迷惑するもの、是れ則ち世俗と爲す

一切の法は皆空、我は諸の凡愚の爲に

俗に隨つて假に施設す、而も彼には眞實無し

【有法】因縁和合によりて生じたる諸法のこと。
【俗諦】諦は眞理の義。俗諦とは第二義的の世俗の淺薄なる思想なり。

【法身に依つて報あり報より】ここに六ふ報とは何れも報身のことなり

【依他】依他起性のこと

言に由りて起る所の法は、則ち所行の義あり
 言の所生を觀見するに、皆悉く不可得なり
 壁を離れて畫なきが如く、眞を離れて亦影無し
 藏識若し清淨ならば、諸識の浪は生ぜず
 法身に依つて報あり、報より化身を起す
 此を根本の佛と爲す、餘は皆化の所現なり
 應に妄に分別すべからず、空及び不空とを
 有無を妄計せば、言義不可得なり
 凡愚は妄に徳、實、塵聚の色を分別すれど
 一一の塵は皆無し、是故に境界も無し
 衆生の外想を見るは、皆自心の現するに由る
 所見既に非有故に、諸の外境無し
 象の深泥に溺るるが如く、復移動すること能はず
 聲聞の三昧に住して、昏蝕するも亦復然り
 若し諸の世間を見て、習氣を以て因と爲し
 有無俱非を離るとせば法無我に解脱せん
 自性を妄計と名け、緣起は是れ依他

【圓成】 圓成實性のこと。

【命根】 有情の壽命を指す。或時は小乘的に命根を過去の業によりて招かれたる果報と稱し、又或時は大乘的に第八識の名言種子が識をして現在に住せしむる功能の上にて假立せるものとす。

【隨眠】 根本煩惱のことなり。

眞如は、是れ圓成なりとは、我れ經中に常に説く

心意及び識と、分別と表示と

本識は三有と作る、皆是れ心の異名なり

壽及び煖、識、阿頼耶、命根

意及び意識も、皆分別の異名なり

心は能く身を持ち、意は恆に審に思慮し

意識は諸識と俱に、自心の境界を了す

若し實に私の體あらば、異蘊及び蘊中の

彼に於て私の體を求むれども、畢竟不可得なり

一一に世間を觀じて、皆是れ自心の現なりとせば

煩惱隨眠に於て、苦を離れ解脫を得ん

聲聞は盡智と爲し、緣覺は寂靜の智にして

如來の智慧は、生起するに窮盡無し

外には實に色有ること無く、唯自心の所現のみ

愚夫は覺知せず、妄に有爲を分別す

外の境界を知らず、種種皆自心なることを

愚夫は因縁を以て、四句を成立す

智者は悉く境界は、自心の現なるを了知す
 宗因喩の諸句を以て、成立せず

分別と所分別とは、是れ妄計の相なり

妄計に依止して、復分別を起し

展轉して互に相依るは、皆一の習氣に因る

此二は俱に客たり、衆生の心の起るに非ず

三界の中に安住する、心心所の分別の

起す所は境界に似たり、是れ妄計の自性なり

影像と種子と、合して十二處と爲り

所依と所縁と、合して所作の事有りと説く

猶し鏡中の像の如く、翳眼の毛輪を見る

習氣に覆はるるも亦然り、凡愚の妄見を起す

自ら分別する境に於て、而も分別を起せども

外道の分別の如く、外境は不可得なり

愚の如く繩と了らず、妄取して以て蛇と爲す

自心の現なることを了らず、妄に外境を分別す

是の如く繩の自體は、一異の性皆離るれども

但たゞ自じ心しんの倒たふ惑わくのみ、妄まうに繩なはの分ぶん別べつを起おこすのみ
妄まう計けいし分ぶん別べつする時とき、彼かの性じやうは有あり非ひず

云い何かが非ひ有ゆうを見みて、而しかも分ぶん別べつを起おこさんや

色しき性じやうは所しよ有ゆう無むし、瓶びん衣い等とうも亦また然しかり

但たゞ分ぶん別べつに由よりて生しやうずれども、所しよ見けんは終つひに有あること無なし

無む始しより有ゆう爲ゐの中なかに、迷めい惑わくして分ぶん別べつを起おこす

何なにの法ほふか迷めい惑わくせしむる、願ねんくば佛ぶつ、我わが爲ゐに説ときたまへ

諸しよ法ほふは自じ性じやう無むし、但たゞ唯たひ心しんの所しよ現げんのみ

自じ心しんを了りやうぜず、是こゝ故ゆゑに分ぶん別べつを生しやうず

愚ぐの分ぶん別べつする所ところの如ごとく、妄まう計けいは實じつに有あり非ひず

此こゝ所しよ有ゆうに異いりて、彼かのは知しること能あたはず

諸しよの聖しやう者じやの所しよ有ゆうは、愚ぐの分ぶん別べつする所ところに非ひず

若もし聖しやうと凡ぼんと同どうじくば、聖しやうも應まこに虚こ妄まうなるべし

聖しやうは心しんを治ちむ淨じやうを以もつて、是こゝの故ゆゑに迷めい惑わく無なし

凡ぼん愚ぐの心しんは不ふ淨じやうなり、故ゆゑに妄まうの分ぶん別べつあり

母ははの嬰やう兒にに語かたるが如ごとく、汝なんぢ啼な泣きする勿なれ

空くう中ちゆうに果くわありて來きたる、種しゆ種しゆのもの汝なんぢが取とるに任まかすと

【緣起の要】 緣起の要諦なり。

【慳慳にして】 外道の所説は凡て慳慳の法なりと云ふ。
【攀緣】 心、外境に轉せられて靜平を得ざること。凡夫愚夫の心的狀態を云ふ。
【梵と自在】 梵天と自在天なり。

我業生の爲に説く、種種の妄計の果は彼をして愛樂せしむるのみ、法は實に有無を離ると諸法は先に有に非ず、諸縁は和合せず不生にして而も生ず、自性は無所有なり未生の法は生ぜず、縁を離れて生處無く現の生法も亦爾り、縁を離るれば不可得なり實に緣起の要を觀するに、有に非ず亦無に非ず有無俱に非ざるに非ず、智者は分別せず外道の諸の愚夫は、妄に一異の性を説いて諸の緣起を了らず、世間は幻夢の如し我が無上の大乘は、名言を超越して其義甚だ明了なるを、愚夫は覺知せず聲聞及び外道の所説は、皆慳慳にして義をして悉く改變せしむるは、皆妄計によりて起る諸相及び自體と、形狀及び名と此四種を攀緣して、而も諸の分別を起す梵と自在を計して、一身と多身と

及び日月の運行を作ると爲す、彼は是れ我が子にあらず
 聖見を具足して、如實の法に通達し
 善巧に諸想を轉ぜば、識の彼岸に到らん
 此解脱の印を以て、永く有無を離れ
 及び去來を離る、是れ我が法中の子なり
 若し色識轉滅し、諸業も失壞せば
 是れ則ち生死無く、亦常無常も無し
 而かも彼轉滅するとき、色處を捨離すと雖も
 業は阿頼耶に住して、有無の過失を離る
 色識は轉滅すと雖も、而も業は失壞せず
 諸有の中に於て、色識をして復相續せしむ
 若し彼諸の衆生の、起す所の業失壞せば
 是れ則ち生死無く、亦涅槃もあること無し
 若し業と色識は、時を俱にして滅壞し
 生死の中に若し生ぜば、色と業とは應に別なかるべし
 色心と分別とは、異に非ず不異に非ず
 愚夫は滅壞すと謂ふも、而も實は有無を離る

【法眼】一切諸法
を觀する眼の義。
菩薩はこれにより
てよく諸法の真相
を知りて衆生を濟
度す。

【二邊】中道を失
して一方に偏する
こと。

緣起と妄計とは、展轉して別相無し
色と無常の如く、展轉して生ずるも亦爾り
既に異と非異とを離る、妄計して知るべからず
色無常の性の如し、云何が有無と説かん
善く妄計に達せば、緣起は則ち生ぜず
是緣起を見るに由りて、妄計は則ち眞如なり
若し妄計の性を滅すれば、是れ則ち法眼を壞す
便ち我が法中に於て、建立及び誹謗す
是の如き色類の人は、常に正法を毀謗す
彼は皆非法を以て、我が法眼を滅壞するなり
智者は共に誦る勿れ、比丘の事亦棄つ
妄計を滅壞し、建立し誹謗するを以ての故に
若し分別に隨つて、有無の見を起すも
彼幻、毛輪、夢、焰、乾城の如くならん
彼は佛法を學ぶに非ず、應に與に同住すべからず
自ら二邊に墮し、亦他の人を壞するを以ての故に
若し修行者あり、妄計の性を觀じ

寂靜にして有無を離るれば、攝取して與に同住せよ
世間に處有り、金摩尼珠を出すが如く
彼を造作するもの無しと雖も、而も衆生は受用す
業性も亦是の如く、種種の性を遠離して
所見の業は非有なれども、諸趣に生ぜざるに非ず
聖の了知する所の如くんば、法は皆所有無し
愚夫の分別する所の、妄計の法は無に非ず
若し愚の分別する所の、彼法非有ならば
既に一切の法無く、衆生に雜染無し
雜染の法有るを以て、無明と愛に繋ぐれ
能く生死の身を起し、諸根悉く具足す
若し愚の分別して、此法は皆無なりと謂はば
則ち諸根の生も無し、彼は正しき修行者に非ず
若し此法有ること無く、而も生死の因とならば
愚夫は修を待たずして、自然に解脱せん
若し彼法有ること無くば、凡聖は云何が別たん
亦則ち聖人無くば、三解脱を修行せん

【未來に……】以下外道の所説を擧げてこれを破す。

諸蘊及び人法の、自共相の無相なると
 諸縁及び諸根は、我れ聲聞の爲に説く
 惟心及び非因、諸地と自在
 内證の淨眞如は、我佛子の爲に説く
 未來世に、身に袈娑を著けて
 妄に有無を説いて、我が正法を毀壞するものあらん
 緣起の法は無性なりとは、是れ諸聖の所行なり
 妄計の性には物無しとは、計度者の分別なり
 未來に愚癡有り、擲那の諸の外道なり
 無因論を説き、愚見、世間を壞す
 諸の世間を妄説し、微塵より生ず
 而も彼塵は無因なり、九種の實物は常なり
 實より能く實を生じ、徳より能く徳を生ず
 眞の法性は此と異なり、毀謗して説いて無と言ふ
 若し本より無にして而も生ぜば、世間は則ち始有らん
 生死に前際無しとは、是れ我が説く所なり
 三界の一切の物、本無にして而も生ぜば

【彼意】 彼の外道の見。

【伽毘羅】 梵音カピラ (Kapila) 黃頭、金頭と譯す。印度の古仙人にして數論外道の祖なり。紀元前第六世頃の人。

駝、驢、狗に角の生ずることも、亦應に疑有ること無かるべし

眼、色、識は本無にして、而も今生有らば

衣冠及び席等は、應に泥團より生ずべし

疊中に席無きが如く、蒲中にも亦席無くば

何ぞ諸縁の中に、一に皆席を生ぜざらん

彼命者と身とは、若し本無にして而も生ずとは

我先に已に彼は皆、是れ外道論なりと説けり

我が先に説く所の宗は、彼意を遮せんが爲なり

既に彼を遮し已りて、然して後自宗を説く

諸の弟子衆の、有無の宗に迷著せんことを恐る

是故に我は其爲に、先づ外道論を説かん

伽毘羅は惡慧にて、諸の弟子の爲に

勝性は世間を生じ、求那に轉邊せらると説く

諸縁有ること無きが故に、已生、現生に非ず

諸縁既に縁に非ずんば、生に非ず不生に非ず

我が宗は有無を離れ、亦諸の因縁を離れ

生滅及び所相、一切皆遠離す

【尋香城】 乾闥婆城のこと。

世間は幻夢の如く、因縁は皆無性なり
常には是の如き觀を作せば、分別は永へに起らず
若し能く諸有を觀じ、焰及び毛輪の如く
亦尋香城の如しとせば、常に有無を離れ
因縁俱に捨離し、心をして悉く清淨ならしめん
若し外境無く、而も唯心有りと言はば
境無くば則ち心も無し、云何が唯識を成ぜん
所縁の境有るを以て、衆生の心は起ることを得
因無くんば心は生ぜず、云何が唯識を成ぜん
眞如及び唯識は、是れ衆聖の所行なり
此有を非有と言はば、彼は我が法を解せざるなり
能取と所取、心は生起することを得
世間の心は是の如し、故に是れ唯心に非ず
身、資、土、影像是夢の如く心より生ず
心は二分と成ると雖も、而も心には二相無し
刀の自ら割かざるが如く、指の自ら觸れざるが如く
心の自らを見ざる、其事亦是の如し

【土】 刹土の義。

【二心】真心（自性清淨心）妄心（煩惱妄念）の二なり。

影像處有る無ければ、則ち依他起無く
妄計の性も亦無く、五法二心も盡く
能生及び所生、皆是れ自心の相なり
密意に能生と説くも、實は自性無し
種種の境、形、狀、若し妄計に由りて生ぜば
虚空と、兎角も亦應に境相を成すべし
境は心より起るを以て、此境は妄計に非ず
然も彼妄計の境は、心を離れて不可得なり
無始の生死の中の、境界は悉く有に非ず
心の起る處有る無くば、云何が影像を成ぜん
若し物無くして生有らば、兎の角亦應に生ずべし
物無くんば生ずべからず。而も分別を起す
鏡の非有を現するが如し、彼則ち先づ亦無し
云何が無境の中に、心は境を縁じて起らん
眞如も空も實際も、涅槃及び法界も
一切の法は不生なり、是を第一義の性とす
愚夫は有無に墮し、諸の因縁を分別し

諸有を知ることを能はず、無生なれば作者無く、
無始の心の所因なれば、唯心にして所見無し、
既に無始の境無くば、心は何の所より生ぜん、
物無くして生ずるを得ば、貧は應に是れ富なるべきが如し、
無境にして而も心を生ず、顯くば佛我が爲に説きたまへ、
一切若し因無くば、心も無く亦境も無し、
心既に生ずる所無くば、三有の所作を離る、
靱衣の角等に因つて、而して兎の角無きを説く、
是故に應に彼相は、因法無しと言ふべからず、
無因は有なるが故に無、是無は無を成ぜず、
有の無を得つも亦爾り、展轉の相に因りて起る、
若し少法に依止し、少法の起る有らば、
是れ則ち前の所依は、無因にして自有なり、
若し彼別に依有らば、彼依には復依有り、
是の如きは則ち無窮なり、亦少法の有ること無し、
木葉等に依るが如く、種種の互相を現す、
衆生も亦是の如く、事に依つて種種を現す、

【數も勝も】 數論
も勝論も。
【露形も】 露形外
道のこと。脱衣露
行を正行とするが
故に露形と云ふ。

幻師の力に依りて、愚をして幻相を見しむ
而も木葉等に於ては、實に幻の得べき無し
若し事に依止せば、此法則便ち壞す
所見既に二無し、何ぞ少かも分別有らん
分別にして妄計無くば、分別亦有ること無し
分別無きを以ての故に、生死涅槃無し
所分別無きに出つて、分別は則ち起らず
云何が心起らずして、而も惟心有ることを得ん
意の差別は無量なれど、皆眞實の法無し
實無く解脱無く、亦諸の世間も無し
愚の分別する所の如き、外の所見は皆無なり
習氣の心を擾濁し、影像に似て現するなり
有無等の諸法は、一切皆不生なり
但惟自心の現にして、分別を遠離す
諸法は縁よりと説けるは、愚の爲にして智者に非ず
心の自性は解脱にして、淨心は聖の住する所なり
數も勝も及び露形も、梵志と自在も

【梵志】梵士とも云ふ。梵音ブラフマチャーリン(Brahmarin)淨裔と譯す。婆羅門の生活に四期ある中の第二期なり。短きは八九年、長きは三十年と云ふ。

【自在】自在天。外道のこと。自在天は大自在天とも云ふ。梵名、摩醯首羅(Mahesvara)自在天。外道はこの神を宇宙の本體創造の神となす。

【分別に隨つて去る】衆生は分別に隨つて去來する意。

皆無見に墮して、寂靜の義を遠離す

無生にして無自性、垢を離れて空なること幻の如し

諸佛及び今佛は、誰が爲にか是の如く説きたまふ

淨心の修行者は、諸見の計度を離る

諸佛は彼が爲に説きたまふ、我も亦是の如く説かん

若し一切皆心ならば、世間は何れの處にか住せん

何に因つてか大地を見る、衆生に去來有り

鳥の虚空に遊ぶが如く、分別に隨つて去る

依も無く亦住も無し、地を履んで行くが如く

衆生亦是の如し、妄の分別に隨つて

自心に遊履するは、鳥の虚空に在るが如し

身、資、國土、影は、佛惟心の起有りと説きたまふ

願くば影と惟心とは何に因つて、云何が起るかを説きたまへ

身も資も國土も影も、皆習氣に由りて轉ず

亦不如理に因りて、分別の生ずる所なり

外境は是れ妄計なり、心は彼の境を縁じて生ず

境は是れ惟心なるを了せば、分別は則ち起らず

【自他の覺】 自覺
他覺の意なり。

【四蘊】 受想行識
の四なり。

若し妄計の性を見て、名と義と和合せざれば
覺所覺を遠離し、諸の有爲を懈脱せん
名と義と皆捨離す、此は是れ諸佛の法なり
若し此に異りて悟を求むれば、彼は自他の覺無し
若し能く世間を見て、能覺所覺を離るれば
是時則ち名、所名の分別を起さず
自心を見るに由るが故に、妄作の名字滅す
自心を見ざれば、則ち彼分別を起さん
四蘊は色相無く、彼數は不可得なり
大種の性は各異なる、云何が共に色を生ぜん
諸相を離るるに由るが故に、能所造は非有なり
異色ならば別して有相、諸蘊何ぞ生じざる
若し無相を見ば、蘊處皆捨離せん
是時、心亦離る、法無我を見るが故に
根境の差別によりて、八種の識を生ず
彼無相の中に於ては、是三相は皆離る
意は阿頼耶を緣じて、我我所の執

【心の所現を了せず】愚夫の狀態を説くもの。

及び識の二執取を起す、了知すれば皆遠離す
觀見して一異を離るれば、是れ則ち動ずる所無く
我我所を離る、二種の妄分別
生ずること無くば增長すること無く、亦識の因と爲らず
既に能所の作を離る、滅し已れば復生ぜず
世間は能作無く、及び能所相を離る
妄計と及び惟心は云何。願くば爲に説きたまへ
自心は種種に分別して、諸の形相を現す
心の所現を了せず、妄取して心外と謂ふ
智覺無きに由るが故に、無の見を起す
云何が有性に於て、而も心に著を生ぜざらん
分別は有無に非ず、故に有に於て不生なり
所見は惟心なるを了せば、分別則ち起らず
分別起らざるが故に、依を轉じて著する所無く
則ち四宗を遮す。謂はく法は因有り等
此れ但異なる別のみにて、立つる所皆成ぜず
應に知るべし、能作の因も亦復成立せず

【六道】 六趣とも云ふ。

【色色】 物の本體及びその作用を云ふ。
【心心】 心王、心所の二なり。心王とは精神の體にして心所は現象なり。

能作を遮せんが爲に、因縁の和合を説き常の過を遮せんが爲に、縁是れ無常と説く愚夫は無常と謂ふも、而も實は生滅せず滅壞の法を見ず、能く所作有り

何ぞ無常の法有つて、而も能く所生有らん天、人、阿修羅、鬼、畜、閻羅等の

衆生は中に在りて生ず、我説いて六道と爲す業の上中下によりて、中に於て受生し

諸の善法を守護して、勝解脱を得佛は諸の比丘の爲に、所受の生は念念に

皆生滅すと説きたまふ、請ふ我が爲に宣説したまへ色色は暫くも停らず、心心亦生滅す

我れ弟子の爲に、受生は念念に遷謝すと説く色色の中の分別の、生滅も亦復然り

分別は是れ衆生、分別を離れては非有なり我此縁の爲の故に、念念の生を説く

若し取著の色を離るれば、不生にして亦不滅なり

【緣生】 因緣所生
の略

【苦の世間】 以下
四諦を明せるもの
なり。

【三の自性】 三白
性のこと。前出。

緣生と非緣生と、無明と眞如等は

二法の故に起るなり、無二は即ち眞如なり

若し彼緣と非緣の、生法に差別有らば

常等と諸緣には、能作所作有り

是れ則ち大牟尼、及び諸佛の所説なり

能作所作有らば、外道と異なる無し

我は弟子の爲に、身は是れ苦の世間にして

亦是れ世間の集、滅、道、皆悉く具すと説く

凡夫は妄に分別し、三の自性を取るが故に

能所取、出、出世の法有りとする

我は先に觀待するが故に、自性を取ると説き

今は諸見を遮せんが爲に、應に妄に分別すべからず

過を求むるを非法と爲し、亦心をして不定ならしむるは

皆二取に由りて起る、無二は即ち眞如なり

若し無明愛業にして、識等を生ぜば

邪念復因有り、是れ則ち無窮の過なり

無智は諸法に、四種の生滅有りと説き

妄まうに二にの分別ぶんべつを起おこせども、法ほふは實じつに有無うむを離はなれ
四句しきうを遠離えんりし、亦二見またにけんを離はなる

分別ぶんべつの起おこる所ところは二、了さとり已おほれば復また生しやうぜず

不生ふじやうの中なかに生しやうを知しり、生しやうの中なかに不生ふじやうを知しる

彼法かほほふは同等どうとうの故ゆゑに、應まさに分別ぶんべつを知しるべからず

願ねがくば佛ほとけ、我わがが爲ために説ときて、二見にけんの理りを遮しやし

我われ及び餘衆よしゆをして、恆つねに有無うむに墮だせず

諸佛しよぶつの證しやうの所行しよぎやうは、佛ぶつ子不退ふたいの處ところなり

諸佛しよぶつの證しやうの所行しよぎやうは、佛ぶつ子不退ふたいの處ところなり

解脫げだつの因いんは因いんに非あらず、同一どういにして無生むじやうの相さうなり

迷まよふが故ゆゑに異名いみやうを執しよす、智者ちしやは應まさに常じやうに離はなるべし

法ほふは分別ぶんべつより生しやうじて、毛輪まうりん、幻えん、焰えんの如ごとし

外道げだうは妄まうに分別ぶんべつして、世よは自性じじやうより生しやうずとす

無生むじやう及び眞如しんによと、性空じやうくうと實際じつじやうと

此等これらは異名いみやうの説せつなり、應まさに執しよして無むと爲なすべからず

手てに多名たみか有あるが如ごとく、帝釋たいてしやくの名なも亦爾またしり

諸法しよほふも亦是またの如ごとし、執しよして無むと爲なすべからず

【青蓮眼】 佛陀のことなり。青蓮は梵音ウツバラ(Utsara)青色の蓮華なり。

作は則ち諸見を雜へ、無なれば則ち自然の生ならん
佛は諸方便を説きたまふ、正見、大願等
一切の法若し無なれば、道場は何の成ずる所ぞ
能取所取を離るれば、生に非ず亦滅に非ず
所見の法は法に非ず、皆自心より起る
牟尼の所説は、前後自ら相違す
云何が諸法を説いて、復不生と言ふや
衆生は知ること能はず、願くば佛、我が爲に説き
外道の過及び彼顛倒の因を、離るることを得しめたまへ
唯願くば勝説者、生及び滅を説き
皆有無を離れて、而も因果を壊せざらしめたまへ
世間は二遍に墮し、諸見の迷惑する所
唯願くば青蓮眼、諸地の次第を説きたまへ
生不生等を取り、寂滅の因を了せずんば
道場は所得無く、我も亦所説無し
刹那の法は皆空にして、無生、無自性なり
諸佛は已に二を淨めたまふ、二有れば即ち過を成ず

惡見の覆ふ所の分別は、如來に非ず

妄に生滅を計す、願くば我等が爲に説きたまへ

戲論を積集して、和合の生ずる所

其類に隨つて現前して、色境皆具足す

外色を見已りて、而して分別を起す

若し能く此を了知すれば、則ち眞實の義を見ん

若し大種を離るれば、諸物は皆成ぜず

大種既に惟心なれば、當に所生無きを知るべし

此心亦不生なれば、則ち埒の種性に顯す

分別を分別すること勿れ、無分別は是れ智なり

分別を分別する、是二は涅槃に非ず

若し無生の宗を立せば、則ち幻法を壞す

亦因無きに幻を起さば、白宗を損滅す

猶し鏡中の像の如く、一異の性を離ると雖も

所見は是れ無に非ず。生相亦是の如し

乾城、幻等の如く、悉く因縁を待つて有り

諸法も亦是の如し。是生は不生に非ず

【羅漢】 阿羅漢。

【大には】 大種にはの意。

【色蘊及び識蘊】 五蘊は色を除き受想行の三蘊は識蘊の門に入りて色蘊と識蘊の二となり五にあらざと云ふ意なり。

人と法を分別し、而して二種の我を起つ
此は但世俗の説なり。愚夫は願と縁集とに由りて
自力及び最勝、聲聞法の第五たる

羅漢等有ることを、覺知せず

時隔及び滅壞、勝義と遷遷とは

是れ四種の無常なり。愚の分別は智に非ず

愚夫は二邊に墮す。徳と塵と自性の作とは

有無の宗を取るを以て、解脱の因を知らず

大種は互に相違す、安んぞ能く色を起さん

但是れ大種の性にして、大には所造の色無し

火は乃ち色を燒き、水は復爛壞を爲し

風は能く散滅せしむ、云何が色を生ずることを得ん

色蘊及び識蘊、惟此二にして五に非ず

餘は但是れ異名のみ、我は彼を説いて怨の如しとす

心心所は差別して、現法を起す

諸色を分析すれば、惟心にして所造無し、青白等は相待つ

作、所作も亦然り。所生及び生空、冷、熱、相、所相

有、無等の一切は、妄計にして成立せず
心と意及び餘の六の、諸識は俱に相應し
皆意識に因つて生ず、一に非ず亦異に非ず
數勝及び露形も、自在能生を計して

皆有無の宗に墮し、寂靜の義を遠離す
大種は形相を生ずれど、大種を生ずるに非ず

外道は大種を説いて、大種及び色を生ず
無生の法の外に於て、外道は作者を計し
有無の宗に依止す、愚夫は覺知せず

清淨眞實の相は、大智と俱なり

但心と共に相應すれども、意等と和合するに非ず

若し業捨色を生ぜば、即ち諸蘊の因に違ふ

衆生は應に無取、無有住、無色なるべし

色を説いて無と爲さば、衆生も亦應に無なるべし

無色論は是れ斷にして、諸識は應に生ぜざるべし

識は四種に依つて住す、無色云何が成ぜん

内外既に成ぜずんば、識も亦應に起らざるべし

【利賦迦】梵音ク
シヤニカ (Sāyana
カ)の音譯。新陳
代謝の意なり。

衆生の識若し無なるも、自然に解脫を得んとは
必ず是れ外道の論、妄計者は知らず
或は樂執に隨つて有り、中有の中の諸蘊は
無色を生ずるが如しと、無色は云何が有なる
無色中の色は、彼は是れ可見に非ず
無色は則ち宗に違ふ、乘及び乘者に非ず
識は習氣より生じて諸根と和合し
八種は剎那に於て、取れども皆不可得なり
若し諸識起らずんば、諸根は則ち根に非ず
是故に世尊は説きたまふ、根と色とは利賦迦なりと
云何が色を了ぜずして、識の生有るを得ん
云何が識生ぜずして、而も生死を受くるを得ん
諸根及び根境を、聖者其義を了じ
愚癡無智の者は、妄執して其名を取る
應に第六に執すべからず、有取と及び無取と
諸の過失を離れんが爲に、聖者には定説無し
諸の外道は無智にして、斷常を怖畏し

【然】 燃に同じ。

【生若は不生】 生不生なりと云ふも心性清淨なりとの意。

有爲無爲を計して、我と差別無しとす
 或は心と一と計し、或は意等と異なりとす
 一性の有を取るべくんば、異性の有亦然らん
 若し取は是れ決了して、名けて心心所と爲さば
 此取は何ぞ一生を、決了すること能はざる
 有と取及び作業により、受生し得べく
 猶し火の所成の如く、理趣は似て非似なり
 火の頓に燒る時、然と可然皆具はるが如く
 妄取の我亦然り、云何が所取無き
 若は生若は不生、心性は常に清淨なり
 外道は我を立つる所、何ぞ以て喻せざらんや
 識の稠林に迷惑し、妄計して眞法を離れ
 我論を樂ふが故に、彼此を馳求す
 内證智の所行は、清淨なる眞我の相にして
 此れ即ち如來藏なり、外道の知る所に非ず
 諸蘊と能取、及び所取を分別して
 若し能く此相を了せば、則ち眞實の智を生ぜん

【見修】見惑、修惑の煩惱なり。

【隨煩惱】根本煩惱の十惑に隨從して起る煩惱なり。

是諸の外道等は、頼耶藏の處に於て

意と我とは俱なりと計す、此は佛の所説に非ず

若し能く此を辯了せば、解脫して眞諦を見

見修諸の煩惱を斷除して、悉く清淨ならん

本性清淨の心は、衆生の迷取する所

無垢の如來藏は、邊無邊を遠離す

本識は蘊の中に在り、金銀の鑛に在るが如く

陶冶鍊治し已れば、金銀皆顯現す

佛は人に非ず蘊に非ず、但是れ無漏智もて

了知して常に寂靜、是れ我が歸する所なり

本性の清淨心は、隨煩惱と意等と

及び我と與に相應す、願くば佛、爲に解説したまへ

自性は清淨の心にして、意等は以て他と爲す

彼の積集する所の業は、雜染の故に二と爲す

意等と我と煩惱とは、淨心を染汚すること

猶し彼淨衣の如く、諸の垢染有り

衣の垢を離るることを得るが如く、亦金の鑛を出づるが如し

衣も金も俱に不壞なり、心の過を離るるも亦然り

無智の者は、拳襖蠹鼓等を推求して

妙音聲を覓む、蘊中の我亦然り

猶し伏藏せる寶の如く、亦地下の水の如し

有りと雖も見るべからず、蘊の眞我亦然り

心心所の功能は、聚集の蘊と相應すれども

無智の者は取ること能はず、蘊中の我も亦兩り

女の懐胎藏せるが如く、有りと雖も見るべからず

蘊中の眞實の我も、無智は知ること能はず

業中の勝月の如く、亦木中の火の如し

蘊中の眞實の我は、無智の者は知ること能はざるなり

諸法の中の空性、及び無常の性

蘊中の眞實の我は、無智の者は知ること能はざるなり

諸地自在通、灌頂勝三昧は

若し此眞實の我無くば、是等皆悉く無ならん

人有り破壊して、若し有らば應に我に示すべしと言はば

智者は應に答へて云ふべし、汝が分別を我に示せと

【灌頂】梵語アブヒセーカ(Abhiseka)の譯。諸佛が大悲の水を以て菩薩の頂上に灌ぎ給ふことなり。
【人有り破壊して】以下もし人ありて否定し眞我あらば示せと云へば。

【酥、酪……】この節眞我を知らざる者を酥酪の味を知らざるものに例ふ。

【智は見て】智者はこれを識りての意。

【迦旃延】梵音。カートヤナーナ(Katyana)文飾と譯す。

眞我無しと説く者は、法を誇りて有無に著す

比丘の羯磨に應ずるものは、擯棄して共に語るべからず

眞我の熾然たることを説いて、猶し劫火の起るが如しとし

無我の稠林を焼いて、諸の外道の過を離る

酥、酪、石蜜、及び麻油等は

皆悉く味有るが如く、未だ嘗めざる者は、知らず

諸蘊の身の中に於て、五種に我を推求すれども

愚者は了する能はず、智は見て即ち解脱す

明智の立つる所の喩、猶ほ未だ心を顯はさず

其中に集むる所の義、諸法の別異の相は

豈に能く明了あらしめんや。唯一心を了ぜずして

計度者は無因、及び無起なりと妄執す

定者は心を觀じて、心は心を見ず

見は所見より生ず、所見は何に因てか起る

我が姓は迦旃延にして、淨居天中より出で

衆生の爲に説法し、涅槃の域に入らしむ

本住の法を緣じて、我及び諸の如來は

三千經中に於て、廣く涅槃の法を説く
欲界及び無色、彼に於て成佛せず

色界の究竟天、欲を離れて菩提を得ん
境界は縛の因に非ず、因は境界を縛す

修行の利智の劍もて、彼煩惱を割斷せよ

無我ならば云何が、幻等の法の有無有らん

愚應に眞如を顯はさば、云何が眞我無き

已作と未作の法とは、皆因の起す所に非ず

一切は悉く無生、愚夫了る能はず

能作者は不生にして、所作及び諸縁

是二は皆無生なり、云何が能作を計せん

妄計者は先後、一時の因有りと説き

瓶、弟子等を顯はして、諸物の生起を説く

佛は是れ有爲に非ず、具する所の諸の相好は

是れ輪王の功德にして、此を如來と名くるには非ず

佛は智を以て相と爲し、諸見を遠離す

白内證の所行は、一切の過皆斷じたまふ

【輪王】轉輪聖王
のことなり。

【梵行】菩薩の行
ぶ清淨の行にして
五行の一なり。

【劫比羅】梵音カ
ピラ (Kapila) 前
出。

【婆羅多】梵語。
(Bharadvaya)

【龜多】梵音グア
タ (Gupta)

【四姓】印度の四
姓なり。

聾盲瘖瘂等も、老少及び怨を懐くもの

是等尤も重き者は、皆梵行の分無し

隨好を隠すを天と爲し、相を隠すを輪王と爲す

此二者は放逸なり、唯顯はす者は出家なり

我釋迦の滅後、當に毘耶婆

迦那梨沙婆、劫比羅等の出づること有るべし

我が滅して百年の後、毘耶婆の所説

婆羅多等の論、次に半擇娑

橋拉婆囉摩有り。次に胃狸王

難陀及龜多有り、次に篋利車王

後に刀兵を起さん。次に極惡時有り

彼時諸の世間は、正法を修行せざらん

是の如き等を過ぎて後、世間は輪轉の如く

日火共に和合して、欲界を焚燒せん

復諸天を立て、世間は還び諸王

及び四姓を成就し、諸仙法化を垂れ

韋陀祠施等、當に此法の興ること有るべし

談論戲笑の法、長行と解釋と

我は是の如く聞けり等と、世間を迷惑せん

受くる所の種種の衣は、若し正色有らば

青泥牛糞等をもて、之を染めて壞色ならしめ

服する所の一切の衣は、外道の相を離れしめよ

修行者は、諸佛の憶相を現し

亦腰條を繫け、水は漉して飲用せよ

次第に食を乞うて、非處に至らざれ

勝妙天に生じ、及び人中に生じ

寶相を具足する者は、天及び人王に生じ

王とは四天下を有し、法教久しく臨御し

天宮に上昇して、食に由りて皆退失す

純善及び三時、二時并びに極惡

餘佛は善時に出で、釋迦は惡世に出づ

我が涅槃の後に於て、釋種の悉達多、毘紐、大自在、外道等は俱に

如是我聞等の、釋師子の所説

談古及び笑語、毘夜婆仙の説を出さん

【非處】面白からざる所。

【純善……極惡】何れも時にして四時なり。

【悉達多】梵音。(Siddhārtha)

【毘紐】梵音。毘紐(Vishnu)自在

天の別名。

【迦多衍那】梵音
カトヤニー
(Katyavani)文飾
と譯す。印度の貴
族にして大論師な
り。
【瞻婆】梵音。チ
ヤンバカ (Campa
ka) 黃華と譯す。

【達摩】梵音。ド
ハルマ (Dharma)
法と譯す。

わが涅槃の後に於て、毘紐大自在は

彼に是の如きの言を説かん、我能く世間を作る

我は離塵佛と名く、姓は迦多衍那

父は世間主と名け、母の號を具財と爲す

我は瞻婆國に生れ、わが先祖の父は

月種より生ず、故に號して月藏と爲す

出家して苦行を修し、千の法門を演説し

大悲に記を授け、然る後に當に滅度すべしと

大悲は達摩に付し、次に彌佉梨に付す

彌佉梨は惡時にして、劫盡きて法は當に滅すべし

迦葉、拘留孫、拘那含牟尼

及び我離塵垢は、皆純善時に出づ

純善漸く滅する時、導師有り慧と名く

大勇猛を成就して、五法を覺悟す

二時三時に非ず、亦極惡時に非ず

彼は純善時に於て、現に等正覺を成せん

衣は割縷せずと雖も、雜碎して補成し

【三衣】衣は袈裟の意、これに三種あり、前出。

孔雀の尾目の如く、人の伎奪するもの有る無し

或は二指三指に、間錯して補成せよ

此所作に異なれば、愚夫をして貪著を生ぜしめん

唯三衣を着て、恆に貪欲の火を滅し

沐するに智慧の水を以てし、日夜三時に修せよ

放箭の勢極まつて、一たび墜ち還た一を放つが如くせよ

亦評酪の水の如くせよ、善不善も亦然り

若し一能く多を生ぜば、則ち別異の相有り

施者は應に田の如くなるべく、受者は應に風の如くなるべし

若し一能く多を生ぜば、一切は無因にして有なるべく

所作の因は滅壞せん、是れ妄計の所立なり

若し妄計の所立ならば、燈及び種子の如くならん

一能く多を生ぜば、但相似にして多に非ず

胡麻は豆を生ぜず、稻は稗麥の因に非ず

小豆は穀種に非ず、云何が一多を生ぜん

名主は聲論を作り、廣主は王論を造り

順世論の妄説は、當に梵藏中に生ずべし

【軍持】梵音。ク
ンデカ（Kundika）
澡瓶と譯す。
僧尼のもつ水瓶。
【牟尼の幢相】大
修行者は自ら牟尼
の幢相と云ふ意。

迦多延は經をつくり、樹皮仙は祀を説き
 鵝鶻は天文を出し、惡世時は當に有るべし
 世間の諸の衆生は、福力もて王を感じ
 如法に一切を御して、國土を守護せん
 青蟻及び赤豆、側僻と馬行と
 此等の大福仙は、未來世に當に出づべし
 釋子悉達多、步多五髻者
 口力及び聰慧も、亦未來に於て出でん
 我れ林野に在るに、梵王來りて我に惠むに
 鹿皮、三岐杖、膊條及び軍持を
 此大修行者は、當に離垢尊と成り
 眞解脱を説くべし。牟尼の幢相なり。
 梵王と梵衆と、諸天及び天衆は
 我に鹿皮の衣を施して、自在宮に還歸せん
 我れ林樹の間に在れば、帝釋四天王は
 我に妙なる衣服と、乞食の鉢とを施さん
 若し不生論を立てて、是因生は復生じ

【僧法論】僧法は
僧企耶、梵音ナン
クフヤ(Shukhe)
敷と譯す。象論外
道のことなり。

是の如くして無生を立すとは、唯是れ虚の言の誑なり
無始より積集する所の、無明を心因と爲し
生滅して而も相續すとは、一妄計の分別する所のみ
僧法論に二有り、勝性と及び變異となり
勝の中に所作有らば、所作は處に自成なるべし
勝性と物とは俱なり、求勝は差別と説く
作と所作との種種の變異は、不可得なり
水鏡の清淨なる如く、塵垢は染むること能はず
意識の淨きも亦然り、衆生の依止する所なり
興衰の忽氣と、塵味及び胎藏の如く
種子亦是の如し、云何が不生ならん
一性及び異性、俱不俱も亦然り
所取は之有に非ず、無に非ず、有爲に非ず
馬中には牛性を離る、蘊中の我も亦然り
説く所の爲無爲は、皆悉く無自性なり
理教等に我を求むるは、是れ妄垢の惡見
不了の故に有と説き、惟妄取して餘り無し

諸蘊中の我は一異皆成ぜず
彼過失は顯然たり、妄計者は覺らず
水鏡及び眼に、種種の影を現じ
一異の性を遠離するが如く、蘊中の我も亦然り
行者は定を修し、誑を見及び道を以て
此三種を勤修し、諸の惡見を解脫す
猶し孔隙の中より、電光の速に滅するを見るが如く
法の變遷も亦然り、應に分別を起すべからず
愚夫は心迷惑して、涅槃の有無を取る
若し聖見を得たるものは、如實に能く了る
應に知るべし、變異の法は生滅を遠離し
亦有無、及び能所相を離る
應に知るべし、變異の法は外道の論を遠離し
亦名相を離れ、内の我見亦滅す
諸天の樂、身に觸れ、地獄の苦、體に逼るとも
若し彼無くば、中に諸識有るも生ずることを得ず
應に知るべし、諸趣中の衆生の種種の身の

【胎卵】胎生、卵生のこと。

胎卵濕生等、皆中に隨つて生有り

聖教の正理を離れて、惑を滅せんと欲すれば反つて増す

是は外道の狂言、智者は説くべからず

先づ我及び分別、諸取を決了すべし

石女の兒の如く、分別を決了すること莫れ

我は肉眼を離れ、天眼と慧眼を以て

諸の衆生の身を見るに、諸行諸蘊を離る

諸行の中を觀言するに、好色有り惡色有り

解脱せるあり、解脱せざるあり、天中に住する者有り

諸趣に受くる所の身は、惟我れ能く了達するのみ

世の知る所を超過して、計度の境界に非ず

無我にして心を生ず、此心は云何が生ずる

豈に心生を説かざること、河燈種子の如きや

若し無明等無くば、心識は則ち生ぜず

無明を離れては識無し、云何が生を相續せん

妄計者の所説は、三世及び非世なり

第五の不可説は、諸佛の知る所なり

諸行、取、所住は、彼亦智の因と爲す
應に智慧を説くべからず、而も名けて諸行と爲す
此因縁有るが故に、則ち此法の生あり
別に作者有る無し、是れ我が説く所有り
風は火を生ずること能はず、而も火をして熾然たらしむ
亦風に由るが故に滅す、云何が我が喩へん
説く所の爲無爲は、皆諸の取を離る
云何が愚は分別して、火を以て我を成立せんとする
諸縁展轉の力、是故に能く火を生ず
若し分別して火の如くんば、是我は誰よりか生ずる
意等を因と爲すが故に、諸の蘊處は積集す
無我の商主は、常に心と俱に起る
此二は常に口の如く、能所作を遠離す
火の能く成立するところに非ず、妄計者は知らざるなり
衆生心たる涅槃は、本性常に清淨にして
無始の習染を過し、無異なること虚空の如し
象臥等の外道は、諸見に雜染せられ

意識の覆ふ所となり、火等を計して淨と爲す

若し知實の見を得ば、便ち能く煩惱を斷じ

邪を捨て稠林を踏え、聖の所行の處に到らん

智所知の差別は、各異なりて分別す

無智の者は知らず、塵に説くべからざる所を説く

愚の異材を執りて、梅檀沈水を作るが如く

當に知るべし、妄計と眞智も亦復然り

食し訖らば鉢を持って歸り、洗濯して清淨ならしめ

口の餘味を漂漱し、塵に是の如く修すべし

若し此法門に於て、理の如くに正しく思惟し

淨信にして分別を離れ、最勝定を成就し

著を離れて義に住し、金光の法燈と成らば

有無を分別し、及び諸の惡見の網なる

三毒等は皆離れ、佛手づからの灌頂を得ん

外道は能作を執して、方に迷ひ及び無因

緣起に於て驚怖し、斷滅して聖性を無す

諸の果報を變起するを、諸識及び意と謂ふ

【首楞嚴三昧】梵
音シュウラガマ・
サマードヒ(Sama-
Samādhi) 梵
勇健定と譯す。諸
三昧の行相を分別
してその多少淺深
を知ること。菩薩
この三昧を得れば
諸の煩惱に障を受
けず。

意は頼耶より生じ、識は末那に依つて起る
 頼耶の諸心を起すは、海の波浪を起すが如し
 習氣を以て因と爲し、縁に隨つて生起す
 刹那の相の鈎鎖は、自心の境界とを取りて
 種種の諸の形相とし、意根等の識生ず
 無始の惡習に由り、外境に似て生ずれども
 所見は唯自心のみ、外道の了ずる處に非ず
 彼を因として彼を縁じ、而して餘識を生ず
 是故に諸見を起して、生死に流轉す
 諸法は幻夢、水月、焰、乾城の如し
 當に知るべし。一切の法は惟是れ自らの分別なり
 正智は眞如に依つて、諸の三昧を起す
 如幻首楞嚴、是の如き等の差別
 諸地に入ることを得て、自在及び神通なり
 如幻の智を成就すれば、諸佛其頂に灌ぎたまふ
 世間の虚妄なるを見、是時心は依を轉じて
 歡喜地諸地、及び佛智を獲得す

【法】 法の本體な
りて

既に轉依を得已れば、衆色の摩尼の如く
 諸の衆生を利益せんと、應現すること水月の如し
 有無の見、及び俱不俱を捨離し
 二乗の行を超え、亦第七地を超ゆ
 自ら内に法を現證して、地地を修治し
 諸の外道を遠離す、應に説くべし、是れ大乘なりと
 解脱の法門を説き、兎角、摩尼の如く
 分別を捨離して、死及び運滅を離る
 教は理に由るが故に成り、理は教に由るが故に顯はる
 當に此教理に依りて、更に餘の分別をすること勿るべし

大
乘
入
楞
伽
經
終

首楞嚴經

(大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經)

經典部
第七卷

首楞嚴經 卷第一

【題名】 原本には大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經とあり今略して下の如くす以下各卷之に準ず【首楞嚴】 梵音シネーラガマ(Surangama (or Surangama)) 大定即ち三昧なり。人この三昧を體得すれば諸の煩惱、魔及び魔人もよく彼を破することを得ずと云ふ。

【一】 以下本經の序文にして阿難佛に修三昧の教を請ふ。【室羅筏城】 舍衛梵音シラーヴステー(Savatthi)聞者城、開物城と譯す印度拘薩羅國の都城、迦毗羅城の西北にあり。【祇洹精舍】 梵語ゲエーラヅナ・ギハラ (Jetavana vihara) 祇園精舍に作る。祇樹給孤獨園に建てられた

獨園に建てられた

是の如く我聞けり。一時、佛、室羅筏城祇洹精舍に在したまふ。大比丘衆、千二百五十人と俱なり。皆是れ無漏の大阿羅漢なり。佛子として住持し、善く諸有に超え、能く國土に於て、威儀を成就し、佛に従ひて輪を轉じ、妙に遺囑に堪へたり。毘尼を嚴淨し三界の弘範となり、應身無量にして、衆生を度脱し、未來を拔濟し、諸の塵累を越えしむ。其名を大智舍利弗、摩訶目犍連、摩訶拘絺羅、富樓那彌多羅尼子、須菩提、優婆尼沙陀等と曰ふ。而して上首たり。復無量の辟支の無學、并に其初心有りて、同じく佛の所に來る。諸の比丘の夏を休みて自恣するに屬ひて、十方の菩薩、心疑を諮決し、慈嚴を欽奉して、將に密義を求めんとす。即時に如來、座を敷き安安として、諸の會中の爲に、深奧を宣示したまふ。法筵の清衆、未曾有なるを得たり。迦陵の仙音、十方界に遍く、恆沙の菩薩、道場に來聚す。文殊師利上首爲り。

時に波斯匿王、其父王の爲に、諱日に齋を營み、佛を宮掖に請じ、自ら如來を迎へたてまつり、廣く珍羞無上の妙味を設け、兼て復諸の大菩薩を延く。城中復長者居士有り、

る精舍。須達長者
が釋尊及び衆僧の
說法道場の爲に寄
進せしものなり。
【無漏】有漏に對
するもの即ち諸の
煩惱を増上せしめ
ざるもの云ふ。

【阿羅漢】梵音ア
ルハン(Arhan)應
供無生離惡等と譯
す。小乘四果の一
即ち三界の煩惱を
滅盡し、無學位に
ありて、世間の供
養を受くべき地位
の聖者なり。小乘
の最究竟位。

【佛子】して住持
德を以ての意なり。
【諸有】所有に同
じ二十五有の迷の
境界なり。

【輪を轉じ】輪は
法輪。即ち教法な
り。諸佛の教法の
衆生の迷妄を破す
は恰も車輪の瓦礫
を碎くが如し故に
輪と云ふ。
【毘尼】又は毘奈

同時に僧に飢せんとして、佛の來應を待たてまつる。佛、文殊に勸し、菩薩及び阿羅漢を分領して諸の窟主に應じたまふ。唯阿難のみ有りて、先より別請を受け、遠く遊びて未だ還らず、僧次に違あらず。既に上座及び阿闍梨無ければ、途中より獨り還るに、其目供なし。即時阿難、應器を執持して、遊ぶ所の城に於て、次第に匍ひ乞ふ。心中初めより最後の檀越を求めて窟主と爲し、淨穢の利尊重姓、及び旃陀羅を問ふこと無く、等の慈を行するに方りて微賤を擇ばず、意を發して一切衆生の無量の功德を圓成せんとす。阿難已に如來世尊の須菩提及び大迦葉は、阿羅漢なれども、心均平ならずと訶したまふを知り、如來の無遮を開闢して、諸の疑謗を度することを欽仰して、彼城隍を経て、徐に郭門を歩み、威儀を嚴整して齋法を肅恭す。

爾時、阿難、因みに乞食の次で、婬室を經歴するに、大幻術の摩登伽女、婆毘迦羅が先梵天の呪を以て、婬席に攝入するに遭ひ、姪躬撫摩して、將に戒體を毀らんとす。如來、彼姪術の加する所を知りたまひ、齋畢りて旋歸したまふに、王及び大臣、長者、居士、俱に來りて佛に隨ひ、法要を聞かんことを願ふ。時に世尊、頂より百寶無畏の光明を放つて、光の中に千葉の寶蓮を出生する有り、佛の化身ましまして、結迦趺坐し神呪を宣説したまふ。文殊師利をして、呪を將て往いて護らしむるに、惡呪銷滅す。阿難及び摩登伽を提獎して、佛の所に歸來す。阿難、佛を見たてまつり、頂禮悲泣して、無始より來、一向多聞にして、未だ道力を全うせざるを恨み、慇懃に十方の如來の菩提を成ずることを得

耶梵音ギナヤ(二) 離行、調伏と譯す。律のことなり。

【三界】三有とも云ふ。一切衆生の生死流轉する三世欲界、色界、無色界の三。

【應身】衆生の機根に隨つて現はる佛身なり。無量に身を變化して法を説き教ひ給ふ。

【憍支】憍支佛、梵音ブラトエーカブドハ (Pratyekabuddha) 緣覺獨覺と譯す。無師獨悟する人。

【自恣】梵音ブラヴァーナ (Pravaraṇa) の譯。一夏安居を終りたる時各自縱に己が罪過を宣べて人に直され惡を改め善に進むこと。

【迦陵の仙音】迦陵は梵音カラベンカ (Kalavinka) 迦陵頻伽にして妙聲好聲と譯す。鳥名

たまへる、妙奢摩他、三摩、禪那の、最初の方便を啓請す。時に復恆沙の菩薩、及び諸の十方の大阿羅漢、辟支佛等有り、俱に聞かんことを願樂し、退坐默然として、聖旨を承受す。

佛、阿難に告げたまはく、「汝我と氣情を同らし、天倫を均らさず。初發心に當りて、我が法中に於て、何の勝相を見てか、頓に世間の深重の恩愛を捨てたる。阿難、佛に白さく、「我れ如來の三十二相の勝妙殊絶にして、形體腴徹すること、猶し琉璃の如きを見て、常に自ら思惟すらく、此相は是れ欲愛の所生に非ず。何を以ての故に。欲氣は塵濁にして、常に瞋交遣し、膿血雜亂して、勝淨妙明の紫金光聚を發生すること能はず。是を以て渴仰して、佛に従つて剃落す。」佛言はく、「善哉阿難、汝等當に知るべし、一切衆生、無始より來、生死相續すること、皆常住の眞心、性淨明の體を知らずして諸の妄想を用ふるに由る。此想は眞ならず、故に輪轉あり。汝今無上菩提眞發明の性を研めんと欲せば、應當に直心をもて我が所問に酬ふべし。十方の如來は同一道なるが故に、生死を出離するに皆直心を以てす。心と言と直なるが故に是の如し。乃至終始地位の中間、永く諸の委曲の相無し。阿難、我今汝に問はん、汝發心して如來の三十二相を緣せしときに當りて、將に何の

見る所ぞ、誰か愛樂を爲せる。阿難、佛に白して言さく、「世尊、是の如く愛樂せしは我が心目を用てなり。日に如來の勝相を觀見したてまつり、心に愛樂を生ぜしに由る。故に我發心して生死を捨てんと願ふ。」佛、阿難に告げたまはく、「汝が説く所の如し、眞に愛樂

我發心して生死を捨てんと願ふ。」佛、阿難に告げたまはく、「汝が説く所の如し、眞に愛樂

我發心して生死を捨てんと願ふ。」佛、阿難に告げたまはく、「汝が説く所の如し、眞に愛樂

我發心して生死を捨てんと願ふ。」佛、阿難に告げたまはく、「汝が説く所の如し、眞に愛樂

我發心して生死を捨てんと願ふ。」佛、阿難に告げたまはく、「汝が説く所の如し、眞に愛樂

なり、雪山にありて妙音を出すが故に如來の音聲に響ふ。

【恒沙】 恒河沙の略。江河の沙によりて無量無數の多數を現す語。

【交殊師利】 梵音マンヂユニユリ(Mandjuri) 妙善、妙音と譯す。菩薩の名。

【波斯匿王】 梵音ブラセーナヂット(Prasanna) 和光月光と譯す。舍衛國の王。

【阿闍梨】 梵音ア一チャールヤ(Asuri) 軌範師、正行等と譯す。軌範となりて弟子の行爲を正す德僧のこと。

【應器】 應量器、梵語、鉢多羅の譯。僧侶托鉢の器なり。

【檀越】 梵音ダーナパテ(Danapati) 施主と譯す。布施を行ふ人。

【刹利尊姓】 刹利

する所は心口に因る。若し心口の所在を識知せずんば、則ち勞を降伏することを得ること能はず。譬へば國王の賊の爲に侵されて、兵を發して討除するに、是兵要らず當に賊の所在を知るべきが如し、汝をして流轉せしむるは、心口答を爲せばなり、吾今汝に問はん、唯心と口と今何れの所にか在る。

阿難、佛に白して言さく、「世尊、一切世間の十種の異生、同じく識心を將て身内に居在す、縱ひ如來の青蓮華の眼を觀するにも亦佛面に在り、我今此浮根の四塵を觀するに祇我が面に在り、是の如く識心は實に身内に居す。佛、阿難に告げたまはく、「汝今現に如來の講堂に坐して祇陀林を觀る。今何れの所にか在る。」世尊、此大重閣、清淨の講堂は給孤園に在り、今祇陀林は實に堂の外に在り。「阿難、汝今堂中にして先づ何の見る所ぞ。」世尊、我堂中に在りて、先づ如來を見、次に大衆を觀る。是の如く外に望みて方に林園を臨む。」阿難、汝林園を臨むに、何に因てか見ることを有る。」世尊、此大講堂は戶闢開當せり、故に我堂に在りて遠く瞻見することを得。」

爾時、世尊、大衆の中に在して、金色の臂を舒べ阿難の頂を摩で、阿難及び諸の大衆に告げ示したまはく、「三摩提有り、大佛頂首楞嚴王具足萬行と名く。十方の如來、一門より超出する妙莊嚴の路なり。汝今諦に聽け。阿難頂禮して、伏して慈旨を受く。佛、阿難に告げたまはく、「汝が言ふ所の如し。身講堂に在りて、戶闢開當すれば遠く林園を臨む。亦衆生の此堂中に在りて、如來を見ずして堂外を見る者あり。」阿難答へて言さく、「世尊、

は刹帝利。梵音クシヤトリヤ(Śākyaputrabhāra)印度四姓の一なり。婆羅門の次にして王及び武士の階級なり。

【旃陀羅】梵音チヤンダーラ(Cāndāra)居者殺者と譯す。四姓以下の種族にして漁獵屠殺等の業に従ふもの【等の慈】平等の慈なり。

【無遮】平等のこと。

【摩登伽女】摩登伽は梵音マータンガ(Māraṅga)作惡行と譯す。當時の賤業婦なり。

【毘羅迦】劫毘羅迦(Kapila)金頭、黃髮と譯す印度の古仙人外道なり。

【菩提】梵音ボド(Boḍhi)智、道、覺と譯す。佛正覺の智恵なり。

【妙奢摩他】奢摩他は梵音シヤマトハ(Samatha)止、寂

堂に在りて如來を見たてまつらず、能く林泉を見るは、是處有ること無けん。」阿難、汝も亦是の如し。汝が心の靈は一切明了なり。若し汝現前に明了する所の心、實に身内に在らば、爾時先づ合に内身了知すべし。頗し衆生の先づ身中を見て後に外物を觀るありて、縦心肝脾胃を見ることが能はずとも、爪の生ひ髪長の筋の轉じ脈の搖くは、誠に合に明了なるべきに、何ぞ知らざる。必ず内を知らざれば、云何が外を知らん。是故に應に知るべし、汝が「覺了能知の心、身内に住せず」と言ふは、是處有ることなし。阿難稽首して佛に白して言さく、「我如來の是の如き法音を聞くに、我が心は實に身外に居せりと悟り知りぬ。所以は何ん。譬へば燈光を室の中に然すに、是燈必ず能く先づ室内を照して、其室門より、後に庭際に及ぶが如し。一切衆生身中を見ずして、獨り身外を見るは、亦燈光の室外に居在せば、室を照すこと能はざるが如し。是義必ず明かなり、將に惑ふ所無けん。佛の了義に同じして、妄なきを得んや。」佛、阿難に告げたまはく、「是諸の比丘、適に來つて我に従ひ、室羅伐城に搏食を循乞して祇陀林に歸る。我已に宿め齋するに、汝比丘の一人食する時、諸人の飽くを觀るや否や。」阿難答へて言さく、「否、世尊、何を以ての故に。是諸の比丘、阿羅漢と雖も、驅命同じからず。云何が一人にして能く衆をして飽かしめんや。」佛阿難に告げたまはく、「若し汝が覺了の知見の心、實に身外に在らば、身心相外れて自ら相干らざらん。則ち心に知る所を、身に覺すること能はず、覺の身際に在るをば、心に知ること能はざらん。我今汝に兜羅綿の手を示す、汝眼に見る時、心に分別

靜と譯す。心外境に動かず一切の亂想を止めた状態。
【三摩】 三摩提の略梵音サマードヒ (Samādhi) 等持、正受と譯す。

【禪那】 略して禪とも云ふ。梵音ドフヤーナ (Dhyāna) 定、思惟修と譯す。六度の一なり。
【三十二相】 應身に具へ給へる三十二の相好なり。

【修捨地位】 初發心より菩提の果に至る階級なり。この階級にある者は皆直心をして證すの意なり。

【十種の異生】 地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩佛の十界なり。
【四塵】 地水火風色香味觸等分別の對象なり。

【祇陀林】 梵音チエータワナ (Jetavana) 勝林と譯す。祇樹とも云ふ。祇

するや否や、阿難答へて言さく、「是の如し、世尊。佛、阿難に告げたまはく、「若し相知らば、云何が外に在りとせん。是故に塵に知るべし、汝一覺了能知の心は身外に住在于」と言ふ。是處有ること無し。」

阿難、佛に白して言さく、「世尊、佛が言ふ所の如く、内を見ざるが故に身内に居せず。身心相知りて、相離れざるが故に身外にも在らず。我今思惟するに、一處に在るを知る。」佛言はく、「處は今何れに在る。阿難言さく、「此了知の心、既に内を知らずして而も能く外を見る、我が思付するが如きは根の裏に潜伏せり。猶し人有りて、琉璃の碗を取りて其兩眼に合するに物の合ふこと有り」と雖も、而も留礙せざるがごとし。彼根、見に隨ひ、隨つて即ち分別す。然るに、我が覺了能知の心、内を見ざることは、根に在るが爲の故なり。分明に外を驅るに障礙なきことは、根の内に潜めるが故に。」

佛、阿難に告げたまはく、「汝が言ふ所の如く、根の内に潜めるもの、猶し琉璃の如しと、彼人當に琉璃を以て眼に籠むるに山河を見るに當りて琉璃をも見るべきや不や。」是の如し、世尊。是人當に琉璃を以て眼に籠むるに、實に琉璃をも見るべし。佛、阿難に告げたまはく、「汝が心若し琉璃の合するに同じくば、山河を見るに當りて何ぞ眼も見ざるや。若し眼を見れば、眼即ち境に同く隨を成ずることを得ざらん。若し見る能はずんば、云何が

説いて、「此了知の心潜んで根の内在ること琉璃の合するが如し」と言はん。是故に應に知るべし、汝一覺了能知の心、根の裏に潜伏して琉璃の合するが如し」と言ふは、是處

陀太子の有する樹林。須陀長者これを購ひ釋尊に獻す祇樹給孤獨園と名ける。

【一門】直心の一道を云ふ。

【搏食】にぎりめしのこと。搗食とも云ふ。

【兜羅綿】Tula 如羅とも云ふ。楊華、綿などの意。

【二】これより本論にして、阿難が萬法の本質を究めず妄法に執せるを破す。

【一處にある】識心の一處にあるの意。

【根】六根、眼耳鼻舌身なり。

【是の如し】是の如し。

【以下阿難の答なり】以下阿難の答なり。

【若し對せざれば……】眼に對せざればの意なり。

【兩佛と成る】二知あらば兩佛となるの意なり。

【四衆】佛の四種の弟子。比丘、比丘尼、

り有ること無し。』

阿難、佛に白して言さく、『世尊、我今又是の如きの思惟を作す。是衆生の身は、腑藏中に在り、竅穴外に居す。藏有れば則ち暗く、竅有れば則ち明らかなり。今我佛に對して眼を開き、明を見るを名けて外を見ると爲し、眼を閉ぢて暗を見るを名けて内を見ると爲す。是義云何。佛、阿難に告げたまはく、『汝眼を閉ぢて暗を見るの時に當りて、此暗の境界は、眼と對すと爲んや、眼に對せずと爲んや。若し眼と對すとせば、暗は眼の前に在り、云何が内と成る。若し内と成らば、暗室の中に居して、日月燈無きとき、此室の暗中は、皆汝が焦腑なるや。若し對せざれば、云何が見を成ぜん。若し外見を離れて内對成ずる所あらば、眼を合して暗を見るを名けて身中と爲す、眼を開きて明を見るとき、何ぞ面を見ざらん。若し面を見ざれば内對成ぜず。面を見ることが若し成せば、此了知の心、及び眼根は、乃ち虚空に至らん。何ぞ内に在るを成ぜん。若し虚空に在らば、自から汝が體に非ざらん。即ち應に如來の今汝の面を見たまふも、亦是れ汝が身なるべし。汝眼に已に知らば身には合に覺すること非ざるべし。必らず汝執して「身と眼と兩ながら覺す」と言はば、應に二の知あるべし、即ち汝が一身應に兩佛と成るべし。是故に應に知るべし、汝が「暗を見るを内を見ると名く」と言ふは、是處有ること無し。阿難言さく、『我常に佛の四衆に開示したまふを聞く、心生ずるに由るが故に種種の法生じ、法生ずるに由るが故に種種の心生ずと。我今思惟すらく、即ち思惟の體は實に我が心性なり、所合の處に隨つて心則

【法王子】菩薩の
こと。菩薩は佛果
に至るべき人なる
が故に佛を法王と
云ふに對して法王
子と云ふ。
【汝中間と言ふ】
以下中の非理を説
破す。

等の諸の法王子の與に、實相を談じたまふを聞きし時、世尊亦言はく、「心は内にも在らず、亦外にも非ず」と。我が思惟の如きは内、見る所なく、外、相知らず。内、知ること無きが故に、内に在るも成らず、身心相知らば外に在るも義に非ず、今相知るが故に、復内に見ること無く、當に中間に在るべし。佛言はく、「汝中間と言ふ、中は必ず迷はず、所在なきに非ず。今汝中を推せ、中何くにか在りと爲んや、復處に在りと爲んや、當に身に在るべしと爲んや。若し身に在りとせば邊に在らば中に非ず、中に在らば内に同じ。若し處に在らば、所表有りと爲んや、所表無しと爲んや。表なくば無に同じ、表則ち定めなし。何を以ての故に。人の表を以て表して中と爲す時の如く、東より看れば則ち西なり、南より觀れば北と成る、表體既に混すれば、心應に雜亂すべし。阿難言さく、「我が説く所は中は此二種に非ず。世尊の言ふが如し。眼と色とを縁と爲して眼識を生ずるとき、眼には分別あり、色塵には知なし。識其中に生ずれば則ち心の在となす。佛言はく、「汝が心若し根と塵の中に在らば、此心體は復二を兼ねと爲んや。二を兼ねずと爲んや。若し二を兼ねれば、物と體と雜亂せん、物體知に非ざれば、敵と成つて兩立す、云何が中と爲さん。二を兼ねて成ぜずして、知不知に非ずば、即ち體性なし、中何をか相と爲ん。是故に應に知るべし、當に中間に在るべしとは、是處あることなし。阿難、佛に白して言さく、「世尊、我昔佛の大目連、須菩提、富樓那、舍利弗、四大弟子と共に法輪を轉じたまふを見るに、常に「覺知分別の心性は、既に内に在らず亦外にも在らず、中間にも在らず、俱に所在な

【龜の毛兔の角】何れも無に對する喩なり。

【相になくば】相に心なくば、則ち

【相にあらば】則ち

【相に心あらば】相に心あらば著あり、

【沙毘羅】沙毘羅

【羅又劫毘羅】(二劫一劫)とも云ふ。外

道の名。

【眞實際】眞實際、

實際とも云ふ。人

法の二を空することによりて顯はさるる眞如のこと。

【闍提】一闍提の略梵音イチユハ

ンカテ (Uchanta)

【斷善根】譯す

本末解脫の因を缺

きて到底成佛する

を得ざるもの、無

性有情の義なり。

【彌戾車】密利車

に作る。Milecia

胡種の稱。

【六種の震動】大

地が六種に震動す

動、起、涌、震、吼、擊の六。

し、一切無著なる之を名けて心と爲す」と言ふ。則ち我無著なるを名けて心と爲んや、不
や、阿難に告げたまはく、「汝一覺知分別の心性は俱に在ることなし」と言はば、世間
の虚空、水陸飛行、諸所の物像を名けて一切と爲す。汝の不著とは在りと爲んや、無しと
爲んや、無くんば則ち龜の毛兔の角に同じ、云何が不著ならん。不著ならば無と名くべか
らず、相無くんば、則ち無ならん、無に非ずんば則ち相あらん。相有らば則ち在り、云何
が無著ならん。是故に應に知るべし、一切著なきを覺知の心と名くるは、是處りあるこ
となしと。」

爾時、阿難、大衆中に在りて、即ち座より起ち、偏に右の肩を袒き、右の膝を地に著け
て、合掌恭敬して、佛に白して言さく、「我は是如來の最小の弟なり、佛の慈愛を蒙りて、
今出家すと雖も猶ほ憍憍を恃む、所以に多聞なれども未だ無漏を得ず。娑毗羅の咒を折伏
すること能はず、彼が爲に轉ぜられて、姪舎に溺るることは、當に眞實際の所指を知らざる
に由るべし。唯願くば世尊、大慈哀愍して、我等に奢摩他の路を開示し、諸の闍提をして
彌戾車を墮らしめたまへ」と。是語を作し已りて五體を地に投じ、及び諸の大衆は傾渴翹
佇して、欽みて示誨を聞けり。

爾時、世尊、其面門より種種の光を放ちたまふに、其光晃耀して百千の日の如く、普
佛の世尊六種に震動す。是の如く十方微塵の國土一時に開現すれば、佛は威神をして、諸
の世界を合して一界と成さしめたまふ。其世界の中の有らゆる一切の諸の大菩薩は、皆

【業種】過去の業を現在の因と見て過去の業を種と云ふ。

【惡义聚】惡义は梵音アクサ(akṣa)に從貫珠と譯す。樹名。惡义の實の聚まれること。

【聲聞】梵音シユラ(śū)ツカ(śū)ニシテの譯。佛教誨の聲と云ふ意。

【緣覺】獨覺とも云ふ。無師獨悟するもの。

【攀緣】心外境に轉ぜられて靜平を得ず。その狀猿の樹枝を攀轉するが如きに轉轉するが如き。

【菩提涅槃】菩提は梵音ボド(bo)トヒ(Bodhi)佛の正覺の智慧。涅槃は梵音ニルヴァナ(nirvāṇa)滅度闍梨と譯す。佛の悟。

【諸趣】趣は衆生が煩惱を起し業を作りてその感業に引かれて趣き住む

な本國に住して、合掌し承聽せり。佛、阿難に告げたまはく、『一切衆生は、無始より來た、種種に顛倒して、業種の自然なること、惡义聚の如し。諸の修行の人の、無上菩提を成ずるを得ること能はずして、乃至別れて聲聞緣覺となり、及び外道、諸天、魔王及び魔の眷屬となれるは、皆二種の根本を知らずして、錯亂して修習するに由る。猶し沙を煮て嘉饌と成さんと欲するが如く、縦ひ摩劫を經とも終に得ること能はず。云何が二種なる。阿難、一には無始生死の根本なり。即ち汝が今諸の衆生と與に、攀緣の心を用ひて自性とする者なり。二には無始の菩提涅槃元清淨の體なり。即ち汝が今識精元明より能く諸緣を生じて、緣を遺ひたる者なり。諸の衆生の此本明を遺へるに由りて、終日行ずと雖も、而も自覺せずして、托けて諸趣に入る。阿難、汝今耆摩他の路を知つて、願つて生死を出でんと欲せば、今後汝に問はん。即時に如來、金色の臂を擧げ五輪の指を屈して、阿難に語りて言はく、『汝今見るや不や。』阿難言さく、『見る。』と。佛言はく、『汝何の見る所ぞ。』阿難言さく、『我如來の臂を擧げ指を屈して、光明の拳となして、我が心口を耀かしたまふことを見る。』佛言はく、『汝誰を將てか見る。』阿難言さく、『我大衆と與に、同じく眼を將て見る。』佛、阿難に告げたまはく、『汝今我に答ふ、如來指を屈し、光明の拳となして、汝が心口を耀かすと、汝が日は見るべし、何を以て心と爲して我が拳の耀けるに當れる。』阿難言さく、『如來、現に今心の所在を徴したまふに、而も我心を以て、推窮し尋逐す。即ち能推の者、我將て心と爲す。』佛言はく、『咄、阿難、此れ汝が心

所。地獄、餓鬼、畜生、餓羅、人間天上の六趣を諸趣と云ふ。

【相想】相はすがた、色、形なり。想は客觀萬象の相を分別して男女草木、禽獸と想ふ。精神作用なり。兩者何れも妄なり。

【賊を認めて】妄想の賊を認むるなり。

【元常】菩提涅槃の清淨體のこと。

【無生法忍】不生不滅の眞如法性を忍知して決定往生する位。

【師子の座】釋尊の坐し給ふ高座の下。

に非ず。阿難巽然として座を避け、合掌起立して、佛に白さく、「此れ我が心に非ずんば、當に何等をか心と名くべき。」佛、阿難に告げたまはく、「此は是れ前摩虛妄の相想の汝が眞性を惑はずなり。汝無始より今生に至るまで、賊を認めて子と爲して、汝が元常を失ふに由るが故に輪轉を受くるなり。」阿難、佛に白して言さく、「世尊、我は佛の寵弟なり、心に佛を愛したてまつるが故に、我をして出家せしむ。我が心、何ぞ獨り如來を供養するのみならずや。乃至切沙の國土を遍歴して、諸佛及び善知識に承事し、大勇猛を發し、諸の一切難行の法事を行ずることも、皆此心を用てす。縱ひ法を誘じて、永く善根を退することも亦此心に因る。若し此發明せるもの、是れ心に非ずんば、我乃ち無心にして諸の土木に同じかるべし。此覺知を離れては、更に所有なし、云何が如來此れ心に非ずと成きたまふ。我真に驚怖せり、猿て此大衆も疑惑せずといふことなし。唯大悲を垂れて、未語を開示したまへ。」

爾時、世尊、阿難及び諸の大衆に開示して、心をして無生法忍に入らしめんと欲し、師子の座に於て阿難の頂を摩でて、之に告げて言はく、「如來は常に諸法の所生は唯心の所現なり、一切の因果、世界の微塵は、心に因つて體を成ぜりと説く。阿難、若し諸の世界の一切の所有、其中の乃至草葉縷結までも、其根元を詰むるに成な體性あり、縱し虚空をして亦名の貌あらしめば、何ぞ泥んや清淨妙淨明の心、一切に性たる心、而も自ら體なからんや。若し汝、分別覺觀の了知する所の性を執悟して必ず心と爲さば、此心即ち諸の一切の色

【法身】佛三身の一。眞如、法性、佛性なり。

【九次第定】禪の九次第なり。禪を修して智惠深きもの次第にこの九定に入り間斷なく相續するが故に次第定と云ふ。小乗の座禪法なり。

【三昧】三摩地三摩提に同じ、前出

【二障】二種の障礙。煩惱障、所知障(知障)の二。

香味觸の諸塵の事業を離れて、別に全性あるべし。汝が今我が法を承聽するが如きは、此れ則ち聲に因つて分別あり。縱ひ一切の見聞覺知を滅して、内に幽閑を守るも猶ほ法塵分別の影事たり。我汝に勅して、執して心に非ずと爲よとは非ず、但汝、心に於て微妙に揣摩せよ。若し前塵を離れて分別の性あらば、即ち眞に汝が心ならん。若し分別の性に離れて體なくんば、斯れ則ち前塵分別の影事なり。塵は常住に非ず、若し變滅する時は、此心則ち龜の毛兔の角に同じ。則ち汝が法身斷滅に同ぜば、其れ誰か無生法忍を修證せん。即時に阿難、諸の大衆と與に、默然として自失す。佛、阿難に告げたまはく、「世間一切の諸の修學の人、現前に九次第定を成すと雖も、漏盡きて阿羅漢と成るを得ざること、皆此生死の妄想を執して、誤つて眞實なりと爲すに由れり。是故に汝、今多聞を得ると雖も、聖果を成ぜず。阿難聞き已りて、重ねて復悲涙し、五體を地に投じて、長跪合掌して佛に白して言さく、「我佛に従ひて、發心出家せしより、佛の威神を恃みて、常に自ら思惟すらく、我が修を勞すること無くとも、將に如來我に三昧を惠みたまはんと謂ひて、身心本より相代らざることを知らず。我が本心を失すれば、身は出家せりと雖も、心は道に入らず、譬へば窮子の父を捨てて逃逝するが如し。今日乃ち知りぬ、多聞なりと雖も、若し修行せざれば聞かざると等く、人の食を説くに、終に飽くこと能はざるが如し。世尊、我等今二障に纏さること、良に寂常の心性を知らざるに由つてなり。惟願くば如來、窮露を哀愍して、妙明の心を發き、我が道眼を開きたまへ。」

【記字】梵音スブステイカ(Svasti)。佛心印と云ふ古來佛教の有する標語なり。

【寶刹】刹は刹土國土のこと。法幢、妙法高く聳ゆる事、幢の上出するが如きことなり。

【妙微密性】凡智を以て知るべからざる靈妙の心なり。

【閻浮檀金】閻浮檀は梵音チヤンナナ(Jambhina)。閻浮は樹の名ナダは江海の義。閻浮樹の下を流るる河の中を生ずる沙金の意なり。

【諸盲】諸盲人なり。

即時、如來、胸の記字より寶光を涌出したまふに、其光晃晃にして百千の色あり、十方微塵の普佛世界、一時に周遍して、遍く十方所有の寶刹、諸の如來の頂に灌ぎ、旋りて阿難及び諸の大衆に至る。阿難に告げて言はく、「吾今汝が爲に大法幢を建て、亦十方一切の衆生をして、妙微密性淨明の心を發て、清淨眼を得しめん。阿難、汝、先に我に光明の拳を見ると答ふ。此拳の光明は、何に因つて有る所ぞ。云何が拳なる、汝誰を將てか見る。」阿難言さく、「佛の全體閻浮檀金にして、寶山の如く絶く、清淨より生ずる所なるに由る。故に光明有り。我實に眼に五輪指の端の、屈擡して人に示したまふを觀る、故に拳相あり。」佛、阿難に告げたまはく、「如來今日實言もて汝に告ぐ、諸の有智の者は、要らず譬喩を以て開悟することを得ん。阿難、譬へば我が拳の若し我が手なければ、我が拳を成せざるが如く、若し汝が眼無くんば、汝が見を成ぜず。汝が眼根を以て、我が拳の理に例すると、其義均しきや不や。阿難言さく、「唯然り、世尊、既に我が眼なくば、我が見を成ぜじ、如來の拳に例するに、事義相類す。」佛、阿難に告げたまはく、「汝相類すと言ふ、是義然らず。何を以ての故に。手なき人の如きは、拳畢竟じて滅すれども、彼眼なき者は、見全くなきに非ざればなり。所以は何となれば、汝試みに途に於て盲人に詢問せよ。汝何の見る所かある」と。彼諸の盲人必す來つて汝に答へん、「我今、眼の前に黑暗のみを見て、更に他の驅るものなし」と。是義を以て觀るに、前塵自から暗なり、見何ぞ虧損せん。阿難言さく、「諸盲人の眼の前に唯黑暗のみを觀るをば、云何が見を成すとせん。」佛

【兜羅綿】兜羅は梵音タロー(トロビ)草木の花絮なり。
 【鹿園】鹿野は梵音ムリ(ダバ)印度婆羅捺國にある窟苑。釋尊成道三七日の後橋陳如等の五比丘を濟度し給ひし地なり。
 【五比丘】阿若憍陳如、阿濕婆憍(馬勝)跋提、摩訶男、婆沙波の五人。
 【客塵】煩惱のこして煩惱は微細にして數多く(塵)又定住せずして眞智により拂拭せらるる(客)なればなり。
 【長老】智惠ある僧。小比丘が大比丘と呼ぶ尊稱なり。

阿難に告げたまはく、『諸盲の眼なくして唯黑暗を觀ると、眼ある人の暗室に處すると、二の黒に別ありや、別あること無しとせんや。』『是の如し、世尊。此暗中の人と彼群盲と、二の黒を校量するに、曾て異なること無し。』阿難、若し眼なき人の、全く前の黒を見るに、忽ち眼光を得て、還つて前塵に於て種種の色を見るを、眼の見と名けば、彼暗中の人、全く前の黒を見るに、忽ち燈光を獲て、亦前塵に於て種種の色を見るを、應に燈の見と名くべきや。若し燈の見ならば、燈能く見あり、自ら燈と名けじ。又則ち燈の觀ならば、何ぞ汝が事に關らん。是故に當に知るべし、燈能く色を顯はす。是の如く見ることは、是れ眼にして燈には非ず。眼は能く色を顯はす、是の如き見の性は、是れ心にして眼には非じ。阿難復は言を聞くことを得て、諸の大衆と與に、口は已に默然たりと雖も、心は未だ開悟せず。猶ほ如來慈音の宣示を冀ひて、掌を合せ心を清くして、例の悲誨を付ちたてまつれり。

爾時、世尊、兜羅綿の網相光の手を舒べ、五輪の指を開きて、阿難及び諸の大衆に誨勅したまはく、『我れ初め成道のとき、鹿園の中に於て、阿若多の五比丘等、及び汝四衆の爲に言へり。』一切衆生、菩提と及び阿羅漢とを成ぜざることば、皆客塵煩惱に誤らるるに由る。汝等當時何に因つてか開悟して、今聖果を成ぜる。』時に憍陳那起立して佛に白さく、『我今長老として、大衆の中に於て獨り解の名を得たることは、客塵の二字を悟つて果を成ぜるに由りてなり。世尊、譬へば行客の旅亭に投寄して、或は宿し或は食す、食宿事畢

【誰か動じ……】
佛手と見性、何れ
か動、何れか靜。

りて、假裝して途に前んで、安住するに違あらず。若し實の主人は自ら往く假なきが如し。是の如く思惟すらく、住せざるをば客と名け、住するをば主人と名くと。住せざる者を以て、名けて客の義と爲す。又着に露れて清陽の月に昇るとき、光隙の中に入りて、空中の諸有ゆる塵相を發明するに、塵質は搖動するも、虚空は寂然たるが如し。是の如く思惟すらく、「澄寂なるを客と名け、搖動するを塵と名く」と。搖動する者を以て名けて塵の義と爲す。佛言はく、「是の如し。即時に如來、大衆の中に於て、五輪の指を屈し、屈し已りて復開き、開き已りて又屈して、阿難に謂つて言はく、「汝今何とが見る。」阿難言さく、「我如來百寶輪の掌を衆中にして、開合することを見る。」佛、阿難に告げたまはく、「汝我が手を衆中にして開合すと見るとき、是れ我が手に開あり合ありと爲んや、復汝が見に開あり合ありと爲んや。」阿難言さく、「世尊、寶手を衆中にて開合したまふとき、我如來の手自ら開合すと見る、我が見性の自ら開し自ら合するに非ず。」佛言はく、「誰か動じ誰か靜なる。」阿難言さく、「佛手の住せざるなり、而も我が見性は尙ほ靜だもあること無し、誰をか住あること無しとせん。」佛言はく、「是の如し。如來是に於て、輪掌の中より一寶光を飛ばして、阿難の右に在きたまふ。即時に阿難、首を廻らして右に盼る。又一光を放つて阿難の左に在きたまふ。阿難、又則ち首を廻らして左に盼る。佛、阿難に告げたまはく、「汝が頭今日何に因つてか搖動する。」阿難言さく、「我如來の妙なる寶光を出して、我が左右に來らしたまふを見たてまつる。故に左右に觀るとき、頭自から搖動するなり。」阿難

【神】 見なり。

汝佛光を盼て、左右に頭を動かすとき汝が頭の動くと爲んや、復見の動くと爲んや。『世尊、我が頭の自ら動くなり、而も我が見性は止だも有ることなし、誰をか揺動すとせん。』佛言はく、『是の如し。』是に於て如來普く大衆に告げたまはく、『若し復衆生、揺動の者を以ては之を名けて塵となし、不住の者を以ては之を名けて客となせば、汝觀よ、阿難頭は自ら揺動すとも、神は動ずる所なきことを、又汝觀よ、我が手は自ら開合すとも、見は舒卷なきことを。云何が汝今動を以て身と爲し、動を以て境と爲して、始より終に泊ぶまで念念に生滅し、眞性を遺失して、顛倒して事を行じ、性心に眞を失つて、物を認めて已と爲し、是中に輪轉して、自ら流轉を取るや。』

首楞嚴經

卷第二

大唐神龍元年龍集乙巳五月己卯朔廿三日辛丑
中天竺沙門般刺蜜帝廣州制止道場に於て譯出す

【一】本章に於ては、眞性の本來淨妙圓明なる所以を説く。

【緣塵分別】前出客塵煩惱の分別なり。

【迦旃延】梵音カトヤナーヤナ(Anāyana)文飾と譯す。婆羅門の學者

【毘羅胝子】婆羅門の學者なり。

【涅槃】梵音ニルヴァーネ(Nirvāna)滅受、圓寂と譯す

迷妄を脱し、眞理を究めて寂滅無爲の法性を究め、不生不滅の法身の眞證に歸するを云ふ佛の悟なり。

爾時、阿難及び諸の大衆、佛の示誨を聞きて、身心泰然たり。無始より來を念ふに、本心を失却して、妄りに緣塵分別の影事を認む。今日開悟すること、乳を失ひたる兒の忽に慈母に遇ふが如し。掌を合せ佛を禮して、如來の身心の眞妄虛實と、現前の生滅と不生滅との二の發明の性を顯出せんことを聞かんと願ふ。時に波斯匿王、起立して佛に白さく、「我昔未だ諸佛の誨勅を承けざりしとき、迦旃延と毘羅胝子に見えしに、威な言はく、「此身死して後斷滅するを、名けて涅槃と爲す」と。我佛に値ひたてまつれりと雖も、今猶ほ狐疑す。云何が發指して此心の不生滅の地を證知せん。今此大衆、諸の有知の者、咸く皆聞かんことを願ふ。佛、大王に告げたまはく、「汝が身現在せり。今復汝に問はん、汝が此肉身は金剛と同じく、常住にして朽ちずと爲んや、復變壞すと爲んや。」世尊、我が今此身は、終に變滅に従ふべし。」佛言はく、「大王、汝未だ曾て滅せず、云何が滅を知る。」世尊、我が此無常變壞の身は、未だ曾て滅せずと雖も、我は現前に、念念に遷謝し、新新に住まらず、火の灰と成つて漸漸に銷殞し、殞亡して息まざるが如くなるを觀るに、決んで知

【刹那】梵音クシヤナ(Kṣāna)念と譯す。時間の最少單位にして極めて短き時間なり。

【耆婆】梵語(Chiva)能活と譯す。王舍城の名醫。

りぬ、此身は當に滅盛に從ふべしと。『佛言はく、是の如し、大王。汝今生齡已に衰老に從へり、顔貌童子の時と何如ん。』世尊、我昔孩孺なりしときには、膚腠潤澤なりき。年長成するに至つて、血氣充滿せり。而も今頽齡にして衰髦に迫り、形色枯悴し、精神昏昧せり。髮白く面皺みて、將に久しからざるに逮べり、如何が充盛の時に比せられん。佛言はく、『大王汝が形容頗に朽ちざるべきや。』王、言さく、『世尊、變化密に移ること、我誠に覺えず、寒暑遷流して漸く此に至れり。何を以ての故に。我年二十なりしときは、年少と號すと雖も、顔貌に初めの十歳の時よりも老いたり。三十の年は又二十よりも衰へたり。今六十又一を過ぎぬ。五十の時を觀るに、宛然として強壯なり。世尊、我れ密に移ることを見るに、此れ殞落すと雖も、其間の流易は且く十年に限る。若し復我をして微細に思惟せしめば、其變すること寧ぞ唯一紀二紀のみならんや、實に年に變すと爲す。豈に唯に年に變するのみならんや、亦兼ねて月に化す。何ぞ直に月に化するのみならんや、兼ねて又日にも遷る。思を沈めて諦觀するに、刹那刹那念の間も停住するを得ず。故に知りぬ、我が身終に變滅に從はんと。』佛、大王に告げたまはく、『汝變化遷改して停らざるを見て、汝が滅を悟知せり。亦滅の時に於て、汝が身中に不滅あることを知れりや。』波斯匿王、掌を合せて佛に白さく、『我實に知らず。』佛言はく、『我今汝に不生滅の性を示さん。』大王、汝が年幾ばく時にか恆河の水を見し。』王言さく、『我れ生れて三歳のとき、慈母我を携へて耆婆天に謁せしに、此流を經過して、爾時即ち是れ恆河の水と知りぬ。』

【末伽梨】梵語 (Makhalī) 末伽梨拘除梨の略。六師外道の一。

【母陀羅手】母陀羅は牟陀羅とも云ふ。梵音ムドラー (Mudra) 印契と譯す。佛菩薩が内證の本誓を事相の上に表示する形式なり。

佛言はく、「大王、汝が説く所の如くんば、二十の時は十歳より衰へ、乃し六十に至り、日月歳時念念に遷變せり。則ち汝三歳にして此河を見し時と、年十三に至りしときと、其水云何。」王言さく、「三歳の時の如くして、宛然として異なることなく、乃し今年六十二に至るまで亦異なること有ることなし。」佛言はく、「汝今自ら髮白く面皺むを傷む、其面必定して童年よりも皺めり。則ち汝今の時に此恆河を觀るに、昔の童なりし時河を觀るの見と童耄ありや否や。」王言さく、「不、世尊。」佛言はく、「大王、汝が面は皺むと雖も、而も此見精性は未だ曾て皺まず。皺める者をば髮と爲し、皺まざれば髮に非ず。髮する者は滅を受くべく、彼髮せざる者は元より生滅なし。云何が中に於て汝が生死を受けん。而も猶ほ彼末伽梨等が、却て此身死して後全く滅すと云ふことを引くや。」王此言を聞きて、身は後に生を捨てて生に越ぐといふことを信知して、諸の大衆と與に、踊躍歡喜して未曾有なることを得たり。阿難即ち座より起ちて佛を禮し、合掌長跪して佛に白さく、「世尊、若し此見聞必らず生滅せずば、云何が世尊、我等が輩をば眞性を遺失して、顛倒して事を行ずと名けたまへる。願くば慈悲を興して我が塵垢を洗ひたまへ。」即時、如來金色の臂を垂れ、輪手下を指さして阿難に示して言はく、「汝今我が母陀羅手を見よ、正と爲やん、倒と爲やん。阿難言さく、「世間の衆生は此を以て倒となす、而も我は誰が正誰が倒といふことを知らず。」佛、阿難に告げたまはく、「若し世間の人此を以て倒となさば、即ち世間の人は何を將てか正とせん。」阿難言さく、「如來臂を整て兜樓縵手を上げて、空を指さすを則ち

【正通知】佛の正理を窮め盡して知らざる事なきを云ふ。三藐三佛陀 (Ariyakambodhi) の譯正等覺に同じ。
【海潮音】音の大なるを海潮に例ふ大悲の音聲時に應じ機に隨つて說法するに似たり。
【色、心、諸緣、心所使】色は色法にして十一種なり。心は心法意識なり。諸緣は六塵の法。心所使は五十一の心所法なり。
【惑うて…】迷つて心を色身の内に存すとす。

名けて正と爲す。佛即ち臂を堅て、阿難に告げて言はく、「此の若く顛倒して、首尾相換へば、諸の世間の人、一倍して瞻視せん。即ち知る、汝が身と諸の如來の清淨法身と、比類し發明するに、如來の身をば正通知と名け、汝等が身をば性顛倒と號すべし。汝に隨す、諦に觀よ、汝が身と佛身とを顛倒と稱せば、何の處を名字けてか號して顛倒と爲す。」

時に阿難諸の大衆と、瞻瞻して佛を瞻て口疇囁ろかず、身心顛倒の所在を知らず、佛慈悲を興し、阿難及び諸の大衆を哀愍して、海潮音を發して、遍く同會の諸の善男子に告げたまはく、「我常に説いて言はく、「色と心と諸緣及び心所使と諸の所緣の法とは、唯心の所現なり」と、汝が身と汝が心とは、皆是れ妙明の眞精、妙心の中の所現の物なり。云何が汝等、本妙圓妙の明心、寶明の妙性を遺失して、悟中の迷を認むるや。喼喼にして空となり、空と喼との暗中に暗を結んで色と爲す。色妄想に雜つて、想の相れたるを身と爲し、緣を聚めて内に搖ぎ、外に趣いて奔逸す。昏くして擾擾たる相の心性と以爲へり。一たび迷うて心と爲れば、決定して惑うて色身の内と爲へり。色身より外、山河虛空大地に洎ぶまで、咸く是れ妙明の眞心中の物といふことを知らず。譬へば澄清たる百千の大海之を棄てて唯一浮漚の體を認めて、日して全潮と爲して、漚渤を窮め盡くせりといはんが如し。汝等即ち是れ迷中に倍せる人なり、我が垂れたる手の等くして差別なきが如く、如來説いて憐愍すべき者と爲す。阿難、佛の悲救深海を承けて、涙を垂れ又手して佛に白

【緣心】 物を分別する心。

【此も亦是の如し】 此とは分別の心をいふ。

【拘舍離】 梵音ゴ一サリ (Gosari) 數論哲學の學者。

して言さく、「我佛の是の如きの妙音を承けて、妙明の心元より圓滿なる所の常住の心地なるを悟ると雖も、而も我佛の現說法の音を悟るに、現に緣心を以て、尤に瞻仰する所なり。徒に此心を獲るとも、未だ敢て認めて本元の心地となさず、願くば佛哀愍して圓音を宣示し、我が疑根を抜いて、無上道に歸せしめたまへ。佛、阿難に告げたまはく、「汝等尚ほ緣心を以て法を聽かば、此法も亦緣なり、法性を得るに非ず。入の手を以て月を指さして人に示すが如く、彼人、指に因つて當に月を見るべし。若し復指を觀て以て月の體とせば、此のひと豈に唯に月輪を亡失するのみならんや、亦其指をも亡せり。何を以ての故に。標せる所の指を以て明月と爲す故に。豈に唯に、指を亡するのみならんや、亦復明と暗とをも識らず。何を以ての故に。即ち指の體を以て月の明性となして、明と暗との二性所了無きが故に。汝も亦是の如し。若し我が說法の音を分別するを以て汝が心とせば、此の心自ら應に音を分別するを離れて分別の性あるべし。譬へば客あり、旅亭に寄宿して、暫く止まつて便ち去り、終に常住せず。而して亭を掌する人は、都て去る所なければ、名けて亭主と爲す。此も、亦是の如し。若し眞に汝が心ならば、則ち去る所なけん。云何が聲を離れて、分別の性なきや。斯れ即ち豈に唯聲を分別する心のみならんや。我が客を分別するも、諸の色相を離るれば分別の性なけん。是の如く乃至分別都て無くんば、色に非ず、空に非ず。拘舍離等は、昧くして冥諦と爲す。惡法の緣を離るれば分別の性なし、則ち汝が心性各還る所あり、云何が主とせん。阿難言さく、「若し我が心性、各還る所あらば、則ち如來の

【冥諦】 數論外道の立論二十五諦の第一、これは萬物の本源に於て冥冥無諦なれば具諦冥性とも云ふ。

【本因】 本所因。

【八種】 前文、明曜、昏暗、通、壅、緣空、昏塵、清淨の八。

説きたまふ妙明の元心は、云何が還ること無けん。唯哀愍を垂れて、我が爲に宣説したまへ。佛、阿難に告げたまはく、「且く汝が我を見る見精は明元なれども、此見、妙精明の心に非ず。第二の月の、是れ月の影にだも非ざるが如しと雖も、汝應に諦に聽くべし。今當に汝に還る所なきの地を示すべし。阿難、此大講堂、洞に東方に開けて、日輪、天に昇るとき則ち明曜あり、中夜と黒月と雲霧との晦冥のときは、則ち復昏暗なり。戸牖の隙よりも則ち復通れるを見、牆宇の間つるには則ち復壅れるを觀る。分別の處には則ち復縁を見る。頑虚の中には遍く是れ空の性なり。鬱埒の像は則ち昏塵に紆り、澄霽氣を歛むるも又清淨を觀る。阿難、汝咸く此諸の變化の相を看よ、吾今各本所因の處に還さん。云何なるか本因。阿難、此諸の變化明をば日輪に還す。何を以ての故に。日なれば明ならず、明の因は日に屬すればなり。是故に目に還へす。暗をば黒月に還し、通をば戸牖に還し、壅をば牆宇に還し、縁をば分別に還し、頑虚をば空に還し、鬱埒をば塵に還し、清明をば霽に還すべし。則ち諸の世間の一切所有は、斯類を出でざるなり。汝八種を見る見精明、性は、當に誰に還さんと欲する。何を以ての故に。若し明に還さば則ち明ならず、明ならざる時は復暗を見ること無けん。明暗等は種種の差別ありと雖も、見に差別なし。諸の還るべき者は、自然に汝に非ず、汝が還らざる者は、汝に非ずして誰ぞや。則ち知りぬ、汝が心は本妙明淨なり。汝自ら迷悶して、本を喪うて輪を受け、生死の中に於て常に漂溺せり。是故に如來憐愍すべしと名く。阿難言さく、「我此見性の還

【神力】 神通力なり。

【初禪】 初禪天の色界を初禪天、二禪天、三禪天、四禪天又は十八天に分つ。

【阿那律】 阿那律は梵音アヌラドハ、Anuradha)無減、如意と譯す。釋尊十大弟子の第一、天眼第一と稱せらる。

【菴摩羅果】 菴摩羅は梵音アームラ(Amra)樹名。

【四天王】 四王天にありて佛法を護る王。東方持國南方(增長)西方(廣目)北方(多聞)なり。

【見の中に擇べ】 見の中に自他を擇べの意。
【七金山】 九山の中須彌山と鐵圍山とを除きたる稱。皆金色あるが故に

ること無きことを識ると雖も、云何が是れ我が眞性なりと知ることを得ん。佛、阿難に告げたまはく、吾今汝に問はん、今、汝未だ無漏清淨なることを得ざれども、佛の神力を承けて、初禪を見ること障礙なきことを得たり。而るに阿那律は、閻浮提を見ること掌中の菴摩羅果を觀るが如し。諸の菩薩等は百千界を見、十方の如來は微塵清淨の國土を窮盡して觀ざる所なし。衆生は測に觀ること分寸に過ぎず。阿難、且く吾と汝と四天王の所住の宮殿を觀しとき、中間に海、水陸空行を觀る。其と明との種種の形像ありと雖も、前佛の分別留礙に非ざるなし。汝應に此に於て自他を分別すべし。今吾れ汝に轉む、見の中に擇べ。誰をか是れ我が體とし、誰をか物象とせん。阿難、汝が見源を極めよ。日月宮の、是れ物にして、汝に非るものより、七金山に至るまで、周遍く諦に觀するに、種種の光ありと雖も、亦物にして汝に非ず。漸漸に更に觀るに、雲は飄り、鳥は飛び、風は動き、塵は起り、樹木山川、草芥人畜、或く物にして汝に非ず。阿難、是諸の近遠の諸有ゆる物性は、復差殊なりと雖も、同じく汝が見精の清淨に觀る所なり。則ち諸の物類は、自ら差別あれども、見性は殊なることなければ、此精妙明は誠に汝が見性なり。若し見是れ物ならば、則ち汝亦吾が見を見るべし。若し同じく見るをば、名けて吾を見るとせん。吾が不見の時、何ぞ吾が不見の處を見ざる。若し不見を見るといはば、自然に彼不見の相に非ず。若し吾が不見の地を見ざれば、自然に物に非ず。云何が汝に非ざらん。又則ち汝今物を見るの時、汝既に物を見る。物亦汝を見るとせば、體と性と紛雜

金山と云ふ。

【吾を見るのと…】
吾が見を見るの意

【娑婆國】 娑婆は
梵音サハ(の)ニト忍
土、忍界と譯す。
この世界なり。

【器の方…】 方は
方圓なり。

して、則ち汝と我と并に諸の世間と、安立することを成ぜず。阿難、若し汝見する時、是れ汝にして我に非ず、見性は周遍せり、汝に非ずして誰ぞ。云何が自ら汝の眞性の汝に性たるを眞にあらすと疑つて、我に取つて實を求むる。阿難、佛に白して言さく、「世尊、若し此見性、必らず我にして、餘に非ずば、我と如来と四天王の勝藏寶殿を観るとき、日月宮に居りしに、此見周圍にして娑婆國に遍せり。退いて精舎に歸るときに、祇伽藍のみを見る。心を戸堂に清すには、但簷廡を瞻る。世尊、此見是の如く、其體本來一界に周遍するも、今室中に在るときは、唯一室に満てり。復此見は、大を縮めて小となすとせんや、當た牆宇の夾んで、斷絶せしむるとせんや。我今斯義の所在を知らず、願くば弘慈を垂れて、我が爲に敷演したまへ。」

佛、阿難に告げたまはく、「一切世間の大小内外の諸所の事業は、各前塵に屬す、説いて見に舒縮ありと言ふべからず、譬へば方器の中に方空を見るが如きは、吾れ復汝に問はん、此方器の中に見る所の方空は、復定んで方なりとせんや、定んで方ならずとせんや。若し定んで方ならば、別に圓器を安くとも、空は圓ならざるべし。若し定めざれば、方器の中に在つて、方なる空なかるべし。汝斯義の所在を知らずと言へり、義の性は如し。云何が在とせん。阿難、若し復方圓なきことを入らしめんと欲せば、但器の力を除け、空の體には方なし、應に説いて更に虚空の方相の、所在を除かんと言ふべからず。若し汝が問の如く、空に入る時に、見を縮めて少ならしめば、仰いで日を觀る時には、汝豈

【祇陀林】 前出。

に見を挽いて、目の面に齊しからしめんや。若し牆宇を築きて、能く見を夾んで斷たしめば、穿つて小竇をなさば、寧ぞ續ける途なからんや、是義然らず。一切衆生、無始より來已に迷うて物と爲し、本心を失つて物の爲に轉ぜらる。故に是中に於て、大を觀小を觀る。若し能く物を轉ずれば、則ち如來と同じし、身心圓明なり、道場を動ぜずして、一毛端に於て遍く能く十方の國土を含受す。阿難、佛に白して言さく、「世尊、若し此見精、必らず我が妙性ならば、今此妙性は、現れて我が前に在らん。見必らず我が眞ならば、我が今の身心は、復は何物ぞ。而るに今の身心は、分別すること實あり、彼見は別に我が身を分辦することなし。若し實に我が心にして、我をして今見しめば、見性は實に我にして、身は我に非ざるべし。何ぞ如來先に離じて、物能く我を見ずと言ふ所に殊ならん。唯大慈を垂れて、未悟を開發したまへ。佛、阿難に告げたまはく、「今汝が見汝が前に在りと言ふ所、是義實に非ず。若し實に汝が前にあつて、汝實に見るといふは、則ち此見精、既に方所あり、指示するところ無きにあらじ。且つ今汝と祇陀林に坐して、遍く林渠と及び殿堂とを觀るに、上は日月に至り、前は恆河に對へり。汝今我が師子座の前に於て、手を舉げて是種種の相を指陳せよ。陰るる者は是れ林なり、明かなる者は是れ日なり、礙れる者は是れ壁なり、通れる者は是れ空なり、是の如く乃至草樹纖毫まで、大小殊なりと雖も、但形あるものは指さして著さずといふこと無かるべし。若し必らず其見現れて、汝が前に在りとせば、汝手を以て確實に指陳すべし、何者か是れ見なる。阿難、當に知るべし、若

し空是れ見ならば既已に見と成す、何者か是れ空ならん、若し物是れ見ならば、既已に是れ見なり。汝微細に萬像を披剝し、精明淨妙の見元を析出して、指陳して我に示すこと彼諸物に同じく、分明にして惑ふこと無かるべし。阿難言さく、『我今此重閣講堂に於て、遠きは恆河に泊び、上は日月を觀る、手を舉げて指さす所、口を縦にして觀る所、皆是れ物にして、是れ見なる者なし。世尊、佛の所説の如し。況んや我は有漏初學の聲聞なり、乃至菩薩なりとも、亦萬物の像の前に於て、精見の一切の物を離れて、別に自性あることを割出すこと能はじ。佛言はく、『是の如く、是の如し。佛復阿難に告げたまはく、『汝が言ふ所の如くば、精見ありて一切の物を離れて、別に自性あることなくんば、則ち汝が指さす所、是物の中に是れ見なる者なけん。今復汝に告げん。汝如來と與に祇陀林に坐して、更に林苑より乃至日月種種の像の殊なるを觀るに、必ず見精の汝が指さす所を受くることなくば、汝又發明せよ、此諸物の中に何者か非見と。阿難言さく、『我實に遍く此祇陀林を見るに、是中に何者か非見といふことを知らざらん。何を以ての故に。若し樹見に非ずば、云何が樹を見ん。若し樹即ち見ならば、復云何が樹ならん。是の如く乃至若し空見に非ずんば、云何が空と爲さん。若し空即ち見ならば、復云何が空ならん。我又思惟すらく、是萬像の中に、微細に發明するに非見なる者なし。佛言はく、『是の如く是の如し。』是に於て大衆、無學に非ざる者、佛の此言を聞き、茫然として是義の終始を知らず、一時に惶悚して其守る所を失へり。如來其魂慮の變悟せることを知つて、心に憍惑を生じ、阿

【無上法王】如來のこと。如來の説は眞語なりとの意【所知】眞如理法の如く。

【四種の不死】外道の立つる妄見を指す。

【是と非是】色空に對する精見にも見もなく、非見もなしとの二義なり煩惱。

【所想の相】客塵殊をさす。

難及び諸の大衆を安慰したまはく、諸の善男子、無上法王は是れ眞實の語なり、所知の如く説く不誑不妄にして、末伽梨が四種の不死矯亂の論議に非ず。汝諦に思惟して、悉く哀慕すること無かれ。

是時に文殊師利法王子、諸の四衆を愍みて、大衆の中に在りて、即ち座より起ちて、佛足を頂禮して、合掌恭敬して佛に白して言さく、「世尊、此諸の大衆、如來二種の精見と色空との是と非是との我を發明したまふことを悟らず。世尊、此の若きの前縁の色空等の像、若し是れ見ならば、應に指さす所あるべし。若し非見ならば隨つて離る所なかるべし。而るに今是義の歸する所を知らず、故に怖あり。是れ佛言の善根微少なるに非ず。唯願くば如來、大慈をもて發明したまへ。」此諸の物像と非見精と、元是れ何物ぞ、其中間に於て、是と非是となきや。佛、文殊及び諸の大衆に告げたまはく、「十方如來及び大菩薩、其自佳の三摩地の中に於て、見と見縁と并に所想の相とは、虚空の華の本より所有なきが如し。此見と及び縁とは、元より是れ菩提妙淨明の體なり、云何が中に於て是と非是と有らん。文殊、汝今汝に問ふ、汝文殊なるが如く、更に文殊の是れ文殊なる者ありや、文殊なるもの無しと爲んや。是の如く、世尊、我眞の文殊にして、是れ文殊なし、何を以ての故に。若し是れなる者あらば、則ち一文殊ならん、然るに我今日文殊なきに非ず、中に於て實に是非の二相なければなり。佛言はく、「此見の妙明諸の客塵も、亦復是の如し。本是れ妙明たる無上菩提淨圓の眞心なり。妄に色空と及び聞見と爲れること、第二の月の如し。誰か

【指と非指】前出是と非是の二見。
 【二】本章に於ては見性、及び識蘊等因縁、自然にあらざる事を説く。
 【梵志】梵音ブラフマチャールン(Brahmacarin)淨裔と譯す。婆羅門の生活に四期あり其第二期。師に就きて修行する期間。
 【婆毘遮維】前出のことなり。
 【楞伽山】梵音ラシカー(Jinaka)難入と譯す。釋尊の楞伽經を説き給ひし所なりと云ふ。
 【開示して】分辨開示の意。

是月となし、又誰をか非月とせん。文殊、但一月のみ眞なり、中間に自らは月と非月と無し。是を以て汝今見と塵とを觀て、種種發明するを名けて妄想と爲し、中に於て是と非是を出ること能はず。是精眞たる妙覺明の性に由るが故に、能く汝をして指と非指とを出さしむ。

阿難、佛に白して言さく、「世尊、誠に法王の所説の如く、覺縁は十方界に遍く、湛然常住にして、性、生滅に非ずんば、先に梵志婆毘遮維が談ずる所の冥諦及び投友等の諸の外道種の、眞我ありて十方に遍滿すと説くと、何の差別かあらん。世尊亦曾て楞伽山に於て、大悲等の爲に、斯義を敷演したまへり。彼外道等は常に自然と説く、我が因縁と説くは彼境界に非ずと、我れ今此覺性の自然にして、生に非ず滅に非ず、一切の虚妄顛倒を遠離せることを觀するに、因縁に非ざるに似たり。彼自然と云何が開示して、群邪に入らず、眞實の心、妙覺明の性を獲しめん。」佛、阿難に告げたまはく、「我れ今是の如く方便を開示して、眞實に汝に告ぐ、汝猶ほ未だ悟らず、惑うて自然と爲す。阿難若し必らず自然なりとせば、自ら須く自然の體あることを覺明すべし。汝且く觀ぜよ、此妙明の見の中に、何を以てか自と爲さん。此見復明を以て自と爲し、暗を以て自と爲し、空を以て自と爲し塞を以て自と爲すと爲んや。阿難、若し明を自と爲さば應に暗を見ざるべし。若し復空を以て自の體と爲さば應に塞を見ざるべし。是の如く乃至諸の暗等の相を以て自と爲さば、則ち明の時に於て見性斷滅せん、云何が明を見ん。」阿難言さく、「必らず此妙見の性、自然に非ず

【汝因縁と言ふ】
以下見性の因縁に
非ざるを説く。
【明を因として有
らば】明を因とし
て見あらばの意。

【空を縁としてあ
らば】空を縁とし
てあらば何れも
見あらばの意。

ば我今發明す、是れ因縁より生ずるならん。心猶ほ未だ明めず、如來に諮詢したてまつる、是
義云何が因縁の性に合せん。佛言はく、汝因縁と言ふ。吾復汝に問はん、汝今見に因つて
見性現前せり。此見は復明を因として見あり、暗を因として見あり、空を因として見あり、塞
を因として見ありとせんや。阿難、若し明を因として有らば、應に暗を見ざるべし。如し暗を
因として有らば、應に明を見ざるべし。是の如く乃至空を因とし塞を因とするは明暗に同じ。
復次に阿難、此見又復明を縁として見ありや、暗を縁として見ありや。空を縁として見
ありや、塞を縁として見ありや。阿難、若し空を縁としてあらば、應に塞を見ざるべし、若
し塞を縁としてあらば、應に空を見ざるべし。是の如く乃至明を縁とすることも暗を縁とす
ることも、空塞に同じ。當に知るべし、是の如き精覺妙明は、因に非ず、縁に非ず亦自然に
非ず、不自然に非ず、非と不非と無く、是と非是と無く、一切の相を離れて一切の法に即す。
汝今云何が中に於て心を措きて、諸の世間の戲論の名相を以て分別することを得んや。手
掌を以て虚空を撮摩するか如し、只自ら勞することを益するとも、虚空云何が汝が執捉に
隨はん。阿難、佛に白して言さく、世尊、必ず妙覺の性は因に非ず縁に非ずんば、世尊、
云何が常に比丘の奥に、見性は四種の縁を具せりと宣説したまふ。謂ゆる空を因とし、明
を因とし、心を因とし、眼を因とすと、是義云何が。佛言はく、阿難、我世間の諸人の因
縁の相を説くことは、第一義に非ず。阿難、吾復汝に問はん、諸の世間の人、我能く
見ると説く、云何をか見と名け、云何をか不見とせん。阿難言さく、世人日月燈の光に因

【陀羅尼】梵音ド
 ハーラニー (Dhāraṇī) 總持、能持と
 譯す。諸の惡法を
 捨離して衆の善法
 を持する事、支那
 の禁呪法に似たる
 が故に呪とも云ふ。
 【三摩提】前出。

つて、種種の相を見る、之を名けて見と爲す。若し復此三種の光明なくば、則ち見ること能はず。『阿難、若し明無き時を不見と名けば應に暗を見ざるべし、若し必らず暗を見れば、此れ但明なきなり。云何が見なからん。阿難、若し暗に在る時、明を見ざるが故に名けて不見と爲さば、今明に在る時、暗相を見ざるをも還つて不見と名けよ。是の如くなるをば、二相俱に不見と名けよ。若し復二相は、自ら相陵奪すれども、汝が見性、中に於て暫くも無きに非ず。是の如くならば則ち知りぬ、二俱に見と名よけ。云何が見すとせん。是故に阿難、汝今當に知るべし、明を見るの時も、見是れ明に非ず、暗を見るの時も、見是れ暗に非ず、空を見るの時も、見是れ空に非ず、塞を見るの時も、見是れ塞に非ず、四義もて成就せんや。汝復應に知るべし、見を見るの時、見是れ見に見せずと、見猶ほ見を離る。見も及ぶこと能はず、云何が復因縁、自然及び和合の相を説かん。汝等聲聞、狭劣無識にして、清淨の實相に通達すること能はず。吾れ今汝に誨ふ、當に善く思惟して妙菩提の路に疲れ怠ることを得ることなかるべし。』阿難、佛に白して言さく、『世尊、佛世尊の如きは、我等が輩の爲に、因縁と及び自然とを宣説したまへども、諸の和合の相と不和合と心猶ほ未だ開けず。而して今更に見を見るに、見に見せずといふことを聞きて重ねて迷悶を増す。伏して願くば弘慈、大惠目を施し、我等に覺心明淨なることを開示したまへ。』是語を作し已りて、悲涙頂禮して、聖旨を承受す。

爾時、世尊、阿難及び諸の大衆を憐愍して、將に大陀羅尼、諸の三摩提、妙修行路

【多聞を益して】多聞を増すの意。

【奢摩他】梵音シ

ヤマトハ(Shamata)

止、止息、寂

滅と譯す。一切の

亂心を離れて寂靜

なるを云ふ。

【有漏】前出。無

漏に對するもの。

煩惱を増長せしむ

るものなり。

を敷演せんと欲して、阿難に告げて言はく、汝強記と雖も、但多聞を益して、奢摩他微密の觀照に於て心猶ほ未だ了ぜず。汝今諦に聽け、吾當に汝が爲に分別開示して、亦將來の諸の有漏の者をして、菩提の果を獲しむべし。阿難、一切衆生の世間に輪廻することは一、一の顛倒分別の見妄に由れり。當處に發生し、當業に輪轉す。何をか一見と云ふ。一には衆生の別業妄見なり、二には衆生の同分妄見なり。何をか名けて別業妄見と云ふ。阿難、世間の人の目に赤青ありて、夜燈光を見るに、別に圓影ありて五色重疊するが如し。意に於て云何。此夜の燈明の所現の圓光を、是れ燈の色なりとせんや、當見の色なりとせんや。阿難、此れ若し燈の色ならば、則ち青に非ざる人も何ぞ同く見ずして、而も此圓影を唯青あるもののみを觀る。若し是れ見の色ならば、見已に色と成す。則ち彼青ある人の圓影を見るをば、名けて何等とか爲ん。復次に阿難、若し此圓影、燈を離れて別にあらば、則ち旁に合に屏帳几筵を觀るべし、圓影の出づる有らん。見を離れて別にあらば、應に眼に瞞るに非ざるべし。云何が青ある人、目に圓影を見るや。是故に當に知るべし、色は實に燈に在り、見の病を影となさば、影と見と俱に青なり。青なりと見れば病に非ず、終に應に是れ燈是れ見と言ふべからず、是中に於て非燈非見有らんや。第二の月の、體にも非ず影にも非ざるが如し。何を以ての故に。第二の觀は捏て成る所なるを以ての故に。諸の有智の者は、應に説いて此捏の根元は是形非形、見非見を離れたりと言ふべからず。此も亦是の如き目眚を成せる所なり。今誰をか是燈、是見と名けんと欲する、何に況んや非燈非見

【閻浮提】梵音バヤンブ・ドギーバ(Jambudvīpa) 閻洲、妙金土と譯す須彌四洲の第一、吾人の住する世界のことなり。

【暈適・飛流】諸の星のこと。

【進退合して明さん】進退合して見と無見とを明さんの意。

【十類の衆生】十法界の衆生、地獄、餓鬼、畜生、人、天、阿修羅の六凡に聲聞緣覺佛菩薩の四なり。

を分別せんをや。云何をか名けて同分妄見と爲す。阿難、此閻浮提、大海の水を除いて、中間の平陸に三千洲有り。正中の大洲は東西を括量するに、大國凡そ二千三百あり。其餘の小洲は諸海の中に在り、其間に或は三兩百國有り、或は一或は二より、三十四十五十に至れり、阿難、若し復此中に一の小洲あつて、祇兩國あり、唯一國の人のみ同じく惡縁を感ずれば、則ち彼小洲、當土の衆生は、諸の一切不祥の境界を觀る。或は二の口を見、或は兩の月を見る。其中に乃至暈適、瓊瑛、慧孛、飛流、負耳、虹蜺、種種の惡相あり。但此國のみ見て、彼國の衆生は本より見ざる所なり、亦復聞かざるなり。阿難、吾れ今汝が爲に此二事を以て、進退合して明さん。阿難、彼衆生の別業妄見の如しとは、燈光の中に現する所の圓影を驅るに、現に境に似たりと雖も、終に彼見る者の口舌の成ずる所なり、舌は即ち見の勞なり、色の所造に非ざるなり。然れども舌なりと見れば、終に見の咎なし。例へば汝今日、目を以て山河國土及び諸の衆生を觀見せんに、皆是れ無始の見病の所成なり。見と見縁と現前の境に似たれども、元より我が覺明なり。所縁を見るとも皆なり、見を覺るも即ち皆なり。本覺の明心たる覺縁は皆に非ず、覺と、所覺とは皆なり。覺は皆の中に非ず、此れ實に見を見るなり。云何が復覺聞知見と名けん。是故に汝今、我及び汝并に諸の世間十類の衆生を見るは、皆即ち見皆なり。見の皆に非ざる者は、彼見の眞精なり、性は皆に非ざるが故に見と名けず。阿難、彼衆生同分妄見の如きを彼妄見別業の一人に例せば、一病目の人は彼一國に同じく、彼圓影を見る皆妄の所生

と、此業同分の所現の不祥の同見業の中の薄惡所起とは、俱に是れ無始の妄見の所生なり。閻浮提三千の洲の中、兼ては四大海と娑婆世界より、并に十方の諸の有漏の國、及諸の衆生に泊ぶまで、同じく是れ覺明無漏の妙心なり。見聞覺知の虛妄の病緣、和合して妄に生じ、和合して妄に死するなり。若し能く諸の和合の緣と、及び不和合とを遠離すれば、則ち復諸の生死の因を滅除して、菩提不生滅の性を圓滿せん、清淨の本心は本覺常住なり。阿難、汝先づ本覺妙明の性は、因緣に非ず、自然の性に非ずと悟ると雖も、而も猶未だ是の如き覺元は、和合の生及び不和合とに非ざることをも明めず。阿難、吾れ今復前聖を以て汝に問はん、汝今猶一切世間の妄想和合の諸の因緣の性を以て、而も自ら菩提を證する心も和合より起ると疑惑せば、則ち汝今妙淨の見精と明と和すとせんや、暗と和すとせんや、通と和すとせんや、塞と和すとせんや、若し明と和せば、且く汝明を觀るとき、明の現前するに當つて、何の處か見に雜せん、見と相と攝すべし。雜せば何の形像ぞ。若し見るべきに非ずんば云何が明を見ん。若し即ち見るべくんば云何が見を見ん。必らず見圓滿せば、何の處か明に和せん。若し明圓滿せば、合に見和すべからず。見は必らず明に異なり、雜せば則ち彼性と明との名字を失ふ。雜の明と性を失ふことを、明に和するは義に非ず。彼暗と通と及び諸の群塞も亦復是の如し。

復次に阿難、又汝今妙淨の見精は明と合すとせんや、暗と合すとせんや、通と合すとせんや、塞と合すとせんや。若し明と合せば、暗の時に至らば明の相已に滅せん、此見即

【五陰】五蘊の舊譯なり。即ち色、受、想、行、識の五なり。
 【六入】眼、耳、鼻、舌、身、意の六根。
 【十二處】六根、六境とを云ふ。
 【十八界】十二處と眼、耳、鼻、舌、身、の六識とを云ふ。

ち諸暗と合せざりしとき、云何が暗を見ん。若し暗を見る時、暗と合せずとせば、明と合せば應に明を見るに非ざるべし。既に明を見ざれば、云何が明と合するとき、明と暗とに非ずと了せん。彼暗と通と及び諸の群塞とも亦復是の如し。阿難、佛に白して言さく、「世尊、我が思惟するが如くんば、此妙覺元と諸の緣塵と及び心の念慮とは和合に非ざるや。佛言はく「汝今又覺は和合に非ずと言ふ。吾復汝に問はん。此妙覺の精は、和合に非ずとは、明と和するに非ずと爲すや、暗と和するに非ずと爲すや。通と和するに非ずと爲すや、塞と和するに非ずと爲すや。若し明と和するに非ずんば、則ち見と明と必らず邊畔あらん。汝且く諦に觀よ。何の處か是れ明、何の處か是れ見、見に在き明に在いて其何をか畔と爲さん。阿難、若し明際の中に必らず見なくんば、則ち相ひ及ばずして、自ら其明相の所在を知らず、畔云何が成ぜん。彼暗と通と及び諸の群塞も亦復是の如し。又妙覺の精和合に非ずんば、明と合するに非ずとせんや、暗と合するに非ずとせんや、通と合するに非ずとせんや、塞と合するに非ずとせんや。若し明と和するに非ずんば、則ち見と明と性相乖角せること、耳と明との了に相觸れざるが如し。見すら且つ明相の所在を知らず、云何が合と非合との理を甄明せん。彼暗と通と及び諸の群塞も、亦復是の如し。阿難、汝猶ほ未だ一切浮塵の諸の幻化の相は、當處に出生し、隨處に滅盡し、幻妄を相と稱し、其性は眞に妙覺明の體たることを明めず。是の如く乃至五陰六入十二處より十八界に至るまで、因縁和合すれば虚妄に生あり、因縁別離すれば虚妄に滅と名く。

【如來藏】眞如のこと。如來は佛の異名。藏は含攝、出生等と譯す。眞如はよく如來の功德を合攝し衆生の煩惱の爲に隱覆せらるるが故に如來藏と名く。

殊に生滅去來、本如來藏にして、常住妙明不動周圓の妙眞如の性なることを知ることも能はず。性眞常の中には、去來迷悟死生を求むるに了に所得なきなり。阿難、云何が五陰本、如來藏にして妙眞如の性なる。阿難、譬へば人ありて、清淨の目を以て晴明の空を觀るに、唯一の晴虛のみにして、適に所有なきが如し。其人故なく、目睛を動ぜずして瞳つて以て勞を發すれば、則ち虛空に於て別に狂華を見、復一切狂亂の非相あり。色陰も當に知るべし亦復是の如し。阿難、是諸の狂華は、空より來るにも非ず、日より出づるにも非ず。是の如く阿難、若し空より來るとせば、既に空より來らば還つて空より入らん。若し出入あらば即ち虛空に非ず。空若し空に非ずんば、自ら其華相の起滅すること容れず。阿難の體に阿難を容れざるが如し。若し日より出づるとせば、既に日より出でば、還つて日より入るべし。即ち此華の性、日より出づるが故に、當に見ることあるべし。若し見ることありて去つて既に空に華あらば、旋るとき眼に見るべし。若し見ることなくんば出でて既に空に翳す。旋るとき當に目を翳すべし。又華を見るの時、目に翳なかるべしとせば、云何が晴空のとき晴明の眼と號するや。是故に當に知るべし、色陰は虛妄にして、本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、譬へば人ありて、手足宴安に、百骸調適にして、忽ち生を忘れたるが如くにして、性違順なからんに、其人故なくして、一手の掌を以て、空に於て相ひ摩するに、一手の中に於て、妄に澁滑冷熱の諸相を生ずるが如し。受陰も、當に知るべし、亦復是の如し。阿難、是諸の幻觸は、空より來らず、掌よ

【説と類す】
説を指す。

酔の

り出でず。是の如く阿難、若し空より來るとせば、既に能く掌に觸るるに、何ぞ身に觸れざらん。虚空選擇して來り觸るべからず。若し掌より出づるとせば、應に合するところを待つに非ざるべし。又掌より出づるが故に、合するとき則ち掌知らば、離するところも觸入るべし、臂腕骨髄も應に亦入る時の蹤跡を覺知すべし。必らず覺心あり。出づるを知り入るを知らば、自ら一物ありて身中に往來せん。何ぞ合するを待つて知るを、要らず名けて觸とせん。是故に當に知るべし、受陰は虚妄にして本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、譬へば人ありて、醉梅を談説すれば、口中より水出で、懸崖を踏まんことを思へば、足心酸澁するが如し。想陰も、當に知るべし、亦復是の如し。阿難、是の如き酔の説は、梅より生ぜず、口より入るに非ず。是の如く阿難、若し梅より生ずとせば、梅自ら談るべし、何ぞ人の説くを待たん。若し口より入らば、自ら口に聞くべし、何ぞ耳を待つことを須みん。若し獨耳のみ聞かば、此水何ぞ耳の中より而も出でざる。懸崖を踏まんことを想ふ説と相ひ類す。是故に當に知るべし、想陰は虚妄にして、本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、譬へば瀑流の波浪相續して、前後際相ひ踰越せざるが如し。行陰も當に知るべし、亦復是の如し。阿難、是の如き流の性は、空に因つて生ずるにも非ず、水に因つて有るにもあらず。亦水の性にも非ず、空と水とを離れたるにも非ず。是の如く、阿難、若し空に因つて生ぜば、則ち諸の十方無盡の虚空、無盡の流と成りて、世界自然に俱に淪溺を受くべし。若し水に因つて有らば、則ち此瀑流の性、水に非ざるべし、

【須彌餅】類物は
迦陵頻伽、鳥の名
この鳥を模した一
種の瓶なり。

所有の相あらば、今塵に現に在るべし。若し水の性に即すとせば、即ち澄清の時塵に水の體に非ざるべし。若し空と水とを觸るれば、空は外に有るに非ず、水の外に流なし。是故に當に知るべし、行空虛妄にして本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、譬へば人ありて、彌伽餅を取り、其兩の孔を塞ぎ、中に満てて空に擎けて、千里に遠く行きて用ひて他國に餉するが如し。識陰も、當に知るべし、亦復是の如し。阿難、是の如く虚空は、彼方より來るにも非ず、此方にして入るにも非ず。是の如く阿難、若し彼方より來るとせば、則ち本瓶の中に既に空を貯へて去り、本瓶の地に於て塵に虚空を少くべし。若し此方にして入らば、孔を開き瓶を倒して空の出づるを見るべし。是故に當に知るべし、識陰は虚妄にして本因縁に非ず、自然の性に非ず。

首楞嚴經

卷第三

大唐神龍元年龍集乙巳五月己卯朔廿三日辛丑
 中天竺沙門般刺蜜帝廣州制止道場に於て譯出す

【一】本章に於ては六根、六境、六識につき何れも因縁に非ざる、自然の性に非ざるを説く【六入】眼耳鼻舌身意の六根は色聲香味觸法の六境に入るを以て六入と云ふ。【阿難】以下、六入の本來因縁に非ず、自然の性に非ざるを説く。【汝が入に關らん】入は眼入の意。

復次に阿難、云何が六入は本如來藏にして妙眞如の性なる。阿難、即ち彼目暗暝りて勞を發するは、目と勞とを兼ねて、同じく是れ苦提なるに、暝りて勞相を發せり。明暗二種の妄塵に因つて、見を發し中に居して、此塵像を吸るを、名けて見の性と爲す。此見彼明暗の二塵を離るれば、畢竟じて體なし。是の如く阿難、當に知るべし、是見は明暗より來るにも非ず、根より出づるにも非ず、空より生ずるにも非ず。何を以ての故に。若し明より來るとせば、暗には即ち隨つて滅して、暗を見るに非ざればなり。若し暗より來るとせば、明には即ち隨つて滅し、明を見ることなかるべし。若し根より生ぜば、必らず明暗なきとき、是の如き見精は本自性なし。若し空より出づとせば、前まんにには塵像を觸、歸らんに當に根を見るべし。又空自ら觀ば、何ぞ汝が入に關らん。是故に當に知るべし、眼入は虛妄にして、本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、譬へば人ありて、兩手の指を以て、急に其耳を塞ぐに、耳根勞するが故に、頭の中に聲を作すが如し。耳と勞とを兼ねて同じく是れ苦提なるなり、暝りて勞相を發せるなり。動靜二種の妄塵に因て、聞を發し、

【汝が人】 汝が耳
人の意

中に居して、此摩像を吸るを聽聞の性と名く。此聞、彼動靜の二塵を離れては、畢竟して體なし。是の如く阿難、當に知るべし。是聞は動靜より來るにも非ず、根より出づるにも非ず、空より生ずるにも非ず。何を以ての故に。若し靜より來るとせば、動には即ち隨つて滅し、動を聞くに非ざるべく、若し動より來るとせば、靜には即ち隨つて滅し、靜を覺することなかるべく、若し根より生ずるとせば、必らず動靜なきときは、是の如きの聞、體本より自性なきを以てなり。若し空より出づるとせば、聞あらば性と成りて、即ち虚空には非ず。又空自ら聞かば、何ぞ汝が入に聞らん。是故に當に知るべし、耳入は虚妄にして本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、譬へば人ありて、急に其鼻を畜む、畜むこと久くして勞を成せば、則ち鼻の中に於て聞ぐに冷觸ありて、觸に因つて通と塞と實と、是の如く乃至諸香と、臭氣とを分別するが如し。鼻と勞とを兼ねて同じく是菩提なるに、隨つて勞相を發せり。通塞二種の妄塵に因つて、聞を發し中に居して、此摩像を吸るを、嗅聞の性と名く。此聞、彼通塞の二塵を離れては、畢竟して體なし。當に知るべし、此聞、通塞より來るにも非ず、根より出づるにも非ず、空より生ずるにも非ず。何を以ての故に。若し通より來るとせば、塞には則ち聞滅すればなり。云何が塞を知らん。若し塞に因つて有りとせば、通には則ち聞ぐことなかるべし、云何が香臭等の觸を發明せん。若し根より生ずるとせば、必らず通塞なきとき、是の如きの聞の機、本より自性なし。若し空より出づるとせば、是聞、自から當に觸るとき汝が鼻を嗅ぐべし。空自ら聞ぐこと有らば何

【汝が入】 鼻入の

【汝が入】 舌入の

ぞ汝が入に關らん。是故に當に知るべし、鼻入は虚妄にして、本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、譬へば人ありて、舌を以て物を舐り、熱く舐りて勞せしむるとき、其人若し病あらば則ち苦味あり。病なきの人は微か甜觸あり。甜と苦とに由りて、此舌根不動の時、淡性常に在ることを顯すが如し。舌と勞とを兼ねて同じく是れ苦提なるに、瞪りて勞相を發するなり。甜苦と淡との二種の妄塵に因つて、知を發し中に居して、此塵像を吸るを、知味の性と名く。此知味の性、彼甜苦と及び、淡との二塵を離れては、畢竟じて體なし。是の如く、阿難、當に知るべし、是の如く苦淡を、嘗むる知は、甜苦より來るにも非ず、淡に因つて、有なるにも非ず、又根より出づるにも非ず、空より生ずるにも非ず。何を以ての故に。若し甜苦より來るとせば、淡には則ち知滅すべければなり、云何が淡を知らん。若し淡より出づるとせば、甜には則ち知亡すべし、復云何が舐苦の二相を知らん、若し舌より生ずるとせば、必らず甜淡と及び苦塵となきとき、斯知味の根本自性なし。若し空より出づるとせば、虚空自ら味はん、汝が口の知に非ず。又空自ら知らば、何ぞ汝が入に關らん。是故に當に知るべし、舌入は虚妄にして、本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、譬へば人ありて、一の冷手を以て熱手に觸るとき、若し冷の勢多くんば、熱きもの冷に従ひ、若し熱の功勝れば、冷きもの熱と成るが如し。是の如く、此合覺の觸を以て、離の知を顯す。涉勢若し成ずれば、勞に因つて觸す。身と勞とを兼ねて、同じく是れ苦提なるに、瞪りて勞相を發す。離合二種の妄塵に因つて、覺を發し、中に居して、此塵像

【汝が入】 身入の
意

【生住異滅】 これ
を四相と云ふ。萬
物を生滅變化せし
むるものを云ふ。
生は有爲の諸法を
未來より現在に入
らしむるもの、住
はこれを安住せし
むるもの、異は之
を現在に衰損せし
むるもの、滅は之
を現在より過去に
入らしむるものな
り。

を吸るを知覺の性と名く。此知覺の體は、彼離合違順の二塵を離れては、畢竟じて體なし。其の如く、阿難、當に知るべし、是覺は、離合より來るにも非ず、違順より有なるにも非ず、根より出づるにも非ず、又空より生ずるにも非ず。何を以ての故に。若し合する時來るとせば、離には當に已に滅すべし。云何が聲を覺せん。違順の二相も亦復是の如し。若し根より出づるとせば、必らず離合違順の四相なきとき、則ち汝が身知元より自性なし。必らず空より出づるとせば、空自ら知覺すべし、何ぞ汝が入に關らん。是故に當に知るべし、身入は虛妄にして、本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、譬べば人ありて、勞倦すれば則ち眠り、睡り熟すれば便ち寤む、寤を覺て斯に憶す、憶を失するをば忘と爲すが如し。是れ其顛倒の生住異滅を吸習して、中に歸して相踏越せざるを意知根と稱す。意と勞とを兼ねて同じく是れ菩提なるに、暗りて勞相を發す。生滅二種の妄塵に因つて、知を集めの中に居して、内塵を吸擽す。見聞の逆流するに、流の及ばざる地を覺知の性と名く。此覺知の性は、彼寤寐生滅の二塵を離れては畢竟じて體なし。是の如く阿難、當に知るべし、是の如き覺知の根は、寤寐より來るにも非ず、生滅より有なるにも非ず、根より出づるにも非ず、亦空より生ずるにも非ず。何を以ての故に。若し寤寐より來るとせば、寤には即ち隨つて滅すべければなり。何を以てか寐と爲さん。必らず生の時有なりといはば、滅には即ち無に同じ。誰をしてか滅を受けしめん。若し滅に従つて有りとせば、生には即ち滅無かるべし、誰か生を知る者ぞ。若し根より出づるとせば、寤寐の二相、身の閉合に

【汝が入】 意入の

【十二處】 以下六境を論破せるものなり。

隨つて斯二體を離るれば、此覺知は空花に同じく、畢竟して性なし。若し空より生ずとせば、自らは是れ空の知なり、何ぞ汝が入に關らん。是故に當に知るべし、意入は虛妄にして、本因縁に非ず、自然の性に非ず。

復次に阿難、云何が十二處は本如來藏にして妙眞如の性なる。阿難、汝且く此祇陀樹林及び諸の泉池を觀るに、意に於て云何。此等は是れ色より眼見を生ずとせんや、眼より色相を生ずとせんや。阿難、若し復眼根より色相を生ずとせば、空を見るととき色に非ず、色性應に銷すべし、銷せば則ち一切都て無なることを顯發せん。色相既に無ならば、誰か空質を明らめん。空も亦是の如し。若し復色塵より眼見を生ずとせば、空を觀するるとき色に非ず、見即ち銷亡す、亡せば則ち都て無なるべし、誰か空と色とを明らめん。是故に、當に知るべし、見と色空と俱に處所なし。即ち色と見との二處虛妄にして本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、汝更に此祇陀園の中に、食の辨ぜられて、鼓を撃つて衆集まるるとき、鐘を撞き、鐘と鼓との音聲、前後相續するを聽くに、意に於て云何。此等は是れ聲の耳の邊に來るとせんや、耳の聲の處に往くとせんや。阿難、若し復此聲、耳の邊に來るとせば、我室羅筏城に乞食するるとき、祇陀林に在ては、則ち我あることなきが如し。此聲必らず阿難の耳處に來らば、目運迦葉俱に聞かざるべし。何に況んや其中の一千二百五十の沙門、一に鐘聲を聞きて、同じく食處に來らんや。若し復、汝が耳、彼聲の邊に往くとせば、我歸りて祇陀林の中に往くとき、室羅城に在つては則ち我あることなきが如く、汝鼓聲を

【梅檀】梵音チャ
ンダナ (Chandana)
香木の名。

【氣】香氣。

【酥酪醍醐】酥酪は乳を精製したものを、醍醐は酥酪を更に精製せるもの何れも五味の一なり。
【黑石蜜】砂糖の堅き事石に譬ふ。

聞くとき、其耳已に鼓を撃つ處に往き、鐘磬の齊しく出づるをば俱に聞かざるべし。何に況や其中の象馬牛羊の種種の音響をや。若し來往なくんば、亦復聞くことなけん。是故に當に知るべし、聽と音響とは俱に處所なし。即ち聽と響との二處は虚妄にして、本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、汝又此爐中の梅檀を嗅ぐに、此香若し復一鉢を然かば、室羅衛城四十里の内に同時に氣を聞く、意に於て云何。此香復梅檀の木より生ずとせんや、汝が鼻より生ずとせんや。空より生ずとせんや。阿難、若し亦此香汝が鼻より生ずとせば、鼻の所生と稱す、當に鼻より出づべし。鼻は梅檀に非ず、云何が鼻中に梅檀の氣あらん。汝香を聞くと稱す、當に鼻より入るべし。鼻中より香を出して聞くと説くことは、義に非ず。若し空より生せば、空の性は常恆なり、香常在なるべし。何ぞ爐の中に此枯木を蒸くに藉らん。若し木より生ずとせば、則ち此香の質は熱に因つて煙と成る。若し鼻聞くことを得るとも、煙の氣を蒙るべし。其煙は空に騰りて未だ遙遠に及ばず、四十里の内云何が已に聞くや。是故に、當に知るべし、香鼻と聞と、俱に處所なし、即ち嗅と香との二處は虚妄にして、本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、汝常に二時に衆中にして持鉢す、其間或は酥酪醍醐に遇はば、名けて上味となす、意に於て云何。此味、復空中より生ずとせんや。舌中より生ずとせんや、食中より生ずとせんや。阿難、若し復此味、汝が舌より生ずとせば、汝が口中に在て、祇一舌のみ有り、其舌、爾時已に酥味と成る。黑石蜜に遇ふとも推移せざるべし、若し變移せずんば、味を知ると名けじ。若し變移せば、舌多體に非ず。

【善惡無記】身口
 意の三業につき善
 性、惡性、無記性
 の三に分つ。無記性
 性は非善、非惡の
 中間性なり。

云何が多味は、一舌と知らん。若し食より生ぜば、食は識あるに非ず、云何が自ら知らん。又食自ら知らば、即ち他の食するに同じからん。何ぞ汝に預りて味の知と名けん。若し空より生ずとせば、汝虚空を噉はんに、當に何の味をか作すべき。必らず其れ虚空若し鹹味を作さば、既に汝が舌に鹹きとき、亦汝が面をも鹹くせん、則ち此界の人、海魚に同じからん。既に常に鹹を受けば、了に淡を知らず。若し淡を識らずんば、亦鹹を覺らず。必らず知る所なくんば、云何が味と名けん。是故に當に知るべし、味舌と嘗と、俱に處所なし。即ち嘗と味と、二俱に虚妄にして、本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、汝常に晨朝に手を以て頭を摩づ、意に於て云何。此摩でて知る所は、誰をか能觸とする。能は手に在りとせんや、復頭に在りとせんや。若し手に在りとせば、頭は則ち知ることなからん、云何が觸を成ぜん。若し頭に在りとせば、手は則ち用ふることなけん。云何が觸と名けん。若し各各有りとせば、則ち汝阿難二身あるべし。若し頭と手と一觸の所生ならば、則ち手と頭と當に一體なるべし。若し一體ならば觸則ち成ずることなけん。若し二體ならば觸は誰にか在りとせん。能に在らば所に非ず、所に在らば能に非じ、虚空と汝と觸を成ずべからず。是故に當に知るべし、覺觸と身と俱に處所なし。即ち身と觸と二俱に虚妄にして、本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、汝常に意の中に、所縁の善惡無記の三性の法則を生成す。此法は復心に即して生ずる所とせんや、當た心を離れて別に方所ありとせんや。阿難、若し心に即すとせば、法則是塵に非ず心の所縁に非ずんば、云何が處を成ぜん。若

し心を離れて別に方所ありとせば、則ち法の自性は知とせんや、知に非ずとせんや。知なれば則ち心と名けん。汝に異にして處に非ずんば、他の心量に同じからん。汝に即せば即ち心ならん。云何が汝が心、更に汝に二あるん。若し知に非ずんば、此際既に色聲香味、離合冷暖及び虚空の相に非ず。當に何によりてか在るべき。今色と空とに於ても、都て表示すべきもの無けん。人間に更に空の外なるもの有るべからず。心縁する所なくんば、處難に従つてか立せん。是故に當に知るべし、法則と心と俱に處所なし。則ち意と法と、二俱に虚妄にして、本因縁に非ず、自然の性に非ず。

【十八界】 六根、六境、六識なり。界は梵音ダーツ(Dhātu) 層又は因種の義なり、以下十八界につき論破せるものなり。

復次に阿難、云何が十八界は本如来藏にして妙眞如の性なる。阿難、汝が明ある所の眼と色との如くんば、縁と爲つて眼識を生ず。此識復眼の所生なるに因つて、眼を以て界と爲すとせんや、色の所生なるに因つて、色を以て界とせんや。阿難、若し眼に因つて生ずとせば、既に色空なきとき、分別すべきこと無けん。縱ひ汝が識ありとも、何を將てか用ひんと欲する。汝が見又青黄赤白に非ず、表示する所なけん、何に従つて界を立せん。若し色に因つて生ずとせば、空にして色なき時、汝が識滅すべし、云何が是れ虚妄の性なりと識知せん。若し色變する時、汝亦其色相の遷變を識る。汝が識遷らざるば、界何に従つてか立せん。變に従つて則ち變せば、界の相自ら無けん。變せずんば則ち恆なるべし。既に色に従つて生ぜば、虚空の所在を識知せざるべし。若し二種を兼ねて、眼と色と共に生ずとせば、合せば則ち中離すべく、離せば則ち兩つに合して體性雜亂すべし。云何が界

を成ぜん。是故に當に知るべし、眼と色とを縁と爲して、眼識の界を生ずること、三處都
 て無なり。則ち眼と色と及び色界との三は、本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、又汝
 が明むる所の、耳聲を縁と爲して耳識を生ずとせば、此識は復耳の所生なるに因つて、耳
 を以て界となすとせんや。聲の所生なるに因つて、聲を以て界となすとせんや。阿難、若
 し耳に因つて生ずとせば、動靜の二相既に現前せざれば、根、知を成ぜず。必らず所知な
 くんば、知すら尙ほ成ることなし、識何の形貌かあらん。若し耳聞を取るとも、動靜の故
 なくんば、聞に成する所なけん。云何が耳形の色と觸との塵に雜せるを、名けて識の界と
 爲す。則ち識界復誰に従つてか立せん。若し聲より生ずとせば、識は聲に因つて有り、則
 ち聞に關らず。聞なくんば則ち聲相の所在を亡ぜん。識は聲より生ず聲は聞に因つて聲
 の相ありと許さば、聞くときは識をも聞くべし。聞かずんば界に非じ。聞かば則ち聲に同
 じ。識已に聞かれば、誰か識を聞くと知らん。若し知なくんば終に草木の如くならん。聲
 と聞と雜りて中界を成すべからず。界、中位なくんば、則ち内外の相復何に従つてか成ぜ
 ん。是故に當に知るべし、耳聲を縁と爲して、耳識の界を生ずること、三處都て無なり。
 則ち耳と聲と及び聲界との三は、本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、又汝が明むる所
 の、鼻香を縁と爲して鼻識を生ぜば、此識復鼻の所生なるに因つて、鼻を以て界と爲すと
 せんや。香の所生なるに因つて、香を以て界となすとせんや。阿難、若し鼻に因つて生ずとせば、
 則ち汝が心中に何を以てか鼻とせん。肉形雙爪の相を取るとせんや、嗅知動搖の性を取る

【伊蘭】梵香エー
 ランダ(Eraut)樹
 名なり。臭氣強く
 四十由旬の間を薰
 ずると云ふ。

とせんや。若し肉形を取らば、肉質は乃ち身なり、身の知は即ち觸なり。身と名けば鼻に非じ、觸と名けば即ち塵ならん。鼻すら尚ほ名なし、云何が界を立せん。若し嗅知を取らば、又汝が心中に、何を以てか知と爲さん。肉を以て知と爲さば、則ち肉の知は、元より觸にして鼻に非ず。空を以て知と爲すとき、空則ち自知せば、肉は塵に覺に非ざるべし。是の如くならば、則ち塵に虚空是れ汝なるべし、汝が身知るに非ずんば、今日の阿難應に所在なかるべし。香を以て知と爲さば、知自ら香に屬す、何ぞ汝に預からん。若し香臭の氣必らず汝が鼻より生ずとせば、則ち彼香臭二種の流氣、伊蘭及び梅檀の木を生ぜじ。二物來らざるべき、汝自ら鼻を嗅いで香とせんや。鼻ならば則ち香に非ざらん。香ならば塵に臭なかるべし。若し香臭の二俱に能く聞かば則ち塵に汝一人に兩鼻あるべし。我に對して道を問ふとき、二の阿難あらば、誰をか汝が體とせん。若し鼻是れ一ならば、香臭二なかるべし。臭既に香と爲り、香復臭と成らば、二性有ならじ。界誰に從つてか、立せん。若し香に因つて生ずるならば、識、香に因つて有なり。眼に見あれども眼を觀ること能はざるが如く、香に因つて有なるが故に、塵に香を知らざるべし。知らば則ち生に非ず、知らざれば識に非ず。香知の有るに非ずんば、香界成ぜじ。識、香を知らずんば、因界則ち香に從つて建立するに非じ。既に中間なくんば、内外を成せず、彼諸の聞性は畢竟して虚妄なり。是故に當に知るべし、鼻香を緣と爲して鼻識界を生ずる、三處都て無なり、則ち鼻と香と及び香界との三は、本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、又汝が明むる所の、

舌味を縁と爲して舌識を生ぜば、此識、復舌の所生なるに因つて、舌を以て、界と爲すとせんや。味の所生なるに因つて、味を以て界とせんや。阿難、若し舌に因つて生ずとせば、則ち諸の世間の甘蔗、烏梅、黄连、石鹽、細辛、薑桂都て味有ることなきとき、汝自ら舌を嘗めんに、甜しとせんや苦しとせんや。若し舌の性苦しとせば、味自ら生ぜめん。舌自ら嘗めずんば、孰か知覺するものとせん。舌の性苦しとせば、味自ら生ぜじ、云何が界を立せん。若し味に因つて生ずとせば、識自ら味と爲らん。舌根に向くして、自ら嘗めざるべし、云何が是非味を識知せん。又一切の味一物より生ずるに非ず。味既に多より生ず、識も應に多體なるべし。識體若し一にして、體必らず味より生ずば、鹹淡甘辛和合と、俱生と諸の變異との相は、同じく一味と爲つて、應に分別なかるべし。分別既に無くんば、則ち識と名けじ、云何が復舌味識界と名けん。虚空は汝が心識を生ずべからず。舌と味と和合すとせば、即ち是中に於て元より自性なけん。云何が界を生ぜん。是故に當に知るべし、舌味を縁と爲して、舌識界を生ずること、三處は都て無なり、則ち舌と味と及び舌界との三は、本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、又汝が明むる所の、身觸を縁と爲して身識を生ぜば、此識復身の所生なるに因つて、身を以て界と爲すとせんや。觸の所生なるに因つて、觸を以て界とせんや。阿難、若し身に因つて生ずとせば、必らず合離二覺の觀縁なきとき、身何を識る所あらん。若し觸に因つて生ずとせば、必らず汝が身なきとき、誰か身なくして合離を知る者あらん。阿難、物は觸を知らず、身は觸あるこ

とを知る。知あらば身と觸に即せん、知あらば觸も身に即せん。觸に即せば身に非じ、身に即せば觸に非じ。身と觸との二相、元より處所なし。身に合せば、即ち身の身體の性と爲り、身を離せば即ち是れ虚空と等しき相なるべし。内外成ぜずんば、中云何が立せん。中復立せず、内外の性空ならば、則ち汝識の生ずること、誰に從つてか界を立せん。是故に當に知るべし、身觸を縁と爲して、身識界を生ずること、三處都て無なり。則ち身と觸と及び身界との三は、本因縁に非ず、自然の性に非ず。阿難、又汝が明むる所の、意と法とを縁と爲して意識を生せば、此識、復意の所生なるに因つて、意を以て界と爲すとせんや。法の所生なるに因つて、法を以て界とせんや。阿難、若し意に因つて生ずとせば、汝が意の中に於て、必ずす所思あるとき、汝が意を發明せん。若し前の法なきときは、意生ずる所なし。縁を離るれば形すら無し、識將に何の用かあらん。又汝が識心と諸の思量と兼ねて了別の性は、同とせんや、異とせんや。意に同じくば即ち意なるべく、云何が所生ならん。意に異ならば同じからず、應に識る所なかるべし。若し識る所なくんば、云何が意より生ぜん。若し識る所あらば、云何が識といひ意といはん。唯同と異との二性成ずること無くんば、界云何が立せん。若し法に因つて、生ずとせば、世間の諸法は五塵を離れず。汝色法及び諸の聲法香味法及び觸法とを觀ぜよ。相狀分明にして、以て五根に對して、意の所攝に非ず、汝が識決定して、法に依つて生ぜば、今汝諦に觀ぜよ、法の法は何の狀ぞ。若し色空動靜と通塞と合離との生滅を離れて、此諸相を越えれば、終に所得

【二】本章に於ては、四大、五大、六大等の本如來藏にして、生滅なく同體無碍なるを説く。

【四大和合】四大は四大種一切色法を構成する四種の成分にして地水火風の四なり。【中道】有に偏せず空に著ざる非有非空の中道のこと。

【了義】眞實義を明了に顯すこと。【無戲論】謬見に非ざるもの。

【第一義諦】眞諦のこと。諦は諸理動かすべからざる理性、即ち眞理のこと。【彼の大】大は四大のこと。

なけん。生は則ち色空の諸法等の生なり、滅は則ち色空の諸法等の滅なり。所因すら既に無なり、生に因つて識ありとせば、何の形相をか作す。相狀有ならずんば、界云何が生ぜん。是故に當に知るべし、意と法とを緣と爲して、意識界を生ずること、三處都て無なり、則ち意と法と及び境界との三は、本因緣に非ず、自然の性に非ず。阿難、佛に白して言さく、『世尊、如來常に説きたまはく、『和合の因緣、一切世間の種種の變化は、皆四大和合に因つて發明す』と。云何が如來は因緣自然二俱に排擯したまふや。我今斯義の屬する所を知らず。唯哀愍を垂れて、衆生に中道了義無戲論の法を開示したまへ。』

爾時、世尊、阿難に告げて言はく、『汝、先に聲聞緣覺諸の小乘の法を厭離して、發心して無上菩提を勤め求むるが故に、我今時汝が爲に第一義諦を開示す。如何が復世間の戲論妄想の因緣を將て、而も自ら纏繞せるや。汝多聞なりと雖も、藥を説く人の眞藥現前するを、分別すること能はざるが如し。如來説いて眞に憐愍すべしと爲す。汝今諦に聽け、吾當に汝が爲に分別開示して、亦當來の大乗を修せん者をして、實相に通達せしむべし。』阿難、默然として佛の聖旨を承く。

『阿難、汝が言ふ所の如く、四大和合して世間の種種の變化を發明すとせば、阿難、若し彼大の性體和合に非ずんば、則ち諸大と雜和すること能はざること、猶し虚空の諸色に和せざるが如くならん。若し和合せば變化に同じて、始終相成し、生滅相續せん。生じて

【旋火輪】 生滅相續の譬なり。

【陽燄】 火打ち石のこ。

【婆羅門種】 印度四姓の最高位の種族。

【優盧頻螺】 梵音ウルヰルヰー(二、三、ニ、ハ、)

【迦葉波】 梵音カースユヤバ(ア、シ、カ、)

【瞿曇】 梵音ゴータマ(Tama)地最勝と譯す。釋迦一族の姓。

【瞿曇】 梵音ゴータマ(Tama)地最勝と譯す。釋迦一族の姓。

は死し、死しては生じ、生生死死すること旋火輪の如く、未だ休息すること有らじ。阿難、水の氷と成り、氷の還つて水と成るが如くならん。汝地の性を觀よ、龜をば大地と爲し、細をば微塵と爲し、隣虛塵に至る。彼極微の色の邊際、相を折いて、七分に成せられたり。更に隣虛を折けば、即ち實に空の性なり。阿難、若し此隣虛を折いて虚空と成すとせば、當に知るべし、虚空よりも色相を出生すべし。汝今問うて、和合に由るが故に、世間の諸の變化の相を出生すと有り。汝且く此一の隣虚塵を觀よ、幾くの虚空を用ひて和合してか、而も有る、隣虚を以て合して隣虚と成す。又隣虚塵を折いて、空に入るとせば、幾の色相を用ひてか、合して虚空を成せん。若し色合せん時、色を合せば、空に非じ。若し空合せん時、空を合せば色に非じ。色をば猶ほ初くべし、空云何が合せん。汝元より如來藏中の性色、眞空、性空、眞色は、清淨本然にして法界に周遍し、衆生の心に隨ひ所知の量に應じ、業に循つて發現すといふことを知らず。世間の無知のものは、惑うて因縁及び自然の性と爲す。皆是れ識心の分別計度なり。但言説のみ有つて、都て實義なし、阿難、火性は我なし、諸縁に寄れり。汝觀よ、城中の未だ食せざるの家に、炊爨せんと欲する時、手に陽燄を執つて日の前に火を求むることを。阿難、和合と名けば、我と汝と一千二百五十の比丘の如きを今一業と爲す。業は一たりと雖も、其根本を詰むるに各各身ありて皆所生の氏族名字あり。舍利弗は婆羅門種、優盧頻螺は迦葉波種、乃至、阿難は瞿曇種姓なるが如し。阿難、若し此火性、和合に因つて有りとせば、彼手に鏡を執り、

【方珠】水を出す玉の名なり。

【斫迦羅】梵語(Kṛti)鉢頭摩(梵音:Padma)

日に於て火を求むるとき、此火は鏡中より出づるとせんや、艾より出づるとせんや。日より來るとせんや。阿難、若し日より來るとせば、自ら能く汝が手中の艾を燒くのみならんや、來る處の林木皆應に焚を受くべし。若し鏡の中より出づるとせば、自ら能く鏡より出でて艾を然く、鏡何ぞ銚けざる。汝が手に紆て執るすら尙ほ熱相なし、云何が融洋せん。若し艾より生ずとせば、何ぞ日と鏡との光明相接せるに藉りて、然して後火生ぜんや。汝又諦かに觀ぜよ、鏡は手に因つて執り、日は天より來り、艾は本地より生ず。火何の方よりか此に遊歴する。日と鏡と相遠くして、和に非ず合に非ず。應に火光從うることなくして自ら有るべからず。汝猶ほ如來藏の中の性火真空、性空眞火は、清淨本然にして、法界に周遍し、衆生の心に隨ひ、所知の量に應ずることを知らず。阿難、當に知るべし、世人一處に鏡を執れば、一處に火生じ、法界に遍くして執れば、世間に滿ちて起るべし。起つて世間に遍せば、寧ろ方所あらんや。業に循つて發現せん。世間の無知のもの、惑うて因縁及び自然の性と爲す。皆是れ識心の分別計度なり、但言説のみ有りて、都て實義なし。阿難、水性は不定にして、流息恒あることなし。室羅城の迦毘羅仙、斫迦羅仙、及び鉢頭摩、阿薩多等の諸の大幻師、大陰の精を求めて、用ひて幻藥を和するが如き、是諸師等、白月の晝に於て、手に方諸を執つて月中の水を承く。此水復珠の中より出づるとせんや、空中に自から有りとせんや、月より來るとせんや。阿難、若し月より來るとせば、尙ほ能く遠方より珠をして水を出さしめん、經る所の林木皆流を吐くべし。流せば則ち何ぞ方珠の出

づとせば、則ち土の出づる時、塵に空の入るを見るべし。若し土は先に出て、空の入ること無くんば、云何が虚空は土に因つて出でん。若し出入なくんば、則ち空と土と元より異因なかるべし。異なくして則ち同ならば則ち土の出づる時、空何ぞ出でざる。若し塵に因つて出づるとせば則ち塵りて空を出す時、塵に土を出すに非ざるべし。塵るに因つて出づるに非ずんば、塵りて自ら土を出すとき、云何が空を見るや。汝更に審諦に諦審にして諦に觀よ。塵ることは人の手に従り、方に隨つて運轉す。土は地の移るに因れり。是の如きの虚空、何に因てか出づる所あらん。塵と空と虚と實とにして、用を相爲さざれば、和に非ず合に非ず、虚空従ること無くして自ら出づべからず。此の如きの虚空、性圓周遍にして木より動搖せず。當に知るべし、現前の地水火風を均く五大と名けて、性眞圓融せり、皆如来藏にして木より生滅なし。阿難、汝が心昏迷にして、四大元より如来藏なることを悟らず。當に觀すべし、虚空は出とせんや入とせんや、出入に非ずとせんや。汝、全、く如来藏中の性覺真空、性空、眞覺は、清淨本然にして、法界に周遍し、衆生の心に隨ひ、所知の量に應ずることを知らず。阿難、一井の空なる時、空の一井に生ずるが如く、十方の虚空も亦復是の如し、十方に圓滿せり。寧ぞ方所あらんや、業に循つて發現せん。世間の無知のもの、惑うて因縁及び自然の性と爲す。皆是れ識心の分別計度なり、但言説のみ有りて、都て實義なし。阿難、見覺は知なし、色空に因つて有なり。汝今祇陀林に在りて、朝には明に夕には昏し、設ひ中宵に居るとも、白月には則ち光ありて、黒月には

便ち暗きが如き、則ち明暗等は、見に因つて分析す。此見は復明暗の相と并に大虚空と、同一體と爲んや、一體に非ずと爲んや、或は同なるや同に非ざるや、或は異なるや異に非ざるや、阿難、此見若し復明と暗と及び虚空と、元より一體なりとせば、則ち明と暗と二體相に亡じて、暗の時明なく、明の時暗なし。若し暗と一ならば、明には則ち見亡せん。必らず明に一ならば、暗の時は當に滅すべし、滅せば則ち云何が明を見暗を見ん。若し明暗は殊なれども、見に生滅なくば、一云何が成ぜん。若し此見精、暗と明と一體に非ずとせば、汝明暗及び虚空を離れて、見の元を分析せよ、何の形相をか作せる。明を離れ、暗を離れ、及び虚空を離れば、是見の元、龜毛、兔角に同じ、明と暗と虚空と、三事俱に異なり、何に従りてか見を立せん。明暗相に背けり、云何が同きことあらん。三を離れては元無し、云何が異なることあらん。空を分ち見を分つに本より邊畔なし、云何が非同ならん、暗を見明を見る、性遷改に非ず、云何が非異ならん。汝更に細審にして微細に審詳し、審諦に審觀せよ、明は太陽に隨ひ、暗は黒月に隨ひ、通は虚空に屬し、雍は大地に歸す。是の如きの見精は、何に因つてか出づる所ぞ。見は覺にして空は頑なり、和に非ず、空に非ず、見精従ることなくして、自ら出づべからず。此の若きの見聞知、性圓周遍して、本より動搖せず。當に知るべし、無邊の不動の虚空と、并に其動搖の地水火風とを、巧く六大と名け、性眞圓融せり。皆如來藏にして本より生滅なし。阿難、汝が性沈淪して、汝の見聞覺知、本より如來藏なることを悟らず。汝當に此見聞覺知を觀すべし。生と爲んや、滅と爲

【十虛】十方、虛空の義なり。

んや、同と爲んや、異と爲んや、生滅に非ずと爲んや、同異に非ずとや爲ん。汝曾ち如来藏中の性見覺明、覺精明見は、清淨本然にして、法界に周遍し、衆生の心に随つて、所知の量に應ずることを知らず。一の見根の見、法界に周遍し、衆生の心に隨つて、と覺知とも、妙徳罄然として、法界に週周し、十虚圓滿せり。寧ろ方所あらんや、業に循つて發現せん。世間の無知のもの、惑うて因縁及び自然の性と爲す。皆是れ識心分別の計度なり、但言説のみ有つて、都て實義なし。阿難、識性は源なく、六種の根塵に因つて妄に出づ。汝今遍く此會の聖衆を觀よ。目を用て循歷するに、其目周く視るも、但鏡中に別の分析なきが如し。汝が識中に於て、次第に此は是れ文殊、是は富樓那、此は目捷連、此は須菩提、此は舍利弗と標指せん。此識の了知は、見より生ずと爲んや、相より生ずとせんや、虚空より生ずとせんや、所因なくして突然として出づるとせんや。阿難、若し汝が識性、見の中より生ずとせば、如し明暗及び色空なくして、四種必らず元なきとき、汝が見なし、見性すら尙言無なり、何に從つてか識を發せん。若し汝が識性、相の中より生じて、見より生ぜずとせば、既に明を見ざれば亦暗を見じ。明暗曠ざれば、即ち色空なけん。彼相すら尙ほ無なり、識何に從つてか發せん。若し空より生ぜば、相に非ず見に非ず。見に非ずんば辨することなけん。自ら明暗色空を知ること能はじ。相に非ずんば縁を滅す。見聞覺知安立する處なけん。此二非に處して空ならば、則ち無に同じ、有ならば、物に同するに非ざらんか。縦ひ汝が識を發するとも、何をか分別せんと欲する。若し所因

なくして、突然として出づとせば、何ぞ日中に別に明月を識らざる。汝更に細詳し、微細に詳審すべし。見は汝が晴に託し、相は前の境に推つる。状あるときは有と成り、相あらざれば無と成る。是の如きの識縁、何に因つてか出づる所ありや。識は動き見は澄めり、和に非ず合に非ず。聞聽覺知も亦復是の如し。識縁従ること無くして自ら出づべからず。此の若きの識心は、本より所従なし。當に知るべし、了別の見聞覺知も、圓滿湛然として、性従所に非ず、彼虚空地水火風を兼ねて、均しく七大と名け、性眞圓融せり、皆是れ如來藏にして、本生滅なし。阿難、汝が心塵浮にして、見聞の發明せる了知は、本如來藏なることを悟らず。汝應に此六處の識心を觀すべし。同と爲んや異と爲んや、空と爲んや有と爲んや、同異に非ずと爲んや、空有に非ずと爲んや。汝元如來藏中の性識明知、覺明眞識は、妙覺湛然として、法界に遍周し、十虚を含吐することを知らず、寧ぞ方所あらんや、業に循つて發現せん。世間の無知のもの、惑うて因縁及び自然の性と爲す。皆是れ識心の分別計度なり、但言説のみ有りて、都て實義なし。」

爾時、阿難及び諸の大衆、佛如來の微妙の開示を蒙りて、身心蕩然として罣礙なきことを得たり。是諸の大衆、各自自ら心十方に遍せることを知つて、十方の空を見ること、手中の所持の葉物を觀るが如し。一切世間の諸の所有の物、皆即ち菩提妙明の元心なり、心精遍圓にして、十方を含裏す。父母所生の身を反觀するに、猶し彼十方虚空の中に、一微塵を吹くがごとし。存するが若く亡するが若し。湛たる巨海に一の浮漚を流すが如くに

して、起滅從ふことなし。了然として自ら知つて、妙本心常住不滅なることを獲たり。佛を禮し合掌し、未曾有なることを得て、如來の前に於て、偈を説いて佛を禮じたてまつる。

妙湛と總持と不動尊と、首楞嚴王とは世に希有なり

我が億劫顛倒の想を銷して、僧祇を歷ずして法身を獲した

願くば今果を得て寶玉と成りて、遷つて是の如きの沙恆の衆を度せん

此深心を將て摩訶に奉せん、是を則ち名けて佛恩を報ずと爲す

伏して請ふ世尊證明を爲したまへ、五濁惡世に誓つて先づ入らん

如し一衆生も未だ成佛せずば、終に此に於て泥洹を取らず

大雄大力大慈悲、希くば更に微細の惑を審除して

我をして早く無上覺に登つて、十方界に於て道場に坐せしめたまへ

舜若多の性は銷亡すべくとも、爍迦羅は必ず動轉すること無けん

【僧祇】阿僧祇の略。梵音アサンクヤ (Asankhya) 無數、無史數と譯す。印度の數名となり。前出。
【沙恆】恆沙のことなり。前出。
【塵刹】刹は前出。國土の義。無數の國土の義。
【五濁惡世】劫、見、煩惱、衆生、命の五惡の世界。前出。
【泥洹】涅槃に同じ。前出。
【舜若多】梵音ンエーヌヤター (Sūryata) 空無の性なり。
【爍迦羅】梵音ンヤクラ (Śakra) 金剛心なり。

首楞嚴經 卷第四

大唐神龍元年龍集乙巳五月己卯朔廿三日辛丑
中天竺沙門般刺蜜帝廣州制止道場に於て譯出す

【一】本章に於ては三相續の因縁を明にし、如來藏の本性を明す。
【富樓那彌多羅尼子】佛十大弟子の一。(Yurumatra)

【第一義諦】前出

【習漏】煩惱のこと。

爾時、富樓那彌多羅尼子、大衆の中に在りて、即ち座より起ちて、偏に右の肩を袒ぬぎ、右の膝を地に著け、合掌恭敬して、佛に白して言さく、『大威徳世尊は、善く衆生の爲に、如來の第一義諦を敷演したまへり。世尊は常に説法の人中に推して、我を第一と爲したまふ。今如來微妙の法音を聞くこと、猶し聾人の百歩の外に逾へて、蚊蚋を聆くが如く、木見ざる所なり、何に況や聞くことを得んや。佛宣明して我をして惑を除かしむと雖も、今猶ほ未だ斯義の究竟して疑惑なき地を詳にせず。世尊、阿難の輩の如きは、則ち開悟すと雖も、習漏未だ除かず。我等會中の無漏に登れる者、諸漏を盡すと雖も、今如來の所説の法音を聞きて、尙疑悔に紆る。世尊、若し復世間の一切根塵陰處境界等、皆如來藏にして、清淨本然ならば、云何が忽に山河大地諸の有爲の相を生じて、次第に遷流して、終つて復始まるや。又如來、地水火風、木性圓融し、法界に周遍して、湛然常住なりと説きたまふ。世尊、若し地性遍せば、云何が水を容れん。水性周遍せば、火は則ち生ぜじ。復云何が水火の二性、俱に虚空に遍して相ひ陵滅せざることを明らめん。世尊、地性は障

【漏盡】煩惱を斷じつくして少しも色香に著することなきもの。

【勝義】眞理のこと。

【定性の聲聞】ただ煩惱障を斷じて、我空の理を證し、自乘の極果たる阿羅漢果を證し、決定して佛果に至らざるもの。

【二空】人空（我空、生空とも云ふ）法空の二空。

【一乘寂滅場地】

一乘は權大乘の三乘、各別の法に對して實大乘の一切衆生を成佛せしむる法のこと。寂滅場は涅槃の境界なり。

【阿練若】阿蘭若とも云ふ。梵音。アーラヌヤ(Araṇya)

礙し、空性は虚通す、云何が二俱に法界に周遍せん。而も我是義の往く伎を知らず。唯願くば、如來、大慈を宣流して、我が迷雲を開きて、諸の大衆に及ぼしたまへ。是語を作し已りて、五體を地に投じて、如來の無上の慈誨を欽渴したてまつる。

爾時に世尊、富樓那及び諸の會中の、漏盡の無學、諸の阿羅漢に告げたまはく、如來今日普く此會の爲に、勝義の中の、眞の勝義の性を宣べて、汝が會中の定性の聲聞、及び諸の一切の未だ二空を得ざる、廻向上乘の阿羅漢をして、皆一乘寂滅場地、眞

の阿練若、正修行の處を獲しめん。汝今諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。富樓那等、佛の法音を欽みて、默然として承り聽く。佛言はく、「富樓那、汝が言ふ所の如く、清淨本然ならば云何が忽に山河大地を生ずる。汝常に如來の性覺は妙明なり、本覺は明妙なり」と宣説したまふを聞かずや。富樓那言さく、「唯然り、世尊。我常に佛の

斯義を宣説したまふを聞けり。佛言はく、「汝覺明と稱するは、復性の明なるを稱名して、覺と爲すとせんや、覺は明ならざれども、稱して明覺と爲すとせんや。富樓那言さく、「若し此れ明ならざれども、名けて覺と爲さば、則ち所明なからん。佛言はく、「若し

所明なくんば、則ち明覺なしとせば、所あらば覺に非じ。所なくば明に非すとせば、明なくんば又覺湛明性に非じ。性覺は必らず明なり、妄に明覺と爲へり。覺は所明に非ざれども、明に因つて所を立す。所既に妄に立すれば、汝が妄能を生じ、異同なき中に、熾然

として異を成す。彼所異に異なりて、異に因つて同を立す。同異發明すれば、此に因つて

遠離所、閑靜處と譯す。比丘の修行に適する閑寂の地。
【所あらば】所は能所なり。以下世界相續の因縁の説明なり。

【富樓那】以下衆生相續の因縁を述ぶ。

【羯羅藍】梵音。カララ (Kāra) 凝骨と譯す。胎内五位の一。託胎後初七日間の位。

復無同無意を立す。是の如く擾亂し、相待して勞を生ず。勞すること久しければ、塵を發して、自ら相ひ渾濁す。是に由りて塵勞煩惱を引き起す。起は世界と爲り、靜は虚空と成る。虚空を同と爲し、世界を異と爲す。彼異同なきは、眞の有爲の法なり。覺明と空昧と、相待して搖を成す。故に風輪ありて世界を執持す。空に因つて搖を生じ、明を堅して礎を立す。彼金寶は、明覺に堅を立す。故に金輪ありて國土を保持す。覺を堅して寶成じ、明を搖して風出づ、風金相ひ摩するが故に、火光ありて變化の性と爲る。寶明、潤を生じ、火光上、蒸す、故に水輪ありて十方界を含む。火は騰り水は降りて、交に發して堅を立す。濕へるは亘海と爲り、乾けるは洲潭と爲る、是義を以ての故に、彼大海の中にも、火光常に起れり、彼の洲潭の中にも、江河常に注ぐ、水の勢、火よりも劣なるときは、結して高山と爲る。是故に山石は、撃つときは則ち炎と成り、融くるときは水と成る。土の勢、水よりも劣なるときは、抽んで草木と爲る。是故に林藪は、燒くに遇へば土と成り、絞るに因つて水と成る。交妄發生して速に相種と爲る、是因縁を以て世界相續す。

復次に富樓那、妄を明すことは他に非ず、覺明答を爲せり。所妄既に立すれば、明理踏えず。是因縁を以て、聽くこと聲を出でず、見ること色を超えず、色香味觸の六妄成就す。是に由つて見覺聞知を分開す。同業相纏ひ、合離化を成す。見の明より色を發し、明の見より想を成す、見に異れば憎を成じ、想に同すれば愛を成す。愛を流して種と爲し、想を納れて胎と爲し、交違發生して同業を吸引す。故に因縁ありて、羯羅藍、遏蒲曇等を生ず。

【過蒲曇】梵音アルプダ (Arbuda) 皰、腫物と譯す。託胎後第二の七日間なり。
 【富樓那……】以下生死の因縁相續を明す。

胎卵濕化は、其所應に隨ふ。卵は唯想より生じ、胎は情に因つて有り、濕は合を以て感じ、化は離を以て應ず。情想合離は、更相に變易し、所有の受業は、其飛沈を遂ふ。是因縁を以て衆生相續す。富樓那、想愛同じく結び、愛離ること能はざれば、即ち諸の世間の父母子孫、相生じて斷えず。是等は則ち欲食を以て本と爲す。貪愛同滋にして、食止むこと能はざれば、則ち諸の世間の卵化濕胎、力の強弱に隨つて、遲に相吞食す。是等は則ち殺食を以て本と爲す。人の羊を食するを以て、羊死して人と爲り、人死して羊と爲る、是の如く乃至十生の類、死死生生、互に來りて相噉ひ、惡業俱に生じて、未來際を窮む。是等は則ち蓋食を以て本と爲す。汝我が命を負ひ我債を汝に還す。汝是因縁を以て、百千劫を經とも、常に生死に在り。汝我が心を愛すれば、我汝が色を愛す。是因縁を以て、百千劫を經とも、常に纏縛に在るは、唯殺盜淫の三を根本と爲す。是因縁を以て、業果相續するなり。富樓那、是の如く、三種の顛倒相續することは、皆是れ覺明明了知性なり。了に因つて相を發し、妄見に従つて山河大地 諸の有爲の相を生ず、次第に遷流すること、此虚妄に因つて、終りて復始まる。富樓那言さく、「若し此妙覺本妙の覺明と、如來の心と不増不減なれども、狀なくして忽ち山河大地、諸の有爲の相を生ぜば、如來は今妙空明覺を得たまへり、山河大地有爲の習漏、何のときか復當に生ずべきや。佛、富樓那に告げたまはく、「譬へば迷へる人の、一の聚落に於て、南を惑ひて北と爲すか如し。此迷は復迷に因つて有り」と爲んや、悟に因りて出づる所なり。富樓那言さく、「是の如きの迷へる人

【昔は本迷なし…】
昔はもと迷なけれど、
も、今は迷と覺とあるが如しの意

亦迷にも因らず又悟にも因らず。何を以ての故に。迷は本より根なし云何が迷に因らん。
悟は迷を生ずるに非ず、云何が悟に因らん。佛言はく、「彼迷へる人、正しく迷に在る時、
倏ち悟れる人ありて、指示して悟らしむるに、富樓那、意に於て云何。此人迷を繼にして、
此聚落に於て更に迷を生ずるや不や。」「不、世尊。」「富樓那、十方の如來も亦復是の如し。
此迷は本なし、性は畢竟じて空なり。昔は本迷なし、迷と覺と有るに似たり。迷を覺すれ
ば迷滅す、覺は迷を生ぜず。亦翳人の空中の華を見るが如し。翳病若し除かば、華は空に
於て滅せん。忽に愚人ありて、彼空花の滅する所の空地に於て、花の更に生ぜんことを待
たんに、汝是人を觀て、愚と爲んや慧と爲んや。富樓那言さく、「空には元華なし、妄に生
滅を見る、華の空に滅するを見る、已に是れ顛倒なり。勅して更に出ださしむる、是れ實
に狂癡なり。云何が更に是の如きの狂人を、名けて愚と爲んや慧と爲んや。佛言はく、「汝
が解する所の如くんば、云何が問うて、諸佛如來の妙覺明空、何れのとしか當に更に山河
大地を出すべきと言はんや。又金鑽の精金に雜るに、其金純一なれば、更に雜と成らざる
が如く、木の灰と成れば、重ねて木と成らざるが如し。諸佛如來の菩提涅槃も亦復是の如
し。富樓那、又汝問うて言へ、地水火風は、本性圓融にして、法界に周遍し、水火の性相
陵滅せざることを疑ひ、又虚空及び諸の大地、俱に法界に遍せば相容るべからずと徵
せり。富樓那、譬へば虚空の體は群相に非ざれども、而も彼諸相の發揮するを拒まざるが
如し。所以は何となれば、富樓那、彼大虚空は、日の照すときは則ち明かに、雲の屯ると

きは則ち暗し。風の搖くときは則ち動じ、霧の澄るときは則ち清し。氣の凝るときは則ち濁り、土積れば霧を成し、水澄めば映を成す。意に於て云何、是の如きの殊方、諸の有爲の相は、彼に因つて生ずと爲んや、復空に有りと爲んや、若し彼所生ならば、富樓那、日く日の照らす時、既に是れ日の明なり、十方世界同じく日の色を爲すべし、云何が空中に更に圓日を見るや。若し是れ空の明ならば、空自ら照らすべし、云何が中宵と雲霧の時には光耀を生ぜざる。當に知るべし、是明は日にも非ず、空にも非ず、空日に異なるにあらず。相を觀するに元妄にして、指陳すべきもの無し。猶し空華の結んで空果と爲らんことを邀つがごとし。云何が其相陵滅するの義を詰めん。性を觀するに元眞にして、唯妙覺明なり。妙覺明の心は先より水火に非ず、云何が復相容れざる者なりと問はん。眞の妙覺明も亦復是の如し。汝空を以て明さば、則ち空現することあり、地水火風各々に發明すれば、則ち各々に現す、若し俱に發明すれば、則ち俱に現することあり。云何が俱に現する。富樓那、一水の中に日の影を現するに、兩人同じく水中の目を觀て、東西に各行くとき、則ち各日ありて二人に隨つて去るが如し。一は東一は西、先より準的なし。塵に難じて、此日是一なり、云何が各行くに各日既に雙びて、云何が一を現する」と言ふべからず。宛轉虚妄にして憑據すべきものなし。富樓那、汝色空を以て、如來藏を相傾け相奪へば、而も如來藏は隨つて色空と爲りて、法界に周遍す。是故に中に於て、風は動き空は澄み、日は明、に雲は暗し、衆生迷悶して、覺に背きて塵に合す、故に塵勞を發して世間の相あるなり。

【是故に中に於て】
 是故に眞覺の中に於ての意。

【如來藏の本妙圓心……】以下七大名相、十八界を論明するもの。
 【明、無明】縁覺の十二因縁とは、無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死なり。
 【苦に非ず……】以下聲聞の四諦。
 【檀那】梵音ダーナ(Dana)布施と譯す、六度の一。六度は六波羅蜜、梵音パーラミター(Pāramitā) 度到彼岸と譯す。菩薩の修する行にてこれに檀那(布施)尸羅(持戒) 羼提(忍辱) 毘梨耶(精進) 禪那(靜慮) 般若(智慧)の六あり。

我妙明の不滅不生を以て、如來藏に合す。而も如來藏は唯妙覺明にして、法界を圓照す。是故に中に於て、一を無量と爲し、無量を一と爲す。小の中に大を現じ、大の中に小を現す。道場を動ぜずして十方界に遍す。身に十方無盡の虚空を含んで、一毛端に於て寶王刹を現じ、微塵裏に坐して大法輪を轉す。塵を滅して覺に合す、故に眞如妙覺明の性を發す。而も如來藏の本妙圓心は、心に非ず空に非ず、地に非ず水に非ず、風に非ず火に非ず、眼に非ず耳鼻舌身意に非ず、色に非ず聲香味觸法に非ず、眼識界に非ず、是の如く乃至意識界に非ず。明と無明と、明と無明の盡くるにも非ず、是の如く乃至老に非ず、死に非ず、老死の盡くるにも非ず。苦に非ず集に非ず、滅に非ず道に非ず、智に非ず得に非ず。檀那に非ず、尸羅に非ず、毘梨耶に非ず、羼提到に非ず、禪那に非ず、般若刺若に非ず、波羅蜜多に非ず、是の如く乃至恒闍阿竭に非ず、阿羅訶、三耶三善に非ず。大涅槃に非ず、常に非ず樂に非ず、我に非ず淨に非ず。是れ俱に世出世に非ざるを以ての故に。即ち如來藏元明の心妙、心に即し空に即し、地に即し水に即し、風に即し火に即す。眼に即し耳鼻舌身意に即す。色に即し聲香味觸法に即す。眼識界に即して、是の如く乃至意識界に即す。明無明、明無明盡に即し、是の如く乃至老に即し、死に即し、老死盡に即す。苦に即し集に即し、滅に即し道に即し、智に即し得に即す、檀那に即し、尸羅に即し、毘梨耶に即し、羼提到に即し、禪那に即し、鉢刺若に即し、波羅蜜多に即す。是の如く乃至恒闍阿竭に即し、阿羅訶三耶三善に即す。大涅槃に即し、常に即し樂に即し、我に即し淨に即す。是れ俱に

【恒闍阿竭】 恒闍

阿伽度、又は多陀

阿伽度、梵音タト

ハーケタ (Taha)

如(じ)如来と譯す。

如(じ)は眞如、眞如よ

り來生せるものを

如來と云ふ。

【阿羅訶】 阿羅漢

に同じ。應供と譯

す。世間の供養を

受くるに堪へたる

聖者。

【三耶三善】 三藐

三菩提、正等覺と

譯す。佛のさとり

なり。

【大涅槃】 涅槃は

前出。

【三有】 欲界、色

界、無色界の三界

のこと。有は因果

空しからずして存

在する義。

【海印】 佛智大海

の風波靜なる時に

天體萬象悉く海面

に印映する如く、

煩惱の中滅せる佛

の心の止滅せる佛

諸法炳然として現

はるること。

世出世に即するを以ての故に。即ち如來藏妙明の心元は、卽を離れ非を離れ、是卽非卽な

り。如何が世間の三有の衆生、及び出世間の聲聞緣覺、所知の心を以て、如來の無上菩提

を測度し、世の言語を用て佛の知見に入らん。譬へば琴瑟箏篋琵琶の妙音ありと雖も、若

し妙指なくんば、終に發することを能はざるが如し。汝と衆生も亦復是の如し。寶覺の眞

心は、各圓滿せり。我が指を按ずるが如きは、海印光を發す、汝暫くも心を擧ぐれば、

塵勞先づ起る。勤めて無上覺道を求めずして、小乘を愛念して、少を得て足れりと爲すに

由れり。富樓那言さく、『我と如來と、寶覺圓明眞妙の淨心は、無二にして圓滿せり。而も

我は昔より無始の妄想に遭うて、久しく輪廻に在り、今聖果を得たれども、猶ほ未だ究竟

せず。世尊は諸妄一切圓に滅して、獨妙眞常なり。敢て如來に問ひたてまつる。一切衆生

何に因つてか妄ありて、自ら妙明を蔽うて、是淪溺を受けたるや。佛、富樓那に告げたま

はく、『汝疑を除くと雖も、餘惑未だ盡きず。吾世間の現前の諸事を以て、今復汝に問は

ん。汝豈に聞かざらんや、室羅城中、演若達多忽に晨朝に於て、鏡を以て面を照らし、

鏡中の頭の眉目見るべきことを愛するに、己が頭を面を見ざることを噴責して、以て魘

魅なりと爲し、狀なくして狂走するに、意に於て云何、此人何に因つてか故なくして狂走

する。富樓那言さく、『是人は心狂せり、更に他の故なし。』佛言はく、『妙覺明圓にして

本圓明妙なり。既に稱して妄と爲す、云何が因あらん。若し所因あらば、云何が妄と名

けん。自ら諸の妄想展轉して相因り、迷より迷を積んで、以て塵劫を歴るなり。佛は發

【演若達多】人名。

【如意珠】如意寶珠。梵名、眞多摩尼(Cinta Mani)意のままに種種の珍寶を出す故に如意寶珠又は如意珠と云ふ。
【一】本章に於ては二種の修法を示し専修すべき事を教ふ。
【心中の達多】達多は演若達多なり

明したまふと雖も、猶ほ是の如きの迷因に返すこと能はず。迷に因つて自ら有り、迷の因なきことを識らば、妄に所依なし。尚ほ生あること無し、何をか滅と爲さんと欲する。菩提を得る者は、寤めたる時の人の夢中の事を説くが如し。心には縦ひ精明なりとも、何の因縁をもつてか夢中の物を取らんと欲せん。況や復因なく本より所有なきをや。彼城中の演若達多の如き、豈に因縁あらんや。自ら頭を怖れて走れる、忽然として狂歌まば、頭は外より得るに非ず。縦ひ未だ狂を歇めずとも、亦何ぞ遺失せん。富樓那、妄の性も是の如し。何に因つてか在りと爲ん。汝但隨つて世間と業果と衆生との三種の相續を分別せざれ、三緣斷するが故に三因生ぜず。則ち汝が心中の演若達多が狂性自ら歇まん。歇まば則ち菩提なり。勝淨明心は本より法界に周し、人に従つて得るにあらず、何ぞ劬勞を藉つて、修證に肯綮せん。譬へば人あり、自らの衣の中に於て、如意珠を懸けて自ら覺知せず、彼方に窮露して乞食馳走するが如し。實に貧窮なりと雖も、珠は曾て失はず。忽ち智者ありて、其珠を指示するとき、所願心に従つて大饒富を致す。方に神珠の外より得るに非ざることを悟らん。」

即時、阿難大衆の中に在つて、佛足を頂禮し、起立して佛に白さく、「世尊、現に殺盜淫の業三緣斷するが故に三因生ぜず、心中の達多が狂性は自ら歇まん、歇まば則ち菩提なり。人に従つて得ずと説きたまふ、斯れ則ち因縁皎然として明白なり、云何が如來は、頃に因縁を棄てたまふ。我も因縁に従つて、心開悟することを得たり。世尊、此義何が獨

【梵志】 梵士。前出。

【無功用】 意の働を加へざるもの。
 【自然の心】 自然の心とは、汝が明らむる所の自然の心といふの意。

り我等年少の有學の聲聞のみならんや。今此會中の大目犍連、及び舍利弗須菩提等も、老梵志より佛の因縁を聞きて、發心開悟して、無漏を成ずることを得たり。今菩提は因縁よりせずと説きたまはば、則ち王舍城の拘舍梨等が説く所の自然は、第一義と成らん。唯大悲を垂れて、迷悶を開發したまへ。佛、阿難に告げたまはく、即ち城中の演若達多の如きは、狂性の因縁若し滅除することを得れば、則ち不狂の性自然に而も出づ。因縁自然、理是に窮れり。阿難、演若達多の頭本より自然ならば、本より自其れ然り、然として自に非ずといふこと無けん。何ぞ因縁の故に、頭を怖れて狂走する。若し自然の頭、因縁の故に狂せば、何ぞ自然なれども、因縁の故に失せざる。本頭失せず、狂怖妄に出づ、曾て變易なし、何ぞ因縁を藉らん。本より狂自然ならば、本より狂怖あるべし。未狂の際に、狂何の所にか潜る。不狂も自然ならば、頭本より妄なし、何によつてか狂走する。若し本頭を悟つて、狂走なりと識知すれば、因縁自然俱に戲論と爲るなり。是故に我言ふ、三縁斷ずるが故に即ち菩提心なり。菩提の心生じ、生滅の心滅せば、此れ但だ生滅ならん。滅と生と俱に盡くるを、無功用の道とす。若し自然ありとも、是の如くならば則ち明らけし、自然の心生じ、生滅の心滅せば、此れ亦生滅なり。生滅なき者を名けて、自然と爲す。猶しほ世間に、諸相の雜和して一體と成る者を、和合の性と名け、和合に非ざれば、本然の性と稱するが如し。本然も然に非ず、和合も合に非ず合と、然と俱に離し、離合も俱に非なる、此句を方に無戲論の法と名く。菩提涅槃、尙ほ遙遠に在り、汝が歷劫にも、辛勤修證

【歴劫】多劫を經歴すと云ふこと。劫は劫波(Kalpa)の略にして長時間を顯はす語なり。【佛頂神呪】本經の陀羅尼なり。【阿那含】梵音。アナーガミ(Anāgāmi)不還來と譯す。聲聞四果の一。不還果即ち欲界の惑に引かれて再び欲界に還り生を受くることなきもの。【羅睺羅】梵音ラーフラ(Rahula)覆障と譯す。佛十大弟子の一。釋尊の子。【授記】佛が記別とて佛が修業者の未來の證果を一區別して豫め説き給ふこと。【沈冥】生死に流轉する衆生のこと。【刹】前出。

すべきに非ず。復十方如來の十二部經の、清淨妙理を憶持すること、恆河沙の如しと雖も、祇戲論を益さん。汝が因縁自然を談説すること、決定明了にして、人間汝を多聞第一なりと稱すと雖も、此積劫の多聞重習を以て、摩登伽が難を免離すること能はずして、何ぞ我が佛頂神呪を待つて、摩登伽が心にも、姪火頓に歇み、阿那含を得て、我が法中に於て、精進林を成じ、愛河乾き枯れて、汝をして解脱せしむるを須たんや。是故に阿難、汝歴劫に、如來の祕密妙嚴を憶持すと雖も、一日無漏の業を修して、世間の憎愛の二苦を遠離するに如かじ。摩登伽が如きは、宿し姪女なりしも、神呪の力に由つて、其愛欲を削して、法の中に、今は性比丘尼と名く。羅睺羅も母耶輸陀羅も、同じく宿因を悟り、歴世の因は、貪愛を苦と爲すことを知りて、一念に、無漏の善を熏修するが故に、或は出纏を得、或は授記を蒙る。如何が自ら欺きて、尙ほ觀聽に留まるや。阿難及び諸の大衆、佛の示誨を聞きて、疑惑消除し、心に實相を悟つて、身意輕安にして、未曾有なることを得たり。重ねて復悲涙し、佛足を頂禮し、長跪し合掌して、而も佛に白して言さく、
 『無上大悲清淨寶王は、善く我が心を開き、能く是の如き種種の因縁を以て、方便提獎して、諸の沈冥を引きて、苦海より出したまへり。世尊、我今是の如きの法音を承りて、如來藏妙覺明の心は、十方界に遍して、如來の十方國土、清淨の寶嚴妙覺王の刹を含育することを知ると雖も、如來復多聞功なくして、修習に逮ばざることを責めたまふ。我今猶し、旅泊の人の、忽ち天王の華屋を賜與ふことを蒙るが如し。大宅を獲と雖も、要らず

【無餘涅槃】無餘依涅槃の略。四涅槃の一。煩惱障を斷じて得たる涅槃のこと。苦果たる五蘊和合の身體もすべて滅して今は全く所依なきが故に名く。

【攀緣】心、外境に轉せられて靜平を得ざるを云ふ。

【因地】果地の對因位。即ち佛果を得ざる菩薩の地位。

【果地】果位。即ち佛果の位、さとり位なり。

【器世間】器世界器界、器とも云ふ。有情を受け容るる世間の意。山河大地等の世界を云ふ。

門に因つて入るべし。唯願くば如來、大悲を捨てたまはず、我在會の諸の蒙暗の者に、小乘を捐捨して、畢く如來の無餘涅槃、本發心の路を獲ることを示したまへ。行學の者をして、何れに従つてか、暗昏の攀緣を撲伏して、陀羅尼を得て佛知見に入らしめん。是語を作し已りて、五體を地に投ぐれば、在會は一心にして、佛の慈旨を侍ちたてまつれり。爾時世尊、會中の緣覺聲聞、菩提心に於て、未だ自在ならざる者を哀愍し、及び當來、佛滅度の後、末法の衆生の、菩提心を發すものの爲に、無上乘の妙修行の路を開かんとして、阿難及び諸の大衆に宣示したまはく、汝等決定して菩提心を發して、佛如來の妙三摩提に於て、疲倦を生ぜざれば、當に先づ初心を發覺する一の決定の義を明らむべし。云何が初心の二義決定なりや。阿難、第一の義とは、汝等若し聲聞を捐捨し、菩薩乘を修して、佛知見に入らんと欲せば、應當に審かに因地の發心と、果地の覺とを觀すべし。同と爲んや異と爲んや。阿難、若し因地に於て、生滅の心を以て、本と爲して因を修して、而して佛乘の不生不滅を求めば、是處あること無けん。是義を以ての故に、汝當に諸の器世間の可作の法は、皆變滅に従ふことを照明すべし。阿難、汝觀ぜよ、世間の可作の法は、誰をか不壞と爲し。然も終に虚空を爛壞することを聞かず。何を以ての故に。空は可作に非ず、是れ始終壞滅なきに由るを以ての故に。則ち汝が身中に堅相を地と爲し、潤濕を水と爲し、煖觸を火と爲し、動搖を風と爲す。此四纏に由つて、汝が湛圓妙覺明の心を分つて、視と爲し聽と爲し、覺と爲し察と爲し、始めより終りに入るまで、五塵渾濁す。云何をか濁と

【法爾】 自然の意
以下五濁の説明なり。

爲す。阿難、譬へば清水の清潔なるは本然なり。即ち彼塵土灰沙の倫は、本質留礙せり。
二體法爾として性相循はず。世間の人ありて、彼塵土を取りて淨水に投ずれば、土は留礙を失し、水は清潔を亡じて、容貌汨然たる、之を名けて濁と爲すが如し。汝が濁の五重なることも亦復是の如し。阿難、汝が見と虚空と十方界に遍せり。空と見と分れざれば、空あれども體なく、見あれども覺なし、相織りて妄に成ずる、是第一重を名けて劫濁と爲す。汝が身は現に四大を搏て體と爲す。見聞覺知は、雍いで留礙せしめ、水火風土は、旋りて覺知せしむ。相織りて妄に成ずる、是第二重を名けて見濁と爲す。又汝が心中の憶識誦習するの性は知見より發し、容は六塵より現ず。塵を離れて相なく、覺を離れては性なし。相織つて妄に成ずる、是第三重を煩惱濁と名く。又汝が朝夕に生滅して停らざる知見の、毎に世間に留まらんことを欲すれども、業運んで毎常に國土を遷す。相織つて妄に成ずる、是第四重を衆生濁と名く。汝等が見聞元より異性なけれども、衆塵隔越すれば、狀なくして異生ず。性の中には相知れども、用の中には相背く。同異準を失つて、相織つて妄に成ず。是第五重を名けて命濁と爲す。阿難、汝今見聞覺知をして、遠く如來の常樂我淨に契はしめんと欲せば、當に先づ生死の根本を擇んで、不生滅に依らば、圓湛の性成すべし。湛を以て其虚妄の滅生を旋らして、元覺に復還し、元明の覺の生滅なきの性を得て、因地の心と爲し、然して後果地の修證を圓成すべし。濁水を澄ますに、靜器に貯へて靜深にして動ぜざれば、沙土自ら沈みて、清水現前するが如し。名けて初に客塵煩惱

【流數】世界の意。

を伏すと爲し、泥を去りて純水なるを、名けて永く根本無明を斷すと爲す。明相精純にして、一切變現すれども、煩惱を爲さず、皆涅槃清淨の妙徳に合す。第二の義とは、汝等必らず菩提心を發して、菩薩乘に於て大勇猛を生じ、決定して諸の有爲の相を棄捐せんと欲せば、應當に煩惱の根本を審詳にすべし。此無始より來かた業を發し生を潤するは、誰か作し誰か受くる。阿難、汝菩提を修して、若し審かに煩惱の根本を觀ぜずんば、則ち虛妄の根塵の、何の處にか顛倒あると知ること能はず。向ほ知らずんば、云何が降伏して如來の位を取らん。阿難、汝世間の結を解くの人を觀よ、結する所を見ずんば、云何が解くことを知らん。虚空の汝に墮裂せらるるをば聞かず。何を以ての故に。空には形相なく、結解なきを以ての故に。則ち汝が現前の眼耳鼻舌及び身心の六を賊の媒と爲して、自家寶を劫む。此に因つて無始より衆生世界纏縛を生ずるが故に、器世間に於て超越すること能はざるなり。阿難、云何なるをか名けて衆生世界と爲す。世をば遷流と爲し、界をば方位と爲す。汝今當に知るべし。東西南北と東南西南と、東北西北と上と下とを界と爲し、過去未來現在を世と爲す。方位には十あり、流數には三あり、一切衆生は妄を織りて相成じ、身中に質選して、世界と相渉る。而も此界の性は、設けたることは十方と雖も、位を定めて明らむべきは、世間に只東西南北を口け、上下は位なく、中に定まれる方なし。四の數は必らず明にして、世と相ひ渉る。三四と四三と、宛轉して十二となり、流變して三疊すれば、一は十百は千となる。始終を惣括するに、六根の中、各功德に千二百あり。阿難、

【日劫】劫は前出
劫波なり。
【六湛】六根の眞
性清淨なるを云
ふ。

汝復中に於て克く優劣を定めよ。眼の觀見するが如きは、後は暗く前は明なり。前の方は全く明に後の方は全く暗し。左右の旁を觀ること三分の二なり。總べて所作を論ずるに、功德全からず。三分を功と言ひ、一分には徳なし。當に知るべし、眼には唯八百の功德あり。耳の周く聴くが如きは、十方に遺すことなし。動には邇遙なるが若くなれども、靜には邊際なし。當に知るべし、耳根は一千二百の功德を圓滿せりと、鼻の嗅聞するが如きは、出入の息に通ず。出あり入ありて、前も中交を闕けり。鼻根を驗するに、三分に一を闕けり。當に知るべし、鼻は唯八百の功德ありと。舌の宣揚して、諸の世間出世間の智を盡すが如きは、言には方分あれども、理には窮盡なし。當に知るべし、舌根は一千二百の功德を圓滿せりと。身の觸を覺して、違順を識るが如きは、合の時は能く覺し、離の中には知らず。離は一にして合は雙べり。身根を驗するに、三分に一を闕けり。當に知るべし、身は唯八百の功德ありと。意の黙して十方三世一切の世間出世間の法を容るるが如きは、唯聖と凡と、包容して其涯際を盡さずといふことなし。當に知るべし、意根は一千二百の功德を圓滿せりと。阿難、汝今生死の欲流に逆つて、返つて流の根を窮めて、不生滅に至らんと欲せば、當に此等の六受用の根を驗すべし。誰か合誰か離、誰か深誰か淺、誰をか圓通と爲し、誰をか圓滿せざる。若し能く此に於て、圓通の根を悟らば、彼無始より妄業を織れる流に逆つて、圓通に循ふことを得、不圓の根と日劫相倍せん。我今備に六湛圓明の本所の功德を顯す。數量是の如し、汝が詳に其入るべき者を擇ぶに隨つて、吾

【二門】 六根の一を指す

【須陀洹果】 須陀洹は梵音シュローターバンナ (Srota Panu) 須流、入流と譯す。三界の見惑を斷じて、初めて聖者の流類に入りし位、預流果とも云ふ。
【見所斷】 迷理の惑及びこの惑によりて生じ或は附隨する有漏法を云ふ。

當に發明して、汝をして増進せしむべし。十方の如來は、十八界に於て、一一に修行して、皆無上菩提を圓滿することを得たまへり。其中間に於て亦優劣なし。但汝下方にして、未だ中に於て自在の慧を聞にすること能はず、故に我宣揚して、汝をして但一門に於て深く入らしめん。一に入つて妄なくんば、彼六知根、一時に清淨なり。

阿難、佛に白して言さく、「世尊、云何が流を逆して深く一門に入り、能く六根をして、一時に清淨ならしめん。佛、阿難に告げたまはく、「汝今已に須陀洹果を得て、已に三界の衆生、世間の見所斷の惑を滅すとも、然れども猶ほ未だ根中の積生、無始の虚習を知らず。彼善は要らず修所斷の得に因る。何に況や此中の生住異滅の分齊頭數をや。今汝且く觀ぜよ、現前の六根は、一と爲んや六と爲んや。阿難、若し一と言はば耳何ぞ見ざる、目何ぞ聞かざる、頭等ぞ履まざる、足等ぞ語ることなきや。若し此六根、決定して六と成らば、我が今の會に、汝が與に微妙の法門を宣揚するが如きは、汝が六根に誰か來つて領受する。阿難の言さく、「我耳を用て聞く。佛言はく、「汝が耳自ら聞かば、何ぞ身口に關はりて、口は來つて義を問ひ、身は起つて欽承するや。是故に應に知るべし、一に非ずんば終に六ならん、六に非ずんば終に一ならん、汝が根は元より一元より六なるにあらず。阿難、當に知るべし、是根は一にも非ず六にも非ず、無始より來かた顛倒淪替するに由るが故に、圓湛に於て一六の義生ず。汝須陀洹にして、六消することを得ると雖も、猶ほ未だ一を亡せず。大虚空の群器に參合するに、器形の異なるに因つて、之を異空と名くると

も、器を除きて空を觀するときは、空を説きて一と爲すが如し。彼太虛空、云何が汝が爲に、同と不同とを成ぜん。何に況や更に是一非一と名けんや。則ち汝が了知の六受用の根も亦復是の如し。明暗等の二種の相形すに由つて、妙圓の中に於て、湛を黏じて見を發す。見精色に映じて色を結びて根を成す。根の元を口けて清淨の四大と爲す。因つて眼の體を名けば蒲荷の朶の如く浮根の四塵流逸して色に奔る。動靜等の二種の相擊つに由つて、妙圓の中に於て、湛を黏じて聽を發して、聽精聲を映じ、聲を卷きて根を成じ、根の元を口けて清淨の四大と爲す。因つて耳の體を名けば、新に卷ける葉の如く、浮根の四塵流逸して聲に奔る。通塞等の二種相發するに由つて、妙圓の中に於て、湛を黏じて鼻を發す、鼻精、香を映じ、香を納めて根を成し、根の元を口けて清淨の四大と爲す。因つて鼻の體を名けば、變に垂れたる瓜の如く、浮根の四塵流逸して香に奔る。恬變等の二種相參はるに由つて、妙圓の中に於て、湛を黏じて嘗を發し、嘗精、味を映じ、味を絞んで根を成じ、根の元を口けて清淨の四大と爲す。因つて舌の體を名けば、初偃の月の如く、浮根の四塵流逸して味に奔る。離合等の二種相摩するに由つて、妙圓の中に於て、湛を黏じて覺を發し、覺精、觸に映じ、觸を擗りて根を成じ、根の元を口けて清淨の四大と爲す。因つて身の體を名けて、腰鼓の輪の如く、浮根の四塵流逸して觸に奔る。生滅等の二種相續するに由つて、妙圓の中に於て、湛を黏じて知を發し、知精、法に映じ、法を纏りて根を成じ、根の元を口けて清淨の四大と爲す。因つて意思を名けば幽室の見の如く、浮根の

【阿那律陀】阿難樓駄に同じ。

【跋難陀】難陀跋難陀に同じ梵音ナ

ンダ・ウバナンダ

(Nanda-Upananda)

喜、善喜と譯す

八大龍王の一。

【死伽神女】印夏恆河の河神。死伽

は恆河に同じ。

【禪梵鉢提】梵音ガツーンバテ(ガ

Yanpati)牛司牛王と譯す。釋尊の弟子。解律第一と云

はる。【舜若多】前出の滅盡定一切の心息すべて滅盡して寂靜となる定。

四摩流逸して法に奔る。阿難、是の如きの六根は、彼覺明に由つて、有明の明覺彼精了を失つて、妄を黏じて光を發す。是を以て汝今、暗を離れ明を離れては見の體あること無し。動を離れ靜を離れては元より聽質なし。通なく塞なければ顯性生ぜず。變に非ず恬に非ざれば噴出づる所なし。離せず合せざれば覺觸本なし。滅なく生なければ知安にか寄らん。汝但動靜合離、恬變通塞、生滅明暗、是の如きの十二の諸の有爲の相に循はずして、一根を抜くに隨つて、黏を脱して内に伏せよ。伏して元眞に歸すれば、本の明耀を發す。耀性發明すれば、諸餘の五黏も、抜くに應じて圓脱す。前塵に由つて起す所の知見にあらざれば、明根に循はず。根に寄せて明發す、是に因つて六根互相に用を爲す。阿難、汝豈に知らずや、今此會中の阿那律陀、目なくして而も見。跋難陀龍は、耳なくして而も聽く。死伽神女は、鼻なくして香を聞ぐ。禪梵鉢提は異舌をもて味を知り、舜若多神は、身なくして觸を覺す。如來の光の中に映じて暫く現せしむ。既に風質たれば、其體元より無なり。諸の滅盡定の寂を得たる聲聞、此會中の摩訶迦葉の如きは、久く意根を滅すれども、明目の了知は心念に囚らず。阿難、今汝が諸根、若し圓に抜け已りて、内に整きて光を發す。是の如きの浮塵及び器世間の、諸の變化の相は、湯の水を銷するが如く、念に應じて、化して、無上知覺と成る。阿難、彼の世人の見を眼に聚むるが如きは、若し急に合せしむれば、暗相現前す。六根點然として、頭足相類す。彼人手を以て、體に循へて外に繞らさば、彼見ずと雖も、頭足一辨して、知覺是れ同じ。緣見は明に囚れば、

【菩提、涅槃】前

【眞如】諸法の實體眞性。即ち絶對平等の理體のこと。

【菴摩羅識】阿摩羅識。梵音アマラ(Amara)無垢。清淨と譯す。

【空如來藏】諸佛の證れる清淨法身の體のこと。

【大圓鏡智】有漏の第八識をすてて得る無漏の智にして三世の一切の諸法常にこの智の上に見れ、萬徳圓滿して缺くる所なきを云ふ。

暗には無見を成ず。自ら發するにも明ならざれば、則ち諸の暗相も永く昏ますこと能はじ。根塵既に銷せば、云何が覺明。圓明を成ぜざらん。『阿難、佛に白して言さく、『世尊、佛の説きて言ふが如く、因地の覺心常住を求めんと欲せば、要らず果位と名目相應すべし。世尊、果位の中の菩提、涅槃、眞如、佛性、菴摩羅識、空如來藏、大圓鏡智の如きは、是七種の名、稱謂別なりと雖も、清淨圓滿にして、體性堅凝なること、金剛王の如くにして、常住不壞なり。此の若きの見聽は、明暗動靜通塞を離れば畢竟じて體なし。猶し念心の前塵を離れては、本所有なきが如し。云何が此畢竟斷滅を將て、以て修因と爲して、如來の七常住の果を獲んと欲する。世尊、若し明暗を離れては、見畢竟じて空なること、前塵なければ念の自性滅するが如し。進退循環し、微細に推求するに、本より我が心及び我が心所なし。誰を將てか因を立てて無上覺を求めん。如來先に湛精圓常なりと説きたまふ。誠言を違越して、終に戲論を成ず、云何が如來は眞實語の者ならんや、唯大慈を垂れて我が蒙悟を開きたまへ。』佛、阿難に告げたまはく、『汝多聞を學すれども、未だ諸漏を盡さず。心中に徒に顛倒の所因を知つて、實は未だ眞倒の現前せるを識ること能はず。恐くは汝誠心に猶ほ未だ信伏せざらん。吾今試みに塵俗の諸事を將て、當に汝が疑を除くべし。』

即時に如來、羅睺羅に勅して、鐘を撃たしむること一聲して、阿難に問うて言はく、『汝今聞くや不や。』阿難大眾俱に『我れ聞く。』と言す。鐘歇みて聲なし。佛又問うて言はく、

「汝今聞くや不や。」阿難大衆俱に、「聞かず。」と言す。時に羅睺羅、又撃つこと一聲す。佛
 又問うて言はく、「汝今聞くや不や。」阿難大衆又俱に聞くと言す。佛、阿難に問ひたま
 はく、「汝何をか聞くといひ、何をか聞かずといふ。」阿難大衆、俱に佛に白して言さく、
 「鐘聲。若し撃つときは、則ち我れ聞ことを得。撃つこと久うして聲銷え、音響變び絶ゆ
 るとき、則ち聞くことなしと名く。」如來又羅睺羅に勅して鐘を撃たしめて、阿難に問うて言
 はく、「爾今聲すや不や。」阿難大衆俱に聲ありと言す。少選にして聲消ゆ。佛又問うて言は
 く、「爾今聲すや不や。」阿難大衆答へて言さく、「聲なし。」と。頃ありて、羅睺羅に來りて鐘
 を撞く。佛又問うて言はく、「爾今聲すや不や。」阿難大衆、俱に聲ありと言す。佛、阿難に
 問ひたまはく、「汝何をか聲すといひ、何をか聲なしといふ。」阿難大衆、俱に佛に白して言
 さく、「鐘の聲、若し撃つときは、則ち聲ありと名く。撃つこと、久うして聲銷し、音響變
 び絶ゆれば、則ち聲なしと名く。佛、阿難及び諸の大衆に語りたまはく、「汝今云何が自
 語矯亂する。」大衆阿難、俱時に佛に問ひたてまつる。「我今云何をか名けて矯亂と爲す。佛
 言はく、「我汝に「聞くや」と問へば、汝、則ち「聞く」と言ふ。又汝に「聲すや」と問へば、汝
 則ち「聲す」と言ふ。唯だ聞と聲と、報答定まれることなし。是の如くならば、云何が矯亂と
 名けざらん。」阿難、聲銷えて響なきとき、汝聞くことなしと説く。若し實に聞くことなけ
 れば、聞性已に滅して、枯木に同じかるべし。鐘聲、更に撃つとき、汝云何が有と知り無
 と知ることを知るや。自ら是れ聲摩、或は無或は有なり、豈に彼聞性、汝が爲に有無と

なるものならんや。開實に無なりと云はば、誰か無なりと知る者ならん。是故に阿難、聲は聞の中に於て自ら生滅あれども、汝が聞きたるに非ず。聲の生じ聲の滅するを以て、汝が聞性をして有と爲り無と爲らしむるなり。汝尚ほ顛倒して、聲に惑うて聞と爲す。何ぞ昏迷して、常を以て斷と爲すことを怪まん。終に諸の動靜閉塞開通を離れて、聞を説いて性なしと言ふべからず。重睡の人の牀枕に眠熟するが如き、其家に入ありて、彼睡る時に於て練を持ち米を舂くに、其人夢中に舂搗の聲を聞き、別に他物と作す。或は鼓を撃つと爲し、或は鐘を撞くと爲す。即ち夢の時に於て、自ら其れ鐘かと怪み、木石の響かと爲す。時に於て、忽に寤めて、過く杵の音なりと知つて、自ら家人に告ぐらく、「我正に夢みる時、此春の音に惑うて、將に鼓の響と爲へり」と。阿難、是人夢中に豈に靜搖閉塞通塞を憶はんや。其形寐たりと雖も聞性昏からず。縱ひ汝が形は銷え、命光は選り謝すとも、此性は云何が汝が爲に銷滅せん。諸の衆生は、無始より來、諸の色聲に循つて、念を逐うて流轉するを以て、曾て性淨妙常を聞悟せず、所常に循はず、諸の生滅を逐ふ。是に由つて生生に雜染流轉せり。若し生滅を棄てて眞常を守らば、常光現前して、根塵識心、時に應じて銷落せん。想相を塵と爲し、識情を垢と爲して、二俱に遠離せば、則ち汝が法眼、時に應じて清明ならん、云何が無上知覺を成せざらん。」

首楞嚴經

卷第五

大唐神龍元年龍集乙巳五月己卯朔廿三日辛丑
中天竺沙門般刺蜜帝廣州制止道場に於て譯出す

【一】本章に於ては生死流轉の根を究め、安樂解脱の證を得しむるものを六根とし、以てこれを説示す。【無明】すべて事に關き精神作用を云ふ。

【三有】前出。

【六種に震動】大地の六種に震動すること。動、起、涌、震、吼、擊の六なり。

阿難佛に白して言さく、「世尊、如來は第二義門を説きたまふと雖も、今世間の結を解くの人を觀るに、若し其結べる所の元を知らざれば、我は信ず、是人は終に解くこと能はじと。世尊、我及び會中の有學の聲聞も、亦復是の如し。無始際より諸の無明と俱に滅し、俱に生ず。是の如きの多聞の善根を得て、名けて出家と爲すと雖も、猶ほ目を隨てたる瘡のごとし。惟だ願くば大慈、淪溺を哀愍したまへ。今日の身心云何が是結せる、何に従つてか解と名くる。亦未來の苦難の衆生をして、輪廻を免れて三有に落ちざることを得しめたまへ。」是語を作し已りて、普く大衆と五體を地に投げて、涙を雨し誠を翹て佛如來の無上の開示を待ちたてまつる。

爾時世尊、阿難及び諸の會中の諸の有學の者を憐愍し、亦未來の一切衆生の爲に出世の因と爲り、將來の眼と作らんとして、閻浮檀紫金光の手を以て阿難の頂を摩でたまふに、即時に十方普佛の世界六種に震動し、微塵の如來の世界に仕したまへる者、各寶光ありて其頂より出で、其光同時に彼世界より祇陀林に來つて如來の頂に灌ぎ、是諸の大

【俱生無明】生有即ち先天的に具有する無明のこと。

【交蘆】根、境、識三者本來無自性なるを喻へたる言

衆は未曾有なることを得たり。是に於て阿難及び諸の大衆俱に、十方の微塵の如來、異口同音に阿難に告げて言ふことを聞く。「善い哉阿難、汝俱生無明の、汝をして生死に輪轉せしむる結根を識知せんと欲せば、唯汝が六根なり、更に他物なし。汝復無上菩提の、汝をして速に安樂解脱、寂靜妙常を證せしむるものを知らんと欲せば、亦汝が六根なり、更に他物に非ず。阿難是の如きの法音を聞くと雖も、心猶ほ未だ明ならず。稽首して佛に白さく、「云何が我をして生死輪廻し、安樂妙常ならしむること、同じく是れ六根にして、更に他物に非ざるや。」佛、阿難に告げたまはく、「根と塵とは源を同うし、縛と脱とは二なきなり。識性の虚妄なること、猶し空華の如し。阿難、塵に由つて知を發し、根に因つて相あり。相と見と無性なること交蘆に同じ。是故に汝今、知見に知を立すれば即ち無明の本なり。知見に見なくんば斯れ即ち涅槃無漏の眞淨なり。云何が是中に更に他物を容れん。」爾時、世尊重ねて此義を宣べんと欲して、而も偈を説いて言はく、
眞性には有爲も空なり、緣より生ずるが故に玄の如し
無爲も起滅すること無し、不實なること空華の如し
妄を言つて諸眞を顯すは、妄と眞と同じく二ながら妄なり
猶ほ眞と非眞とに非ず、云何が見と所見とあらん
中間に實性なし、是故に交蘆の若し
結解所因を同うして、聖凡二路なし

汝交中の性を觀よ、空と有と二俱に非なり
迷晦すれば即ち無明なり、發明すれば便ち解脫なり
結を解くことは次第に因る、六解すれば一も亦亡ふ
根に圓通を選択して、流を入せば正覺を成す
陀那は微細の識なり、習氣は暴流を成す

眞と非眞とに迷はんことを恐れて、我常に開演せず
自心、自心を取れば、非幻も幻法と成る

取らざれば非幻もなし。非幻すら尙ほ生ぜず
幻法云何が立せん。是を妙蓮花の

金剛王寶覺、如幻三摩提と名け
彈指に無學を超越。是阿毘達磨は

十方の薄伽梵、一路涅槃の門なり

是に於て阿難及び諸の大衆、佛如來の無上慈誨の祇夜伽陀、雜糅して精瑩し、妙理清
徹なるを聞きて、心目開明にして、未曾有なることを歎す。阿難合掌頂禮して佛に白さ

く、「我今佛の無遮の大悲の性、淨妙常眞實の法句を聞けども、心猶ほ未だ六解すれば一
亡すると、結を舒ぶるの倫次に達せず、唯大慈を垂れて、再び斯會及び將來を愍みて、
施すに法音を以てし、沈垢を洗滌したまへ。」

【陀那】 阿陀那に
して梵音アリダ
ナ (Adana) 執持無
解と譯す。執我の
妄識。
【阿毘達磨】 毗曇
阿毘曇とも云ふ。
梵音アピドハル
マ (Abhidharma)
無比法、對法と譯
す。
【薄伽梵】 婆伽婆
とも云ふ。梵音ブ
ハガゾツト (Bhaga
vat) 世尊と譯す。
即ち佛十號の一な
り。
【祇夜伽陀】 前出
の偈なり。

【涅槃僧】梵音ニ
ブーサナ(フニニニ
三)裙、內衣と譯
す。僧衣の名。
【俗伽梨】梵音サ
ンゲハリーテ(Jamini
三)大衣と譯す。
三衣の一。
【劫波羅天】劫波
は時分と譯す。

即時、如來、師子の座に於て涅槃僧を整へ、僧伽梨を斂めて、七寶の机を攬り、手を机に引べて、劫波羅天の奉る所の華巾を取りて、大眾の前に於て縛んで一結と成し、阿難に示して言はく、『此をば何等とか名くる。阿難大眾、俱に佛に白して言さく、『此を名けて結と爲す。』是に於て如來、疊華の巾を結んで又一結と成して、重ねて阿難に問ひたまはく、『此をば何等とか名くる。阿難大眾、又佛に白して言さく、『此も亦結と名く。』是の如く倫次に疊華の巾を縮んで、惣て六結を成し、一一に結成せり。皆手中所成の結を取りて、持つて阿難に問ひたまはく、『此をば何等とか名くる。阿難大眾も亦復是の如く、次第に佛に酬へたてまつる。』此をば名けて結と爲す。』佛、阿難に告げたまはく、『我初め巾を縮ぶを、汝名けて結と爲す。此疊華の巾は、先より實に一條なり。第二第三、云何が汝曹は復名けて結と爲すか。』阿難、佛に白して言さく、『世尊、此寶疊華は緝績して巾を成せり。本一體なりと雖も、我が思惟するが如きは、如來一縮したまへば一結の名を得、若し百縮成せば、終に百結と名けん。何に況や此中祇六結のみ有りて、終に七にも至らず、亦五にも停まらず。云何が如來、祇初の時をのみ許して、第二第三をば名けて結と爲したまはざらん。』佛、阿難に名けたまはく、『此疊華の巾、汝此巾は元正一條なれども、我が六縮する時、六結ありと名くることを知るや。汝審かに觀察せよ。巾體は是れ同じくとも、結に因つて異あり。意に於て云何、初め縮んで結成するをば、名けて第一と爲す。是の如く乃至第六の結生ず。吾今第六の結の名を將て第一と成さんと欲するや不や。』不、世尊、六結若

し存せば、斯第六の名、終に第一に非じ。縱ひ我生を歴て、其明辨を盡すとも、如何が是六結をして名を亂らしめん。佛言はく、『是の如し、六結同じからざれども、本因を循顧するに一中の所造なり、其をして雜亂せしめんこと、終に成ることを得ず。則ち汝が六根も亦復是の如く、畢竟の同の中に、畢竟の異を生ず。佛、阿難に告げたまはく、『汝必らず此六結を嫌うて、成ぜずして、一のみ成せんと願樂せんに、復云何が得ん。阿難言さく、『此結若し存せば、是非鋒起して、中に於て自ら此結は彼に非ず、彼結は此に非ざることを生ぜん。如來今日、若し總て解除して、結若し生ぜずんば、則ち彼此なけん。尙ほ一とも名けず、六云何が成ぜん。佛言はく、『六解一亡も亦復是の如し。汝の無始より心性狂亂するに由つて、知見妄を發す。妄を發して息まずんば、見を勞して塵を發す。日睛を勞すれば、則ち狂華あるが如し。湛精明に於て、因なくして一切世間の山河大地を亂起す。生死涅槃は、皆即ち狂勞顛倒の華相なり。』阿難言さく、『此勞は結に同じ、云何が解除せん。如來手を以て結ぶ所の巾を將て、偏に其左に擧て、阿難に問うて言はく、『是の如くして解かんや不や。』『不、世尊。』復手を旋らして以て偏に右邊に牽いて、又阿難に問ひたまはく、『是の如くして解かんや不や。』『不、世尊。佛、阿難に告げたまはく、『吾今手を以て左右各牽くに竟に解くこと能はず。汝方便を設けよ、云何が解くことを成さん。阿難、佛に白して言さく、『世尊、結を心に當てて解かば、即ち分散すべし。佛、阿難に告げたまはく、『是の如く是の如し。若し結を除かんと欲せば、結を心に當つべし。阿難、我の佛法は

【人空】 我空に同
じ。【無生忍】 無生法
忍のこと。

【秘嚴】 首楞嚴三
昧のこと。

因縁より生ずと説くは、世間の和合の鹿相を取るに非ず。如來世出世の法を發明して、其本
因は所縁に隨つて出づることを知る。是の如く乃至恆沙界の外の一滴の雨をも亦頭數を知
る。現前せる種種の松は直く棘は曲り、鶴は白く鳥は玄きも、皆元由を了れり。是故に阿
難、汝が心中に於て、六根を選択して、根結若し除かば、塵相自ら滅し、諸妄銷亡せば、
不眞何ぞ待せん。阿難、吾今汝に問はん、此波羅維巾、六結現前せり、同時に縈へるを解
きて、同じく除くことを得んや不や。『不、世尊、是結本以て次第に解生ぜり。今日當
に須く次第にして解くべし。六結同體なれども、結同時ならざれば、則ち結解の時、云
何が同じく除かん。』佛言はく、『六根の解除も亦復是の如し。此根初め解するとき、先づ
人空を得ん。空性圓明なれば、法の解脱を成ず。法を解脱し已りて、俱空も生ぜず。是
を菩薩、三摩地に從りて無生忍を得と名く。』阿難及び諸の大衆、佛の開示を蒙りて、慧
覺圓通して疑なきを得たり。一時に合掌し、雙足を頂禮して、而も佛に白して言さく、
『我等今日、心身皎然として快く無礙を得、復一六の亡する義を悟知すと雖も、然も猶
ほ未だ圓通の根本に達せず。世尊、我が輩飄零して、積劫にも孤露なり。何の心何の慮
ありてか、佛の天倫に預れる。乳を失へる兒の、忽に慈母に遇へるが如し。若し復此際
會に因つて道成じ、所得の密言還つて本悟に回うせば、則ち未だ聞かざると差別あること
無からん。唯大悲を垂れて、我に秘嚴を惠みて、如來の最後の開示を成就したまへ。』是語
を作し已りて、五體を地に投げ、退きて密機を藏め、佛の冥授を冀ふ。

【經疏】 佛號如とも云ふ。梵音カ一ウンディニヤ一Kamundiniya) 寶壽子。

【四諦】 苦、集、

【阿耨多】 阿耨多

【三三】 初知、已知と

【阿耨多】 阿耨多

【阿耨多】 阿耨多

【阿耨多】 阿耨多

【阿耨多】 阿耨多

【阿耨多】 阿耨多

【香嚴】 香嚴の本を以て、六根の空を證し莊嚴の相を現したる意。

佛、世尊、昔く世中の諸の大菩薩、及び諸の菩薩の大阿羅漢に生じたてて、其時、佛及び阿羅漢は、我が世の中に生じて無學を成ずるを得たり。吾今故に問はん、最初に發心して十八果を悟りき。意をか其通と爲し、何の方便に定つてか三摩地に入る。

佛、世尊に問ひたまふに、我初め阿耨多と稱す。如來我を印して阿耨多と稱く。佛阿耨多に在り、及び諸國に於て、阿耨多の成道を觀見して、佛の香嚴に於て四諦を發明せり。佛、世尊に問ひたまふに、我初め阿耨多と稱す。如來我を印して阿耨多と稱く。佛阿耨多に在り、及び諸國に於て、阿耨多の成道を觀見して、佛の香嚴に於て四諦を發明せり。

して、我を阿耨多と稱す。佛阿耨多に在り、及び諸國に於て、阿耨多の成道を觀見して、佛の香嚴に於て四諦を發明せり。佛、世尊に問ひたまふに、我初め阿耨多と稱す。如來我を印して阿耨多と稱く。佛阿耨多に在り、及び諸國に於て、阿耨多の成道を觀見して、佛の香嚴に於て四諦を發明せり。

我を印して阿耨多と稱く。佛阿耨多に在り、及び諸國に於て、阿耨多の成道を觀見して、佛の香嚴に於て四諦を發明せり。佛、世尊に問ひたまふに、我初め阿耨多と稱す。如來我を印して阿耨多と稱く。佛阿耨多に在り、及び諸國に於て、阿耨多の成道を觀見して、佛の香嚴に於て四諦を發明せり。

たり、世尊を問ひたまふ、我が阿耨多の如きは、色因を上と爲す。香嚴阿耨多は、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、面も佛に白して言さく、我如來の我に教へて、佛に諸の有爲の相を觀せしめたまふを聞きて、我時に佛を辭し、佛き清淨に變して、諸の比丘の沈水香を燒くを見しに、香嚴寂然として、來つて鼻中に入る。我此氣を觀するに、本に非ず、

空に非ず、佛にも非ず、火にも非ず、去るに著くら所なく、來るに従ふ所なし。是に因りて意銷し、無漏を發明す。如來我を印して、香嚴の號を、得しめたまへ。聖氣條に滅し

【法王子】菩薩は次に佛果に至るべき人なるが故に、佛して法王子と名く。

【跋陀婆羅】梵音ブハドドラ、パーラ(Bhadrapala)賢護と譯す。佛名なり。

【開士】梵語菩薩(Bodhisatva)の一譯。正道を開き衆生を開導する人夫の意。

【佛子住】不生不滅の眞如法性を認知して決定安住する位。

【摩訶迦葉】梵音マハカアシニヤバ(Mahakasyapa)大飲光、大龜氏と譯す。佛十大弟子の一。

【舍利】梵音シャリーラ(Sarira)身骨、骨分と譯す。佛又は聖者の遺骨を云ふ。

て、妙香密圓なり。我香嚴に從つて阿羅漢を得たり。佛、圓通を問ひたまふ。我が所證の如きは、香嚴を上と爲す。『藥王藥上の二法王子、并に在會の中の五百の梵天は、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我無始劫に世の良醫たり。口中に此婆世界の草木金石を嘗むるに、名數、凡て十萬八千あり。是の如く悉く苦酢鹹淡甘辛等の味、并に諸の和合俱生の變異を知る。是れ冷是れ熱、有毒無毒、悉く能く遍知す。如來に承事して、味の性を了知するに、空に非ず有に非ず、身心に即するにも非ず、身心を離するにも非ず、味因を分別して、是に從つて開悟せり。佛如來の、我昆季に、藥王藥上二菩薩の名を印するを蒙むる。今會中に於て法王子と爲りて、味に因つて覺明して、位、菩薩に登れり。佛圓通を問ひたまふに、我が所證の如きは、味因を上と爲す。』跋陀婆羅并に其同伴の十六の開士は、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我等先に威音王佛に於て、法を聞きて出家し、浴僧の時に於て、例に隨つて室に入るに、忽に水因を悟る。既に塵をも洗はず、亦體をも洗はず、中間安然として所有なきを得たり。宿習忘ることなくして、乃至今の時佛に從つて出家して無學を得しむ。彼佛、我を跋陀婆羅と名く。妙觸宣明して佛子住を成す。佛圓通を問ひたまふ。我が所證の如きは、觸因を上と爲す。』摩訶迦葉及び紫金光比丘尼等は、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我往劫に於て、此界の中に於て佛出世したまふことあり、日月燈と名く。我親近したてまつることを得て、法を聞きて修學す。佛滅度の後、舍利を供養し、燈を然

【滅盡】 滅盡定にして、一切の心息を寂靜となる定。

【頭陀】 梵音ドフーダ(Dhuta)修治の庵を拂ひて佛道を求むること、修行と同義なり。

【二】 本章に於ては佛弟子、順次各自所證の境を宣ぶ【阿耨樓陀】 前出【阿耨樓陀】に同じ。

【三昧】 心眼によりて得らるる三昧なり。

【掌果】 菴摩羅果に同じ。

【周鞞般特迦】 梵音シュユットビヤントハカ(Suddhipanīthaka)淨路邊生と譯す。釋尊の弟子。

【伽陀】 梵音ガトハ(Ṭha)頌風頌と譯す。

【安居】 梵語アルシヤ、アサナ(Vāsā Yāsa)兩安居の略。僧侶が禁

し明を續け、紫光金を以て、佛の形像に塗れり。爾れより已來、世世生生、身常に紫金光聚を圓滿せり。此紫金光比丘尼等は、即ち我が眷屬として同時に發心せり。我世間の六塵の變壞を觀じて、唯空寂を以て滅盡を修す。身心乃ち能く百千劫を度ること、猶し彈指の如し。我空法を以て阿羅漢を成ず。世尊我に説いて頭陀を最なりと爲す。妙法開明して、諸漏を銷滅せり。佛圓通を問ひたまふ、我が所證の如きは、法因を上と爲す。

【阿耨樓陀】 即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、我初め出家して、常に睡眠を樂ふ。如來我を呵して畜生の類と爲す。我佛の呵したまふを聞きて、啼泣して自ら責め七日眠らずして其雙目を失す。世尊我に樂見照明金剛三昧を示したまふ。我眼に因らずして、十方を觀見するに、精眞洞然なること掌果を觀るが如し。如來我を阿羅漢と成れりと印したまふ。佛圓通を問ひたまふ。我所證の如きは見を旋し元に循ふ、斯を第一と爲す。

周利般特迦、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、我誦持を闕ぎて、多聞の性なし。最初に佛に値ひたてまつり、法を聞き出家して、如來の一句の伽陀を憶持せしむ。一日に於て、前を得れば後を遺れ、後を得れば前を遺る。佛我が愚を愍みて、我に安居して、出入の息を調ふることを教へたまふ。我時に、息を觀じて、微細に生住異滅諸行の利那を窮盡せしに、其心豁然として大無礙を得、乃至漏盡きて阿羅漢を成じ、佛の座下に住す。無學と成れりと印したまふ、佛圓通を問ひたまふ。我が所證の如きは、息を返して空に循ふ。斯を第一と爲す。

足家に籠り静に業を修する事。

【息を返して】息の本來無生たるを知る。

【橋梵鉢提】梵音ガブーンバテ (Gābūnpati) 牛司、牛主と譯す。佛弟子なり。

【沙門】梵音シムラマナ (Śramaṇa) 勤息と譯す。出家して佛道を修むる人を云ふ。

【畢陵伽婆蹉】梵音ピリンダグヅツサ (Pīṇḍavatsa) 餘習と譯す。始め婆羅門の教徒たりし人。

【須菩提】梵音スブプテ (Subhūti) 善吉と譯す。佛弟子解空第一と稱せらる。

橋梵鉢提、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我に口業ありき。過去劫に於て、沙門を輕弄して、世世生生に牛の疇む病ありしに、如來我に一味清淨の心地の法門を示したまふに、我心を滅して、三摩地に入ることを得たり。味の知を觀するに、體にも非ず物にも非ず、念に應じて世間の諸漏を超越ることを得たり。内に身心を脱し、外に世界を遣る。三有を遠離すること、鳥の籠を出づるが如し。垢を離れ塵を銷し、法眼清淨にして阿羅漢を成ず。如來親しく無學道に登れりと印したまふ。佛圓通を問ひたまふ。我が所證の如きは、味を還し知を旋す、斯を第一と爲す。』

畢陵伽婆蹉、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我初め發心し、佛に従つて道に入る。數如來の諸の世間の、不可樂の事を説きたまふを聞きて、城中に乞食して、心に法門を思ひ、覺えず路中の毒刺に足を傷らるるに、身を擧つて疼痛す。我念ふに、知ありて此深痛を知る。覺と痛とを覺ると雖も、清淨の心を覺するに、痛と痛覺と無し。我又思惟するに、是の如きの一身、寧ぞ雙覺あらんや、念を攝すること、未だ久しからざるに、身心忽に空なり、三七日の中に諸漏虚しく盡きて、阿羅漢を成じ、親しく無學を發明せりと印記せらるるを得たり。佛圓通を問ひたまふ。我が所證の如きは純覺にして身を遣る、斯を第一と爲す。』

須菩提、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我曠劫より來、心無礙なるを得て、自ら受生を憶ふに恆河沙の如し。初め母胎に在りしとき、即ち空寂を知

無礙なるを得て、自ら受生を憶ふに恆河沙の如し。初め母胎に在りしとき、即ち空寂を知

【寶明の空海】 佛智現にして無碍の眞智なり。

【舍利弗】 梵音ンヤーリプトラ（Vijaya）身子と譯す。佛弟子、智慧第一と稱せらる。

【普賢菩薩】 普賢は梵語三曼多跋陀羅（Samantabhadra）の譯。利他大悲の行願を主とする菩薩なり。

りぬ。是の如く乃至十方空と成れば、亦衆生をして空性を證得せしむ。如來の性眞真空性圓明なりと發したまふことを蒙りて、阿羅漢を得、頓に如來の寶明の空海に入りて、佛知見に同ぜしかば、無學を成ぜりと印したまふ。性空を解脫することは、我を無上と爲す。佛圓通を問ひたまふ。我が所證の如きは、諸相を非に入れ、非と所非と盡きて、法を旋して無に歸する、斯を第一と爲す。

舍利弗、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、「我曠劫より來、心見清淨にして、是の如く生を受くること、恆河沙の如し。世出世間の種種の變化、一たび見れば、則ち通じて障礙なきことを獲たり。我路中に於て、迦葉波の兄弟に逢ひ、相逐うて因縁を宣説せしに、心の無際を悟りき。佛に従つて出家し、見覺明圓にして、大無畏を得て阿羅漢と成れり、佛の長子としては佛口より生じ法化より生ず。佛圓通を問ひたまふ、我が所證の如きは、心見光を發し、光知見を極む、斯を第一と爲す。」

普賢菩薩、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、「我已に會て恆沙の如來の爲に、法王子と爲りき。十方の如來、其弟子の普賢根なる者を教へて、普賢の行を修せしめん、に、我に従つて名を立てき。世尊、我心聞を用て、衆生所有の知見を分別す。若し他方の恆沙界の外に於て、一衆生ありて、心中に普賢の行を發明すれば、我爾時に於て、六牙の象に乗じ、身を百千に分ちて、皆其處に至る。縱ひ彼障深うして、未だ我れを見ることを得ざるも、我、其人の與に暗中に摩頂し、擁護安慰して、其れをして成就せし

【孫陀羅難陀】梵音スンダラナンダ(Śubharaṇḍa) 難喜と譯す。釋尊の異母弟なり。【俱絺羅】梵音カウシユトヒラ(Kaushīla) 膝と譯す。舍利弗の舅

【富樓那彌多羅尼子】梵音フルナマイトラヤニプトラ(Puramaitra yamitpa) 滿願子と譯す。佛十大弟子、說法第一と稱せらる。【輪】法輪なり。【優波離】梵音ウパーリ(U-pā-ī) 近取、近執と譯す。佛弟子、持戒第一と稱す。

めん。佛圓通を問ひたまふ。我本因を説く、心聞發明して、分別自在なる、斯を第一と爲す。

孫陀羅難陀、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我初め出家して、佛に従つて道に入る。戒律を具すと雖も、三摩地に於て、心常に散動して未だ無漏を獲ず。世尊、我及び俱絺羅に教へて、鼻端の白を觀ぜしむ。我初め諦に觀じて、三七日を經て、鼻中の氣を見るに、出入煙の如し。身心内に明にして、圓なること、世界に洞り、遍く虚淨を成ずること、猶ほ瑠璃の如し。輝相漸く銷して鼻息白と成る。心開け漏盡きて、諸の出入の息、化して光明と爲りて十方界を照し、阿羅漢を得たり。世尊、我當に菩提を得べしと説きたまふ。佛圓通を問ひたまふ、我息を銷するに、息久うして發明し、明圓にして漏を滅するを以て、斯を第一と爲す。』
富樓那彌多羅尼子、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我曠劫より來、辯才無礙にして、苦空を宣説し、深く實相に達す。是の如く乃至、恆沙の如來の秘密の法門、我衆中に於て、微妙に開示するに、無所畏を得たり。世尊、我に大辯才あることを知り、音聲論を以て、我に教へて發揚せしめたまふ。我佛前に於て、佛を助けて輪を轉じ、師子吼に因つて阿羅漢を成ぜり。世尊我を說法無上なりと印したまへり。佛圓通を問ひたまふ。我法音を以て、魔怨を降伏し、諸漏を銷滅す、斯を第一と爲す。』
優波離、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我親く佛に隨つて、

【威儀】 戒律の異名なり。

【大目犍連】 梵音マードカールヤ一ヤナ (Mahadaya) 胡言と譯す。佛弟子、神通第一と稱す。

【優樓頻螺】 梵音ウルパールワールシユヤバ (Uvalpinakasyapa) 三迦葉の一。

【伽耶】 梵音ガヤ一 (Gayā) 三迦葉の一。

【那提】 梵音ナデー (Nadī) 三迦葉の一。

【旋湛】 生滅なき講體を云ふ。

【烏芻瑟摩】 梵音ウツチユフシユマ (Uchusuma) 不淨金剛、火頭金剛と譯す。忿怒の相を現じ、頭髮項背悉く火焰ある神。

城を踏え出家して、觀く如來六年の勤苦を觀たてまつり、親しく如來の諸魔を降伏し、諸の外道を制し、世間の食欲の諸漏を解脫したまふことを見たてまつりき。佛の教戒を承けたてまつる。是の如く乃至三千の威儀八萬微細の性業遮業、悉く皆清淨に、身心寂滅して阿羅漢を成ぜり。我れは是れ如來の衆中の綱紀なり、親しく我が心を印したまふ。戒を持ち身を修むること、衆推して上と爲す。佛圓通を問ひたまふ、我身を執するを以て身に自在を得、次第に心を執して心に神通を得たり、然して後に身心一切通利なり、斯を第一と爲す。

大目犍連、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、我初め路に於て乞食するに、優樓頻螺、伽耶、那提の三迦葉波の、如來の因縁の深義を宣說せるに逢ひ遇うて、我頗に發心して、大に通達することを得たり。如來、我に恵みたまふに、袈裟身に著きしかば、鬚髮自ら落つ。我十方に遊ぶに障礙なきを得たり。神通發明せること、推して無上と爲して阿羅漢と成れり。寧ぞ唯世尊のみならんや、十方の如來も我が神力圓明清淨にして、自在無畏なることを歎めたまへり。佛圓通を問ひたまふ。我旋湛を以て心光發宣す。濁流を澄ましむるに、久うして清瑩と成るが如くなり。斯を第一と爲す。烏芻瑟摩、如來の前に於て掌を合せ、佛の雙足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我常に先づ久遠劫の前を憶ふに、性に食欲多かりき。佛世に出づること有りて、名けて空王と曰ふ。多姪の人は猛火聚と成ると説きたまふ。我に教へて遍く百億四支諸の冷煖

【持地菩薩】衆生救済の行願を主とする菩薩なり。

【毘舍浮】梵音キシユワフ(一)Svaha(二)一切有と譯す。過去七佛の第三。

【造世界】前出、器世間なり。
【法性】萬有の本體、眞如、法身に同じ。
【無生忍】無生法忍、前出。

の氣を觀ぜしむ。神光内に凝つて、多姪の心を化して智慧の火と成す。是れより諸佛、皆我れを呼召して、名けて火頭と爲す。我火光三昧の力を以ての故に阿羅漢と成れり。心に大願を發して、諸佛の成道には、我力士と爲りて、親しく魔怨を伏す。佛圓通を問ひたまふ。我身心の煖觸を諦觀するに、無礙流通するを以て、諸漏既に銷して、大寶焰を生じ、無上覺に登る、斯を第一と爲す。」

持地菩薩、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、「我往昔を念ふに、普光如來、世に出現したまひしとき、我比丘と爲りて、常に一切の要路津口に於て、田地の險隘にして如法ならざること有りて、車馬を妨損すれば、我指平げ填めたり。或は橋梁と作り、或は沙土を負ふ、是の如く勤苦して、無量の佛の世に出現するを經たり。或は衆生ありて、鬪鬪の處に於て、人の物を撃げんと要すれば、我先づ爲に撃げて、其詣づる所に至つて、物を放ちて即ち行くに、其直を取らず。毘舍浮佛の現在世の時、世多く飢荒せり。我負人と爲りて、遠近を問ふことなく、唯一錢を取る。或は車牛の泥に溺らざるること有らんには、我神力ありて、其爲に輪を推して、其苦惱を抜けり。時に國の大王、佛を延いて齋を設く、我爾時に於て、地を平げて佛を待ちたてまつれば、毘舍浮佛、頂を摩でて謂はく、「我當に心地を平ぐべし、即ち世界の地一切皆平かならん。」我即ち心開けて、身の微塵と造世界の所有の微塵とを見るに、等くして差別なし。微塵の自性は、相ひ觸摩せず、乃至刀兵も亦觸るる所なし。我れ法性に於て、無生忍を悟つて阿羅漢と成

【月光童子】 水觀によりて月光の名を得たる菩薩。

【浮幢王刹】 香水界の諸の佛世界。

【退失する】 所證の道果を退失するの意。

る。總心して今菩薩の位の中に入りて、諸の如來の妙蓮花、佛知見の地を宣べたまふを聞きて、我先づ證明して上首たり。佛圓通を問ひたまふ、我諦に身と界との二塵等くして差別なく、本知來藏より虛妄に發する塵なりと觀するを以て、摩訶訶、智圓にして無上道を成ぜり、斯を第一と爲す。

月光童子、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、「我往昔恆河沙劫を憶ふに、佛世に出でたまふこと有りき。名けて水天と爲す。諸の菩薩に教へて、水觀を修習して、三摩地に入らしめたまひき。身中の水性は在はること無きを觀するに、初め涕唾よりして、是の如く窮盡するに、津液精血、大小便利、身中に長復せる水性同一なり。水を見るに身中と世界の外の浮幢王刹の諸の香水湧と、等くして差別なし。我是時に於て、初めて此觀を成ずるに、但其水のみを見て未だ身なきことを得ず。比丘と爲りて室中に安禪するに當りて、我に弟子あり、聽を窺ひ室を觀るに、唯清水の過く室中に在るを見て、了に所見なし。童稚無知にして、一の瓦礫を取つて水の内に投ずるに、水を激して聲を作ししかば、顧眄して去りぬ。我定を出でて後に頗に心の痛むことを覺えたり。舍利弗の違害鬼に遭へるが如し。我自ら思惟すらく、「今我已に阿羅漢を得て、久しく病縁を離れたり。云何が今日忽に心の痛みを生ずる。將に退失すること無からんやと。爾時、童子、捷に我が前に來りて、上の如きの事を説く。我則ち告げて言はく、「汝更に水を見れば、即ち門を開きて、此水の中に入りて、瓦礫を除去すべし。」童子教を奉じて、後に定に

【瑠璃】梵音ワ
イツールヤ(Vajra
nyā)青玉と譯す

入れる時、還つて復水を見るに、瓦礫宛然たり。門を開きて除き出す。我後に定を出づるに、身質初めの如し。無量の佛に逢ひたてまつれり。是の如くにして山海自在通王如来に至つて、方に身を亡ずることを得、十方界の諸の香水海と、性眞空に合して無二無別なり。今如来に於て眞眞の名を得て、菩薩の會に預かる。佛圓通を問ひたまふ。我水性の一味流通を以て、無生忍を得て、菩提を圓滿せり、斯を第一と爲す。」

瑠璃光法王子は、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、「我往昔を憶ふに、恆沙劫を経て、佛世に出でたまふこと有り、無量聲と名く。菩薩に本覺の妙明なることを開示したまひ、此世界及衆生の身は、皆是れ妄縁風力の所轉なりと觀ぜしむ。我爾時に於て、界の安立を觀じ、世の動の時を觀じ、身の動止を觀じ、心の動念を觀するに、諸動無二にして等しく差別なし。我れ時に此群動の性を了覺するに、來るに所從なく、去るに所至なし。十方微塵の顛倒の衆生は同一に虚妄なり。是の如く乃至、三千大千の世界の内の有らゆる衆生は、一器の中に百の蚊蚋を貯れたるに、啾啾として亂れ鳴きて、分寸の中に於て、鼓發狂鬧するが如し。佛に逢ふこと未だ幾ならざるに、無上忍を得たり。爾時に心開けて、乃ち東方の不動佛國を見て、法王子と爲りて、十方の佛に事へたてまつるに、身心光を發して洞徹無礙なり。佛圓通を問ひたまふ、我風力の無依なるを觀察するを以て、菩提心を悟つて三摩地に入り、十方の佛に合ひて一の妙心を傳ふる、斯を第一と爲す。」

【虚空藏菩薩】梵名アーカーンヤルブハ(Akasaṅga Dhāra)の菩薩の智慧慈悲の廣大無窮なること虚空の廓藏と爲せるが如しと云ふ。

【定光佛】過去久遠の昔に出現し給ひし如來。【十種微妙の寶光】如來十種の身光なり。

【彌勒菩薩】梵音マイトレイヤ(Maitreya)慈氏と譯す。

【授記】 記別。

虚空藏菩薩、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、「我如來と、定光佛の所にして、無邊の身を得たり。爾時に、手に四の大寶珠を執りて、十方微塵の佛刹を照明するに、化して虚空と成る。又自心に於て、大圓鏡を現じ、内より十種微妙の寶光を放つて、十方に流灌す。盡虚空際の諸の幢王刹、鏡の内に來入し、我が身に涉入するに、身虚空に同じて相妨礙せず、身能善く微塵の國土に入つて、廣く佛事を行じ、大に隨順することを得たり。此大神力は、我れ諦に四大依ることなく、妄想より生滅し、虚空二なく、佛國本より同じと觀じて、同に於て發明して無生忍を得るに由れり。佛圓通を問ひたまふ。我虚空の無邊なることを觀察するを以て、三摩地に入りて妙力圓明なる、斯を第一と爲す。」

彌勒菩薩、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、「我往昔を憶ふに微塵劫を経て、佛世に出でたまふこと有り、日月燈明と名く。我彼佛に従つて、而も出家することを得たれども、心に世名を重んじて、好んで族性に遊びき。爾時に世尊、我に唯心識定を修習して、三摩地に入ることを教へたまひき。歷劫より已來此三昧を以て、恆沙の佛に事へて、世名を求むる心、歡滅して有ること無し。然燈佛の世に出現したまふに至つて、我乃ち無上妙圓識心三昧を成ずることを得たり。乃至盡空の如來の國土淨穢有無、皆是れ我が心の變化の所現なり。世尊、我是の如きの唯心識了了するが故に、識性より無量の如來を流出して、今授記を得て、次に佛處に補せり。佛圓通を問ひたまふ。我諦に

【圓成實】圓成實性にして、唯識にて萬法を三種に分つ三性の一。圓滿と成就と眞實の三義を具へたる本性と云ふ意。眞如のこと。

【依他、偏計】依地起性、偏計所執何れも三性の一。依他起性とは他の衆縁の和合によりて生起せる法のこと。計偏所執とは依他起性が能偏計の心によりて妄執せらるる時その妄情の前に現はるる無體のものを云ふ。【大勢至菩薩】梵名摩訶那鉢（Mahānāpātaka）大精進と譯す。

十方唯識なりと觀するを以て、識心圓明にして圓成實に入り、依他及び遍計執を遠離して、無生忍を得る、斯を第一と爲す。』

大勢至法王子、其同倫の五十二菩薩と與に、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我往昔を憶ふに、恆河沙劫に佛世に出でたまふこと有り、無量光と名く。

十二の如來、二劫に相繼ぎ、其最後の佛を超日月光と名く。彼佛、我に念佛三昧を教へたまひき。譬へば人ありて、一は専ら憶を爲し、一は専ら忘るるが如し。是の如きの二人、若

は逢ひ、逢はず、或は見、見ること非し。二人相憶うて、二の憶念深ければ、是の如く乃至生より生に至るに、形と影とに同うして相乖異せず。十方の如來、衆生を憐念したまふこと、

母の子を憶ふが如し。若し子、逃逝せば、憶ふと雖も何か爲ん。子若し母を憶ふこと母の憶が如くなる時は、母子生を歴とも相違遠せず。若し衆生の心に、佛を憶ひ、佛を念ずれば、現前にも當來にも必定して佛を見たてまつり、佛を去ること遠からずして、方便を假

らずして自ら心開くことを得ん。香に染める人の身に香氣あるが如し。此を則ち名けて香光莊嚴と曰ふ。我本因地に、念佛の心を以て無生忍に入る。今此界に於て、念佛の人を攝して淨土に歸せしむ。佛圓通を問ひたまふ、我選擇すること無く、都て六根を攝して、

淨念相繼ぎて三摩地を得る、斯を第一と爲す。』

首楞嚴經 卷第六

【一】本章に於ては觀世音菩薩、成道の方便を宣ぶ。

【觀世音菩薩】梵音アーリーヤブーラキテーリヤブーラ

(Aryavalokitesvara)

【觀自在と譯す】觀自在に大慈大悲を以て十方諸門に身を現し世人の其名を稱するを觀じて皆解脱を得しむ。

【聞思修】聞き得る智慧(聞)考へて得る智慧(思)實踐して得る智慧(修)三慧のこと。

【流を入して】

【耳識、對境、即ち能所絶したるもの】

【動靜】動は耳識靜は對境。

【六道】六趣、地修羅、餓鬼、畜生、天人、天上なり。

【如幻】有無を絶せる中道のこと。

大唐神龍元年龍集乙巳五月己卯朔廿三日辛丑
中天竺沙門般刺蜜帝廣州制止道場に於て譯出す

爾時、觀世音菩薩、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、「世尊、我昔の無數恆河沙劫を憶念するに、時に於て、佛世に出現したまふこと有り、觀世音と名く。我彼佛に於て菩提心を發せり。彼佛、我に教へて、聞思修より三摩地に入らしむ。初め聞の中に於て、流を入して所を亡す。所入既に寂なれば、動靜の二相了然として生ぜず。是の如く漸に増すれば、聞と所聞と盡きぬ。盡聞にも住せざれば、覺と所覺と空となり。覺を空すること極めて圓なれば、空と所空と滅するなり。生滅既に滅して、寂滅現前す。忽然として世出世間を超越し、十方圓明にして、二の殊勝を獲たり。一には上十方諸佛の本妙覺心に合つて、佛如來と同一の慈力あり。二には下十方一切の六道の衆生に合つて、諸の衆生と同一の悲仰あり。世尊、我觀音如來を供養するに由りて、彼如來、我に如幻の聞熏、聞修、金剛三昧を授けたまふことを蒙りて、佛如來と慈力を同じが身をして三十二の應を成じ、諸の國土に入らしむ。世尊、若し諸の菩薩、三摩地に入りて、無漏を進修して、勝解現に圓ならんとするには、我佛身を現じて、而も爲に法を説い

【獨覺】 緣覺に同じ。

【十二緣】 十二因縁なり。

【帝釋】 四天王及び他の三十二天を領して佛法歸依の人を護り阿修羅の軍を征する天王。

【四天王】 四王天にありて佛法を護る四王。

て、其をして解脱せしむ。若し諸の有學の、寂靜妙明にして、勝妙現に圓ならんとするには、我彼前に於て、獨覺の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして解脱せしむ。若し諸の有學、十二縁を斷じ、縁斷じて、勝性勝妙現に圓ならんとするには、我彼の前に於て、緣覺の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして解脱せしむ。若し諸の有學、四諦の空を待て、道を修して滅に入り、勝性現に圓ならんとするには、我彼の前に於て、聲聞の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして解脱せしむ。若し諸の衆生、心に明悟して欲摩を犯さざらんことを欲し、身の清淨ならんことを欲すれば、我彼の前に於て、梵王の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして解脱せしむ。若し諸の衆生、天主と爲りて諸天を統領せんと欲すれば、我彼の前に於て、帝釋の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、身自在にして十方に遊行せんと欲すれば、我彼の前に於て、自在天の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、身自在にして虚空に飛行せんと欲すれば、我彼の前に於て、大自在天の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、世界を統べて衆生を保護せんことを愛すれば、我彼の前に於て、四天王の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、天宮に生じて鬼神を驅使せんことを愛すれば、我彼の前に於て、四天王國太

【五戒】在家の人の持つべき五つの戒、不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒。

【優婆塞】徒普ウハ一リカカ（一）近事男、近善男と譯す佛道に入りたる在家の男子

【優婆夷】徒普ウハ一リシカカ（二）近善女と譯す佛道に入れる在家の女子。

子の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、人主と爲らんことを樂へば、我彼の前に於て、人王の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、族性に主として、世間に推讓せられんことを愛すれば、我彼の前に於て、長者の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、名言を談じ、清淨にして自ら居らんことを愛すれば、我れ彼の前に於て、居士の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、國土を治め邦邑を割斷せんことを愛すれば、我れ彼の前に於て、宰官の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、諸の數術、攝衛自ら居らんことを愛すれば、我れ彼の前に於て、婆羅門の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し男子ありて、出家を學し諸の戒律を持たんことを好まんにば、我れ彼の前に於て、比丘の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し女人ありて、出家を學し、諸の禁戒を持たんことを好まんにば、我れ彼の前に於て、比丘尼の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し男子ありて、五戒を持たんことを樂はんにば、我れ彼の前に於て、優婆塞の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し女子ありて、五戒を持つて自ら居らんには、我れ彼の前に於て、優婆夷の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し女人ありて、内政に身を立て、以て家國を修めんとするには、我れ彼の前に於て、女主の身及び國夫人命婦大家とを現じて、而も爲に法を説

【藥叉】梵音ヤクシヤ(Takṣa)勇健と譯す。鬼神の一。【乾達婆】帝釋の俗樂神。【阿修羅】梵音アストラ(Aśura)鬼神なり。【緊那羅】梵音キンナラ(Kinnara)人とも神とも定むべからざる神。【摩呼羅伽】梵音マホーラガ(Mahoraga)大蟒神。

きて、其をして成就せしむ。若し衆生ありて、男根を壊せざらんには、我れ彼の前に於て童男の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し處女ありて、處身を愛樂し、侵暴を求めざらんには、我れ彼の前に於て、童女の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し諸天ありて、天倫を出でんことを樂はんには、我れ天身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し諸龍ありて、龍倫を出でんことを樂はんには、我れ龍身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し藥叉ありて、本倫を度せんことを樂はんには、我れ彼の前に於て、藥叉の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し乾闥婆、其倫を脱せんことを樂はんには、我れ彼の前に於て、乾闥婆の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し阿修羅、其倫を脱せんことを樂はんには、我れ彼の前に於て、阿修羅の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し緊那羅、其倫を脱せんことを樂はんには、我れ彼の前に於て、緊那羅の身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。若し摩呼羅伽、其倫を脱せんことを樂はんには、我れ彼の前に於て、摩呼羅伽の身を現じて、而も爲に法を説いて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、人を樂ひて人を修せんには、我れ人身を現じて、而も爲に法を説いて、其をして成就せしむ。若し諸の非人有形無形有想無想、其倫を度せんことを樂はんには、我れ彼の前に於て、皆其身を現じて、而も爲に法を説きて、其をして成就せしむ。是を妙淨の三十二應入國土身と名く。皆三昧の聞熏、聞修、

【無畏】一切衆生の怖畏を脱せしむること。

【羅刹】惡鬼。
【鳩槃荼】梵音クムフハーンダス (Kumbhāṇḍas) 鬼の名。
【富單那】梵音ブータナ (Būṭana) 餓鬼の一種。

無作の妙力を以て自在に成就す。世尊、我れ復、此聞重、聞修、金剛三昧無作の妙力を以て、諸の十方三世六道の一切衆生と、同じく悲仰するが故に、諸の衆生をして、我が身心に於て、十四種の無畏の功德を獲しむ。一には我れ自ら音を觀ぜずして、觀する者を觀するに由つて、彼十方の苦惱の衆生をして、其音聲を觀じて、即ち解脫を得しむ。二には知見旋復すれば、諸の衆生をして、設ひ大火に入るとも、火も燒くこと能はざらしむ。三には聽を觀じて旋復すれば、諸の衆生をして、大水に漂はさるるとき、水も溺らすこと能はざらしむ。四には妄想を斷滅して心に殺害なければ、諸の衆生をして、諸の鬼國に入るとも、鬼も害すること能はざらしむ。五には聞を重じて聞を成じ、六根銷復して聲聽に同すれば、能く衆生をして當に害せらるべきに臨むとも、刀段段に壞せしむ。其兵戈をして、猶し水を割くが如く、亦光を吹くが如くならしめて、性に搖動なけん。六には聞重精明にして法界に遍すれば、則ち諸の幽闇の性全きこと能はず。能く衆生をして、藥叉、羅刹、鳩槃荼鬼及び毘舍遮、富單那等、其傍に近づくとも、雖も、目に視ること能はざらしむ。七には善性聞銷し、觀聽返入して、諸の寤妄を離れば、能く衆生をして、禁繫枷鎖も著くること能はざる所ならしむ。八には音を滅し、門を圓にして、遍く慈力を生ずれば、能く衆生をして、險路を経過すとも、賊も劫むること能はざらしむ。九には聞を熏じ塵を離れて、色も劫めざる所なれば、能く一切多姪の衆生をして、貪欲を遠離せしむ。十には音を純にする塵なく、根境圓融して對と所對と無ければ、能く一切忿恨の衆生をして、諸の

【阿頼伽】梵音ア
ートヤンテカ(Aty
antika)畢竟と譯
す。到底涅槃に入
る能はざる者。

瞋恚を離れしむ。十一には摩を銷して明に旋れば、法界と身心とは猶し瑠璃の如く朗徹無礙にして、能く一切昏鈍性の障の諸の阿頼伽をして、永く癡暗を離れしむ。十二には形を融じて聞に復すれば、道場を動ぜずして世間に渉入し世界を壞せずして能く十方に遍し、微塵の諸佛如來を供養して、各の佛邊にして法王子と爲り能く法界の子なき衆生の男を欲求する者をして、福德智慧の男を誕生せしむ。十三には六根圓通明照無二にして、十方界を含んで大圓鏡空如來藏を立て、十方微塵の如來に承順し、祕密法門を受領して失ふこと無くんば、能く法界の子なき衆生の女を欲求する者をして、端正福德柔順にして、衆人の愛敬する有相の女を誕生せしむ。十四には此三千大千世界に百億の日月あり、世間に現住する諸の法王子は、六十二恆河沙の數あり、法を修し範を垂れ、衆生を教化し、衆生に隨順する、方便智慧各同じからず。我が得る所の圓通の本根は、妙耳の門より發して、然して後に身心微妙に含容し、法界に周遍するに由つて、能く衆生をして、我が名號を持たんものと、彼共に六十二恆河沙の諸の法王子を持たんものと、二人の福德正に等うして異なること無からしむ。世尊、我が一の名號と彼衆多の名號と異なること無きは、我が修習して、眞の圓通を得るに由つてなり、是を十四の施無畏の力をもつて、福を衆生に備ふと名く。世尊、我又是圓通修證の、無上道を獲るが故に、又能善く四不思議無作の妙徳を獲たり。一には我れ初め妙妙の聞心を得て、心精聞を遺るるに由つて、見聞覺知分隔すること能はず、一の圓融清淨の寶覺を成ず。故に我能く衆多の妙容を現じて、能く無邊の

前出。

【摩伽囉】 摩伽囉の意。

【母陀羅】 梵音ム

ドラー(Mudra)印

契と譯す。佛菩薩

等、その内證の本

誓を事相の上に表

示する形式。

祕密神呪を説く。其中に、或は一首三首五首七首九首十一首、乃至一百八首千首萬首八萬
 四千變陀羅尼首、二臂四臂六臂八臂十臂十二臂十四十六十八二十より二十四に至る、是の如
 く乃至一百八臂千臂萬臂八萬四千母陀羅の臂、二目三日四日九日、是の如く乃至一百八日
 千日萬日八萬八千清淨の寶目を現す、或は慈或は威、或は定、或は慧、衆生を救護する
 に大自在を得たり。二には我が聞思に由つて六塵を脱出すること、聲乃垣を度るに礙を爲
 すこと能はざるが如し、故に我れ妙に能く二一の形を現し二一の呪を誦するに、其形其呪、
 能く無畏を以て諸の衆生に施す。是故に十方微塵の國土、皆我は名けて是無畏者と爲す。
 三には我が本妙圓通の清淨の本根を修習するに由つて、遊ぶ所の世界に、皆衆生をして
 身と珍寶とを捨てて、我が哀愍を求めしむ。四には我佛心を得て究竟を證す。能く珍寶を
 以て、種種に十方の如來を供養し、傍に法界六道の衆生に及ぼす。妻を求めんには、妻を
 得しめ、子を求めんには、子を得しめ、三昧を求めんには、三昧を得しめ、長壽を求めん
 には、長壽を得しむ。是の如く乃至大涅槃を求めんには、大涅槃を得しむ。佛圓通を問ひ
 たまふ、我耳門、圓照三昧に従つて、緣心自在にして澆相を入すに因つて、三摩提を得て
 菩提を成就す、斯を第一と爲す。世尊、彼佛如來は、我が善く圓通の法門を得ることを歡
 じて、大會中に於て、我に授記して觀世音の名十方界に遍せり。我が聽を觀じて十方に圓
 明なるに由るが故に、觀音の名十方界に遍せり。

爾時、世尊、師子座に於て、其五體より同く寶光を放つて、遠く十方微塵の如來及び法

【梵唄】聲明のこ
と。清淨の音を傳
ふると云ふ意にて
梵唄と云ふ。

王子諸の菩薩の頂に灌ぐ。彼諸の如來も亦五體に於て同じく寶光を放ち、微塵の方より來つて佛頂に灌ぎ、并に會中の諸の大菩薩及び阿羅漢に灌ぐ。林木池沼、皆法音を演べ、光を交へて相羅なること寶絲網の如し。是諸の大衆未曾有なることを得て、一切普く金剛三昧を獲たり。即時に天より百寶蓮花を雨らし、青黃赤白間錯紛糅して、十方の虚空七寶の色と成る。此娑婆界の大地山河俱時に現ぜず、唯十方微塵の國土を見るに、合して一界と成りて、梵唄詠歌し自然に敷奏す。是に於て如來、文殊師利法王子に告げたまはく、「汝今此二十五の無學の諸の大菩薩及び阿羅漢、各最初成道の方便を説くを觀よ、皆眞實の圓通を修習すと言へり。彼等の修行は、實に優劣なけれども前後の差別あり、我今阿難をして開悟せしめんと欲す。二十五の行、誰か其根に當れる。兼ねて我が滅後に此界の衆生、菩薩乘に入つて無上道を求めんに、何の方便の門か成就し易きことを得ん。」文殊師利法王子は、佛の慈旨を奉じて、即ち座より起ち、佛足を頂禮し、佛の威神を承け、偈を説きて佛に對ふらく、

覺海の性は澄圓なり、圓澄の覺は元妙なり
元明の照に所を生じ、所立すれば照の性亡す
迷妄にして虚空あり、空に依つて世界を立す
想の澄めるは國土と成り、知覺は乃ち衆生なり
空の大覺の中に生ずることは、海に一漚の發するが如し

【二】本章に於ては三昧を修するの所以を闡明す。

有漏の微塵の國は、皆空に依つて生ずる所なり

漏滅すれば空本無なり、況や復略の三有をや

元に歸すれば性は無二なり、方便には多門あり

聖性は通ぜずといふこと無くんば、順逆皆方便なり

初心の三昧に入るに、遲鈍同倫ならず

色は想結して塵と成り、精了に徹すること能はず

如何が明徹ならずして、是に於て圓通を獲ん

普聲は語言に雜れり、但伊れ名句味なり

一は一切を含むに非ず、云何が圓通を獲ん

香は合中知なるを以て、離するときは則ち元より有ること無し

其所覺を恆にせず、云何が圓通を獲ん

味の性は本然に非ず、要らず味する時を以て有り

其覺恆一ならず、云何が圓通を獲ん

觸は所觸を以て明なり、所なきときは觸を明めず

合と離との性は定まれるに非ず、云何が圓通を獲ん

法を稱して内塵と爲す、塵に憑れば必らず所あり

能所あるは遍沙に非ず、云何が圓通を獲ん

見性は洞然なりと雖も、前には明にして後には明ならず
四維に一半を虧きて、云何が圓通を獲ん
鼻息は出入に通じて、現前に交る氣なし
支離として涉入に匪ず、云何が圓通を獲ん
舌は入に非ざれば端なし、味に因つて覺了を生ず
味亡すれば有ること無し、云何が圓通を獲ん
身は所觸と同じ、各圓覺の觀に非ず
泐量ありて冥會せず、云何が圓通を獲ん
知根は雜亂せる思なり、湛了すれば終に見なし
想念脱すべからず、云何が圓通を獲ん
識見は三和に雜り、本稱を詰むるに相に非ず
自體先より定なし、云何が圓通を獲ん
心聞の十方に洞なることは、大因の力より生ず
初心は入ること能はず、云何が圓通を獲ん
鼻想は本權機なり、祇心を攝して住せしむ
住すれば心の所住を成ず、云何が圓通を獲ん
説法は音文を弄す、開悟は先より成ずる者なり

名句は無漏に非ず、云何が圓通を獲ん
 持犯は但身を束ぬ、身に非ずんば束ぬる所なし
 元より一切に遍するに非ず、云何が圓通を獲ん
 神通は本宿因なり、何ぞ分別を法とするに關らん
 念縁は物を離するに非ず、云何が圓通を獲ん
 若し地性を以て觀せば、擊礙にして通達に非ず
 有爲は聖性に非ず、云何が圓通を獲ん
 若し水性を以て觀せば、想念は眞實に非ず
 如如は覺觀に非ず、云何が圓通を獲ん
 若し火性を以て觀せば、有を厭ふは眞の離に非ず
 初心の方便に非ず、云何が圓通を獲ん
 若し風性を以て觀せば、動寂は對なきに非ず
 對あるは無上覺に非ず、云何が圓通を獲ん
 若し空性を以て觀せば、昏鈍は先より覺に非ず
 覺なきは菩提に異なり、云何が圓通を獲ん
 若し識性を以て觀せば、識を觀するに常住に非ず
 心を存すれば乃ち虚妄なり、云何が圓通を獲ん

諸行は是れ無常なり、念性は元より生滅す
因果今感に殊なる、云何が圓通を獲ん
我今世尊に白す、伽婆婆界に出でたまふ
此方の眞の教體は、清淨にして音聞に在り
三摩提を取らんと欲せんには、實に以て聞の中より入り
苦を離れて解脫を得ん、良い哉觀世音
恆沙劫の中に於て、微塵の佛國に入り
大自在の力を得て、無畏を衆生に施す
妙音觀世音、梵音海潮音
世を救ひて悉く安寧ならしめ、出世には常住を獲しむ
我今如來に啓す、觀音の所説の如きは
譬へば人の靜に居するとき、十方俱に鼓を撃てば
十處一時に聞くが如し、此れ則ち圓の眞實なり
日は障の外を觀るに非ず、口と鼻とも亦復然り
身は合を以て方に知る、心念は紛れて緒なし
耳を隔てて音響を聞くに、遐邇俱に聞くべし
五根の齊しからざる所、是れ則ち通の眞實なり

【聲論】ミーマン
サー(Mīmāṃsā)印
度六大學派の一。
聲の常住不滅を主
張するもの。

【金剛王】前出。

【金剛三昧】

【如幻】前出。如

幻三昧。

【佛母眞三昧】前

出。首楞嚴三昧。

音聲の性に動靜あれば、聞の中に無爲を爲す
聲なきを無聞と號すれども、實に聞の性なきには非ず
聲の無きとき既に滅無し、聲の有るとき亦生に非ず
生滅二ながら圓に離る、是れ則ち常の眞實なり
縱令夢想に在りて、爲さざれども無と思はず
覺觀と思惟とを出でて、身心及ぶこと能はず
今此娑婆國は、聲論をもて宣明を得ん
衆生不聞に迷ひて、聲に循ふが故に流轉す
阿難は縱ひ強記なりとも、邪思に落つることを免れず
豈に所に隨つて淪むに非ざらんや。流を旋せば妄無きことを獲ん
阿難、汝諦に聽け、我佛の威力を承けて
金剛王、如幻不思議、佛母眞三昧を宣説せん
汝微塵の佛の、一切の秘密門を聞くとも
欲漏先づ除かざれば、聞を畜へて過誤を成す
聞を將て佛佛を持せんよりは、何ぞ自ら聞を聞せざる
聞は自然の生に非ず、聲に因つて名字あり
聞を旋せば聲と與に脱す、能脱誰をか名けんと欲する

【諸學】を指す。

二乘聲聞

一根既に源に返れば、六根解脫を成ず
見聞は幻翳の如く、三界は空花の若し
聞復すれば翳根除き、塵銷すれば覺圓淨なり
淨極りて光通達し、寂照にして虚空を含む
却り來つて世間を觀すれば、猶し夢中の事のごとし
摩登伽も夢に在り、誰か能く汝が形を留めん
世の巧幻師の、諸の男女を幻作するとき
諸の根の動くことを見ると雖も、要らず一機を以て抽んず
機を息めて寂然に歸すれば、諸幻は無性と成るが如し
六根も亦是の如し、元一精明に依つて
分れて六和合と成る、一處に休復を成ずれば
六用皆成ぜず、塵垢念に應じて銷ゆれば
圓明淨妙と成る、塵を餘すは尙ほ諸學なり
明極まれば即ち如來なり、大衆及び阿難
汝が倒聞の機を旋らして、反つて聞の自性を聞せば
性は無上道と成らん、圓通は實に是の如し
此は是れ微塵の佛の、一路涅槃門なり

過去の諸の如来は、斯門より已に成就し
現在の諸の菩薩は、今各圓明に入る

未來の修學の人は、當に是の如きの法に依るべし

我も亦中に從つて證せり、唯に觀世音のみに非ざるなり

誠に佛世尊の、我に諸の方便を詢ひたまふが如きは

以て諸の末劫に、出世間を求むる人を救はんとなり

涅槃の心を成就することは、觀世音を最と爲す

自餘の諸の方便は、皆是れ佛の威神

事に即して摩勞を捨てしむ、是れ長く修學し

淺深同説の法に非ず。如来藏の無漏不思議なるを頂禮す

願くば未來を加被して、此門に於て惑なく

方便をもて成就し易からしめたまへ、以て阿難及末劫の

沈淪のものを教ふるに堪へん、但此根を以て修せば

圓通餘の者に超えん、眞實の心是の如し

是に於て、阿難及び諸の大衆は、身心了然として大に開示することを得て、佛、菩提

及び大涅槃を觀ること、猶ほ人ありて、事に因りて遠く遊んで、未だ歸還することを得ざる

に、明かに其家の所歸の道路を了るが如し。普會の大衆、天龍八部、有學の二乘、及び諸

【天龍八部】天、
龍、夜叉、乾闥婆、
阿修羅、迦樓羅、
緊那羅、摩睺羅伽
等。

【無等等】佛のこ
生に對比すれば、
等しきものなく
(無等)而も諸佛所
證の法身は彼此同
一なる(等)が故に
佛を無等等と云ふ
【阿耨多羅三藐三
菩提】無上正遍智
と譯す佛の覺智を
云ふ。

【毘奈耶】毗尼に
同じ。梵音ヰナヤ
(Vinaya)離行、
調伏と譯す經律論
の三藏中の律なり

の一切の新發心の菩薩、其數凡て十恆河沙あり、皆本心を得て、遠離離垢して法眼淨を獲たり。性比丘尼、偈を説くを聞き已りて、阿羅漢を成ず。無量の衆生は、皆無等等の阿耨多羅三藐三菩提心を發しき。阿難、衣服を整へ、大衆の中に於て合掌頂禮し、心迹圓明にして悲欣交集り、未來の諸の衆生を益せんと欲するが故に、稽首して佛に白さく、『大悲世尊、我今已に成佛の法門を悟りて、是中の修行に疑惑なきことを得たり。常に如来の是の如きの言を説きたまふを聞きて、自ら未だ度を得ざるに先づ人を度するは、菩薩の發心なり。自覺已に圓にして能く他を覺するは、如来の應世なりと。我未だ度せずと雖も、願くば末劫の一切衆生を度せん。世尊、此諸の衆生は、佛を去ること漸く遠く、邪師の説法恆河沙の如くならん。其心を攝して三摩地に入らんと欲せば、云何が其をして道場を安立し、諸の魔事を遠ざかり、菩提心に於て退屈なきことを得しめん。』
爾時、世尊、大衆の中に於て、阿難を稱讚したまはく、『善哉善哉、汝が問ふ所の如きは、道場を安立し、衆生の末劫の沈溺を救護せんとす。汝今諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。』阿難大衆、唯然として教を奉す。佛、阿難に告げたまはく、『汝常に我毘奈耶の中に、三決定の義を修行することを宣説せしを聞けり。謂ゆる心を攝むるを戒と爲し、戒に因つて定を生じ、定に因つて慧を發す、是を則ち名けて三無漏の學と爲す。阿難、云何が心を攝むるを我は名けて戒と爲す。若し諸の世界の六道の衆生、其心婬せざれば、則ち其に隨つて生死相續せず。汝三昧を修することは、本塵勞を出でんがためなり。婬心除かさ

【三塗】 火塗（地獄）血塗（畜生）刀塗（餓鬼）の三惡道

【波旬】 梵音パーカーヤン（Bhaya）惡、殺者と譯す常に惡意を懷き惡法を成就し僧を擾し人の壽命を斷つと云ふ。
【神道】 鬼神道の意なり。

れば塵出づべからず。縱ひ多智にして禪定現前すること有りと、如し姪を斷ぜざれば、必らず魔道に落ちて、上品は魔王、中品は魔王、下品は魔王とならん。彼等の諸魔には亦徒衆あり、各自ら無上道を成ずと謂へり。我が滅度の後、末法の中に此魔民多くして、世間に熾盛にして廣く貪婬を行じ、善知識と爲りて、諸の衆生をして愛見の坑に落し、菩薩の路を失はしめん。汝世人に教へて三摩地を修せしめんには、先づ心姪を斷せしめよ。是を如來と先佛世尊との第一決定、清淨の明誨と名く。是故に阿難、若し姪を斷ぜずして禪定を修する者は、砂石を煮して、其をして飯と成さんと欲するが如し。百千劫を經とも祇熱砂と名けん。何を以ての故に。此飯は本より砂石の成すに非ざるを以ての故に。汝姪身を以て佛の妙果を求めば、縱ひ妙悟を得るとも、皆是れ姪根なり。根本姪を成ずれば三塗に輪轉して、必らず出づること能はず。如來の涅槃、何の路よりか修證せん。必らず姪機をして、身心俱に斷じて斷性も亦無からしめば、佛菩提に於て斯れ希冀すべし。我が此説の如きは、名けて佛説と爲し、此の如く説かざれば、即ち波旬の説なり。阿難、又諸の世界、六道の衆生、其心殺せざれば、則ち共に隨つて生死相續せず。汝三昧を修すること、本塵勞を出でんがためなり。殺心除かずんば塵出づべからず。縱ひ多智にして禪定現前すること有りと、如し殺を斷ぜざれば必らず神道に落ちて、上品の人は大力の鬼と爲り、中品は則ち飛行の夜叉諸の鬼師等と爲り、下品は當に地行の羅刹と爲るべし。彼諸の鬼神も亦徒衆ありて、各自ら無上道を成ずと謂へり。我が滅度の後、末法の中に此鬼

【釋子】
なり。

釋尊の姓

神多くして、世間に熾盛にして、自ら肉を食するも、菩提の路を得ると言はん。阿難、我
比丘をして五の淨肉を食せしむることは、此肉は皆我が神力の化生なればなり。本より命
根なし。汝婆羅門の地は多く蒸濕にして、加ふるに砂石を以てして草菜生ぜず。我大悲神
力の加ふる所を以て、大慈悲に因つて、假に名けて肉と爲すに、汝其味を得たりき。奈何
が如來滅度の後、衆生の肉を食せんを、名けて釋子と爲んや。汝等當に知るべし、是食肉
の人は、縦ひ心開けて三摩地に似ることを得るとも皆大羅刹なり。報終らば必らず生死の
苦海に沈まむ。佛弟子に非ず。是の如きの人、相殺し相呑み、相食すること未だ已らず、
云何が是人三界を出づることを得ん。汝世人に教へて三摩地を修せしめんには、次に殺生
を斷ぜしめよ。是を如來と先佛世尊との第二決定清淨の明誨と名く。是故に阿難、若し
殺を斷ぜずして禪定を修する者は、譬へば人ありて自ら其耳を塞きて、高聲に大に叫びて、
人の聞かざることを求むるが如し。此等を名けて隱さんと欲すれども彌露はると爲す。
清淨の比丘及び諸の菩薩は、岐路に於て行くに、生草をも踏まず、況や手を以て抜く
をや。云何が大悲、諸の衆生の血肉を取つて食に充てんや。況し諸の比丘、東方の絲綿絹
帛、及び是れ此土の靴履裘毳、乳酪醍醐を服せずんば、是の如きの比丘は、世に於て眞に脱せ
り、宿債を酬還して三界に遊ばず。何を以ての故に。其身分を服すれば、皆彼縁と爲るを以
ての故に。人其地中の百穀を食して、足地を離れざるが如し。必らず身心をして、諸の衆
生の若は身と身分とに於て、身心の二塗に服せず食せざらしめば、我是人は眞の解脱者な

りと説く。我が此説の如きを名けて傳説と爲す。此の如く説かざるは即ち波旬の説なり。阿難、又復世界六道の衆生、其心偷せされば、則ち其に隨つて生死相續せず。汝三昧を修することは、本摩勞を出でんがためなり。偷心除かずんば塵出づべからず。縦ひ多智禪定現前すること有りとも、知し偷を斷せされば必ず邪道に落ちん。上品は精靈、中品は妖魅、下品は邪人として諸魅の著く所なり。彼等の群邪にも亦徒衆あり、各自ら無上道を成ずと謂へり。我が滅度の後、末法の中に此妖邪多くして、世間に熾盛にして、姦欺を潛匿して善知識と稱し、各自ら已に上人の法を得たりと謂ひて、無爲を眩惑し、恐して失心せしむ。所適の處に、其家耗散す。我比丘に教へて、方に循つて乞食せしむることは、其をして貪を捨てて菩提の道を成ぜしめんとなり。諸の比丘等、自ら熟食せざることは、殘生を、旅泊の三界に寄せて、一たび往還することを示す、去れば返ること無し。云何が賊人、我が衣服を假りて、如來を裨販し、種種の業を造りて、菩提法なりと言ひて、却つて出家具戒の比丘を非りて、小乘の道と爲し、是に由りて無量の衆生を疑誤して、無間獄に墮せしめん。若し我が滅後に、其れ比丘ありて、發心決定して三摩提を修せんとき、能く如來の形像の前に於て、身に一炷を然し、一指の節を焼き、及び身上に於て一の香炷を執かば、我は説かん。是人無始の宿債、一時に酬ひ畢りて、長く世間を揖し、永く諸漏を脱して、未だ即ち無上覺路に明らかならずと雖も、是人法に於て已に決定の心なり」と。若し此捨身の微因を爲さざれば、縦ひ無爲を成ずるとも、必らず還つて人に生れて其宿債を酬

【馬麥】釋尊宿債によりて馬麥を食ふの厄。

【愛見の魔】愛によりて邪愛を生じ遂に如來の種子を失ふの意。

【須陀洹果】…阿羅漢果何れも前田。聲聞の四果。

【辟支佛乘】緣覺の果位。

【十地前】十住十行、十回向の三賢位のこと。

【一願迦】無佛性の輩。
【多羅木】多羅は梵音ターラ(Trā)重と譯す。印度植物の名。
【三苦】苦苦、壞苦、行苦の三。

ふこと、我が馬麥の如くに正に等うして異なること無けん。汝世人に教へて、三摩地を修せしめんには、後に偷盜を斷せしめよ。是を如來と先佛世尊との第三決定清淨の明誨と名く。是故に阿難、若し偷を斷ぜずして禪定を修する者は、譬へば人ありて、水を漏卮に灌ぎて其滿つるを求めんと欲するが如し。縦ひ塵劫を経るにも終に平復すること無けん。若し諸の比丘、衣鉢の餘をば分寸も畜へざれ、乞食の餘をば分つて餓ゑたる衆生に施せ。大集會に於ては、合掌して衆を禮し、人ありて捶ち詈るとも、稱讚に同じくして、必らず身心をして二俱に捐捨し、身肉骨血衆生と共にらしめよ。如來不了義の説を將て廻らして己が解と爲して、以て初學を誤らしめざれ。佛は是人を眞の三昧を得ると印す。我が説く所の如きを名けて佛説と爲す。此の如く説かざるは即ち波旬の説なり。阿難、是の如く世界六道の衆生は、則ち身心に殺盜婬なくして、三行已に圓なりと雖も、若し大妄語すれば、即ち三摩提清淨なることを得ず、愛見の魔と成りて如來の種を失ふ。謂ゆる未だ得ざるを得たりと謂ひ、未だ證せざるを證したりと謂ひ、或は世間に尊勝第一ならんことを求めて、前の人に謂つて、我れ今已に須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛乘、十地地前の諸位の菩薩を得たりと言つて、彼が禮懺を求め、其供養を食ふ。是れ一願迦として、佛種を銷滅すること、人の力を以て多羅木を斷るが如し。佛是人を記したまふ、永く善根を残して知見に復ること無く、三苦の海に沈んで三昧を成ぜじ」と。我が滅度の後に、諸の菩薩及び阿羅漢に勅して、應身して彼末法の中に生じ、種種の形と作りて、諸の輪轉を度

【密因】 佛の秘密
因縁

【四威儀】 行、住、坐、臥の四事、常に心を調へ規矩に合して戒を失はざること。

せしむ。或は沙門、白衣の居士、人王、宰官、童男、童女と作り、是の如く乃至姪女、寡婦、姦偷、屠販、其の事を同うして佛乘を稱讃し、其をして身心三摩地に入らしむ。終に自ら我は眞の菩薩、眞の阿羅漢なりと言ひて、佛の密因を泄らして輕く、未學のものに、唯命終のとき、歎かに遺付あるをば言はず。云何が是人、衆生を惑亂して大妄語を成ぜん。汝世人に教へて三摩地を修せしめんには、後に復、明の大妄語を闡陳せしめよ。是を如来と先佛世尊との第四決定清淨の明海と名く。是故に阿難、若し其大妄語を斷せざる者は、人の糞を刻んで梅檀の形と爲して、香氣を求めんと欲するが如し。是處あること無けん。我比丘に教へて、直心を道場として、四威儀一切の行の中に於て、尚ほ虚假なからしむ。云何が自ら上人の法を得たりと稱せん。譬へば窮人の妾に帝王と號して、自ら誅滅を取らんが如し。況や復法王、如何が妾に竊まん。因地直からざれば、果、紆曲を招く。佛の菩提を求むるとも、臍を噬むの人の如くならん。誰か成就せんと欲する。若し諸の比丘、心直絨の如くならば、一切眞實にして、三摩地に入るに永く魔事なけん。我是人は、菩薩の無上知覺を成就すと印す。我が説く所の如きを名けて佛説と爲す、此の如く説かざるは即ち波旬の説なり。

首楞嚴經

卷第七

大唐神龍元年龍集乙巳五月己卯朔廿三日辛丑
中天竺沙門般刺蜜帝廣州制止道場に於て譯出す

【一】本章に於ては神呪を宣説し、神呪の功德を説き給ふ。
【四種の律儀】殺、盜、婬、妄の四なり。
【心三口四】十惡中の七、慳貪、瞋恚、邪見の心三、綺語、妄語、惡口、兩舌の口四なり。
【佛頂光明……】首楞嚴陀羅尼を指す。
【心呪】心を安定せしむる呪文。

阿難、汝攝心を問ふ。我れ今先づ三摩地に入る修學の妙門を説かん。菩薩の道を求むるには、要らず、先づ此四種の律儀を持つべし。峻きこと氷霜の如くなれば、自ら一切の枝葉を生ずる能はず、心三口四生ずること必らず因なけん。阿難、是の如きの四事、若し遺失せずんば、心尙ほ色香味觸を緣せず、一切の魔事、云何が發生せん。若し宿習ありて滅除すること能はずんば、汝是人に教へて、一心に我が佛頂光明摩訶薩恒多般怛羅無上神呪を誦せしめよ。斯は是如来の無見頂相の無爲の心佛の頂より發輝し、寶蓮華に坐して説く所の心呪なり。且く汝が宿世に摩登伽と摩登伽の因縁恩愛の習氣あり、是れ一生と及び一劫とに非ず。我一たび宣揚するに愛心永く脱して阿羅漢と成る。彼尙ほ婬女にして修行に心なけれども、神力冥に資けて速に無學を證せり。云何が汝等在會の聲聞の、最上乘を求むるに、決定して成佛せんこと、譬へば塵を以て順風に揚ぐるが如くにして、何の艱險か有らん。若し末世に道場に坐せんと欲するもの有らば、先づ比丘の清淨の禁戒を持せよ。要らず常に戒清淨の者、第一の沙門を選択して、以て其師と爲すべし。若し其

【結界】堂塔伽藍の境界を定むること。

【六時】晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜の六時。

【肥膩】雪山にある草名。牛これを食せば醍醐を得と云ふ。

れ眞の清淨の僧に遇はずんば、汝が戒律儀必ず成就せし。戒成じじりて後、新淨の衣を著けて香を然き、閑居して此心佛所説の神呪一百八遍を誦せよ。然して後に結界し、道場を建立して、十方の現住國土の無上如來、大悲の光を放つて、來りて其頂に灌ぎたまはんことを求めよ。阿難、是の如く、末世の清淨の比丘、若は比丘尼、白衣の檀越、心に貪婬を滅し、佛の淨戒を持して、道場の中に於て菩薩の願を發し、出入澡浴して六時に行道せん。是の如く寐ねずして三七日を經ば、我自ら身を現じて其人の前に至り、摩頂し安慰して、其れをして開悟せしめん。阿難、佛に白して言さく、世尊、我如來の無上の悲誨を蒙つて心に開悟し、自ら修證して無學の道の成ぜんことを知れり。末法の修行のもの道場を建立せんことは、云何が結界して佛世尊の清淨の軌則に合はん。佛、阿難に告げたまはく、「若し末世の人、道場を立てんと願はば、先づ雪山の大力の白牛の其山中の肥膩香草を食するを取るべし。此牛は唯雪山の清水を飲みて其糞微細なり。其糞を取りて梅檀に和合して以て其地に泥るべし。若し雪山に非ざれば其牛臭穢なり。地に塗るに堪へず、別して平原に於て地皮を穿り去ること五尺以下にして、其黄土を取つて、上の梅檀、沈水、蘇合、薰陸、鬱金、白膠、青木、零陵、甘松及び鷄舌香に和せよ。此十種を以て、細に羅うて粉となして、土に合せ、泥と成して以て場地に塗り、方圓丈六八角の壇と爲す。壇心に一の金銀銅木の所造の蓮華を置き、華中に鉢を安置せよ。鉢中に先づ八月の露水を盛れ、水中に隨つて所有の華葉を安置せよ。八の圓鏡を取つて、各其方に安じ、華鉢を圍繞せよ。

【兜樓婆】梵音ツルシエカ (Turuska) 香の名。
 【當陽】檀の中央。
 【盧舍那】毘盧舍那のこと。梵音、ブーイローチヤナ (Vairocana) 光明遍照と譯す。佛の名。佛の身光智光が遍く理事無礙の法界を照して圓明たる義なり。
 【烏芻瑟摩】前出。
 【軍荼利】梵音クンダリ (Kundali) 寶瓶の義。五大尊明王の一。南方に配す。
 【毘奈耶】律藏のこと。前出。
 【願教】發願の教。
 【敬懼羅呪】首楞嚴神呪。

鏡の外には十六の蓮華を建立せよ。十六の香鑪は華に間へて鋪設せよ。香鑪を莊嚴し純ら沈水を燒きて火を見さしむること無れ。白牛の乳を取つて十六の器に置き、乳をもて煎餅を爲りて、並に諸の砂糖、油餅、乳藥、蘇合、蜜薑、純蘇、純蜜を蓮華の外に於て、各十六華の外に圍繞して、以て諸佛及び大菩薩に奉るに、毎に食時を以てせよ。若し中夜に在ては、蜜半升を取らば蘇三合を用つて、壇前に別に一つの小火爐を安じて、兜樓婆香を以て香水を煎取して、其炭を沐浴し然て猛熾ならしめ、是に蘇蜜を投げて、炎鑪の内に於て、燒きて煙をして盡さしめて、佛菩薩に享り、其外に遍く幡華を懸けしめよ。壇室の中に於て、四壁に十方の如來及び諸の菩薩の有ゆる形像を敷設せよ。當陽に於て盧舍那を張るべし。釋迦、彌勒、阿闍、彌陀、諸の大變化、觀音の形像と金剛藏とを兼ねて其左右に安置せよ。帝釋梵王烏芻瑟摩並に藍地迦、諸の軍荼利と毘俱胝との四天王等頻那夜迦、門の側に張つて左右に安置せよ。又八鏡を取りて虚空に覆せ懸けて、壇場の中に安ずる所の鏡と方面相對して、其形影をして、重重相渉らしめよ。初七の中に於ては、誠を至して、十方の如來、諸の大菩薩、阿羅漢の號を頂禮し、恆に六時に於て、呪を誦し壇を圍り、心を至して行道せよ。一時に常に行ずること、一百八遍せよ。第二七の中には、一向に心を專にして、菩薩の願を發し、心に間斷無くせよ。我毘奈耶にて、先より願教あり。第三七の中には、十二時に於て、一向に佛の敬懼羅呪を持せよ。第七日に至つては、十方の如來、一時に鏡の光を交ふる處に出現して、佛の摩頂を承けん。即ち道場に於て、

三摩地を修せば、能く是の如きの末世の修學をして、身心明淨なること、猶し瑠璃の如くならしめん。阿難、若し此比丘の本受戒の師、及び同會の中の十比丘等、其中に一の不清淨の者あらば、是の如きの道場多く成就せず。三七の後より端坐安居して一百日を経るに、利根なる者は、座を起たずして須陀洹を得べし。縦ひ其心身に、聖果未だ成せずとも、決定して自ら成佛、謬らざることを知る。汝道場を問ふ、建立是の如し。阿難、佛足を頂禮して、而も佛に曰して言さく、「我出家せしより、佛の橋愛を恃みて、多聞を求むるが故に、未だ無爲を證せず。彼梵天邪術の所禁に遭ひて、心は明了なりと雖も、力自由ならず、文殊に遇ふに頼りて、我をして解脱せしむ。如來の佛頂神呪を蒙ると雖も、冥に其力を獲て尙ほ未だ親聞せず。唯願くば大悲重ねて爲に宣説して、此會の諸の修行の輩を悲救し、末當來の輪廻に在る者に及ぶまで佛の密音を承けて、身意解脱せしめたまへ。」

時に會中の一切の大衆、普く皆禮を作して、如來の秘密章句を聞かんことを行ちたてまつる。

【金剛密迹】金剛神のこと。姓名跋闍維波膩(ゴトミ)金剛手と譯す。五百の夜叉神法を護ると云ふ二つの神なり。

爾時、世尊、肉髻の中より百寶の光を涌し、光の中に千葉の寶蓮を涌出す。化如來ありて寶華の中に坐して、頂より十道百寶の光明を放ち、一一の光明皆遍く十恆河沙の金剛密迹を示現す。山を攀げ杵を持して虚空界に遍せり。大衆仰ぎ觀て畏愛兼を抱き、佛の哀祐を求めて、一心に佛の無見頂相より光を放てる如來の、神呪を宣説したまふことを聽けり。

南無薩怛他蘇伽多耶阿羅訶帝三藐三菩提寫、薩恒他佛陀俱知瑟尼釤、南無薩婆勃陀勃
 地薩踰躡躡、南無薩多南三藐三菩提俱知南、婆舍囉婆伽僧迦喃、南無盧難阿羅漢踰喃、
 南無蘇盧多波那喃、南無婆芻喇陀迦彌喃、南無盧難三藐伽踰喃、三藐伽波囉底波多那
 喃、南無提婆離瑟赦、南無悉陀耶毘地耶陀囉離瑟赦、舍波奴揭囉訶婆囉摩他南、南
 無跋囉訶摩泥、南無因陀囉耶、南無婆伽婆帝、曠吃囉耶、烏摩般帝、婆醯夜耶、南無
 婆伽婆帝、那囉野拏耶、槃遮摩訶三慕陀囉、南無悉羯唎多耶、南無婆伽婆帝、摩訶伽
 囉耶、地喇般刺那藐囉、毘陀囉婆拏藐囉耶、阿地日帝、尸摩舍那泥婆悉泥、摩阻唎伽
 拏、南無悉羯唎多耶、南無婆伽婆帝、多他伽踰俱囉耶、南無般頭摩俱伽耶、南無跋闍
 囉俱囉耶、南無摩尼俱囉耶、南無伽闍俱囉耶、南無婆伽婆帝、帝喇茶輸囉西那、婆囉
 訶囉拏囉闍耶、踰他伽多耶、南無婆伽婆帝、南無阿彌多婆耶踰他伽多耶、阿囉訶帝、
 三藐三菩提耶、南無婆伽婆帝、阿芻鞞耶、踰他伽多耶、阿囉訶帝、三藐三菩提耶、南
 無婆伽婆帝、沙闍耶俱嚙吠柱唎耶、般囉婆囉闍耶、他伽伽多耶、南無婆伽婆帝、三
 補師瑟多、薩憐捺囉刺闍耶、伽他伽多耶、阿囉訶帝、三藐三菩提耶、南無婆伽婆帝、
 舍雞野母那曳、踰他伽多耶、阿囉訶帝、三藐三菩提耶、南無婆伽婆帝、剌怛那雜都囉
 闍耶、踰他伽多耶、阿囉訶帝、三藐三菩提耶、帝飄南無薩羯唎多、翳曇婆伽婆多、薩
 怛他伽都瑟尼釤、薩怛多般怛囉、南無阿婆囉視耽、般囉帝揭岐囉、薩囉婆部多揭囉訶、
 尼羯囉訶揭伽囉訶尼、跋囉瑟地耶叱吃爾、阿伽囉蜜唎柱、般唎怛囉耶寧揭响、薩囉婆

槃陀那日叉尼、薩囉婆突瑟吒、突悉之般那、爾伐囉尼、緒都囉失帝南、羯囉訶婆訶薩囉若
 闍、毘多崩婆那羯囉、阿瑟吒冰舍帝南、那叉利怛囉若闍、婆囉薩陀那羯囉、阿瑟吒南、
 摩訶揭囉訶若闍、毘多崩薩那羯囉、薩婆舍都囉、爾婆囉若闍、呼藍突悉之雜遮那舍尼、
 毘沙舍悉怛囉、阿吉尼烏陀迦囉若闍、阿般囉視多具囉、摩訶般囉鞞持、摩訶疊多、摩
 訶帝闍、摩訶稅多闍婆囉、摩訶跋囉槃陀囉婆悉備、阿唎耶多囉、毘唎俱知、誓婆毘闍
 耶、跋闍囉摩禮底、毘舍曠多、勃騰回迦跋闍囉制喝那阿遮、摩囉制婆般囉質多、跋闍
 囉檀持、毘舍囉遮、扇多舍韓提提補視多、蘇摩曠波、摩訶稅多阿唎摩多囉、摩訶婆囉
 阿般囉、跋闍囉商羯囉制婆、跋闍囉俱摩唎、俱藍陀唎、跋闍囉喝薩多遮、毘地耶乾遮
 那摩唎迦、囉蘇母婆羯囉影那、轉曠遮那俱唎耶、夜囉鬼瑟尼鈇、毘折藍婆摩尼遮、跋
 闍囉迦那迦波囉婆、曠闍那跋闍囉頓稚遮、稅多遮迦摩囉、利者尸波囉婆、翳帝夷帝、
 母陀囉羯拏、婆韓囉曷、掘梵都、印鬼那麼麼寫。
 烏鉢、唎悉揭拏、般刺舍悉多、薩恒他伽都瑟尼鈇、虎鉢、都曠雅、瞻婆那、虎鉢、都
 曠雅、悉毗婆那、虎鉢、都曠雅、波羅瑟地耶三般叉拏羯囉、虎鉢、都曠雅、薩婆藥叉
 喝囉利婆、羯囉訶若闍、毘騰崩薩那羯囉、虎都、都曠雅、者都囉尸底南、揭囉訶婆訶
 薩囉南、毘騰崩薩那囉、虎鉢、都曠雅、囉叉、婆伽梵、薩恒他伽都瑟尼鈇、波囉點闍
 吉唎、摩訶婆訶薩囉、勃樹婆訶薩囉室唎沙、俱知婆訶薩尼帝唎、阿弊提視婆唎多、吒
 吒豐迦、摩訶跋闍囉唎、帝唎善婆那、曼荼囉、烏鉢、莎悉帝簿婆都、麼麼、印鬼那

麼麼寫。

囉閣婆夜、主囉跋夜、阿祇尼婆夜、烏陀迦婆夜、毘婆婆夜、舍薩多囉婆夜、婆囉斫羯
囉婆夜、突怛叉婆夜、阿舍備婆夜、阿迦囉蜜刺柱婆夜、陀羅尼部彌劍波伽波陀婆
夜、烏囉迦婆多夜、刺闍壇茶婆夜、那伽婆夜、毘條怛婆夜、蘇婆囉拏婆夜、藥叉揭囉
訶、囉叉私揭囉訶、毘喇多揭囉訶、毘舍遮揭囉訶、部多揭囉訶、鳩槃荼揭囉訶、補丹
那揭囉訶、迦吒補丹那揭囉訶、悉乾度揭囉訶、阿播悉摩囉揭囉訶、烏檀摩陀揭囉訶、
車夜揭囉訶、醯喇婆帝揭囉訶、社多訶喃、揭婆訶喃、噓地囉訶喃、牡婆訶喃、
謎陀訶喃、摩闍訶喃、闍多訶喃、視比多訶喃、毘多訶喃、婆多訶喃、阿
輸遮訶喇女、賈多訶喇女、帝鈇薩舞鈇、薩婆揭囉訶南、毘陀耶闍唎陀夜彌、雞囉夜彌、
波喇跋囉者迦訶唎擔、毘陀夜闍唎陀夜彌、雞囉夜彌、茶演尼訶唎擔、毘陀夜闍唎陀夜
彌、雞囉夜彌、摩訶般輪般怛夜、噓陀囉訶唎擔、毘陀夜闍唎陀夜彌、雞囉夜彌、那囉
夜拏訶唎擔、毘陀夜闍唎陀夜彌、雞囉夜彌、怛埵伽噓茶西訶唎擔、毘陀夜闍唎陀夜彌、
雞囉夜彌、摩訶迦囉、摩怛唎迦拏訶唎擔、毘陀夜闍唎陀夜彌、雞囉夜彌、迦波唎迦訶
唎擔、毘陀夜闍唎陀夜彌、雞囉夜彌、闍耶羯囉摩度羯囉、薩婆囉訶婆達那訶唎擔、毘
陀夜闍唎陀夜彌、雞囉夜彌、緒咄囉婆者爾訶唎擔、毘陀夜闍唎陀夜彌、雞囉夜彌、毘
唎羊訶唎知、雞囉夜彌、難陀雞沙囉伽拏般帝、素醯夜訶唎擔、毘陀夜闍唎陀夜彌、雞囉夜彌、那
揭那舍囉婆拏訶唎擔、毘陀夜闍唎陀夜彌、雞囉夜彌、阿羅漢訶唎擔、毘陀夜闍唎陀夜

【呪心】 呪の精要

般波質多、突瑟吒質多、嚩唎囉質多、藥叉揭囉河、囉利婆揭囉河、閉摩多揭囉河、毘舍遮揭囉河、部多揭囉河、如繁荼揭囉河、悉乾陀揭囉河、烏恒摩陀揭囉河、車夜揭囉河、阿播薩摩囉揭囉河、宅祛革荼普尼揭囉河、喇佛帝揭囉河、闍彌迦揭囉河、舍俱尼揭囉河、姥陀囉難地伽揭囉河、阿藍婆揭囉河、乾度波尼揭囉河、什伐囉囉迦醯迦、摩帝藥迦、怛嚩帝藥迦、若突託迦、昵提什伐囉惹彭摩什伐囉、薄底迦、鼻底迦、室隸瑟蜜迦、婆爾般帝迦、薩婆什伐囉、室曠吉帝、末陀嚩達嚩劍、阿綺曠劍、日祛曠劍、男唎笑嚩劍、揭囉河揭藍、羯拏輪藍、憚多輪藍、迄唎夜輪藍、末麼輪藍、跋唎室婆輪藍、惹栗瑟吒輪藍、烏陀囉輪藍、羯知輪藍、跋悉帝輪藍、鄒曠輪藍、常伽輪藍、喝悉多輪藍、跋陀輪藍、婆房益伽般囉又伽輪藍、部多惹跋茶、茶普尼什婆囉、陀突曠伽建咄曠吉知婆路多毘、薩般曠河凌伽、輪沙怛囉婆那羯囉、毘沙喻伽、阿耆尼烏陀伽、末囉嚩囉建跢囉、阿伽囉蜜唎咄伽部伽、地栗刺吒、瑟唎瑟質伽、薩婆那俱囉、非引伽弊揭囉唎華又怛囉芻、末囉視吠帝彭姿韓彭、悉怛多鉢怛囉、摩訶跋闍嚩瑟尼彭、摩訶般賴又普藍夜波突陀舍喻闍那、鞞怛隸拏、毘陀耶繫曇迦嚩彌、帝殊繫曇迦嚩彌、般囉毘沱繫曇伽嚩彌、跢好他、唵、阿那隸、毘舍提韓囉跋闍嚩陀唎、繫陀繫陀彌、跋嚩囉謗尼泮、虎餅都嚩雍泮、莎婆訶。

『阿難、是佛頂光聚悉怛多般怛囉祕密伽陀微妙』の章句は、十方一切の諸佛を出生す。十方の如來は此呪心に因つて、無上正遍智覺を成ずることを得たり。十方の如來は、此呪

【自果】自己の修行によりて得らるる證果なり。

【地獄餓鬼・盲聾】

在地獄の難(一)在畜生の難(二)在餓鬼の難(三)在長壽

天の難(四)在瞽聾

瘖の難(五)世智辨

總の難(六)在北鬱

單遮洲の難(七)生

佛前佛後の難(八)

【怨憎……五陰】

八苦のこと、五陰

【秘密藏】首楞嚴

神呪。

心を執つて、諸魔を降伏して、諸の外道を制せり。十方の如來は、此呪心に乘じて寶蓮華に坐し、微摩の國に應ず。十方の如來は此呪心を含んで、微摩の國に於て大法輪を轉ず。十方の如來は此呪心を持して、能く十方に於て摩頂授記す。自果未だ成ぜざるには、亦十方に於て佛の授記を蒙る。十方の如來は此呪心に依つて、能く十方に於て群苦を拔濟す。謂ゆる地獄餓鬼畜生、盲聾瘖瘂、怨憎會苦、愛別離苦、求不得苦、五陰熾盛、大小の諸横は同時に解脫し、賊難兵難、王難獄難、風火水難、飢渴貧窮は、念に應じて銷散す。十方の如來は此呪心に隨つて、能く十方に於て善知識に事へ、四威儀の中に供養すること意の如し。恆沙の如來は、會中に推して大法王子と爲す。十方の如來は此呪心を行じて、能く十方に於て親因を攝受し、諸の小乗をして、秘密藏を聞きて驚怖を生ぜざらしむ。十方の如來は此呪心を誦して、無上覺を成じ、菩提樹に坐し、大涅槃に入る。十方の如來は此呪心を傳へて、滅度の後に於て佛法の事を付し、究竟住持し、戒律を嚴淨して悉く清淨なることを得しむ。若し我是佛頂光聚般怛羅呪を説かんに、且より暮に至るまで、音聲相ひ聯ならん。字句の中間に亦重疊せず、恆沙劫を經とも、終に能く盡すこと能はず。亦此呪を説きて、如來頂と名く。汝等有學は、未だ輪廻を盡さず、心を發し誠を至して阿羅漢を取らんに、此呪を持せずして道場に坐し、其身心をして諸の魔事に遠ざからしむるは是處あること無けん。阿難、若し諸の世界、隨所の國土の有ゆる衆生は、國に隨つて生ずる所の樺皮貝葉紙素白氈に、此呪を書寫して香囊に貯へよ。是人心昏くして未だ誦

【那由他】梵音ナ
ユタ (Nayuta) 萬
億と云ひ、千億と
云ひ、或は數千萬
と云ふ。
【俱胝】梵音コ
テ (Koti) 數の名。

憶すること能はず、或は身上に帶び、或は宅中に書せよ。當に知るべし、是人は其生年を盡すまで、一切の諸毒害すること能はざる所なり。阿難、我今汝が爲に更に此呪の世間を救護して、大無畏を得しめ、衆生の出世間の智を成就することを説かん。若し我が滅後の末世の衆生の、能く自ら誦し若は他に教へて誦せしむること有らば、當に知るべし、是の如く誦持する衆生は、火も焼くこと能はず。水も溺らすこと能はず。大毒小毒も害すること能はざる所なり。是の如く乃至龍天鬼神祇魔魅所有の惡呪も皆著すること能はず、心に正受を得ん。一切の呪咀、厭、蠱、毒藥、金毒、銀毒、草木、蟲蛇、萬物の毒氣も、此人の口に入らば甘露の味と成らん。一切の惡星并に諸の鬼神、殛心の毒人も、是の如きの人に於ては、惡を起すこと能はず。毘那夜迦諸の惡鬼王并に其眷族も、皆深恩を領じて常に守護を加へん。阿難、當に知るべし、是呪には常に八萬四千那由他恆河沙俱胝の金剛藏王菩薩の種族あり、一一に皆諸の金剛衆ありて眷屬と爲り、晝夜に隨侍す。設し衆生ありて、散亂の心に於て三摩地に非ずとも、心に憶し口に持せば、是金剛王は常に彼諸の善男子に隨從せん。何に況や菩提心を決定せる者をや。此諸の金剛菩薩藏王の精心、陰速にして彼神識を發すれば、是人時に應じて、心能く八萬四千恆河沙劫を記憶し、周遍了知して疑惑なき事を得ん。第一劫より乃至後身までは、生生に藥叉羅刹及び富單那、迦吒富單那、鳩槃荼、毘舍遮等、并に諸の餓鬼有形無形有想無想、是の如きの惡處に生ぜず。是善男子、若は讀若は誦、若は書若は寫、若は帶し若は藏めて、諸色もて供養せば、

【河僧祇】印度の
數名、前出。

【五辛】韭、薤、葱、蒜、薑。

【五逆】殺父、殺
母、殺阿羅漢、破
和合僧、出佛身血
の五。

【四棄八棄】四棄
とは殺、姪、盜、

妄の四、主として
男僧の罪。八棄と
は尼僧の罪にして
男僧の四棄に尼僧
の四種缺陷を加へ
たもの。

劫劫に貧窮下賤不可樂の處に生ぜず。此諸の衆生は、縱ひ其自身に福業を作さずとも、十方の如來は、有ゆる功德を悉く此人に與へたまふ。是に由つて恆河沙阿僧祇不可說不可說劫に於て、常に諸佛と同じく一處に生じて、無量の功德惡業の如く、同處に重修して永く分散することなし。是故に能く破戒の人には戒根をして清淨ならしめ、未だ戒を得ざる者には、戒を得しめ、未だ精進ならざる者には、精進を得しめ、智慧なき者には智慧を得しめ、清淨ならざる者には、速に清淨を得しめ、癡戒を持せざるには自ら癡戒を成ぜしむ。阿難、是善男子、此呪を持する時、設ひ禁戒を未だ受けざるの時に犯すとも、持犯の後には衆の破戒の罪、輕重を問ふことなく、一時に銷滅せん。縱ひ酒を飲み五辛を食噉する種種の不淨を経るも、一切の諸佛菩薩、金剛天仙鬼神は、將て過と爲さず、設ひ不淨破弊の衣服を著くるとも、一行一住悉く同じく清淨ならん。縱ひ壇を作さず道場に入らず、亦行記せずとも、此呪を誦持せば、還つて入壇行道の功德に同じ。若し五逆無間の重罪、及び諸の比丘比丘尼の四棄八棄を造るとも、此呪を誦し已らば、是の如きの重業も、猶し猛風の沙聚を吹き散らすが如く、悉く皆滅除して更に毫髮も無からん。阿難、若し衆生ありて、無量無數劫より來、有ゆる一切の輕重の罪障、前世より來、未だ懺悔に及ばざるも、若し能く此呪を讀誦し書寫して、身上に帶持し、若し住處の莊宅園館に安ぜば、是の如きの積業は、猶し湯の雪を銷するがごとく、久しからずして皆無生忍を悟ることを得ん。

【支提】 梵音チャ
イテヤ (Chaitiya) 佛
を供養安置する
所。

【脫閻】 梵音トワ
ジャ (Tivajja) 城
臺高顯の場所。

【由旬】 印度の里
數。前出。

復次に阿難、若し女人ありて未だ男女を生まず、孕まんことを欲せん者、若し能く至心に斯呪を憶念し、或は能く身上に此悉怛多般怛羅を帶せば、即ち福德智慧の男女を生まん。長命を求むる者は即ち長命を得、果報速に圓滿せんことを欲する者は、速に圓滿することを得ん、身命色力も亦復是の如し。命終の後は願に隨つて十方國土に往生して、必定して邊地下賤に生ぜじ、何に況や雜形をや。

阿難、若し諸の國土州縣聚落の飢荒疫癘、或は復刀兵、賊難、鬪諍、兼て餘の一切の厄難の地に、此神呪を寫して、城の四門并に諸の支提或は脫閻の上に安じて、其國土の有ゆる衆生をして此呪を迎へ奉り、禮拜恭敬して一心に供養せしめ、其人民をして各各身に佩び、或は各各所居の宅地に安ぜしめば、一切の災厄は悉く皆銷滅せん。阿難、在在處處の國土の衆生、隨つて此呪を有たば、天龍歡喜して風雨時に隨ひ、五穀豐殷にして兆庶安樂ならん。亦復能く一切の惡星、隨方の變怪を鎮めて、災障起らず、人に横天なく、柵械枷鎖も其身に著かず、晝夜安眠して常に惡夢なからん。阿難、是娑婆界に八萬四千の災變の惡星あり、二十八の大惡星を上首と爲す。復八の大惡星ありて以て其主たり。種種の形と作つて世に出現する時、能く衆生の種種の災異を生ずるとも、此呪の有る地は悉く皆銷滅せん。十二由旬結界の地と成つて、諸惡災祥永く入ること能はず。是故に如來は、此呪を宣示して、未來世に於て初學を保護す。諸の修行者の三摩地に入らんに、身心泰然として大安隱を得て、更に一切の諸魔鬼神、及び無始より來の冤債、宿殃、

【金剛】金剛神、
金剛力士なり。

舊業、陳債、來つて相惱害すること無からん。汝、及び衆中の諸の有學の人、及び未來世の諸の修行の者、我が壇場に依つて、如法に戒を持し、所受の戒主、清淨の僧に逢うて、此呪心に於て疑悔を生ぜざらん。是善男子、此父母所生の身に於て心通を得ずんば十方の如來は便ち妄語と爲りたまはん。是語を説き已りて會中の無量百千の金剛、一時に佛の前に合掌頂禮して、而も佛に白して言さく、「佛の説きたまふ所の如し、我當に誠心に是の如きの菩提を修する者を保護すべし。」

爾時、梵王并に天帝釋、四天大王は、亦佛前に於て同時に頂禮して、而も佛に白して言さく、「審に是の如きの修學の善人あらば、我當に心を盡し誠を至して保護し、其れをして一生の所作願の如くならしむべし。」復無量の藥叉大將、諸の羅刹王、富單那王、鳩槃荼王、毘舍遮王、頻那夜迦諸の大鬼王、及び諸の鬼師ありて、亦佛前に於て合掌頂禮す、「我亦誓願す、是人を護持して、菩提心をして速に圓滿することを得しめん。」復無量の日月天子、風師、雨師、雲師、雷師并に電伯等、年歲巡官諸星の眷屬ありて、亦會中に於て、佛足を頂禮して而も佛に白して言さく、「我亦是修行の人を保護して、道場を安立せんに、所畏なきことを得しめん。」復無量の山神海神、一切の土地水陸空行、萬物の精祇并に風神王、無色界の天ありて、如來の前に於て、同時に稽首して而も佛に白して言さく、「我亦是修行の人を保護して、菩提を成ずるを得るまで、永く魔事なからしめん。」

【乾慧の地】菩薩
修行の段階なり。
【地中】菩薩十地
の中なり。
【等覺】第十地の
菩薩の後に於て
更に一品の無明を
斷じて此位に入る
殆んど佛果の正覺
に等しきが故に等
覺と名く。

爾時、八萬四千那由他恆河沙俱胝金剛藏王菩薩、大會の中に在り、即ち座より起ち、佛足を頂禮し佛に白して言さく、「世尊、我等が輩の如きは、所修の功業久しく菩提を成ずれども、涅槃を取らず、常に此呪に隨つて、末世の三摩提を修する正修行の者を救護せん。世尊、是の如く心を修して正定を求むる人、若は道場に在り、及び餘の經行乃至散心にして聚落に遊戯せんに、我等が徒衆、常に當に隨從して此人を侍衛すべし。縱令魔王自在天、其方便を求むるも、終に得べからず。諸の小鬼神此善人を去ること十由旬の外ならん。彼發心して修禪を樂ふ者をば除く。世尊、是の如きの惡魔若は魔の眷屬、來つて是善人を侵擾せんと欲せば、我寶杵を以て其首を殞碎すること猶し微塵の如くせん、恆に此人をして所作願の如くならしめん。阿難、即ち座より起ち、佛足を頂禮して而も佛に白して言さく、「我が輩愚鈍にして好んで多聞を爲し、諸漏の心に於て未だ出離を求めず、佛の慈誨を蒙り、正しく重修することを得て、身心快然として大饒益を獲たり。世尊、是の如く佛の三摩提を修證して、未だ涅槃に到らざるに、云何なるをか名けて乾慧の地四十四心と爲す、何の漸次に至つてか修行の目を得る、何の方所に詣つてか地中に入ると名くる、云何なるをか名けて等覺の菩薩と爲す。是語を作し已りて五體を地に投じ、大衆一心に佛の慈音を佇ちたてまつり、瞻瞻瞻仰す。

爾時、世尊、阿難を讚じて言はく、「善い哉善い哉、汝等乃ち能く普く、大衆、及び諸の末世の一切衆生の、三摩提を修し大乘を求むる者の爲に、凡夫より大涅槃に終るまで、懸に

【二轉依】二轉依妙果に同じ。聖道により煩惱、所知の二障の種子を轉捨して得る所の菩提、涅槃の二果。

無上正修むじやうしやうしゆの路みちを示しめさんとす。汝な今諦たに聽きけ、當まに汝なが爲ために説とくべし。阿難あなん大衆だいたうしゆ、掌てのひらを合あせ、心こころを剝むうして、默然もくねんとして教をを受うく。佛言ほとけのたまふはく、阿難あなん、當まに知しるべし、妙性めうじやうは圓明えんめいにして諸もろくの名相なむさうを離はなれたり、本來ほんらい世界せかいと衆生しゆじやうとあること無し。妄まうに因よつて生あり、生ありに因よつて滅めつあり、生滅しやうめつを妄まうと名なけ、妄まうを滅めつするを眞まことと名なく。是こゝろを如來にがひの大涅槃だいなげんに詣まらんと欲ぼつせば、先まづ當まに此衆生こゝろしゆじやうと世界せかいとの二顛倒にてんたうの因いんを識しるべし。顛倒てんたう生しやうぜずんば、斷たれ則すなはち如來にがひの眞しんの三摩地さんまぢなり。阿難あなん、云何なをか名なけて衆生しゆじやうの顛倒てんたうと爲なす。阿難あなん、性明じやうめいの心性こころじやうは明圓めいえんなるに由よるが故ゆゑに、明めいに由よつて性じやうを發はつすれば、性じやうより妄見まうけん生しやうじて、畢竟へつじやうの無なより畢竟へつじやうの有あを成じやうす。此有こゝろと所有しゆいうとを所因しよいんとすれば、住ぢゆうと所住しよぢゆうとの相さうは了りやうに根本こんぽんなし。此無住こゝろむぢゆうを本もととして、世界せかい及び諸もろくの衆生しゆじやうを建立たんとしす。本の圓明えんめいに迷まようて是虛妄こゝろしやうまうを生なす、妄性まうじやう體たいなれば所依しよいあるに非あらず。將眞しやうしんに復ふたせんと欲ぼつして眞しんを欲ほつふは、已なに眞しんの眞如まことごとの性じやうに非あらず、非眞ひしんに復ふたを求もとむれば、宛あとして非ひの相さうを成じやうす。非ひの生しやう、非ひの住ぢゆう、非ひの心こころ、非ひの法ほふ、展轉てんてん發生はつじやうして、生力しやうりき發明はつめいすれば、熏くゐんじて以もつて業ごふを成じやうす。同業どうごふ相感さうかんじ、感業かんごふあるに因よつて、相滅さうめつし相生しやうじやうす。是こゝろに由よるが故ゆゑに衆生しゆじやうの顛倒てんたうあり。阿難あなん、云何なをか名なけて世界せかいの顛倒てんたうと爲なす。是有こゝろと所有しゆいうと分段ぶんたん妄まうに生あず、此こゝろに因よつて界立かいりつし、非因ひいんにして所因しよいんたり、無住むぢゆうにして所住しよぢゆうたり、遷流せんりゆうして住ぢゆうまらざれば、此こゝろに因よつて世成せじやうす。三世さんぜ四方しつぱう和合わがく相涉さうせつすれば、變化へんぱの衆生しゆじやうも十二じふに類るいを成じやうす。是故こゝろに世界せかいは、動どうに因よつて聲しやうあり、聲しやうに因よつて色しきあり、色しきに因よつて香かうあり、香かうに因よつて觸そく

【羯邏藍】 前出。

【遏蒲曇】 前出。

【蘇尸】 梵音ペー
シー(Pee)肉樹と
譯す。胎内五位の
一。

あり、觸に因つて味あり、味に因つて法を知る。八妄想に亂して業性と成るが故に、十二區に分る、此に由つて輪轉す。是故に世間の馨香味觸、十二の變を究めて一のせん復を爲す。此輪轉顛倒の相に乗ずるが故に、是れ世界の卵生胎生濕生化生、有色無色有想無想、若し非有色若し非無色、若し非有想若し非無想あり。阿難、世界の虛妄輪廻の顛倒に由り因るが故に、氣に和合して八萬四千の飛沈の亂想を成す。是の如きの故に卵の羯邏藍あり、國土に流轉して、魚鳥龜蛇其類充塞せり。世界の雜染輪廻の欲顛倒に由り因るが故に、滋に和合して八萬四千の横豎の亂想を成す。是の如きの故に胎の遏蒲曇あり、國土に流轉して、人畜龍仙其類充塞せり。世界の執著輪廻の趣顛倒に由り因るが故に、煖に和合して八萬四千の翻覆の亂想を成す。是の如きの故に濕相の蘇尸あり、國土に流轉して、含蠢蠕動其類充塞せり。世界の變易輪廻の假顛倒に由り因るが故に、觸に和合して八萬四千の新故の亂想を成す。是の如きの故に化相の羯南あり、國土に流轉し、轉蛻飛行其類充塞せり。世界の留礙輪廻の障顛倒に由り因るが故に、著に和合して八萬四千の精耀の亂想を成す。是の如きの故に色相の羯南あり、國土に流轉し、休咎精明其類充塞せり。世界の銷散輪廻の感顛倒に由り因るが故に、暗に和合して八萬四千の陰隱の亂想を成す。是の如きの故に無色の羯南あり、國土に流轉して、空散銷沈其類充塞せり。世界の罔象輪廻の影顛倒に由り因るが故に、憶に和合して八萬四千の潛結の亂想を成す。是の如きの故に想相の羯南あり、國土に流轉す、神鬼精靈其類充塞せり。世界の愚鈍輪廻の癡顛倒に由り因る

が故に、頤に和合して八萬四千の枯稿の亂想を成ず。是の如きの故に無想の羯南あり、國土に流轉して、精神化して土木金石と爲り、其類充塞せり。世界の相待輪廻の僞顛倒に由り因るが故に、業に和合して八萬四千の因依の亂想を成ず。是の如きの故に、色相あるに非ずして色を成ずる羯南ありて、國土に流轉し、諸の水母等、蝦を以て目と爲す其類充塞せり。世界の相引輪廻の性顛倒に由り因るが故に、呪に和合して、八萬四千の呼召の亂想を成ず。是に由るが故に、色相なきに非ずして色なき羯南あり、國土に流轉し、呪詛厭生其類充塞せり。世界の合妄輪廻の罔顛倒に由り因るが故に、異に和合して八萬四千の廻互の亂想を成ず。是の如きの故に、相の想あるに非ずして想を成ずる羯南ありて、國土に流轉し、彼清蕪等の異質相成じて其類充塞せり。世界の怨害輪廻の殺顛倒に由り因るが故に怪に和合して八萬四千の食父母の想を成ず。是の如きの故に、想の相なきに非ずして想なき羯南ありて國土に流轉す。土梟等の地に附て兒と爲し、及び破鏡鳥の毒樹の果を以て、抱きて其子と爲して、子成ずれば父母皆其食に遭ふが如くなる其類充塞せり。是を衆生の十二種類と名く。』

首楞嚴經 卷第八

【十二】 本章に於ては修行の方便、功德を明す。

【十二部經】 十二分經とも云ふ。佛說法の輪裁に十二様あること。

大唐神龍元年龍集乙巳五月己卯朔廿三日辛丑
中天竺沙門般刺蜜帝廣州制止道場に於て譯出す

阿難、是の如きの衆生は、一一の類の中に亦各に十二の顛倒を具す。猶ほ目を捏するに亂華の發生するが如く、妙圓眞淨の明心に顛倒して、斯の如きの虛妄の亂想を具足す。汝今佛の三摩提を修證せんとならば、是本因の元より亂想せる所に於て、三の漸次を立てて方に除滅することを得ん。淨器の中に毒蜜を除去して、諸の湯水并に雜灰香を以て、其器を洗滌して、後に甘露を貯るが如し。云何なるをか名けて三種の漸次と爲す。一には修習して其助因を除き、二には眞修して其正性を剋くし、三には増進して其現業に違す。云何なるか助因。阿難、是の如き世界の十二類の生は、自ら至らうすること能はず、四食に依つて住す。謂ゆる段食、觸食、思食、識食なり。是故に佛、一切衆生は皆食に依つて住すと説きたまふ。阿難、一切衆生は、甘を食するが故に生じ、毒を食するが故に死す。是諸の衆生、三摩提を求めんとならば、當に世間の五種の辛荼を斷すべし。是五種の辛は、熱せざるを食すれば姪を發し、生を啖ては慧を増す。是の如きの世界の辛を食する人は、縦ひ能く十二部經を宣説すとも、十方の天仙は其臭穢を嫌うて、咸く皆遠離す。諸の餓鬼等

は、彼の食の次に因つて其唇吻を舐り、常に鬼と與に住すれば、福德日に銷して長く利益なし。是辛を食する人は、三摩地を修するとも、菩薩天仙十方の善神は、來つて守護せず。大方の魔王は其方便を得て、佛身を現作して來りて爲に法を誣き、禁戒を非毀し、姪怒癡を誣す。命終れば自ら魔王の眷屬と爲り、魔羅を受くること盡くれば無間獄に墮す。阿難、善提を修する者は、永く五辛を斷ず、是を則ち名けて第一増進修行の漸次と爲す。云何なるが正性阿難、是の如きの衆生、三摩地に入るには、要らず先づ清淨の戒律を嚴持し、永く淫心を斷じ、酒肉を食せず、火を以て食を淨めて、生氣を啖ふこと無かれ阿難、是修行の人、若し淫と及び殺生とを斷ぜずして、三界を出づとせば、是處あること無けん。當に淫欲を觀すること猶し毒蛇の如くし、怨賊を見るが如くすべし。先づ聲聞の四棄八棄を持して身を執つて勤かす、後に菩薩清淨の律儀を行じて、心を執つて起さざれ。禁戒成就すれば、則ち世間に於て永く相生相殺の業なく、偷劫行はれざれば、相ひ負累すること無し。亦世間に於て、宿債を還さず、是清淨の人三摩地を修するに、父母の肉身にして天眼を須ひざれども、自然に十方世界を觀見し、佛を觀、法を聞きて親しく聖旨を奉じ、大神通を得て十方界に遊び、宿命清淨にして艱險なきことを得、是を則ち名けて第二の増進修行の漸次と爲す。

云何なるか現業阿難、是の如く清淨に禁戒を持する人は、心に貪姪なし。外の六塵に於て、多く流逸せず。流逸せざるに因つて、元に旋つて自ら歸す。塵靛に緣ぜざれば、

【中】菩薩のよく中道の理に合すること。

【陰處界】五陰、十二處、十八界。

根は偶ふ所なし。流を反して全く一なれば、六用行ぜず。十方の國土峻然として清淨なること、譬へば瑠璃の内に寶月を懸けたるが如し。身心快然妙圓平等にして大安隱を獲たり。一切如來の密圓淨妙は、皆其中に現す。是人は即ち無生法忍を獲ん。是漸修より、所發の行に隨つて聖位を安立す。是を則ち名けて第三の増進修行の漸次と爲す。阿難、是善男子は、欲愛乾枯して根境偶はざれば、現前の殘質復續て生ぜず。心を執つて虛明にして、純ら是れ智慧なり。慧性明圓にして十方界に瑩き、乾きて其慧のみ有れば乾慧地と名く。欲習初めて乾きて、未だ如來の法流の水と接はらず。即ち此心を以て、中中流入して圓妙開敷し、眞の妙圓より重ねて眞の妙を發す。妙信常住にして、一切の妄想滅盡して餘りなく、中道純眞なるを信心住と名く。眞住明了なれば、一切圓通して、陰處界の三は礙と爲ること能はず。是の如く乃至過去未來無數劫の中に、身を捨て身に受くる一切の習氣、皆前に現在す。是善男子、皆能く憶念して遺忘なきことを得るを念心住と名く。妙圓純眞にして眞精の化を發す、無始の習氣通じて一の精明のみなり。唯精明を以て眞淨に進趣するを精進心と名く。心精現前して、純ら智心慧を以てするを慧住と名く。智明を執持し、周遍寂湛にして寂妙常凝なるを定心住と名く。定光發明して明性深く入り、唯進んで退くこと無きを不退心と名く。心身安然として保持して失はず、十方の如來の氣分と交接するを護法心と名く。覺明保持して、能く妙力を以て佛の慈光を廻らし、佛に向ひて安住すること、猶し雙鏡の光明相對するに、其中に妙影重重に相入するが如くなるを廻向

【中陰】 死後、生を受くる途の中間の意。

【十身】 菩提身、願身、化身、住持身、相好莊嚴身、勞力身、如意身、福德身、智身、法身

心と名く。心光密に廻らして佛の常凝無上の妙常を獲、無爲に安住して遺失なきを得るを戒心住と名く。戒に住すること自在にして、能く十方に遊で、去る所、顧に隨ふを願心住と名く。阿難、是善男子は、眞の方便を以て此十心を發す。心精輝を發して十用成入し、一心に圓成するを發心住と名く。心中發明せることは、淨瑠璃の内に精金を現するが如く、前の妙心を以て履んで以て地を成するを治地住と名く。心地涉知して俱に明了なることを得、十方に遊履するに留礙なきことを得るを修行住と名く。行と佛と同行して、佛の氣分を受くることは、中陰の身の自ら父母を求むるが如く、陰信冥通して如來の體に入るを生貴住と名く。既に道胎に遊んで、親しく覺胤を奉くること、胎の已に成じて人相の缺けざるが如くなるを方便具足住と名く。容貌佛の如くにして、心相亦同じきを正心住と名く。身心合成して、日に益增長するを不退住と名く。十身の靈相一時に具足するを童眞位と名く。形成り胎を出でて、親しく佛子と爲るを法王子住と名く。表するに成人せるを以て、國の大王、諸の國事を以て太子に分委し、彼刹利王の世子、長成すれば灌頂を陳列するが如くなるを、灌頂住と名く。阿難、是善男子、佛子と成り已りて、無量の如來の妙徳を具足して、十方に隨順するを歡喜行と名く。善く能く一切衆生を利益するを饒益行と名く。自覺覺他、違拒なきを得るを、無瞋恨行と名く。種類を出世して未來際を窮め、三世平等にして十方通達するを無盡行と名く。一切合同して、種種の法門差悞なきことを得るを離癡亂行と名く。則ち同の中に於て群異を顯現し、一一の異相に各各同を見るを善現行と名

【波羅密多】到彼岸、度と譯す。菩薩の修する行

く。是の如く乃至十方の虚空に満足せる微塵の、一一の塵の中に、十方界を現じて、現塵現界相留礙せざるを無著行と名く。種種に現前する、咸く是れ第一の波羅密多なるを尊重行と名く。是の如く圓融して、能く十方諸佛の軌則を成ずるを善法行と名く。一一に皆是れ清淨無漏一眞無爲にして、性の本然なるが故に眞實行と名く。阿難、是善男子、神通を満足し、佛事を成じ已りて、純潔精眞にして、諸の留患に遠ざかり、衆生を度するに當りて度の相を滅除し、無爲の心を廻らして涅槃の路に向ふを、救護一切衆生、離衆生相廻向と名く。其壞すべきを壞して、諸離を遠離するを不壞廻向と名く。本覺湛然として、覺佛覺に齊きを、等一切佛廻向と名く。精眞發明して、地、佛地の如くなるを一切處廻向と名く。世界と如來と互に相涉入して、罣礙なきことを得るを、無盡功德藏廻向と名く。同佛地地の中に於て、各各に清淨の因を生じ、因に依りて涅槃を取る道を發揮するを、隨順平等善根廻向と名く。眞根既に成ずれば、十方の衆生は皆我が本性なり、性圓成就して衆生を失はざるを、隨順等觀一切衆生廻向と名く。一切の法に即して一切の相を離る、唯即と離との二に著する所なきを、眞如相廻向と名く。眞に所如を得て十方無礙なるを、無縛解脫廻向と名く。性徳圓成して法界の量滅するを、法界無量廻向と名く。阿難、是善男子、是清淨の四十一心を盡して、次に四種の妙圓の加行を成ず、即ち佛覺を以て用ひて己が心と爲して、出づるが若くにして未だ出でざること、猶し火を鑽つて其木を然かんと欲するが如くなるを、名けて煖地と爲す。又己が心を以て佛の所履を成じ、依

【加行】修行の功を増加する意。

【二】本章に於ては、六根、六境二習の業報を明す。

るが若くにして依るに非ざることを、高山に登りて身虚空に入るに、下に覆礙あるが如くなるを、名けて頂地と爲す。心佛二ながら同じくして、善く中道を得ること、事に忍ずる人の、懐にも非ず出にも非ざるが如くなるを、名けて忍地と爲す。數量銷滅して、迷覺と中道と二ながら目くる所なきを、世第一地と名く。

阿難、是善男子、大菩提に於て善く通達することを得、覺如來に通じ、佛の境界を盡すを歡喜地と名く。異性より同に入る、同性も亦滅するを離垢地と名く。淨極まり明生するを發光地と名く。明極まり覺滿つるを始慧地と名く。一切の同異至ること能はざる所を離勝地と名く。無爲の眞如、性淨明の露るるを現前地と名く。眞如際を盡すを遠行地と名く。一眞如の心を不動地と名く。眞如の用を發するを善慧地と名く。阿難、是諸の菩薩、此より已往は修習功を畢へ功德圓滿す、亦此地を口けて修習位と名く。慧陰と妙雲と、涅槃の海を覆ふを法雲地と名く。如來は通流し、是の如きの菩薩は順行して至り、覺際入交するを等覺と爲す。阿難、乾慧心より等覺に至り已りて、是覺始めて金剛心の中に獲たり。初め乾慧地よりは是の如く重重にして、單複十二なり、方に妙覺を盡して無上道を成ず。是種種の地は、皆金剛を以て如鼠の十種の深喻を觀察し、奢摩他の中に諸の如來の毘婆舍那を用て清淨に修證し、漸次に深く入る。阿難、是の如く皆三の増進を以ての故に、善く能く五十五位の眞菩提の路を成就す。是觀を作す者を名けて正觀と爲し、若他觀の者を名けて邪觀と爲す。

【妙覺】如來のこ
と。等覺の菩薩は
一品の無明を斷じ
て此位に入る。
【金剛】前出、金
剛三昧。
【毘婆舍那】梵音
ヴィパシユヤナ
（Vipasyana）
觀、觀察と譯す。

【禪那】梵音ドフヤーナ(Dhyana)定と譯す。慮を靜め心を明にして眞理に達すること。
【六品】欲界九品煩惱の前六品。

【菩薩戒】菩薩行を修する人の一般に受持すべき戒律

爾時、文殊師利法王子、大衆の中に在りて即ち座より起ち、佛足を頂禮して、佛に白して言さく、『當に何んが是經を名くべき。我れ及び衆生は云何が奉持せん。』佛、文殊師利に告げたまはく、『是經をば大佛頂悉怛多般羅無上寶印十方如來清淨海眼と名く。亦是救護親因度脫阿難及び此會中の性比丘尼得菩提心入遍知海と名く。亦是如來密因修證了義と名く。亦是大方廣妙蓮花王十方佛母陀羅尼呪と名く。亦是灌頂章句諸菩薩萬行首楞嚴と名く。汝當に奉持すべし。』是語を説き已りて、即時に阿難及び諸の大衆、如來の密印般怛囉の義を開示したまふことを蒙るを得、兼て此經の了義の名目を聞きて、頓に禪那を悟つて聖位を修進し、妙理を増上して、心慮虛凝にして三界の修心の六品の微細の煩惱を斷除せり。即ち座より起ち、佛足を頂禮して合掌恭敬して、佛に白して言さく、『大威德世尊は、慈音無遮にして、善く衆生の微細の沈惑を聞き、我をして今日身心快然として大饒益を得しめたまへり。世尊、此の若きの妙明眞淨の妙心は、本來遍圓なり。是の如く乃至大地草木蠕動含靈は本元より眞如なり。即ち是は如來成佛の眞體佛體眞實なり、云何が復地獄餓鬼畜生修羅人天等の道あらんや。世尊、此道は復本來自ら有りて爲んや、是れ衆生の妄習より生起すと爲んや。世尊、寶蓮香比丘尼の如きは、菩薩戒を持して私に姪慾を行じ、妄に、行姪は殺に非ず偷に非ざれば、業報あること無し』と言ふ。是語を發し已りて、先づ女根より大猛火を生じ、後に節節に於て、猛火燒然として無間獄に墮す。瑠璃大王善星比丘瑠璃は瞿曇の族姓を誅するが爲、善星は妄に一切法空を説きて、

【瑠璃王】 梵音平ルードハカ、増長と譯す舍衛國の王。
【善星】 釋尊の弟子なりしが、釋尊の教を信ぜざりし人。

【内分】 内的感情のこと

【外分】 對象に起す意識。

【願習】 人情に従ふこと。

生身にして阿鼻地獄に陷入せり。此諸の地獄は定處ありと爲んや、復自然と爲んや。彼彼業を發して、各各私に受くるとせんや。唯大慈を垂れて童蒙を發開し、諸の一切持戒の衆生をして、決定義を聞きて歡喜頂戴し、謹潔にして犯すこと無からしめたまへ。佛阿難に告げたまはく、「快い哉此問や、諸の衆生をして邪見に入らざらしめん」とす。汝今諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。阿難、一切衆生は、實に本より眞淨なり。彼妄見に因つて妄習生すること有り、此に因つて内分と外分とを分開す。阿難、内分とは即ち是れ衆生の分内なり。諸の愛染に因つて妄情を發起す、情積んで休まざれば能く愛水を生ず。是故に衆生、心に珍羞を憶へば、口の中に水出づ。心に前の人を憶ひて、或は憐み、或は恨みば、目の中に涙盈つ。財寶を食り求めて、心に愛涎を發すれば、體を擧つて光潤す。心行婬に著すれば、男女の二根自然に流液す。阿難、諸愛は別なりと雖も、流結は是れ同じ。濡濕して昇らざれば自然に従ひ墜つ。此を内分と名く。阿難、外分とは即ち是れ衆生の分外なり。諸の渴仰に因つて虚想を發明す。想積んで休まざれば、能く勝氣を生ず。是故に衆生、心に禁戒を持すれば、擧身輕清なり。心に呪印を持すれば、願砮雄毅なり。心に天に生ぜんことを欲すれば、夢に飛び擧がると想ふ。心に佛國を存すれば、聖境冥に現す。善知識に事ふれば、自ら身命を輕んず。阿難、諸想は別なりと雖も、輕擧は是れ同じ。飛動して沈まざれば、自然に超越す、此を外分と名く。阿難、一切世間の生死相續することは、生は願習に従ひ、死は變流に従ふ。命終の時に臨んで、未だ

【四天】 四天王。

【法忍】 法智を得る前に起る忍可決定の心。

【横生】 畜生のこと。

【阿鼻獄】 阿鼻は梵音アギーチ(Apiti)無間と譯す。八熱地獄の最下。

【六交報】 六根、六識の業報、互に交ること。

煖觸を捨てざる時は、一生の善惡俱時に頗に現じて、死逆生順の二習相ひ交はり、純想なるものは即ち飛んで必らず天上に生ず。若し飛心の中に福を兼ねて、慧と及び淨願とを兼ねれば、自然に心開けて、十方の佛を見たてまつり、一切の淨土へは願に隨つて往生す。情少く想多きものは、輕擧すること遠きに非ず、即ち飛仙と、大力の鬼王と、飛行の夜叉、地行の羅刹と爲りて、四天に遊びて、去る所無礙なり。其中に若し善願あるものは、善心をもて我が法を護持し、或は禁戒を護つて持戒の人に隨ひ、或は神呪を護つて持呪の者に隨ひ、或は禪定を護つて法忍を保護す。是等は親しく如來の座下に住せり。情想均等にして、飛ばず墜ちざるものは、人間に生じて、想明なれば斯れ聰なり。情幽なれば斯れ鈍なり。情多く想少きものは、横生に流入して、重きは毛群と爲り、輕きは羽族と爲る。七情三想なれば、水輪より沈下して火際に生ず。氣を猛火に受けて、身餓鬼と爲り、常に焚燒せられて水能く己を害し、食なく飲なくして百千劫を經るなり。九情一想なれば、火輪より下り洞りて、身は風火の二交過せる地に入り、輕きは有間に生じ、重きは無間に生ず。二種の地獄あり、純情なれば即ち阿鼻獄に沈む。若し沈心の中に、大乘を謗じ、佛の禁戒を毀り、誑妄に法を説き、虚しく信施を食して、濫りに恭敬に膺りて、五逆十重あるもの有らば、更に十方の阿鼻地獄に生ず。造惡の業に循つて、則ち自ら招くと雖も、衆同分の中に兼ねて元地あり。阿難、此等は皆是れ彼の諸の衆生の自業の所感なり。十習の因を造つて、六交報を受く。云何なるをか十因となす。阿難、一には姪習交接して相

【二習】 根、境の
【吒吒……】 八樂地
【】 獅の苦難相。

磨を發し、研磨すること休まず。是の如きの故に大猛火の光中に於て發動すること有り。人の手を以て自ら相磨觸するに、煖相現前するが如し。二習畢然するが故に、鐵床、銅柱の諸事あり。是故に十方一切の如來は、行姪を色目して同く欲火と名く。菩薩は欲を見れば火坑を避くるが如くす。二には貪習交計して相吸を發す、吸覺すること休まず。是の如きの故に積寒、堅氷の中に於て、凍冽すること有り。人の口を以て風氣を吸ひ縮むるに、冷觸の生ずること有るが如し。二習相決ぐが故に、吒吒、波波、羅羅、青赤、白蓮、寒氷等の事あり。是故に十方一切の如來は、多求を色目して同く貪水と名く。菩薩は貪を見ること、擲海を避くるが如し。三には慢習交凌して、相博を發し、馳流して息まず。是の如きの故に騰湧奔波して積流水を爲すことあり。人の口舌自ら相綿味するに因つて、水の發するが如し。二習相鼓するが故に、血河、灰河、熱沙、毒海、融銅、灌吞の諸事あり。是故に十方一切の如來は、我慢を色目して、癡水を飲むと名く。菩薩は慢を見ること、巨溺を避くるが如し。四には瞋習交衝して、相忤ふことを發す。忤結して息まざれば、心熱して火を發し、氣を鑄して金と爲す。是の如きの故に、刀山、鐵樞、劍樹、劍輪、斧鉞、鎗鋸あり。人の冤を衝みて殺氣飛動するが如し。二習相擊つが故に宮割、斬斫、剗刺、槌擊の諸事あり。是故に十方一切の如來は、瞋恚を色目して利刀劍と名く。菩薩は瞋を見ること、誅戮を避くるが如し。五には詐習交誘して相調を發す。引起すること住まらず。是の如きの故に繩木、絞校あるなり。水の田を浸すとき、草木の生長するが如し。二習相延くが

【薩迦耶】梵音サルトワカーヤ・ダルシヤナ (Sattva-kaya-darsana) 自身と譯す。五見の内の身見。

故に、枉械、枷鎖、鞭杖、樞棒の諸事あり。是故に十方一切の如來は、姦偽を色目して同じく譏賊と名く。菩薩は詐を見ること、豺狼を畏るるが如し。六には誑習交欺して相罔を發す、誣罔止まざれば、心を飛ばして姦を造す。是の如きの故に塵土、屎尿、穢汚不淨あり。塵の風に隨つて各所見なきが如し。二習相加ぐが故に、洩溺、騰擲、飛墜、漂淪の諸事あり。是故に、十方一切の如來は、欺誑を色目して、同じく劫殺と名く。菩薩は誑を見ること、蛇虺を踐むが如し。七には怨習交嫌して銜恨を發す。是の如きの故に飛石、投礮、匣貯、車檻、囊盛、囊撲あり。陰毒の人の懷抱に惡を畜ふるが如し。二習相呑むが故に、投擲、撻捉、擊射、挽擻の諸事あり。是故に十方一切の如來は、怨家を色目して違害鬼と名く。菩薩は怨を見ること、鴆酒を飲むが如し。八には見習交明す。薩迦耶と見と戒禁取と、邪悟との諸業の如きは違拒を發して相返を出生す。是の如きの故に、王使主吏の文藉を證執すること、行路の人の來往相見るが如し。二習相交はるが故に、勘問、權詐、考訊、推鞠、察訪、披究して照明し、善惡の童子の手に文簿を執つて、諸事を辯辯することあり。是故に、十方一切の如來は、惡見を色目して、同じく見坑と名く。菩薩は諸の虛妄徧執を見ること、毒窟に入るが如し。九には枉習交加して誣謗を發す。是の如きの故に合山、合石、碾礮、枿磨することあり。譏賊の人の良善を逼枉するが如し。二習相排す、故に押捺、槌按、蹙漉、衝度の諸事あり。是故に十方一切の如來は、怨誑を色目して、同じく譏虎と名く。菩薩は枉を見ること、霹靂に遭ふが如し。十には訟習交誑して藏覆を發す。是の

【故に】二習相發するが故に。

【三】本章に於ては三界、二十五有り相を説く。
【六報】六交報のこと。

如きの故に鑿見照燭すること有り。口中に於て影を藏すること能はざるが如し。故に、惡友、業鏡、火球の宿業を披露し、諸事を對驗することあり。是故に十方一切の如來は、覆藏を色口して、同じく陰賊と名く。菩薩は覆を観ること、高山を戴き巨海を履むが如し。

云何なるをか六報となす。阿難、一切衆生は、六識業を造つて、招く所の惡報は六根より出づ。云何が惡報六根より出づる。一には見の報惡果を招引す。此見、業と交はるときは、則ち臨終の時に、先づ猛火十方界に滿つと見、亡者の神識飛墜して、煙に乗じて無間獄に入るとき、二の相を發明す。一には明を見るときは、則ち能く遍く種種の惡物を見て、無量の畏を生ず、二には暗を見るとき、寂然として見ざれば、無量の恐を生ず。是の如く見火聽を燒くには、能く鑊湯洋銅と爲り、息を燒くには能く黑煙紫焰と爲り味を燒くには能く焦丸鐵唾と爲り、鋼を燒くには能く熱灰鐵炭と爲り、心を燒くには能く星火迸灑して空界に煽鼓することを生ず。二には聞の報惡果を招引す。此聞業と交はるときは、則ち臨終の時先づ波濤天地を沒溺すと見る。亡者の神識降注して、流に乗じて無間獄に入るとき、二相を發明す。一には聽を聞くときは、種種の聞きことを聽きて精神亂す。二には聽を閉づるときは、寂として聞く所なくして幽魄沈沒す。是の如きの聞波、聞に注ぐときは、則ち能く責を爲し詰を爲す。見に注ぐときは、則ち能く雷と爲り吼と爲り、惡毒の氣と爲る。息に注ぐときは則ち能く雨と爲り霧と爲り、諸の毒蟲を灑いで周く身體に滿つ。味

に注ぐときは則ち能く膿と爲り血と爲りて、種種の雜穢あり。觸に注ぐときは、則ち能く畜と爲り鬼と爲り、糞と爲り尿と爲る。意に注ぐときは、則ち能く電と爲り雹と爲りて心魄を摧碎す。三には臭の報惡果を招引す。此喫業と交はるときは、則ち臨終の時先づ毒氣遠近に充塞すと見る。亡者の神識、地より涌出して無間獄に入るとき、二の相を發明す。一には聞を通ずるときは、諸の惡氣を被り、熏ずること極まりて心擾る。二には聞を塞ぐときは氣掩ひて通ぜず、地に悶絶す。是の如きの喫氣息を衝くには、則ち能く質と爲り履と爲る。見を衝くには、則ち能く火と爲り炬と爲る。聽を衝くには、則ち能く液と爲り溺と爲り、洋と爲り沸と爲る。味を衝くには則ち能く餃と爲り爽と爲る。觸を衝くには、則ち能く綻と爲り爛と爲り大肉山と爲る。百千の眼あるもの無量にして哺食す。思を衝くには、則ち能く灰と爲り瘡と爲り、飛砂礫と爲りて身體を擊碎す。四には味の報惡果を招引す。此味業と交はるときは、則ち臨終の時先づ鐵網猛炎熾烈にして周く世界を覆ふと見、亡者の神識下り透りて網に挂り、倒に其頭を懸けて無間獄に入るとき、二の相を發明す。一には氣を吸ふときは結んで寒氷と成り、身肉を凍裂す。二には氣を吐くときは飛んで猛火と爲り、骨髄を焦爛す。是の如きの嘗味嘗に歷るときは、則ち能く承と爲り忍と爲る。見に歷るときは、則ち能く然けたる金石と爲る。聽に歷るときは、即ち能く利き兵刀と爲る。息に歷るときは、則ち能く大鐵籠と爲りて國土に彌覆す。觸に歷るときは、則ち能く弓と爲り箭と爲り、弩と爲り射と爲る。思に歷るときは、則ち能く飛ぶ熱鐵と爲る。

りて、空よりして下る。

五には觸の報惡果を招引す。此觸業と交はるときは、則ち臨終の時先づ大山四面より來り合して、復出づる路なしと見る。亡者の神識大鐵城を見るに、火蛇、火狗、虎狼、獅子、牛頭の獄卒、馬頭の羅刹、手に鎗稍を執つて城門に駈け入れ、無間獄に向はしむるとき、二の相を發明す。一には觸を合するときは、合山體を逼めて骨肉血潰す。二には觸を離するときは、刀劍身に觸れて心肝屠裂す。是の如きの合觸、觸に歷るときは、則ち能く道と爲り觀と爲り、廳と爲り案と爲る。見に歷るときは、則ち能く燒と爲り熱と爲る。聽に歷るときは、則ち能く撞と爲り擊と爲り、仰と爲り射と爲る。息に歷るときは、則ち能く拈と爲り、袋と爲り、考と爲り縛と爲る。背に歷るときは、則ち能く耕と爲り鋤と爲り、斬と爲り截と爲る。思に歷るときは、則ち能く墜と爲り飛と爲り、煎と爲り炙と爲る。六には思の報、惡果を招引す。此思、業と交はるときは、則ち臨終の時先づ惡風國土を吹き壞ると見る。亡者の神識、空に吹き上げられて、旋り落ちて風に乘じて無間獄に墮つるとき、二の相を發明す。一には覺せずして迷ひ極まるときは、則ち荒れて奔走すること息まず。二には迷はずして覺知するときは則ち苦あり、無量に煎燒せられ、痛み深くして忍び難し。是の如きの邪思、思に結するときは、則ち能く方と爲り所と爲り、見に結するときは、則ち能く墜と爲り證と爲る。聽に結するときは、則ち能く大なる合石と爲り、氷と爲り霜と爲り、土と爲り霧と爲り、息に結するときは、則ち能く大火車、火船、火檻と爲る。背に結

するときは、則ち能く大叫喚と爲り、悔と爲り泣と爲り、觸に結するときは、則ち能く大と爲り小と爲り、一日の中萬生萬死することを爲し、偃を爲し仰を爲す。阿難、是を地獄の十因六果と名く。皆是れ衆生の迷妄の所造なり。若し諸の衆生、惡業同じく造れば阿鼻獄に入り、無量の苦を受けて無量の劫を経ん。六根各造れども、彼の作る所に及んで境を兼ね根を兼ぬれば、是人則ち八無間獄に入り、身口意の三刺盜淫を作れば、是人則ち十八地獄に入る。三業兼ねずして、中間に或は一殺一盜を爲せば、是人は則ち三十六の地獄に入り、見に見して一根に單に一業を犯さば、是人は則ち一百八の地獄に入る。是れ衆生の別に作し別に造るに由つて、世界の中に於て同分地に入る。妄想より發生す。本來有るに非ず。

【律儀】佛の制法を守り威儀を整ふこと。戒に同じ。

【魅鬼】人を魅惑する鬼神。

復次に阿難、是諸の衆生は、律儀を非破し、菩薩戒を犯し、佛の涅槃を毀る。諸餘の雜業應劫に燒然し、後に罪を還し畢れば、諸の鬼形を受く。若し本因に於て、物を食つて罪を爲るは、是人罪畢つて、物に遇うて形を成す。名けて怪鬼と爲す、色を食つて罪を爲るは、是人罪畢つて、風に遇うて形を爲す、名けて魅鬼と爲す。惑を食つて罪を爲るは、是人罪畢つて、畜に遇うて形を爲す、名けて蠱毒鬼と爲す。恨を食つて罪を爲るは、是人罪畢つて、衰に遇うて形を成す、名けて癩鬼と爲す。傲を食つて罪を爲るは、是人罪畢つて、氣に遇うて形を爲す。名けて餓鬼と爲す。罔を食つて罪を爲るは、是人罪畢つて、幽に遇うて形

【魔鬼】人の睡眠中惑はかすもの。

を爲す。名けて魔鬼と爲す。明を食つて罪を爲るは、是人罪畢つて、精に遇うて形を爲す、魑魅鬼と名く。成を食つて罪を爲るは、是人罪畢つて、明に遇うて形を爲す、役使鬼と名く。黨を食つて罪を爲るは、是人罪畢つて、人に遇うて形を爲す。傳送鬼と名く。阿難、是人は皆純情を以て業火に墜落し、燒き乾かされ、上り出でて鬼と爲る。此等は皆是白の妄想業の招引する所なり。若し菩提を悟れば、則ち妙圓明にして、本より所有なし。

【咎徴】凶兆。

【休徴】善兆。

復次に阿難、鬼業既に盡くれば、則ち情と想との二俱に空と成る。方に世間に於て元負はせし人の與に、怨對相値ひ、身畜生と爲りて其宿債に酬ゆ。物怪の鬼は、物銷し報盡きて世間に生まるるに、多くは泉類と爲る。風魃の鬼は、風銷し報盡きて世間に生まるるに、多くは狐類と爲る。蟲蠱の鬼は、蟲滅し報盡きて世間に生まるるに、多くは毒類と爲る。衰癘の鬼は、衰窮り報盡きて世間に生まるるに、多くは蝸類と爲る。受氣の鬼は、氣銷し報盡きて世間に生まるるに、多くは食類と爲る。綿幽の鬼は、幽銷し報盡きて世間に生まるるに、多くは服類と爲る。和精の鬼は、和銷し報盡きて世間に生まるるに、多くは應類と爲る。明靈の鬼は、明滅し報盡きて世間に生まるるに、多くは休徴の一切の諸類と爲る。依人の鬼は、人亡じ報盡きて世間に生まるるに、多くは循類と爲る。阿難、是等は皆業火を以て乾枯せられて、其宿債に酬いんとして旁に畜生と爲る。此等も亦皆白の虚妄の業の招引する所なり。若し菩提を悟れば、則ち此妄縁本より所有なし。汝が言ふ所の寶蓮香等、及び

【奢摩他】梵音シヤトハ (Samai) 止、寂靜を譯す。
 【頑類】頑迷の徒。
 【恨類】意の趣くが儘に行動するもの。

瑠璃王善星比丘の如き、是の如きの惡業は、本自ら發明して、天より降るにも非ず、亦地より出づるにも非ず、亦人の與ふるにも非ず、自の妄の招く所にして、還つて自ら來りて受く。菩提心の中には、皆浮塵たり、虛妄想の凝結たるなり。

復次に阿難、是畜生より先債に酬い償ふに、若し彼の酬ゆる者の酬ゆる所に分越すれば、此等の衆生は、還つて復人と爲りて、返りて其剩を徵せん。若し彼力あり兼ねて福德あり、則ち人中に於て、人身を捨てざる時は、彼の力を酬い還す。若し福なき者は、還つて畜生と爲りて、彼の餘直を償ふ。阿難、當に知るべし、若し錢物を用ひ、或は其力を役するは、償ひ足りぬれば、自ら停る如し。其中間に彼の身命を殺し、或は其肉を食するは、是の如く乃至微塵劫を経て、相食し相誅すること猶し輪轉の如く、互に高下と爲りて休息あることなし。奢摩他及び仰の出世を除きては、停り寝むべからず、汝今應に知るべし、彼の梟倫のもの、酬い足りて形を復し、人道の中に生ずるときは、頑類に參合す。彼の咎徴のもの、酬い足りて形を復し、人道の中に生ずるときは、愚類に參合す。彼の狐倫の者の、酬い足りて形を復し、人道の中に生ずるときは、恨類に參合す。彼の毒倫の者の、酬い足りて形を復し、人道の中に生ずるときは、庸類に參合す。彼の相倫の者の、酬い足りて形を復し、人道の中に生ずるときは、微類に參合す。彼の食倫の者の、酬い足りて形を復し、人道の中に生ずるときは、柔類に參合す。彼の服倫の者の、酬い足りて形を復し、人道の中に生ずるときは、勞類に參合す。彼の應倫の者の、酬い足りて形を復し、人道の中に生ずるときは、

【文類】 文才ある輩。

【明類】 聰明の人

【業繫】 業の相續

【法爾】 當然の理法。

【津液】 唾液。

【呪禁】 仙人の間の禁厭呪術。

【交遘】 陰陽を檢る術。

【諸趣】 六趣のこと。

生ずるときは、文類に參合す。彼の休微の者の、酬ひ足りて形を復し、人道の中に生ずるときは、明類に參合す。彼の諸の循倫の者の、酬い足りて形を復し、人道の中に生ずるときは、達類に參合す。阿難、是等は皆宿債畢酬するを以て、形を人道に復せり。皆無始より來かた業繫顛倒して、相生じ相殺す、如來に遇はず、正法を聞かず、摩勞の中に於て法爾として輪轉す。此輩を名けて憍慢すべき者と爲す。阿難、復人に從つて、正覺に依りて三摩地を修せざる有り、別に妄念を修して想を存し形を固くして、山林の人の及ばざる處に遊ぶものに十種の仙あり。阿難、彼の諸の業生は、服餌を堅固にして休息せず、食道圓成するを地行仙と名く。草木を堅固にして休息せず、藥道圓成するを飛行仙と名く。金石を堅固にして休息せず、化道圓成するを遊行仙と名く。動止を堅固にして休息せず、氣精圓成するを空行仙と名く、津液を堅固にして休息せず、潤德圓成するを天行仙と名く。精色を堅固にして、休息せず、吸粹圓成するを通行仙と名く。呪禁を堅固にして休息せず、術法圓成するを道行仙と名く。思念を堅固にして休息せず、思憶圓成するを照行仙と名く。交遘を堅固にして休息せず、感應圓成するを精行仙と名く。變化を堅固にして休息せず、覺悟圓成するを絕行仙と名く。阿難、是等は皆人中に於て、心を鍊して、正覺を修せず、別に生理を得て、壽千萬歳にして、深山、或は大海島の人を絶せる境に休止す斯れ亦た輪廻妄想の流轉なり。三昧を修せず、報盡きて、還り來つて、諸趣に散入す。阿難、諸の世間の人、常住を求めず、未だ諸の妻妾の恩愛を捨つること能はず、邪淫

【初利天】梵音トラーヤストリンシヤーフ (Trayastriṃśat) 卅三天と譯す六欲天の第二
 【須焰摩天】梵音スヤーマ (Svāpiti) 時分と譯す。
 【兜率陀天】梵音ツシタ (Tusita) 妙足、知足と譯す。
 欲界六天の第四。
 【樂變化天】欲界六天の第五。此の天に生れたるものは自ら五塵の欲を變化して娛樂す
 【他化自在天】六欲天の最高にあるを以て第六天とも云ふ。

の中に於て心流逸せず、澄瑩として明を生ずれば命終の後には、日月に鄰る、是の如きの一類を四天王天と名く。己が妻房に於て、姪愛微薄にして、淨居の時に於て全味することを得ず、命終の後日月の明を超えて、人間の頂に居す、是の如きの一類を初利天と名く。欲に逢うて暫く交はるとも、去つて思憶することなく人間に於て動少く靜多きものは、命終の後、虚空の中に於て朗然として安住し、日月の光明上り照らすこと及ばず、是諸人等は、自ら光明あり。是の如きの一類を須焰摩天と名く。一切の時に靜なれども應觸ありて來らば未だ違戻すること能はざるものは、命終の後上昇すること精微にして、下界の諸の上天の境に接はらず、乃至劫壞の三災も及ばず、是の如きの一類を兜率陀天と名く。我は欲心なれども、汝に應じて事を行す、横陳の時に於て、味ふこと蠟を嚼むが如くなるは、命終の後越化地に生ず。是の如きの一類を樂變化天と名く。世間の心なれども、世に同じて事を行じ、行事交はるときに於て、了然として超越するものは、命終の後遍く能く化と無化との境を出超す。是の如きの一類を他化自在天と名く。阿難、是の如きの六天は、形は動を出づと雖も、心跡は尙ほ交はれり。此より已還を名けて欲界と爲す。」

首楞嚴經

卷第九

大唐神龍元年龍集乙巳五月己卯朔廿三日辛丑
 中天竺三沙門般刺蜜帝廣州制止道場に於て譯出す

【二】本章に於ては十種の禪那の現境を説く。
 【梵音アラフマバリシヤドヤーフ】(Brahma parisadya)梵衆と譯す。色界初禪天の第一。
 【梵音アラフマフロヒタ】(Brahmaimaha)第二。色界初禪天の第二。
 【勝流】無染清淨の境に進むこと。
 【初禪】初禪天の意。
 【少光天】色界十八天の第四。この天に未だ光明を放つこと少きが故に少光天と名く。
 【無量光天】色界十八天の第五。この天に至れば身より光明を放つこと無量なりと云ふ。
 【光音天】色界十八天の第六。この天は光明を以て語音とす。

(一)阿難、世間一切の心を修する所の人は、禪那を假らざれば、智慧あることなし。俱能く身を執して淫欲を行せず、若は行若は坐、想念俱に無くして愛染生ぜざれば、欲界に留まることなし。是人念に應じて身、梵侶と爲る。是の如きの一類を梵衆天と名く。欲習既に除きて、離欲の心現はれ、諸の律儀に於て愛樂隨順す。是人時に應じて能く梵徳を行す。是の如きの一類を梵轉天と名く。身心妙圓にして威儀缺けず、禁戒を清淨にして、加ふるに明悟を以てす。是人時に應じて能く梵衆を統べて大梵王と爲る。是の如きの一類を大梵天と名く。阿難、此三の勝流は、一切の苦惱の逼ること能はざる所なり。正しく眞の三摩地を修するに非ずと雖も、清淨の心の中に、諸漏動ぜざれば、名けて初禪と爲す。阿難、其次の梵天は、梵人を統攝し梵行を圓滿じて、澄心不動なれば寂湛光を生ず。是の如きの一類を少光天と名く。光相相ひ然じて照耀盡くること無く、十方界に映じて遍く瑠璃と成る。是の如きの一類を無量光天と名く。圓光を吸持して教體を成就し、發化清淨にして應用無盡なり。是の如きの一類を光音天と名く。阿難、此三の勝流は、一切の憂愁の

【寂滅】生も滅も共になく、無爲寂靜の境界。
 【少淨天】色界十八天の第七。この天の意識は樂受と相應して清淨なり。【無量淨天】色界十八天の第八。この天は清淨無量なりと云ふ。
 【遍淨天】色界十八天の第九。この天は樂受最も勝れ清淨なること遍きが故なり。
 【福生天】色界十八天の第十一。この天は勝れた福力によりて生ず。
 【廣果天】色界十八天の第十二。
 【無想天】色界十八天の第十三。この天に生ずれば一期の用心起らず

逼ること能はざる所なり。正しく眞の三摩地を修するに非ずと雖も、清淨の心の中に龜漏已に伏すれば、名けて二禪と爲す。

阿難、是の如きの天人は、圓光、音を成す。音を披き妙を露し、精行を發成して寂滅の樂に通ず。是の如きの一類を少淨天と名く。淨空現前して引發際なく、身心輕安にして寂滅の樂を成す。是の如きの一類を無量淨天と名く。世界と身心と、一切閑淨にして淨徳成就し、勝託現前して寂滅の樂に歸す。是の如きの一類を遍淨天と名く。阿難、此三の勝流は大隨順を具し、身心安隱にして無量の樂を得。正しく眞の三摩地を修するに非ずと雖も、安隱の心の中に歡喜畢く具はるを、名けて三禪と爲す。阿難、復次に、天人は身心を逼めず、苦因已に盡せども、樂常住に非ざれば、久くして必らず壞生ず。苦樂の二心俱時に頓に捨てて蠱重の相滅して淨福の性生ず。是の如きの一類を福生天と名く。捨心圓融し、勝解清淨にして、福無遮の中に、妙隨順を得て、未來際を窮む。是の如きの一類を福愛天と名く。阿難、是天の中に從つて、二の岐路あり。若し先心の無量淨光より、福とく愛天やう。阿難、是天の中に從つて、二の岐路あり。若し先心の無量淨光より、福徳圓明にして、修證して而も住する、是の如きの一類を廣果天と名く。若し先心に於て、雙べて苦樂を厭ひ、捨心を精研すること相續して斷ぜざれば、捨道を圓窮して身心俱に滅し、心慮灰凝して、五百劫を經。是人既に生滅を以て因と爲せば、不生滅の性を發明すること能はずして、初半、劫に滅し、後半、劫に生ず。是の如きの一類を無想天と名く。阿難、此四の勝流は、一切世間の諸の苦樂の境の動すること能はざる所なり。無爲の眞の不動地に

【九品の習氣】 欲界、初禪、二禪、三禪の各九品の積

【無類天】 色界十八天の第十四。この天に於ては欲界の苦樂共に離る

【無熱天】 色界十八天の第十五。この天の心境は依もなく處もなく清涼自在にして熱惱するものなし。

【色究竟天】 色界十八天の第十八。この天は色界の究竟なり。

【阿頼耶識】 梵音

アーラヤ (Alaya) 藏識と譯す。

【末那】 梵音 マナ (Mana) 意と譯す。

【阿頼耶識】 梵音

非ずと譯も、有所得の心、功用純熟すれば、名けて四禪と爲す。阿難、此中に復五不遷天あり。下界の中に於て、九品の習氣俱時に滅盡し、苦樂變び亡すれば、下に居を下することなし。故に捨心の樂同分の中に於て、居處を安立す。阿難、苦樂兩ながら滅して、類を無熱天と名く。十方世界に、妙見圓澄にして、更に塵像一切の沈垢なし。是の如きの一類を善見天と名く。精見現前して、陶鑄無礙なり。是の如きの一類を善見天と名く。群幾を究竟し、色性の習を窮めて、無邊際に入る。是の如きの一類を色究竟天と名く。阿難、此不遷天は、彼諸の四禪四位の天王、獨り欽ひ聞くこと有れども、知見すること能はず、今の世間の曠野深山は、聖道場の地なれども、皆阿羅漢の住持する所なるが故に、世間の羅人は見ること能はざる所なるが如し。阿難、是十八天は、獨行にして交はることなく、未だ形累を盡さず。此より已還を名けて色界と爲す。復次に阿難、是有頂の色邊際の中より、其間に復二種の岐路あり。若し捨心に於て智慧を發明し、慧光圓通して便ち塵界を出で、阿羅漢と成り、菩薩乘に入る。是の如きの一類を、名けて廻心の大阿羅漢と爲す。若し捨心に在つて、捨厭成就すれば、身の礙を爲すことを覺して、礙を銷して空に入る。是の如きの一類を名けて空處と爲す。諸礙既に銷して、無礙の無も滅す。其中に唯阿頼耶識と全の末那と半分の微細とを留む。是の如きの一類を名けて識處と爲す。空處既に亡じ、識心都て滅して、十方寂然として適に往く攸なし。是の如きの一類を無所有處と名く。識

【無色界】三界の一。色界が色身に撃縛せられて自由を得ざるを厭ひて、この界に於ては形色なく、ただ識のみありて住す【補特迦羅】梵音ブドカラ(Devadāra)數取趣、又は人と譯す。有情又は有情の我を云ふ。【阿修羅】梵音スラ(Aśura)非天道と譯す。十界、六道の一。【人趣】六趣の一人道に同じ。【天趣】六趣の一天道に同じ。

性不動にして以て窮研を減す。無盡の中に於て盡性を發宣すれば、存するが如くして存せず、盡くるが如くして盡くるに非ず。是の如きの一類を名けて非想非非想處と爲す。此等は空を窮むれども、空の理を盡さず。不還の天より、聖道の窮まる者なり。是の如きの一類を、不廻心鈍阿羅漢と名く。若し無想の諸の外道の天より、空を窮めて歸せざるは、迷漏無聞にして、便ち輪轉に入る。阿難、是諸の天上の各々の天人は、則ち是れ凡夫の業果の酬答なり。答ふること盡きぬれば輪に入る。彼天王は、即ち是れ菩薩の三摩提に遊んで漸次に増進し、聖倫に廻向して、修行する所の路なり。阿難、是四空天は、身心滅盡し、定性現前して、無業果の色、此より終に速ぶまで、無色界と名く。此れ皆妙覺明心を了せずして、妄を積んで妄を發しう。三界の中間に、妄に七趣に隨つて沈溺する補特迦羅ありて、各其類に従ふ。復次に阿難、是三界の中に、復四種の阿修羅の類あり。若し鬼道に於て護法力を以てすれば、通を成じて空に入る。此阿修羅は、卵よりして生ず。此れ鬼趣の所攝なり。若し天中に於て、徳を降して貶墜せば、其卜居する所日月に鄰れり。此阿修羅は、胎よりして出づ。人趣の所攝なり。修羅王あり、世界を執持するに、力洞にして畏なく、能く梵王及び天帝釋四天と權を争ふ。此阿修羅は、變化に因つて有り。天趣の所攝なり。阿難、別に分の下劣の修羅あり。大海の心に生じて、水の穴口に沈んで、旦に虚空に遊び、暮には水に歸つて宿す。此阿修羅は、濕氣に因つて有り。畜生趣の攝なり。阿難、是の如きの地獄、餓鬼、畜生、人、及び神仙、天、洎び修羅七趣を精研するに、

【三業】殺、盜、姪の三。

皆是れ昏沈諸の有爲の相なり。妄想に生を受け、妄想到業に従ふ。妙圓明無作の本心に於ては、皆空華の如くにして、元より所著なし。但一の虚妄にして、更に根緒なし。阿難此等の衆生は、本心を識らずして、此輪廻を受け、無量劫を經とも、眞淨を得ず。皆殺盜姪に隨順するに由るが故に、此三種に反すれば、又則ち出でて復盜姪なきものに生る。有をば鬼倫と名け、無をは天趣と名け、有無相傾けて輪廻の性を起す。若し妙に三摩提を發することを得れば、則ち妙常寂なり。有無二ながら無にして、無二も亦滅す。尙ほ不殺不偷不姪すらし、云何が更に殺盜姪の事に従はん。阿難、三業を斷せざれば、各各に私あり、各各の私に因つて、衆私同分あり。定處なきに非ず、妄より發生す。妄を生ずること因なければ、尋究すべきこと無けん。汝竭めて修行して菩提を得んと欲せば、要らす三惑を除け。三惑を盡さざれば、縦ひ神通を得るとも、皆是れ世間有爲の功用なり。習氣滅せざれば魔道に落ち、妄を除かんと欲すと雖も、倍虚偽を加ふべし。如來説いて哀憐すべき者と爲したまふ。汝妄に自ら造れり、菩提の咎には非ず。是説を作す者を、名けて正説と爲す。若し他説の者は、即ち魔王の説なり。

即時に如來、將に法座を罷めんとして、師子の床に於て七寶の几を攬り、紫金山を廻らして、再び來り倚り倚つて、普く大衆及び阿難に告げて言はく、「汝等有學の緣覺聲聞、今日心を廻らして、大菩提無上の妙覺に趣けり。吾れ今已に眞修行の法を説く、汝猶ほ未だ奢摩他毘婆舍那を修する微細の摩事を識らず。魔境現前するとき、汝識ること能はずん

【五種の神通】天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通の五。
 【漏盡】六神通の一。再見の惑を斷じて再び三界に迷はず解脱を得たるを云ふ。

ば、心を洗ふこと正に非ずして邪見に落ちん。或は汝が陰魔、或は復天魔、或は鬼神に著き、或は魘魅に遭はんに、心中明めずんば、賊を認めて子と爲さん。又復中に於て少を得て足れりと爲んこと、第四禪の無間比丘、妄に聖を證せりと言つて、天の報已に畢りて、衰相現前するとき、阿羅漢の身後有に遭ふと誇りて、阿鼻地に墮ししが如くならん。汝諦に聽くべし、吾れ今汝が爲に子細に分別せん。阿難起立し、并に其會中の同き有學の者は、歡喜頂禮して、伏して慈誨を聽けり。佛、阿難及び諸の大衆に告げたまはく、汝等當に知るべし、有漏の世界の十二類の生、本覺妙明覺圓の心體は、十方の佛と無二無別なり。汝妄想して理に迷ひ咎を爲すに由つて、癡と愛と發生す。生發すれば遍く迷ふ、故に空性あり。迷を化して息まざれば、世界生ずることあり。則ち此十方微塵の國土の無漏に非ざる者は、皆是れ迷頑妄想の安立なり。當に知るべし、虛空の汝が心内に生ずること、猶し片雲の太清の裏に點するが如し。況や諸の世界の虛空に在るをや。汝等一人眞を發して元に歸すれば、此十方の空は、皆悉く銷殞す。云何が空中の所有の國土にして而も振裂せざらん。汝が輩、禪を修し三摩地を飾めて、十方の菩薩及び諸の無漏の大阿羅漢、心精通溜して、當處湛然たり。一切の魔王及び鬼神と諸の凡夫の天は、其宮殿の故なく崩裂し、大地振折し、水陸飛騰するを見て、驚き懼れざることなし。凡夫は昏暗にして、遷り詛ることを覺らず、彼等は、咸く五種の神通を得たり、唯漏盡を除く。此塵勞を戀はば、如何が汝をして其處を摧裂せしめん。是故に神鬼及び諸の天魔、魘魅、妖精は

【五陰】 五蘊

三昧の時に於て、衆來つて汝を惱まさん。然も彼諸魔は、大に彼魔勞の内に怒ること有り
 と雖も、汝が妙覺の中には、風の光を吹くが如く、刀の水を断るが如くにして、了に相觸
 れず。汝は沸ける湯の如く、彼は堅き氷の如し。煖氣漸く凝づけば、今日に銷滅す。徒
 に神力を恃めども、但其客たり。成就と破魔とは、汝が心中の五陰の主人に由る。主人若
 し迷へば、客其便を得ん。當に禪那に處して、覺悟して惑ふこと無かるべし。則ち彼魔
 事は汝を奈何ともすること無けん。陰銷して明に入るとき、則ち彼諸魔は、く陶器を受く。
 明能く暗を破す、近づけば自ら銷滅す。如何が敢て留めて續定を擾亂せん。若し明悟せ
 ずして、陰の所迷を迷らば、則ち汝阿難は、必らず魔子と爲つて、魔人を成就せん。摩登
 伽が如きは、殊に眇劣なりと爲す。彼唯汝を呪して佛の律儀を破る。八萬の行の中に、一
 一戒を毀らんとす。心清淨なるが故に、尙ほ未だ淪溺せず。此は乃ち汝が寶覺全身を塵
 らんとす。宰臣の家の忽ち籍没に逢ひ、宛轉零落して哀救すべきことなきが如し。

阿難、當に知るべし、汝道場に坐して、諸念を銷落せよ。其念若し盡くれば、則ち諸
 の離念一切精明にして、動靜に移らず、憶妄如一ならん。當に此處に任して三摩提に入
 るべし。明日の人の大幽暗に處するが如く、精性妙淨なれども、心未だ光を發せず、此
 れ則ち名けて色陰の區宇と爲す。若し日明朗なれば、十方洞に開けて、復幽黯なきも、
 色陰の盡くると名く。是人は則ち能く劫濁を超越す。其所由を觀するに、堅固の妄想を以
 て、其本と爲す。阿難、此中に在りて妙明を精研するに當つて、四大織らざれば、少選の

【閻浮檀】梵音ヤンブーナダ(閻浮樹名。捺陀は江又は海の義。閻浮樹の下を流るる河の中に生ずる砂金を閻浮檀金と云ふ。)

【毘盧遮那】梵音ブライローチヤナ(Vairocana)光明遍照と譯す。佛の名。

間に身能く礙を出づるを以て、此を精明前境に流溢すと名く。斯れ但功を用て暫く是の如きことを得るとも、聖證と爲すに非ず。聖心を作さざれば善境界と名け、若し聖解を作せば即ち群邪を受く。阿難、復此心を以て妙明を精研するに、其身内に徹す。是人忽然として、其身内より蟻蚶を拾ひ出すとも、身相宛然として、亦傷毀すること無し。此を精明形體に流溢すと名く。斯れ但精行をもて、暫く是の如きことを得るとも、聖證と爲すに非ず。聖心を作さざれば善境界と名け、若し聖解を作さば、即ち群邪を受く。又此心を以て内外精研すれば、其時魂魄意志精神、執受の身を除きて、餘は皆涉入して互に賓主と爲る。忽ち空中に於て說法の聲を聞き、或は十方に同じく密義を敷くを聞く、此を精魄遮相に離合すと名く。善種を成就するものは、暫く是の如きことを得るとも、聖證と爲すに非ず。聖心を作さざれば善境界と名け、若し聖解を作さば、則ち群邪を受く。又此心を以て、澄露皎發して内光發明すれば、十方遍く閻浮檀の色と作り、一切の種類は化して如來と爲る。時に忽ち毘盧遮那、天光臺に踞して千佛圍繞し、百億の國土及び蓮華と、俱時に出現すと見る、此を心魂靈悟の染する所、心光研明にして、諸の世界を照らすと名く。暫く是の如きことを得るとも、聖證と爲すに非ず。聖心を作さざれば善境界と名け、若し聖解を作さば則ち群邪を受く。又此心を以て妙明を精研すれば、觀察すること停まらず、抑按降伏し、制止超越す。時に於て忽然として十方の虚空、七寶の色と成り、或は百寶の色同時に遍滿して相留礙せず、青黃赤白各各純ら現す。此を抑按の功力分に逾えたりと名

く。暫く是の如きことを得るとも、聖證と爲すに非ず。聖心を作さざれば善境界と名け、若し聖解を作さば即ち群邪を受く。又此心を以て、研究澄徹して精光亂れざれば、忽ち夜合に於て暗室の内に在るに、種種の物を見ること白晝に殊ならず、而も暗室の物も亦除滅せず、此を心細密澄にして、其見の視る所洞幽なりと名く。暫く是の如くなることを得るとも、聖證と爲すに非ず。聖心を作さざれば善境界と名け、若し聖解を作さば即ち群邪を受く。又此心を以て聞入虚融すれば、四體忽然として草木に同じ。火もて焼き刀もて研れども曾て覺ゆる所なし。又則ち火光も焼熱すること能はず、縱ひ其肉を割けども、猶し木を削るが如し、此を塵併して四大性を排すと名く。一向に入ること純なれば、暫く是の如くなることを得るとも、聖證と爲すに非ず。聖心を作さざれば善境界と名け、若し聖解を作せば即ち群邪を受く。

又此心を以て清淨を成就して、淨心の功極れば、忽ち大地十方山河を見るに、皆佛國と成り、七寶を具足し、光明遍滿す。又恆沙の諸佛如來、空界に遍滿して、樓殿華麗なるを見る。下、地獄を見、上、天宮を觀るに、障礙なきことを得たり、此を欣厭、想を凝らすこと、日深く想久うして化して成すと名く。聖證と爲すに非ず。聖心を作さざれば善境界と名け、若し聖解を作せば即ち群邪を受く。又此心を以て、研究すること深遠なれば、忽ち中夜に於て遙遠方の市井街巷の親族眷屬を見て、或は其語を聞く、此を心を追めて、逼むること極まれば飛び出づるが故に、多く隔見すと名く。聖證と爲すに非ず。

【二】本節に於ては魔事を説き定惠回明の行を教ふ。

聖心を作さざれば善境界と名け、若し聖解を作せば即ち群邪を受く。又此心を以て、研究して精極まれば、善知識を見るに、形態變移す。少選にして端なく種種に遷改す。此を邪心魘魅を含笑し、或は天魔の其心腹に入つて、端なく法を説きて、妙義に通達せしむるに遭ふと名く。聖證を爲すに非ず。聖心を作さざれば魔事消歇す、若し聖解を作せば即ち群邪を受く。阿難、是の如きの十種の禪那の現境は、皆是れ色陰に用心交互するが故に斯事を現す。衆生は頑迷にして自ら付り暈らず、此因縁に逢うて、迷うて自ら識らず、謂うて聖に登れりと言つて、大妄語成ずれば、無間獄に墮す。汝等當に如來滅後に依つて、末法の中に於て、斯義を宣示して、天魔をして其方便を得しむること無く、保持覆護して無上道を成ぜしむべし。

阿難、彼善男子、三摩提奢摩他を修する中に、色陰盡くれば、諸佛の心を見ること、明鏡の中に其像を顯現するが如し。若し所得あれども、而も未だ用ふること能はざること、猶し魔人の手足宛然として、見聞すること惑はざれども、心客邪に觸れて動くこと能はざるが如し。此を則ち名けて受陰の區宇と爲す。若し魔咎歇むときは、其心身を離れて、返つて其面を觀、去住自由にして復留礙なきを、受陰盡くと名く。是人は則ち能く見濁を超越す。其所由を觀るに、虛明の妄想を以て其本と爲す。阿難、彼善男子、當に此中に在つて大光耀を得るとき、其心發明して内に抑ふること分に過ぐれば、忽ち其處に於て無窮の悲を發す。是の如く乃至蚊蠅を觀見するも、猶し赤子の如く、心に憐愍を生じて覺えず涙を

【正受】 奢摩多に同じ。

【三僧祇】 僧祇は阿僧祇の略阿僧祇は無數と譯す菩薩が佛果を得る迄に經る修行の年時なり。

【慧力】 五力の一
【盧舍那】 毘盧舍那に同じ。

流す。此を功用抑摧すること過越せりと名く。悟れば則ち咎なきを聖證と爲すに非ず。覺了して迷はざれば、久くして自ら銷歇す。若し聖解を作さば、則ち悲魔ありて其心暗に入り、人を見ては則ち悲みて、啼泣すること限りなし。正受を失つて當に淪墜に従ふべし。阿難、又彼定中の諸の善男子、色陰銷し、受陰明白にして、勝相現前するを見て、感澤すること分に過れば、忽ち其中に於て無限の勇を生ず。其心猛利にして、志諸佛に齊しく、三僧祇は一念に能く越えんと謂へり。此を功用陵率すること過越すと名く。悟れば則ち咎なし、聖證と爲すに非ず。覺了して迷はざれば、久くして自ら銷歇す。若し聖解を作さば、則ち狂魔ありて其心暗に入り、人を見るときは則ち誇つて、我慢比なし。其心乃至上は佛を見ず、下は人を見ず、正受を失つて當に淪墜に従ふべし。又彼定中の諸の善男子、色陰銷し、受陰明白なるを見て、前んでは新證なく、歸つては故居を失ひ、智力衰微にして中墜地に入つて、適に見る所なく、心中忽然として大枯渴を生ず。一切の時に於て、沈憶して散ぜず、此を將て以て勤精進の相と爲す。此を心を修するに慧なくして自ら失すと名く。悟れば則ち咎なし、聖證と爲すに非ず。若し聖解を作さば、則ち憶魔ありて其心暗に入り、旦夕に心を撮つて、懸けて一處に在く。正受を失つて當に淪墜に従ふべし。又彼定中の諸の善男子、色陰銷し、受陰明白なるを見て、慧力定に過ぐれば、猛利に失ありて、諸の勝性を以て心中に懷き、自心に已に是れ盧舍那かと疑つて、少を得て是れりと爲す。此を用心恆審を亡失して、知見に溺ると名く。悟れば則ち咎なし、聖證と爲す

【慢】以下七慢
中五慢を擧ぐ。

に非ず。若し聖解を作さば、則ち下劣易知足の魔ありて其心腑に入り、人を見ては自ら言はく、「我無上第一義諦を得たり」と。正受を失つて當に淪墜に従ふべし。又彼定中の諸の善男子、色陰銷し、受陰明白なるを見て、新證は未だ獲ず、故心は已に亡び、二際を極覽して、自ら艱險を生じ、心に於て忽然として無盡の憂を生ずること、鐵床に坐するが如く、毒藥を飲むが如し。心に活んことを欲せず、常に人に於て其命を害せしめて、早く解脱を取らんことを求む。此を修行方便を失ふと名く。悟れば則ち咎なし、聖證と爲すに非ず。若し聖解を作さば、則ち一分の常憂愁の魔ありて其心腑に入り、手に刀劍を執りて自ら其肉を割き、其壽を捨てんことを欣ぶ。或は常に憂愁して、山林に走り入り、人を見るに耐へず、正受を失つて當に淪墜に従ふべし。又彼定中の諸の善男子、色陰銷し、受陰明白なるを見て、清淨の中に處して心安隱なる後、忽然として自ら無限の喜生ずること有りて、心中の歡悅自ら止むること能はず。此を輕安にして慧の自ら禁ずることなしと名く。悟れば則ち咎なし、聖證と爲すに非ず。若し聖解を作さば、則ち一分の好喜樂の魔ありて其心腑に入り、人を見ては則ち笑ひ、衢路の傍に於て自ら歌ひ自ら舞ふ、自ら已に無礙解脱を得たりと謂ひ、正受を失つて當に淪墜に従ふべし。又彼定中の諸の善男子、色陰銷し、受陰明白なるを見て、自ら已に是れりと謂ひて、忽ち端なく大我慢の起ること有り、是の如く乃至慢と過慢と及び慢過慢、或は増上慢、或は卑劣慢の一時に俱に發して、心中に尙ほ十方の如來を輕んず、何に況や下位の聲聞緣覺をや。此を見勝れて

慧の自ら救ふこと無しと名く。悟れば則ち咎なし。聖證と爲すに非ず。若し聖解を作さば、則ち一分の大我慢の魔ありて其心腑に入り、塔廟を禮せず、經像を撞毀し、檀越に謂て言はく、「此は是れ金銅なり、或は是れ土木なり、經は是れ樹葉なり、或は是れ墨花なり、肉身の眞常なるを自ら恭敬せずして、却て土木を崇むるは、實に顛倒せり」と爲す。其深信なる者は、共に從つて毀り碎き、地中に埋み棄てて衆生を疑誤して無間獄に入り、正受を失つて當に淪墜に従ふべし。又彼定中の諸の善男子、色陰銷し、受陰明白なるを見るとき、精明の中に於て、精理を圓悟して、大隨順を得、其心忽に無量の輕安を生じ、已に言よく二華と成りて大自在を得たり」と。此を慧に因つて諸の輕清を獲と名く。悟れば則ち咎なし、聖證と爲すに非ず。若し聖解を作さば、則ち一分の好輕清の魔ありて其心腑に入り、自ら満足せりと謂ひて更に進むことを求めず。此等は多く無間比丘と作つて、後生を疑誘して阿鼻獄に墮す。正受を失つて當に淪墜に従ふべし。又彼定中の諸の善男子、色陰銷し、受陰明白なるを見るとき、明悟の中に於て、虛明の性を得て、其中に忽然として永滅に歸向し、因果を廢無して、一向に空に入り空心現前すれば、乃至、心に長く斷滅の解を生ず。悟れば則ち咎なし、聖證と爲すに非ず。若し聖解を作さば、則ち空魔ありて其心腑に入り、乃ち持戒を誘して、名けて小乘と爲し、菩薩は空を悟る、何の持犯か有らん」といふ。其人常に信心の檀越に於て、酒を飲み肉を喫つて、廣く姪穢を行すれども、魔力に因るが故に、其前の人をして疑誘を生ぜざらしむ。鬼心久しく入りぬれ

【六十の聖位】 菩薩の證證。 善
【意生身】 又は意
識身。唯意によつ
て生ずる身のこと

ば、或は尿管を食すること酒肉に等く、一種俱に空にして、佛の律儀を破り、人を誤りて罪に入り、正受を失つて當に淪墜に従ふべし。又彼定中の諸の善男子、色陰銷し、受陰明白なるを見るとき、其虚明を味つて、深く心骨に入れば、其心忽に無限の愛生することあり、愛極まれば狂を發して便ち貪欲を爲す。此を定境に安順して心に入るとき、慧の白ら持すること無ければ、誤つて諸欲に入ると名く。悟れば則ち咎なし、聖證と爲すに非ず。若し聖解を供さば、則ち欲魔ありて其心腑に入り、一向に欲を説きて菩提の道と爲し、諸の白衣を化して平等に欲を行ぜしめ、其姪を行する者を持法子と名く。神鬼の力の故に、末世の中に於て、其凡愚を攝して其數百に至る。是の如く乃至一百二百或は五六百、多きは千萬に滿つ。魔心脈を生じて其身體を離るれば、威徳既に無くして王難に陥り、衆生を疑誤して無間獄に入らしめ、正受を失つて當に淪墜に従ふべし。阿難、是の如き十種の禪那の現境は、皆是れ受陰に用心交互するが故に斯事を現す。衆生は頑迷にして、自ら付り量らず、此因縁に逢うて、迷うて自ら識らず、謂うて聖に登れりと言ふ。大妄語成ずれば無間獄に墮す。汝等亦當に如來の語を將て、我が滅後に於て、末法に傳示して、遍く衆生をして斯義を聞悟せしむべし。天魔をして其方便を得しむること無く、保持覆護して無上道を成ぜしめよ、阿難、彼善男子、三摩提を修して、受陰盡くれば、未だ漏盡きずと雖も、心共形を離るること、鳥の籠を出づるが如し。已に能く成就すれば、是凡身より上は菩薩の六十の聖位を歷て、意生身を得て、往に隨つて無礙なり。譬へば人ありて、

【巧を求むる】善
巧を求むるの意。

熟く寐て寤言するに、是人は則ち別の所知なしと雖も、其言は已に音韻倫次することを成じて、寐ざる者をして、咸く其語を悟らしむるが如し。此を則ち名けて想陰の區宇と爲す。若し勤念盡きて浮想銷除すれば、覺明の心に於て塵垢を去るが如し。一倫の生死、首尾圓に照すを、想陰盡くと名く。是人は則ち能く煩惱濁を超ゆ。其所由を觀するに、觸通の妄想を以て其本と爲す。阿難、彼善男子、受陰虛妙にして、邪慮に遭はず、圓定發明せる三摩地の中に心に圓明を愛し、其精思を鏡くして善巧を食求すれば、爾時に天魔其便を候ひ得て、精を飛ばし人に附きて口に經法を説かん、其人は是れ其魔の著けるを覺らずして、自ら言つて、「無上涅槃を得たり」と謂へり。彼巧を求むる善男子の處に來りて、座敷き法を説く。其形斯須ありて、或は比丘と作つて、彼人をして、或は帝釋と爲り、或は婦女と爲り、或は比丘尼と見しむ。或は閻空に寢るに、身に光明あり、是人愚迷にして、惑うて菩薩なりと爲して、其教化を信じ、其心を搖蕩して、佛の律儀を破し、潛在貪欲を行ぜしむ。口中に災祥變異を言ふを好んで、或は如來は某の處に出世と言ひ、或は劫火を言ひ、或は刀兵を説きて、人を恐怖せしめて、其家資をして故なく耗散せしむ、此を怪鬼年老いて魔と成り、是人を惱亂すと名く。厭足の心生じて、彼人の體を去れば、弟子と師と、俱に王難に陥る。汝當に先づ覺して輪廻に入らざるも、迷惑して無間獄に墮するを知らざるなり。阿難、又善男子、受陰虛妙にして邪慮に遭はず、圓定發明せる三摩地の中に心遊蕩を愛し、其精思を飛ばして、經歷を食求すれば、爾時に天魔其便を候ひ得

【宿命】
指す。

五神通を

て、精を飛ばし人に附きて、口に經法を説かしむ。其人、亦魔の著けることを覺知せずして亦自ら無上涅槃を得たりと言ふ。彼遊を求むる善男子の處に來つて、座を敷きて法を説くに、自ら形は變ずることなくして、其聽法の者は忽ち自ら身を見れば、寶蓮華に坐して、全體化して紫金光聚と成る。一衆の聽人各各是の如くして未曾有なることを得たり。是人愚迷にして、惑うて菩薩なりと爲して、其心を婬逸して佛の律儀を破り、潛在貪欲を行之、口中に好んで諸佛の應世を言ひ、某の處、某の人は、當に是れ、某の佛、身を化して此に來れるなるべし、某の人は即ち是某の菩薩等來りて人間を化すといふ。其人見るが故に、心に傾渴を生ずれば、邪見密に興つて、種智銷滅す。此を魅鬼年老いて魔と成り、是人を惱亂すと名く。厭足の心生じて、彼人の體を去れば、弟子と師と、俱に王難に陥る。汝當に先づ覺して輪廻に入らざるも、迷惑して無間獄に墮するを知らざるなり。又善男子、受陰虚妙にして邪慮に遣はず、圓定發明せる三魔地の中に於て錦溜を愛し、其精思を澄して契合を貪求すれば、爾時に天魔其便を候ひ得て、精を飛ばし人に附きて、口に經法を説かしむ。其人は實に魔の著けることを覺知せずして、亦自ら「無上涅槃を得たり」と言ふ。彼合を求むる善男子の處に來つて、座を敷きて法を説くに、其形及び彼聽法の人外には還變なけれども、其聽く者をして未だ法を聞かざる前に、心に自ら開悟して、念念移易し、或は宿命を得、或は他心あり、或は地獄を見、或は人間の好惡の諸事を知り、或は口に偈を説き、或は自ら經を誦すれば、各各歡娛して、未曾有なることを得しむ。

是人愚迷にして、惑ひて菩薩と爲し、其心を縮愛し、佛の律儀を破り、潛在食欲を行じ、口中に好んで、佛に大小あり、某佛は先佛、某佛は後佛、其中に亦眞佛、假佛、男佛、女佛あり。菩薩も亦然りと言ふ。其人見るが故に、本心を洗滌して邪悟に入り易し、此を魅鬼年老いて魔と成り、是人を惱亂すと名く。厭足の心生じて、彼人の體を去れば、弟子と師と、俱に王難に陥る。汝當に先づ覺して輪廻に入らざるも、迷惑して無間獄に墮すべきを知らざるなり。又善男子、受陰虚妙にして邪慮に遺はず、聞定發明せる三摩地の中に心に根本を變して、物化の性の終始を窮覽し、其心を精爽にして、辨析を食求すれば、爾時に天魔其便を候ひ得て精を飛ばし人に附きて、口に經法を説くに、其人先づ魔の著けることを覺知せずして、亦自ら無上涅槃を得たりと言ふ。彼元を求むる善男子の處に來つて、座を敷きて法を説くに、身に威神ありて、求むる者を摧伏し、其座下をして、未だ法を聞かずと雖も、自然に心に伏せしむ。是諸人等は、佛の涅槃菩提法身を將て、即ち是れ現前の我が肉身の上にとす。父子子運代に相ひ生ずれば、即ち是れ法身の常住にして絶えざるなり。都て現在を指して即ち佛國と爲し、別に淨居及び金色の相なしといふ。其人信愛して先心を亡失し、身命歸依して未曾有なることを得。是等は愚迷にして、惑うて菩薩なりと爲し、其心を推し究めて佛の律儀を破り、潛在食欲を行す。口中に好んで、眼耳鼻舌は皆淨土たり。男女の二根は則ち是れ菩提涅槃の眞處なりと言ふ。彼無知の者は、是穢言を信ず、此を蠱毒魔勝の惡鬼年老いて魔と成り、是人を惱亂すと名く。厭足の心生

【四事】 飯食、衣服、臥具、醫藥の

じて彼人の體を去れば、弟子と師と俱に王難に陥る。汝當に先づ覺して輪廻に入らざるも迷惑して無間獄に墮することを知らざるなり。又善男子、受陰虛妙にして邪慮に遭はず、圓定發明せる三摩地の中に心に懸應を愛し、周流精研して冥感を食求すれば、爾時に天魔其便を候ひ得て、精を飛ばして人に付き、口に經法を説かしむるに、其人元より魔の著けることを覺知せずして、亦自ら無上涅槃を得たりと言ふ。彼應を求むる善男子の處に來つて座を敷きて法を説くに、能く聽衆をして、暫く其身を見ること百千歳の如くならしむ。心に愛染を生じて、捨離すること能はず、身奴僕と爲りて、四事を以て供養するに疲勞を覺えず、各各其座下の人の心をして、是先師本の善知識なりと知らしむ。別に法愛を生じて粘すること膠漆の如くして、未曾有なることを得。是人愚迷にして、惑うて菩薩なりと爲し、其心に親近して佛の律儀を破り、潛在食欲を行す。口中に好んで、我前世に於て、某の牛の中に於て先づ某の人を度す、當時は是れ我が妻妾兄弟なり、今來つて相度す。汝と相隨つて、某の世界に歸つて某の佛を供養せんと言ひ、或は別に大光明天あり、佛中に於て住す、一切如來の休居する所の地なりと言ふ。彼無知の者は、是虛誑を信じて、本心を遺失す。此を魔鬼年老いて魔と成り、是人を惱亂すと名く。厭足の心生じて彼人の體を去れば、弟子と師と俱に王難に陥る。汝當に先づ覺して輪廻に入らざるも、迷惑して無間獄に墮することを知らざるなり。又善男子、受陰虛妙にして邪慮に遭はず、圓定發明せる三摩地の中に心に深入を愛し、已を刻めて辛勤し、陰寂に處せんことを樂ひ、靜謐

【本業】過去に於る業。

を貪求すれば、爾時に天魔其便を候ひ得て、精を煮ばして人に附き、口に經法を説くに、其人本より魔の著けることを覺知せず、亦自ら無上涅槃を得たりと言ふ。彼陰を求むる善男子の處に來つて、座を敷きて法を説くに、其聽く人をして各各本業を知らしむ。或は其處に於て一人に語りて言はく、「汝今未だ死せざるに、已に畜生と作れり、勅して一人をして後に於て尾を踏ましめ、頓に其人をして起つことを得ること能はざらしむ。是に於て一衆心を傾けて欽伏す。人の心を起すこと有れば、已に其聲を知る、佛の律儀の外に重ねて精苦を加へ、比丘を誹謗し、徒衆を罵詈し、人事を託き露して譏嫌を避けず、口中に好んで未然の麩糲を言ひ、其時に至るに及んで、毫髮も失ふこと無し。此を大力の鬼年老いて魔と成り、是人を憐亂すとす。雙足の心生じて、彼人の體を去れば、弟子と師と俱に王難に陥る。汝當に先づ覺して輪廻に入らざるも、迷惑して無間獄に墮することを知らざるなり。又善男子、受陰虛妙にして升應に遭はず、圓定發明せる三摩地の中に心に知見を愛し勤苦研尋して、宿命を貪求すれば、爾時に天魔其便を候ひ得て、精を煮し人に附きて、口に經法を説くに、其人殊に魔の著けることを覺知せず、亦自ら「無上涅槃を得たり」と言ふ。彼知を求むる善男子の處に來つて、座を敷きて法を説くに、是人端なく說法の處に於て、大寶珠を得たり。其魔或時は化して畜生と爲り、口に其球及び雜珍寶、簡策符牘、諸の奇異の物を銜んで、先づ彼人に授けて、後に其體に著く。或は聽く人を誘うて、地下に藏すに明月の球ありて、其處を照耀す、是諸の聽く者は未曾有なることを得て、多く藥草を

【五欲】財欲、色欲、飯食欲、名欲、睡眠欲の五。

【四衆】佛の四種弟子。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四。

食して、嘉饌を餐はざるが故に、或時は日に一麻一麥を餐つて、其形肥へ充てることは魔力の持するが故なり。比丘を誹謗し、徒衆を罵詈して、譏嫌を避けず、口中に好んで他方の寶藏、十方の聖賢潛匿の處を言ふ。其後に従ふ者は、往往に奇異の人あることを見る。是を山林土地城隍川嶽の鬼神、年老いて魔と成ると名く。或は姪を宣べて佛の律儀を破り、承事の者と潜に五欲を行する有り。或は精進にして純ら草木を食し、定まれる行事なくして、是人を憫亂する有り。厭足の心生じて彼人の體を去れば、弟子と師と多くは王難に陥る。汝當に先づ覺して輪廻に入らざるも、迷惑して無間獄に墮することを知らざるなり。又善男子、受陰虚妙にして、邪慮にして遭はず、圓定發明せる三摩地の中に心に神通種種の變化を愛し、化元を研究して神力を貪取すれば、爾時に天魔其便を候ひ得て、精を飛し人に附きて、口に經法を説くに、其人誠に魔の著けることを覺知せず、亦自ら無上涅槃を得たりと言ふ。彼通を求むる善男子の處に來つて、座を敷きて法を説くに、是人或は復手に火光を執り、手に其光を撮て聽く所の四衆の頭上に分つ。是諸の聽く人の頂上の火光は皆長た數尺、亦熱性なくして曾て焚燒せず。或は水の上を行くこと、平地を履むが如し。或は空中に於て安坐して動ぜず、或は瓶内に入り、或は囊中に處す。牖を越へ垣を透るに、曾て障礙なく、唯刀兵に於て自在を得ず。自らはれ佛なりと言うて、身に白衣を著けて、比丘の禮を受け、禪律を誹謗し、徒衆を罵詈し、人事を託き露にして、譏嫌を避びず。口中に常に神通自在なりと説き、或は復人をして傍に佛土を見しめ、鬼力人を惑

【入滅】 滅度に入ること。入涅槃に同じ。

はすも眞實あるに非ず。行姪を讀數し、魔行を毀らす。諸の猥態を將て、以て傳法と爲す。此を天地の大力の山精、海精、風精、河精、土精、一切草木の劫を積める精魅と名く、或は復龍魁、或は壽終る仙の再び活きて魁と爲れる、或は仙の期終へて、年を計るに應に死すべきを、其形化せざるに他の怪の附く所、年老いて魔と成りて是人を惱亂すと名く、厭足の心生じて、彼人の體を去れば、弟子と師と、多くは王難に陷る。汝當に先づ覺して輪廻に入らざるも、迷惑して無間獄に墮するを知らざるなり。又善男子、受陰虚妙にして邪慮に遭はず、固定發明せる三摩地の中に心に入滅を愛し、化性を研究して、深空を貪求すれば爾時に天魔其便を候ひ得て、精を飛ばして人に付き、口に經法を説くに、其人は終に魔の著けることを覺知せず、亦自ら「無上涅槃を得たり」と言ふ。彼空を求むる善男子の處に來つて、座を敷きて法を説くに、大衆の内に於て、其形忽ち空にして、衆を見る所なし。還つて虚空より突然として出でて、存没自在なり。或は其身を現するに、洞なること瑠璃の如し。或は手足を垂れて、旃檀の氣を作す。或は大小便、厚石室の如し、戒律を誦毀し、出家を輕賤す。口中に常に因なく果なく、一たび死すれば永く滅して、復後身及び諸の凡情なしと説く、空寂を得ると雖も潛に食欲を行ふ。其欲を受くる者は亦空心を得て、因果を廢無す。此日月薄蝕の精氣、金玉芝草、麟鳳龜鶴の、千萬年を経とも、死せずして靈と爲り、國土に出生して、年老いて魔と成り、其人を惱亂すと名く。厭足の心生じて、彼人の體を去れば、弟子と師と多くは王難に陷る。汝當に先づ覺して輪廻

【分段】二種生死の。三界生死の果報のこと。【變易】二種生死の。變易生死なり。

【遮文茶】梵音チヤンダ(Chanda)鬼神なり。【毘舍童子】梵音ヒシヤーチヤ(Visi)鬼神の名。

に入らざるも、迷惑して知らざれば無間獄に墮すべし。又善男子、受陰虚妙にして邪慮に遭はず、圍定發明せる三摩地の中に心に長壽を愛して、辛苦研幾して永歳を食求すれば、分段の生を棄てて、頓に變易の細常住を希ふ。爾時に天魔其便を候ひ得て、精を飛して人に付き、口に經法を説くに、其人は竟に魔の著けることを覺知せず、亦自ら無上涅槃を得たりと言ふ。彼生を求むる善男子の處に來つて、座を敷きて法を説くに、好んで他方の往還滯りなしと言ふ。或は萬里を経て、瞬息に再び來るに、皆彼方に於て其物を取り得或は一處に於て、一宅の中に在り、數歩の間に其東より西の壁に詣至せしめ、是人急に行くに、年を累ねて到らず、此に因つて心に信じて、佛の現前したまへるかと思ふ。口中に常に十方の衆生は、皆是れ吾が子なり、我は諸佛を生ず、我は世界に出づ、我は是れ元佛なり、出世自然にして修得に因らず」と説く。此を住世自在の天魔と名く。其眷屬の遮文茶及び四天王の毘舍童子の如きをして、未發心の者其虚明を利するときは彼精氣を食せしむ。或は師に由らずして、其修行する人をば、親しく自ら觀見して、執金剛汝に長命を與ふと稱して、美女の身を現じて、盛に貪欲を行せしむ。未だ年歳を逾えざるに、肝腸枯竭し、口に兼ねて獨言す。聽くに妖魅の若く、前の人未だ詳にせざるに、多くは王難に陥る。未だ刑に遇ふに及ばざるに、先に已に乾死す。彼人を憐亂して、以て殂殞に至す。汝當に先づ覺して輪廻に入らざるも、迷惑して無間獄に墮することを知らざるなり。阿難、當に知るべし、是十種の魔は、末世の時に於て、我が法の中に在つて、出家修道し、或は人の體

【正遍知覺】三藐三菩提の譯。佛覺の義。

【魔の眷】魔の眷屬のこと。

に付き、或は形を現じて、皆已に正遍知覺を成ずと言つて、姪欲を讚歎し、佛の律義を破つて、先の惡魔の師と魔の弟子と、姪姪相傳せん。是の如きの邪精其心腑に魅き近きは則ち九たび生じ、多きは百世を踰えて、眞の修行をして總て魔の眷と爲さしむ。命終の後は必らず魔民と爲りて、正遍知を失して無間獄に墮す。汝今未だ先づ寂滅を取るを須ひず、縦ひ無學を得たりとも、願を留めて彼末法の中に入りて、大慈悲を起して、正心深信の衆生をして、魔に著せずして正知見を得しめよ。我今汝を度して已に生死を出せり。汝佛語に違ふを、佛恩を報ずと名くべし。阿難、是の如きの十種の禪那の現境は、皆是れ想陰の用心交互するが故に斯事を現す。衆生は頑迷にして、自ら付り羣らず、此因縁に逢うて、迷うて自ら識らず、謂うて聖に登れりと言ふ。大妄語成ずれば無間獄に墮す。汝等必らず須く如來の語を將て、我が滅後に於て、末法に傳示して、遍く衆生をして斯義を開悟せしめ、天魔をして其方便を得しむること無く、保持覆護して、無上道を成せしむべし。」

首楞嚴經 卷第十

大唐神龍元年龍集乙巳五月己卯朔廿三日辛丑
中天竺沙門般刺蜜帝廣州制止道場に於て譯出す

【一】本節に於ては十種の外道狂解を説く。

【陳習】 宿習。

【同生の基】 由つて出づる所の行陰を指す。

【一】阿難 彼善男子、三摩提を修して、想陰盡きれば、是人平常に夢想銷滅して、寤寐恆一なり。覺明虛靜なること、猶し晴空の如し。復讎重前塵の影事なし。諸の世間の山河大地を觀するに、鏡の鑑明にして、來るも黏く所なく、過ぐるも蹤跡なく、虚しく受けて照らし應ずるが如し。了に陳習なく、唯一の精眞のみなり。生滅の根元此より披露す。諸の十方十二の衆生を見るに、畢く其類を殫くして、未だ其各命の由緒に通ぜずと雖も、同生の基を見るに、猶し野馬の燭爛として清擾するが如くにして、浮摩根の究竟の樞元たり、此を則ち名けて行陰の區宇と爲す。若し此清擾燭爛たる元性は、性元澄に入つて、一に元習を澄ますこと、波濤の滅化して澄水と爲るが如くなるを、行陰盡と名く。是人は則ち能く衆生濁を超ゆ。其所由を觀するに、幽隱妄想を以て其本と爲す。阿難、當に知るべし是正知を得る者摩他の中に、諸の善男子、凝明正心なれば、十類の天魔其便を得ず。方に精研して生類の木を窺むることを得て、本類の中に於て、生元露るれば、彼幽清の圓に擾動する元を觀る。圓元の中に於て計度を起せば、是人は二無因論に墜入す。一には、

【本無因】萬物の本體を本來無と見るもの。

【本無因】撥無因果の見。

【圓常】周遍常住の義。行陰の生滅相續すること。

是人本無因なりと見る。何を以ての故に。是人は既に生變全く滅るることを得て、眼根の八百の功德に乗じて、八萬劫の有らゆる衆生の業流、漚環して此に死し彼に生ずるを見る。衆生の其處に輪廻するを見て、八萬劫の外は、冥として觀る所なし。便ち是解を作さく、「此等世間の十方衆生は、八萬劫より來がた、無因にして自ら有り」と。此計度によつて、正遍知を亡じ、外道に墮落し、菩提の性に惑ふ。二には、是人末無因なりと見る。何を以ての故に。是人は生に於て既に其根を見るに、人は人を生ずと知り、鳥は鳥を生ずと悟る。鳥は從來黒く、鵲は從來白し、人天は本堅なり、畜生は本横なり、白は洗ひ成せるに非ず、黒は染め造るに非ず、八萬劫より復改移なし。今此形を盡すも、亦復是の如くならん。而我本來菩提を見ず、云何が更に菩提を成ずる事あらんや。當に知るべし、今日一切の物象は、皆本無因なりと。此計度によつて、正遍知を亡じ、外道に墮落して、菩提の性に惑ふ。是を則ち名けて第一の外道の立無因論と爲す。阿難、是三摩提の中に、諸の善男子、凝明正心なれば、魔は便を得ず。生類の本を窮め、彼幽清にして常に擾動する元を觀じて、圓常の中に於て計度を起せば、是人四の遍常論に墜入す。一には、是人は心と境との性を窮むるに、二處無因なり、修習して能く二萬劫の中の十方衆生の有ゆる生滅は、咸く皆循環して曾て散失せずと知り、計して以て常と爲す。二には、是人は四大の元を窮むるに、四性常住なり。修習して能く四萬劫の中の十方衆生の有らゆる生滅は、咸く皆體恆にして曾て散失せずと知り、計して以て常と爲す。三には、是人は六根末那と執受の心意

【劫壞の處】 色界
三禪天以下の處。
【劫不壞】 色界四
禪天以上の處。

識の中の本元由の處を窮むるに、性常恆なるが故に、修習して能く八萬劫の中に一切衆生、循環して失はざれば本來常住なりと知り、不失の性を窮めて、計して以て常と爲す。四には、是人既に想の元を盡くして、生理更に流止運轉することなし。生滅の想心は今已に永く滅して、理の中に自然に不生滅を成じ、心の所度に因つて、計して以て常と爲す。此計常によつて、正遍知を亡じ、外道に墮落して、菩提の性に惑ふ、是を則ち名けて第二の外道の立圓常論と爲す。又三摩の中に、諸の善男子、堅凝正心なれば、魔は便を得ず生類の本を窮め、彼幽清の常に擾動する元を觀じて、自他の中に於て計度を起せば、此人は四顛倒の見、一分の無常、一分の常論に墜入す。一には、是人は妙明の心を觀するに、十方界は遍くして、湛然なるを以て究竟の神我と爲す。是に從つて則ち我十方に遍せりと計す。凝明にして不動せず、一切衆生は、我が心中に於て自ら生じ自ら死す、則ち我が心性、之を名けて常と爲す。彼生滅する者は、眞の無常の性なり。二には、此人は其心を觀ぜずして、遍く十方恆沙の國土を觀するに、劫壞の處を見ては名けて究竟の無常の種性と爲し、劫不壞の處をば究竟の常と名く。三には、此人別して我が心を觀するに、精細微密なること、猶し微塵の如く、十方に流轉す。性は移改なければども、能く此身をして即ち生じ即ち滅せしむ。其不壞の性をば、我性の常と名け、一切の死生の我より流出するをば、無常の性と名く。四には、是人は想陰盡ることを知り、行陰の流するを見て、行陰の常に流するを計して常の性と爲し、色受想等の今已に滅盡せるを名けて無常と爲す。此れ

【有邊】以下に示せる如く有邊、無邊の二。

【三摩】三摩提なり。

一分は無常、一分は常なりと計度するに由るが故に、外道に墮落して、菩提の性に惑ふ、是を則ち名けて第三の外道の一分常論と爲す。又三摩の中に、諸の善男子、堅凝正心なれば、魔は便を得ず。生類の本を窮め、彼の幽清の常に擾動する元を觀じて、分位の中に於て計度を生ずれば、是人は四有邊論に墮入す。一には、是人は心に生元の流用息まざることを計す。過未を計しては名けて有邊と爲し、相續心を計しては、名けて無邊と爲す。二には、是人は八萬劫を觀するるとき、則ち衆生を見る、八萬劫の前は、寂として聞見なし、聞見なき處を名けて無邊と爲し、衆生ある處を名けて有邊と爲す。三には、是人は我遍く知りて、無邊の性を得たりと計す。彼の一切の人は、我が知の中に現すればなり。我曾て彼の知の性を知らず、彼の無邊を得ざるの心を名くれば、但有邊の性なりと。四には、是人は行餘の空を窮めて、其所見を以て、心路に一切衆生を壽度するに、一身の中に其れ或く皆半ば生じ半ば滅すと計す。唯けし其世界一切の所有も、一半は有邊、一半は無邊なりと。是の有邊無邊を計度するに由りて、外道に墮落して、菩提の性に惑ふ。是を名けて則ち第四の外道の立有邊論と爲す。又三摩の中に、諸の善男子、堅凝正心なれば、魔は便を得ず。生類の本を窮め、彼の塵清の常に擾動する元を觀じて、知見の中に於て計度を生ずれば、是人は四種類倒の不死輪廻計戲論に墮入す。一には是人は變化の元を觀じて、遷流の處を見ては、之を名けて變と爲す、相續の處を見ては、之を名けて恆と爲す。見の所見の處をば、之を名けて生と爲す。見に見ざる處をば、之を

名けて滅と爲す、相續の因性斷ぜざる處をば、之を名けて増と爲す、正しく相續する中に、中の離せる所の處をば、之を名けて滅と爲し、各々に生ずる處をば、之を名けて有と爲し、五互に亡ずる處をば、之を名けて無と爲す。理を以て都て觀すれば、用心の別見なり。求諸の人ありて、來りて其義を問へば、答へて言はく、「我れ今亦是生亦是滅、亦是有亦是無、亦是増亦是減なり」と。一切の時に於て、皆其語を亂して、彼の前人をして章句を遺失せしむ。一には是人は諦に其心の五互に無なる處を觀じて、無に因つて證を得たり。人あり來つて問へば、唯一字を答へて、但其れ無と言ふ。無を除くの餘は、言説する所なし。三には是人は諦に其心の各々に有なる處を觀じて、有に因つて證を得たり。人あり來つて問へば、唯一字を答へて、但其れ是と言ふ。是を除くの餘は、言説する所なし。四には、是人有無俱に見る、其の境の枝れたるが故に、其の心も亦亂る。人あり來つて問へば、答へて「亦有は即ち是れ亦無なれども、亦無の中には是れ亦有ならず」と言ひ、一切矯亂して窮結すべきことなし。此矯亂虚無を計度するに由つて、外道に墮落して、菩提の性に惑ふ。是を則ち名けて第五の外道四顛倒性不死矯亂遍計虚論と爲す。又、三摩耶の中、諸の善男子、堅凝正心なれば、魔は便を得ず。生類の本を窮め、彼幽清の常に擾動する元を觀じて、無盡の流に於て計度を生ずれば、是人は死後相發心顛倒に墜入す。或は自ら身を固くして、色は是れ我なりと云ひ、或は我が圓にして國土を舍過すと見て、我に色を有すと云ひ、或は我が前縁、我に隨つて廻復すれば、色は我に屬すと云ひ、

【無盡の流】行陰の展轉相續なり。

或は復我、行の中に依つて相續すれば、我は色に在りと云ひ、皆計度して死後にも相ありと云ふ。是の如く循環するに十六の相あり。此に従つて或は畢竟して煩惱あり、畢竟して菩提あり、兩性並び驅せて、各相鬪れすと計す。此死後の有を計度するに由るが故に、外道に墮落して、菩提の性に感ふ。是を則ち名けて第六の外道の立五陰中死後有相心顛倒論と爲す。又三摩の中に、諸の善男子、堅凝正心なれば、魔は便を得ず。生類の本を窮め、彼幽清の常に擾動する元を觀じて、先に滅除せる色受想の中に於て、計度を生ずれば、是人は死後の無想發心顛倒に墜入す。其色の滅するを見るに、形に所因なく、其想の滅するを觀するに心に所繋なく、其受の滅を知るに、復連續することなし。陰性銷散すれば、縱ひ生理ありとも、而も受想なければ、草木と同じ。此質は現前に猶ほ不可得なり、死後に云何が更に諸相あらん。之に因つて勘校するに、死後には相なし。是の如く循環するに、八の無相あり。此に従つて或は涅槃の因果も一切皆空にして徒らに名字のみ有りて、究竟して斷滅すと計す。此死後の無を計度するに由るが故に、外道に墮落して、菩提の性に感ふ。是を則ち名けて第七の外道の立五陰中死後無相心顛倒論と爲す。又三摩の中に、諸の善男子、堅凝正心なれば、魔は便を得ず。生類の本を窮め彼の幽清の常に擾動する元を觀じて、行の存せる中に於て、受想の滅を兼ねて、雙べて有無を計して、自體相破す。是人は死後の俱非起顛倒論に墜入し、色受想の中に、有と非有とを見、行の還流する内に、無と不無とを觀る。是の如く循環して、陰界を窮盡するに、八の俱非の相ありと

【七際】人間、欲界、初禪、二禪、三禪、四禪、無色界の七。

【五涅槃論】以下に説く五轉依のこ
【正轉依】正しき依り所。
【初禪を以てす】初禪を以て正轉依とす。

【五現涅槃】所説の五轉依なり。

し、隨つて一縁を得れば、皆死後の有相無相を言ふ。また諸行の性は遷訛すと計するが故に、心に通悟を發して、有無俱に非し、虚實措を失ふ。此死後の俱非を計度するに由つて、後際昏瞶にして、從ふべきこと無きが故に、外道に墮落して、菩提の性に惑ふ。是を則ち名けて第八の外道の立五陰中死後俱非心顛倒論と爲す。又三摩の中に、諸の善男子、堅凝正心なれば、魔は便を得ず。生類の本を窮め、彼幽清の常に擾動する元を觀じて、後後の無に於て計度を生ずれば、是人は七斷滅論に墮入す。或は身も滅し、或は欲盡も滅し、或は苦盡も滅し、或は極樂も滅し、或は極捨も滅すと計す。是の如く循環して、七際を窮盡するに、現前に銷滅し、滅し已りて復することなし。此死後斷滅を計度するに由つて、外道に墮落して、菩提の性に惑ふ。是を則ち名けて第九の外道の立五陰中死後斷滅心顛倒論と爲す。又三摩の中に、諸の善男子、堅凝正心なれば、魔は便を得ず。生類の本を窮め、彼幽清の常に擾動する元を觀じて、後後の有に於て計度を生ずれば、是人は五涅槃論に墮入す。或は欲界を以て正轉依と爲す、圓明を觀見して愛慕を生ずるが故に、或は初禪を以てす、性は憂なきが故に。或は二禪を以てす、心に苦なきが故に。或は三禪を以てす、極悅隨ふが故に。或は四禪を以てす、苦樂二ながら亡じて、輪廻生滅の性を受けざるが故に。有漏の天に迷うて、無爲の解を作す、五處の安隱を勝淨の依と爲す。是の如く循環するに、五處を究竟とす。此五現涅槃を計度するに由つて、外道に墮落して、菩提の性に惑ふ。是を則ち名けて第十の外道の立五陰中五現涅槃心顛倒論と爲す。阿難、是の如く十

【同分の生機】業因の同じき衆生の機類
【補持伽藍】梵音フドケラ Tulaṅga有情又は有情の我

【六門】六根のこと

【吹琉璃】琉璃又は昆瑠璃に同じ梵音ウーイヅルヤ(Vidhya)

【二】本節は結論にして、本經の永く後世衆生を利する所以を説く。

種の無常の狂解は、皆是れ行陰において、用心交互せるが故に、斯悟を現す。衆生は頭迷にして、自ら付量せず、此現前に逢うて、迷を以て解と爲し、自ら聖に登れりと言ひ、大妄語を成じて無間獄に墜つ。汝等必らず須らく如來の語を將て、我が滅後に於て、末法に傳示して、遍く衆生をして斯義を覺了せしむべし。心塵をして自ら深慧を起さしむること無れ。保持覆護して、邪見を消息し、其身心をして眞義を聞覺し、無上道に於て、杖鼓に遣はざらしめよ。心所をして少を得て足れりと爲して、大覺王の清淨標指と作さしむること勿れ。阿難、彼善男子、三摩提を修して、行陰盡くれば、諸の世間の性は、幽清にして擾動する同分の生機、倏然として墮空し、沈細にして精特伽羅に綱紐して業に纏ゆる、深脈感觸應に絶え、涅槃の天に於て、將に大に明悟ならんとするに、雞の後に鳴くとき、東方を瞻顧すれば、已に精色あるが如し。六根虚靜にして、復聽せ溥することなく、内内湛明にして、入に所入なし。深く十方十二種類の命を受くるの元由に達して、執の元に出れりと觀すれば、諸類名かず。十方界に於て、已に其同を發て、精色沈まざれば、幽秘を發現す。此を則ち名けて識陰の區宇と爲す。若し群召に於て、已に同を發る中に、六門を銷磨して、合闢成就すれば、見聞鄰近に通じて、五用清淨なり。十方世界と及び身心と、吹琉璃の如くにして、内外明徹なるを識陰盡くと名く。是人は則ち能く命濁を超越す。其所由を觀するに、罔象虚無、顛倒妄想を以て其本と爲す。

阿難、當に知るべし、是善男子、諸行の空を窺めて、識に於て元に還るに、已に生滅を

【摩醯首羅】梵音
 (Mahesvara) 自在
 天なり。
 【涅槃城】生死の
 家に對する語。
 【大慢天】自在天
 の異名。

滅すと、而も寂滅に於て、精妙未だ圓ならず。能く己身の根隔をして合開せしむれば、亦十方の諸類と覺を通じ、覺知通溜して、能く圓元に入る。若し所歸に於て、眞常の因を立て、勝解を生ずれば、是人は則ち所因を因とする執に墮す。婆毘迦羅が所歸の冥諦は其伴侶と成り、佛菩提に迷うて、知見を亡失す。是を第一に、所得の心を立てて、所歸の果を成じ、圓通に遼遠し、涅槃城に背き、外道の種を生ずと名く。阿難、又善男子、諸行の空を窮めて、已に生滅を滅すとも、而も寂滅に於て精妙未だ圓ならず。若し所歸に於て、覺て自體と盡虚空界の十二類の内の有ゆる衆生は、皆我が身中より一類に流出せりと爲して、勝解を生ずれば、是人は則ち非能を能とする執に墮す。摩醯首羅の無邊身を現すれば、其伴侶と成り、佛菩提に迷うて、知見を亡失す。是を第二に、能爲の心を立てて、能事の果を成じ、圓通に遼遠して、涅槃城に背き、大慢天我遍圓の種を生ずと名く。又善男子、諸行の空を窮めて、已に生滅を滅すとも、而も寂滅に於て精妙未だ圓ならず。若し所歸に於て歸依する所あれば、自ら身心も彼より流出し、十方虚空も成く其より生起するかと疑つて、即ち都起し宜流する所の地に於て、眞常の身、無生滅の解を作し、生滅の中に在りては、早く常住を計す。既に不生に惑ひ、亦生滅に迷ひ、沈迷に安住して勝解を生ずれば、是人は則ち非常を常とする執に墮し、自在天を計すれば、其伴侶と成つて、佛菩提に迷ひ、知見を亡失す。是を第三に因依の心を立て、妄計の果を成じ、圓通に遼遠して、涅槃の城に背き、倒圓の種を生ずと名く。又善男子、諸行の空を窮めて、已に生滅を滅すとも、而

【所知】二障の一所知障のこと。

【婆吒、霰尼】何れも外道の名。

【迦葉波】加葉、加攝、梵音カーシユヤバ (Kasyapa) 姓名。

【群化】一切諸法を指す。

【永滅の依】空を以て依とす。

【無想天】色界十八天の第十三。

【舜若多】梵音シユースヤター (Srutavā) 空性と譯す。

も寂滅に於て精妙未だ圓ならず。若は所知に於て、知遍圓なるが故に、知に因つて解を立て、十方の草木皆情あること人と異なることなしと稱す。草木は人と爲り、人は死して還つて十方の草樹と成りて擇ふることなく、遍く知ありと勝解を生ずれば、是人は則ち無知を知とする執に墮す。婆吒と霰尼とが一切の覺を執すれば、其伴侶と成りて、佛菩提に迷ひ、知見を亡失す。是を第四に圓知の心を計して虚謬の果を成じ、圓通に達遠して涅槃城に背き、倒知の種を生ずと名く。又善男子、諸行の空を窮めて、已に生滅を滅すとも、而も寂滅に於て精妙未だ圓ならず。若し圓融の根互用する中に於て、已に隨順することを得れば、便ち圓化に於て一切發生す、火の光明を求め、水の清淨を樂ひ、風の周流を愛し、塵の成就を觀じて、各各崇事す。此群塵を以て、發して本因と作して、常住の解を立すれば、是人は則ち無生を生とする執に墮す。諸の迦葉波、并に婆羅門は、心を勤め身を役して、火に事へ水を崇めて、生死を出づることを求むれば、其伴侶と成りて、佛の菩提に迷ひ、知見を亡失す。是を第五に崇事に計著して、心に迷ひ物に従つて、妄求の因を立て、妄冀の果を求めて、圓通に達遠して、涅槃の城に背き、顛化の種を生ずと名く。又善男子、諸行の空を窮めて、已に生滅を滅すとも、而も寂滅に於て精妙未だ圓ならず。若し圓明に於て、明中は虚なれども、群化を滅するには非ずと計して、永滅の依を以て、所歸の依と爲して、勝解を生ずれば、是人は則ち無歸を歸とする執に墮す。無想天の中に、諸の舜若多と、其伴侶と成つて、佛の菩提に迷ひ、知見を亡失す。是を第六に圓虚無心にして空

【阿斯陀】梵音ア
シタ(Astia)無比
不白と譯す。婆羅
門の學者(仙人)。

【七珍】七寶に同
じ。金、銀、珊瑚、
頗黎、砗磲、赤珠
瑪瑙なり。

【定性の聲聞】た
だ煩惱障を斷じて
我空の理を證し決
定して辟支佛果に
至らざるもの。
【無聞の僧】大乘
の法を聞かざるも

亡の果を生じ、圓通に違違して涅槃の城に背き、斷滅の種を生ずと名く。又善男子、諸行の空を窮めて、已に生滅を滅すとも、而も寂滅に於て、精妙未だ圓ならず。若し圓常に於て、身を固して常住ならしめ、精圓に同じと、長く傾逝せじと勝解を生ずれば、是人は則ち非貪を食とする執に墮す。諸の阿斯陀の長命を求むる者と、其伴侶と成りて、佛の菩提に迷ひ、知見を亡失す。是を第七に命元に執著して、固妄の因を立てて長勞の果に趣き、圓通に違違して涅槃の城に背き、妄延の種を生ずと名く。又善男子、諸行の空を窮めて、已に生滅を滅すとも、而も寂滅に於て精妙未だ圓ならず、命の互通することを觀じて、却つて塵勞を留めて、其銷盡を恐る。便ち此際に於て蓮華宮に坐し、廣く七珍を化し、多く寶媛を増して、其心を縱恣せんとして勝解を生ずれば、是人は則ち無眞を眞とする執に墮し、吒積迦羅と其伴侶と成りて、佛の菩提に迷ひ知見を亡失す。是を第八に邪思の因を發し、熾曜の果を立て、圓通に違違して、涅槃の城に背き、天魔の種を生ずと名く。又善男子、諸行の空を窮めて、已に生滅を滅すとも、而も寂滅に於て精妙未だ圓ならず。命明の中に於て精麤を分別し、眞僞を疏決し、因果相酬ゆれば、唯感應を求めて清淨の道に背く。謂ゆる苦を見て集を斷じ、滅を證して道を修す。滅に居して已に休み、更に前進せずと勝解を生ずれば、是人は則ち定性の聲聞に墮し、諸の無聞の僧増上慢の者と、其伴侶と成りて、佛の菩提に迷ひ、知見を亡失す。是を第九に圓精、心に應じ、寂に趣く果を成じて、圓通に違違して、涅槃の城に背き、纏空の種を生ずと名く。又善男子、諸行の空を

【辟支】 辟支佛、
無師獨悟するもの

【見塵】 二塵の所
知障。

寫めて、已に生滅を滅すとも、而も寂滅に於て精妙未だ圓ならず。若し圓融清淨の覺明に於て、深妙を發研して、即ち涅槃を立てて、而も前進せしと勝解を生ずれば、是人は則ち定性の辟支に墮し、諸緣獨倫の廻心せざる者と、其伴侶と成りて、佛の菩提に迷ひ、知見を亡失す。是を第十に圓覺心に滯つて、湛明の果を成じ、圓通に違違して、涅槃の域に背き、覺圓明にして化圓ならざる種を生ずと名く。阿難、是の如く十種の禪那の中途に狂を成ずることは、迷惑に依つて、未足の中に於て、満足の證を生ずるに因れり。皆是れ識陰の用心交互するが故に斯位を生ず。衆生は頑迷にして、自ら付着せず、此現前に逢うて、各所愛の先習の迷心を以て、而も自ら休息して、將て畢竟所歸寧の地と爲して、自ら無上菩提を満足すと言ひ、大妄語を成ずれば、外道邪魔所惑の業終つて、無間獄に墮す。聲聞緣覺は増進を成さず。汝等心を存して如來の道を乘りて、此法門を悟て、我が滅後に於て、末世に傳示して、普く衆生をして斯義を覺了せしめて、見塵をして自ら深覺を作さしむること無れ。保綏哀救して邪縁を消息し、其身心をして佛の知見に入つて、始より成就まで岐路に遭はざらしめよ。是の如きの法門、先過去世恆沙劫の中の微塵の如來は、此れに乗じて心開けて無上道を得たまへり。識陰若し盡くれば、則ち汝現前に諸根互用す、互用の中より能く菩薩の金剛乾慧に入る。圓明の精心、中に於て化を發すること、淨瑠璃の内に寶月を含むが如し。是の如く乃至十信、十住、十行、十廻向、四加行の心、菩薩所行の金剛、十地等覺の圓明を越えて、如來の妙莊嚴海に入り、菩提を圓滿して無所得に歸

す。此は是れ過去先佛世尊の奢摩他の中、毘婆舍那との覺明ありて、分折したまへる微細の魔事なり。魔境の現前するとき汝能く認識せば心垢洗除して邪見に落ちず。陰魔銷滅し、天魔摧碎し、大力の鬼神は魄を擣てて逃逝し、魘魅魘は復出生すること無くして、直に菩提に至るまで、諸の乏少なく下劣も増進して、大涅槃に於て、心迷悶せじ。若し諸の末世の愚鈍の衆生、未だ禪那を識らず、設法を知らず、樂つて三昧を修せんとき、汝亦に同じきことを恐るれば、一心に勤めて我が佛頂陀羅尼呪を持せしめよ。若し未だ誦すること能はずんば、禪堂に寫し、或は身上に帶せば、一切の諸魔も動すること能はざる所なり。汝常に恭敬すべし、十方如來の究竟修進最後の垂範なり。阿難即ち座より起ち、佛の示誨を聞きて、頂禮欽奉し、憶持して失すること無し。大衆の中に於て、重ねて復佛に白さく、佛の言ふ所の如く、五陰の相の中に五種の虚妄の本たる想心、我等平常に未だ如來微細の開示を蒙らず。又此五陰は、併せて銷除すと爲んや、次第に盡すと爲んや。是の如きの五重は、何くに詣りてか界と爲ん。唯願くば如來、大慈を發宣して、此大衆の爲に、心目を清明にして、以て末世の一切衆生の爲に將來の眼と作したまへ。佛、阿難に告げたまはく、「精眞妙明本覺圓淨にして、死生及び諸の塵垢を留むるに非ず、乃至虚空も皆妄想に因つて生起する所なり。斯れ元本覺妙明の眞精なるに、妄に以て諸の器世間を發生すること、演若多が頭に迷うて影を認むるが如し。妄元より因なし、妄想の中に於て、因縁の性を立す。因縁に迷ふ者は、稱して自然と爲す。彼虚空の性は、猶ほ實に幻より生ず、因

【虛妄の通倫】 虚妄の同類。

緣自然は、皆是れ業生妄心の計度なり。阿難、妄の所起を知らば、妄の因縁を説くべし。若し妄元無ならば、妄の因縁を説くも、元所有なけん、何に況や知らずして自然を推す者をや。是故に如來は、汝が爲に五陰の本因は同じく是れ妄想なりと發明す。汝が體は先づ父母の想に因つて生ぜり。汝が心想に非ずんば則ち想中に来つて命を傳ふること能はず。我、先に言ふが如く、心に酔味を想へば、口中に涎を生じ、心に高きに登ることを想へば足の心に酸起る。懸崖有るにあらず、醉物も未だ來らず、汝が體、必らず虚妄の通倫に非ずんば、口の水如何が酔を談ずるに因つて出ん。是故に當に知るべし、汝が現の色身を名けて、堅固第一の妄想と爲す。即ち此説く所と、高きに臨める想心と、能く汝が形をして眞に酸澁を受けしむ。受の生ずるに由り因つて、能く色體を動す。汝今現前に順益違損して、二つながら現に驅馳するを名けて虚明第二の妄想と爲す。汝が念慮に由つて、汝が色身を使ふ。身念倫に非ずんば、汝が身何に因つてか念に隨つて使はれん。種種に像を取ることに心より生じて、形を取れば念と相應し、寤むれば即ち想心となり、寐ねば諸夢と爲る。則ち汝が想念、妄情を搖動するを名けて融通第三の妄想と爲す。

化理は住せず、運運として密に移る、甲は長じ、髪は生じ、氣は銷し、容は皺んで、日夜に相代れども、曾て覺悟することなし。阿難、此れ若し汝に非ずんば、云何が體遷る。如し必ず是れ眞ならば、汝何ぞ覺することなきや。則ち汝が諸行の念念停らざるを、名けて幽隱第四の妄想と爲す。又汝が精明湛として搖かざる處を恆常と名けば、身に於て見

【五受陰】色、受、
想、行、識の五陰

聞覺知を出でず。若し實の精眞ならば、習妄を容れず、何に因つてか汝等曾て昔年に於て一の奇物を覩て、年歳を経歴して憶忘俱に無けれども、後に於て忽然として覆ねて前の異を覩、記憶すること宛然として、曾て遺失せざるときは則ち此精了、湛として搖かざる中に、念念熏を受くること何の籌算あらん。阿難、當に知るべし、此湛の眞に非ざること急流の水を望めば恬靜なるが如くにして、流急なれども見えず、是れ流なきに非ざるが如し。若し想の元に非ずんば、寧ぞ妄習を受けんや。汝が六根互用し合開するに非ずんば、此妄想は時として滅を得ること無けん。故に汝が現在の見聞覺知の中の串習の幾は、則ち湛了の内の回象虚無なる、第五の顛倒微細の精想なり。阿難、此五受陰は、五妄想をもて成ぜり。汝今因界の淺深を知らんと欲せば、唯色と空と、是れ色の邊際なり。唯觸と離と、是れ受の邊際なり。唯記と忘と、是れ想の邊際なり。唯滅と生と、是れ行の邊際なり。湛を入して湛に合すれば、識の邊際に歸す。此五陰の元は、重疊して生起す。生は識に因つて有り、滅は色に從つて除く、理は則ち頓に悟り、悟に乗じて併せて銷す。事は頓に除くに非ず、次第に因つて盡す。我已に汝に劫波の中結を示す。何の明らめざる所あつてか、再び此に詢問す。汝應に此妄想の根元を將て、心に開通することを得て、將來來法の中の諸の修行の者に傳示して、虚妄なりと識りて、深く白の生を厭ひ、涅槃あることを知つて、三界を戀はざらしむべし。阿難、若復人ありて、十方所有の虚空に遍滿、七寶を盈滿して、持して以て微塵の諸佛に奉上し承事し供養して、心に虚く度ること無くんば、意

【波羅夷】又は波羅希迦、梵音パーラーダカー(一)【二乘】無餘極惡と譯す。四重、十波羅夷は十罪業なり。

【二乘】聲聞、緣覺。

に於て云何。是人此施佛の因縁を以て、福を得ること多きや不や。阿難答へて言さく、虚空無盡にして、珍寶無邊なり。昔衆生ありて、佛に七錢を施し、身を捨てて猶ほ轉輪王の位を獲たり。況や復現前に虚空を既に窮め、佛上に充過して、皆珍寶を施さんこと、劫を窮めて思議すとも尙ほ及ぶこと能はじ、此福云何が更に邊際あらん。佛、阿難に告げたまはく、諸佛如來の語は虚妄なし。若し復人ありて、身に四重十波羅夷を具して、瞬息に即ち此方他方の阿鼻地獄を經、乃至十方の無間を窮め盡して、經歷せずといふこと靡からんに、能く一念を以て此法門を將て、末劫の中に於て、末學に聞示せば、是人の罪障は、念に應じて銷滅し、其受くる所の地獄の苦因を變じて、安樂國を成し、福を得ること前の施人に超越すること、百倍千倍千萬億倍ならん。是の如く乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。

阿難、若し衆生ありて、能く此經を誦し、能く此呪を持せんに、如し我廣く説かば、劫を窮むとも盡きじ。我が教言に依りて、教の如く道を行せば、直に菩提を成じて、復魔業なからん。佛、此經を説き已りたまふに、比丘比丘尼、優婆塞優婆夷、一切世間の天人阿修羅、及び諸の他方の菩薩、二乘聖仙童子、并に初發心の大力の鬼神、皆大に歡喜し、禮を作して去れり。

首楞嚴經終

大方廣圓覺修多羅了義經

經典部
第七卷

【一】以下本經の序文なり。

【婆伽婆】婆伽梵に同じ、梵音アハガブツト (Brahma Vat) 世尊と譯す。

【神通】無礙自在なる通力なり。

【大光明】佛智の義。

【三昧】三摩地に同じ。梵音サマードヒ (Samadhi) 等持と譯す、定に七種ありその一。

【摩訶薩】梵音マハーサツトツ (Mahasattva) 大有情と譯す。

【文殊師利】梵音マンヂユシユリ (Manjusri) 妙徳、妙首と譯す。三聖の一なり。

【普賢】梵音サマシタ、パドマ (Samasita-padma) の譯。

【彌勒】梵音マイトレイヤ (Maitreya) 慈氏と譯す、姓、阿逸多。

【因地】原因たる

大方廣圓覺修多羅了義經

唐 罽賓沙門佛陀多羅譯

是の如く我聞けり。一時婆伽婆、神通大光明藏三昧に入りて正受し、一切如來と光嚴住持したまふ。是れ諸の衆生の清淨覺の地なり。身心寂滅せば、平等の本際、十方に圓滿し、不二にして隨順し、不二の境に於て諸の淨土を現じ、大菩薩摩訶薩十萬人と俱なり。其名を、文殊師利菩薩、普賢菩薩、普眼菩薩、金剛藏菩薩、彌勒菩薩、清淨慧菩薩、威德自在菩薩、辯音菩薩、淨諸業障菩薩、普覺菩薩、圓覺菩薩、賢善首菩薩等といふを上首と爲し、諸の眷屬と皆三昧に入り、同じく如來平等の法會に住す。

是に於て文殊師利菩薩、大衆の中にあり、即ち座より起ち、佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、長跪叉手して、佛に白して言さく、「大悲世尊、願くば此會の、諸來の法衆の爲に、如來本起の清淨の因地の法行を説き、又菩薩は大乗の中に於て清淨の心を發し、諸病を遠離することを説き、能く未來末世の衆生の大乘を求むる者をして邪見に墮せざらしめたまへ。是語を作し已りて、五體を地に投じ、是の如く三請し終りて、復始む。爾時、世尊、文殊師利菩薩に告げて言はく、「善哉善哉、善男子、汝等乃ち能く諸の菩薩の爲に、如來因地の法行を諮詢し、及び末世一切衆生の、大乘を求むる者の爲に、正住持を

大方廣圓覺修多羅了義經

【修行地】

【二】以下文殊菩薩如來因地之行を問ふ。

【大乘】梵語。摩訶衍那(Mahāyāna)大人の所乘にして大苦を滅じ大利益を與へる教道なり。

【因地】原因たる修行地。

【無上法王】佛のこと。

【陀羅尼】梵音ドハラニー(Dhāraṇī)總持、能持と譯す。

【眞如】絕對平等の理體なり。

【菩提】梵音ボーヂ(Bodhi)覺と譯す。佛の正覺のこと。

【涅槃】梵音ニルヴァーナ(Nirvāṇa)滅度、圓寂と譯す。迷妄を脱し眞理を究め不生不滅の法身の眞諦に歸すること。

【波羅蜜】梵音パールミター(Pāramitā)

得て邪見に墮せざらしむ。汝今諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。

時に文殊師利菩薩、教を奉じて歡喜し、及び諸の大衆、默然として聽く。善男子、無

上法王に大陀羅尼門あり、名けて圓覺と爲す。一切の清淨なる眞如と、菩提、涅槃、及

び波羅蜜を流出し、菩薩を教授す。一切如來の本起の因地は、皆清淨覺の相を圓照する

に依りて、永く無明を斷じ方に佛道を成す。云何が無明なる、善男子、一切衆生は無始よ

り來、種種に顛倒して、猶し迷人の四方處を易ふるが如し。妄りに四大を認めて自身の相

と爲し、六塵の緣影を自心の相と爲す。彼病の目に空中の華、及び第二の月を見るに譬ふ。

善男子、空には實に華なし、病者の妄執なり。妄執に由るが故に、唯此虚空の自性に惑ふ

のみに非ず、亦復彼實に華の生ずる處に迷へり。此に由りて妄りに生死に輪轉する有るが

故に無明と名く。善男子、此無明は實に體あるに非ず。夢中の人の夢の時には無に非ざれ

ども、醒むるに至るに及んで、了に所得無きが如く、衆の空華の虚空に滅するが如し。

説いて定滅の處ありと言ふべからず。何を以ての故に。生ずる處なきが故に。一切衆生は

無生の中に於て妄りに生滅を見る。是故に説いて生死に輪轉すと名く。善男子、如來の因

地に圓覺を修すとは、是れ空華と知れば、即ち輪轉無く、亦身心の彼生死を愛くる無し。

作すが故に無なるに非ず、本性無なるが故に。彼知覺する者は猶し虚空の如し。虚空と知

る者も即ち空華の相なり。亦知覺の性無しと説くべからず。有も無も俱に遺る。是を則ち

名けて淨覺に隨順すと爲す。何を以ての故に。虚空の性なるが故に。常に動せざるが故に。

【三昧】度、到彼岸と譯す。菩薩の行なり。

【相】實相なり。

【無明】凡て事理に暗き精神作用のこと。

【四大】地、水、火、風の四。

【六塵】色、聲、香、味、觸の六境。

【如來藏】眞如のこと。如來は佛の異名なり。

【法界】萬有の本體。

【菩提心】上求菩提下化衆生の菩薩の發心。
【三】以下普賢菩薩、圓覺修證の行法を問ふ。

如來藏の中には起滅無きが故に。知見無きが故に。法界性の究竟圓滿して、十方に遍きが如くなるが故に。是を即ち名けて因地の法行と爲す。菩薩は此に因つて大乘の中に於て清淨の心を發し、末世の衆生は此に依て修行せば、邪見に墮せず。爾時、世尊重ねて此義を宣べんと欲して偈を説いて言はく、

交殊、汝當に知るべし、一切諸の如來は

本の因地より、皆智慧を以て覺る

無明に了達して、彼空華の如しと知れば

即ち能く流轉を免る、又夢中の人の

醒むる時、不可得なるが如し

覺者は、虚空の如し

平等にして動轉せず、覺は十方界に遍く

即ち佛道を成ずることを得、衆幻の滅するに處無く

成道も亦得ること無し、本性圓滿なるが故に

菩薩此中に於て、能く菩提心を發すべし

末世の諸の衆生、此を修せば邪見を免れん

是に於て、普賢菩薩は大衆の中に在り即ち座より起ちて、佛足を頂禮し、右に繞ること

三匝し、長跪叉手して佛に白して言さく、「大悲世尊、願くば此會の諸の菩薩衆の爲、及

【彼衆生】衆生にして一切諸法の幻を知らば……。

び末世の一切衆生の大乘を修する者の爲に、此圓覺清淨の境界を聞いて、云何が修行せん。世尊、若し彼衆生、幻の如しと知る者の身心も亦幻なり、云何が幻を以て還つて幻を修せん。若し諸の幻性に於て、一切盡く滅せば則ち心有ること無し、誰か修行を爲し、云何が復如幻を修行すと説かん。若し諸の衆生にして本より修行せず、生死の中に於て常に幻化に居して、會て如幻の境界を了知せずんば、妄想の心をして云何が解脱せしめん。願くば末世の一切衆生の爲に、何の方便を作して漸次に修習し、諸の衆生をして永く諸幻を離れしめん。是語を作し已りて、五體を地に投じ、是の如く三請し終りて復始む。爾時に世尊、普賢菩薩に告げて言はく、「善い哉善い哉、善男子、汝等乃ち能く諸の菩薩、及び末世の衆生の爲に、菩薩の如幻三昧の方便を修習し、漸次に諸の衆生をして諸幻を離るることを得しめん。汝今諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。」時に普賢菩薩は教を奉じて歡喜し、及び諸の大衆は默然として聽く。

「善男子、一切衆生の種種の幻化は、皆如來圓覺の妙心より生ず。猶し空華の空に從つてあるが如く幻華滅すと雖も、空性は不壞なり。衆生の幻心は還つて、幻に依つて滅せり。諸幻盡く滅すれども覺心は動ぜず。幻に依つて覺を説くも亦名けて幻と爲す。若し覺ありと説くも猶ほ未だ幻を離れず。覺無しと説くも亦復是の如し。是故に幻滅するを名けて不動と爲す。善男子、一切の菩薩及び末世の衆生、應當に一切幻化虚妄の境界を遠離すべし。堅く遠離するの心を執持するが故に、心幻の如くなるも亦遠離すべし。遠離を幻と

【四】以下普眼菩薩如來の修行、漸次、思惟、住持、漸聞悟を問ふ。

すれば亦復遠離すべし。遠離を離するも幻なれば、亦復遠離すべし。離する所無きを得ば即ち諸幻を除く。譬へば火を鑽るに、兩木相因つて、火出で、木盡き、灰飛び、煙滅するが如し。幻を以てを修するも、亦復是の如し。諸幻盡くると雖も斷滅に入らず。善男子、幻と知れば即ち離る、方便を作さず。幻を離れば即ち覺る、亦漸次なし。一切の菩薩及び末世の衆生此れに依て修行せば、是の如く乃ち能く永く諸幻を離る。」

爾時、世尊重ねて此義を宣べんと欲し、偈を説いて言はく。

普賢、汝當に知るべし、一切諸の衆生の

無始の幻なる無明は、皆諸の如來の

圓覺の心より建立せらる。猶し虚空の華の

空に依て相有るが如し、空華若し復滅ぶも

虚空は本より不動なり。幻、諸覺より生ず

幻にして滅べば覺圓満す。覺心は動かざるが故に

若し彼諸の菩薩、及び末世の衆生

常に應に幻を遠離すべし。諸幻悉く皆離るれば

木の中より火を生じて、木盡きぬれば火還た滅するが如し

覺には即ち漸次無し、方便も亦是の如し

是に於て、普眼菩薩は大衆の中に在りて、即ち座より起ちて佛足を頂禮し、右に繞るこ

【新學】 初心者。

【奢摩他】 梵音シ

ヤマトハ (Samatha)

止、止息と譯す。一切の亂想を止めて寂靜なること。

【宴座】 座禪のこと。

【四緣】 四大の條件なり。

【六根】 眼、耳、鼻、舌、身、意の

六。

と三仰し、長跪叉手して佛に白して言さく、「大悲世尊、願くば此會の諸の菩薩衆の爲、及び末世の一切衆生の爲に、菩薩の修行の漸次を演説したまへ。云何が思惟し、云何が住持せん。衆生未だ悟らず、何の方便を作してか普く開悟せしめん。世尊、若し彼衆生にして正しき方便、及び正しき思惟無くんば、佛、如來の此三昧を説きたまふを聞くも、心迷悶を生じて則ち同覺に於て悟入すること能はざらん。願くば慈悲を興し、我等の輩、及び末世の衆生の爲に假りに方便を説きたまへ。」是語を作し已りて、五體を地に投じ、是の如く三請し終りて復始む。爾時、世尊普眼菩薩に告げて言はく、「善哉善哉、善男子。汝等乃ち能く諸の菩薩及び末世の衆生の爲に、如來の修行、漸次、思惟、住持、乃至假説の種種の方便を問ふ。汝今諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。」時に普眼菩薩は教を奉じて歡喜し、及び諸の大衆は默然として聽く。「善男子、彼新學の菩薩及び末世の衆生にして、如來淨の圓覺心を求めんと欲せば、應當に正念して諸幻を遠離すべし。先づ如來の奢摩他の行に依り、堅く禁戒を持ち、徒衆を安處し、靜室に宴坐し、恆に是念を作すべし。我が今此身四大和合す。謂ゆる、髮毛爪齒、皮肉筋骨、髓腦垢色は皆地に歸し、唾涕濃血、津液涎沫、痰淚精氣、大小便利は皆水に歸し、暖氣は火に歸し、動轉は風に歸し、四大各離るれば、今は妄身當に何の所にかあるべき。即ち知りぬ、此身は畢竟體無く、和合して相を爲すこと實に幻化に同じきを。四緣假に合して妄に六根あり。六根四大、中外合成して妄に緣氣あり。中に於て積聚して緣相あるに似たり。假に名けて心と爲す。善男子、此

【六塵】色、聲、香、味、觸、法。

【非幻】圓覺の性。

【摩尼寶】梵音マニ(Muni)無垢、如意珠と譯す、寶珠の名。

虛妄の心、若し六塵無ければ則ち有ること能はず。四大分解せば塵の得べき無し。中に於て緣塵各散滅に歸すれば畢竟終心の見るべきものなし。善男子、彼衆生、幻身滅するが故に幻心も亦滅す。幻心滅するが故に幻塵も亦滅す。幻塵滅するが故に非幻は滅せず。譬へば鏡を磨ぐに、垢盡きて明の現るるが如し。善男子、當に知るべし、身心は皆幻垢なることを。垢相永く滅すれば十方清淨なり。善男子、譬へば清淨なる摩尼寶珠の五色に映じて方に隨つて各現するが如く、諸の愚癡の者は、彼摩尼に實に五色ありと見る。善男子、圓覺の淨性の身心を現することは、類に隨つて各應するに、彼愚癡の者は、淨圓覺に實に是の如きの身心ありと説くも、自相亦復是の如し。此に由りて幻化に遠ざかること能はず。是故に我れ身心は幻垢なりと説く。幻垢を離るるに對して説いて菩薩と名く。垢盡き對除けば、即ち垢に對して説いて名くるもの無し。善男子、此菩薩及び末世の衆生は、諸幻を證得し、影像を滅するが故に。爾に便ち無方清淨を得、無邊の虚空覺に顯發せらる。覺の圓明の故に心清淨を顯はす。心清淨の故に見塵清淨なり。見清淨の故に眼根清淨なり。眼清淨の故に眼識清淨なり。識清淨の故に聞塵清淨なり。聞清淨の故に耳根清淨なり。耳根清淨の故に耳識清淨なり。識清淨の故に覺塵清淨なり。是の如く乃至鼻舌身意も亦復是の如し。善男子、根清淨の故に色塵清淨なり。色清淨の故に聲塵清淨なり。香味觸法も亦復是の如し。善男子、六塵清淨の故に地大清淨なり。地清淨の故に水大清淨なり。火大、

大方廣圓覺修多羅了義經

七

【十二處】 六根と

【十八界】 十二處

及び眼、耳、鼻、舌、身、意の六識。

【二十五有】 衆生の輪轉する生死界を廿五種に分ちたるもの、四洲（四有）四惡趣（四六欲天、六有）梵天（六）無想天（五）那含天（一）四禪天（四）四空處天（四）

【十力】 佛智慧なり（一）是處非處力、（二）業力、（三）定力、（四）根力、（五）欲力、（六）性力、（七）至處道力、（八）宿命力、（九）天眼力、（十）漏盡力。

【四無礙智】 義無礙、法無礙、詞無礙、樂說無礙の四なり。

【四無所畏】 一切智、漏盡、脫障道、說盡苦道の四。

【十八不共法】 佛の有し給ふ十八種の獨特の法。

風大も亦復是の如し。善男子、四大清淨の故に十二處、十八界、二十五有清淨なり。

彼清淨の故に十力、四無所畏、四無礙智、佛の十八不共法、三十七助道品清淨なり。

是の如く乃至八萬四千の陀羅尼門一切清淨なり。善男子、一切實相の性、清淨の故に

一身清淨なり。一身清淨の故に多身清淨なり。多身清淨の故に、是の如く乃至十方の衆生圓覺清淨なり。善男子、一世界清淨の故に多世界清淨なり。多世界清淨

の故に、是の如く乃至虚空を盡し、圓に三世を裏み、一切平等清淨不動なり。善男子、

虚空是の如く平等不動なれば、當に覺性の平等不動を知るべし。四大不動の故に當に覺性

の平等不動を知るべし。是の如く乃至八萬四千の陀羅尼門平等不動なれば當に覺性の平等

不動を知るべし。善男子、覺性遍滿、清淨不動、圓にして無際なるが故に當に六根法界

に遍滿するを知るべし。根遍滿の故に當に六塵法界に遍滿するを知るべし。塵遍滿の故に

當に四大法界に遍滿するを知るべし。是の如く乃至陀羅尼門法界に遍滿す。善男子、彼妙

覺の性の遍滿に由るが故に、根性も塵性も壞無く雜無く根塵壞無きが故に、是の如く乃至

陀羅尼門も壞無く、雜無く、百千の燈光、一空に照して其光り遍滿して、壞無く雜無きが

如し。

善男子、覺成就の故に、當に知るべし、菩薩は法に縛せられず、法の脱を求めず、生死

を厭はず、涅槃を愛せず、持戒を敬せず、毀禁を憎まず、久習を重んぜず、初學を輕ぜず。

何を以ての故に。一切覺の故に。譬へば眼光の前境を瞭了するに、其光圓滿して憎愛無き

【三十六道】四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道なり。
 【寂滅無二】無二は絕對平等の意。
 【阿僧祇】梵音アサンケフヤ(Amalya)無數、無火數と譯す。印度の數名。
 【恆河沙】恆河の沙に例へて無量無數の大數を表す。
 【作、止、任、滅は圓覺修行の四病と稱せらる。】

を得るが如し。何を以ての故に。光體無二にして憎愛なきが故に。善男子、此菩薩及び末世の衆生、此心を修習して成就を得るもの、此に於て修も無く亦成就も無し。圓覺普く照らして寂滅無二なり。中に於て、百千萬億阿僧祇不可說の恆河沙諸佛世界も、猶し空華の亂起亂滅の如く、即せず、離せず、縛無く脱無し。始めて知る、衆生は本來成佛、生死涅槃は猶し昨夢の如きを。善男子、昨夢の如きが故に、當に知るべし、生死と及び涅槃とは起無く滅無く、來無く去無く、其所證も、得無く失無く、取無く捨無く、其能證も、作無く止無く、任無く滅無きを。此證中に於て能無く所無く、畢竟じて證無く亦證者も無し。一切の法性平等にして不壞なり。善男子、彼諸の菩薩、是の如く修行し、是の如く漸次し、是の如く思惟し、是の如く住持し、是の如く方便し、是の如く開悟し、是の如きの法を求めば亦迷悶せず。』

爾時、世尊重ねて此義を宣べんと欲して偈を説いて言はく、
 普眼、汝應に知るべし、一切諸の衆生の
 身心は皆幻の如し、身相は四大に屬し
 心性は六塵に歸す、四大の體各離るれば
 誰をか和合の者と爲ん。是の如く漸く修行せば
 一切悉く清淨不動にして、法界に遍く
 作止任滅無し、亦能證者も無し

【五】以下輪廻を悟り邪正を識別せんが爲に迷悟の始終を明す。

【慧目】智慧の眼。

【異生】凡夫の異名。

【無遮の】廣大無邊の。

【秘密藏】佛智慧の藏奥。

【修多羅】梵音スートラ(Sutra)契經と譯す。凡て聖教の稱。

【了義】眞實義を明了顯證すること。

一切の佛世界は、猶し虚空の華の如く三世悉く平等にして、畢竟來去無し初發心の菩薩、及び末世の衆生にして

佛道に入ることを求めんと欲せば、應に是の如く修習すべし

(五) 是に於て、金剛藏菩薩、大衆の中に在りて即ち座より起ち、佛足を頂禮し、右に繞ると三匝し、長跪叉手して、佛に白して言さく、「大悲世尊、善く一切諸の菩薩衆の爲に、如來の圓覺、清淨の大陀羅尼、四地の法行、漸次の方便を宣揚して、諸の衆生に蒙昧を開發したまへば、在會の法衆は佛の慈誨を承け、幻翳朗然として慧目清淨なり。世尊、

若し諸の衆生、本來成佛ならば、何が故に復一切の無明有りや。若し諸の無明、衆生の本有ならば、何の因縁の故に如來復本來成佛と説くや。十方異生、本より佛道を成じ、

後に無明を起さば、一切の如來も何の時か復一切の煩惱を生ぜん。唯願くば無遮の大悲を捨てず、諸の菩薩の爲に秘密藏を聞き、及び末世の一切衆生の爲に是の如く修多羅の教、

了義の法門を聞くことを得て、永く疑悔を斷たしめたまへ。是語を作し已りて、五體を地に投じ、是の如く三請し終りて復始む。爾時、世尊、金剛藏菩薩に告げて言はく、「善い哉

善い哉、善男子。汝等乃ち能く諸の菩薩、及び末世の衆生の爲に、如來甚深秘密究竟の方便を問ふ。是れ諸の菩薩の最上の教誨、了義の大乗なり。能く十方修學の菩薩、及び

諸の末世一切の衆生に決定の信を得しめ、永く疑悔を斷せしめん。汝今諦に聽け、當

【諸旋】凡て動くもの。

【聲聞】梵語、舍羅婆迦(Shravaka)の譯、佛の教誨を聞いてさとる人。

に汝が爲に説くべし。時に金剛藏菩薩、教を奉じて歡喜し、及び諸の大衆は默然として聽く。善男子、一切世界は始終生滅、前後有無、聚散起止、念念相續、循環往復、種種取捨は皆是れ輪廻なり。未だ輪廻を出でずして而して圓覺を辨せば、彼圓覺の性も即ち流轉に同じ。若し輪廻を免かるれば、是處あること無けん。譬へば動日の能く湛水を搖がすが如く、又定眼の猶し火を廻轉するが如し。雲駛ければ月運び、舟行けば岸移るも亦復是の如し。善男子、諸旋未だ息まずんば、彼物の先に住するすら尙ほ得べからず。何に況んや輪轉生死の垢心、曾て未だ清淨ならずして、佛の圓覺を觀るに、而も旋復せざらんをや。是故に汝等便ち三惑を生ず。善男子、譬へば幻翳の妄に空華を見るが如し。幻翳若し除かば、説いて此翳已に滅す、何の時か更に一切の諸翳を起さんと言ふべからず。何を以ての故に。翳と華の二法は相待に非ざるが故に。亦空華の空に滅する時、説いて虚空何の時か更に空華を起さんと言ふべからず。何を以ての故に。空本より華無し、起滅に非ざるが故に。生死涅槃は起滅に同じ、妙賢圓照して華翳を離る。善男子、當に知るべし、虚空は是れ暫有に非ず、亦暫無に非ず、況んや復來は圓覺に隨順して、虚空平等の本性たるをや。善男子、金鑛を銷すが如し。金は銷して有るに非ず、既已に金と成らば、重ねて鑛とならず、無窮の時を經れども金性を壞せず、應に説いて本成就に非ずと言ふべからず。如來の圓覺亦復是の如し。善男子、一切如來の妙圓覺心は、本、菩提及び涅槃無く、亦成佛及び不成佛無く、妄輪廻及び非輪廻無し。善男子、但だ諸の聲聞の圓する所の境

大方廣圓覺修多羅了義經

【須彌山】梵音ス
マール(Sumera)
妙高山と譯す。
【大寂滅海】佛の
圓覺の悟。

界は、身心語言悉く皆斷滅し、遂に彼親證所現の涅槃に至ること能はず。何に況んや能く有思惟の心を以て如來圓覺の境界を測度せん。螢火を取りて須彌山を燒くが如く、終に著くこと能はず。輪廻の心を以て輪廻の見を生じ、如來の大寂滅海に入るに、遂に至ること能はず。是故に我は説く、「一切菩薩及び末世の衆生先づ無始輪廻の根本を斷ぜよ」と。善男子、思惟を作すことあるは有心より起る。皆是れ六塵妄想の緣氣にして、實心の體に非ざること已に空華の如し。此思惟を用て佛境を辨ずるは、猶し空華の復空果を結ぶが如く、展轉して妄想なり、是處り有ること無し。善男子、虚妄の淨心は諸の巧見多ければ圓覺の方便を成就すること能はず。是の如く分別するは正問と爲すに非ず。」

爾時、世尊重ねて此義を宣べんと欲して偈を説いて言はく、

金剛藏、當に知るべし、如來寂滅の性は未だ會て終始あらず、若し輪廻の心を以て

思惟せば即ち旋復せん。但だ輪廻の際に至つて

佛海に入ること能はず。譬へば金鑛を銷すに

金は銷すが故に有るに非ず。復本來金なりと雖も

終に銷すを以て成就す、一たび眞金の體と成れば

復重ねて鑛とならず。生死と涅槃

復重ねて鑛とならず。生死と涅槃

凡夫及び諸佛は、同じく空華の相となす

【六八】以下輪廻の根元を明にし無生忍に入ることを示す。
【道眼】佛法の眞理を見る認識力。

【無生忍】不生不滅の法性を忍知し決定安住する位。

思惟も猶し幻化の如し、何に況んや虚妄を誥んをや
若し能く此心を了せば、然る後圓覺を求めん

是に於て彌勒菩薩大衆の中に在りて即ち座より起ちて佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、長跪叉手して佛に白して言さく、「大悲世尊、廣く菩薩の爲に祕密藏を開いて、諸の大衆をして深く輪廻を悟らしめ、邪正を分別して、能く末世一切の衆生に無畏の道眼を施し、大涅槃に於て決定の信を生ぜしめ、復重ねて輪轉の境界に隨つて、循環の見を起すこと、無からしめたまへ。世尊、若し諸の菩薩及び末世の衆生にして、如來の大寂滅海に遊ばんと欲せば、云何が當に輪廻の根本を斷すべき。諸の輪廻に於て幾ばくの種性有りや。佛の菩提を修するに幾等の差別有りや。摩勞に廻入して當に幾種の教化方便を設けて、諸の衆生を度すべきや。唯願くば救世の大悲を捨てず、諸の修行せる一切菩薩及び末世の衆生をして慧日肅清にして、心鏡を照曜し、圓に如來無上の知見を悟らしめたまへ。」
是語を作し已りて五體を地に投じて是の如く三請し終つて復始む。爾時世尊、彌勒菩薩に告げて言はく、「善い哉善い哉、善男子。汝等乃ち能く諸の菩薩及び末世の衆生の爲に、如來深奧祕密微妙の義を請問す。諸の菩薩をして慧目を潔清し、及び一切末世の衆生をして永く輪廻を斷じ、心に實相を悟り無生忍を具せしめん。汝今諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。」時に彌勒菩薩、教を奉じて歡喜し、諸の大衆は默然として聽く。「善男子、一切衆生は無始際より種種の恩愛、貪欲あるに由るが故に輪廻あり。若し諸の世界一切の種

【卵生……化生】
四生の義。

【天人】 天上と人間。

【捨】 心所の名。行捨とも云ふ。心を悟沈と極擧とを離れて、平等安穩ならしむる精神作用なり。

【聖道】 大聖の教道、佛の正法。

【五性】 凡夫性、二乗性、菩薩性、如來性、外道性。

【緣覺】 二乘、三乘の一。獨覺とも云ふ。無師獨悟するもの。

性は卵生、胎生、濕生、化生、皆淫欲に因て性命を正くす、當に知るべし、輪廻は愛を根本と爲す。諸欲あるに由りて愛性を助發す。是故に能く生死をして相續せしむ。欲は愛に因りて生じ、命は欲に因りてあり、衆生の命を愛するは却て欲の本に依る。欲を愛するを因と爲し、命を愛するを果と爲す。欲境に於て諸の違順を起すに由りて、境、愛心に背きて生に耐へ憎嫉して種種の業を造る。是故に復地獄餓鬼に生ず。欲の厭ふべきを知つて、業を厭ふの道を愛し、惡を捨て善を樂へば、復天人に現す。又諸愛の厭患すべきを知るが故に、愛を棄て捨を樂へば、還つて愛の本を滋す。便ち有爲の増上の善果を現す。皆輪廻の故に聖道を放ぜず。是故に衆生、生死を脱し、諸の輪廻を免れんと欲せば、先づ食欲を斷じ、及び愛渴を除くべし。善男子、菩薩變化して世間に示現するは愛を本と爲すに非ず、但慈悲を以て彼をして愛を捨てしめ、諸の食欲を假りて、而して生死に入る。若し諸の末世の一切衆生能く諸欲を捨て、及び憎愛を除き、永く輪廻を斷じて、如來圓覺の境界を勤求せば、清淨心に於て即ち開悟することを得ん。善男子、一切衆生は食欲を本とするに由りて、無明を發揮して五性の差別等しからざることを出し、二種の障に依て深淺を現す。云何が二障なる。一には理障なり、正知見を礙ふ。二には事障なり、諸の生死を續く、云何が五性なる。善男子、若し此二障にして、未だ斷滅を得ざれば未成佛と名く。若し諸の衆生永く食欲を捨て、先づ事障を除き、未だ理障を斷ぜざれば、但だ能く聲聞緣覺に悟入し、未だ菩薩の境界を顯住すること能はず。善男子、若し諸の末世の一

【善知識】 正法を説き人をして佛道に入らしめ解脱を行ぜしむる人。

【種種の形相】 衆生を濟度するに現す佛の形相。

【外道】 佛敎以外の諸敎學、六師外道、九十五種の外道あり。
【二乘】 聲聞乘菩薩乘。

一切衆生にして、如來の大圓覺海に汎ばんと欲せば、先づ當に願を發して勤めて二障を斷ずべし。二障已に伏せば即ち能く菩薩の境界に悟入す。若し事理の障已に永く斷滅せば即ち如來微妙の圓覺に入り、菩提及び大涅槃を満足せん。善男子、一切衆生、皆圓覺を證し、善知識に逢ひ、彼所作の因地の法行に依つて、爾時修習するに、便ち頓漸あり。若し如來の無上菩提正修行の路に遇へば、根に大小無く皆佛果を成ず。若し諸の衆生、善友を求むと雖も、邪見の者に遇ひて未だ正悟を得ずんば、是を則ち名けて外道種性と爲す。邪師の過謬にして、衆生の咎に非ず、是を衆生の五性差別と名く。善男子、菩薩は唯大悲と方便を以て、諸の世間に入り、未悟を開發し、乃至種種の形相を示現し、逆順の境界に其と事を同くし、化して成佛せしむることは、皆無始清淨の願力に依る。若し諸の末世の一切衆生にして、大圓覺に於て増上心を起さば、當に菩薩清淨の大願を發すべし。應に是言を作すべし。願くば我れ今、佛の圓覺に住して、善知識を求めて、外道及及び二乘とに値ふこと莫く、願に依つて修行し、漸く諸障を斷じ、障盡き願滿ち、便ち解脱清淨の法殿に登り大圓妙莊嚴の域を證せん。」

爾時、世尊重ねて此義を宣べんと欲して偈を説いて言はく、
彌勒、汝當に知るべし、一切諸の衆生の
大解脱を得ざるは、皆貪欲に由るが故に
生死に墮落す。若し能く憎愛

【七】以下圓覺無證の理、頓漸修證の位を明す。

【法王】 佛陀世尊

【所證所得】 所證の覺、所得の位。

【取、證】 所取能證の意。

及び貪瞋癡を斷ずれば、差別の性に因らず

皆佛道を成ずるを得、二障永く銷滅せん

師を求めて正悟を得、菩薩の願に隨順して

大涅槃に依止せよ。十方諸の菩薩は

皆大悲の願を以て、生死に入ることを示現す

現在修行の者、及び末世の衆生も

勤めて諸の愛見を斷じて、便ち大圓覺に歸せよ

(七) 是に於て、清淨慧菩薩、大衆の中に在りて、即ち座より起ちて佛足を頂禮し、右に繞

ること三匝し、長跪叉手して佛に白して言さく、「大悲世尊は、我等輩の爲に廣く是の如き

不思議の事を説きたまへり。本見ざる所、本聞かざる所、我等今佛の善誘を蒙り、身心泰

然として大饒益を得。願くば諸の來れる一切法衆の爲に、重ねて法王圓滿の覺性を宣べ

たまへ、一切衆生及び諸の菩薩と如來世尊との所證所得は云何が差別せん。末世の衆生

をして此聖教を聞きて隨順し、開悟して漸次に能く入らしめたまへ。「是語を作し已りて、

五體を地に投じ、是の如く三請し終りて復始む。爾時世尊、清淨慧菩薩に告げて言はく、

「善い哉善い哉、善男子。汝等乃ち末世の衆生の爲に、如來に漸次の差別を請へり。汝今

諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。時に清淨慧菩薩、教を奉じて歡喜し、及び諸の大衆は默然として聽く。善男子、圓覺の自性は性に非ず。性あり、諸性に徧つて起る、取無く

【幻化滅】 圓覺の自性を云ふ。

【一念】 一念一念に。【五欲】 財欲、飯食欲、名欲、睡眠欲等。

【究竟の覺】 如來究竟の覺。

如來

證無し。實相の中に於て實に菩薩及び諸の衆生無し。何を以ての故に。菩薩も衆生も皆是れ幻化なり。幻化滅なるが故に證を取るもの無し。譬へば眼根の白から眼を見ざるが如し。性白から平等にして平等ならしむるもの無し。衆生は迷倒して未だ一切の幻化を除滅すること能はず。滅と未滅とに於て、妄功用の中に便ち差別を顯はす。若し如來の寂滅に隨順するを得ば、實に寂滅も及び寂滅者も無し。善男子、一切衆生は、無始より來、妄想の我、及び我を愛する者に由りて、曾て自ら念念生滅することを知らず。故に憎愛を起し、五欲に耽著す。若し善友の教に遇ひて、淨圓覺の性を開悟せしむれば、起滅を發明し、即ち此生は性白から勞慮することを知る。若し復人あり、勞慮永く斷じて法界淨を得れば、即ち彼淨解、自の障となるが故に。故に圓覺に於て自在ならず、此を凡夫の隨順覺性と名く。善男子、一切菩薩は解の礙たることを見て、解の礙を斷ずと雖も、猶見覺に住し、覺の礙、礙と爲りて而も自在ならず。此を菩薩の未入地者の隨順覺性と名く。善男子、照あり、覺あるは俱に障礙と名く、是故に菩薩は常に覺して住せず、照と照者と同時に寂滅す。譬へば人あり自ら其首を斷つに首已に斷つが故に、能く斷つ者無きが如し。即ち礙心を以て自ら諸礙を滅するに、礙已に斷滅すれば礙を滅する者無し。修多羅の教は月を標す指の如し。若し復月を見れば標す所畢竟、月に非ざることを了知す。一切如來の種種の言説を菩薩に開示するも亦復是の如し。此を菩薩の已入地者の隨順覺性と名く。善男子、一切の障礙は即ち究竟の覺なり。得念も失念も解脫に非ざる無し。成法も破法も皆涅槃と

【般若】梵音ブヲ
ヂニヤー (Prajna)
智と譯す。

【戒定慧】戒律、
禪定、智慧の略、三
學なり。

【梵行】清淨の行
【法界海慧】如來
の智慧光明。

【一切種智】三智
の一切の智を
以て一切諸佛の道
法を了達し一切衆
生の因種を知り種
種の法門を觀じて
諸の無明を破して
智慧。佛の智慧な
り。

名く。智慧も愚癡も通じて般若と爲す。菩薩外道の成就する所の法は、同じく是れ菩提なり。無明と眞如とは境界異る無し。諸の戒定慧及び淫怒癡俱に是れ梵行なり。衆生も國土も同一法性なり。地獄も天宮も皆淨土と爲る。有性も無性も齊しく佛道を成じ、一切の煩惱畢竟解脫なり。法界海慧は諸相を照了するに猶ほ虚空の如し。此を如來の隨順覺性と名く。善男子、但諸菩薩及び末世の衆生は、一切の時に居て妄念を起さざれ。諸の妄心に於て亦息滅せざれ。妄想の境に住して了知を加へざれ。了知無きに於て眞實を辨ぜざれ。彼諸の衆生は法門を聞きて信解し、受持し、驚異を生ぜずんば、是を即ち名けて覺性に隨順すと爲す。善男子、汝等當に知るべし、是の如きの衆生已に會て百千萬億恆河沙の諸佛及び大菩薩を供養し、衆の徳本を植ゑたり。佛は是人を説きて一切種智を成就すと爲す。

爾時、世尊重ねて此義を宣べんと欲して偈を説いて言はく、

清淨慧、當に知るべし、圓滿せる菩提の性は

取も無く亦證も無し、菩薩も衆生も無し

覺と未覺との時に、漸次に差別あり

衆生は解の爲に礙へられ、菩薩は未だ覺を離れず

地に入りて永く寂滅し、一切の相に住せず

大覺悉く圓滿するを、名けて遍隨順と爲す

【多】 幾多。
【八】 以下三種の妙法門を説き根に従ひて入るべきを示す。

【無上妙學】 大圓覺を指す。

末世の諸の衆生、心に虚妄を生ぜずんば、佛は是の如きの人を、現世に即ち菩薩なりと説きたまふ。恆沙の佛に供養し、功德已に圓滿せば、多の方便ありと雖も、皆隨順智と名く。
（八三） 是に於て威德自在菩薩、大衆の中に在り、即ち座より起ちて、佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、長跪叉手して佛に白して言さく、「大悲世尊、廣く我等が爲に是の如く隨順覺性を分別し、諸の菩薩をして覺心光明にして、佛の圓音を承けて、修習に因らずして善利を得しめたまへ。世尊、譬へば大城の外に四の門あり、方に隨つて來る者止だ一路に非ざるが如し。一切の菩薩、佛國を莊嚴し、及び菩提を成ずること一方便に非ず。唯願くば、世尊、廣く我等が爲に一切方便の漸次、並びに修行の人に總べて幾種ありや、此會の菩薩、及び末世の衆生の大乗を求むる者をして速に開悟を得て、如來の大寂滅海に遊戯せしめたまへ。是語を作し已りて五體を地に投じ、是の如く三請し終つて復始む。爾時世尊、威德自在菩薩に告げて言はく、「善い哉善い哉、淨男子、汝等乃ち能く諸の菩薩及び末世の衆生の爲に如來に是の如き方便を問ふ。汝今諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。時に威德自在菩薩は教を奉じて歡喜し、及び諸の大衆は默然として聽く。善男子、無上妙覺は諸の十方に遍じ如來を出生す。一切の法と同體にして平等なり。諸の修行に於て實に二あること無し。方便隨順するに其數無量なり。圓に所歸を攝し、生の差別に順すれば

【意識】 愛憎分別の意識。

【心性】 六識。
【根塵】 六根、六塵。

【所圓】 圓滿。
【三摩鉢提】 梵名サマーパツチ(三昧nāpatti) 等至と譯す。

【知覺】 身心の作用。
【受用世界】 一身を託する國土。
【塵域】 五濁の惡世。
【禪那】 禪、梵音ドフヤーナ(Dhyāna)定、靜慮と譯す。六度の一。

當に三種あるべし。善男子、若し諸の菩薩淨圓覺を悟り、淨覺の心を以て靜を取り行と爲し、諸念を澄むるに由つて、識の煩動を覺し靜慧發生し、身心の客塵此より永く滅せば、便能く内、寂靜輕安を發す。寂靜に由るが故に、十方世界の諸の如來の心、中に於て顯現すること鏡中の像の如し。此方便をば便ち奢摩他と名く。善男子、若し諸の菩薩にして淨の圓覺を悟り、淨覺の心を以て心性及び根塵とは皆幻化に因ると知覺せば、即ち諸幻を起して以て幻者を除き、諸幻を變化し幻衆を聞し、幻を起すに由るが故に、便ち能く内に大悲輕安を發し、一切の菩薩は此より行を起して漸次に増進せん。彼幻を觀する者も、幻に同ずるに非ざるが故に、幻に同ずるに非ざるの觀、皆是れ幻なるが故に、幻の相永く離れん。是諸の菩薩の所圓の妙行は、土の苗を長するが如し、此方便をば三摩鉢提と名く。善男子、若し諸の菩薩、淨圓覺を悟り、淨覺の心を以て、幻化及び諸の靜相を取らず、身心を了知するは、皆障礙となす。知覺なきの明は諸の礙に依らず、永く礙と無礙との境を、超過することを得。受用世界及び身心は塵域に相在す。器中の鐘聲の外に出るが如し。煩惱涅槃相留礙せずば、便ち能く内に寂滅輕安を發す。妙覺に隨順する寂滅の境界は自他の身心の及ぶ能はざる所なり。衆生も壽命も皆浮想と爲す。此方便をば便ち名けて禪那となす。善男子、此三法門は皆是れ圓覺なり。親近隨順して、十方の如來も此に因りて成佛す。十方菩薩の種種の方便一切の同異も、皆是の如き三種の事業に依る。若し圓證することを得ば、即ち圓覺を成就せん。善男子、假使人あり、聖道を修し、教化し

【阿羅漢】梵音アルハ、(Arhan) 應供と譯す。聲聞四果の一。
【刹那】梵音クシヤナ (Kshana)

【九】以下二十五種の定輪を説く。

て、百千萬億の阿羅漢と辟支佛果とを成就するも、人あり、此圓覺無礙の法門を聞きて、一刹那の頃も隨順して修習するに如かず。』

爾時、世尊重ねて此義を宣べんと欲して偈を説きて言はく、

威徳、汝當に知るべし、無上大覺の心は本際二相無し、諸の方便に隨順して

其數即ち無量なり。如來は總て開示したまふに便ち三種類あり、寂靜の奢摩他は

鏡の諸像を照すが如く、如幻の三摩提は

苗の漸く増長するが如し、禪那は唯寂滅なり

彼器中の鏡の如し、三種の妙法門は

皆是れ覺に隨順す、十方の諸の如來

及び諸の大菩薩は

此に因りて道を成ずることを得

三事圓證するが故に、究竟涅槃と名く

是に於て辯音菩薩、大衆の中に在りて、即ち座より起ちて佛足を頂禮し、右に繞ること

三匝し、長跪叉手して、佛に白して言さく、『大悲世尊、是の如き法門は甚た希有と爲す。』

世尊、此諸の方便一切の菩薩、圓覺の門に於て幾の修習ある。願くば大衆及び末世の衆

【論】 悲を離るる
行を離るるの
【論】 眞慧の力

【論】 變化の力

眼の爲に、方便開示して眞相を悟らしめたまへ。眞諦を悟し、是りて五位を地に投じ、是の如く三請し終つて復歸す。爾時、世尊、諸菩薩摩訶薩に告げて言はく、善い哉、善男子。汝等亦も能く諸の大衆及び末世の衆生の爲に如来の是の如きの修習を問ふ。故今、諸に告げ、當に汝が爲に説くべし。時に諸菩薩摩訶薩は説を奉じて歡喜し、及び諸の大衆は歡喜として悉く身敬服す、一切諸衆の開發は清淨なり。未より佛性及び修習の善樂し、一切菩薩及び末世の衆生、未だ覺とせざるに安んじたり。爾時、佛は、十五種の清淨の定あり。若し、諸の菩薩、坐禪靜を修り終るのりに出るが時に、多く煩惱を離れて、安んじたり。佛とて、佛たすして佛の智慧に入れば、此菩薩坐禪に智慧を修すと名く。若し、諸の菩薩にして唯正觀を觀じ、佛力を以ての故に、衆衆の種種の作用を變化し、當に衆菩薩の修行を行じ、陀羅尼にして法念及び諸の智慧を失はずんば、此菩薩をば眞に三摩鉢提を修すと名く。若し、諸の菩薩坐禪を離して作用を取らず、唯り煩惱を離て、煩惱を離して、佛坐相を離せば、此菩薩をば眞に禪那を修すと名く。若し、諸の菩薩坐禪を離して、慈悲の心を以て諸幻を離し、佛坐中に於て菩薩の行を起さば、此菩薩を先に善摩他を修し、後に三摩鉢提を修すと名く。若し、諸の菩薩坐禪を以ての故に、至淨の性を證し、佛坐相を離して未く生死を出づれば、此菩薩を先に善摩他を修して、後に禪那を修すと名く。若し、諸の菩薩、寂靜の慧を以て正觀を現じ、種種に變化して諸の衆生を度し、後に煩惱を斷じて而して寂滅に入らば、此菩薩を先に善摩他を修し、中に三摩鉢提

を修し、後に禪那を修すと名く。若し諸の菩薩至静の力を以て煩惱を斷じ已つて、後に菩薩清淨の妙行を起し、諸の衆生を度せば、此菩薩を先に奢摩他を修し、中に禪那を修し、後に三摩鉢提を修すと名く。若し諸の菩薩至静の力を以て心に煩惱を斷じ、復衆生を度し、世界を建立せば、此菩薩をば先に奢摩他を修して、齊しく三摩鉢提と禪那とを修すと名く。若し諸の菩薩、至静の力を以て變化を宣發して、後に煩惱を斷ぜば、此菩薩を奢摩他と三摩鉢提とを修して後に禪那を修すと名く。若し諸の菩薩至静の力を以て用ひて寂滅を資り、後に作用を起して世界を變化せば、此菩薩は齊しく奢摩他と禪那とを修し、後に三摩鉢提を修すと名く。若し諸の菩薩、變化の力を以て種種に隨順し、至静を取らば、此菩薩を先に三摩鉢提を修し、後に奢摩他を修すと名く。若し諸の菩薩、變化の力を以て種種の境界に寂滅を取らば、此菩薩を先に三摩鉢提を修し、後に禪那を修すと名く。若し諸の菩薩、變化の力を以て佛事を作し、寂靜に安住し、煩惱を斷ぜば、此菩薩を、先に三摩鉢提を修し、中に奢摩他を修し、後に禪那を修すと名く。若し諸の菩薩、變化の力を以て無礙に作用し、煩惱を斷するが故に、至静に安住せば、此菩薩を先に三摩鉢提を修し、中に禪那を修し、後に奢摩他を修すと名く。若し諸の菩薩、變化の力を以て方便作用して、至静寂滅二俱に隨順せば、此菩薩を先に三摩鉢提を修し、齊しく奢摩他と禪那とを修すと名く。若し諸の菩薩、變化の力を以て種種に用を起し、至静を資つて後に煩惱を斷ぜば、此菩薩を齊しく三摩鉢提と奢摩他とを修し、後に禪那を修すと名く。若し

諸の菩薩、變化の力を以て寂滅を資り、清淨無作の靜慮に任せば、此菩薩を、齊しく
 三摩鉢提と禪那とを修し、後に奢摩他を修すと名く。若し、諸の菩薩、寂滅の力を以て至
 靜を起し、清淨に住せば、此菩薩を先きに禪那を修し、後に奢摩他を修すと名く。若し
 諸の菩薩、寂滅の力を以て作用を起し、一切の境に於て寂用隨順せば、此菩薩を先に
 禪那を修し、後に三摩鉢提を修すと名く。若し、諸の菩薩、寂滅の力を以て種種の自性に
 靜慮に安じ、變化を起せば、此菩薩を先きに禪那を修し、中に奢摩他を修し、後に三摩鉢提
 を修すと名く。若し、諸の菩薩、寂滅の力を以て、無作の自性に作用を起し、清淨の境
 界に靜慮に歸せば、此菩薩を先きに禪那を修し、中に三摩鉢提を修し、後に奢摩他を修す
 と名く。若し、諸の菩薩、寂滅の力を以て種種清淨にして、靜慮に住し變化を起せば、
 此菩薩を先に禪那を修し、齊しく奢摩他と三摩鉢提とを修すと名く。若し、諸の菩薩、寂
 滅の力を以て至靜を資つて變化を起せば、此菩薩を、齊しく禪那と奢摩他とを修し、後に三
 摩鉢提を修すと名く。若し、諸の菩薩、寂滅の力を以て變化を資つて、至靜清明の境慧
 を起さば、此菩薩を、齊しく禪那と三摩鉢提とを修し、後に奢摩他を修すと名く。若し、諸
 の菩薩、圓覺の慧を以て圓に一切に合し、諸の性相に於て覺性を離ること無くんば、此
 菩薩を圓に三種を修し、自性清淨に隨順すと爲すと名く。善男子、是を菩薩の二十五輪
 と名く、一切の菩薩の修行是の如し。若し、諸の菩薩及び末世の衆生、此輪に依る者は當
 に寂靜思惟して、哀を求め懺悔すべし。三七日を經、二十五輪に於て各標記を安じ、

至心に哀を求め、手に隨つて結を取り、結に依つて開示し、便ち頓漸を知る。一念疑悔せば梵行を指すも即ち成就せず。

爾時、世尊重ねて此義を宣べんと欲して偈を説いて言はく、

辯音、汝當に知るべし、一切諸の菩薩の

無礙清淨の慧は、皆禪定に依つて生ず

謂ゆる奢摩他と、三摩提と禪那との

三法を頓漸に修するに、二十五種あり

十方諸の如來も、三世の修行者も

本此法に因りて、菩提を成ずることを得ざる無し

唯頓覺の人と、並びに法に隨順せざるものを除く

一切の諸菩薩、及び末世の衆生も

常に當に此輪を持ち、隨順して勤めて修習すべし

佛の大悲の力に依りて、久しからずして涅槃を證せん

是に於て淨諸業障菩薩、大衆の中に在り、即ち座より起ち、佛足を頂禮し、右に繞る

こと三匝し、長跪叉手して佛に白して言さく、「大悲世尊は、我等輩の爲に廣く是の如きの

不思議の事、一切如來の因地の行相を説き、諸の大衆をして未曾有を得しめたまへり、調御

の恆沙劫を歴るを親見するに勤苦せる境界の一切の功用猶し一念の如し。我等菩薩深く自

【一〇】無明の根本四相を破すべきを説示す。

【調御】佛十號の一。如來は衆生を調伏制御して迷を離れて大涅槃を得せしむるが故に此名あり。

【藏識】阿頼耶識
 梵音アーラヤ(Ara-ya)第八識のこと

【諸根】六根のこと

【衆生、壽命】衆
 生相、壽命相。
 【病】四相のこと

證あり悟あるを成就と名くるが故に。譬へば人あり、賊を認めて子と爲せば、其家の財寶終に成就せざるが如し。何を以ての故に。我愛あるものは亦涅槃を愛す、我愛の根を伏するを涅槃の相と爲す。我を憎むことあるものは、亦生死を憎む、愛は眞の生死なることを知らざるが故に。別に生死を憎むを不解脱と名く。云何が當に法の解脱すべからざることを知るべき。善男子、彼末世の衆生の菩提を習ふものの、己が微證を以て自の清淨と爲す。尙ほ未だ我相の根本を盡すこと能はず。若し復人ありて彼法を讚歎せば、即ち歡喜を生じ、便ち淨度せんと思ふれども、若し復彼所得を誹謗すれば、便ち瞋恨を生ず。則ち知る、我相堅固に執持し藏識に潛伏し、諸根に遊戲して曾て間斷せざるを。善男子、彼道を修するものは、我相を除かず、是故に清淨の覺に入ること能はず。善男子、若し我は空なりと知らば、我を毀る者無し。我ありて法を説くは、我未だ斷ぜざるが故に。衆生、壽命も亦復是の如し。善男子、末世の衆生は病を説いて法と爲す、是故に名けて憐愍すべきものとすなり。勤めて精進すと雖も諸病を増益す、是故に清淨の覺に入ること能はず。善男子、末世の衆生、四相を了せず、如來の解及び所行の處を以て自の修行となさば終に成就せず。或は衆生ありて未だ得ざるを得たりと謂ひ、未だ證せざるを證せりと謂ひ勝進の者を見ては心に嫉妬を生ず。彼衆生は未だ我愛を斷ぜざるに由る、是故に清淨の覺に入ること能はず。善男子、末世の衆生にして成道を希望し、悟を求めしむること無くして、唯多聞を益さば、我見を増長す。但當に精勤して煩惱を降伏し、大勇猛を起し、未

【悟利】 利は境のこと。

【二】 以下四病等の惑を斷すべきを説く。

だ得ざるは得しめ、未だ斷ぜざるは斷ぜしむべし。貪、瞋、愛、慢、詭曲、嫉妬、境に對して生ぜず、彼我恩愛一切寂滅す。佛は是人を漸次に成就し、善知識を求め、邪見に墮せずと説く。若し所求に於て別に憎愛を生ぜば、即ち清淨淨覺海に入ること能はず。爾時、世尊重ねて此義を宣べんと欲して偈を説いて言はく、

淨業、汝當に知るべし、一切諸の衆生は

皆我愛を執するによりて、無始より妄りに流轉して

未だ四種の相を除かざれば、菩提を成ずることを得ず

愛憎心に生じ、詭曲諸念に存す

此故に多く迷悶して、覺域に入ること能はず

若し能く悟利に歸せんとせば、先づ貪瞋癡を去り

法愛も心に存せず、漸次に成就すべし

我が身は本有ならず、憎愛何によりてか生ぜん

此人善友を求めば、終に邪見に墮せず

所求に別に心を生ぜば、究竟じて成就にあらず

是に於て普覺菩薩、大衆の中に在り、即ち座より起ち、佛足を頂禮し、右に繞ること三匝

し、長跪叉手して佛に白して言さく、「大悲世尊、快く禪病を説き、諸の大衆をして未曾有

を得て、心意蕩然として大安隱を獲しめたまへ。世尊、末世の衆生は、佛の去ること漸く

【阿耨多羅三藐三菩提】梵音アヌツタラサムヤクサンボードヨ(Anutarasanmyak-sambuddhi)無上正徧智と譯す。佛の覺智のこと。

【四威儀】行、住座、臥。

【博】博食のこと即ち四食の一。

遠くして、賢聖隱伏し、邪法増熾ならん。諸の衆生をして何等の人を求め、何等の法に依り、何等の行を行じ、何の病を除き去り、云何が發心せしめ、彼群盲をして邪見に墮ちざらしめん。一是語を作し已りて五體を地に投じ、是の如く三請し終つて復始む。爾時、世尊普覺菩薩に告げて言はく、一善い哉善い哉、善男子。汝等乃ち能く未來に、是の如きの修行を諮問し、能く末世の一切衆生に無畏の道眼を施し、彼衆生をして聖道を成ずることを得しめん。汝今諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。一時に普覺菩薩教を奉じて歡喜し、及び諸の大衆は默然として聽く。一善男子、末世の衆生將に人心を發さんとし善知識を求め、修行せんと欲せば、當に一切正知見の人を求むべし。心、相に住せず、聲、聞、覺、覺の境界に著せず、塵勞を現すと離れ、心恆に清淨に、諸過あることを示せども、梵行を讚歎し、衆生をして不律儀に入らしめず、是の如きの人を求むれば、即ち阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得ん。末世の衆生、是の如きの人を見て應に供養して身命を惜まざるべし。彼善知識、四威儀の中に常に清淨を現じ、乃至、種種の過患を示現するも、心に憍慢なし。況んや復博財妻子眷屬をや。若し善男子、彼善友に於て惡念を起さざれば、即ち能く究竟じて正覺を成就し、心華發明して十方刹を照さん。善男子、彼善知識所説の妙法は、應に四病を離る。何をか四病と云ふ。一には作病。若し復人ありて、是の如きの言を作さく、我本心に於て種種の行を作し、圓覺を求めんと欲す」と。彼圓覺の性は、作得に非ざるが故に、説いて名けて病と爲す。二には任病。若し復人ありて、是の如きの言を作さく、

「我等今生死を斷せず、涅槃を求めず、涅槃生死愚滅の念無し。彼一切に任せ、諸の法性に從ひて圓覺を求めんと欲す」と。彼圓覺の性は任有に非ざるが故に、説いて名けて病と爲す。三には止病。若し復人ありて、是の如きの言を作さく、「我今白心に永く諸念を息め一切の性を得、寂然平等に、圓覺を求めんと欲す」と。彼圓覺の性は止合にあらざるが故に、説いて名けて病と爲す。四には滅病。若し復人ありて、是の如きの言を作さく、「我今永く一切の煩惱を斷じ、身心畢竟空うして所有無し。何に況んや根塵虛妄の境界をや。一切永く寂して圓覺を求めんと欲す」と。彼圓覺の性は寂相に非ざるが故に、説いて名けて病と爲す。四病を離るるものは則ち知る、清淨なるを。是觀を作す者を名けて正觀と爲す、若し他觀の者は名けて邪觀と爲す。善男子、末世の衆生、修行せんと欲する者は、應に命を盡して善友を供養し、善知識に事ふべし。彼善知識來つて親近せんと欲するも、應に憍慢を斷すべし。若し復遠離すとも、應に瞋恨を斷すべし。順逆の境を現すること猶し虚空の如し。身心畢竟平等にして、諸の衆生と同體にして異なること無しと了知す。此の如く修行せば、方に圓覺に入るべし。善男子、末世の衆生、所道を得ざるは、無始より自他憎愛の一切の種子あるに由る、故に未だ解脫せず。若し復人ありて、彼怨家を觀ること已が父母の如く、心に二あること無くば、即ち諸病を除かん。諸法の中に於て自他憎愛も亦復是の如し。善男子、末世の衆生、圓覺を求めんと欲せば、應に發心して、是の如きの言を作すべし、「虚空を盡せる一切の衆生をして、我皆究竟圓覺に入り、圓覺の中に於

て覺を取る者無く、彼我人、一切の諸相を除かしめん」と。是の如く發心せば邪見に墮せず。

爾時、世尊重ねて此義を宣べんと欲して偈を説いて言はく、

普覺、汝當に知るべし、末世の諸の衆生にして

善知識を求めんと欲せば、應に正見にして

心、二乘に遠ざかり、法中に四病の

作止任滅を除ける者を求むべし、親近するも憍慢無く

遠離するも瞋恨無く、種種の境界を見て

心に當に希有を生ずること、還つて佛の出世の如くなるべし

非律儀を犯さず、戒根永く清淨にして

一切衆生を度し、究竟じて圓覺に入り

彼我人の相なく、當に正智慧に依るべし

便ち邪見を超えることを得て、般涅槃を證覺せん

〔二二〕 是に於て圓覺菩薩、大衆の中に在りて即ち座より起ちて佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、

長跪叉手して佛に白して言さく、「大悲世尊、我等輩の爲に、淨覺種種の方便を説き、

末世の衆生をして大增益あらしめたまへ。世尊、我等今已に閉悟を得たり。若し佛の滅後

の末世の衆生にして、未だ悟を得ざる者は、云何が安居し、此圓覺清淨の境界を修せん。

〔二二〕 以下三期の道場、加行を以て圓覺修證を説く。

【正思惟】 八正道の一。無漏の智を以て四諦を見る時正念に思惟して觀を益益増さしむるを云ふ。

【優婆塞、優婆夷】 梵音ウバーサカ(Upsaka)清信士と云ふ。ウバーシカー(Upsika)清信女と云ふ。

此圓覺の中の三種の淨觀は何を以て、首と爲さん。唯願くば大悲、諸の大衆、及び末世の衆生の爲に大饒益を施したまへ。是語を作し已りて、五體を地に投じ、是の如く三請し終りて復始む。爾時世尊、圓覺菩薩に告げて言はく、「善い哉善い哉、善男子。汝等乃ち能く如來に是の如き方便を問ひ、大饒益を以て諸の衆生に施す。汝今、諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。」時に圓覺菩薩、教を奉じて歡喜し、諸の大衆は默然として聽く。「善男子一切の衆生若し佛の住世、若し佛の滅後、若し法末の時に、諸の衆生ありて大乘の性を具し、佛の祕密大圓覺の心を信じて修行せんと欲するもの、若し伽藍にあつて徒衆を安處せば、緣事あるが故に分て隨つて思察すること、我已に説くが如くせよ。若し復他事の因縁あること無くば、即ち道場を建てて當に期限を立てべし。若し長期を立てば百二十日、中期は百日、下期は八十日、淨居に安置すべし。若し佛現在ならば當に正思惟すべし。若し復滅後ならば形像を施設せよ。心に存し日に想うて正憶念を生ぜば、還つて如來常住の日に同からん。諸の幡華を懸け、三七日を経て、十方の諸佛の名字を稽首し哀を求め懺悔すべし。善境界に遇はば心輕安なることを得。三七日を過ぎ一向に念を擲めよ。若し夏首を経て、三月安居せば當に清淨の菩薩の止住を爲すべし。心、聲聞を離れて、徒衆を假らず、安居の日に至つて、即ち佛前に於て是の如きの言を作すべし。我、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、某甲、菩薩乘に踞し、寂滅の行を修し、同じく清淨の實相に入つて住持し、大圓覺を以て我が伽藍と爲し、身心平等の性智に安居す。涅槃の自性は繫屬無きが

【所聞】 已述の三觀。

【數門】 數息觀のこと。五停心觀の一。持息念とも云ふ。出入の息を念り以て散り亂るる心を對治する觀法【生住滅】 生住異滅の四相のこと。不相應行法に屬し非色非心の存在滅變化せしむるものを云ふ。

故に、今我敬請して聲聞に依らず、當に十方如來、及び大菩薩と三月安居すべし、菩薩の無上妙覺を修する大因縁の爲の故に、徒衆に繋らず。善男子、是を菩薩の示現安居と名く。三期の日を過れば往に隨つて、無難ならん。善男子、若し彼末世修行の衆生、菩薩の道を求めて、三期に入る者は、彼所聞に非ざれば、一切の境界終に取るべからず。善男子、若し諸の衆生、奢摩他を修せば、先づ至靜を取り、思念を起さず、前緣まれば便に覺す、是の如き初靜は、一身より一世界に至る、覺も亦是の如し。善男子、若し覺一世界に遍滿する者は、一世界の中に一衆生あり、一念を起せば皆悉く能く知る、百千の世界も亦復是の如し。彼所聞に非ざれば、一切の境界終に取るべからず。善男子、若し誦の衆生、三摩鉢提を修せば、先づ當に十方の如來、十方の世界、一切の菩薩の種種の門に依りて漸次に修行し、三昧を勤苦したまへることを憶想し、廣く大願を發して自から種を成就すべし。彼所聞に非ざれば、一切の境界終に取るべからず。善男子、若し誦の衆生禪那を修せば、先づ數門を取り、心中に生住滅の念、分齊頭數を了知すべし。是の如く四威儀の中に周迴し、念數を分別し了知せざること無く、漸次に増進し、乃至百千世界の一滴の雨をも知ることを得るは、猶ほ目に受用する所の物を觀るが如し。彼所聞に非ざれば、一切の境界終に取るべからず、是を三觀初首の方便と名く。若し諸の衆生、遍く三種を修して勤行精進せば、即ち如來世に出現すと名く。若し後の末世の鈍根の衆生、心に道を求めんと欲するも、成就するを得ざるは、昔の業障に依る。當に勤めて懺悔し、常に希望を起

して、先づ憎愛嫉妬諂曲を斷じ、勝上の心を求むべし。三種の淨觀、隨つて一事を學すべし。此觀を得ざれば、復彼觀を習ひ、心放捨せずして漸次に證を求めよ。』

爾時、世尊重ねて此義を宣べんと欲して偈を説いて言はく、

圓覺、汝當に知るべし、一切諸の衆生

無上道を求めんと欲せば、先づ當に三期を結し

無始の業を懺悔し、三七日を經、然る後正思惟す

彼所聞の境に非ずば、畢竟取るべからず

奢摩他は至靜、三摩は正憶持

禪那は衆門を明らかにす、是を三の淨觀と名く

若し能く勤めて修習せば、是を佛出世すと名く

鈍根未成の者は、常に當に心に勤めて

無始の一切の、罪を懺すべし

諸障若し消滅せば、佛憶即ち現前す

是に於て賢善首菩薩、大衆の中にあり、即ち座より起ち、佛足を頂禮し、右に繞ること三

匝し、長跪叉手して佛に白して言さく、大悲世尊は、廣く我等及び末世の衆生の爲に是の

如き不思議の事を開悟したまふ。世尊、此大乘教の名守は何等、云何が奉持し、衆生は修

習して何の功德を得。云何が我は持經の人を護らしめ、此經を流布して何の地にか至らん。

【三】以下本經を受持する者の利益を説く。

【十二部經】十二分經とも云ふ。佛説法の體裁に十二様あるを云ふ。

【阿修羅】梵音アスラ (Asura) 非天非類と譯す。鬼畜

是語を作し已りて、五體を地に投じ、是の如く三請し終つて復始む。爾時世尊、賢善首菩薩に告げて言はく、「善い哉善い哉、善男子。汝等乃ち能く諸の菩薩、及び末世の衆生の爲に、如來に是の如き經教の功德名字を問ふ。汝今諦に聽け、當に汝が爲に説くべし。」時に賢善首菩薩、教を奉じて歡喜し、及び諸の大衆は默然として聽く。善男子、是經は百千萬億恆河沙諸佛の所説、三世の如來の守護する所、十方菩薩の歸依する所、十二部經の清淨の眼目なり。此經を大方廣圓覺陀羅尼と名け、亦修多羅了義と名け、亦祕蜜王三昧と名け、亦如來決定境界と名け、亦如來藏自性差別と名く。汝當に奉持すべし。善男子、此經は唯如來の境界を顯はす、唯、佛如來のみ能く盡く宣説したまふ。若し諸の菩薩、及び末世の衆生、此に依りて修行せば、漸次に増進して佛地に至らん。善男子、是經を名けて頓教大乘と爲す。頓機の衆生は此に従ひて開悟し、亦漸修の一切群品を攝す。譬へば大海小流を護らず、乃至蚊虻及び阿修羅も其水を飲めば皆充滿することを得るが如し。善男子、假令人ありて純ら七寶を以て三千大千世界に積滿し以て布施を用ふとも、人ありて此經の名、及び一句の義を聞くに如かず。善男子、假使人ありて、百恆河沙の衆生をして、阿羅漢果を得しむるも、人ありて此經を宣説して半偈を分別するに如かず。善男子、若し復人ありて此經の名を聞いて信心感はずんば、當に知るべし、是人は一佛二佛に於て諸の福慧を種うるのみに非ず、是の如く乃至盡恆河沙の一切佛の所にして、諸の善根を種ふ、此經教を聞けるを。汝善男子、當に末世の是修行者を護り、惡魔、及び諸の

【二十八天王】 欲
界の九天と色界の
十九天。
【護國天王】 四天
王なり。

【由旬】 梵音ヨ
シヤナ(Yojana)里
程を計る種目。

外道をして其身心を惱まして退屈を生ぜしむることなかれ。」

爾時、會中に火首金剛、摧碎金剛、尼藍婆金剛等八萬の金剛並に其眷屬あり、即ち座より起ちて佛足を頂禮し、佛に白して言さく、「世尊、若し後の末世、一切衆生能く此決定大乘を持つことあらば、我當に守護すること眼目を護るが如くすべし。乃至、道場、所修行の處に、我等金剛自から徒衆を領して晨夕に守護して退轉せざらしめん。其家乃至永く災障なく、疫病消滅し、財寶豐足して常に乏少せざらん。」爾時、大梵王、二十八天王、並に須彌山王、護國天王等、即ち座より起ち、佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、佛に白して言さく、「世尊、我亦是經を持せん者を守護し、常に安隱にして心に退轉せざらしむ。」
爾時、大力の鬼王あり、吉槃茶と名く、十萬の鬼王と即ち座より起ち佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、佛に白して言さく、「我亦是經を持せん者を守護し、常に安隱にして心に退轉せざらしめん。」
佛、此經を説き已りて、一切の菩薩、天、龍、鬼神、八部眷屬、及び諸天王梵王等、一切の大衆、佛の説きたまふ所を聞きて、皆大に歡喜して信受し奉行せり。

大方廣經卷之三
經

昭和三年十一月一日印刷
昭和三年十一月十日發行

新纂 國譯大藏經 經典部 第七卷

不許複製

編纂者

國譯大藏經編輯部
代表者 三井 晶史

發行者

東京市下谷區上野櫻木町五十番地
株式會社 東方書院
代表者 坂戸 彌一郎

印刷者

東京市神田區表神保町十番地
同 興舍
代表者 井波 康三郎

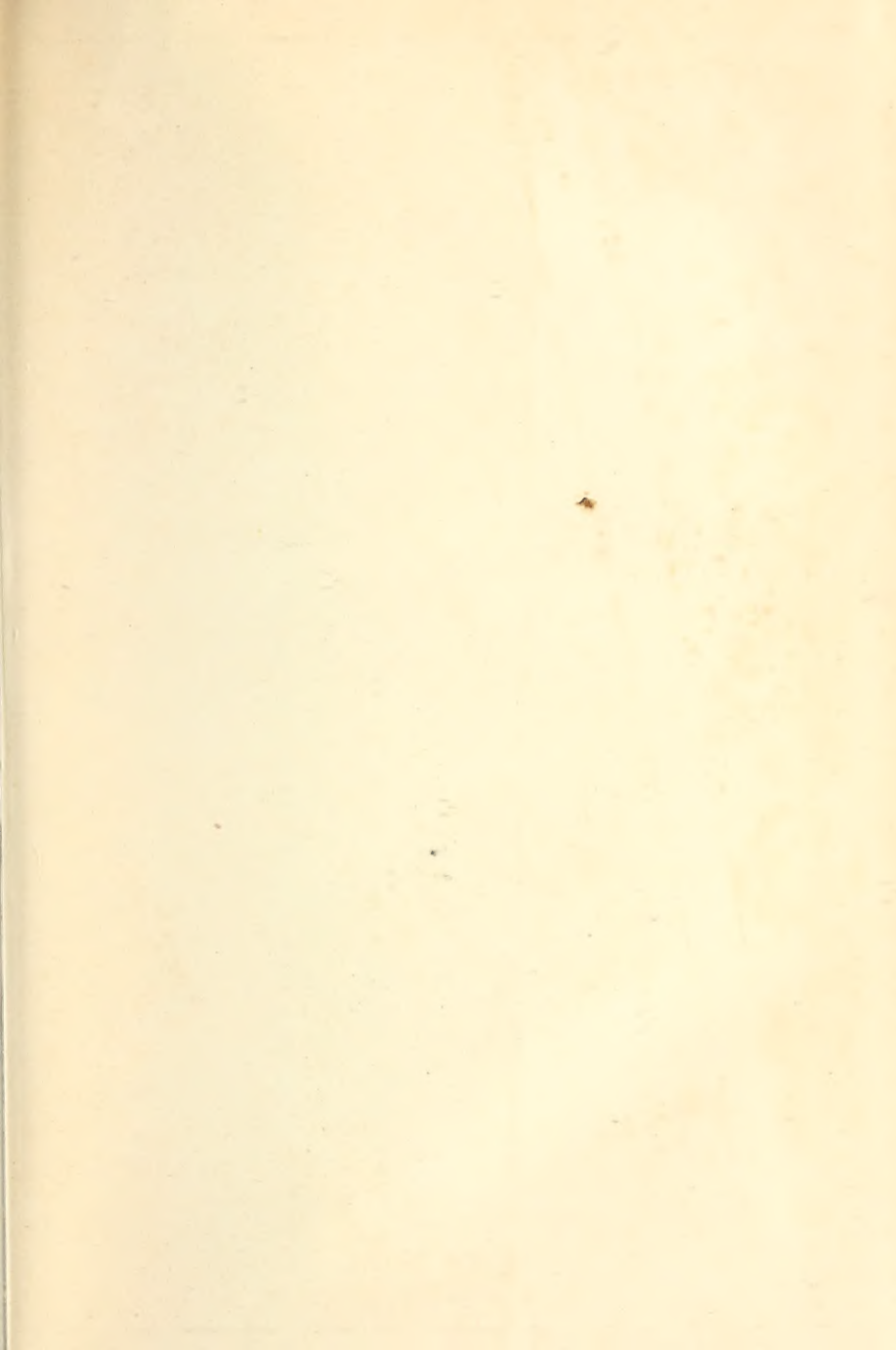
發行所

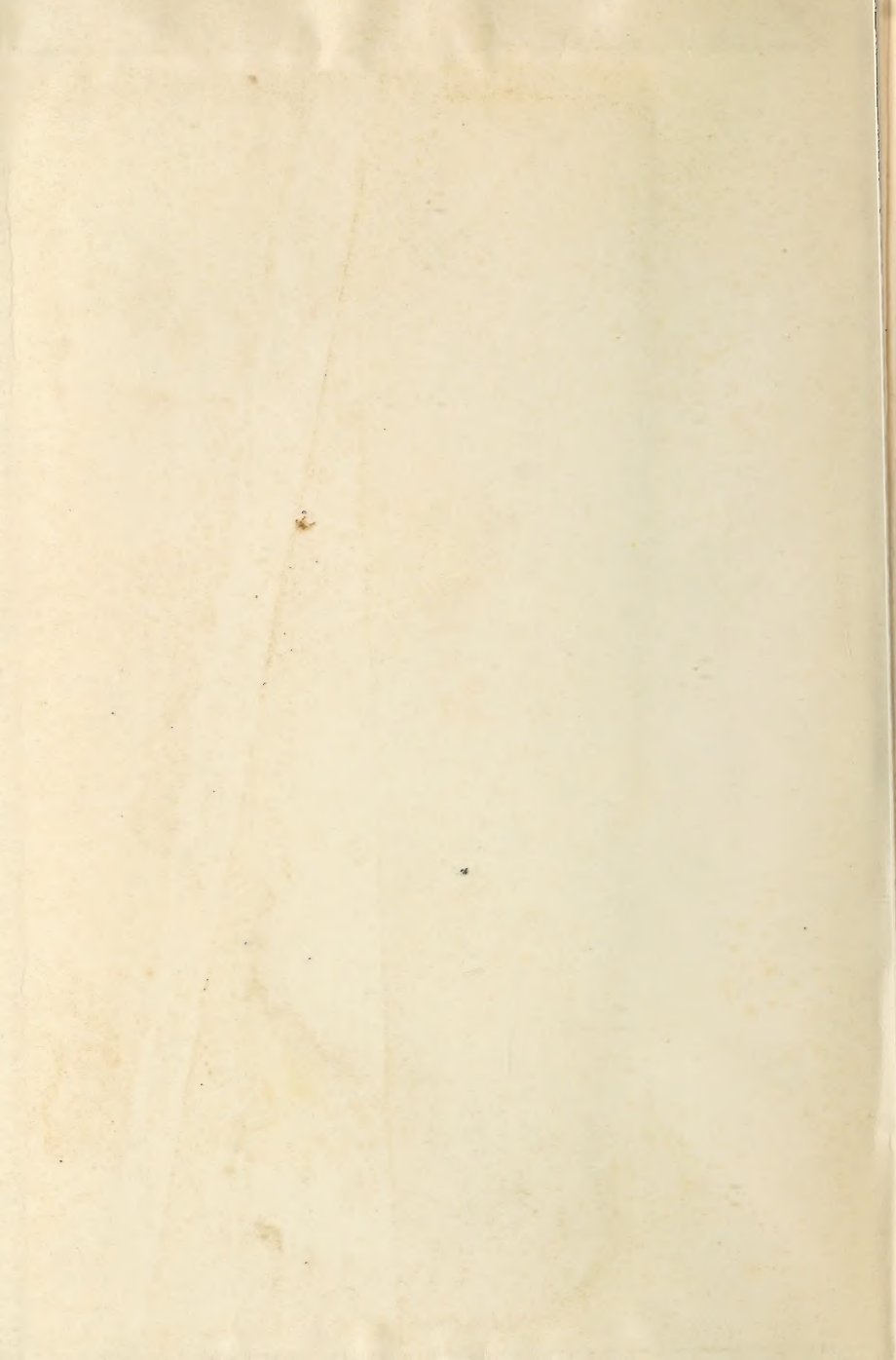
東京市下谷區
上野櫻木町五〇

株式會社

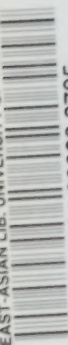
東方書院

電話下谷四二五九
振替東京六八六一一





EAST-ASIAN LIB. UNIV. OF TORONTO



3 1761 03023 3795